

ヴリトラモン・ストラ
トス

赤バンブル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある少年は姉に見捨てられ死んだ。しかし、彼はデジタルワールドでデジモンとして転生する。自分を見捨てた世界に対して怒りを感じながら彼は生きるがデジモンたちとの交流を得て彼は憎しみは徐々に薄れていく。

* 作者はヴリトラモンが好きの方。

* アグニモン、アルダモン？

* オリジナル要素に注意

* 最終章完結

目次

転生放浪編

龍への転生	1
名無し	7
大蛇の沼	17
マッドサイエンティスト（前篇）	29
マッドサイエンティスト（中篇）	37
マッドサイエンティスト（後篇）	46
迫りくる聖騎士	61
異分子	70

グリトラモン	80
暗黒進化と聖なる剣	91
新たな旅へ	102
登場人物（デジモン）紹介	109
ウイルスバスターズ編	
謎の集団、ウイルスバスターズ現る	120
勇気の炎と謎の影	131
雪の日の記憶	145
虫たちの戦争	155
戦闘開始	165
ヴリトラモン対サイバードラモン	174

雷撃一点集中	183
闇の中ののっぺらぼう	196
意外な誤解	206
暴走	220
奇跡を起こせ！ブイモン！	231
エンジエウーモンの涙	244
登場人物（デジモン）紹介2	257
I S 編	
人間界へ	268
姉弟再会	282
I S 学園入学	294
クラス代表と幼馴染み	304
炎龍降臨	319

姉は今どこに	331
宣戦布告と友達	342
三大進化！謎の襲撃者	353
二人の転校生	366
様々な心境	378
シャルルの正体	390
龍の怒り	401
漆黒の機械龍	416
究極進化、ビクトリーグレイモン！	429
ラウラとガブモン	442
ピヨモンと恐怖の弁当	455
準備と再会	466

海の思い出	478
紅椿起動	489
白い悪魔と覚醒	500
ハイパースピリットエヴォリューション	515
データスキャン	527
東、最後の挨拶	543
夏の計画とある記憶	558
燃えろ！ハックモン！	571
対決！千冬対メルヴァモン！	589
番外的な短編集	602
登場人物（デジモン）紹介3プラス制作 中に逸話	615

ロイヤルナイツ編	
さらば束	629
文化祭と忍び寄る影	639
それぞれの戦い	652
再会と元凶の正体	665
復活のデュークモン	677
ダメージ	688
決意の夜	701
宣戦布告	716
怪鳥オニスモン	729
覚醒のオメガ	746
デジラボ	759
リナ登場！バイモン対バイバイ	

傲慢の影	940
友へのメッセージ	919
ゲームの予告	908
騎士の裏切り	892
その名はズワルト	873
空中大決戦!	857
禁断のジヨグレス	846
逆転への布石	829
814	
デジタルウェイブを断ち切れ!	
一夏たちの大作戦	801
デユナスモンの記憶	788
774	

光りを掴め	1113
ピヨモン、暗黒進化!?	1097
夢? 現実? 二人の夢の世界	1078
天使よ、安らかに	1064
絆と愛の合体	1044
衝撃	1028
ゲーム開始	1016
受け継がれる伝説編	
994	
登場人物(デジモン)紹介4&没キャラ	994
決戦前日	976
959	
デジタル戦隊デジレンジャイ!	

スサノオモン対ルーチエモン	1291	絶対絶命！破壊神ルーチエモン！！	1266	真実と告白	1249	一夏を救出せよ	1234	カオスデュークモンの最期	1220	スサノオ	1204	One Summer Death	1180	絶望への序曲	1159	さよならリリモン	1141	外道騎士と予感	1126	夢の終わり	
1320																					

あながき	1434	未来へ（最終回）	1415	お帰り！サブライズ結婚式！！	1393	それぞれの旅立ち	1381	エピソード編		再生	1359	戦いの終わり	1339
------	------	----------	------	----------------	------	----------	------	--------	--	----	------	--------	------

転生放浪編

龍への転生

俺は今、自分の人生の最後を見ようとしていた。

思えば俺の人生はひどいことばかりだった。

まずは親に捨てられた。そして、周りから姉と見比べられ「出来損ない」、「恥さらし」と呼ばれていた。それでも俺は姉に負けないよう努力した。でも、結果は無駄だった。

更にISの登場で世の中は一気に変わり俺の立場はもっとひどくなり最終的には今この場で人質と言う始末だ。連中の狙いは姉織斑千冬の決勝を辞退させることだった。それ故に唯一の家族である俺をターゲットにした。彼らの誰もが姉の決勝辞退を間違いないと信じていた。

だが、姉は俺を見捨てた。

テレビで姉が決勝大会に出ている姿を見るなり彼らはかなり驚いていた。そして、腹いせに俺を殴り始めた。俺が血を吐こうが顔が腫れようが彼らは殴り続けた。俺は痛みを感じる中、絶望感に満ちた。

どうして、俺のことを見捨てたの？

唯一の家族よりも大事なものがあるの？

そして、そんな事を考えてる最中に奴らは俺に向けて銃を構えた。

「じゃあな、ガキ。恨むんならテメエよりも名誉を選んだ姉貴を恨むんだな。」

男は引き金を引く。

そこからは俺の意識は途絶える。

こうして俺、織斑一夏はこの女尊男卑の世の中を恨みながら死んだ。

デジモンたちの住むデジタルワールド。

そのデジタルワールドのデジモンたちでさえあまり来ない山奥で赤と銀の鎧騎士が空を眺めていた。彼の名はデュークモン。ロイヤルナイツの一員で普段はこのような人知れぬところに現れる究極体のデジモンである。

「……何かデジタルワールドに来た気配がした。感覚からにして人間の子供のようだが何かがおかしい……。」

デュークモンは不審に感じながらもデジタルワールドの空を見る。

「何も起こらなければいいが……。」

デジタルワールドのとある森の中。そこには人間よりも巨大なデジモンの卵デジタマが転がっていた。しかし、このデジタマ少しおかしなところがあった。デジタマとは普通はとて小さいものであり、どれもがはじまりの街で誕生する。なのにこのデジタマはこんなところで転がっている。

デジタマにひびが入る。誕生のようだ。デジタマの欠片が少しづつ取れていき新たなデジモンが生まれる。本来は幼い状態で生まれるはずがこの個体は体格からしても成熟期、完全体の部類に入るものだった。体は赤い鎧のような物を纏い、頭部は白い竜の頭部、背に翼を生やし、一見すれば竜の様なデジモンだった。デジモンは周りを見渡すなり動揺し始める。これは誕生直後によくある行動だがこの個体は何かが違っていた。

無理もない、彼は転生者なのだから。

「お、俺は確か死んだはずじゃ……」

俺、織斑一夏は戸惑いながら辺りを見回す。どう見てもさっきまで閉じ込められていた場所ではない。それにしても違和感を感じるのは自分の体だ。俺はまだ中学生でもないのに身長は高校生以上あるかもしれないくらい高い。それに体は赤い鎧に包まれているのにも関わらず重さを感じない。と言うよりもむしろ着たという感覚はない。しかし、いつまでも考えても仕方ないと考え俺は移動することにした。

「どう見ても、ジャングルには見えなけれどどこなんだ？」

しばらく歩いて行くと川が見えた。丁度、のどの乾いた俺はここの水を飲もうと考え

川に顔を寄せる。

そのとき俺は衝撃を受けた。

「!!……俺は人間じゃないのか!？」

そこに写っていたのは俺の顔ではなく竜のような顔だった。どうしてこうなった!?
俺は夢でも見ているのか？

「なんで……なんでこんなことになったんだああああ!!！」

俺は声が出る限り泣き続けた。

自分を見捨てた姉のことを。

自分を見下し続けた世界のことを。

自分が人間でなくなったことを。

だがこれは俺の旅の始まりに過ぎなかった。

名無し

俺がこの世界に生まれてから数カ月……。

旅をして少しながら分かったことがあった。

この世界はデジタルワールドと言う世界で俺たちはデジタルモンスター、すなわちデジモンだということ。

そして、そのデジモンはデータの集合体のような存在であること。

そして俺には名がない。織斑一夏でなくなった日から俺は「名無し」のままだ。

とある町のレストラン

「……あのお客さん？」

レストランのオーナーのデジタマモンは茶色の薄汚れたマントで全身を隠しているデジモンに言う。

「……なんだ？」

「アンタ、本当に金持ってるの？ 払えないなら……！」

マントに隠れて見えない顔の辺りから殺気のある眼差しがデジタマモンを睨む。思わず彼は体が震えた。デジモンはさっさと金貨を渡す。

「これじゃ足りないか？」

「い、いえ！ 十分です！ すぐにお持ちするので！」

デジタマモンは逃げるように離れて行く。

「この世界に来てからもう数か月か……。」

届いた料理を食べながら一夏は考える。この世界に来てからずいぶん経ったが分からないことがいくつもある。それは自分の名だ。デジモンのほとんどは同じ種類の個体が存在し、必ず名前がある。しかし、自分はどうか？ 自分の同族は今のところ見つからない。それ故にまだ名無しのままだ。

「この世界で俺は独りぼっちなんだろうな。」

寂しそうに溜息を吐く。

そのとき店に騒がしい声が聞こえた。

「おい、親父！邪魔するぜ！」

黄緑色の鬼の様なデジモンが複数の部下を連れて店に入ってくる。親玉のデジモンはオーガモン、戦うことだけが生きがいのデジモンである。部下たちはゴブリモンでどれもろくな面をしていない。

「また、アンタたちか。頼むからもう少し静かに入ってきてくれんのかね？」

デジタマモンは呆れた顔で言う。実はこのオーガモン、部下たちとよくこの店に来るのだ。

「うるせえな、俺たちがどう来ようが関係ねえだろ。それよりもちよつとひと暴れしてきて喉乾いてんだ。なんかうまい酒をくれよ。」

「やれやれ。」

そう言うのとデジタマモンは酒を取りに店の奥に行く。

「あ、見てくだせえ親分！いつも親分が座る席に誰か座っていまっせ！」

部下のゴブリモンの一体が一夏を指さす。

「何?!俺様の特等席に座るとは言い度胸してんじゃねえか！」

オーガモンは一夏に近寄る。

「ようようお前！俺様の席に座るとは随分失礼なことしてくれんじやねえか！」

「そうだそうだ！親分の席に座るなんて十年早えぜ！」

オーガモンに合わせてゴブリモンたちは一斉に言う。それに対して一夏はこう言いかえしてきた。

「別に俺は先に来て座っているだけだ。それに席なら他にもあるだろ？なぜ他の席に座ろうとしない？」

「何！」

「親分、コイツきつとよそ者ですよ。だから親分見てもビビらないんすよ。」

「そうかそうか。んじゃ、教えてやる。俺はオーガモン、この辺を縄張りのしている者よ！」

「そして俺たちはその子分だ！」

自慢げに言うオーガモンたちに対して一夏は黙っていた。そのせいかオーガモンたちは余計に苛立つ。

「おい！どうなんだよ！なんか言ったらどうなんだ！」

「てめえ、こんなきたねえもん着て顔隠さねえで面見せやがれ！」

ゴブリモンが一夏のマントを取ろうとする。すると一夏は反射的にゴブリモンの腕を押さえて捻る。

「触るな。」

「あだだだだだだだだ！」

ゴブリモンは慌てて離れる。

「てめえ！よくも俺の子分を！」

「親分、やつちまいやしよう！」

ゴブリモンたちは一斉に棍棒を持ち構える。一夏も立つと身構える。

「待て！店で暴れるのはやめんかい！」

酒を持って戻ってきたデジタマモンは慌てて止める。

「くそう、表で勝負だ。大人しくしていればいいものを。」

「……………」

一夏も黙って表に出る。

レストランの前

一夏は店の前に出るとオーガモンたちは散らばりながら包囲する。

「……一対一の勝負じゃないのか？」

「バカ！ テメエごとき俺の出る幕じやねえ！ 野郎共、やっちまいな！」

「ひやつは~~~~~！」

ゴブリモンたちは一斉に飛びかかる。一夏は舌打ちした後、的確に攻撃を避けてゴブリモンたちの急所を攻撃する。ゴブリモンたちは最初の内は抵抗するもののあつという間に動く者はいなくなつてしまった。

「後はお前だけだぞ。」

「この野郎、なめんじゃねえぞ！」

オーガモンは棍棒を振り回しながら一夏に迫る。彼も同様に避けていくがゴブリモンよりも上級なこともあり、避ける間に身に付けていたマントがボロボロになつていく。

「くっ。」

一夏も反撃を開始して格闘戦に入る。お互いが打ちあつた後、距離を取ろうと下がるがこれがオーガモンの狙いだった。

「霸王拳！」

「何!？」

後ろが行き止まりだったため一夏に攻撃が直撃する。

「ハハハハハハ！ざまあ見ろ！さあて、あのぼろきれを剥いでテメエの情けねえ面を拝ませて……！」

そのとき鋭い爪の生えた腕がオーガモンの頭を掴んだ。

「グルルルル……！」

その先にはマントをとり、目が殺気に満ちた竜人型デジモンが爪を尖らせていた。

「な、なんだお前!？」

「俺の姿を見たからにはお前も俺の餌だ。」

「え、餌?！」

オーガモンの頭を掴んだ腕の力が強まる。

「痛ででで!！」

オーガモンは苦しみながら抵抗するが一夏の体はビクともしない。力はさらに強まる。

「ま、待て!こうしようぜ!お前に好きなものをやる。だから命だけは勘弁してくれ!」

「……………」

「どうだ!？」

一夏はしばらく黙っていたが返ってきた言葉は残酷だった。

「欲しいものなどない。強いて言えばお前のデータぐらいだな。」

「な、俺の!?!」

「死ぬ。」

一夏の腕はオーガモンの体を貫いた。動かなくなったオーガモンの体は分解をし始め、分解されて生まれた粒子は一夏の体へと取り込まれる。同時に倒れていたゴブリモンたちも同じ現象が起こり、一夏の体へと取り込まれていく。

「この世で必要なのは強さ。デジモンを倒してそのデータを取り込めばその分強くなる。そして、すべてとは言わないがその技も受け継がれる。」

一夏は目の前にあつた木に向かって拳を突き出す。すると衝撃波で木は一瞬で折れた。

「霸王拳か、悪くないな。」

「あ、あわわわ……」

偶然近くで見ていたデジタマモンは思わず腰を抜かす。一夏はデジタマモンの方を振り向く。

「い、命だけは!」

「心配するな、何もしていないアンタにはなにもしない。」

一夏はそう言うとうとマントを身に付け直してその場を後にした。

「あ、アンタ名は!？」

「.....」

一夏は後ろを振り向きこう言った。

「名前などない。」

そう言うのとすぐに後ろを振り向き立ち去っていった。

俺には名前がない。

でも、そんなことはどうでもいい。

俺に必要なのは強さだ。

誰にも負けない強さ。

もう誰にも負けたくない。

もう「出来損ない」と言われたくない。

でも、俺は何のために強くなるんだ？

何のために.....。

俺はそんなことを考えながら今日も見知らぬデジタルワールドを旅する。

大蛇の沼

「はあ、はあ・・・」

俺は基本的に挑んでくる者は容赦なく消す。

「もう、終わりか?」

「バーニングファイスト!」

俺の相手メラモンは得意の火炎で俺を包む。

「はあ、はあ。これでもう動けないだろ!」

俺との戦闘でメラモンはすでに体力を使い切っていた。まあ、これで終わらせてやるか。成熟期との戦いももう飽きた。

「アイシーシャワー。」

俺は以前倒したアイスデビモンの技を使い、炎を一瞬で凍らせた。生憎水で戦った奴は今のところいないからこれが妥当な方法だった。自慢の炎を消されてメラモンはその場を動けなくなった。

「じゃあな、フロストクロー!」

俺は奴に向かって腕を突き刺した。奴の体はたちまち凍り始め、砕けた。砕けた欠片

はいつものように俺の体に取りこまれていく。

「……………」

俺はマントを付け直してその場に座った。

これまでどれだけのデジモンを倒してきたのだろうか？

最初の内は数えてきたが三十を超えた時点で数えるのをやめた。最初の相手はクワガーモンだった。この世界に生まれてまだ能力のほとんどを使いこなせなかった俺にとつてはあれほど過酷な戦いはなかった。あの時はギリギリ「フレイムストーム」を出せたから何とか倒せた。それからしばらくは自分の能力が使いこなせるまで地獄のような日々だった。

どれもがギリギリの戦い。

しかし、いつの間にかそれは強くなるという欲望に変化していた。今ではだいぶ能力の使い方も覚えたから相手が悪くなければ負けることはない。

負けることは許されない。

それがこの世界では死につながるのだから。

とあるゲコモンの村

「ゲコ……ゲコ……」

暗い顔をしたゲコモンとオタマモンたちが酒樽を荷車に乗せていた。

「タマ……これで何とか間に合いそうだタマ……」

そう言いながらもゲコモンたちは荷車を動かし始める。その村に丁度一夏が通りかかった。

「なんだこの村は？やけに活気がないんだな。」

辺りを見回しても暗い顔をしているゲコモンとオタマモンばかり。誰もが疲れ切った顔をしている。気になった一夏は近くにいたオタマモンに声をかけた。

「おい、一体どうなっているんだ？この村は？」

「タマ……旅の人かタマ。悪いことは言わないタマ、早くこの村から出て行くタマ。オタマモンの言っていることが一夏には理解できなかつた。」

「どういふことだ？」

「それは私から説明するゲコ。」

後ろを振り向くと松葉杖をついたゲコモンがいた。どうやらこの村の村長らしい。

「詳しく聞かせてくれ。」

「ゲコ……この村は一昔前までは本当に明るい村で私達ゲコモンはみんな愉快に歌を歌って暮らしていたもんだゲコ。ところがほんの数年前に近くの沼にオロチモンが住み着いてから村の毎日が地獄になったんだゲコ。近くに住んでいたデジモンはみんな殺され、オロチモンは私達の村にも襲ってきたんだゲコ。奴は村の安全を保障する代わりに毎日酒を自分の住む沼に持つてくるようにと条件を出したんだゲコ。それで今は誰もがオロチモンのことを恐れて毎日酒を納めに行くんだゲコ……」

話の途中でゲコモンは泣き出した。余程つらかったんだろうなと一夏は思った。

しかし、同情以上に別の感情が浮き始めた。戦いたいという狂った感情が。

「……そのオロチモンという奴は強いのか？」

「え？それはもう私達が全員でいっても敵わないくらい強いゲコ。」

「そうか。」

一夏は沼の方を目指して歩き始める。

「どこ行くんだゲコ!?!」

「オロチモンと戦つてくる。」

『ええ!』

その言葉に村中のゲコモンとオタママモンが驚いた。

「無理なこと言うなゲコ!」

「命を粗末にするのは良くないタマ!」

「考え直せゲコ!」

村中一同が説得をし始める。しかし、一夏は引き下がる気はなかった。

「心配することはない、死ぬ前にアンタらは関係ないことは言っておいてやるから。それに俺が死んでも誰も悲しんだりはしないからな。」

一夏はそう言い残すとオロチモンがいると言っていた沼に向かって行った。ゲコモンは心配そうに一夏の背中を見つめていた。

何故見つめる?俺よりも自分たちのことを心配するべきなのに……。

オロチモンの沼

この沼は一年中霧が濃く、晴れる日がほとんどない。そんな霧に包まれている沼にオロチモンは住んでいた。そして、今日もオロチモンはゲコモンたちから酒を受け取っていた。完全体であるオロチモンにはゲコモンたちも敵うはずもなくただ従うしかなかった。

「ふむ……確かに揃っているな。よし、帰っていいぞ。」

「ゲ……ゲゴ……。」

ゲコモンたちは恐る恐るオロチモンから離れて行った。オロチモンは届いたばかりの酒を早速飲み始める。

「ぐふふふ……奴らから取った酒は実にうまい。しかし、ここにいるのももう飽きたし、そろそろ場所変えでも考えておくか。ここで俺の力はさらに強くなったしな。」

オロチモンは笑いながら酒を飲み続ける。そこへ足音が聞こえてきた。

「ん?」

オロチモンは酒を飲むのをやめ、足音のした方を見る。霧の向こうからマントで全身を隠した一夏の姿が見えてくる。

「貴様、ここをどこだと思っている!」

楽しんでいたところを邪魔されたオロチモンは不機嫌になっていたが一夏にとって

はどうでもよかった。

「お前がオロチモンか？」

「ほう、俺のことを知っていながらここに来たと言うのか？だとしたらわざわざ犬死に来たのか？」

「犬死かどうかは知らないがな。」

一夏の一言にオロチモンは更に腹が立つ。

「貴様本当に死にたいようだな！」

オロチモンは尾の先にある「アメノムラクモ」で一夏の首を斬りつける。一夏は避けた後マントを脱ぎ棄て、一つの首に向かってバーニングフィストを放ち破壊する。更にそこからフレイムストームとメテオウイングを同時に放って二本の首を破壊した。

「フフフフ……」

「……偽物なのか。」

一夏は何となく言った。それに応えるかのようにオロチモンの首は一瞬で再生した。「だったら本体は！」

一夏はオロチモンの黒い首を思いつき殴りつける。しかし、オロチモンはビクともしない。

「馬鹿め、そんな攻撃では俺はビクともせんわ！」

オロチモンはアメノムラクモで一夏を突き飛ばす。

「ぐっ！」

「酒プレス！」

オロチモンが口から放ったプレスにより一夏は思わず跪く。

(頭が眩む………)

「はくはつはつはつはつは！どうだ！所詮貴様などこの俺の敵ではないのだ！」

オロチモンは笑いながらアメノムラクモで一夏を叩き付ける。一夏は何とか立ち上がろうとするが酔いで思うように体が動かない。

「ははははは！所詮貴様ら下級デジモンは出来損ないに過ぎんだ！あのカエル共のようになしておればいいのもを………」

「出来損ないだ?!」

その一言で一夏の態度は一変した。

「出来損ない」

それは一夏の嫌いな言葉だった。人間の時から周りに言われ続けた最も嫌な言葉。それを言われることは彼の闘争本能に火をつけるようなものだった。

一夏は酔っていたことが嘘のように立ち上がる。そしてアメノムラクモに顔を撃た

せたのかと思いきや歯で受け止めていた。

「き、貴様！ さっさと離．．．！ ぐわああ！」

一夏はオロチモンの尾を咬み砕いた。今までやられたことがなかったオロチモンは初めての痛みに思わずのたうち回った。しかし、隙を与えないのか一夏はオロチモンの本体の首を両腕で絞めつける。その目は明らかに殺気に満ちていた。

「ぐ、ぐうう．．．」

オロチモンは思わず恐怖した。

コイツは自分が想像していた以上の化け物だった。

そして、自分はコイツの触れてはいけないことを言ってしまった。

「とどめだ。」

一夏は右腕をオロチモンの頭に放つ。

「絶対冷凍パンチ。」

オロチモンはたちまち凍りつき、粉々に砕け散った。そしてその破片を残らず吸収した後、一夏はその場で倒れてしまった。

「……………うう……………」

「大丈夫かゲコ!？」

一夏が気がついたときは周りにはゲコモンたちが来ていた。どうやらあの後心配で来たらしい。

「俺は一体……………」

「私達はうっかりオロチモンにやられたと思っていたゲコ。でもよかったゲコ。貴方のおかげでオロチモンはいなくなっていたし。」

「オロチモン……………そうか。」

一夏はあの後オロチモンを吸収した後倒れたことを思い出した。

「これでまた昔のように毎日歌を歌いながら楽しく暮らせるゲコ!本当にありがとうゲコ!」

「旅人さん、ありがとうタマ!」

「……………」

一夏は何も言わずそのままマントを拾うとどこかへと去って行った。その姿をゲコモンの村長が何かを思い出すかのように見ていた。

「村長、何を見ているんだゲコ?」

「いや、あの竜の姿をどこかで見たような気がして……………」

そんなことを言いながらもゲコモンたちは感謝をするかのように彼の後ろ姿を見続けるのであった。

俺は人に感謝されたことがない。

人間であつた時から。

だからどこでも同じだと思つた。

でも、何だつたんだ?あのゲコモンたちは?

俺が勝手にしたことなのになぜ感謝する?なぜ礼を言う?

俺はただ強い奴を求めてきただけなのに。感謝する価値もないはずなのに。
なぜ・・・・・・・・

このときの俺にはそれがどうしてもわからなかった。

マツドサイエンティスト（前篇）

俺は天才と呼ばれる奴は嫌いだ。

俺の人生は全てその「天才」のせいで狂った。

あまりにも優秀過ぎた姉、織斑千冬。世界を狂わせたISの開発者、篠ノ之束。

この二人がいなければ俺は人間としてまだ生きていたのかもしれない。

そう考えるだけで俺は自分を「天才」と呼ぶ奴らを許せない。

とある機械が多い街

この街はマシーン型、サイボーグ型のデジモンが多く住んでいる。そんな街に一夏はマントで身を隠しながら訪れた。但し一人ではなく二人で。

「兄貴！今度はこの街なの？」

一夏の後ろにいる青白の小さいデジモン、チビモンは一夏に話しかける。一夏はため息をつきながら言いかえす。

「俺の行き先は俺が勝手に決める。って言うかい加減に俺から離れろ。」

「そんなこと言わないでよ兄貴！オイラ決めたんだ！兄貴に一生ついて行くって！」

このチビモン、一夏が旅の途中でゴブリモンの集団に襲われていた所を助けたものでそのときの一夏の戦いぶりを見て感動したのか一夏のことを「兄貴」と呼んでついでくるようになった。一夏はこれまで強くなるためだけに戦ってきたのにどうしてこうなったのかと頭を抱えるようになった。

「取り敢えず腹ごしらえでもするか。」

一夏は取り敢えず食事がとれる場所を探し始める。

???

一夏の訪れている街からかなり離れた山奥。そこにかなり規模が大きい研究施設のような場所があった。その建物の中の一部屋であるデジモンが一夏たちの姿を見ていた。

「あれが噂のマントを纏った謎のデジモンか。」

コンピュータの操作する小型のデジモン、ナノモンは映像を見ながら言う。

「これまでオロチモンを含めて何体もの完全体デジモンを倒し、この街まで来た謎の个体。私の試作品の相手には丁度いい。」

ナノモンはパネルを操作するとパネルにデジモンが表示される。

「メタルテイラノモン五体か。奴の実力を試すには丁度いい。」

ナノモンはそう言うのと赤いボタンを押す。すると施設のゲートが開き、そこからメタルテイラノモンが出撃して行つた。

「是非ともいいデータを取らせてくれたまえ。私が研究している合成デジモンのためにも。ヌフフフフ……。」

ナノモンは暗い闇の中不気味に目を光らせていた。

街の食堂

「兄貴、この飯美味しいね！」

チビモンは一夏を見ながら笑顔で言う。一夏はそんなチビモンを無視して食事を勧めめる。

「ねえ、兄貴。兄貴ってなんで一人で旅してたの？」

チビモンは突然聞いてくる。

「・・・何が言いたい？」

「だって、兄貴って強いしカッコいいのにもいつもマントで顔隠しているし、名前を名乗らないし、どうして一人になりたがるの？」

チビモンは不思議そうに聞く。一夏はしばらく沈黙していたがその後ゆっくりと口を開く。

「お前は人間と言う生き物を知っているか？」

「人間？なにそれ？」

当然、生まれてあまり外の世界を知らないチビモンが知っているわけがない。

「人間とは愚かな生き物でな。俺もそのうちの一人だった。だから俺は生まれたときから名前はない。それに心も空っぽだ。だから旅をしてその空白を埋めようとしているのかもな。」

一夏は寂しげな表情で言う。人間の時のことを話そうとしたのは何故か自分にも分からなかった。チビモンは珍しく自分のことを教えようとした一夏の顔を好奇心旺盛な顔で見ている。

そのときだった。

「大変だ！また、ナノモンの奴がデジモン狩りに来たぞ！」

ガードロモンが慌ただしく店に入ってくる。すると店にいたデジモンは慌ただしく出て行く。

「逃げろ！実験体にされるぞ！」

一夏が店を出るころにはもう既に複数のメタルティラノモンが迫っていた。

「どうしよ?!兄貴?!」

チビモンは戸惑いながら一夏を見る。一夏は考えながら手段を考えていた。

戦うのはいい。ただ相手は完全体複数だ。いくらこれまで完全体を倒してきたとは言え一度に複数を手にするのはあまりにもリスクが高い。ここは悟られぬようにこの場から離れたほうがいい。そう判断し、一夏はチビモンと一緒にその場を離れようとした。

しかし

「きゃああああ!!!」

女性のような悲鳴が聞こえた。後ろを振り向くと一体のリリモンがメタルティラノ

モンに捕まっていた。近くでは仲間なのか同じ女性型デジモンのライラモンが助けようと攻撃していた。

「リリモンを離して！」

ライラモンはそう言いながら攻撃を続けるがメタルティラノモンには歯が立たなかった。

「誰か助けて！」

捕まっているリリモンは泣きながら助けを求めている。しかし、誰も助けに行こうとしなかった。

「兄貴どうしよう？あの人助けを求めているけどどうしたら……あれ？兄貴？」

チビモンが再び振り向いたとき一夏はもう既にその場にいなかった。

「ひどいよ兄貴！俺まで置いて逃げるなんて！」

チビモンは慌てて一夏を探そうとしたとき後ろからメタルティラノモンの悲鳴が聞こえた。慌てて後ろを向くと一夏がメタルティラノモンの腕をもぎ取りリリモンを救出していた。

「しっかりと掴まっている。」

一夏はそう言うとりりモンを抱えたまま複数のメタルティラノモンを相手にする。メタルティラノモンは一斉に「ギガデストロイヤーII」を発射するが一夏は奇妙なタイ

ミングで避けていく。そして、一体の口の前まで来ると「コロナブラスター」を発射し大爆発させる。頭部を吹き飛ばされたメタルティラノモンはその場に倒れる。

「残り四体。」

一夏は一定距離まで離れる。残りのメタルティラノモンたちは一夏にめがけて突進してくる。

「酒ブレス！」

一夏は口からアルコール濃度が高いブレスを吐く。いきなり吐かれたメタルティラノモンたちはたちまち酔い始め同士打ちをし始める。

「後はこれでいいな。」

一夏はリリモンを降ろすと上空に飛び構えをとる。

「狐葉禊！」

一夏の周辺に光の刃が無数に現れ、メタルティラノモンたちの体を貫く。動かなくなった巨体は分解され、一夏の体へと吸収されていく。そして、一夏はその場で跪いた。

「はあ、はあ．．．流石に一齐に五体相手はきつかったか。」

「兄貴〜！」

チビモンは慌ててその場に駆け寄る。

「チビ助め、まだいたのか。」

一夏は呆れた顔で言う。でも、チビモンの顔は相変わらず好奇心に満ちた顔だった。

「スゲエよ、兄貴！あんな強い相手みんなやつつけるなんて！」

「う、運が良かっただけさ。運が……」

そう言い終わると一夏はその場に倒れてしまった。

「兄貴！」

いきなり倒れた一夏に対してチビモンは慌ただしく叫ぶのであった。

マツドサイエンティスト（中篇）

いつの頃の夢だろうか？

人間の時の幼い俺が千冬姉に何か言われている。何かテストの答案を見せているよ
うだった。

「90点か。まだ詰めが甘いぞ、一夏。この程度の問題で間違えてどうする？」
「でも、千冬姉。これでも精一杯やった方なんだよ。」

そう言っても無駄だというのはよく分かっている。千冬姉はいつも言っていた。

お前は私の弟なんだからやればできるはずだと。

いつもその言葉で俺の事を見ようともしなかった。

俺はあんたの弟であってコピーではない。アンタは愚か周りもどうしてもそれをわ
かってくれなかった。だから俺はいつもこう思っていた。

「千冬姉はどうして俺の事を見てくれないの？」

「俺は何をやってもダメなの？」

「どうして『出来損ない』とか言われれないといけないの？」

「……千冬姉は俺のことなんてどうでもいいのか……」

「う、うう……」

一夏はベッドに寝かされていた。どうやらさつき^{さつき}の戦いの後気を失ってしまったらしい。

「よかった、兄貴が目を覚ました！」

脇を見るとチビモンが嬉しそうに飛び跳ねていた。そしてその跳ねている所は……

「あ、あの……」
さつき助けたリリモンの膝の上だった。リリモンは顔を赤くしながら一夏の顔を見る。

「アンタか。災難だったな。」

「このお姉ちゃんが兄貴を自分の家に運んでくれたんだよ。」

「そ、その……なんといえればいいか……ええつと……」

一夏に声をかけられるとリリモンは更に顔を赤くし話しづらくなっていた。仕方なく後ろにいるライラモンが代わりに話した。

「先ほどは助けて頂いてありがとうございます。本当になんてお礼を言ったらいいか……」

「礼を言われたようなことをした覚えはない。俺の気まぐれでやったまでだ。」

「私はライラモンと言います。こっちは幼馴染のリリモンです。」

「り……リリモンです。」

リリモンはやつとのことので挨拶する。

「俺チビモン！兄貴の弟子なの！」

「……あなたの名前は？」

リリモンは一夏の顔を見ながら聞く。

「名乗る名前など特にない。呼びたければ『名無し』でいい。」

一夏は不愛想に言う。

「な、名無しって……？」

リリモンは不思議そうな顔で言う。

「実は兄貴はね……」

チビモンが言いかけようとするが一夏は口を塞ぐ。

「まあ、それはそうとあの慌てっぷりからこの街には何か裏がありそうだな。」

「その通りだ。」

一体のサイボーグ型デジモンが入ってきた。

「アンドロモンさん。」

ライラモンが言う。

「アンタは？」

「アンドロモン、この街でナノモンと戦っている者だ。」

「ナノモン？あのガードロモンが言っていた奴のことか？」

一夏はアンドロモンの話を聞く。

アンドロモンの話は以下の通りだった。

ナノモンはかつてアンドロモンと幼年期頃からの付き合いで共にこの街を守っていた。しかし、ナノモンには一つの大きなコンプレックスがあった。

同じ完全体でありながら彼と比べて戦闘能力が著しく低いというものだった。街の住民から慕われているアンドロモンに対してナノモンはいつも陰に隠れてしまい、それはやがて強さへの執着となった。

結果、それまでは善良だった彼の人格は歪み、強さだけを求めるマッドサイエンティストになり果てた。最初は説得を試みたアンドロモンだったがやがて彼が作り上げた改造デジモンに太刀打ちできなくなつていった。街のデジモンは捕まれば彼の研究所に連れて行かれ、実験材料にされる。住民はそれ故にナノモンのことを恐れていた。

「……」

一夏は黙つて聞いていた。

「私は気づいてやれなかった、彼の心の闇を。それ故に彼はこのような暴虐に走るようになり、この街をも恐怖に包み込んでしまった。」

「私も昔のナノモンさんのことは覚えています。あんなに街のためにいろいろ研究していたのに……」

ライラモンは悲しい表情で言う。一夏はその表情をただ見つめていた。

「……そいつの研究所はどこにある？」

「この街の近くの山にあるが。」

「そうか。」

そう言うのと一夏は部屋から出て行くこうとする。

「兄貴、どこ行くの!？」

「ナノモンの研究所。」

「まさかナノモンを倒しに行くというのか!？」

「アンタだって奴のことを許せないだろ?」

「それもそうだが……」

「どの道俺も奴に目が付けられているんだ。直接殴りこむのも悪くない。」

一夏はそんなことを言いながらも考え事をしていた。このアンドロモンとナノモンの関係が自分と姉に似ていた。気づかないうちに悩む、そして歪む。ひよつとしていたら自分もナノモンと同じようになっていたのかもしれない。千冬のことを今更ながら考えていた。

（千冬姉も俺がいなくなった後にもしかしたらコイツと同じように悔んだのかもしれない。）

そう考えるからこそナノモンのこれ以上の行いを許すわけにはいかない。一夏に今まで消えかけていた何かが戻ったような気がする。

「待ってくれ。」

アンドロモンが呼び止める。

「なんだ？止めようというのか？」

「私も行こう。少なくとも力にはなれるはずだ。」

「・・・そうか。」

「兄貴！俺も連れて行ってよ！」

「お前じゃ足手まといだ。」

「そんなことはねえよ！俺だって頑張るから！頼むよ！」

「ふん、勝手にしろ。後で後悔しても知らんぞ。」

「ありがとう、兄貴！」

三人はリリモンの家から出て、ナノモンの研究所がある山へと向かい始めた。それをリリモンとライラモンが見守っていた。

「・・・あのさ、リリモン。」

「何？」

「もしかしてあの人に一目惚れしたの？」

「え、ええ!!？」

リリモンの顔が再び赤くなる。

「だって、さっきのあの人への態度からにしていつものリリモンらしくないもん。いつもだったらハキハキ話すのに。」

「そうかな？」

「そうよ。」

リリモンは自分の胸を両手で押さえる。胸はまだドキドキしていた。

ナノモンの研究所

暗い研究室の中、ナノモンはパネルを操作していた。

「後は私が改良したデビモンの腕と疑似的に作り上げたエンジエモンの翼を移植すれば、闇と光の力が調和し完成する。」

そのとき、非常警報が鳴る。パネルを操作し、見て見ると研究所に近づいてくる一夏たちの姿が確認できた。

「勘のいい連中だ。私が作り上げたキメラモンの完成と同時に来てくれるとは。」

ナノモンは笑いながらパネルを操作する。

「まさか旧友アンドロモンもまでも……いいだろう。私のキメラモンがどれだけ強力なのかを見せてあげよう。」

ナノモンは狂気に満ちた目で見ると、研究施設の奥ではキメラモンが今にも目を覚まそうとしていた。

マッドサイエンティスト（後篇）

ナノモンの研究所

「まさかここまで守りが硬いとはな。」

一夏は分解され自分に取り込まれていく青いメタルグレイモンを見ながら言う。一夏たち三人が研究所に向かう途中、タンクモン、メガドラモン、サイクロモンなどのデジモンが襲ってきたがどれもがナノモンに強化改造された上に理性を失っていた。

「私も以前何体かと戦ったことがあるがまさかここまで強化しているとは……」
アンドロモンは恐ろしそうに言う。一夏は周りを見ると気づく。

チビモンがいつの間にかいなくなっている。

「あのバカ。結局足手まといになっているじゃないか。」

「しかし、ナノモンの研究室ももうすぐだ。中のデジモンはほとんどいなくなったようだから後は捕虜になっているデジモンだけだから早く済ませよう。」

そう言う二人は奥へと進んでいく。

ナノモンの研究室 牢屋

「兄貴く兄貴く！」

一夏とは別の通路でチビモンは迷っていた。

「うえくん、迷っちゃったよ……。」

チビモンは泣きながら一夏を探し求める。そのとき、牢屋から物音がした。

「うわあ！」

チビモンは思わず逃げようとする。

「まっ、待ってくれ！」

牢屋から声がある。チビモンは恐る恐る近づいて牢屋を見るとそこにはヌメモンが捉えられていた。

「うわあ〜!!ヌメモンだ!」

チビモンはすぐに身構える。無理もない、ヌメモンはウンチを投げつける下品なデジモンなのだから。

「待ってくれよ!俺たち閉じ込められているんだ!助けてくれ!」

「え?」

チビモンは牢屋の中をよく見る。牢屋にはヌメモンだけではなくモノクロモン、パグモン、アグモン、ベジーモンなど多くのデジモンが捕らえられていた。

「その辺に鍵が掛けているだろ?頼むからここから出してくれ。」

チビモンはすぐに鍵を見つけると牢屋から捕まったデジモンを開放するのであった。

ナノモンの研究室

一夏とアンドロモンは暗い部屋に入ってしまった。

「暗いな。」

「出て来い、ナノモン!これ以上悪行を重ねるな!」

アンドロモンが叫ぶと部屋の最深部が光りナノモンが姿を現す。

「まさかここまで来るとは意外だったよ君たち。」

「ナノモン、頼むからもうこんなことはやめてくれ！昔のお前はこんなことする奴じゃなかったはずだ。」

「変わったのだよ、アンドロモン。所詮この世は弱肉強食、強い者だけが生き残るのだよ。かつては君が強者で私が弱者だった。」

ナノモンはアンドロモンの頼みに答える気はなかった。

「しかし、今は違う。私は自分の持つあらゆる知識を活かし遂には合成デジモンの誕生に成功した。」

「合成だ?!」

「紹介しよう、私の最新作合成デジモン第一号キメラモンだ。」

ナノモンが言うと同時に後ろのキメラモンが映し出される。

「こ、これは……」

アンドロモンはキメラモンの姿に驚く。

デビモンの腕、グレイモンの胴体、ガルモンの脚部、モノクロモンの尾、エンジエモンとエアドラモンの翼、スカルグレイモンの腕、カプテリモンの頭部。

それは見る限りデジモン版のフランケンシュタインと言ってもおかしくないもの

だった。

「どうだね？素晴らしいだろ？研究の途中ですべてを完全体のパーツにすることはできなかつたが私の研究の成果のおかげで少なくとも究極体に近い強さになった。これで私は強者だ！」

ナノモンは狂気に満ちた笑いをする。

「……………」

一夏はキメラモンを見つめる。

あまりにも醜い。かつて自分の姉の知人である篠ノ之束もISという狂ったような物を作り世界を作り変えてしまったが目の前にいるナノモンはそれ以上に見えた。

「……………狂っている。」

「何!?!」

「?」

一夏の一言にアンドロモンは驚く。

「自分の才能に溺れてこんな物を作るなんて狂っている。それに弱いというだけで嫉妬しているとは子供と同じ発想だ。」

「黙れ！貴様に私の何がわかる！」

「少なくとも嫉妬していたところまでは同じかもな。だが、それ以外の物はクズにまで

「堕ちた貴様よりはマシだ。」

「この名無しデジモンが！キメラモン！最初の標的はアイツだ！データのひとかけらも残すな！」

ナノモンの命令と同時にキメラモンの目が光り動き出す。

「すまないな、アンタまで巻き込んだんじやって。」

一夏はアンドロモンに謝罪する。

「別に構わない。どの道こうなっていたのかもしれないのだからな。」

「やれ！この二人を粉々に消し飛ばせ！」

「ギャアアアアアア！」

キメラモンは一夏たちに向かって襲い掛かる。

「やった！俺たちは自由になったんだ！」

ヌメモンたちは喜びながら飛び跳ねていた。

「ところでナノモンの部屋知らない？俺ナノモンのところに行きたいんだけど。」

「ナノモンだつて!？」

チビモンの言葉を聞いた瞬間、ヌメモンたちは驚く。

「やめた方がいいぜ、殺されちまう！」

「アイツのせいで酷い目にあわされたし逃げた方がいいぜ！」

「でも、兄貴たちが……」

「今頃やられてるさ！早く逃げないとまずいぜ！」

一同は逃げるように勧めるがそのとき空っぽになったはずの牢屋から声がした。

「逃げようが戦おうが無駄さ。」

チビモンが牢屋を除くとそこにはおっさん顔のデジモン、ナニモンが外には出ずタバコを吸っていた。

「何やってんだよ、ナニモンのおっさん！早く逃げねえと……」

「逃げてどうする？」

「え？」

「逃げてもどの道ナノモンに捕まるが落ちさ。それにそこにチビ。お前の兄貴がいくら

強くてもナノモンが作ったキメラモンには敵いはしねえさ。」

そう言うとナニモンはそっぽを向いてまたタバコを吸う。

「いやだ!」

「!?」

チビモンはシーンとした空気の中叫んだ。

「いくら敵わないからと言って俺は兄貴を見捨てて行くなんてことできないし、このまま逃げたらあの町はナノモンにメチャクチャにされちゃう!だからどうしても行かないといけないんだ!」

チビモンの言葉に捕まっていたデジモンたちは唖然としていた。そして、ナニモンはチビモンの方を見ながら聞く。

「おい、チビ。」

「チビモンだい!」

「チビモン、おめえの言っていること本気で言っているのか?」

「そうだ!だから俺は兄貴たちの所へ行かなきゃいけないんだ!」

チビモンの言葉にナニモンは思わず圧倒される。

(コイツ、小せえくせになんて度胸だ。)

ナニモンは牢屋から出るとチビモンを頭の上に乗せて歩き始める。

「おい、おっさん！どこへ行くんだ!？」

ベジーモンは驚いた顔で言う。

「ちよつとこのチビに付き合ってくる。おめえらは先に逃げてな。」

そう言うとなニモンは奥へと走って行った。

「どこへ行くんだ？おっさん？」

「なに、おめえの兄貴次第だが勝てる方法が一つだけあるのさ。」

ナノモンの研究室

「狐炎龍！」

一夏は体を丸めて高速回転し炎の龍をキメラモンに直撃させる。

「どうだ！」

しかし、爆風の中から傷を負いながらもキメラモンが体当たりし、一夏に直撃させる。

「グハア！」

一夏は壁に激突し吐血する。

「ハハハハハハハ！いいぞ、キメラモン！そのまま奴を引き裂いてしまえ！」

キメラモンは四本の腕で一夏を捕らえ、引っ張る。

「ぐわああああ！」

「ハハハハ、いい響きだ！これぞ私が求めた強さだ！」

ナノモンは笑い続ける。しかし、そこにミサイルが飛んできてキメラモンの顔に直撃する。怯んだ隙に一夏は脱出する。

「アンドロモン、私の邪魔をするな！プラグボム！」

ナノモンは小型のミサイルでアンドロモンを攻撃する。

「ぐああ・・・」

アンドロモンはミサイルに仕込まれていたウイルスによって動けなくなる。

「ブースタークロー！」

一夏は自分の右腕を先ほどの戦いで倒したメタルグレイモンに変え、キメラモンの背後を攻撃する。キメラモンはエンジエモンの翼をもがれ、地上に落下する。

「おのれ、だがたかが飛べなくなったぐらいで！」

ナノモンはキメラモンに新たな指示を送ろうとしたとき異変が起きた。キメラモン

がナノモンを捕まえたのだ。

「な、何をするキメラモン!？」

ナノモンには何が何なのか訳がわからなかった。すると、今までしゃべらなかったキメラモンの口が開いた。

「オマエ、モウイラナイ。俺、モウ誰ノ命令モ受ケナイ。」

キメラモンはそう言う口を開いてナノモンを近づける。

「や、やめろ!?!私はお前の生み親なんだぞ!やめろ!やめろおおおおお!!」

ナノモンの叫びも空しくキメラモンはナノモンを食い殺した。捕食した影響なのか翼が再生される。しかし、それはエンジエモンの物ではなくデビモンの物だった。

「な、なんて野郎だ・・・。」

一夏は息切れしながらキメラモンを見る。キメラモンは続いている標的を一夏に向ける。

「次ハ、オマエダ。」

キメラモンは一夏に向かってメガフレイルムを放つ。

「くっ!」

一夏は飛行して避けるがそれも束の間、尾で叩き落とされる。

「オワリダ!」

キメラモンはメガブラスターを放つ。

「ここまでか……」

一夏は立ち上がりとうするが間に合わない。しかし、そのとき一つの人影が一夏の体を持ち上げその場から離れる。

「ナニ？」

キメラモンは不思議そうに下を見る。下にはナニモンとチビモンがいた。

「兄貴！助けに来たよ！」

「お、お前……」

「感謝するならそこにチビの言うんだな。俺はあつちのアンドロモンを助けに行く。」

ナニモンはそう言うのと動けないアンドロモンの方へ行く。

「兄貴、これ。」

チビモンは一挺の大型の銃と小さい置物のような物を一夏に渡す。

「これは？」

「ナニモンのおっさんが『これでキメラモンを倒せるのかもしれない』って持って来たんだ。」

一夏は置物のような物体を見つめる。それは赤い角の生えた戦士の鎧のようなもので何か暖かく感じた。

「な、なんだが力が戻って……いや、みなぎってくる。」

置物のような物は一夏の体に引き寄せられ、体の中へと取り込まれていった。すると一夏の体の傷は完全に癒え、大型の銃は右腕と一体化する。

「今の俺なら奴を倒せるのかもしれない。」

一夏は翼を広げてキメラモンに向かって飛び立つ。一方のキメラモンは逃げているナニモンたちを攻撃していたが一夏に気づくと攻撃対象を変える。

「死ネー！」

キメラモンは火球を連続で放つが一夏は紙一重に避けていく。

「馬鹿ナ!? 奴ノデータハ既ニ登録済ミノハズ。ナノニナゼ避ケラレル?」

一夏はキメラモンに向かって銃を連射する。するとキメラモンの体が見る見る傷ついていく。

「ソナハズハナイ! 俺ハ最強ノハズナンダ! 貴様ゴトキニ負ケルハズガナイ!」

キメラモンは一夏に突っ込んでいく。

「お前はいてはいけない存在なんだ。」

一夏は銃にエネルギーを収束させていく。

「消エロ！」

キメラモンが近距離まで近づき一夏をスカルグレイモンの腕で引き裂こうとする。

「兄貴！」

チビモンが下で叫ぶ。

「メテオバスター!!」

銃から高エネルギーのビームが放たれる。

キメラモンの体は徐々に分解されていく。

「ナゼダ！ナゼ負ケタンダ!?俺ハ強イハズナノニドウシテ!?ナゼ……」

キメラモンの体は完全に消滅し、一夏の体へと引き寄せられていく。

「こいつをロードするのだけはごめんだな。」

一夏は取り込まず、粒子は自然に消滅していった。

「た、倒したのか？キメラモンを。」

アンドロモンはナニモンの肩に捕まりながら言う。

「どうやら本当に倒しちまったようだな。全く、驚くばかりだぜ。」

ナニモンは感心しながら言う。

「スゲエ……兄貴、やっぱりスゲエよ……」

一夏は三人に見守られながら着地する。すると銃は消滅する。

「……勝ったか。」

一夏は安心したのかその場で尻もちをついた。

「結局、間違った奴は死ぬまで直らないか……。」

一夏はそう言いながら先ほどの攻撃で空いた天井の空を見る。空は青く澄み渡り、美しく見える。

「兄貴ー！」

チビモンが走って近づいてくる。

「やっぱ兄貴スゲエよ！あのキメラモンをやっつけちゃったなんてさー！」

「まあな。そう言えばチビ、なぜあの置物が俺に必要だったと思ったんだ？」

「ええつとそれは……わかんない。何となく持って来ただけ。」

「そ、そうか……。」

「ところで俺役に立った？」

チビモンは歩いている一夏の頭の乗りながら聞く。

「まあ、役には立ったな。」

「よっしゃあ！」

「でも迷子になるからそれでマイナスだな。」

「そんな〜。」

そんなことを話しながらも四人は街へと帰って行った。

迫りくる聖騎士

???

「これが最近確認されたデジモンか？」

見知らぬ空間の中、白い騎士のような姿をしたデジモン、オメガモンが言う。

「数年前に確認され始めた個体だがこの個体に該当するデジモンはこのデジタルワールドには存在しない。」

金色の装甲を纏ったデジモン、マグナモンは不審そうな顔で映像を見る。映像には一夏の姿が映し出されている。

「コイツがこの数年間、全く進化していないとは本当なのか？」

ロードナイトモンが聞く。いくらデジモンとはいえ進化のしない個体はあり得ない。それはロイヤルナイトでも同じことである。

「故にイグドラシルはこのデジモンの名を知っているのか？」

エグザモンが聞く。するとマグナモンは首を横に振る。

「いや、そのことに関してはイグドラシルは何もおっしゃらなかった。ただこれだけは言える。」

「どういふことだ？」

デユナスモンが聞く。

「この個体からは人間のデータ、つまりこれらの人型デジモンとて持ち合わせていないデータを持っている。故にこの個体は元々は人間だという可能性がある。」

(人間だと?)

デユークモンはふと数年前の奇妙な感覚を思い出す。

もしやあの感覚はこの個体の物ではないのか？

マグナモンは更に言葉を続ける。

「もう一つは過去にこの個体と酷似したデジモンがいないかどうかを調べてみたが意外なことがわかった。」

マグナモンは一夏の映像の隣に別の竜型デジモンが映される。

「これは!？」

ロイヤルナイツ一同(全員ではない)は驚いた表情で映像を見比べてみる。それはロイヤルナイツ結成以前のデジモンだった。

エンシェントグレイモン

古代竜型　ワクチン種

かつてデジタルワールドを救った英雄の一人だった。
イグドラシルの命令は一夏の連行だった。

とある山の中腹

「ふう、どうにか片付いたか。」

一夏はそう言いながら先ほど倒した五十匹入るのではないかと思われるジャガモンたちを取り込む。思えばキメラモンとの戦いからもう三年以上過ぎていた。一夏もかつての暗い性格から少し明るくなり、旅の途中で出会った善人なデジモンにはそれなりに話せるようになった。

「兄貴〜！」

上の方からチビモンの声が聞こえてくる。上の方を見るとそこにはチビモンを抱っこしているライラモンと一夏に向かって走ってくるリリモンがいた。

「お疲れ、イチカ。あれだけの数の完全体を相手にして勝っちゃうなんて相変わらずすごいわね。」

ライラモンは一夏の名前を言いながら褒める。

「流石私の王子様！」

リリモンは一夏の腕に飛びつきながら言う。

「だからそう言うのはやめろ。なんか恥ずかしい。」

「わかったわ、ダーリン。」

「ダメだこりゃ。」

一夏は呆れながら上に登っていく。

一夏たちが街に戻った後一夏に飛びついて来たのはリリモンだった。自分のせいで死んじやつたらどうしようと思ったと泣きながら言われたときは流石の一夏もこのときばかりは困った。それから翌日に出発しようとしたとき、リリモンから旅の同行をしたいと言われた。

「俺の旅は気ままなもんだからついて行っても何も無いぞ。」

一夏はそう言って考え直させようとしたがリリモンは駄々をこねて態度を変えようとしなかった。呆れた一夏は質問を変えてみる。

「じゃあ、どうして一緒にいきたいんだ？」

それを聞いた瞬間、リリモンは駄々をこねるのをやめて顔を赤くした。

「えっと、その……」

リリモンは困った顔で中々言わない。隣にいたライラモンはしようがないという顔で代わりに言おうとしたがリリモンは突然答えた。

「あなたと一緒にいきたいからです！」

「はあ?」

一夏は一瞬きよんとした。

「あなたのことが好きになりました!だから、一緒に連れて行ってください!」

「……は、はあ。」

いきなり告白され、これ断つたらまずいかなと思いい夏はリリモンと一緒に連れていくことにした(このとき、ライラモンも「リリモン一人だと心配だから」と一緒に行くことになった)。最初の内は鬱陶しいと感じてはいたが彼の知らないうちにリリモンの真つ直ぐなところに惹かれて今では普通に自分のかつての名前を教えて呼び合うようになった。最もチビモン以外は一夏のことを何と呼べばいいか困っていたということもあつたが。

「やつと山頂にたどり着いたか。」

一夏は山頂から下の光景を見つめる。それは一言では言い表せないほど神秘的で何よりも美しく感じた。

「本当に綺麗ね、イチカ。」

リリモンは一夏の右腕にくっつきながら言う。この行いも最初の内は嫌がつていたがもう普通に慣れていた。

「ねえねえ兄貴、これから先はどこに向かうの?」

チビモンはライラモンの腕の中で一夏に聞く。

「さあな、でも俺たちの旅は終わりはない。少なくとも飽きるまではな。」

一夏は冗談を言いながら笑う。これも三年前なら在りえないことだ。

「はあ、俺はいつ進化できるのかな・・・」

チビモンはしよんぼりする。実はとやうとこの三年間、何度もブイモンに進化できるように努力していたのだが未だに進化できていない。

「そんなことはないわ。私達も自然に進化していったんだからチビちゃんもそのうち進化できるわよ。」

ライラモンはそう言いながらチビモンを励ます。そのとき一夏は何かを思い出したのかのように言う。

「そう言えばここら辺でそういう悩み事を解決してくれる店があると聞いたな。」

「え!?それ本当!?!」

チビモンは驚いた顔で一夏を見る。

「ああ、昨日いた村のジジモンから聞いたが。」

「じゃあ、すぐに行こうよ!早く早く!」

チビモンはそう言うどライラモンの手から離れて飛び跳ねて行く。

「チビちゃんったら。」

ライラモンはそう言うと言いかけて行く。

「本当に姉弟のようだな。」

一夏は羨ましい顔で見る。自分も千冬とこんな姉弟だったらよかったのにな
がら。

「私達も早く行きましょ、イチカ。」

「あ、ああそうだな。(やべえ、店の場所までは知らねえのに……)」

少し離れた場所

白い体に龍と獣の腕を持つオメガモンが一夏たちの様子を見ていた。

「奴が例の個体か。」

オメガモンは納得そうに言う。確かにあのエンシエントグレイモンの面影がある。しかし、それ以上に他のデジモンと違う何かが感じられた。

「これより任務を遂行する。」

オメガモンはガルルキャノンを構える。

異分子

「兄貴どこにあるの？その店？」

チビモンは辺りを見回しながら言う。

「そんなこと言われてもな。ジジモンは場所まで詳しく教えてくれなかったし・・・」

「え〜！そんな・・・」

チビモンはその場で落ち込む。

「わかったよ、日が沈むまで探してやるから。」

一夏は慰める。そのとき、背後から今まで感じたことのない殺気を一夏は感じた。

後ろから何かが迫っている！

「みんな伏せろ！」

一夏はリリモンを無理やり伏せさせ、状況がよく分からなかったライラモン達も突然の声に慌てて伏せる。すると大出力のビームが一同の真上を通り過ぎて行った。ビームは少し離れた山に当たり大穴を開けた。

「な、何なの？今のは!？」

一夏はビームが放たれた方角を見る。向こうからはオメガモンが飛行しながら迫っ

てきていた。

「あれはもしかしてロイヤルナイツ!?」

ライラモンは驚いた顔で言う。

「ロイヤルナイツ!?!」

一夏は初めて聞いた名前に驚く。

「このデジタルワールドの秩序を守るデジモンの集団組織よ。私も名前ぐらいしか聞いたことがないけど・・・」

リリモンは一夏の隣で言う。オメガモンは一夏たちの近くまで迫っていた。

「ロイヤルナイツだがなんだか知らないが・・・」

一夏はリリモンを離すとマントを脱ぎ捨てて身構える。

「戦うなんて無理よ、イチカ!彼らはみんな究極体なのよ!」

一夏はリリモンの言葉も聞かずオメガモンに接近する。オメガモンは一夏が来るのを見るなりガルルキヤノンをしまう。

「あの攻撃を避けるとはな、流石異分子と言うべきところか。」

「異分子だと!」

オメガモンの言葉に一夏は怒りを感じた。オメガモンは続ける。

「貴様は本来この世界にはいないはずの存在なのだ。貴様とて少しは理解しているので

はないか?」

「何が言いたい?俺に何か用なのか!」

「イグドラシルは貴様を連れてくるようにと私に命令された。それ故に貴様を連行する。」

「さっきの攻撃といい連行するだど?ふざけるな!」

一夏は右腕をブースタークローに変形させ、オメガモンに向かって接近する。

「俺は誰の命令も受けない、ここではなお更な!」

一夏はクローを振りかざす。しかし、オメガモンはすぐさまグレイソードを出し、弾き飛ばす。一夏は勢いよく吹き飛ばされる。

「ぐっ!」

一夏はとてつもない速さで地上に墜落するがすぐにも起き上がる。

「今までの相手とはケタ違いだ・・・」

一夏は余裕のない顔で上空にいるオメガモンを見上げる。オメガモンは平然と立つたままでは先ほどの衝撃をビクともしない。

「イグドラシルはお前を連れて来いとは言っていたが無傷では言っていない。拒否するのなら強引にでも連行する。」

「誰が!」

「イチカ逃げて！敵いつこないわ！」

「兄貴！」

少し離れた所ではリリモンたちが不安そうに見ていた。

「お前らは早く逃げろ！俺にかまうな！」

一夏はそう言うのと上空に飛び腕をクローから銃に変形させる。キメラモンを倒したメテオバスターである。一方のオメガモンはグレイソードをしまい直すと再びガールキャノンを展開する。

「これなら！」

一夏はメテオバスターのエネルギーを充電する。

「逃げてイチカ！」

リリモンは一夏を止めに行こうとする。

「ダメよ、リリモンあなたまで巻き込まれちゃう！」

「でも！」

リリモンたちが騒いでいる間にも一夏はバスターのエネルギーを限界まで引き上げた。

「喰らえ！」

一夏はメテオバスターを発射する。オメガモンも同時にガールキャノンを発射する。

両者のビームは衝突すると同時に眩い光に包まれていく。リリモンたちは思わず目を閉じた。

しばらくして静かになるとリリモンたちは目を開けて上空を見上げる。上空には無傷の

オメガモンと体のあちこちが焼けてポロポロになっている一夏が見えた。射撃戦もオメガモンの勝ちだったのだ。

「つ、強すぎる……」

「あまりにも大きい差だ。一夏がこれほど絶望したのは人間の時以来だった。傷ついて動けなくなつた一夏を見るなり、リリモンは思わず泣き始め、チビモンは混乱する一方だった。それでもオメガモンは一夏に接近していく。」

「今の貴様の實力では私には敵わん。大人しく来てもらおうぞ。」

オメガモンは上空で身動きがとれなくなつた一夏に迫る。

「やめて！」

少し離れた所からリリモンがオメガモンに向かって叫ぶ。

「イチカはもうボロボロなのよ！異分子なのか何なのかは知らないけど彼の存在のどこが秩序に反するのよ！」

するとオメガモンはリリモンたちの方を向いて言う。

「奴は本来もうこの世界には存在しないデータを持つ者だからだ。それ故にイグドラシルはこのまま野放しにするわけにはいかんと判断したのだ。」

「だからって！」

「それに抵抗さえしなければここまで傷つくことまでなかったはずだ。それは奴の起こした結果だぞ。」

「う……」

「わかったなら黙ってもらおうか。」

オメガモンはそう言うで一夏の方に向き直る。リリモンはこのまま一夏が殺されてしまうのではないかと思いい涙目になってしまった。

「では来て……」

「……………まだだ……………」

「むっ？」

「俺が負けるはずがないいいいいいい！！！！！！」

一夏の目が突然光り出し、周辺に衝撃波が起こつた。

「ぬっ！」

「きやああ！」

衝撃波にはリリモンたちも思わず吹き飛ばされ、オメガモンも少し怯んだ。

「はあ．．．はあ．．．」

再び一夏の方を見ると一夏の体から赤いオーラが全身を包み込んでいた。ロイヤルナイトであるオメガモンでさえ異常と感じるほどすさまじいものだった。

「こ、これは一体．．．」

「グルルルル．．．」

一夏の目はもはや正気ではなかった。まるで獣そのものだった。

「グワアアアア！」

一夏は勢いよくオメガモンに突進し、彼を地上に突き落とす。地上には大きなクレール
ター

ができる。

「奴にはこんな力はないはずだが．．．」

オメガモンは上空にいる一夏を見る。すると一夏から一瞬、古代の英雄エンシエント
グレイモンの残像が見えた。

「グルル・・・殺ス、殺ス！」

一夏は今にもオメガモンに迫ろうとしていた。

「これはどうやら排除するしかないようだな。」

オメガモンはグレイソードを展開し構える。一夏は勢いをつけてオメガモンに急接近しようとした。

しかし

「もうそのぐらいにしろ。」

「!？」

背後から突然声がすると思いきや振り向く間もなく一夏は不意打ちされそのまま動かなくなる。よく見ると後ろにはマグナモンがいた。

「マグナモンか。」

「オメガモン、イグドラシルは飽くまでも奴を連れてくるようにと言ったはずだ。それを消すつもりか？」

「奴は我々が想像していた以上の異分子だ。イグドラシルに連れて行くのは危険すぎる。」

「しかし、イグドラシルはそれを望んでいる。」

「……………」

「では引き上げるぞ。」

そう言うのとマグナモンは一夏を抱え、上空へと消えていった。オメガモンも同様にリリモンたちの前から消えた。

その場にはリリモンたちだけが残された。

「……………イチカ。」

リリモンは跪いて泣いていた。

「ロイヤルナイツに連れて行かれたんじゃ……………」

ライラモンも何とも言えなくなってしまうていた。

「兄貴を助けよう！」

チビモンは二人を励ますように言う。

「でもねチビちゃん、ロイヤルナイツは……………」

「そんなのどうでもいいんだ！とにかく兄貴を助けるんだ！」

「でも、どこに行くのよ？」

リリモンは顔を上げないまま言う。

「兄貴が言っていた店を探すんだよ！そこに行けば何かできるようになるかもしれないじゃん！」

「……」

リリモンは黙ったままだった。

「うううう！もういい！俺だけでも行く！」

チビモンはそう言うと一緒にだけ飛び跳ねて行く。

「ああ、チビちゃん！」

ライラモンはチビモンの後を追っていく。リリモンは少し考えると立ち上がり独り言を言う。

「……そうよね。こんなんじやイチカが好きなんて言えるわけないし。もう、私もやるだけやってダメならイチカと心中する！」

リリモンは何か吹っ切れたのか急いで二人の後を追って行った。

ヴリトラモン

イグドラシル内

マグナモンが一夏をイグドラシルに届けた後、オメガモンと何やら会話をしていた。
「奴の容態はどうだ？」

「あれほどまで傷めつけといて心配か？」

流石にやり過ぎたと思ったのかオメガモンは心配そうに聞いてきた。

「確かに一見ボロボロにはなっていたが軽い火傷程度だ。」

「そうか、それでイグドラシルは何と？」

「今回の貴様の行いは不問とするらしい。」

「そこではない。奴については何と言っていたのかと聞いているんだ？」

マグナモンは言いづらそうではあったが口を開く。

「奴の体から確認されたのはやはり十闘士のエンシエントグレイモンと同じものだ。」

「では奴は十闘士の生まれ変わりなのか？」

「いや、他に別なデータも発見された。」

「やはり人間のか？」

「ああ。イチカ、いや織斑一夏は元々人間だ。」

「それが奴の本当の名か。」

「その話、もう少し詳しく話してくれないか？」

一人の会話している所にデュークモンが来る。

「デュークモン。」

「数年前から気になることがあってな。」

「……俺はどうしたんだ？ 奴にやられたのか？」

一夏は見知らぬ空間の中で目を覚ます。辺りを見回してみるがオメガモンは愚か先ほどの場所でもない。

「どこだ……？ どう見てもさっきいた場所じゃねえし。」

「どうやら目が覚めたようだな。」

「誰だ！」

一夏は素早くメテオバスターを展開し、構える。しかし、後ろを振り向いたとき啞然とした。後ろに立っていたのは見覚えのある人物だったからだ。

「な、何故貴様が！」

「この姿か？ 懐かしいものだろう？」

後ろにいた人物。それは一夏にとっては懐かしいものであり自分を見捨てた姉織斑千冬そのものだった。

「千冬!!!」

一夏はいきなり容赦なく千冬に向かってメテオバスターを放った。ビームは千冬に直撃し、千冬の体は粉々に砕け散った。

「はあ、はあ……。」

一夏はその場でしゃがみこむ。どうして姉がこんな所にいるのか？それがどうしてもわからなかった。

「いきなり撃つとは……余程実の姉が憎いようだな。」

「何!？」

後ろを振り向くと砕け散ったはずの千冬が平然として立っていた。

「この弟殺しが!」

一夏は今度はダブルエッジを展開し千冬を斬りつけようとする。

「少しは落ち着け。」

千冬は手をかざすと金縛りにあったのか一夏はその場で動けなくなった。動こうにも何かに押さえつけられているようでビクともしない。一夏はそのまま頭を冷やすしかなかった。

しばらくして一夏はようやく落ち着いた。

「どうやら落ち着いたようだな。」

千冬は安心そうに言う。

「ああ、さっきは頭に血が昇っていて混乱していた。千冬姉がこんな場所にいるはずがない。」

「この姿は貴様の記憶のデータから借りたものだ。」

「それであなただは一体何者なんだ？」

「我はイグドラシル、デジタルワールドの神だ。」

「俺をどうしてここへ連れてきたんだ？」

千冬、いやイグドラシルは一夏を見ながら言う。

「貴様に少し興味があつてな。」

「興味？」

「貴様は生まれてから一度も進化していないそうだな。自分では変だと思わなかったのか？」

一夏は考えてみる。確かに今まで出会ったデジモンは必ず進化していた。しかし、自分も進化したことがない。これにはかなり疑問を持っていたがそのうち進化するだろうと考え、気にしなくなった。

「しかし、それがどうしたというんだ？進化しないものだっているのに。」

「確かに進化が遅い個体も存在する。しかし、お前の場合はかなり特殊なのだ。」

そう言うといグドラシルはあるものを手に出す。

「そ、それは!？」

一夏は驚いた。それは三年前にチビモンがナノモンの研究所で見つけたものに似ていたからだ。ただあの時のとは違いイカのような形をしていた。

「これはかつて十闘士が己の力を封じたスピリットというものだ。」

「スピリット?」

「我がこのデジタルワールドに君臨する以前、デジタルワールドは一度壊滅する危機があった。それを十体の究極体デジモンが救った。そのときの十体を十闘士と呼んでいる。」

「それはわかったがその十闘士と俺が一体何の関係があるというんだ?」

一夏は少し考えがまとまらず困る。

「十闘士はその戦い後、一体ずつ二つのスピリットを残していった。お前が取り込んだ

のはそのときの英雄の一人エンシエントグレイモンが残した炎のスピリットだ。」

「でも、何故俺の体に取りこまれたんだ？」

「最近ようやく分かったことだがスピリットはデジモンと人間に反応することがわかった。しかし、お前はデジタマから生まれた。それがどういふことか分かるか？」

「あ。」

一夏は思い出した。確かに自分は死んだ。死んだ人間にスピリットが反応するはずがない。それなのに自分はデジモンとして生まれた上、スピリットを取り込んでいるにもかかわらず進化しない。これではスピリットが自分の体そのものということになる。

「それで俺が異分子と呼ばれたということか。」

「呑み込みが早くて助かる。」

「それで俺はどうしろと言うんだ？」

「このスピリットはまだこの世界のあちこちに散らばっている。それを回収してほしい。」

「何故？」

「これが七大魔王や暗黒デジモンの手に渡つたら厄介なのでな。その代りに貴様に新しい力を与える。」

イグドラシルの手から光る球体が現れ、一夏の手の上で電子機器のようなものにな

る。

「この力は？」

「スピリットの力を一部開放して使えるようにするための物だ。そのときが来ればそれが力を与える。」

「なるほどな。俺以外にも反応するのか？」

「それはまだ言えぬ。後、貴様は名前がないと言っていたな。だがデジモンには必ずしも名前が必要だ。」

「アンタが決めてくれるというのかい？」

「神に命名されるのが不満か？」

「そうは言っていない。」

イグドラシルは一夏に新たな名を与えた。

ヴリトラモン

十闘士の力を受け継ぎし者としてここに新たなデジモンの名が生まれた。

「……そう言うことか。」

デュークモンは納得したように言う。

「では我々が最近確認したスピリットというものその物なのか、奴は？」

オメガモンは疑問に感じてならない。しかし、マグナモンが述べたことは全て事実であるため否定はできない。そのとき、ゲートが開き、そこから一夏が出てきた。

「貴様が例のデジモンか。」

デュークモンは一夏を見ながら言う。それに対応するかのように一夏は新たな名を言う。

「俺の名前はヴリトラモン。イグドラシルよりスピリット回収の命を受けたデジモンだ。」

「それが貴様の新しい名か。」

「ああ。」

オメガモンは一夏に近づく。

「先ほどの謝罪にはならないがお前を元の場所まで送り届けよう。」

「感謝する。」

オメガモンはゲートを開くと一夏、いやヴリトラモンと共に中へと入って行った。

デジタルワールドに散らばっているスピリットの回収。
それがヴリトラモンのイグドラシルから頼まれたことだ。

暗黒進化と聖なる剣

一夏がイグドラシルと会話していた頃

とある店

この店にはめったに客は来ない。原因は場所にもあるがそれ以外のこともあった。店主ベードモンは変わった趣味であり店には訳のわからぬ品物で溢れている。ほとんどは使い方がわからない故に買わない客がほとんどなのだ。中には掘り出し物もあるためわざわざ訪ねてくる者もいる。

「ヌフフフ、これが成長期のデジモンを疑似進化させるデジメンタルというものなのね。」

ベードモンはデジタマがサイズダウンしたような物を本日のお客様に見せる。客人はリリモン、ライラモン、そしてチビモンの三人だった。一夏がロイヤルナイトに誘拐された後、三人はガムシヤラに店を探していたところ、二時間後に偶然にもチビモンが落ちた穴に目的の店があった。チビモンはデジメンタルを見るなり、目を細めて見る。

「本当にこれで進化するようになるの？」

「無論あるね。ただ、お客さん幼年期だから使えないと思うけど本当に買うの？」

ベードモンはチビモンを見ながら言う。

「買う！」

「でも、幼年期だと……」

「意地でも進化する！」

「は、はあ……」

ベードモンは呆れながら料金を言い、ライラモンが素直に払う。少し高めの値段だが。

「後、お嬢ちゃんたち綺麗だから後いくつかのデジメンタルも付けるね。」

ベードモンはそう言うのと赤いデジメンタル以外に黒いのと複数のデジメンタルをおまけに付けた。

「ところであなたこのアイテム一体どこで手に入れたの？」

リリモンは店の中を見ながら言う。

「それは店の裏事情だから言えないのね。でも、いろんな品がそろっているのは保証するね。」

「じゃあ、私はこの剣を買うわ。」

リリモンたちは買い物を終えた後、一夏と別れた所へと戻ってくる。

「さてと。」

チビモンは買ったばかりのデジメンタルを目の前に置き、精神を集中させる。

「進化しろ！進化しろ！進化するんだあ〜！！」

自分が進化できるように空に向かって祈るが当然、神頼みで進化できるのなら苦労しない。

「……やっぱりまだ進化できないのかな。」

チビモンはしょんぼりしながらデジメンタルを見つめる。

「あつ、そう言えばこんなのが入っていたっけ。」

ライラモンは袋の中から何錠かの薬が入っている薬瓶を取り出す。そこには「進化一発！」と書いてあった。

「えつと、『この薬を飲めば、一時的に一段階進化することができます（但し、究極体にはなれないのでご注意ください）。』だって。」

「それあるならもつと早く言つてよ！」

チビモンは早速ライラモンから薬瓶を取つてありつただけの薬を一気に飲む。

「ああ、全部飲んじゃ危ないって！」

ライラモンが言つたときはすでに遅く、チビモンは薬を全部飲み込んでしまった。

「これで俺も進化だ！」

チビモンの体が光り始める。いよいよ進化のようだ。

「あれ？これ全部飲んだらまずいようだけど……」

リリモンはチビモンが捨てた薬瓶の注意書きを読んでみる。そこには

注意！

「進化一発！」はとても副作用の強い薬ですので使用は一度に一錠にして下さい。複数使用した場合、暗黒進化または死亡する危険性があります。その場合は一切責任は負えません。用量を守って服用して下さい。

「って言うことはこれって暗黒進化？」

リリモンが言う矢先、チビモンは近くに置いたデジメンタルと共に黒い瘴気に包まれる。リリモンとライラモンはお互い抱きしめ合いながら震える。

「グルルルル……」

しばらくして瘴気が晴れ、チビモンがいた所には黒い竜人型デジモンが立っていた。

「ち、チビちゃん？」

ライラモンは恐る恐るチビモン、否ブラックフレイドラモンに聞く。ブラックフレイ

ドラモンはライラモンをじっと見つめるが敵意むき出し状態であった。

「グルルルル……。」

「私達のがわからないみたい……。」

リリモンが言う矢先にブラックフレイドラモンは両腕に炎を纏い二人に襲い掛かる。

「きゃあー！」

ライラモンは咄嗟にライラシャワーを繰り出す。ブラックフレイドラモンは態勢を変え、攻撃を受け流す。少し離れたところに着地するブラックフレイドラモンであるが正気に戻る様子はない。むしろその目には殺気すら感じた。

「ど、どうしよう……。」

二人はその目に怯えながら震える。

「グワアアアアアア!!」

またブラックフレイドラモンが飛びかかる。

「もうダメ！」

ライラモンは思いつきり頭を押さえる。

「イチカ助けて！」

リリモンは泣き顔でこの場にはいない一夏に助けを求める。ブラックフレイドラモンの牙が迫る。

「・・・・・・・・」

ブラックフレイドラモンの牙はいつまでも二人に届かなかった。リリモンはそつと目を開ける。

「グルルルル・・・・・・・・」

「やめろ。」

二人の目の前では一夏ことヴリトラモンがブラックフレイドラモンの攻撃を受け止めていた。

「イチカ！」

「心配かけてすまなかったな。」

そう言うくとヴリトラモンはブラックフレイドラモンを放り投げる。ブラックフレイ

ドラモンはうまく着陸すると態勢を整え直す。

「あなた確かオメガモンに捕まったんじゃないや……って、ええ!?」

ライラモンが疑問をヴリトラモンに言おうとしたときすぐ隣にオメガモンがいたことに驚く。

「どうしてオメガモンが?」

「話は後だ。それよりも先にチビを元に戻す。」

ヴリトラモンは構えを取りブラックフレイドラモンに目を向ける。ブラックフレイドラモンはジャンプしたかと思いきや全身に炎を纏い、必殺技「ファイアロケット」を繰り出してきた。

「絶対零度。ハンチー!」

ヴリトラモンは左腕に冷気が集まりブラックフレイドラモンにぶつける。威力は互角で双方ともに後方へ飛ばされていった。ブラックフレイドラモンは空かさず接近しナックルファイアを繰り出す。ヴリトラモンは避けながら解決方法を考えようとしていた。

(このままだとチビが危ない。しかし、攻撃すれば命に関わるし、俺も危なくなる。どうすれば……)

ヴリトラモンは策を編み出せず攻撃を避け続けていた。

「どうしてイチカは攻撃しないのかしら？」

リリモンは二人の戦闘を見ながら疑問に思う。それもそのはず、今回のヴリトラモンの戦闘には何か迷いがあった。

「恐らく奴を助けようと考えているのだろう。倒そうとするのならまだしもあの状態から元に戻すのは簡単ではないからな。」

隣に立っているオメガモンは冷静に見て言う。（どうしてこの場にいるのかと聞きたかったが機嫌を悪くするとどうなるか分からないから聞かないことにした）

「あ、あの薬を無効化にすれば！」

リリモンは咄嗟に思いつく。元はと言えばあの薬を飲んだことが原因なのだ。だったら薬の効果が切れれば元通りに戻るはずだ。

しかし、彼女の発想はオメガモンの言葉であっけなく終わる。

「今更飲んだ薬を取り出せると思うか？」

「……言われてみれば無理ね。」

ライラモンにまで言われリリモンは落ち込んでしまう。

「しかし、効力を無効化にすると言うのは一理ある。」

「でも、どうやって？ イチカがチビちゃんの薬の効果が切れるまで攻撃を受け流す事なんて無理よ？」

「攻撃すると同時に効力を無効にすればいいんだ。」

「でもイチカにそんな能力ないわよ。」

「私の能力を一部何かに付加させて使えばいいのだが……」

オメガモンがそれをどうするか考えていた矢先、リリモンは自分が買った剣を見てひらめく。

「この剣に付加させることはできないの？」

「できなくもないがどうやって渡すつもりだ？」

「いいから早くやって！」

リリモンに言われるなりオメガモンは自分のグレイソードを展開し、剣に向ける。するとグレイソードが光りだし光がリリモンの持つ剣に注ぎ込まれる。注ぎ込まれた後

剣は光を保ったままだった。

「これでこの剣に聖なる力を宿ったはずだがどうやって奴に……」

オメガモンが言いかけたときリリモンはとんでもないことをし出した。

「イチカー！ 私からの愛のプレゼントを受け取って……!!」

剣をヴリトラモンに向かって思いつきり投げてしまった。これにはライラモンは愚かオメガモンですら驚いた。

「リリモン！ そんなことしたら逆にイチカに攻撃しているのと同じでしょ！」

「あつ。」

リリモンが気がついたときはすでに遅く、剣は回転したままヴリトラモンの左腕に衝突する。

「イチカの腕が……!!」

「あ……くん！ イチカ、ごめんなさい!!!」

リリモンは泣き顔でイチカに謝罪するが目の前では更に在りえない出来事が起こっていた。

剣がヴリトラモンの左腕と一体化していたのだ。形状の腕の甲に合わせて変形し、刃はオメガモン同様の文字が刻まれていた。ヴリトラモンは戸惑いながらも剣をブラッ

クフレイドラモンに向ける。

「オメガソード！」

ヴリトラモンは突進してくるブラックフレイドラモンに斬りつける。ブラックフレイドラモンは一刀両断にされた。

「ち、チビちゃん！」

ライラモンは思わず叫んだ。一刀両断されたブラックフレイドラモンは分解し始め、その場には気を失ったチビモンとデジメンタルのみが残っていた。

「……………」

ヴリトラモンは黙ってオメガソードを収納する。

「イチカ〜!!!」

リリモンは泣きながらヴリトラモンに抱き付いて行ったのであった。

新たな旅へ

ヴリトラモンはまだ目を覚まさないチビモンを除いて二人に自分に与えられた役割とオメガモンに対する誤解を解くように説明した。最初は怪しくオメガモンを見つめていた二人ではあったが（特にリリモン）ヴリトラモンの説明もあって誤解は解けたようだった。

「じゃあ、あれでも加減していたの？」

リリモンはヴリトラモンの腕に抱き付いたまま怪しそうにオメガモンを見る。

「本人もやり過ぎたと謝っているんだからそこまで言うなよ。」

「だって、もうイチカに会えなくなるかと思っただもん！」

オメガモンは申し訳ないと思っただもんのか一同に顔を合わせづらそうだった。一方のチビモンはライラモンの膝の上で寝たままだった。

「それでスピリットっていうものは後いくつあるの？」

ライラモンが話を切り替えようとオメガモンに質問する。

「過去の十闘士の数とスピリットが二種類に分かれたことを考えれば現在確認されているスピリットは三つ、全てのスピリットが二十個だとしたら残り十七個になる。」

「伝説の十闘士のスピリット……でも、どこにあるのかはわからないでしょ？」
リリモンは怪しい顔をやめたがオメガモンを見て聞く。

「確かにある場所までは我々ロイヤルナイツでも把握しきっていない。しかし、ヴリトラモンがイグドラシルから受け取ったデジヴァイスには正確な位置までは把握できないがスピリットの在処を記している。」

「ちよつと待つて、ヴリトラモンつてもしかしてイチカのこと？」

「ああ、イグドラシルが俺に与えた名前だ。」

リリモンはヴリトラモンをじつと見て、しばらくすると不安な顔になる。

「じゃあ、これからはヴリトラモンつて呼ばなくちゃいけないの？」

「お前が言いやすい方がいい。」

それを聞くとリリモンはホツとした顔になる。

「ところでそのデジヴァイスはどういうものなの？」

「イグドラシルの話によればスピリットの力を断片的に開放して俺がその力を使えるようにするものらしい。それ以外については特に言われなかったが。」

「そう言われるとすごく怪しいわね。」

質問をしたライラモンは気味悪そうにイチカの持つデジヴァイスを見つめる。そのとき、彼女の膝の上で眠っていたチビモンが目を覚ました。

「う．．．俺は確か．．．」

「チビちゃん!? よかった目を覚ましたのね!」

「姉ちゃん．．．あれ? 兄貴!?!」

チビモンは起き上がるとすぐにヴリトラモンの方を見る。

「よかった! 兄貴無事だったんだね!」

「何が無事だったんだねだ。散々暴れまわっていたくせに。」

「え?．．．あつ、そう言えばあのへんな薬を飲んだ後．．．あ! オメガモン!」

気づく順番が違うと思うがチビモンはオメガモンに飛びつき、小さい手でパンチを繰り出してきた。

「この野郎! よくも兄貴を連れ去って行ったな! このやろ、このやろ!」

チビモンは攻撃にもなっていないパンチをオメガモンに打ちつける。

「おい、チビ。オメガモンは．．．」

ヴリトラモンは誤解を解こうとしたが

「グワア! やられた!」

オメガモンはワザとやられた振りをしてくれた。それをわかっているのかチビモンは勝ったと思い、嬉しそうに倒れたオメガモンの上に乗って飛び跳ねる。

「参ったか! もうあんなことするんじゃないぞ!」

オメガモンはわかったと言うとチビモンはすぐに降りて行った。

「……なんかいろいろとすまないな。」

ヴリトラモンはオメガモンにバツが悪そうに言う。

「気にするな、元はと言えば私が蒔いた種なのだからな。では、健闘を祈る。」

「ああ。」

会話が終わるとオメガモンは上空へと飛んで消えていった。

「さて、ここからまた新しい旅の始まりだ。……ん？」

ヴリトラモンは手に持っているデジヴァイスを見る。デジヴァイスは突然光り出したのかと思うとライラモンが持っていたデジメンタルを吸収してしまった。

「あ！俺の進化するためのやつが！」

「おいおい、スピリットだけを入れる物じゃなかったのか？」

ヴリトラモンは改めてデジヴァイスを見る。画像にはイグドラシルから預かった水のビーストスピリットの他に数種類のデジメンタルが写っていた。

「ひどいよ兄貴！俺の物取るなんて！」

「待て待て、俺じゃなくて……今度は何だ!？」

ヴリトラモンが何とかしようとしたとき、今度はチビモンに向かって光が照射される。

「ち、チビちゃん!？」

ライラモンは心配そうにチビモンを見つめる。

「チビモン、進化! ブイモン!」

チビモンはブイモンに進化した。ヴリトラモンたちは驚いていたが進化したブイモン自身が一番驚いていた。

「嘘……俺進化したの? やつと進化したの!？」

「……なんかよく分からないけどよかつたわね、チビちゃん。」

「そ、それもそうだな。よかつたな、チビ。」

「なにさ! せっかく進化できたのにそんな反応しなくてもいいじゃないか! それにもうチビって言わないでよ!」

ブイモンは膨れっ面しながら怒る。それを見て笑う三人。

かくして四人の新しい旅が始まったのであった。

俺の名はヴリトラモン。

俺は昔、自分はどこにいても独りぼっちだと思っていた。でも、今は違うと思えてきた。

何故なら今は、俺を慕ってくれる仲間がいるのだから。

その日の夜

みんな寝静まった後、ヴリトラモンは一人星が光っている夜空を見る。イグドラシルが千冬の姿をしたせいかな今まで忘れていた千冬との生活の日々を思い出していった。

「千冬姉は今頃、どうしているかな？あれからもう何年も過ぎていくからもう結婚して家族でも持っているのだろうか？それとも俺が死んでから立ち直っているのかも分からないねえし……何今更こんなこと考えているんだろうな、俺は。」

ヴリトラモンがそんなことを考えながら笑っていた。

そのとき、後ろから足音が聞こえてきた。ブイモンがいつものようにトイレに行きたくなったのだろうか？

「だれだ？」

ヴリトラモンは後ろを振り向く。そこにはリリモンが立っていた。

「隣……いい？」

「ん？リリモンか。眠れないのか？」

「うん。」

リリモンはヴリトラモンの隣に座ると彼の肩に寄り添った。

「……イチカ。」

「なんだ？」

「その……これからもずっとついて行っていいよね。」

「なんだよ突然？」

「なんかさつきイチカがどこかに行ってしまうような夢見ちゃったもんだから。」

「心配するな、俺は勝手にどっかに行ったりはしない。だから安心して眠っている。」

「うん。」

そう言うとりりモンはそのまま寄り添って眠った。ヴリトラモンもその寝顔を見た後、起こさないように寝かせて自分も眠ったのであった。

登場人物（デジモン）紹介

登場人物（デジモン）

イチカ一行

ヴリトラモン／織斑一夏（ハイブリット体・魔竜型・ヴァリアブル種）

本作の主人公。モンド・グロツソ決勝戦時に誘拐され、誘拐犯たちに暴行を加えられた上に射殺されたがデジタルワールドに於いて炎のピーストスピリットの肉体を得て転生する。他のデジモンと出自が異なるため進化せず、スピリットが肉体であるため分離やスライドエヴォリションができないが倒したデジモンのデータをロードしその技を使うことができる。デジタルワールドに転生した当初は「どこにいても自分は一人」と言う考えを持っていたためどこにも定住せず放浪していた（その間に挑んできたデジモンは情け無用に倒してきた）。しかし、旅の途中で出会ったチビモン、リリモン、ライラモンと交流していくうちに仲間としての信頼関係を持つようになる（但し、姉や人間に対しての恨みはまだ消えておらず、千冬の姿をしたイグドラシルには容赦なく襲い掛かった）。現在はイグドラシルの指令でデジタルワールドに散らばっている十闘士

のスピリットを仲間たちと共に探している。以前は「名無し」と名乗っていたがリリモンたちと旅をするようになってからはかつての名である「イチカ」と呼ばれている。ちなみに外見はオリジナルと同様だったがキメラモン戦において炎のヒューマンスピリットを吸収してからは肩の装甲含め一部が「アグニモン」のものとなり体形が「アルダモン」に近くなっている（オメガモンが一瞬エンシエントグレイモンの残像が見えたのも外見がそれほど近くなったため）。所持しているデジヴァイスは「フロンティア」のデリースキャナと酷似している。

オリジナルの技

メテオバスター

チビモンがナノモンの研究所で見つけた大型の銃が炎のスピリットの影響で変化した一体化式の大型銃。ヴリトラモンの右腕と一体化しており、形状は「パイルドラモン」のデスペラードブラスタースターに似ているが使用上は「ベルゼブモンブラストモード」の陽電子砲と同じ。チャージ式と連射式に切り替えることができ、チャージ時間によって威力が変わる。

オメガソード

リリモンがベータダモンの店で購入した剣をオメガモンの聖なる力を与えたことによつて誕生した剣。ヴリトラモンの左腕から展開し、攻撃する。闇の力を浄化する作用

がある。

チビモン／ブイモン（幼年期Ⅱ・幼竜型／成長期・小竜型・フリー）

ヴリトラモンの弟分。ゴブリモンの集団に襲われていたところをヴリトラモンに助けてもらったのがきっかけで付いてくるようになった。ヴリトラモンのことを「兄貴」と呼んで慕っている。ヴリトラモンがオメガモンに連れ去られたときは自分の力不足を悔しがっていた。ベーダモンの店でもらった「進化一発！」を大量摂取して暗黒進化してしまうがヴリトラモンのオメガソードにより浄化される。その後はデジヴァイスの光でブイモンに進化する。ヴリトラモンからは「チビ」と呼ばれている。一行のマスコットの存在。

リリモン（完全体・妖精型・データ種）

ヴリトラモンとチビモンが訪れた機械の街でメタルテイラノモンに襲われていたところをヴリトラモンに助けてもらったデジモン。このときをきっかけにヴリトラモンに一目惚れし、旅に同行することになる。ヴリトラモンのことを「イチカ」と呼んでいつもそばにいる。普段は明るい性格で振舞っているが実はかなり泣き虫でもある。ヴリトラモンに惚れたのは本物でオメガモンに連行されたときもやるだけやってもダメ

なら心中する言うほど。ただ、ヴリトラモンがいつ自分の所から離れて行ってしまいうのかかなり心配している様子。

ライラモン（完全体・妖精型・データ種）

リリモンの友人。リリモンが心配だということもありヴリトラモンの旅に同行することになる。リリモンと違い落ち着いた性格をしている。チビモンのことを弟のように思っており、「チビちゃん」と呼んでいる（一方のチビモンもリリモンも含めてライラモンのことを「姉ちゃん」と呼んでいる）。

イグドラシル陣営

イグドラシル

デジタルワールドの神と呼ばれているホストコンピュータ。ヴリトラモンの前では彼の姉である織斑千冬の姿で現れた。ヴリトラモンにスピリットの回収を頼む。

ロイヤルナイツ

オメガモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

ロイヤルナイツのメンバーの一人。ヴリトラモンの連行と言う任務のためヴリトラモンに襲い掛かった。任務には忠実だが以外に小さいデジモンには優しいところがある。

デュークモン（究極体・聖騎士型・ウイルス種）

一夏がデジタルワールドに転生したのを感じていたデジモン。

マグナモン（アーマー体・聖騎士型・フリー）

ヴリトラモンをイグドラシルに運んだデジモン。データの解析でヴリトラモンが一夏だということ告げる。

ロードナイトモン（究極体・聖騎士型・ウイルス種）

ヴリトラモンが進化しないのに疑問を感じたデジモン。

エグザモン（究極体・聖騎士型・データ種）

ロイヤルナイツの会議に出席していたデジモン。

デユナスモン（究極体・聖騎士型・データ種）

エグザモン同様、会議に出席していたデジモン。

その他のデジモン

デジタマモン（完全体・パーフェクト型・データ種）

ヴリトラモンが訪れた店の店長。あまり好戦的ではない性格。

オーガモン（成熟期・鬼人型・ウイルス種）

デジタマモンの店の常連でヴリトラモンにロードされたデジモン。

ゴブリモン（成長期・鬼人型・ウイルス種）

オーガモンの部下。複数いたがヴリトラモンに瞬殺される。

メラモン（成熟期・火炎型・データ種）

ヴリトラモンに挑んだデジモンの内の一体。フロストクローでとどめを刺される。

オロチモン（完全体・魔竜型・ウィルス種）

ゲコモンの村近くの沼に住んでいるデジモン。酒が好物でゲコモンたちにお酒を作らせていた。ヴリトラモンを圧倒していたが「出来損ない」と言う言葉に激怒したヴリトラモンに逆転されロードされる。

ゲコモン（成熟期・両生類型・ウィルス種）

ゲコモンの村に住んでいる無数のゲコモン。オロチモンをひどく恐れていた。

オタマモン（成長期・両生類型・ウィルス種）

ゲコモンの村に複数の個体が生息。同様にオロチモンを恐れており、村を訪れたヴリトラモンに去るよう警告した。

ナノモン（完全体・マシン型・ウィルス種）

機械の街でデジモンを狩り、自分の理想のデジモンを作るため研究をしているマッド

サイエンティスト。かつては善良な人物であったが自分の能力の低さに悔りを感じ、同じ完全体であるアンドロモンを嫉妬するようになり現在のような性格になった。ヴリトラモンが街を訪れた際、能力を測定するため配下のメタルティラノモンを放ち観察していた。ヴリトラモンとアンドロモンが研究所に来た時は初の合成デジモンキメラモンを投入するが自我に目覚めていたキメラモンに捕食されてしまった。なお、チビモンが服用した「進化一発！」は彼の開発した物。

アンドロモン（完全体・サイボーグ型・ワクチン種）

機械の街のデジモンでナノモンの旧友。ナノモンを止めるべくヴリトラモンと共に研究所に行くが逆にナノモンのプラグボムで動きを封じられてしまう。リリモン、ライラモンから信頼されていることから街の住民の信頼が厚い。

メタルティラノモン（完全体・サイボーグ型・ウイルス種）

タンクモン（成熟期・サイボーグ型・データ種）

メガドラモン（完全体・サイボーグ型・ウイルス種）

サイクロモン（成熟期・竜人型・ウイルス種）

メタルグレイモン（青）（完全体・サイボーグ型・ウイルス種）

ナノモンによって強化改造を受けたデジモンたち。通常体と比べ大幅に強化されているが代償として理性を失っており、ヴリトラモンに全員ロードされてしまった。

キメラモン（完全体・合成型・データ種）

ナノモンが自ら強化改良を繰り返したデジモンたちの長所を取り入れた合成デジモン。完全体の上位以上の実力を持つが密かに自我が芽生えており、親であるナノモンを「用済み」と言って捕食した。ヴリトラモンを圧倒したが「メテオバスター」によって消滅する。

ナニモン（成熟期・インベイド型・ウィルス種）

ヌメモン（成熟期・軟体型・ウィルス種）

モノクロモン（成熟期・鎧竜型・データ種）

ベジーモン（成熟期・食虫植物型・ウィルス種）

パグモン（幼年期Ⅱ・レッサー型）

アグモン（成長期・爬虫類型・ワクチン種）

ナノモンのデジモン狩りによって捕まっていたデジモンたち。チビモンに解放される。全員が逃げるという中ナニモンはチビモンの度胸を見込んでヴリトラモンの援護

に行った。

ジャガモン（完全体・植物型・ワクチン種）

大量にヴリトラモンに倒されていたデジモン。

ペーダモン（完全体・宇宙人型・ウイルス種）

奇妙な店を営んでいるデジモン。何故かは知らないがデジメンタルなどを置いている。

ブラックフレイドラモン（アーマー体・竜人型・ウイルス種）

本作は初のオリジナルデジモン。ペーダモンの店で買った「進化一発！」を一瓶丸ごと呑んだチビモンが勇気のデジメンタルと反応して進化した暗黒デジモン。ヴリトラモンのオメガソードによって浄化される。

他の人物

誘拐犯

一夏を誘拐し、暴行を加えた上に殺害した元凶。

織斑千冬

一夏の実姉。一夏が一番憎い相手であり、それでも尊敬する人物。本作では回想に登場。

ウィルスバスターズ編

謎の集団、ウィルスバスターズ現る

俺の名はヴリトラモン。

そのまま呼んでもいいが言いづらいならイチカと呼んでくれ。

突然だが今、俺たち四人はある村で捕まっている。いや、詳しく説明すればブイモンが調子に乗って警戒心なしで村に接近したところで落とし穴にはまり、それを助けようとした俺とリリモン、ライラモンも別の落とし穴にはまってしまい現在に至る。我ながら恥ずかしいことだ。しかし、奇妙なものである。普通の村ならともかくこの村は意地悪で有名なガジモンたちの村だったのだ。

「おいーいい加減にはいたらどうだー!」

ヴリトラモンたちを捕まえた張本人であるガジモンたちは警戒した顔で睨み付ける。今までの旅でガジモンは何度も見てきたヴリトラモンであったがここまで警戒心が強いガジモンたちを見たのは初めてだった。

「だから俺たちはそんなわけの分からん組織の一員ではない。」

「とぼけるな！お前たちはウィルスバスターズの仲間だろ！」

「だから何よ！そのウィルスバスターズって！」

ヴリトラモンたちは訳の分からぬ誤解を受けながらもなんとかわかってもらえように話をしていた。

ガジモンの村 リーダーの家

会話は一時間以上続いたが流石にガジモンたちも自分たちが誤解しているということを理解し、拘束を解いた。組織について知らない時点でわかると思うのだが。

「いや、すまない。最近ウィルス種同士以外のはどうも警戒心が強くなっちゃまって……」

リーダーのガジモンが頭を下げながら謝罪する。

「俺たちの誤解が解けたのならそれでいい。」

「ところでウィルスバスターズってなんなんだ？」

ブイモンが質問する。

「最近、見境もなくウィルス種の村やデジモンを容赦なく襲うワクチン種のデジモンの集団さ。なんでもウィルス種を殲滅するって言うのがモットーらしくて良い奴、悪い奴関係なく消すそうだ。」

「でも、なんでそこまで恐れるのよ？ウィルス種にも強いデジモンはいるでしょ？あのエテモンとか。」

リリモンは不思議そうに言う。ヴリトラモンもエテモンの噂ぐらいは知っていた。何しろ自分から「キング・オブ・デジモン」と名乗っているのだから。ところがガジモンたちは恐ろしそうな顔で答える。

「それがやられちゃったんだよ、エテモンが。」

「え？あの自称『キング・オブ・デジモン』って言っていたエテモンが？」

ライラモンは驚いた顔で言う。

「リーダーのサイバードラモンって奴に跡形もなく消されたんだとき。」

「それにそのサイバードラモンって奴すごい能力を持っていてさ、なんと相手の能力を取り込めるんだとき！おかげでエテモンが使っていた『ラブ・セレナーデ』や『ダークスピリッツ』で消された村やデジモンも多いんだとか……。」

語っているガジモンたちは思わず震えていた。

「とにかくそれだけウィルス種には血も涙もないってことさ。」

「……私達をどうりで警戒する訳ね。」

ライラモンは納得したかのように頷く。そんな矢先

「た、大変だ！ウィルスバスターズだ！」

「何!?もうこの村にも来たのか!」

ガジモンたちは慌てて戦闘準備を始める。ヴリトラモンたちも外に行つて見る。

ガジモンの村 外

「おらおらどうした?ここには骨のある奴はいないのか?」

村の外にはグレイモンの集団とそのリーダーらしい左腕に銃を付けているライズグレイモンがいた。

「ウィルスは消毒だ〜!」

グレイモンはメガフレイムでガジモンたちを燃やす。

「逃げろ〜!」

ガジモンたちは慌てて逃げ出す。

「いいか!一人も生かすんじゃねえぞ!サイバーの兄貴からの命令だ。」

「了解!」

ライズグレイモンの指示でグレイモンたちは容赦なくガジモンたちを襲う。

「ひどい……」

リリモンは思わず言う。同じデジモンでここまでするとは……。

「ひどすぎるよ！ 兄貴、アイツらをやっつけよ！」

ブイモンはヴリトラモンを見ながら言おうとしたがいつの間にかヴリトラモンはいなくなっていた。

「あれ?! いない!?!」

「もうあつちにいるわよ。」

ライラモンが指を指す方では既にヴリトラモンは負傷したガジモンたちを庇ってライズグレイモンたちの前にいた。

「何者だ、貴様は?」

全身をマントで隠しているためライズグレイモンからはヴリトラモンは見えなかった。

「……なぜ、こいつらを消そうとする。」

「答えになっていないな。」

ライズグレイモンはトライデントリボルバーを構える。それでもヴリトラモンは言葉が続ける。

「こいつらは何もしていない。なのになぜこいつらを消そうとするんだ?」

「てめえ！ライズの旦那に向かって！」

「おい、待て」

「やっちまえ！」

「おおく!!」

ライズグレイモンの命令を無視してグレイモンたちはヴリトラモンに向かってメガフレイルムを一齐に発射する。ヴリトラモンのいた場所は一面にして火の海になった。

「お前らな．．．俺の許可なしに攻撃するな！アイツがワクチンだったら俺たちみんな揃ってサイバーの兄貴に消されるぞ！」

「でも、いいじゃないですかい。現にこうやって跡形もなく．．．」

部下のグレイモンたちが言い訳をしようとしたときである。

「．．．．．ニング．．．」

「え？」

火の海から声が聞こえてきた。

「バーニングサラマンダー！」

火の海から突然火炎竜が現れたと思いきや一瞬にしてライズグレイモンを除くグレイモンたちを飲み込んだ。

「「ぎゃあああああ!!!」」

グレイモンたちは跡形もなく分解されていた。ライズグレイモンは火の海の方を見る。そこにはマントが燃えてしまっているにもかかわらず炎を全身に纏っているヴリトラモンが立っており、その後ろには無傷なガジモンたちがいた。

「まさか……あの火炎を全部自分の力に還元したというのか……それにあの姿は……あの十闘士のエンシエントグレイモン……」

ライズグレイモンの全身から冷や汗が流れる。ヴリトラモンは全身炎を纏った状態でライズグレイモンにゆっくりと近づく。

「……………」

「く、来るな！来るんじゃない！」

ライズグレイモンはライジンググデストロイヤーを放つ。しかし、恐怖のあまり出力が大幅に下がり、体が震えて標準が定まらず当たらない。それにも構わず、ヴリトラモンは近づいてくる。

「あ、ああ、あああ……」

ライズグレイモンはとっておきのトライデントリボルバーを構えるがヴリトラモンは彼の前に立つとすぐにオメガソードを展開し、一瞬にしてトライデントリボルバーを切断する。ライズグレイモンはもはや震えることしかできない。

「お、俺のリボルバーが……………」

「お前の兄貴とかという奴に伝える。罪のないデジモンを消すのなら俺が相手をするってな。」

ヴリトラモンがそう言うのと恐怖のあまりにライズグレイモンは泣きながら空へと飛んで行った。

「す、すげえ……あんたスゲエよ！」

ガジモンたちは驚きながらヴリトラモンを見る。ヴリトラモンは少し照れくさそうな顔をする。

「やっぱ兄貴はスゲエな。」

「なんか以前のイチカよりも強くなっているような気がする。」

ブイモンたちはそう言いながらもヴリトラモンの方へと向かう。ヴリトラモンはガジモンたちにこの辺でスピリットらしきものを見なかったか聞く。

「それだったらこの先にある雪山に行くといいよ。あの山はデジタルワールド誕生の時に十闘士の内の一体、エンシエントメガテリウムモンが住んでいたって言われているから。」

「まさか嘘じゃないわよね〜？」

リリモンは怪しそうにガジモンたちを見る。

「助けてくれた恩人にまで嘘つくほど俺たち悪じゃないよ（汗）」

「まあいい、ありがとな。あ、それと……」

「？」

「なんか新しいマントを作ってくれないか？あれがないと落ち着かない。」

新しいマントを作るためヴリトラモンたちは数日ガジモンの村に留まるのであった。

ガジモンの村から遠く離れた砂漠にあるピラミッド

「……兄貴、ライズが戻ってきたぜ。」

半サイボーグの体であるメタルグレイモンが薄暗い部屋の中で報告する。

「……それで？」

「部下は全滅だ。あと、混乱していきまじち信用できないがエンシエントグレイモンに似たデジモンを見たとき。その後泡吹いたから治療室に運んだけど。」

「ヌッフッフッフ、ビンゴだな。」

薄暗い部屋の中で黒い翼を生やしたサイボーグ型デジモンサイバードラモンは面白そうに笑う。

「何がビンゴなんだ？」

「スピリットさ、俺以外にスピリットを集めている奴がいるのさ。」

サイバードラモンの手には獣の形をしたスピリットと人形みたいな形のスピリットを持っていた。

「そうなのかな？」

メタルグレイモンがそう言いながらもサイバードラモンは四つのスピリットを体に取りこむ。

「ぐっ……」

サイバードラモンは一瞬苦しそうになり、胸を押さえていたがすぐに平気な顔になる。

「だが、これで俺は既に光と土のスピリットを合わせて四つも体に取り込んだ。例え奴がスピリットを持っていようとも俺が消し飛ばしてくれる！」

サイバードラモンは余裕そうに言うが何が淋しい顔をしていた。

「あのさ、兄貴。もうやめないか？こんなことしてもあの人は……」

メタルグレイモンは何か言おうとしたがサイバードラモンはすぐに苛立った声で言う。

「うるせえ！余計なことを言うとお前でも容赦しねえぞ！」

「わ、分かったよ。」

メタルグレイモンはそう言うのと恐る恐る部屋を後にして行った。一人部屋に残されたサイバードラモンは自分の自画が飾ってある壁の近くに置いてある一つの写真を手に取り、見つめていた。

「……所詮は外見で世の中決まるんだよな。外見で。」

サイバードラモンはそう言うのと写真を元の場所に戻す。そして、明かりを消してベッドに入って眠りについた。夜の月に照らされた写真にはサイバードラモンと一人の天使が一緒に写っている姿があった。

「俺は認めねえ……あんなことを……」

サイバードラモンはそう言いながら眠るのであった。

勇気の炎と謎の影

雪山

「うう．．．寒い。」

リリモンはそう言いながらヴリトラモンに抱き付いて歩く。ガジモンの言っていた氷山を昇り始めた四人ではあったが思わぬ寒さに震えながら登山することになった。

「兄貴、スピリットの反応とか分かるの？」

「デジヴァイスではこの雪山から反応が出ている。間違いはないはずだ。」

そう言いながら四人は山を登り続ける。四人は吹雪で見えなかったが少し離れた所から毛むくじやらのデジモンが様子を見ていた。

サイバードラモンのアジトのピラミッド

「旦那、ただいま戻りました。」

サイバードラモンが椅子に座って食事をとっている中、クマのようなデジモングリズモンが何やら箱を持ってやって来た。

「ん？なんだお前か。俺は食事中に入ってくるのが女に近寄られるのが嫌なほど嫌っているのを知ってて入ってきたのか？」

サイバードラモンはフォークとナイフを置き、口を拭きながらグリズモンを見る。

「いやいや、旦那に見せたいものがあります．．．」

「俺に見せたいものだと？」

「今まで行方がほとんど分からなかった闇のスピリットがようやく手に入りました。」

「何!?それなら早く言え!」

サイバードラモンは早速箱をとりふたを開けてみる。しかし、中にはスピリットはなく空っぽだった。

「．．．．．てめえ．．．．今夜の夕食のおかずにしてやろうか？」

サイバードラモンはグリズモンに向かって殺気を放つ。それにも関わらずグリズモンは謝らずヘラヘラとした顔をしていた。

「そんなにヘラヘラした顔をしやがって．．．」

サイバードラモンは光のスピリットの力を使い光剣リヒト・ズイーガーを出す。

「へへへ、そんなに怒らないでくださいよ、旦那。」

「てめえ、その口に向かってこの剣ぶち込むぞ！」

サイバードラモンは頭にきてグリズモンの口をこじ開ける。ところが口をこじ開けた瞬間、飛んで来たのは無数の銃弾だった。

「ぶち込まれるのはアンタの方さー！」

サイバードラモンは反射的に後ろに下がるがすでに遅く、無数の銃弾がサイバードラゴンの体に命中した。

「な、何？！お、俺が動けないだと……完全体の俺が……」

サイバードラモンは体が動けないことに驚く。銃弾に細工がされて動けないのではない、銃弾のダメージが大きかったのだ。

「て、てめえ……グリズじゃねえな……」

「今頃気がついたのかい？」

グリズモンの体がデータ分解を起こし、そこからは黒いマスクにレザースーツの女性型デジモンが銃を持ちながらサイバードラモンに近づいてくる。その姿は一瞬、七大魔王のベルゼブモンに見えた。

「く……俺をどうするつもりだ……」

「別に殺すとかそんなつもりはないさ。ただ、必要なものを頂いて行くだけさ。」

そう言うのと彼女はサイバードラモンの体に手を突っ込み、二つの物体を取り出す。サイバードラモンが取り込んだ土のスピリットだ。

「て、てめえ……か、返しやがれ……!」

「悪いけど私のパートナーの頼みなんでね。それにそんなに取り戻したいんならまずは大事なものを取り戻しに行くんだね。アンタの一番大事なものをね。」

「だ、大事なもんだと……」

「アンタがよく知っているだろ?心配していると思うよ、アンタのこと。」

「うるせ……人のことに勝手に突っ込む……な……」

サイバードラモンはその場で気を失う。

「さて、私は騒がしくなる前に引き上げようかね。」

彼女、ベルスターモンはそう言うのと再びグリズモンに擬態し、その場を後に行っ
た。

「兄貴、本当にこの先にあるの？」

寒さに震えながらブイモンは震える。

「間違いない、近くには来ている。問題は……」

ヴリトラモンはメテオバスターを展開し背後に向かって撃つ。

「誰かが後を付けているということだ。」

ヴリトラモンは後ろを向くとそこには雪でできた身代わり人形のような物があつた。

「これって、雪で作った人形よね？」

「俺が撃つ前にすり替えといたのか。」

「ウホホホ、その通り！」

四人は慌てて後ろを振り向くがそこには誰もいない。

「上よー！」

「もう、遅い！」

ライラモンが言うのも遅く上空には二つの影があつた。

「行くどーユキダルモン！」

「よっしやー！」

二つの影の内の一つのモジャモンは相方のユキダルモンに向かって持っていた巨大な雪玉を投げる。

「絶対零度。パーンチー！」

雪玉に向かってユキダルモンがパンチを繰り出す。雪玉が勢いよくヴリトラモンたちに向かって飛んでくる。

「避ける、チビ！」

ヴリトラモンはブイモンを突き飛ばし、咄嗟にリリモンたちを庇う。

「うおおお！」

雪玉がぶつかった後、ヴリトラモンたちが立っていた場所には氷柱ができてリリモン、ライラモン含めてヴリトラモンは氷漬けになってしまった。

（う、動けん……）

「兄貴ー！」

ブイモンは何とか氷を砕こうとパンチをする。

「無駄無駄！その氷はオレっちのパンチで急速に冷やしたからこの山なら余程の攻撃じゃなきゃ砕けないぜ！」

「残りの一人も行くど〜！」

モジャモンとユキダルモンは同じ攻撃をブイモンに向かって撃つ。

「ま、不味い！」

ブイモンは大慌てで走るが雪玉の速度の方が早く避けるのが精一杯だった。

「ドンドンやるどー！」

「しまった！」

必死に走って気がつかなかったのかブイモンは崖に追い込まれてしまった。

「又フフフ、もう逃げられねえど。」

「うう、ブンブンパンチ！」

ブイモンはモジャモンたちに向かって突撃していく。

「甘い甘い、骨骨ブーメラン！」

「うわあー！」

ブーメランが命中し、ブイモンは危うく崖から完全に落ちるところだった。

「だ、だめだ……俺じゃ何にもできねえ……」

ブイモンは自分の力のなさに失望した。そのとき

(チ……ビ……)

「!?その声はもしかして兄貴!?!」

ブイモンは氷漬けにされているはずのヴリトラモンの声が聞こえて驚く。

(お前は今まで何のために俺についてきたんだ?)

「それは、兄貴みたいに強くなりたから……」

(だったら、その意地を見せてみる。)

「でも、俺、進化もまだまともにやったこともないのでできるわけないじゃんか。」

（勇気を出せ、あのキメラモンの戦いで俺を助けに来た時のように・・・）

「キメラモンの戦い・・・あつ。」

ブイモンは思い出したのか急いで崖からよじ登る。上ではユキダルモンとモジヤモンが待ち構えていた。

「もう覚悟はええか？」

「オメエもアイツら同様氷漬けにしてやるぜ。」

「思い出したんだ。」

「？」

「俺はあの時兄貴とこれから一緒に旅をしたいと思ったから勇気が出せた。だからあの時は兄貴もキメラモンに勝てたし、俺も少しだけ成長できたんだ。これから先も兄貴と一緒に強くなりたい。だから・・・」

ブイモンは拳に力を込めて二人に向かって突っ込む。

「俺が今度は兄貴たちを助けるんだああああ！」

「ムフフフ、いくらやっても・・・え？」

そのとき二人の背後にある氷漬けのヴリトラモンのデジヴァイスが光り、勇気のデジメンタルがブイモンに向かって飛んで行った。

「ブイモン、アーマー進化！」

デジメンタルとブイモンが接触した瞬間、そこら一帯は眩しい光に包まれた。

「なんだ？なんだ!?!この光は!?!」

「眩しい……ん?!」

二人の視界が回復したとき目の前にいたのはブイモンではなく赤い装甲に身を包んだ竜人型デジモンだった。

「燃え上がる勇氣、フレイドラモン！」

フレイドラモンはそう言うともジヤモンたちに向かって突進してくる。

「なっ、なんが起こったか知らねえけど、オラたちが負けるはずがねえ！」

「こうなったら、特大雪玉で行くぞ！」

「おう！」

モジヤモンは急いで今まで以上の巨大な雪玉を作り、ユキダルモンに向かって投げ
る。

「本日最大の絶対零度パーンチ！」

ユキダルモンが雪玉に拳を打ち込みフレイドラモンに向かって飛ばす。雪玉はフレ
イドラモンに直撃し巨大な氷柱を作る。

「よっしやー！大成功！」

「流石に奴でもこれは溶けねえ……あり？」

二人は目を丸くして見る。氷が勢いよく溶けているのだ。

「ま、まずいぞ！ユキダルモン、もう一発やんねえぞ！」

「わ、分かった！」

モジャモンとユキダルモンは慌てて準備を始めるがフレイドラモンは既に氷を完全に砕いて二人に迫る。

「え〜！ちよ、ちよつとタンマ！」

「タ〜イム！ストツプ！」

「ファイアロケット！」

「わあ〜!!」

二人の命乞いも空しくフレイドラモンは二人を吹き飛ばしていった。

「やった、俺も進化できたんだ！」

フレイドラモンは水漬けになったヴリトラモンたちの方に戻る。

「兄貴、姉ちゃん。今すぐ助けるからな。」

フレイドラモンは腕に力を込めて炎を纏う。

「ナツクルファイア！」

フレイドラモンが拳を打ちつけた瞬間、氷は勢いよく吹き飛び三人は解放される。

「うゝ寒かった！」

リリモンは肩を震わせながら言う。

「あれ？チビちゃん、その姿は？」

ライラモンは驚いた顔でフレイドラモンを見る。

「進化できたんだ！兄貴のおかげで！」

「俺のおかげだと？」

ヴリトラモンは不思議そうに言う。その直後にフレイドラモンはブイモンに戻った。

「あれ？元に戻っちゃった。」

ブイモンは残念そうに言う。

「最初の頃は誰でも長く頼めないようなものよ。」

残念そうな顔をしているブイモンをライラモンが慰める。しかし、ヴリトラモンは目を鋭くしたままだった。

「だが危機はまだ去っていないようだな。」

ヴリトラモンが後ろを向くとそこには巨大な影があった。影の後ろには先ほど吹き飛ばされたモジャモンとユキダルモンもいる。

「さっきはよくもオラたちを！」

「今度は親分がオレたちたちの代わりにオメエたちを倒すからな！」

ヴリトラモンはオメガソードを展開する。

「第二ラウンドということか。」

？

「束様、ベルスターモンが戻ってきます。」

「ベルちゃんか？すぐにゲートを開いて、クーちゃん。」

「了解しました。」

束と共に行動している少女、クロエ・クロニクルはパネルを操作しゲートを開く。ゲートからはバイクに乗ったベルスターモンが現れる。

「ただいま、束。」

「お帰り、ベルちゃん。それでうまく回収できた？」

「勿論よ、ほら。」

ベルスターモンは土のスピリットを束に渡す。

「私が現場に行つたときはもう回収されていたけど持ち主がわかつたからすぐに回収できたよ。」

「ほうほう、闇とは違つてこれはおぞましいオーラがないから落ち着くね。それでいっくんは元気だった？」

ベルスターモンは机に座ると数枚の写真を出す。そこにはヴリトラモンの姿が写っていた。

「一緒にいるかわいい娘ちゃんとか坊やには『イチカ』って呼ばれているけど、本人は『ヴリトラモン』って名乗っているわ。」

「ヴリトラモンね……」

束はそう言うときスピリットを柵の上に置き、またパソコンをいじり始める。その姿を見ながらベルスターモンは近くにあったコーヒーを飲む。

「相変わらずだね、束。それにしてもあの坊やが本当にこつち戻つてくると思うのかい？」

「戻つてくるよ、こつちにスピリットがあるんだからね。それにいつくんだけだどできない……こともあるし。」

「それと妹の箒ちゃんは元気？あれ送つてから随分明るくなつたけど？」

「私の妹だからね。今頃、コロちゃんと仲良くしているよ。」

そんなことを言いながら束は何かの設計をしていた。そこには「炎龍」と記載されていた。

雪の日の記憶

雪山

「本当に申し訳ありまへんでした！」

ヴリトラモンたちの目の前で巨大な体をした獣人型デジモンヴァイクモンが頭を下げて謝罪していた。

「いや・・・なんていうか・・・」

「この頃ウィルスバスターズって連中がこの地に伝わるスピリットを探していると耳にしていたもんでこの者たちに警護させとったんですが・・・こら、おめえたちも謝らんかい！」

ヴァイクモンに叩かれ、ユキダルモンとモジヤモンは申し訳なさそうに土下座する。

「戦いになると思ったらこんなことになるとはな。」

ヴリトラモンは少し困った顔でヴァイクモンを見る。第二ラウンドになると思いきやいきなりヴァイクモンが二人を叩いて「馬鹿もん！」と怒鳴ったからどうしたのかと思っていたが。

「ところでヴァイクモンさんはどうして私たちがウィルスバスターズじゃないと分かっ

「たんですか?」

ライラモンは巨体のヴァイクモンに少しビビりながらも聞く。

「僕はもう長い間生きておるんで悪人かどうかは目を見ればわかるもんですわ。それにあんたらはいい目をしてはる。」

「そ、そうですか。」

「ところであんたらは目的はなんなんや?」

「スピリットを探しているのよ。」

「スピリット……」

ヴァイクモンはヴリトラモンを見つめる。

「なんか悪いことでもあるのか?」

「……いや、アンタが伝説の十闘士に何となく似ているもんでな……まあ、いいでっしゃろ。ついてきなはれ。」

ヴァイクモンはそう言うのとヴリトラモンたちを案内していった。

サイバードラモンのピラミッド

「兄貴、大丈夫か？」

メタルグレイモンは心配そうにサイバードラモンの体に包帯を巻く。

「痛くて……もう少し丁寧に巻け。」

サイバードラモンは包帯を巻いてもらった後不機嫌そうに外から空を眺める。

（あの女め、俺のことをコケにしやがって。だから女は嫌いなんだ。それに大事なものだ？ アイツが俺のことを心配するわけねえだろ！俺を勝手に切り捨てたくせに！くそ……）

サイバードラモンは傷を押さえながら考えていた。そのとき

「兄貴、いいニュースが入ったぜ。」

部屋にライズグレイモンが入ってくる。ヴリトラモンに壊されたりボルバーはすでに修復され、傷も完治していた。

「ああ?! いいニュースだど？」

サイバードラモンは不機嫌そうに言う。

「偵察に出ていたエアドラモンからの連絡で雷のスピリットの居場所がわかったんだ

！」

「……嘘じゃないだろうな？」

「ああ、昆虫型デジモンの住む森で簡単には奪えないが丁度俺たちの噂で二つの勢力の対立しているそうさ。それを利用すれば……」

「同士打ちということか……なら丁度いいな。」

サイバードラモンは思わず笑う。

「今回こそはうまくやるから俺をリーダーにしてくれよ！この間の借りは返すからさ。」
ライズグレイモンは自己PRをして今度は失敗しないと言い張るがサイバードラモンは意外な言葉を発した。

「いや、今回は俺も行く。」

「え？兄貴が!?別に俺だけでも……」

「それ以上は言うな。今すぐく機嫌が悪いんだ。それにまた奴が来ないとも限らないしな。」

サイバードラモンはそう言うとき空を見上げる。

「この世で必要なのは力だ。どんな奴でも俺はそれを超えて見せる。」

雪山のある洞窟

「こんな山にこんな洞窟があるとはな……」

ヴリトラモンは意外そうに洞窟を見渡す。

「ここは聖地、かつて十闘士であったエンシエントメガテリウムモン様が眠っておられる地と言われている。」

ヴァイクモンはそう言いながら進んでいく。

「そう言えばこの雪山、アンタたちだけじゃないようだけどどうしてなの？」

リリモンは気になったので聞いてみた。考えて見ればこの山に来て会ったのはモジャモンとユキダルモン、そしてヴァイクモンの三人だけだった。

「この山は神聖なる山、それだけにこの山に代々伝わる氷のスピリットを守護するため農らがおるようなもんですわ。」

「そ、そうなの……（なんかまずいことを聞いちゃったのかも……）」

「しかし、いいのか？俺たちにそんな大事なもんを渡してしまつて。」

ヴリトラモンが聞くとヴァイクモンは悟った顔で答える。

「スピリットの守護をしていたのはいづれ現れる十闘士の遺志を継ぐ者に託すため。その日が今日だと確信したんですわ。」

「俺が十闘士の生まれ変わりとしても言いたいのか？」

「それはよおうわかりません。でも、そんな気がするんや。」

そうこう話しているうちに一行は洞窟の最深部にたどり着いた。目の前では氷の結晶の中に二つのスピリットがあるのが確認できる。

「氷の中なのね。」

ライラモンはよく見て言う。

「もし、あなたが十闘士の遺志を継ぐ者ならこの氷からスピリットを取り出せるはずや。」

「そうか、では取ってみるとするか。」

ヴリトラモンは結晶に手を触れる。すると氷の中のスピリットが輝き始める。

(・・・冷たいはずの氷が温かく感じる・・・どこか懐かしいような・・・そうだ・・・あの時と同じ感触だ・・・)

ヴリトラモン 感覚十数年前 (実際は一夏六歳の頃)

「千冬姉待つてー!」

寒い雪が降る中、まだ人間だった頃の一夏が姉である千冬と駆けつこをしていた。

「ほら、一夏もうすぐで家だぞ！」

千冬はからかいながらも一夏にペースを合わせて走っている。家の近くに着いた頃には既に一夏は息が荒くなっていた。

「はあはあ……千冬姉速すぎるよ……。」

「はははは、こんなことぐらいでへばってんじゃまだまだ立派な男にはなれないぞ一夏。」

「大人か……俺も千冬姉ぐらいになったら千冬姉みたいなことができるようになるのかな？」

「なれるさ。お前は私の弟なんだから。」

「そうなったら俺……は、はくしよっん！」

一夏は思わずくしやみをした。

「大丈夫か？少し外に出過ぎたか……。」

千冬は自分の身に付けていたマフラーを外して一夏の首に巻く。千冬が身に付けていたおかげかマフラーが温かく感じた。

「これで少しは寒くはなくなったか？」

「うん、ありがとう千冬姉。」

「よし、じゃあ家までこのまま走っていくぞ！」

そう言うのと千冬は走っていく。

「もう、待ってよー！」

一夏はその後を追いかけて行った……。

「そうだったな……千冬姉はいつも俺にそう言ってくれた。俺が自分の弟だつて……いつか自分みたいになれるって……」

ヴリトラモンはそう言いながら目の前の出来事を見る。氷の結晶は消滅し、自分の手には二つの氷のスピリットがあつた。

「やった！」

「流石兄貴！」

リリモンとチビモンは思わず跳ねる。

「うんうん、ワシの目に狂いはなかった……」

ヴァイクモンは思わず涙を浮かべる。

雪山の洞窟の出口

一行が洞窟から出た頃、さつきまで吹雪いていた雪は止み、いつの間にか夜になった空は星で満ち溢れていた。

「キャ〜!!ロマンチック〜!」

リリモンは思わず興奮し、隣にいるヴリトラモンの方を向く。しかし、ヴリトラモンは何か寂しそうな顔をしていた。

「イチカ?」

リリモンは不思議そうに見る。

「千冬姉……アンタは今の俺を見ても自分の弟だと言ってくれるのか?ヴリトラモンとしてではなく人間織斑一夏として……」

夜空を見上げながらヴリトラモンは思わず言うがそれに応えてくれる者は誰もいない。

とある森

朝日で輝く森の奥の泉のほとりで白く美しい八枚の羽を持った天使が水浴びを終えていたところだった。

「これで二つ。なんとかして彼を止めないと……」

彼女はそう言いながら体を拭いた後に透き通るような青い瞳を持つ美しい顔にマスクを被り、妖精と鳥人のような形をしたスピリットと一枚の写真をしまいその場を後にしていった。

「彼の誤解をここまでにしたのは私なんだから……」

彼女はそう言いながら空の彼方へと飛んで行く。

虫たちの戦争

昆虫型デジモンの住む森

雪山を後にしたヴリトラモンたちはヴァイクモンのすすめでこの昆虫型デジモンが多く生息する森を訪れた。この森はデジタルワールド誕生から長く栄えており種に閑係なく多くの昆虫型デジモンが生息している。

しかし、この森では異変が起こっていた。

ウイルスバスターズを迎え撃つため戦力の増強を求める強行派のリーダー、グランクワガールモン率いるウイルス種の昆虫型デジモンたちと話し合いでどうにか解決しようという穏健派のヘラクルカブテリモン率いるワクチン・データ種デジモンたちにより行われている昆虫型同士の戦いである。

「全部隊攻撃開始！何としてもカブテリの馬鹿からスピリットを奪うのだ！」

リーダーのグランクワガールモンはそう言いながら大量のクワガールモンを率いて攻撃する。

「何としてもスピリットを守るんだ！」

ヘラクルカブテリモンも仲間の昆虫型デジモンを率いて応戦をする。両者の戦力は

五分五分、その中でリーダー同士の戦いを繰り広げる。

「今日と言う今日はスピリットを引き渡してもらうぞ、カプテリモン！」

「クワガーモン、お前もいい加減にこの森の他のデジモンに迷惑をかけるな！」

二匹の取っ組み合いが始まる。

「司令官を助けるんだ！」

副官のアトラーカーカプテリモン（赤）がそう言いながら援護に向かわせる。

「貴様の相手は俺だ！」

それを阻むオオクワモン。

「邪魔だ、ボーンバスターー！」

アトラーカーカプテリモンは突進してくる。

「なんの、シザーアームズΩ！」

両者の攻撃も互角だった。

結局この日も決着が着かず両者それぞれの陣営へと戻っていった。そんな中に訪れたヴリトラモン一行であるが彼らを出迎えてくれたのはヘラクルクアプテリモンの穏健派だった。彼らはスピリットの回収についての話を聞いてくれた。

「・・・なるほど、つまりイグドラシルの命でこのスピリットを回収を目的にこの地へと。」

ヘラクルカブテリモンはそう言うのと拠点の奥にしまつてあるスピリットを取りに行く。その後姿は何かさみしげに感じた。

「・・・彼はどうしてあんなに悲しそうなんだ？」

ヴリトラモンが聞くとアトラカブテリモン（青）が答える。

「司令官とグランクワガーモンは昔からの親友同士なんだ。二人ともこの地で生涯を終えたエンシエントビートモン様を尊敬し、この森を守ろうと誓い合つたんだ。それ故に今回のウィルスバスターズへの対応で争うようになつちまつたんだ。」

「二人とも同じ人物を尊敬してこの森を守ろうとして対立しちやつたということね。」

ライラモンは同情するように言う。そこへヘラクルカブテリモンが箱を持つて戻つてくる。

「これが私達の陣営にある雷のヒューマンスピリットだ。」

ヘラクルカブテリモンは、箱から丁寧なスピリットを取り出す。するとヴリトラモンの持つデジヴァイスと共振するかのように光り、デジヴァイスへと吸収されていった。

「残りのビーストスピリットはグランクワガーモンが持つている。しかし、問題は彼が聞き入れてくれるかどうかだ。」

「そんなに物騒な奴なのか？」

バイモンは気になり聞いてみる。

「彼はこの森以外の者たちには警戒心が強いんだ。それ故に聞き入れてくれると思えない。」

「じゃあどうするのよ!？」

リリモンは聞いてくる。

「彼には弟同然に信用しているステイングモンがいる。彼は温厚で話を聞いてくれるし、彼を通して会談に持ち込めばグランクワガーモンと言えど聞いてくれるはずだ。」

「でも、誰が伝えるの? 向こうへはウィルス種しか入れないんでしょ?！」

「ウィルスは敵ばかりじゃない。この陣営でも中立の者たちもいる。アトララー(赤)、コカプテリモンを呼んできてくれ。彼なら警戒されずに伝えられるはずだ。」

「分かりました。」

そう言うアトララーカプテリモン(赤)はコカプテリモンを呼びに行く。そのとき、一匹のヤンマモンが戻ってきた。

「司令官、大変です! グランクワガーモンの陣営にウィルスバスターズが来ています!」

「何? もう奴らがこの森へ?」

ヘラクルカプテリモンは不安な表情を浮かべ夜空を見つめる。

グランクワガーモン陣営

「何!? ウイルスバスターズの連中が来ただど?」

グランクワガーモンは驚いた顔で言う。

「はい、要求の内容ではスピリットを差し出せばこの森には一切手を出さないと断っています。」

部下のフライモンは相手の要求を丁寧に述べる。

「グランクワガーモン様、サイバードラモンは私達ウイルス種には血も涙もない連中です。そんな連中の要求を呑むわけにはいきません。やはりここはヘラクルカブテリモン様ともう一度ともに……」

近くにいたグランクワガーモンを兄のように慕うステイングモンはウイルスバスターズの要求を呑む前にヘラクルカブテリモンと和解するべきだと言う。

「何を言うかステイングモン、グランクワガーモン様は究極体、昆虫型デジモンの頂点に立つ者は二人もいません。それに相手は所詮完全体と成熟期の集まり、我々が本気を出せばいつでも潰すことができる! グランクワガーモン様、ここは相手の策に乗った振りをして相手の裏をかくのも一手だと思えます。」

副官のオオクワモンは敢えて策に乗った振りをすると案を挙げる。

「うむ、確かに頂点に立つのは一人でいい。しかし、問題は奴がどう出るかだ。フライモン、貴様はサイバードラモンにスピリットは引き渡す。但し、それはヘラクルクアブテリモンと決着が着いた後だと伝えとけ。」

「グランクワガーモン様！」

「ステイングモン、もう奴と俺はもう戻れない所まで来ているのだ。奴の考えではこの森のデジモンは全滅する。」

グランクワガーモンは険しそうに言う。

グランクワガーモンの陣営外

ステイングモンは頭を抱えながら木の上に座っていた。

「どうしてだ．．．ウィルスバスターズなんて信用してはいけないのに．．．。オオクワモンめ、何か企んでいるようにしか思えない。」

ステイングモンは考え事をする。

オオクワモンはグランクワガーモンにクワガーモンの時からついていた。しかし、自己中心の性格のためいつも隙があればグランクワガーモンを倒してリーダーになろうという野心を持っていた。しかし、実力で敵うはずがなくいつも返り討ちにされ、あきらめたと考えていた。だが、ウイルスバスターズがウイルス種である自分たちに手を出さないと考えづらい。

「何かあるはずだ。オオクワモンの考え方からして、まだ実力の分らないサイバードラモンと手を組むなどとても怪しい．．．何かきつと．．．」

「ステイングモンさん。」

「!?!」

後ろから声が聞こえたためステイングモンは腕からスパイクを展開し構える。

「ま、待つてくださいい！僕です〜！」

林の中から小さい角を生やした昆虫型デジモンが出てくる。

「君はコカブテリモンじゃないか！」

ステイングモンはすぐにスパイクを戻す。

「司令官の命令で会いに来たんです。」

「ヘラクルカブテリモン様から?」

「僕たちの陣営にイグドラシルの指令でスピリットを回収している人たちが来たんで

す。でも、もう一つはグランクワガーモン様が持つているからなんとか話し合いをするためにステイングモンさんに何とか言ってもらえるように頼みに来たんです。」

「そうだったのか……。でも今になってはどうにもならないんだ。」

ステイングモンは残念そうに今日ウィルスバスターズとの交渉が決まったことを伝える。コカプテリモンはかなり驚いた顔をしていたがすぐに落ち着いた。

「すぐにヘラクルカプテリモン様にこのことを伝えてくれ。ウィルスバスターズが動き出したらこの森は全滅してしまうのかもしれない。」

「わ、分かったです！すぐに司令官に……」

「おっと、そうはいかんぞヘラクルのとこのガキが。」

コカプテリモンは後ろを振り向くとそこにはオオクワモンが部下のクワガーモンで包囲をしていた。

「まさか、ステイングモンがヘラクルの陣営と内通していたとはな。これは万死に値することだぞぞ？」

「オオクワモン、貴様何を企んでいる！グランクワガーモン様にあんなことを言つて。」

オオクワモンは笑いながら答える。

「おめでたい奴だな、俺があんな奴の所にいつまでもいると思つていいのか？俺はこれを機に昆虫型デジモンの頂点に立つのさ。」

「貴様は……この森を……エンシエントビートモン様のこの森がどうなつてもいいとでもいうのか！」

「なあに、森なら他にもあるし、そこを新たな拠点にすればいい。だがリーダーは二人もいない。貴様には消えてもらうぞ、俺の企みを聞いちゃったんだからな。」

そう言うとおオクワモンはクワガーモンたちと一齐に二人に襲い掛かる。ステイングモンは両腕のスパイクを展開し応戦する。

「コカブテリモン、ここは私に任せて行くんだ！このことを早くヘラクルカブテリモン様に！」

「わ、分かったです！」

コカブテリモンは追わてて逃げていく。他のクワガーモンが追跡しようとするがステイングモンがそれを阻む。

「スパイクングファイニッシュ！」

ステイングモンは両腕のスパイクをクワガーモンに突き刺し、一気に葬る。

「馬鹿め、その技は一時的に動きが取れなくなることを忘れたか！シザーアームズΩ！」

「なっ！」

オオクワモンの鋏によりステイングモンは上下半身真つ二つになり、谷底へ落下していく。

「あの怪我ならもう助からねえな。グランクワガーモンには正当防衛とさえ問題ないだろう、裏切ったというのは事実だしな。」

オオクワモンは笑みを浮かべその場を後にしていく。その光景を黒いマスクとレザースーツを身に着けたライダーが静かに見ていた。

戦闘開始

ヘラクルカブテリモンの陣営

コカブテリモンは全力で戻ってきた後、ヘラクルカブテリモンに事実を伝えた。

「何!? それでステイングモンは戦死したのか!？」

ヘラクルカブテリモンは驚くようにコカブテリモンを見る。

「僕を庇って……」

コカブテリモンは申し訳なさそうな顔をしてしよぼくれる。

「司令官、奴らは確実に攻めてきます。我々も早く戦闘の準備を。」

アトラーカブテリモン（赤）はそう言いながらヘラクルカブテリモンの許可を求める。

「止むを得ないか。アトラー、全員に第一戦闘配備に切り替えさせ、奴らの攻撃に備えろ

と伝えてくれ。」

「了解しました。」

アトラーカブテリモン（赤）は急いでその場を後にしていく。

「さあ、あなた方も早くここから離れてください。」

残ったアトラーカブテリモン（青）がヴリトラモンたちに自分たちの陣営から離れる

ように言う。

「どうしても退かなければいけないのか？」

「おそらくウィルスバスターズは我々の陣営のヒューマンスピリットを奪うのならばおそらく殲滅もあり得るでしょう。ですから今の内に遠くへ……」

「だが断る。」

「え？」

ヴリトラモンの返答にアトラーカーブテリモン（青）は思わず驚く。

「元々、奴らを一度ぶちのめしたいと思っていたところだしな。この際ボスの顔も拝ませてもらおう。」

「しかし、サイバードラモンの強さは未知数で……」

「大丈夫だよ、兄貴がこういう風に言うときは負けることはないから。」

アトラーカーブテリモン（青）が説得しようとしたがブイモンの一言で片づけられてしまった。

ウィルスバスターズ陣営

「兄貴、予想通りオオクワモンは食いついてきたぜ。おかげで事がうまく運びそうだ。」

ライズグレイモンはニヤけながら報告する。

「そうかそうか、なら簡単に……」

「も、申し上げます！」

栗みたいなデジモンイガモンが慌ただしく二人の目の前にやってくる。

「イガモンか。何かあったか？」

「先ほどヘラクルカブテリモンの陣営を調査しに行っていたのですがその陣営の中にライズグレイモン様の報告にあった例のマントを付けた奴がいました。」

「何!? 奴もこの森に來ているのか!？」

ライズグレイモンは動揺する。

「はっ! 外見も報告のものと一致しています。」

「ほう、思っていたよりも手間が省けたな。向こうからスピリットを持って來たんだからな。」

「しかし、どうやらヒューマンスピリットの方は奴の手に……」

「だったら、奪えばいい。向うはまだ全部のスピリットの力を使いこなせるわけじゃないからな（俺もそうだけど）。イガモン。」

「はっ！」

「お前に第二の任務を与える。グランクワガーマンの陣営に潜み、オオクワモンをマークしろ。後のことはライズにやらせるからお前は奴がスピリットを持ち運ぼうとしたときにただスピリットを奪い取れ、いいな？」

「御意！」

そう言うといガモンは煙の如くその場から消えた。

「兄貴、戦闘の指揮は俺に任せてくれ！今度こそアイツを打ちとつてみせる！」

ライズグレイモンはせめて戦闘指揮を執りたいと懇願する。しかし、サイバードラモンは首を横に振る。

「奴もスピリットを持つ者、おそらくお前だと相手にならん。今回は俺がいく。お前はイガモンとスピリットを俺に送るのが今回の仕事だ。」

「そんな〜！」

ライズグレイモンはしょんぼりしながら落ち込む。

ステイングモン side

「う、うう……」

ステイングモンは僅かながら意識を取り戻す。どうやらくたばり損なったようだ。今まで気絶していたせいかわ腹部の方から徐々に痛みを感じてくる。

「私は……死ぬのか……」

ステイングモンは苦い顔をしながら上を見上げる。あまりにも皮肉なものだ。コカブテリモンは無事にヘラクルカブテリモンの所へ戻れたのだろうか？ただそれだけが頼りだ。

「意識が朦朧としてきた……私もここまでか……」

「やけにあきらめがいいわね〜。」

「?」

ステイングモンは半分しかない自分の体を無理やり起こし、うつ伏せの状態になる。そこには漆黒のレザーーツを身に纏ったベルスターモンがいた。

「あなたは?」

「あら、そう言えば自己紹介がまだだったわね? 私はベルスターモン、まあ通りすがりのお姉さんと言ったところかしら。」

ベルスターモンはそう言いながらステイングモンに近づく。

「そのあなたが死にかけの私に何の御用で……」

「いや、あなたにその気があるのなら助けようと思つてね。」

ベルスターモンは何やら光る球体を取り出す。

「それは？」

「ジヨグレス進化用プログラム、このプログラムに他のデジモンのデータを登録してデジモンに組み込むことによつて順来の進化とは比べ物にならないぐらいの力を発揮することができる代物。例え、死にかけのあなたでも。」

「！」

「どうする？このまま、終わりを受け入れるか私の条件を聞いて新しい力を手に入れるか？どっちにする？」

ベルスターモンは笑みを浮かべながらステイングモンを誘惑させる。しかし、ステイングモンは真剣な眼差しで見る。

「……是非やらせてください。僅かでも可能性があるのなら私は賭けてみます。」

「はつきり言うわね。でも、成功するかどうかは五分五分。どうなるかはわからないわよ。」

「構いません、どうぞよろしくお願いします。」

そう言い終わるとベルスターモンはステイングモンにプログラムを組み込む。

「取り敢えず、同じ古代種のエクスピイモンをデータを入れたわ。結果がどうなるか楽しみね。」

プログラムはすぐにステイングモンの体に取りこまれ異変が起こる。

「ぐ、ぐわああああ!!!」

ステイングモンの体は徐々に変化を始めた。斬り落とされた下半身は再生し、体のあちこちに亀裂が走る。

「ぐおおおおお!!!」

ステイングモンはもがき苦しみながらもなんとか意識を保とうとする。体にも変化が続き、羽が翼に生え変わり、尾が生えてくる。

「うおおおおあああ!!!」

ステイングモンの苦痛はその後数時間続いた。

ヘラクルカプテリモンの陣営

翌朝、ヘラクルカプテリモンの命令で陣営にいるデジモンたちは全員戦闘準備万端の

状態だった。ヴリトラモンもブイモンたちと共に軽い食事を摂り戦闘準備をしていた。

「いよいよ、例の親玉との対面か。」

「うう、私うまく戦える自信がない（汗）。」

リリモンはフラウカノンを持ちながら不安な顔で言う。

「リリモン、私だつて戦いなんてやったことがないんだから頑張るの。だから、一緒に頑張らましょ。」

「大丈夫だつて！俺がまたアーマー進化して姉ちゃんたちを守るから！」

ブイモンは自信満々に言う。

「でも……守ってくれるならイチカに守ってほしいな……（ポツ）。」

顔を少し赤くするリリモンの態度にブイモンたちは少し呆れる。

「……どうやら来たみたいだな。」

ヴリトラモンは拠点の近くにある巨木の上を見る。そこにはグランクワガーモン率いるウイルス種の昆虫型デジモンの集団、そして、ウイルスバスターズのデジモン軍団。そしてその中心には黒いボディを光らせるサイバードラモンが座っていた。

（……あれがサイバードラモンか……）

（あれが十闘士の生まれ変わりかもしれないデジモンか……）

（……できるな。）

二人が思考を張り巡らせている中、ヘラクルカブテリモンとグランクワガーモンは睨み合っていた。

「これが最後の決戦だ、カブテリモン。」

「どうやら、もう後戻りできないようだな。」

「そんなもんだ。」

「どちらかが残りどちらかが消えるか。」

「当然消えるのはお前だ。」

「そうかな、勝負はまだ始まってもないんだぞクワガーモン。」

両軍の沈黙が続く。

(・・・早くやってくんないかな・・・)

何気に思うサイバードラモン。しかし、戦いというものはすぐに起こる。

「全軍、攻撃開始!!」

遂に戦いの火蓋が落とされた。

ヴリトラモン対サイバードラモン

昆虫型デジモンたちの森

「全員後に続け！」

「おおー！」

グランクワガーモンの指示で多くの昆虫型デジモンが突撃する。

「怯むな、応戦しろ！」

「はい！」

ヘラクルクアプテリモンの部隊も掛け声で応戦する。

「クワガーモン共め、今日こそ細切れにしてやるぜ！」

「今日こそ、オオクワモンの頭をサッカーボールしてやろうぜ！」

血の気が多いワクチン、データ種の昆虫型デジモンたちはそんなことを言いながら応戦する。そんな中サイバードラモン率いるウイルスバスターズは長距離射撃をするだけで突撃しようとしていない。

「おい、ウイルスバスターズはなぜ突撃しない？」

グランクワガーモンは様子を見ながら言う。

「わかりません、連絡要員のフライモンを行かせてたのですが返事すらありません。」
隣にいるキャノンビーモンは砲撃をしながら報告する。

「サイバードラモンめ、我々が同士討ちするのを待つつもりか？それにオクワモンはどうした？今日に限ってどこにも見当たらんぞ！」

「それが本日我らがこちらに向かつていた途中忘れ物をしたと一回我が陣営に引き上げました。」

「ええい！こんな時に！」

グランクワガーモンは怒りながらも攻めてくる敵を迎え撃つ。

グランクワガーモンの拠点

グランクワガーモンの拠点は近くに来ていたウイルスバスターズが移動したこともあり総力戦で全員出撃しても抜けの殻……。のはずだったが何故かのこの場にオクワモンと少数の部下たちが戻ってきていた。

「旦那、本当にこんなことしていいんですかい？」

一体のクワガーモンが不安そうに言う。

「なあに、グランクワガーモンはヘラクルカプテリモンとの戦いでほとんどの戦力を失うはずだ。そして、ウィルスバスターズが両方に止めを刺す。だが今ならスピリットを持って逃げる時間はある。」

オオクワモンの目的はスピリットを持って逃走することだった。スピリットを持たなくとも逃げることは可能なのだがサイバードラモンのことだ。すぐに追っ手をよこすに違いない。それならスピリットを渡さないほうがマシだと考えたうえで持つて逃げることにしたのだ。

「ここだ、ここにスピリットが保管されている。」

オオクワモンは入り口のドアを壊すとそこにはカプトムシを模倣した戦車のようなスピリットが保管されていた。

「これだ、これさえ手に入れば後はもう逃げるだけだ。」

オオクワモンはスピリットに触れようとする。しかし、取ろうとした瞬間スピリットは消えてしまった。

「何?! 一体どこへ!?!」

「苦勞だったな。」

オオクワモンは慌てて後ろを振り向く。そこにはトライデントリボルバーを構えた

ライズグレイモンとスピリットを取ったイガモンがいた。

「き、貴様らウィルスバスターズの！」

「これでお前らは用済みだ。トライデントリボルバー！」

ライズグレイモンの一撃でオオクワモンは逃げる余裕もなく消滅する。

「さて、これであとは兄貴にこれを届けてあの憎き野郎を倒してくれることを祈るだけだ。イガモン、頼んだぜ。」

「御意！」

イガモンはすぐに姿を消す。

「さてと俺はこの拠点を破壊し尽くすとするか。」

ライズグレイモンは拠点のあちこちにトライデントリボルバーを撃ち込み拠点を破壊していく。

ヘラクルカブテリモンの陣営前

ヘラクルカブテリモンとグランクワガーモンの軍団が激戦をしている中、ヴリトラモンたちは単体でサイバードラモンの陣営に乗り込んでいった。サイバードラモンの軍

団は当然応戦したがほとんどバーニングサラマンダーで吹き飛ばされてしまった。おかげで残った部下たちは震えて動けなくなった。

「まさか、俺の軍団をお前だけで動けなくなるとは思わなかったぞ（汗）」。

サイバードラモンはヴリトラモンの予想以上の力に少し驚いた。

「お前は少しはマシなんだろうな？」

ヴリトラモンは鋭い眼差しでサイバードラモンを見る。

「俺がこんな腰抜けの奴らと同じだと思っっているのか？」

サイバードラモンは座っていた椅子から起き上がる。そして、ヴリトラモンも構えを取り、双方距離を保ちながら臨戦態勢になる。

「行くぞ。」

「来るなら来てみな。」

二人の格闘戦が開始された。お互い攻撃を命中寸前に紙一重に避けて応戦を繰り返すし、両者とも互角の勝負を繰り広げた。

「なるほどな、ライズが負けた理由が何となくわかった。スピリットの力を自由に引き出している。」

サイバードラモンは納得したような顔で言う。

「だからどうした？ まだ力を隠し持っているんだろ？」

「よく分かったな。スピリットは力を上げるだけじゃない、その能力を使うことができない。こういう風にな。」

サイバードラモンがそう言うのと構えを取り体の形状を変える。足のかかどがタイヤに変化し、翼がウイングブレードに変化した。

「変わった?」

ヴリトラモンはサイバードラモンの変化に戸惑う。

「見た目が変わっただけじゃないぜ。」

サイバードラモンは高速で一気にヴリトラモンに接近する。

「何?」

「スピードスター!」

サイバードラモンは背部のウイングブレードを動かしヴリトラモンの脇腹を斬りつける。

「ぐっ!」

ヴリトラモンは思わず脇腹を押さえる。余程の切れ味なのか傷からは血が流れている。

「ほらほら、どんどん行くぜ!」

サイバードラモンは更に加速しヴリトラモンを攪乱させる。

「み、見えない!」

「無駄無駄無駄!この光のスピリットの能力にはお前もついて来れまい!」

ヴリトラモンはみるみる傷だらけになっていく。

「なんとかしなければやられる……!そうだ!」

ヴリトラモンは空中に飛び右腕にデジヴァイスを握る。

「スピリットの力、今こそ使わせてもらう!」

「無駄だ!高速で動くこの俺を攻撃することなど動きを止めぬ限りはできんだ!!」

サイバードラモンはそう言いながら今度はウイングブレードを取り、大型剣トリニテートに変える。

「貴様の首、もらった!」

サイバードラモンはヴリトラモンの首を斬りつけた……はずだった。

「何!」

サイバードラモンは驚きながらヴリトラモンの右腕を見る。右腕の手首の辺りからイカのようなものになり、触手で剣を止めていたのだ。

「どうやら動きを止められたようだな。」

「あつ、ちよつと待っ……」

「バーニングサラマンダー!」

「ぐおおおおお!!」

サイバードラモンはゼロ距離からの攻撃をモロに受け吹き飛ばされる。その瞬間スピリットの能力が解除されたのか姿が元に戻った。

「ぐつ、ぐはあ……」

サイバードラモンは思わず血を吐く。

「どうやら勝負あつたようだな。」

ヴリトラモンはオメガソードを出し、ゆっくりと近づく。

「ま、まだだ……まだここで倒れるわけには……」

最後の抵抗をするかのようにサイバードラモンは這つて逃げようとする。

「あ、足に力が入らん!このままでは……」

既にヴリトラモンが目の前に立っていた。

「今まで多くのデジモンを殺めてきた罪、ここで受けてもらうぞ。」

オメガソードを振りかざそうとする。そのとき、二人の目の前にイガモンが現れる。

「旦那、これを!」

イガモンはスピリットをサイバードラモンに向かって投げる。スピリットはサイバードラモンの体内に取り込まれ一瞬眩い光が辺りを包み込んだ。

「な、なんだ!?急に!」

その直後ヴリトラモンは何かに撃たれたかのように勢いよく後方に吹き飛ばされた。

「ぐは………一体何が……」

血を吐きながらヴリトラモンは目の前を見る。

「………やつと手に入ったか。あと一步のところまで死ぬかと思つたがおかげで助かつたぜ。」

砂煙の中からサイバードラモンの姿が現れる。しかし、それは先ほどの物とは違い、体を青い装甲で覆い右腕は陽電子レーザー砲、左腕がビームガトリングになっていた。

「ま、まさかこの地のビーストスピリットか……」

ヴリトラモンは痛みに耐えながらなんとか起き上がる。

「さて、第二ラウンドといこうぜ！」

サイバードラモンは陽電子レーザー砲を構える。

雷撃一点集中

ステイングモン? side

「こ、これが私なのか?」

ステイングモンは己の体の変化を見ながら驚く。自分の体の一部は残ってはいるがもう既に昆虫型とは言い難く、もはや竜人型と言ってもおかしくない部類だ。

「おめでとう、どうやら成功みたいね。」

ベルスターモンは小さく拍手する。

「私は……」

「あなたはパイルドラモン。竜と昆虫の融合によつて本来の力以上のものを備えた戦士になつたのよ。」

「パイルドラモン……」

ステイング、いやパイルドラモンは言われると少しは落ち着いた。

「じゃあ、今度は私の頼み事を聞いてもらえないかしら?」

「そうでした。しかし、私は早くグランクワガモン様の所へ……」

「大丈夫、そんな大変なことじゃないから。」

ベルスターモンは、パイルドラモンに何やら話を始める。

ヘラクルカブテリモンの陣営（と言うよりもヴリトラモン対サイバードラモン）

「ヒヤハツハツハツハ！ どうした？ 手も足も出ねえか!？」

サイバードラモンは笑いながら陽電子レーザーからフィールドデスロイヤーを発射する。

「くっ、あれほどの出力じゃ避けることが精一杯で接近すらままならない。」

ヴリトラモンは避けながらも自らメテオバスターを撃つ。しかし、強固な装甲に身を包んだサイバードラモンには傷一つつかない。

「貴様はさつき罪を受けてもらおうと言っていたな！ そのときの態度はどこに消えたんだ？」

サイバードラモンはさらに強くなったことに喜びを感じながらヘラクルカブテリモンたちの方にも無差別に砲撃を始める。

「うわあー！」

「こつちにも飛んで来たぞ！」

「逃げろ！」

戦闘をしていた双方両軍はたちまち混乱状態になった。

「アイツ、俺が敵わないとわかって今度は両軍全滅させようというのか、うおおお!!」
ヴリトラモンも砲撃に巻き込まれる。

「おのれ、サイバードラモン！よくも俺の部下たちを！」

グランクワガーモンは怒りに燃えサイバードラモンに向かって飛んで行く。

「待て、グランクワガーモン！むやみに行くのは危険だ！」

ヘラクルカプテリモンは慌てて後を追いかける。それにも構わずグランクワガーモンはサイバードラモンに向かって攻撃を加えようとする。

「貴様！許さんぞ！デイメンジョンシザー！」

グランクワガーモンは己の鋏でサイバードラモンの体を砕こうとする。

「うおおお!!」

グランクワガーモンは容赦なくサイバードラモンの体を切り裂こうとするが強固な装甲には亀裂すらはいらない。

「ああ……マツサージには丁度いいな。だが」

サイバードラモンは鋏を掴む。

「何!？」

「俺を真つ二つにするなんて不可能なんだよ!」

サイバードラモンの両腕にグランクワガーモンの鋏は砕かれる。更にそこへ追撃をかけるかのようにフィールドデストロイヤーを何発も発射する。鋏を失ったグランクワガーモンは力を失ったのかのように吹き飛ばされる。

「まずはテメエから消してやるぜ!」

サイバードラモンは陽電子レーザーを最大出力に上げる。

「無念……」

グランクワガーモンは諦めた。

「とどめだ……」

「ボーンバスター改!」

サイバードラモンが撃とうとした瞬間脇からヘラクルクプテリモンが攻撃をしてきた。おかげで射程がずれ、グランクワガーモンに命中せずに済んだ。

「大丈夫か!？ グランクワガーモン!」

ヘラクルクプテリモンは慌てて駆け寄る。

「なぜ、俺を助けたんだ? 敵である俺を……」

「今更そんなことを言うな、私達は同じ志を持った者同士じゃないか。ただ道を間違え

ただけでやろうとしていることは一緒なのだから。」

「うう……俺は、俺は自分のプライドで取り返しのつかないことを……」

グランクワガモンとヘラクルカブテリモンは肩を持って支えながら立ち上がる。そのとき、二人の目の前に黒いデジタマのような物が現れる。

「これは一体?」

二人は不思議そうに見る。そして、黒い物体は何とか立ち上がったヴリトラモンの所へと飛んで行き、デジヴァイスの中へと入っていった。

「これは……デジメンタルか?」

「おおい、兄貴〜!」

「イチカ〜!」

それと同時にかなり後方にいたバイモンとリリモンたちが走ってきた。さっきの砲撃に巻き込まれたのか所々ボロボロになっていた。

「チビか、なら丁度いい。チビ、進化だ!」

「わかった!」

ヴリトラモンはバイモンに向かってデジヴァイスを掲げる。するとデジヴァイスから再び黒のデジメンタルが出現し、バイモンへと飛んで行く。

「バイモン、アーマー進化!」

ブイモンの体が光り、デジメンタルと同化していく。やがてその姿は黒い装甲を身に纏う四脚歩行のデジモンへと姿を変える。

「轟く友情、ライドラモン！」

ライドラモンはヴリトラモンの隣に着地する。

「あれ？この間は赤くなかった？」

リリモンは不思議そうにライドラモンを見つめる。

「あのデジメンタルというものによって違うんじゃないの？」

ライラモンは飽くまでも予測で言う。

「ハツハツハツ！少し進化したぐらいで俺に敵うと思っているか！」

サイバードラモンはライドラモンに向かって陽電子レーザーを発射する。

「避けるぞー！」

ヴリトラモンが言うと同時にライドラモンは彼を背中に乗せヒラリと飛んで避ける。

「何？」

サイバードラモンはもう一度目標を絞って発射する。しかし、またもや避けられる。腹がたつたサイバードラモンは足のキャタピラを使いながら戦車の如く移動しながら撃ち続ける。

「チビちゃん、一体何をするつもりなのかしら？」

ライラモンは心配そうに見る。ライドラモンはサイバードラモンの攻撃を避け続け、スピードで標準を付けられないようにしていく。

「ぬうう……この状態では奴らに追いつけん！」

サイバードラモンは苛立ち始める。

（チビ、いいか？チャンスは一瞬だ。絶対に逃すな。）

（分かってる。）

二人は目を合わせてそのタイミングを探る。

「こうなったら防御は下がるが一回装甲を解くしかないか。」

サイバードラモンはそう言うのと自分の身に纏っていた装甲を解除しようとする。

「今だ！行け、チビ！」

「ライトニングブレード！」

サイバードラモンが装甲を解き始めようとした瞬間ライドラモンは己の角を装甲の僅かな隙間に突き刺し電撃を送り込む。

「何iiiiiiii!!!」

サイバードラモンは動揺しながらも角を抜こうとする。

「まだまだあああ！」

ライドラモンは電撃を最大にしてサイバードラモンに放つ。それでもサイバードラ

モンはまだ倒れる様子がない。

「その程度の電圧で俺を倒せると思って……」

「なら、俺の分も付加したらどうだ？」

ライドラモンの上に乗っていたヴリトラモンも体を放電し始める。

「ビビデバビデブー!!!」

突然の電圧の上昇によりサイバードラモンの体は耐えきれなくなり、三人がいた場所は大爆発を起こした。

「イチカーー!」

「チビちゃん!」

リリモンとライラモンは駆けつけようとするがそこへ突然の如くイガモンが現れる。

「ここから先へは行かせ……」

「邪魔!!!」

「へぶー!」

イガモンは二人のピンタを同時に喰らって倒れてしまった。大爆発をした場所では黒焦げになったサイバードラモンとヴリトラモン、そして力尽きて退化して倒れているブイモンがいた。

「けふ……お、俺様がここまで焦げ焦げされるとは……」

サイバードラモンは思わず煙を噴いた。ヴリトラモンも黒焦げではあるが目の方はまだ鋭くしていた。

「まだ、ここからが本番だぜ。」

ヴリトラモンはそう言うのと倒れているブイモンを抱え、後ろに引き下がる。

「イチカ。」

リリモンは心配そうにヴリトラモンを見る。ヴリトラモンはそんなリリモンの頭を優しく撫でる。

「心配するな、まだまだ勝負は着いていないさ。」

安心させるかのようにリリモンに言う。その光景を見てサイバードラモンは思わずぎよつとした。

「お、お前……まさかそいつは彼女か？」

「フーンだ！今更気づいたの？私とイチカはラブラブなのよ〜！」

サイバードラモンの言葉に対してリリモンはアツカンペーをしながら言う。

「言い過ぎだ。」

ヴリトラモンはリリモンの頭を叩く。サイバードラモンは何か苛立ったのか異常な殺気を立てていた。

「何がラブラブだ……嫌な言葉を使いやがって……」

サイバードラモンは起き上がるとリリモンの方を睨み付ける。その目にリリモンは思わず身震いする。

「だから女は嫌いなんじゃないやああ!!!」

サイバードラモンは二人に向かってイレイズクロウを繰り出そうとする。その直後上空から何かがサイバードラモンの上に墜落する。

「ぐへー」

サイバードラモンの上に墜落してきたのはライズグレイモンだった。

「痛てて……くそう、あの野郎くー!」

ライズグレイモンは悔しそうに上空を見る。そこには緑の装甲を纏ったような竜人型デジモンが飛行していた。

「あれは……ステイングなのか?」

グランクワガールモンは思わずそのデジモンを見る。竜人型デジモンはグランクワガールモンの姿を見るとすぐにどこかへと飛び去って行った。

「こうなったら兄貴に頼んで……」

「あの……ライズの兄貴。」

「おう、丁度良かったサイバーの兄貴はどこ……」

「兄貴の下。」

「え？」

部下の指を指すところを見てみるとそこには下敷きになっているサイバードラモンがいた。

「あ、兄貴！そ、そんなところにいるなんて……」

ライズグレイモンは慌てて避ける。起き上がったサイバードラモンは黙ったまま後ろを振り向き歩き始める。

「兄貴、どこへ行くんだ？」

「……帰る。」

「え？」

「今日はもう散々な目になったから帰る！今日の所は見逃してやる！」

そして、サイバードラモンはヴリトラモンの方を見る。

「今日の所はこのチビのおかげで勝ったが今度はそうはいかんからな！」

そう言ううとサイバードラモンは空へと飛んで行ってしまった。

「「旦那く待つてくださいいっ!!」」

部下たちは後を追うかのように逃げて行った。その場に残ったのはさつきまで争っていたヘラクルクブテリモンとグランクワガーモンの軍団でみんな啞然としていた。

「俺たち……あんな奴らに対抗するためにこんな戦っていたのか？」

「……なんか馬鹿馬鹿しくなってきたな。」

「……悪いこととしてすまなかったな。」

「俺の方もゴメン。」

両軍はさつきまで争っていたのが嘘かのように互いに謝り、和解していた。

「結局、俺たちが別れて争うほどでもなかったようだな。」

グランクワガーモンは落ち込みながら言う。自分のせいで余計な混乱を招いたと感じたからだ。

「それでもないさ、この経験が次の機会に生かされていくんだ。我々もここからやり直せばいいさ。」

「ふっ、お前は相変わらずお人好しのようだな。」

ヘラクルカプテリモンの言葉にグランクワガーモンは思わず笑った。一方のヴリトラモンは去って行ったサイバードラモンのことを考えながらリリモンに包帯を巻いてもらっていた。

「……なあ、リリモン。」

「何？イチカ。」

「アイツはどうしてお前の言葉にあそこまで動揺していたんだろうな？」

ヴリトラモンは腕組みをしながら言う。

「さあ、ひよつとしたらあれなんじゃない？」

「あれ？」

「……失恋とか。」

「失恋？あんな性格で失恋なんかするの？」

リリモンの言葉に少し呆れるヴリトラモン。しかし、向こうにもう一つのスピリットを持って行かれたことには変わらないのである。

闇の中ののっぺらぼう

昆虫型デジモンの森

ウィルスバスターズが撤退した後、一同は和解とヴリトラモンたちの感謝も兼ねて宴を開いていた。

「今日は飲めるだけ飲むぞ〜！」

一匹のクネモンが酔いながら言う。ヴリトラモンたちも好意を受け入れ飲んでいる。ブイモンはライラモンの膝の上で調子にのってご馳走を頬張っていた。

「いやはや、皆さんには大変なご迷惑をおかけしました。」

ヘラクルカブテリモンは申し訳なきように謝罪する。

「いや、俺も自分からやったことだから気にしていない。」

「でも、それにしてもあの昆虫か竜か分からぬデジモンは一体何者だったのかしら？」
ヴリトラモンの隣でリリモンは不思議そうに言う。

「そう言えばあの体の一部はステイングモンに似ていたな？」

ヘラクルカブテリモンは考えながら言う。そこへ今まで姿が見当たらなかったコカブテリモンが一枚の紙を持って一同の目の前に来た。

「ヘラクルカブテリモン様、グランクワガーモン様、ステイングモンさんからの手紙が見つかつたです！」

「何?! ステイングモンからだ?!」

包帯を巻いたグランクワガーモンは驚いた顔でコカブテリモンから手紙を受け取る。

「壊された拠点に置手紙のように置いてあつたです。」

手紙には以下のこと記されていた。

『拝啓、グランクワガーモン様

この手紙を読んでいる頃は私はすでにこの地を離れている頃だと思ひます。私はオクワモンの策略により危うく命を落としかけましたがとあるお方の力に救われまし。しかし、その代償として私は昆虫型デジモンとしての自分を捨てなければなりません。今までお仕えしたグランクワガーモン様の許可なく勝手にこの地を去るのは大変失礼なことだとは思ひますがこの竜でも昆虫でもない姿を晒すよりはいい方だと思ひ静かにこの地を去ることにしました。これからは恩人のとある事情で普段は動けません。何かあれば必ず駆けつけます。今まで兄妹同然に慕つてくれたあなたのこととは決して忘れません。どうかヘラクルカブテリモン様と共にこの地をお守りください。

あなたの部下　パイルドラモンよ

り』

「……………あのバカが……………」

手紙を読み終えるとグランクワガーモンは思わず涙を浮かべた。

「グランクワガーモン。」

「気にすることは無い、アイツのことだ、この手紙通りこの地にまた何かが起これば必ず戻ってくる。必ずな。」

そう言い終えるとグランクワガーモンは夜空を見ながらこう言った。

「いつでも帰ってこい、ステイングモン……………いや、パイルドラモン。例え姿が何だろうとお前は俺のかけがえのない仲間。そして、ここがお前の故郷だ！」

サイバードラモンのピラミッド

「……………」

昆虫型デジモンの森から引き上げたサイバードラモンは部屋に戻った後一枚の写真を持ったままベッドで寝つ転がっていた。

「……彼女か……」

サイバードラモンは何気に口にした。そこへメタルグレイモンが部屋に入る。

「兄貴、知らせだ。奴がスピリットを持ってこつちに来るそうだ。」

「……そうか。」

サイバードラモンは寂しそうに言う。そんな姿をメタルグレイモンは心配そうに見る。

「なあ、兄貴。アイツをあんまり信用しないほうがいいんじゃないか？ 奴は確かにウイルスじゃないけどどう見ても裏がありそうだ。もう少し慎重に……」

「うるせえ。」

「でも……」

「どう足掻いても俺はもうあの頃には戻れない。決してな。」

サイバードラモンはそう言うを持っていた写真をゴミ箱へと放り投げた。

「もうそれだけのことをしてきたんだ……もう戻れない……アイツの所へも……」

サイバードラモンはそう言いながら部屋を出て行った。それを見届けた後、メタルグレイモンはそっと写真を拾う。

「きつと待っているさ、あの人は。」

サイバードラモンのピラミッドから少し離れた森

「はあ……はあ……」

夜の森の中、白い翼を持った天使は辺りに警戒しながら攻撃態勢に入っていた。そして、暗闇では不気味な笑い声が聞こえてくる。

「ふふふ……大人しくスピリットを渡してくれば手は出さないとやっているのにどうしてそこまで逃げるのです？」

暗く見えない森の奥から口だけしかないのでっぺらぼうのような顔が現れる。

「ホーリーアロー！」

天使は光の矢をのっぺらぼうに向かって撃つ。しかし、のっぺらぼうは笑みを浮かべ

たままである。

「ジェネラスミラー。」

そう言うのと鏡のような物が二つ現れ矢は反転し彼女に直撃する。

「きゃあー！」

まともに喰らった彼女はその場で倒れてしまった。

「おやおや、完全体でありながらこの程度の攻撃で倒れてしまうとは……よつぽど疲れていたのですね。」

森の奥から現れたのつぺらぼうはその姿を露わにする。両腕には鏡の盾を持ち、顔も口以外のものが一切存在していない。彼は彼女から二つのスピリットを取る。

「やはり手に入れていましたか。おかげで手間が省きましたね。」

のつぺらぼう、メルキュレモンは不敵な笑みを浮かべて言う。

「そ、それを取ってどうするつもり……。」

天使は無理に立ち上がろうとする。

「無理はしないほうがいいですよ。もうあなたは用済みですから。」

「スピリットをどうするつもりよ……。」

「簡単なことです、実験ですよ。」

「実験？」

「そう、私個人のね。通常のデジモンでもスピリットを使いこなすことはできませんがそれは飽くまでも一種類が限界。しかし、それ以上にスピリットを取り込ませるとどうなると思います?」

メルキュールレモンは笑みを浮かべながら言う。

「ま、まさかあなたが彼を!」

「気がつきました? サイバードラモンとあなたがゴタゴタになっていることに目を付けさせ、彼を誘惑させることであなた方天使型が保管していた光のスピリットを強奪させたんです。いやゝ恋に裏切られるというのは意外な力を発揮するのだと感心してしまいましたよ。」

「わ、私のせいで彼があんなことを……」

落ち込む天使にメルキュールレモンは慰めの言葉を投げる。

「そう落ち込まないでください、貴方は別に何もしていませんから。そう、全ては彼の勘違い。フフフフフフ……」

そう言い終えるとメルキュールレモンは消えるようにその場を後にして行った。

「私の……私のせいで……」

天使は涙を流しながらその場で倒れてしまった。

翌朝のヴリトラモン一行

昨夜の宴の後、ヴリトラモンたちはこれからのスピリット集めを考えるなら先にウィルスバスターズを叩いた方が早いという判断で密かに拠点に奇襲をかけようと考え、サイバードラモンのピラミッドへ向かうことにした。これには先日の戦闘による戦力の消耗とサイバードラモンが回復しきっていないことを考えての作戦だった。

ヘラクルカブテリモンの話で幸いピラミッドはいた森からそれほど遠くないということもあり一行は足を急いで進んでいた。

「まずはどうするつもりなの、イチカ?」

ライラモンはブイモンと手を繋ぎながら聞く。

「まあ、作戦は俺とチビでやる。と言うよりも俺が表で大暴れする。そうすれば奴らの本隊がピラミッドから出てくるはずだ。そこをリリモンとライラモンで援護射撃をし

てくれ。格闘戦ならチビがフレイドラモンに進化すれば何とかなる。」

「イエーイ！俺も兄貴と戦えるんだ！」

「結局、力攻めということね（汗）。」

リリモンは少し心配そうに言う。心配しているのはヴリトラモンの傷の方だった。確かにサイバードラモンと比べれば軽傷ではあるが戦闘中に悪化でもしたらどうしようと考えると不安でたまらない。

「あんまり無茶しないでね。」

「お前は心配し過ぎだ。」

そんな会話をしていた時プイモンは突然足を止める。

「どうしたのチビちゃん？」

「なんか泣いている声がする。」

「泣いている？誰が？」

「女の人の声のようだけど……」

「どれ？」

「……しくしく……」

確かに聞こえた。ヴリトラモンたちは気になり鳴き声が聞こえるところへと行ってみることにした。茂みの奥には天使型デジモンがよりによって体育座りをして泣いて

いた。

「あれは・・・」

「エンジエウーモン、大天使型デジモンよ。でもなんでこんなところにな？」

リリモンは不思議そうに見る。

「あ、兄貴！この写真見て！」

ブイモンは彼女のすぐ隣に落ちていた写真を見て慌ててヴリトラモンたちに見せる。

「「ッ」、これは！」

ヴリトラモンたちは驚いた顔で写真を見る。写真はそこにいるエンジエウーモンとデジモンがお互い肩を寄り添っているものだが問題はそのデジモンだった。

「サイバードラモン・・・」

ヴリトラモンたちは緊張した顔でエンジエウーモンを見る。エンジエウーモンもヴリトラモンたちの存在に気づき辺りは深刻な空気に包まれた。

意外な誤解

ヴリトラモン一行&エンジエウーモン

「それじゃあ、一から説明してもらおうか。」

ヴリトラモンたちは、ひとまず落ちつきエンジエウーモンの話を聞くことにした。エンジエウーモンはまだしくしくしていたが彼女なりに説明を始めた。

「私とサイバードラモンが最初に会ったのは成長期の時でそのとき彼と私はモノドラモンとプロットモンでした。」

「つまり、そこから付き合い始めたというわけね。」

リリモンはじろじろ見ながら聞く。

「付き合いと言えばそうなりますけど最初に手を差し出してくれたのは彼でした。」

「え？アイツから!？」

「はい。」

過去（ここからはエンジエウーモンの体験談）

「おい、今ぶつかつたのお前の方だろ！」

そのとき幼く内気だった私は複数のギザモンにいじめられていたところでした。

「ち、違います……」

私は怯えながら答えました。

「あ!?聞こえねえな!コイツめっちゃ痛がつてんだぞ!どうしてくれるんだ!」

「痛てえよ〜（棒読み）」

彼らは他のデジモンを苛めるのが好きで私も苛める対象になっていました。

「お前はコイツに傷をつけたんだ。だから俺たちがお前を傷つけても文句はねえんだよ

!」

「そ、そんな……」

「みんな、やっちまえ!」

私に向かつてギザモンたちは一斉に飛びかかってきました。臆病で力が弱かった私はもう目を瞑つてその場を動けなくなつてしまいました。でもそのときでした。彼が助けてくれたのは。

「やめろ！」

一匹の小竜型デジモンが私とギザモンたちの間に割って入ってきました。

「誰だデメエ！」

「誰だつていいだろ。お前ら複数で襲い掛かるなんて卑怯じゃねえか！」

「ああ!?!そいつがぶつかって俺の仲間が怪我をしたんだぞ！」

「……どこが怪我してんだよ。」

「あつ。」

傷ついているはずのギザモンも襲い掛かろうとしていたので彼らは何も言えなくなりました。

「もういい、やっちまえ！」

「「「シヤアアアアア!!」」」

「舐めんなよ！」

彼はたつた一人で挑んでいきました。私は怖くなり近くの大きな岩の後ろに隠れて震えることしかできませんでした。

どのくらい時間が経ったのか。

震えていた私に彼は何事もなかったかのように声をかけてきました。

「おーい、もう大丈夫だぞ！」

私は岩の上から顔を少し出して彼の声が見ました。そこには気を失ったギザモンたちと傷だらけで倒れてもおおしくないはずなのに平然と立って笑っている彼の姿がありました。

「あ、あわわわ……」

「大丈夫か？ 怪我はなかったか？」

彼は怪我をしていた自分のことよりも震えていた私のことを心配してくれました。私は怯えながらも答えました。

「だ、大丈夫です……」

「よかった！ 俺、モノドラモン。お前は？」

「プ、プロットモンです……」

「プロットモンか！ いい名前だな！」

彼は笑いながら言いました。そこへ

「兄貴〜！」

二匹の恐竜型デジモンが走ってきました。二匹とも外見も色も一緒だったけど一匹には両腕にベルトを付けていました。

「兄貴、随分探したんだよ！」

「いやあ、悪かった。あつ、紹介するぜ。俺の弟分のアグモン達だ。最近やつと進化できたんだぜ。」

「よろしくー！」

「よ、よろしく・・・」

明るく声をかける彼らに私は小さい声ながらも答えました。

「ところでプロットモン。お前行く当てであるのか？」

「ううん。」

私は首を横に振りました。当時の私は行く当てもなく怯えながら彷徨っていましたから。

「だったら俺たちと一緒に行かぬえか？俺たちも行く当てがなくて旅してるからさ。」

「え、いいの？」

「別に仲間が一人増えるだけなんだし問題ないさ！なあ！」

「そうそう！」

「プロットモンも一緒に旅すれば楽しくなるよ！」

「あ、ありがとう・・・」

この後、彼が突然倒れたのにはかなり驚きましたがこの出会いがきっかけです。

現在のヴリトラモン一行とエンジエウーモン

「それで奴と知り合ったのか……。」

「はい。」

「なんか運命的な出会いを感じるわねえ。」

会話が進むにつれエンジエウーモンも普通の態度になり一行の緊張感あふれる空気は治まっていた。

「それでそれで？どこまで関係は進展したの!？」

ただ一人、リリモンは目を輝かせながら聞いてくる。

「あの後、私が完全体になるまでは一緒に旅をしていました。進化した後は大天使・天使型がスピリットを管理する、光の街と言う場所で暮らすことになって別れたんです。彼

らはその後ウィルスバスターズを結成して自分の道を歩んでいました。当時のウィルスバスターズは今のようなものではなく善良なウィルス種には手を出さないのをモットーにしています。」

「じゃあ、別れる前までで恋人関係にまで発展したということね。」

ライラモンが言うのとエンジエウーモンは顔を赤くし小さく頷く。

「でもなんで破局したわけ？」

「……」

リリモンが聞いた瞬間、エンジエウーモンは急に悲しそうになる。

「あれ？なんか不味いこと言っちゃった？」

「言った。」

「不味いこと言ったの姉ちゃん？」

「言ったわよりリリモン。」

みんなが同じ答えを言ったところでエンジエウーモンは口を開いた。

「別れたんじゃないかって彼の勘違いから始まったんです……私が別の人と付き合ってたと勘違いしていて……」

「どうゆうこと？」

光の街 過去

このエリアはかつて光属性のエンシエントガルルモンがスピリットを残した地であり、同じ光を受け継いだデジモンたちが集う場所である。この街の奥にある神殿では主に天使型・大天使型のデジモンたちが光のスピリットを守り続けている。エンジエウーモンはサイバードラモンたちと別れた後も彼とは付き合っており、彼が来た時はよくデートをしたりしていた。

そんなある日。

「どうしよう……今日こそ言わなくちゃ。いつ会えるか分からないし……」
エンジエウーモンは困った顔を考えている。今日はスピリットの守護は非番であり彼女はサイバードラモンが丁度今日来ることもあり考え事をしていた。

「もう、あなたのそばにいたいと言ってこの地を離れるのを伝えたいけど……サイバー

ドラモンはきつと『大事な仕事なんだからそんなこと言っちゃダメだろ!』って怒るだろうしな……でも、それだと他の人に好意寄せていつの間にか離れてしまいそうで怖いし……何とか私の思いを伝えなくちゃ……」

そんなことを思いながら彼女は近くのベンチに座って作戦を考える。そこへ赤いテングロンハット、体中が銃器だらけと言う如何にも危なそうなデジモンがやって来た。

「あのくすみません。ちよつといいですか?」

「……」

「あのく」

「はっ! わ、私ですか!?!」

エンジエウーモンは驚きながら答える。

「よかつたくてつきり俺がウィルス種だから軽蔑されたかと思つたわく。」

彼、マグナキッドモンの相談は以下の通りだった。

実は少し前に好意を寄せたデジモン（彼はベル子と言っている）がいてどうしても告白したいのだがどのような言葉を伝えればわかってくれるか分からない。そこで女性型デジモンに聞こうと思つたが中々取り合ってもらえない。あまりに冷たい態度に困っていたところで偶然彼女に目が付いたので。

「それでなんですが何とかありませんかね? 俺、ああいう恋愛的言葉がよく分からない

ので困ってんです。」

「それは別に構いませんけど……」

「マジすか!?!」

「代わりと言っては何ですが先に私の告白の練習に付き合ってもらえませんか?」

「告白の練習?」

「丁度、今日来る彼に思いを伝えたいんですけど、どうしても言う自信がないんです。そこで練習に付き合ってもらえませんか?彼が来るまでまだ時間もありませんから。」

「なあんだ、いいっすよ!そのくらい。」

この練習がまさかとんでもない誤解へと発展していくとはまだ彼女は思ってもいなかった。

一方その頃

「よおし、今日こそは告るぞ。」

サイバードラモンはそう言いながら花束を持って歩いていった。本当はもう少し遅く来るはずなのだが今回は目的があつて少し早く来たのだ。

「えっと、やっぱり『俺のそばにずっといてほしい。だから俺と一緒に来てくれ!』が一

面白いかな？それとも『お前以上に愛せる人はいないんだ！だからずっとそばにいてくれ！』がいいか・・・ううむ！迷うな〜！」

そんな事を考えてサイバードラモンは目的地へと歩いて行く。本来の時間の五分前にたどり着いた。

「お〜い、エンジエウーモン今日は・・・」

「だから私をあなたのそばにおいてください！」

「え？」

サイバードラモンは目の前の光景に啞然とした。

エンジエウーモンが告白している。

それも自分以外のデジモンに。自分よりもカッコよく、究極体でウイルス種のデジモンに。

その光景を見て彼は自分の持っていた花束を落とした。

「つて、サイバードラモン！」

サイバードラモンがいたことに気がついたエンジエウーモンは思わず顔を真っ青にする。同時にマグナキッドモンも「あつ、不味いことになった。」と感じた。

「こ、これは・・・」

「そうか、そうだよな。めったに來ない俺よりもこんなカッコイイ奴と一緒にいた方が

いいもんな……」

サイバードラモンはショックのあまりに後ろに振り向いて歩いて行く。

「ち、違うの！これは」

「もう、お前とは絶交だあ!!」

そう言うのと彼は走り去っていった。彼女がどんなに叫ぼうとも彼は止まることはなかった。

ヴリトラモン一行 現在

ヴリトラモンたちにそこまで話すと再びエンジエウーモンは再び涙を流し始めた。「それじゃあ……奴は失恋と誤解して今のような感じになったのか。」

ヴリトラモンは少し困った顔をしながら言う。エンジエウーモンは黙って頷く。

「流石に滅茶苦茶な気もするけど……」

ライラモンでさえ苦い顔をして言う。

「それでその後彼はどうなったんだ？」

「あの後しばらくして彼は恐ろしいことを始めました。ある日悟られぬよう光の神殿に侵入してスピリットを強奪、その後、当時の管理責任者だった、セラフィモン様、オファニモン様を倒して、その力を取り込んでしまいました。」

「ちよつと待つて、さつき取り込んだと言ったわよね？」

「ええ、そのときの彼は倒したデジモンをロードするという能力を手に入れていました。」

「まるで俺みたい有能力を持っているな（ガジモンたちの証言が当たりやがった）。」

「そして、目の前に現れた私にこう言いました。『ワクチン以外の種族は全部滅ぼしてやる！その後はお前だ！』って言い残していきました。まさかここまでひどいことをしていくなんて……」

エンジエウーモンはまた泣き始める。

「わ、私が……あの時……直接言っていればこんなことに……」

「許せない！」

「「え？」」

リリモンの言葉に思わず全員が驚く。

「恋する乙女の口も聞かずに一方的に敵視するなんて許さないわ！そんな彼氏一発ぶつちやえばいいのよ！」

「で、でも……」

「でも何も無いの！こうなったら直接言いに行きましょう！ね、イチカ。」

「何故俺に同意を求める？」

「いいでしょ？」

リリモンは目を輝かせながらヴリトラモンを見つめる。これではダメだとは言えない。

「わかった、行こう。」

「いいのですか!？」

「奴のこと心配してるんだろ？だったら直接言ったほうがいい。」

「みなさん……」

「流石兄貴！」

「よし、行くぞ！」

エンジエウーモンを加えた一行はサイバードラモンがいるピラミッドを目指して歩き始めた。

暴走

サイバードラモンのピラミッド

「兄貴、メルキュウレモンが来たぜ。」

「通せ。」

サイバードラモンに言われるとメタルグレイモンはメルキュウレモンを部屋に入れる。

「お久しぶりですね、サイバードラモン殿。」

「テメエは相変わらず面白くねえ面をしているな。」

「面白くない面？ 私に顔はありませんよ？」

サイバードラモンの言ったことを冗談のように受け流すメルキュウレモン。メタルグレイモンにとつてそれは少し薄気味悪い雰囲気だった。

「まあいい、ところで持つて来たんだろな？」

「ええ、勿論。」

メルキュウレモンは表情がないはずの顔でまた答える。

「よし、メタルお前はもう部屋から下がってる。」

「え？でもよ……」

「命令だ。部屋から出る。」

「わ、分かったよ……」

異様な空気を感じながらもメタルグレイモンは部屋から引き下がっていった。

「……」

「どうしたんです？急に黙り込んでしまつて？」

急に黙り込んだサイバードラモンにメルキューレモンはニヤニヤしながら聞く。

「俺がスピリットを取り込み続ければ本当にロイヤルナイツは愚かあの十闘士を超えるかもしれないというのは本当なのか？」

「何を今更……あなたは少し考えすぎですよ。スピリットは一つ一つが十闘士の力の一部なのです。それらを全て取り込めばどうなると思えます？ロイヤルナイツ全員が束になってかかってきても互角に渡れるぐらいの力が手に入るので！あの時あなたは誓ったではありませんか。『絶対的な力が欲しい』と。」

メルキューレモンは巧みな口述でうまくサイバードラモンを説得する。

「そ、そうだな……俺が考えすぎた。」

「そうです、それでいいのです。ささ、これが私が集めてきた風と木のスピリットです。」
メルキューレモンは四つのスピリットを手に出す。サイバードラモンは恐る恐るそ

れを見つめる。

「これを取り込んで更なる力を手に入れるのです。そうすればもう恐れる物はありませんよ。」

「そうだ……もう、俺は何も恐れなくなるんだ。これを取り込んで更にな！」

サイバードラモンは勢いに乗ってスピリットを全て取り込んだ。

「ぐ……ぐうう!!」

彼の体は不気味な色に光り始め形状が変化し始める。

「フフフフ……いよいよ私の実験の第二段階に入りましたか。」

その光景の前にメルキューレモンはその場から透けていくのかの如く消えていった。

篠ノ之東のラボ

「はい、ベルちゃん。これをいっくんたちに届けてね。」

東はベルスターモンに金色のスピリットのような物を渡す。

「でも、本当に成功すると思うの束?」

ベルスターモンはその物体を見ながら言う。実はと言うとこれも束の開発した物だ。

「何しろロイヤルナイトのデータが少ないからね。進化できるかどうかは五分五分だけど成功すればそれなりのスペックを發揮できると思うよ。後はいっくんとあのチビ助くん(ブイモン)次第だけど。」

「まあ、あなたのことだから成功すると思うけど?」

「意地悪なことを言うねベルちゃんは。」

ベルスターモンはそんな束を見て笑う。

「束様、デジタルゲートを例のピラミッドの座標に調整しました。」

「OK、クーちゃん。じゃあ、よろしくね。」

「はいはい。」

クローエは早速ゲートを開く。そのゲートの中をベルスターモンは自分のマシンに跨り走っていった。

ピラミッドから少し離れた砂漠上空

「なあ、メタル。よりによってなんで俺たちが偵察に行くんだ？」

上空でライズグレイモンは愚痴を言うがメタルグレイモンは黙ったまま移動する。

「それぞれ目的を話してくれてもいいだろう？あんまり黙っていると俺一人先に帰るぜ？」

「お前は相変わらず能天気だな。俺とお前だけで行くとなると目的は一つだけだ。」

メタルグレイモンはそう言いながら一枚の写真を取り出す。サイバードラモンが捨てたものだ。

「ま、まさかエンジェウーモンを探しに行くのか!？」

「こんなことでないんなら最初っから行ったりなどしないさ。」

「無茶言うなよ！光の街は俺たちが破壊したんだぞ！もう、あの人だって兄貴に愛想を尽かしたって。それどころか憎んでいてもおかしくないぞ!！」

諦め口でライズグレイモンは言う。

「だが兄貴を止められるのは彼女しかいない。」

「だからって、こんなデジタルワールドを探すことになるかと百年経っても見つからねえぞー!！」

「それでも意地でも探すんだ！兄貴がこれ以上アイツ（メルキユールEMON）の思い通りにならないようにするためになんとかして……」

切れかけていたメタルグレイモンは突然話をやめる。

「どうしたんだよ?！」

「あれ。」

ライズグレイモンはメタルグレイモンの指を差した方を見る。向こうでは移動中のヴリトラモンたちの姿があつた。しかし、肝心なのはその中に探そうとしていた者がいたことだ。

「エ、エンジエウーモン!?なんであんな奴らと一緒に!?!」

ライズグレイモンは思わず身を震えさせながら言う。

「なんだ？知り合いか？」

「知り合いも何も兄貴は一回、俺は二回もひどい目に合わせた奴らだ！」

「そんなに悪そうな奴らには見えんが……」

「とにかくアイツらから引き離すんだ！」

ライズグレイモンは早速トライデントリボルバーを構える。

その一方、ヴリトラモンたちは既に彼らの姿を確認していた。

「あれ、あの時の奴じゃないのか？」

「あ！確か最初にイチカに右腕壊されて泣いて帰った……」

「どうする兄貴？アイツら俺たちに向かって撃つつもりのようにけど。」

「だったらこつちが先に撃ち落してやる。」

ヴリトラモンは右腕をメテオバスターに変化させる。

「コイツをスナイパー式にすれば……」

「ま、待ってください！」

エンジエウーモンは慌てて止める。

「どうした？」

「か、彼らは私の知り合いです！そんな撃ち落すなんて！」

「え？じゃあ、あの話に出てきたアグモン二匹って……」

「彼らの事です。」

「そうだったのか。」

ブイモンは意外そうに言う。

「とにかく彼らと話させてください。彼らも話せば……」

「あつ、もう撃っちゃった。」

「ええええ!!!」

彼女が言うのも遅くヴリトラモンはメテオバスターで二体を撃ち落した。二体は上空から一行から少し離れた場所に墜落した。

「よし、奴らが落ちた場所に行くぞ。」

ヴリトラモンはそう言いながら走っていく。

「あ、待ってよイチカ！」

「リリモン！」

「おゝい、俺も置いて行かないでよ〜！」

「もう！皆さん話を聞いてください！」

全員そう言いながらヴリトラモンを追いかけて行った。

サイバードラモンのピラミッド

「ひ・・・ひいい・・・お、お助けえええ!!!」

「バクリ。ムシヤムシヤ・・・。」

数多くのワクチン種のデジモンがいたはずのピラミッド。しかし、そこにはもはや誰もいなかった。ピラミッドの奥から聞こえてくるのは恐ろしいうめき声だけだった。

「・・・ホシイ。モット・・・カガ・・・欲シイ・・・」

怪物は呻きながら言う。体は巨大であらゆるデジモンの特徴が合わさっており、もはや何物なのかもわからない。

「ホシイ……スピリット……」

「フフフフフ……面白いことになってきましたね。」

怪物のみしかいないピラミッドの中でメルキューレモンは一人笑いながらその光景を見ていた。

ヴリトラモン一行と二匹

「じゃ……じゃあ……兄貴を助けに来てくれたんだな？」

黒焦げになっているメタルグレイモンに対してエンジェウーモンは頷く。

「よかった、これで兄貴は昔の兄貴に戻る！」

「待て！話を勝手に進めるな！」

「なんだライズ？これ以上にいい事は……」

「そんなことはどうでもいい！俺はこんな奴らと……」

「こんななんだ？」

ヴリトラモンはライズグレイモンの頭部にメテオバスターの銃口を突きつける。

「い、いえ、何でもありません！」

「おい、メタルグレイモン。さっさと俺たちをお前たちのアジトに案内しろ。」

「分かった。」

ヴリトラモンたちは急いで移動を再開する。

「エンジエウーモンの話が正しければ奴はもう既に一定以上のスピリットを取り込んでいるはずだ。間に合えばいいが……」

ヴリトラモンは不安に感じながらも足を速める。

奇跡を起こせ！ブイモン！

サイバードラモンのピラミッド

「おーい、誰もいないのか！」

ピラミッドに到着したヴリトラモンたちは早速メタルグレイモンの案内の元中へと入っていったが中には誰もおらずもの抜けの殻だった。

「こんなに誰もいないなんておかしいんじゃない？」

リリモンは辺りを見回しながら言う。ヴリトラモンはオメガソードを展開し、メタルグレイモンたちを睨み付ける。

「まさか、お前たちアイツに見捨てられたんじゃないのか？」

「そ、そんなはずはない！俺たちは一様隊長クラスなんだぞ！」

「そうだ！小さい頃から一緒だった兄貴が俺たちを置いて別の場所に移動するなんて信じられるか！」

ヴリトラモンの言葉に対して二人は怒りをぶつける。それだけ彼らの絆は確かなものなのだ。

「皆さん落ちていてください！こんなことをしていても……」

エンジエウーモンが言いかけた瞬間暗闇から不敵な笑い声が聞こえてきた。

「フフフフ……やつと来てくれましたか。」

「ん!?誰だ!」

ヴリトラモンは暗闇に向かってオメガソードを斬りつける。

「おっと、危ない危ない。」

暗闇の中からメルキューレモンが姿を現す。

「あなたは!」

「おやおや、貴方もここに来ていたのですか。意外ですね。」

「おい、こいつは何者だ?」

ヴリトラモンはメタルグレイモンに聞く。

「コイツはメルキューレモン、兄貴の協力者だ。気に入らないが……」

「嘘よ!」

メタルグレイモンの説明の途中でエンジエウーモンが叫ぶ。

「エンジエウーモン!」

「コイツが彼を誘惑してこれまでの元凶を生み出した張本人よ!光の街を襲ったのも、スピリットを集めるように仕向けたのも!」

「え!」

詳しい事情を知らなかった二人は動揺する。

「まあ、彼女の言っていることは事実ですね。確かにスピリットを集めるよう助言したのも私ですし、あなたの告白の練習相手がウィルス種だったことを教えたのも私ですからね。」

メルキュールレモンは罪悪感がないのかあつさりと自白する。

「テメエ！よくも兄貴を！俺たちを！」

ライズグレイモンは怒りに任せて右腕のトライデントリボルバーを構える。

「待って！奴にはどんな攻撃も跳ね返されてしまうわ！」

「何?！」

「彼女の言う通りですよ。私の能力はこの反射なのですから……おや?どうやら彼がこっちに近づいてきたようですね。」

メルキュールレモンはすぐさま自分の体を透明化させ始める。

「貴様、逃げるつもりか！」

メタルグレイモンはトライデントクローを飛ばすがすでにメルキュールレモンは姿を消し、壁を破壊しただけだった。

「実験は最終段階に入りました。あなた方は果たして彼に勝てるのでしょうか? フフ

フフ……」

「くそー!」

ライズグレイモンは悔しがる。

「振動が強くなってきたわ。」

「イチカ、怖い〜!」

リリモンは半泣き状態でヴリトラモンに捕まる。

「仕方ない、一回外に出るぞー!」

ヴリトラモンたちは急いで外に出る。

ピラミッド外

「「「「はあはあ。」「」」」」

全員ピラミッドから離れるとピラミッドはすぐに崩壊し、そこから巨大なデジモンが現れる。

「グワアアアアアアアアアアアア!!!!」

一瞬見ると、その形状は一見キメラモンにも見えるがよく見ると様々なデジモンパーツが組み合わされた集合体だった。

「こ、これが兄貴なのか?」

メタルグレイモンたちは思わず跪く。リリモンたちはその悍ましい姿に思わず反吐を吐いた。

「私のせいで彼がここまで……」

エンジエウーモンは翼を広げ巨大なデジモンへと飛んで行く。

「行くな! 喰われるぞ!」

ヴリトラモンはマントを投げ捨てブイモンの方を見る。

「チビ、進化だ!」

「わかったよ兄貴!」

デジヴァイスから友情のデジメンタルが出現する。

「ブイモン、アーマー進化!」

ブイモンとデジメンタルが融合し、黒き四足獣ライドラモンが現れる。

「轟く友情、ライドラモン!」

「行くぞ!」

ヴリトラモンは空を飛び、ライドラモンは砂の大地を駆け抜ける。エンジエウーモンは巨大なデジモンの前に立つと両手を広げて言う。

「サイバードラモン、もうこれ以上罪を重ねるのはもうやめて!」

巨大なデジモン、キマイラモンは彼女を確認すると動きを止める。

「エン・・・ジエ・・・ウー・・・モン?」

「そうよ!私よ!」

意識があることを確認した彼女は続けて言う。

「ずっと・・・ずっと会いたかったわ!あの時は本当にごめんなさい、私が練習しようだなんて考えなければあなたがこんな姿になることもなかったのに。」

「・・・・・・・・・・」

「あなたは数多くの罪を重ねてきたけど私はそれを自分の罪だと思っっているわ。だから・・・だからもうやめましょう、こんなこと。償うなら私も一緒に償うから。」

エンジエウーモンは泣きながら謝罪する。自分があんなことをしなければこんなことにはならなかったと言いながら。

ところがキマイラモンの腕は彼女を捕らえた。

「うぐっ!」

「一緒二償エ?フザケルナ!裏切り者ガ!」

キマイラモンは腕の力を強めていく。エンジエウーモンは苦しみながらも言い続ける。

「私を殺したいのなら構わないわ．．．でも、お願い。これ以上罪を．．．」
「ウルサイ、ウルサイ！黙レ！」

キマイラモンは彼女を握り潰そうと力を更に込めようとする。そのとき、後ろから爆発音がした。キマイラモンが後ろを振り向くとそこにはメテオバスターを発砲したヴリトラモンがいた。

「くそう、最大出力にしても何ともないか．．．」

「オマエ、覚エテイル。オマエスピリット持ツテル。オマエ倒セバモット強クナル。」

キマイラモンはエンジエウーモンを投げ捨てターゲットをヴリトラモンに切り替える。エンジエウーモンはいち早く駆けつけてきたライドラモンに拾われる。

「喰イテエ．．．マダ足りナイ．．．喰イテエ！」

「だんだん自我が崩壊しているか。このままだと不味いぞ。」

ヴリトラモンはオメガソードを展開し構える。キメラモンは体から無数の腕を出し、ヴリトラモンを捕獲しようとする。

「悪いが簡単に喰われたりはしないぜ。」

ヴリトラモンはデジヴァイスを取り出し、オメガソードにヴァイスから発するオーラ

を覆わせる。

「オメガサンダースラッシュユ!」

ヴリトラモンはオメガソードから斬撃を繰り出す。斬撃はギロチンのようにキマイラモンの腕を切断していくがその断面から次々と生え変わっていく。

「ヨコセ、スピリットヲヨコセ!」

キマイラモンは血走った目でヴリトラモンを追う。

元ピラミッドから少し離れた場所

ライドラモンは気を失ったエンジエウーモンを担ぎながらリリモンたちがいる安全なところまで戻ってきた。

「チビちゃん大丈夫!?!」

ライラモンは心配そうにライドラモンに言う。ライドラモンは体が少し震えてはいたが落ち着いた口調で答える。

「大丈夫だよ姉ちゃん。でも、俺じゃ兄貴たちとの戦闘には付いていけそうもないよ。」
ライドラモンは少し離れたヴリトラモンの戦闘を見ながら言う。その戦闘は今までにないほどの攻防戦が繰り広げられていた。

「俺……今まで兄貴と一緒にいて来たけどあんな戦闘は初めてだ。あんな戦いの中に入っただけなら足を引くだけだよ……」

「でも、イチカの戦闘について行けるのはあなただけなのよ!？」

「今までのと比べても比にならないよ……」

ライドラモンはブイモンに退化する。

「情けねえよ……兄貴と一緒に戦いたいの………体が正直に震えて……くそう、俺はいつまでたっても弱いままだ!」

「チビちゃん……」

「勝つ方法ならあるさ。」

「!?!」

聞き覚えのない声が一行の後ろから聞こえてきた。後ろを振り向くとそこにはバイクに乗ったベルスターモンが余裕そうに見ていた。

「ア、アンタ誰?」

リリモンは恐る恐る聞く。

「アタシはベルスターモン、ちよつとそこの一夏坊やに用があつてきたのさ。パートナーの頼みでね。」

「兄貴を知っているのか?」

「ちよつとね。でも、どうやら予想以上に事態が悪いようだね。」

ベルスターモンはヴリトラモンの方を見る。向こうではヴリトラモンがキマイラモンの複数の腕に掴まり絞めつけられていた。

「このままだと五分も持たないかもよ?」

「な、なあ……ベルゼブ……じゃなかつた! ベルスター姉ちゃん、アンタさつきあの化け物倒せる方法があると言っていたけど本当なのか!?!」

「まあ、あたしを姉ちゃんと呼ぶなんておチビちゃんいい目しているわね。あるにはあるけどおチビちゃんがどこまで持つかわからないけどいいの?」

「俺は……怖くて兄貴の戦いから逃げてきたんだ。奴が恐ろしくて。でも、どうしても兄貴を助きたい。そのための力がどうしても必要なんだ!」

「ふくん、じゃあその意志が本物かどうか見せてもらおうかしら?」

ベルスターモンは金色のスピリットのような物を取り出す。

「進化すれば一時的だけとおチビちゃん自身が強くなれる。進化しなければそこまで、あなたはどつちなのかしらね?」

ブイモンは慎重にデジメンタルに近づく。以前の暗黒進化を踏まえ今回も失敗するのかもしれないという恐怖が心の中にあつた。

(もし……俺がまたあの時のように暗黒進化したらどうしよう……)

その中でもヴリトラモンはキマイラモンの巨大な腕に絞めつけられていった。

「ぐ、ぐうう……」

キマイラモンの腕の力に耐え切れず体の装甲に亀裂が走り出血する。

「ぐわあああああ!!」

ヴリトラモンがこれまでにない叫びをあげる。

「イチカ!」

リリモンは思わず叫ぶ。

「兄貴……くう!」

ブイモンは迷いを振り切つてデジメンタルに手を触れる。デジメンタルは光り始め

ブイモンは進化の光に包まれる。

「俺に……俺に……力をくれえええ!!」

ブイモンは叫び続ける。するとブイモンのシルエツトが変わり始める。金色の装甲を纏つたデジモンへと姿を変えていき、ヴリトラモンの方へ飛んで行く。

「もう……意識が……」

ヴリトラモンは多量出血で意識が遠のいていく。

「モウスグデ……」

キマイラモンはもうひと押しと力を更に入れようとしたがそこへ光が彼の目の前を突っ込んでくる。

「ナンダ……コイツハ!?!」

キマイラモンは動揺しながら光を捕まえようとするが素早い上に捕まえられない。それどころかヴリトラモンの方を忘れていたため、捕まえていた手を離してしまった。光はヴリトラモンを捕らえるとすぐにキマイラモンから離れる。

「誰……だ?」

ヴリトラモンは薄く目を開ける。目の前には一度見たことがある聖騎士型デジモンがいた。

「兄貴大丈夫?」

聞き覚えのある声だ。

「もしかしてチビか?」

ヴリトラモンは驚きながら起き上がる。そこにいるのは紛れもなくロイヤルナイツにいたはずのマグナモンだ。しかし、声はブイモンのままだ。

「よかった、気がついて。」

「お前どうしてその姿に……」

「話は後。今はアイツを倒すのが先決だよ。」

「!?そ、そうだな……」

ヴリトラモンは少し戸惑いながらもキマイラモンの方を見る。いつの間にか亀裂が入っていたはずの装甲は元通りに戻っており、体力も回復していた。しかし、今はそれどころではない。

「イヤナ光ダ……オマエモ倒ス！」

キマイラモンはマグナモンに警戒しながらも二人に迫っていく。

エンジェウーモンの涙

ピラミッド跡

「どうやら本当に奇跡を起こしたようね、あのおチビちゃん。」

ベルスターモンは満足した顔で言う。

「奇跡を起こしたってどういうことよ?」

怪しそうにベルスターモンに聞くリリモン。

「あのおチビちゃんが使ったのは人工的に複製した奇跡のデジメンタル、つまりロイヤルナイツのマグナモンが進化の時に使用した奇跡のデジメンタルの複製さ。」

「え?そもそもそういう物って複製できるの?」

「アタシのパートナーが言うには理論上可能とは言っていたけどそれには精密なデータを用意しなければならなくてね。生憎ロイヤルナイツのメンバーだったこともあって僅かな戦闘データから作らなくちゃいけなかったから成功するかどうかからなかったのさ。」

「あなたそんなものをチビちゃんに!」

ライラモンは思わず怒る。それに対してもベルスターモンは軽く受け流す。

「アタシはただ単にきつかけを与えただけ。あんた達に怒られる筋合いはないよ。」
「むう……」

そんなことを言いながらも一同は二人の戦闘を見守るのであった。

ヴリトラモン・マグナモン対キマイラモン

「ギヤアアアア!!」

キマイラモンは口から連続で光弾を吐く。それを二人は避け続ける。

「バーニングサラマンダー!」

「プラズマシュート!」

二人は同時に技を仕掛けるがキマイラモンには効いている様子はない。

「なんて頑丈な奴だ。」

ヴリトラモンは思わず言った。しかし、その直後キマイラモンに異変が起き始めた。

「ぐ、ぐうう……」

キマイラモンは頭を押さえ苦しみだした。

「痛い……頭が割れソウダ……」

「アイツ、もしかしてスピリットの力に耐え切れなくなっているのか?」

「どうやらその様ですね。」

「その声は!」

二人は後ろを振り向くとすでに逃げたはずのメルキューレモンが腕を組みながら立っていた。メルキューレモンは二人の態度を気にせず平然と話を始める。

「恐らく5つ以上のスピリットを取り込んだ影響で完全体である彼の肉体が膨大なエネルギーに耐え切れず崩壊し始めたんでしょね。後数分でもすれば彼の体が大爆発を起こし、この辺一帯は吹っ飛んでしまうでしょう。」

「ふ、吹っ飛ぶだど!」

「そうです、だからあなたたちもここから早く避難したほうがいいですよ?」

メルキューレモンは言い終わると不敵な笑みを浮かべながらその場から消えた。二人はキマイラモンの方を見る。キマイラモンの体は僅かながら溶解し始め、体色が赤く発光し始めていた。

「・・・・・・・・どうする兄貴？」

マグナモンは黙っているヴリトラモンに聞いてくる。

「エンジェウーモンの姉ちゃん・・・・・・・・泣いていたよ。アイツのために。」

「・・・・・・・・」

ヴリトラモンは黙ってマグナモンの言葉を聞く。

「だから・・・・・・・・あの人のためにもアイツを助けてやりたいんだ。そりゃあアイツが今までどんなに悪いことをしてきたのかはわかるけど、それでも大切な人なんだよ。」

マグナモンはそう言う一人キマイラモンの方へ飛んで行く。

「・・・・・・・・全く、良いこと言うようになったんじゃないかねえかチビ。」

ヴリトラモンも後を追って飛んで行く。

キマイラモン side

「ウウウ・・・・・・・・苦シイ・・・・・・・・体ガ熱イ。」

キマイラモンは崩壊し始めている体を無理しながら進んでいく。

「熱イ・・・熱イ・・・」

「おーい、サイバードラモン！」

キマイラモンは後ろを振り向くとマグナモンが急いで飛んで来た。

「ナンダオマエカ。マダ俺トヤルノカ？」

「馬鹿！いいからよく聞け！早く体からスピリットを取り出さないとお前は大爆発して死んじゃうんだぞ！」

「ナニ？」

「だから早く体からスピリットを取り出すんだ！」

マグナモンが怒鳴るがキマイラモンは言葉を信じようとしなかった。

「嘘ダ嘘ダ！信ジルカソソナコト！俺ハ不死身ダ！」

マグナモンの言葉に耳を貸さずキマイラモンは歩き始める。

「お、おい！どこに行くんだよ!？」

「決マツテイル、手始メニアイツラカラ喰ツテヤル！」

「や、やめろ！あの人がどれだけアンタのことを心配していたのか分からないのか！」

「喰ツテヤル喰ツテヤル！」

キマイラモンは話を聞かず進む。マグナモンはそれを見ることしかできなかった。

「く、くそ……もうどうにもできないのか……」

思わず拳を握り締める。そこへ

「ちよつと待てええええ!!!」

ヴリトラモンは高速で突っ込んできたのだ。振り向いたキマイラモンは驚き思わず口を開けたがその口から突入していった。

「兄貴ー！（何やってんだああー）」

マグナモンは思わず叫ぶ（本音を除く）が頭に声が響いてきた。

（チビ、コイツに向かってエクストリーム・ジハードをええー！）

「え、エクストリーム・ジハード!?!」

（マグナモン「ロイヤルナイツ」が自ら封印した危険な技だ。だがこいつを助けるにはコイツの崩壊している肉体の部分を消し飛ばすしかない!）

「でも、今の俺じゃ使えるかどうかかわからねえよ!」

（俺が奴の体内でスピリットを制御して時間を稼ぐ。その間に撃て!）

「どうしよう……」

マグナモンは困りながらキマイラモンを見る。確かに体色が赤く発光していくのは遅れてはいるが爆発までのカウントダウンは止まってはいない。その前になんとしてもヴリトラモンが言った技を撃たなければならない。

「でも……俺が撃たないと……」

考えたくもないことが頭に浮かびあがってくる。しかし、やり方がよく分からない。

「どうやって撃てばいいんだ……」

（デジモンのエネルギーを吸収すれば撃てるようになるはずだからリリモンたちに……あつ。）

今頃近くに誰もいないことに気がつくヴリトラモン。

「それを早く言つてよ！ そんな都合よく近くにいるわけ……」

「それなら私に任せて。」

「え？」

マグナモンが気がついたとき隣にはエンジェウーモンが来ていた。

「姉ちゃん、さつきまで気絶していたんじや……」

「もう大丈夫よ、今は彼を止めなくちゃ。」

エンジェウーモンはマグナモンに手を触れる。するとマグナモンの体が輝き始めて眩い光を発するようになる。

「これでもう撃てるはずよ。」

「でも、この技を撃つたらサイバードラモンが……」

「こうするしかないんでしょ？」

エンジエウーモンは後ろを振り向いて顔を見せないように言う。明らかに泣きかけている声だった。

「姉ちゃん……」

「早くやって……時間かかると……それだけ……辛くなるから……」

「……分かった。」

マグナモンはキマイラモンに向き直ると構えを取る。

（よし、俺の方もヴァイスの力を最大に引き出す。頼んだぞ。）

「行くぞー！」

マグナモンの輝きが一層激しくなる。キマイラモンは自分の危険を察知しマグナモンに向かって攻撃しようとする。

「喰ワセロ!!!」

「エクストリーム・ジハード！」

マグナモンは全身の光を収束させ放つ。迫りつつあったキマイラモンの腕は消滅し、肉体が徐々に分解され始めた。

「消エテイク……力ガ……俺ノ力ガアアアア!!!」

光はキマイラモンの全身に注がれ崩壊していく。キマイラモンは崩壊しながらも抵

抗しようとするがどうすることもできずとうとう完全に消滅してしまった。消滅後、マグナモンの輝きは少しずつ弱くなり、やがて光は治まり着陸する。

「兄貴は？」

マグナモンはキマイラモンの方を見る。煙がたつて確認できなかったがしばらくすると晴れ、倒れているヴリトラモンとサイバードラモンの姿が確認できた。二人とも動いている様子はなかった。

「兄貴！」

マグナモンは歩いてヴリトラモンに近づく。

「兄貴！しつかりしてくれよ！」

マグナモンは揺さぶりながら言う。するとヴリトラモンは目を開ける。

「どうやら……うまくいったようだな。」

「ああ！大成功だよ！一時はどうなるかと思っただけど。」

「イチカー！！」

そこへリリモンとライラモンが飛んでくる。リリモンは来た瞬間にヴリトラモンに抱き付き大泣きし始めた。

「流石に今回は無茶し過ぎたな。」

そして、視線をサイバードラモンの方へと向き直す。既にメタルグレイモン、ライズ

グレイモン、エンジエウーモンの三人が駆けつけて呼びかけていたが全く反応がなかった。

「兄貴！目を覚ましてくれ！」

「俺たちは最後まで一緒だって言ってたじゃねえか！」

メタルグレイモンとライズグレイモンは泣きながらも呼びかけていた。それでも彼は動く様子にはなかった。そんな彼をエンジエウーモンは顔を優しく触れていた。

「ごめんなさい．．．私がもつと自信を持っていたらこんなことにはならなかったのに．．．」

彼女の涙が彼の顔に落ちる。そのときマグナモンの進化が解除された。

「あれ？このデジメンタル変だぞ？」

ヴリトラモンは驚きながらデジメンタルを見る。デジメンタルにはあちこちから亀裂が入っており、風が吹いた瞬間粉々になってしまった。

「やっぱり複製だから一回しか使えないということかしら？」

ライラモンは推測しながら言う。

「おい、複製ってどういう．．．」

「見て兄貴！粉々になったデジメンタルが！」

ブイモンは驚きながら指を指す。粉々になったデジメンタルはサイバードラモンの

体に纏まりつき光を帯びた。

「サイバードラモン、私ね。貴方のことが好きよ。だから……」

エンジェウーモンはサイバードラモンに口づけする。それを見たヴリトラモンたちは驚きライラモンは「チビちゃんにはまだ早い！」と言つて慌ててブイモンに目隠しする。

「私を置いて行かないで……」

彼女からまた一筋の涙が出る。

「……う、うう……」

声と共にわずかに手が動く。

「おー！」

「あ、兄貴！」

メタルグレイモンたちは驚く。そして、サイバードラモンはエンジェウーモンの方を見る。

「俺は……」

「サイバードラモン!!」

エンジエウーモンは思いつきり抱きしめる。突然の出来事にサイバードラモンは驚きを隠せなかったが拒もうとはせず、自然に彼女を抱きしめていた。

「よかった……本当によかった……」

エンジエウーモンは震えた声で言う。

「……お前、本当に泣き虫だな。」

サイバードラモンはそう言いながら彼女の涙を手で拭き取る。その光景にメタルグレイモンたちは愚かりりモンまでも涙目で見ている。そこに何者かが拍手をしてきた。

「いや、本当に感動的ですわね。恋人同士の和解というものは。」

一同が振り向くとそこにはメルキューレモンがいた。

「メルキューレモン、貴様……くっ。」

サイバードラモンは起き上がろうとしたがすぐに倒れてしまった。

「無理しないほうがいいですよ。スピリットを維持するために体力の大半を消費したんですから。」

メルキューレモンはそう言いながら手に光・雷・水のスピリットを持っていた。

「しまった！あの時の攻撃でデジヴァイスにあつたスピリットも分散してしまつたのか！」

ヴリトラモンは思わず吐き捨てる。

「ご安心ください、私は飽くまでも必要なものを回収しただけですから。」

そう言うくとメルキューレモンは足から透明になっていく。

「逃げる気か！」

ヴリトラモンはメテオバスターを展開して発砲する。しかし、メルキューレモンは淡々と言う。

「心配しなくともいずれはまた会うことになりますよ、いずれは。フッフッフッフ……メルキューレモンはメテオバスターの攻撃を受け止めながら不気味な笑い声を残してその場から消えてしまった。」

「ちくしょう！俺は……アイツに嵌められてたのか！くそう！」

サイバードラモンは悔しさのあまりに歯を噛みしめる。ヴリトラモンはその中でメルキューレモンが残した言葉に疑問を持ちながら空を眺めていた。

「メルキューレモン……。奴は一体何者なんだ……。」

登場人物（デジモン） 紹介2

登場人物（デジモン） 紹介

イチカ一行

ヴリトラモン／織斑一夏（ハイブリット体・魔竜型・ヴァリアブル種）

スピリット回収のために各地を旅している。時々過去のことを思い出し姉千冬のことを考えるようになる。旅の途中、ウィルスバスターズの戦いに身を投じることになる。

炎のスピリットは体に同化しているため、アグニモン、アルダモンの技が使用できる。追加設定ではあるがヒューマンスピリットを取り込んだ後は翼が収納できるようになっている（簡単に言えば仮面○イダー○ーズみたいに使う時だけ展開する）。序盤はサイバードラモンを倒すことを考えていたが彼の恋人であるエンジエウーモンを見て考えを改める。マグナモンに進化したブイモンとの共闘でキマイラモン化したサイバードラモンを救うことに成功するがその直後にメルキュレモンにスピリットを奪

われてしまう。

・デジヴァイス

回収したスピリット・デジメンタルを収納している。ブイモンの進化及びスピリットの能力を使うときはデジヴァイスを触媒として使う。キマイラモン戦までは氷、雷（人）、水（獣）。その後は氷、風、木。

ブイモン（成長期・小竜型・フリー）

ヴリトラモンの弟分。チビモンから進化しても相変わらず「チビ」と呼ばれている。デジメンタルの力で共に戦う。

フレイドラモン（アーマー体・竜人型・フリー）

ライドラモン（アーマー体・獣型・フリー）

マグナモン（アーマー体・聖騎士型・フリー）

ブイモンの進化した形態。

リリモン（完全体・妖精型・データ種）

相変わらずヴリトラモンとべったり。悲しんでいるエンジエウーモンに活を入れる。

ライラモン（完全体・妖精型・データ種）

一言で言えばブイモンのお姉さんの存在。成功するか分からない疑似奇跡のデジメンタルをブイモンに渡したベルスターモンに対して怒りをあらわにする。

ウイルスバスターズ

サイバードラモン（完全体・サイボーグ型・ワクチン種）

ウイルスバスターズのリーダー。ワクチン種以外のデジモンの殲滅を目的としている。意外に子供じみた所があるが実力はヴリトラモンとほぼ互角。かつてエンジェウーモンと付き合っていたがとある事情で仲たがいし、彼女が住んでいた光の街から光のスピリットを強奪、最高責任者だったセラファイモンとオファニモンを倒し吸収してしまふ。しかし、全てはメルキューレモンの計画でスピリットを取り込み過ぎた影響でキマイラモンに暗黒進化、部下を全員捕食してしまふ。ヴリトラモンとマグナモンとの戦いで死亡したかに見えたが疑似デジメンタルの残留粒子とエンジエウーモンのキスで奇跡的に息を吹き返す。取り込んでいたスピリットは光、木、雷（獣）、風。

エンジエウーモン（完全体・大天使型・ワクチン種）

サイバードラモンの恋人。成長期の時、彼に助けてもらった頃から好意を寄せており本来なら告白する予定だった。しかし、恥ずかしがり屋な性格が災いとなり、結果的に彼の暴走の引き金となってしまう。光の街から離れた後は彼の暴走を止めるべく、スピリットを回収していた。旅の途中メルキューレモンの闇討ちで風のスピリットを奪われてしまうがその後ヴリトラモンたちと会い共にサイバードラモンを止めに向かう。キマイラモン化した彼に対しても自分の思いは変わらないと伝え罪を償うよう言うが逆に殺されかける。

サイバードラモンが倒れた後は涙を流しながらキスをし、息を吹き返した彼に対しては泣きながら喜び、強く抱きしめた。

メタルグレイモン（完全体・サイボーグ型・ワクチン種）

ウィルスバスターズのメンバーでサイバードラモンの弟分。アグモン以前の頃から彼と共に行動しており、彼を兄のように慕っている。冷静に物事を考えており、エンジエウーモンに対してもサイバードラモンのことを思っていると信じていた。途中でヴリトラモンたちと合流し、サイバードラモンが息を吹き返した時は泣きながら喜んでいた。

ライズグレイモン（完全体・サイボーグ型・ワクチン種）

メタルグレイモン同様サイバードラモンの弟分。基本的に前線を指揮しているがヴリトラモンに敗退する。その後サイバードラモンと共に昆虫型デジモンの森に行くがパイルドラモンに敗北する。若干短気。

グレイモン（成熟期・恐竜型・ワクチン種）

ウイルスバスターズの戦闘員。ライズグレイモンの部隊はヴリトラモンの攻撃で全滅してしまった。残りはキマイラモンに捕食された模様。

グリズムモン（成熟期・獣型・ワクチン種）

ウイルスバスターズの戦闘員であるが本作に登場したのはベルスターモンの擬態した物のため本人は未登場。

エアドラモン（成熟期・幻獣型・ワクチン種）

ウイルスバスターズの調査部隊。

イガモン（成熟期・突然変異型・ワクチン種）
ウィルスバスターズの諜報員。忍者のように現れるがリリモンとライラモンのピンタで倒れた。

その他のデジモン

ガジモン（成長期・哺乳類型・ウィルス種）
悪戯で有名なデジモンだがウィルスバスターズに同族が次々と消されていたため他の種に警戒していた。本作では村を築いている。

ユキダルモン（成熟期・氷雪型・ワクチン種）

モジャモンとコンビを組んで雪山の氷のスピリットを守護していたデジモン。

モジャモン（成熟期・珍獣型・ワクチン種）

ユキダルモンとコンビを組んでいる。しゃべり方が何故か訛っている。

ヴァイクモン（究極体・獣人型・データ種）

ユキダルモンとモジャモンの親分。ヴリトラモンたちにスピリットを託す。

ヘラクルカブテリモン（究極体・昆虫型・ワクチン種）

昆虫型デジモンの森のリーダーの一人。戦いをあまり好まない。争うようになったグランクワガーモンとは親友同士。

グランクワガーモン（究極体・昆虫型・ウイルス種）

昆虫型デジモンの森のもう一人のリーダーで過激派。部下の意見なども聞くが挑んでくる相手には容赦しない。サイバードラモンに挑むが重傷を負わされる。抗争後は和解した。

アトラーカーカブテリモン青・赤（完全体・昆虫型・ワクチン&データ種）

ヘラクルカブテリモンの副官。

オオクワモン（完全体・昆虫型・ウイルス種）

グランクワガーモンの副官で野心家。仲間を裏切って逃げようとするがライズグレイモンに殺される。

ステイングモン（成熟期・昆虫型・フリー）

グランクワガーモンのもう一人の副官。温厚な人物であるがオオクワモンによって瀕死の重傷を負わされる。その後ベルスターモンの手によりパイルドラモンに生まれ変わり束の元へ行った模様。

コカプテリモン（成長期・昆虫型・ウイルス種）

ヘラクルカプテリモンの陣営にいるウイルス種デジモン。比較的温厚なためどちらの陣営へも行く。パイルドラモンの置手紙を見つける。

フライモン（成熟期・昆虫型・ウイルス種）

グランクワガーモン側の連絡要員。

クワガーモン（成熟期・昆虫型・ウイルス種）

グランクワガーモン側の戦闘員。

キャノンビーモン（完全体・サイボーグ型・ウイルス種）
グランクワガーモン側の砲撃兵。

クネモン（成長期・幼虫型・ウイルス種）
宴で酔っぱらっていたデジモン。

ベルスターモン（究極体・魔人型・ウイルス種）
風の如く現れる謎のデジモン。その正体は篠ノ之束のパートナーデジモン。

マグナキッドモン（究極体・竜人型・ウイルス種）
各地を放浪するトラブルメーカー。ベル子なる人物に告白するためエンジエウーモンの告白の練習に付き合うがとんだ誤解を生む。

メルキューレモン（ハイブリット体・突然変異型・ヴァリアブル種）
サイバードラモンを陰で操っていたデジモン。キマイラモン撃破後、一部のスピリツ

トを奪って逃走。謎に満ちているデジモン。

キマイラモン（ハイブリット体・合成型・ヴァリアブル種）

サイバードラモンがスピリットを多数取り込んだために誕生したデジモン。スペック上は究極体。マグナモンの「エクストリーム・ジハード」を受け本体のサイバードラモンのみを残して消滅する。

人間側

篠ノ之束

ISの開発者で一夏の姉千冬の友人。何故かヴリトラモンの正体が一夏だということを知っている。所持しているスピリットは土と闇。ジョグレス進化用プログラム、疑似デジメンタルなどともないものを開発している。箒に何か送った模様。

クロエ・クロニクル
東の助手的存在。

織斑千冬

ヴリトラモンの実の姉で回想のみ登場。

I S 編

人間界へ

旧ピラミッド跡

キマイラモンとの戦闘から丸二日経った。

「これからどうするつもりなんだ？」

ヴリトラモンはサイバードラモンたちに聞く。かなり衰弱していたサイバードラモンではあったがこの二日間の休息でどうか自分で歩けるところまで回復した。

「さあな、組織も自分で潰しちまったんだ。しばらくは罪を償う旅になるかもな。」

サイバードラモンは真面目に言う。隣ではエンジエウーモンが彼の手をしっかりと握っている。

「それに気になるのはメルキューレモンの野郎だ。俺を利用したアイツだけは絶対に許さねえ。」

サイバードラモンはこぶしを握り締めながら言う。そして、しばらくした後落ち着いて言う。

「まあ、俺たちも俺たちで自分なりにやっていくつもりだ。それと・・・」

サイバードラモンは照れくさそうな顔をする。

「アンタらには感謝しなくちやな。おかげで彼女と和解できたんだからよ……」
「今度は離すんじゃないわよ?」

リリモンはエンジエウーモンを見ながら言う。

「わ、分かつてる……って、離すわけないだろう!もう!」

サイバードラモンは顔を赤くしながら言う。ちなみにエンジエウーモンも顔を赤くしており、メタルグレイモンたちは恥ずかしそうに後ろを振り向いた。

「それじゃあ、元気でな。」

「ああ。」

「エンジエウーモン、今度は絶対離しちやだめよ。」

「はい。」

「バイバイ!」

一行は手を振りながら彼らを見送る。特にブイモンは彼らが見えなくなるまで大きく手を振っていた。

数十分後

サイバードラモンたちの姿が見えなくなった後ヴリトラモンたちはその辺の瓦礫に座りながら考えていた。

「これからどうするのイチカ？」

「もちろん今まで通りスピリットを探す旅だろうな。」

「でもさ、あののっぺらぼう野郎にスピリット取られちゃったわよ？」

四人は話し合いをしながら今後のことについて考えていた。そのとき

「その話、ちよつと待つてはくれぬか？」

四人の上から声がした。全員上に顔を上げると一斉に驚いた。上空からデュークモンが真紅のマントを靡かせながら降りてきたのだ。ヴリトラモンたちは慌てて離れる。デュークモンはゆつくりとさつきまでヴリトラモンたちが座つてた場所に降り立つ。

「あれってもしかしてデュークモン！」

ライラモンは驚きながら言う。

「うわあ！またロイヤルなんとかだ！」

「ナイツだ。」

「そう慌てる必要はない。」

デュークモンは武装を解除して一行を落ち着かせる。

「ところで話ってなんだ？スピリットの回収はまだ済んでいないぞ？」

ヴリトラモンはデュークモンの目的を気にしながら言う。

「そのスピリットの回収任務についてだが予期せぬことが起こった。」

「予期せぬこと？どういうことよ？」

「つまり考えもしなかったことが起こったってことよ。」

警戒するリリモンにライラモンが説明する。

「残りのスピリットが人間界にある。」

「人間界だと？どういうことだ？」

「つまり簡単に言おう。何者かの手により持って行かれたのだ。」

一行は何となく犯人の見当がついた。

メルキュレモンだ、奴が人間界に逃げたに違いない。しかし、デュークモンの答えは全く違っていた。

「……すまない、もう一度言ってくれないか？」

「何度聞いても同じだろうがスピリットを人間界に持ち去って行ったのは人間・篠ノ之束とそのパートナーデジモンだ。」

ヴリトラモンは驚きのあまり目を見開いていた。

束……さん……だと？

幼馴染の筈の姉であり姉千冬の友人、そして、ISの開発者である篠ノ之束だと!?

ヴリトラモンは思わぬ答えに混乱した。その様子をリリモンたちは心配そうに見る。

「篠ノ之束が残り全てのスピリットを持ち去ったかどうかはこのデュークモンにも分からぬ。しかし、分かったことは人間界とデジタルワールドの間で反応があったことで我々ロイヤルナイツも追跡に出たが、まんまと逃げられた。」

「でもさ、ロイヤル……ナイツってある意味エリートなデジモンの集まりなんだろう？ どうして捕まえられなかったんだ？」

「チビちゃん！もう少し話し方に……」

「気にすることは無い。篠ノ之東のパートナーは我々が予想していた以上に手ごわい相手だ。我々ロイヤルナイト随一の策士家ドウフトモンでさえ見事に一本取られたのだからな。」

「それで……俺にどうしろと言うんだ？」

ようやく落ち着いたヴリトラモンはデュークモンを見ながら聞く。

「我が君イグドラシルが言うことは一つ。ヴリトラモン、いや織斑一夏。人間界へ行け。」

「……」

デュークモンの言葉にヴリトラモンは黙る。

人間界へ行けだと？

あの腐りきった世界に。

女尊男卑に溢れかえった世界に。

今でもあの世界への憎しみは変わらない。

何も言わないヴリトラモンに対してデュークモンは考えたうえで言う。

「貴様があの世界を憎いと思うのは無理もない。しかし、このまま放置しておけば最悪

の事態になりかねないのだ。どうか、この頼みを聞いてはもらえぬか？」

ヴリトラモンは考えた後深呼吸をしてから答える。

「はつきり言わせてもらえば俺はあの世界に帰りたくない。でも、あの東さんのことだ。デジモンとデジタルワールドの存在を公にされたら厄介だ。だから今回は敢えて行く。」

これがヴリトラモンの決断だった。

イグドラシル

イグドラシル内では既にデジタルゲートの準備が完了していた。

「これですべての準備が整ったな。」

ロードナイトモンは開いているゲートを見ながら言う。

「しかし、彼が素直に要件を呑むとは考えられんが。」

オメガモンはヴリトラモンの性格を考えながら言う。

「元はと言えば貴様の作戦に問題があつたからこうなつたのではないのかドウフトモン？」

エグザモンは笑いながら言う。

「黙れい！そのことはもう言うな！」

ドウフトモンは不愉快そうに言う。

「そう言っている間に来たようだぞ。」

面子が荒れている中何一つ態度を崩さないマグナモンは冷静に言う。ゲートが開きそこからデュークモンとヴリトラモン、そしてリリモン、ライラモン、ブイモンと続いて出てきた。

「デュークモン、その三人は何だ？イグドラシルはヴリトラモンを連れて来いと言っていたんだぞ？」

デユナスモンがリリモンたちを見ながら言う。

「どうしても見送りたいと言われてな。このデュークモンの顔に免じて許してはくれぬか？」

「しかし・・・」

「いいではないかクレニアムモン。」

何かを言おうとしたクレニアムモンにオメガモンが制止する。

「このデジタルワールドと人間界は時間の差が大きい。一体いつ再会できるか分からないな。これぐらいは大目に見てもいいのではないか？」

「む……」

オメガモンの言葉にクレニアムモンは黙る。その一方でリリモンたちはヴリトラモンに別れの言葉を送っていた。

「しばらくお別れになっちゃうわね。」

ライラモンは寂しそうに言う。リリモンは別れたくないのか顔を上げようとしな

「リリモンもお別れを言いなさい。」

「う……うう……」

リリモンは泣いていた。いつかは訪れるかもしれないと思っていたがこんなに早く別れることになるとは。それを考えると何も言えない。そんなリリモンにヴリトラモンは敢えて近寄って顔を上げさせる。

「リリモン。」

「う……イチカ……」

「これでもう二度と会えなくなるわけじゃないんだ。だから、そんなに泣くな。」

「でも……でも！」

何か言おうとしたリリモンにヴリトラモンは口づけする。するとリリモンはヴリトラモンを強く抱きしめた。しばらくしてリリモンは落ち着き、ヴリトラモンはマントの中から首飾りを出して彼女の首に付けた。

「これ……」

ヴリトラモンもマントの中から同じものを出し自分の首に付ける。

「これはお前と俺との約束だ。俺は帰ってきてお前と会うまでこの首飾りを外さない。だからお前もなくすなよ？」

「う、うん。約束する。」

リリモンは涙を拭き取りながら答える。一方ブイモンの方は別れるつもりがオメガモンに驚いたことを聞かされる。

「え!?!俺も一緒に行くの!?!」

「ああ、イグドラシルの命令にはお前もついて行くようにと言われている。」
「じゃあ、チビちゃんともお別れなのね。」

ライラモンはブイモンを抱っこすると強く抱きしめる。

「姉ちゃんまでそんなに悲しい顔しないでくれよ。きつと帰ってくるからさ。」
「本当ね?」

「本当本当!」

「じゃあ、指切りげんまんする?」

「うん!」

ブイモンとライラモンは指切りをする。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本のくます、指切った!」

その後ブイモンはライラモンに抱き付く。

「行つてきます!」

「いつてらつしゃい。」

一通りの会話を終えるとヴリトラモンとブイモンはゲートの前に立つ。

「本来なら我々が行くべきなのだが………本当にすまないな。」

オメガモンは申し訳なさそうに言う。

「気にしないでくれ。必ずスピリットを取り戻してみせる。」

「では、健闘を祈る。」

マグナモンは敬礼すると同時にロイヤルナイトの一部の面子（プライドの高いドウフトモンなどはしない）も敬礼する。ヴリトラモンたちはゆつくりとゲートの中へと入っていく。

「イチカ!」

「チビちゃん！」

後ろを振り向くとリリモンとライラモンが笑顔で大きく手を振る。

「絶対に帰ってきてね!!」

「ああ！」

「チビちゃん頑張つてね〜！」

「姉ちゃんも元気でね〜！」

二人はやり取りを終えると人間界に続くゲートを突き進んでいった。

???

とある一軒家の中で一匹のオレンジ色のトカゲの様な生き物が階段を昇っていた。

「箒〜！朝だよ〜！箒〜！」

生き物は大きな声で名前を呼びながら一つの部屋に入る。部屋のベッドでは何かが

もぞもぞ動いていた。

「箒！朝だよ！ご飯の時間だよ！僕、お腹ペコペコだよ！」

生き物はベッドに飛び乗り動いている物を掻きぶる。すると布団の中から一人の少女が髪を掻きながら起きる。

「うん」

少女はまだ眠そうな顔をしながら目を擦る。

「また一夏の夢を見たな……」

「ねえねえ！朝だよ！朝だよ！」

「わかってる、おはようアグモン。」

少女・篠ノ之箒は生き物アグモンを見ると笑顔で挨拶する。

「早くご飯にしようよ！」

「はいはい。」

アグモンに急かさねながら箒は起きて着替えを始める。

「そう言えば箒ももうすぐで高校生だね。」

「ああ。」

「でも、僕も本当について行っても大丈夫なの？その……IS学園に？」

アグモンは心配そうに言う。そんなアグモンを箒は髪を梳かしながら言う。

「大丈夫だ、私を信じろ。」

「うんうん」

「それよりもご飯じゃなかったのか？」

「あつ、すっかり忘れてた！」

「ハハハハ。」

「ねえ、今僕のことですら笑ったでしょ？」

「違う違う。」

「いいや、絶対に笑ってた！」

「違うって言っているだろ？」

そんなこんななことを言いながら二人は下へ降りて行った。

姉弟再会

日本のとある街の公園

人がほとんど寝静まり、誰もいなくなつた街の公園で一人の少年が青いトカゲのような生き物とベンチに座りながら買ったパンを食べていた。季節は初春で寒いはずなのだ。だが二人は何事もないようにパンを頬張る。

「……コンビニでパンやおにぎり買うなんて本当に久しぶりだな。」

少年は懐かしむように言う。隣にいる生き物は反対にパクパクと買ったパンとおにぎりを食べている。

「兄貴……ムシャムシャ……コンビニって場所って……モグモグ……本当に便利だね！」

「ああ……そうだな。」

少年はそう言いながらパンをかじる。

ヴリトラモンが人間界に来てから既に一日が経っていた。最初は外見をどうするか迷っていたが幸いイグドラシルから受け取った擬態用プログラムで人間の姿に変える

こともできたし、ブイモンも普段はデジヴァイスに入り込むという方法が見つかったため周りから疑われる心配がなかった。

しかし、流石に一日目は束とスピリットの在処を見つけることができなかった。それだけにヴリトラモンは今後どうすればいいのかを考えていた。

「早く束さんを見つけないければ……でも、スピリットの反応もないしどうすれば……」
ヴリトラモンは頭を抱えてこれから先の出来事を考えるのであった。

翌日

「……帰ってきたか。」

ヴリトラモンはある一軒家を見る。家には「織斑」と書いてある。

『兄貴、ここは？』

ブイモンはデジヴァイスの中から聞いてくる。

「ここは俺の……いや、元の俺の家だ。」

ヴリトラモンは門を開け、玄関へと入っていく。

『勝手に入ってもいいの？』

「ああ、千冬姉はいつも仕事で忙しいからな。多分いないだろうがこっそり入っていくぞ。」

ヴリトラモンはこっそりと玄関を開けて入る。中はシーンとして静かだったがあちこちにビール缶やコンビニ弁当のゴミがたくさん入ったゴミ袋が置いてあり、酒臭かった。

「臭いな……昨日千冬姉が誰かと酒でも飲んでいただけなのか？」

ヴリトラモンは鼻をつまみながらも二階へと上がっていく。

「二、三年ぶり……と言っても俺にとつては十年ぶりくらいか。自分の部屋に入るのは。」

ヴリトラモンは自分の部屋のドアを開ける。中に入ると少し散らかっていたがそこには懐かしい自分の部屋があった。

「ここが俺の部屋だ。」

ヴリトラモンは部屋のドアを閉めるとブイモンをデジヴァイスの中から出す。

「ふう〜ここが兄貴の部屋か。」

デジヴァイスの中が窮屈だったのかブイモンは腕を回しながら言う。ヴリトラモンは本棚の中にあるアルバムを取り出す。その中には幼い頃の自分と千冬の写真が多く貼ってあった。

「懐かしいな……この頃が。」

ヴリトラモンは懐かしい写真を見ながら言う。

「俺にも見せてよ、兄貴！」

ブイモンはジャンプしながら言う。

「ほら。」

ヴリトラモンはベッドに座り、ブイモンを膝の上に乗せアルバムを一緒に見る。

「うわあ……これが昔の兄貴か！」

ブイモンはアルバムを見ながら言う。

「この制服を着ている小さい子供が俺で隣にいるのが千冬姉だ。」

ヴリトラモンは入学式の頃の自分の写真をブイモンに見せるとベッドから離れカー

テンを開け、窓から外の風景を見る。

「ねえ兄貴、思ったんだけど兄貴とこの……千冬って人以外兄貴の家族っていないの？」

ブイモンはアルバムを見ながらヴリトラモンに聞く。ヴリトラモンは窓の方を向いたまま答える。

「ああ、千冬姉はそのことについては一切何も言わなかったからな。」

ヴリトラモンは窓の外を見ながら考える。

(どうするか……このまま千冬姉と会うにも突然俺が帰ってきたとなると本物かどうか怪しむだろうし隠し通せる自信がない。かと言ってデジモンの存在を信じるどころか俺を偽物と言つて警察に突き出すかもしれないな……)

「兄貴、兄貴。」

ブイモンは部屋のドアが開くのに気がつき声を掛けるがヴリトラモンは答えない。

(でも、俺にとつての十数年間、何も言えないままここから去るのも心残りになるし……どうしたら……)

「兄貴!」

「ん?」

ヴリトラモンはブイモンの方を振り向く。ブイモンはドアの方を見ていた。

「チビ?」

ヴリトラモンはドアの方を見る。ドアは開いており、一人の女性がヴリトラモンたちを見ていた。長い髪は寝癖なのかボサボサとしていたが見る限り懐かしい顔だった。

「ち……千冬姉?」

ヴリトラモンは思わず彼女の名を呼んだ。

「千冬姉?じゃあ、この人が兄貴の……!」

言いかけたブイモンの口を慌てて塞ぐ。千冬は数年ぶりに見る弟の姿に唾然として

いた。

「い……一夏？本当に一夏なのか？」

千冬はふらつきながらヴリトラモンの方へと近づいて行く。ヴリトラモンは慌ててブイモンを掴み窓を開け外に出ようとすする。

「待ってくれ、一夏！」

千冬は慌てて呼び止める。ヴリトラモンは千冬の方を見る。

「やっぱり……あの時のことを恨んでいるのか!?お前が誘拐されたときのことを？あの時何も気がつかず助けることができなかつた私をそんなに……」

「違う！」

自分のことを責めている千冬にヴリトラモンは言う。

「違うんだ……」

「でもあの時……」

「俺は一夏ではない。」

「え？でも……」

「確かに今の見た目と記憶は織斑一夏だ。でも、本当の姿は全く違う。もう人間でもないんだ……」

ヴリトラモンは拳を握り締めながら言う。

「一夏？」

千冬は声を掛けるが一夏は震えたままだった。

しばらく硬直した後ヴリトラモンは真剣な目で千冬にこれまでのことを話した。

千冬の優勝で用済みになった自分が暴行を加えられたうえに殺されたこと。

デジタルワールドでデジモンとして転生し生きてきたこと。これまでの戦いのこと。

そして、とある任務で再びこの世界に戻ってきたことを。

最初はヴリトラモンの言っていることを信じられなさそうな顔をしていた千冬ではあったがヴリトラモンは擬態を解き、本来のデジモンの姿へと戻り見せる。その姿に千冬は言葉を失った。

「この通り人間ですらないんだ。記憶は同じでも俺はもう織斑一夏じゃないんだ……。」

ヴリトラモンは跪く千冬に事実を告げる。千冬は黙ったままだった。

「兄貴……。」

ブイモンは心配そうに千冬を見る。

「俺の言えることはこれだけだ。ここに心残りがあつたから来たんだ。」

「心……残り?。」

「アンタの様子を見ておきたかつたんだ。」

「私の?。」

「一目でもいいからもう一度千冬姉が俺がいなくなっても大丈夫だったかどうか見てお

きたかったんだ。」

「……………」

「邪魔をしたな。」

ヴリトラモンは自分の言いたい事を言い終わるとブイモンを担いで部屋を出ようとする。

「……………すまなかった。」

千冬の一言にヴリトラモンは千冬の方を見る。千冬は顔を上げると顔は涙でぐっしよりと濡れていた。こんな姉の姿を見たのは彼にとっても初めてのことですすがに驚いた。

「私は……………後悔していた……………あの時、お前の誘拐を知ったあの時から……………」
震えた声のまま千冬はゆっくり大会後の後悔を聞かせた。

第二回モンド・グロツソ決勝戦優勝後の授与式で、いるはずの一夏がないことに不審に思っていたこと。

誘拐犯の居所を突き止め現場に着いた頃は既に犯人も一夏の姿もなく、長期にわたる捜査の末、打ち切られ絶望し数日間泣き崩れていたこと。

なんとか孤独感を紛らわそうと捜査に協力してくれたドイツ軍に借りを返すために一年ほど教官を務めたが結局何も変わらなかったこと。

その後日本に帰国し、I S 学園の教師にならないかと誘いがきたものの立ち直れず今まで酒に溺れていたこと。

ヴリトラモンは黙ってその話を聞き続けた。

「……本当に馬鹿だった。お前のことをもつと大切にしているなら大会を棄権しても助けに行くべきだったのに……お前をみすみす見殺しにして……知らないまま優勝するなんて……」

「……兄貴。」

「……」

「私は……姉失格だ。」

千冬は拳を握り締める。そんな姉の姿にヴリトラモンはブイモンを降ろして近寄る。
「千冬姉。」

ヴリトラモンは千冬の顔を上げさせる。

「一夏……」

「俺ははつきり言つて千冬姉のことを恨んでいた。デジタルワールドを旅していた時も

そうだった。でも、仲間と出会って、いろいろしていくうちに考えるようになったんだ。俺は千冬姉に守ってもらっていたんだってな。」

「……………」

ヴリトラモンの言葉に千冬は黙る。

「千冬姉もこの女尊男卑の世界に染まって俺のことを見捨てたんだと思っていたんだ。唯一の肉親なのに疑ったりしてごめん。」

「一夏。」

「俺は確かに千冬姉から見ると化け物かもしれない。でも、心は人間織斑一夏のままだ。こんな俺でも弟と思ってくれるか？」

ヴリトラモンはしゃがんで千冬のことを見つめる。その目は昔の一夏と変わらないものだった。

「……………ああ、お前は私の弟だ。私の弟の一夏だ。」

千冬はヴリトラモンのことを抱きしめる。ヴリトラモンも千冬のことを抱きしめた。

「ただいま、千冬姉。」

「お帰り、一夏。」

これによりヴリトラモン、織斑一夏は姉千冬と和解し、ブイモンも加え一緒に暮らすことになったのであった。

I S 学園入学

とある日の昼間

「よし、行くぞチビ。」

「うんー」

ブイモンは一夏のデジヴァイスの中に入る。

一夏と千冬が和解してから数日が過ぎた。相変わらずスピリットと束の情報は手に入らないが十数年ぶりの人間としての生活に満足していた。

「兄貴、今日の買い物終わったら散歩しながら帰ろうよ！」

「そうだな……」

一夏は空を眺めながら言う。千冬には高校受験はどうするかと言われて最初は任務のこともあるからやめようかと考えていたが学生と言う身分を持つていた方が都合がいいということもあり考え直して近いうちに近くの高校を受験することにした。

買い物を通り済ませて帰り道、一夏は買い物袋を手にとって歩いていった。

「さて、帰ったら受験科目を確認し直さないといけない……」
歩いている途中で目の前に置いてある物体に目がる。

『IS打鉄』

日本純国産ということもあり展示用のようだ。そう思った矢先一人のマスクを深く被った男が一夏のすぐ横を走り去っていった。一夏は背後から物凄い殺気を感じ、後ろを振り向いた。

「万引き！万引き！！」

コンビニの制服を着たおばさんが鬼の形相、それも猛スピードで走ってきた。あまりの形相に一夏は慌てて道を開ける。

その直後一夏は展示用の打鉄に手を触れてしまった。

打鉄は輝き、気がつけば打鉄を身に纏っていた。ISの適性がないと思っていた一夏はこの状態に驚いてはいたがさつきまで普通に移動していた通行人たちは揃いに揃って目を丸くして見ていた。

「おい、あれ見ろよ！」

「お、男がISを起動させている!？」

「こ、これってスゲエことじゃねえか？」

よりによって自分にI S 適性があつたとは。
(・・・・・・・・・・なんかよく分からんが最悪だ。)

数日後織斑家

「勉強ははかどっているか？」

夕食の最中千冬は分厚いI S 参考書を見ながら食事をしている一夏に聞く。

「ああ、デジタルワールドに長い間いたおかげである程度の知識は理解できているから

そこまで苦勞はしていない。しかし、本当にすまないな千冬姉。この間は表で騒ぎを起こしちまって。」

「別に謝ることじゃない。」

「でもさ、兄貴が行っても本当に大丈夫なの千冬姉ちゃん？」

ブイモンは夕食のおかずを食べながら聞く。

「まあ、ISを起動させて騒ぎを起こした以上はIS学園に入学したほうがいいだろう。はつきり言つて家で情報を集めるにも限度があるからな。それに入学してしまえばあらゆる国家も干渉できなくなる。強いて言えばお前の正体がばれる危険性を極度に抑えられるということだ。」

「……確かに考えてみればそれが一番の方法だったのかもな。」

「それにいつお前が帰るか分からないからな……。」

千冬は少し寂しそうな顔をする。それは一夏にとつても同じことだ。束を見つければピリットを回収したらどの道デジタルワールドに戻らなければならぬ。その間の千冬といられる時間もできるだけ大切にしたい。それ故に短い期間、分厚いISの参考書を千冬との協力である程度知識を頭に叩き込んでいる最中であるのだ。

「でもさでもさ、俺はどうすればいいの兄貴？」

ブイモンは口を拭きながら聞く。

「お前はデジヴァイスに入っていれば大丈夫だろうな。」

「でも、あの中にいるのもなく。」

「寮の部屋の中で出してやる。相手がいなければの話だが。」

「ブイモンならぬいぐるみのフリをしていれば誤魔化せると思うが、男がぬいぐるみを持つというのもな……」

ブイモンに関しての問題点もあつたが一夏は I S 学園に入学することは既に決まっていたのであつた。

I S 学園入学前日

入学前日になり一夏は自分の荷物をまとめ終えた。

「やっと住み慣れたのにもうお別れなんて寂しいね兄貴。」

ブイモンは衣類を畳んで鞆に入れる。

「別に休みとかになれば戻れるようになる。もっともお前だけ残ってもいいんだぞ？」
「ひどいよ兄貴〜！」

「冗談だ。」

「冗談を言いながらも二人は入学前最後の夕食を準備する。千冬は教師のため前日に先に学園の方へと行った。

「ねえ兄貴。」

「なんだ？」

「俺たちここに来てからずいぶん経つよね？」

「ああ。」

「姉ちゃんたち元気かな？」

「……………」

一夏は首に掛かっている首飾りを見つめる。デジタルワールドはこっちの世界よりも時間の流れが速い。向こうではもう数カ月過ぎていてもおかしくない。

「……………あのリリモンたちのことだ。多分大丈夫だろう。」

「だといいんだけど……………」

「そんなことを言っている間にお前もライラモンと約束していたんじゃないのか？」

「あつ。」

「向こうに戻るまでに完全体にまで進化できるようになるんだろ？それとも恋しくなったのか？」

「いい、言われなくてもわかってるやい！」

ブイモンをからかいながら一夏は夕食を作る。

「学園で何か情報が掴めればいいが……」

翌日

一夏は学園の教室の前で待機していた。隣には学園の用務員を名乗る男、轡木十蔵がいる。

「では織斑一夏君、しばらくここで待っていてください。」

「わかりました。」

一夏は男性初の I S 適合者で学園唯一の男子生徒であるため、混乱防止のため入学式には参列しなかった。

一方教室では

「今から転校生が来ます。皆さん、あまり騒がないようにしてくださいね。」

副担任の山田真耶は生徒に注意を言う。

(まさか一夏が私のクラスになるとはな……)

千冬はそう思いながらも教卓に立っていた。しかし、そんなクラスの中で大いに期待している生徒がいた。

「もうすぐだ……もうすぐ一夏に会える……」

箒は期待を寄せながら席に座っていた。

『ねえ、箒。一体何を楽しみにしているの?』

箒の制服のポケットの中に入っているデジヴァイスの中からアグモンの声が聞こえる。

「少し前のニュースで一夏が男性初の I S 適合者だっという報道があつたんだ!」

『それで?』

「今回の転校生、入学式に参列していなかったらどう？つまり……」

『その一夏って人だっているの？』

「そう、アイツ以外にいないはずがない！久しぶりに一夏に会えるんだ。楽しみだな……」

『楽しそうだね、箒。』

嬉しそうにしている箒にアグモンは一夏がどうい人物なのかと想像するのであった。

「それでは入ってください。」

「はい。」

一夏は教室の扉を開けて入る。

教室では女子生徒たちが学園唯一の男子生徒にあるものは好奇心、あるものは性格を予想しながら開いていく扉を見つめる。そんな生徒たちを他所に一夏は教室に入る。

「では自己紹介をお願いします。」

「織斑一夏です。趣味は運動、家事、読書。嫌いなのは人種差別です。よろしくお願いし

ます。」

かくしてデジタルワールドから帰還した一夏の十数年ぶりの学園生活が始まるのだった。

クラス代表と幼馴染み

一年一組教室

「織斑……つて、もしかしてあの千冬様の弟？」

「きゃあああ〜！代わってもらいたい！」

「イケメン！それになんかすごく優しそう〜！」

一夏の自己紹介に女子生徒のテンションは異常と言うべく高まっていた。

「お前ら、静かにせんか！」

流石に煩さに千冬は女子生徒たちに一喝する。

「きゃあ〜！本物の千冬様に怒られちゃった〜！」

「もつと叱って！」

「でもたまには優しくしてください！」

「黙れと言ってるだろうが馬鹿共が！」

「きゃああ〜!!」

「……はあ。」

女子生徒たちは静かにするどころかむしろ千冬に叱られたことでさらにヒートアップ

プする一方だった。そんな中箒だけは静かに一夏のことを見つめていた。
(一夏……やっぱり一夏だったんだな。)

自己紹介後の休憩時間

「一夏！」

箒は一夏の席にやって来た。教科書を読んでいた一夏は箒の事を見る。

「箒じゃないか！随分久しぶりだな。」

「一夏こそ元気そうでよかった。六年も過ぎたから私の事を忘れたかと思った。」

「忘れるも何もまさかお前とこんなところで会えるとは驚いたぜ。」

箒の六年間も長かったが一夏は十年以上もデジタルワールドにいたため箒に会うのは本当に久しぶりだった。そのとき丁度チャイムが鳴った。

「あ、もうこんな時間か。じゃあ、一夏また来るからな！」

箒は笑いながら自分の席に戻っていく。

『ねえ、箒。』

「ん？なんだアグモン？」

『あれが箒の言っていた人？』

「ああ、あれが私の幼馴染の一夏だ。」

『なんかあの人からデジモンの臭いがしたような気がするんだけど……』

「一夏からか？まさか。」

『でも、確かに匂っていたような気がしたんだけど……』

「気のせいだろうか？お前何か悪い物でも食べて嗅覚がおかしくなったんじゃないか？

だったら……」

『うわあく！く、薬だけは勘弁してよ！僕、あんな苦いもの飲みたくないよ！』

「ははははは。」

箒は笑いながらアグモンをからかったのであった。

「え〜ここままで分からない人はいませんか？」

副担任の山田真耶は教科書を読みながら生徒たちを見渡す。教え方も丁寧なこともあり一夏にとってもわかりやすいものだった。

「織斑君、分からないところはありますか？」

一夏はノートにある程度の説明を書き足しながら真耶の方を見る。

「大丈夫です。」

「そうですか。」

一見教科書しか見ていないような感じにしか見えなかったのか真耶は安心したような顔をする。

「先生の教え方はわかりやすくて助かります。」

「え？そうですか？」

「参考書だけだとなんかピーンと来ない所もあったので・・・」

「うん、山田先生の教え方本当に上手！」

「教え方も丁寧だしね！」

「え、ええ……そう言うこと言われちゃうとなんか恥ずかしいです。」

一夏から始まった褒め言葉で真耶は授業が終わるまで恥ずかしそうに顔を赤くしていた。

真耶の授業後の休み時間

「ちよつと宜しくて?」

「何か御用かな? イギリス代表候補生セシリア・オルコットさん。」

棘の含んだ言葉で聞いてくる縦ロールの長い金髪の少女に対して一夏は普通に答え

る。

「まあ、男の分際で私の事をご存じなのですね。」

「知っているも何も大の男嫌いで俺にとつては有名人名みたいなものさ。」

「なんですのその言い方は！」

「自己紹介で言ったと思うけど俺は人種差別する人間が大っ嫌いなんでね。アンタもそのうちの一人ということさ。」

「まあ、黙って聞いていれば！」

セシリアが何か言おうとしたときチャイムが鳴る。

「くっ、また来ますわよ！」

「おう、いつでも話し相手になるぜ。尤も他人を見下さない話ならだけど。」

セシリアは怒りを露わにしながらも自分の席へと戻っていった。

次の授業

次の授業は千冬がIS各種の武装について説明する授業……なのだが。

「授業に本格的に入る前にまずクラス代表を決める。」

千冬の言葉に生徒全員が注目する。

「クラス代表は普通に言えば学級委員みたいなものだ。学校行事のまとめ役をしたり、クラスを代表して試合をしたり……まあ、簡単に言えばクラスの顔だな。他薦、自薦どちらでも構わん、誰かいないか？」

「はーい！私織斑君を推薦しまーす！」

「私も！」

「私も！」

あちこちの席から一夏への推薦の声上がる。

「織斑先生、拒否権は？」

「ない、潔く受け入れてくれ。」

「ですよね。」

「夏はため息をしながら言う。

「わ、私も一夏を推薦する……。」

「お前もかよ箒。」

「ちよつと待つてください！納得いきませんわ！」

セシリアが突然横槍を入れてくる。

「このような選出は認められませんわ！下等な男がクラス代表なんて、このIS学園での良い恥じさらしですわ。私にそんな屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか!？」

余程気に入らないのかセシリアは席から立ち上がり抗議を始める。

「実力からすればこのわたくしがなるのが必然！それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ていたのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！大体！文化として後進的な国で暮らさなければ行けないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で……。」

「はいはい、ストゥゥップ!!」

「なっ!?!」

「一夏の言葉でセシリアは話を中断する。
「アンタのこの国が気に入らないことはよく分かった。でも、仮にも代表候補生だろ？もう少し自分の立場をわきまえたらどうだ？」

「なんですって!」

「そもそも代表候補生たる者が他国の誹謗中傷してどうすんだよ? お前のその発言で日英戦争が始まると言ってもおかしくないんだぞ?」

「そ、それは……」

動揺するセシリアに一夏はため息をしながら真実を述べる。

「それとアンタは日本を文化としては後進的な国だつて言つたけどよ。俺たちがこれから使うI Sを産み出したのは、この国の女なんだぜ?」

「うっ!」

一夏の指摘にセシリアは何も言えなくなる。

「それに俺から言わせてみればイギリスの飯はまずい! 食なら日本の方が上だ。」

「織斑、それは言い過ぎだ。オルコット、お前も……」

「もう許しませんわ! 私をコケにして……こうなれば決闘ですわ!」

セシリアは一夏に指を指しながら威張るように言う。

「本気で言っているのか?」

「勿論ですわ、私は今ここで織斑一夏に対して決闘を申し込めますわ。」

「面白い、いいぜ。お前の挑戦状にのつてやる。」

「威勢がいいのも今の内ですわ! 負けたらあなたを私の下僕……いや、奴隷にして差

し上げますわ！」

「ハハハ、いいねえ。その度胸。でも、勝負となったら・・・」

さつきまで陽気に話していた一夏は突然目つきを変えセシリアの方を見る。その目から発する殺気は思わず彼女を震えさせる。

「俺も容赦はしない。」

その後一夏対セシリアの代表決定戦は一週間後に行うことが決まった。

放課後職員室

「すまない織斑先生。流石にあれはやり過ぎた。」

一夏は申し訳なさそうに頭を下げる。

『兄貴は何も悪くないよ。悪いのはあの金髪女だよ!』

デジヴァイスの中からブイモンが言う。

「まあ、早く注意を言わなかった私にも問題があったから今回のことは目を瞑ろう。」

「ああ、じゃあ今日はもう寮で休むわ。」

「わかった。鍵は山田先生から受け取ってくれ。」

「分かった。それじゃあまた明日。」

何気ない会話をした後一夏と千冬はそこで別れたのであった。

寮の一室

「じゃあ、私はシャワーを浴びているからアグモンはここで隠れててくれ。」

「うん、わかった。」

寮の部屋のベッドの下の隙間にアグモンは入る。ぬいぐるみのフリをすれば問題はないのだが万が一ということも考えて一回ベッドの下に隠れることにしたのだ。

「寝るときはぬいぐるみと誤魔化せれば問題ないからそのときはいつものようにしよう。でもいびきは気を付けろよ。」

「わかってるよ。箒は心配症だなく。」

「夕食は時間になったら持つてくるから大人しくするんだぞ。」

そう言うとき箒はシャワールームに入っていく。

数分後

「まさか相部屋だとはな……」

一夏は頭を抱えながら言う。シャワールームの方からはシャワーお湯の流れる音が聞こえる。

「弱ったな、誰かもう来ているようだし。取り敢えず買い足しに行つてから戻るか。」

『兄貴、俺そろそろ外に出たいよ〜!』

「しょうがねえな。」

一夏は一回部屋に入るとデジヴァイスからブイモンを出す。

「俺はお前の夕食の買い足しに行つてくるからその間ベッドの下にでも隠れてろ。」

「わかつた!」

そう言うで一夏は部屋から出て行つた。

「さて、俺も兄貴が行つての間ベッドに隠れるとするか。」

ブイモンはそう言うとおベッドの下に入ろうとする。

「あれ? 箒、もうシャワーは……」

「……………」

「……………うわあああああああ!!!」

ベッド下にあったアグモンと顔が合い、二人は同時に驚いて部屋が大パニックになる。

「うわああああ!!! 兄貴!!!」

「箒!!!」

二人は大混乱しながら走り回る。その声箒も気づき急いでバスタオルを巻いて部

屋に来た。

「どうしたアグモン!？」

それと同時に声を聞いた一夏が部屋に戻ってくる。

「どうしたチビ!？」

またもや二人の顔が合う。

「い、一夏!？」

箒は驚いたあまり体に巻いていたバスタオルを落としてしまう。

「あっ……………」

「あ……………」

「きゃああああああああ!!!」

「うわああああああ!!!」

二人は同時に悲鳴を上げて驚き、箒は顔を赤くして思わず一夏の顔を打ってしまった。その衝撃で擬態プログラムが解除してしまい一夏はヴリトラモンの姿に戻ってしまう。

「しまった!」

打たれたことよりも擬態が解けてしまったことに驚いている一夏に箒は目を丸くするばかりだった。

「一夏、その姿は……………」

あつた。入学初日、一夏はよりによって箒に正体を知られてしまうという大失態をしたので

炎龍降臨

一夏&箒ルーム

「それじゃあ……一夏はデジモンでもあり人間でもあるということか?」

「まあ簡単に言えばな。」

正体が知られてしまいあっさりと自分のことを話す一夏に箒は驚きながらも聞き入れる。

「このことを知っているのは千冬姉とお前だけだ。黙っててくれるか?」

「それは勿論だ。(まさか一夏が一度死んでいたとはな……それも向こうで恋人【リリモン】まで作っていたなんて。ウウ……私の一夏が……)」

何か悲しいオーラを発する箒に対して違和感を感じる一夏ではあったが取り敢えず一件落着になったのであった。

一週間後アリーナ

一夏は一週間の間、セシリアの専用機「ブルー・ティアーズ」のデータを見てどのように攻略するのかを考えていた。

他に箒が剣道部へ勧誘してくれたのだが正体をばらすようなことはできるだけ避けたいという理由で断った。箒は残念そうだったが一夏の正体を隠すためなら仕方ないと納得してくれた。以前の彼女なら強引にでも入れると思っていたが……。

第一ピットでは千冬と真耶、そして、ISスーツを纏った一夏が待機していた。一夏は倉持技研から届いた自分の専用機『白式』を見る。

「これが俺の専用機『白式』か。」

一夏は白式を装着し始める。だがここで異変が起きた。

（ん？これはどういうことだ？白式のデータが書き換えられていく……）

一夏の様子に千冬たちは違和感を感じた。装着された白式は装甲を分解・再構成を開始し、白式とは全くかけ離れた外見へと変化させてゆく。その姿は一見龍を思わせる。

「これは……」

一夏は自分の姿を見ながら驚く。その姿は自分の本当の姿であるヴリトラモンに酷

似しているが頭部は若干グレイモンのように見えた。一方千冬たちは白式が全く異なる機体に変化したことに混乱していた。

「これはどうなっているんですか!?!織斑先生!?!」

「私にも分からない。こちらに届いたときも何も異常はなかったはずだが……」

心配をしている二人を他所に一夏はISの動きを確認していた。

(動きは本来の姿と同様で大丈夫か……しかし、どうして……まあいい。)

「織斑、体に異常はないか?」

「大丈夫です。いつでも行けます。」

一夏はそう言うのアリーナの方へと飛んで行く。その姿を真耶は心配そうに見る。

「大丈夫なんでしょう?行かせても。」

「本人が問題ないというのならいいだろう。後で倉持技研に問い合わせてみるが……」

千冬は何となく元凶が頭に浮かんだがそれを掻き消した。

「織斑一夏、白式……いや、炎龍出る!」

一夏はアリーナ上空へと飛んで行く。

アリーナでは既にブルー・ティアーズを身に纏ったセシリアが待機していた。

「遅いですわね……今更腰を抜かして逃げたのでしょうか……」

そこへ白式……いや、炎龍を身に纏った一夏が来た。全身装甲の上龍のような姿に客席にいた生徒たちは目を丸くしていた。特にその中でも箒はかなり動揺していた。

「なあ、アグモン。あれってI Sだよな？」

『うん、だって頭の形がこの間のとは少し違うよ？』

「どうしてあそこまでそっくりなんだ？」

箒は疑問に感じながら一夏の方を見る。

「よく逃げずに来ましたのね。てつきり、私に怖じ気づいて逃げ出したかと思いましたがわよ？」

「ああ、ちよつとトラブルがあったんでな。少し遅れちゃったぜ。」

見下すようなセシリアの言葉に一夏は平然と言い返す。

「アナタに一つチャンスをおあげますわ。この勝負の結果は私が勝つことは明白の理。今すぐ謝れば許してあげないこともありませんでしてよ。」

「へえ、ずいぶん大きく出るな。でも、自分の力を過信し過ぎると身を滅ぼすって言うの

を知らないのかい？」

「なんですすつて？」

「おつと、そろそろ試合だ。んじゃ、お互い悔いが残らないような試合にしようぜ。」

試合開始のブザーが鳴り、一夏は挑発するかのような構えを取る。それがセシリアをより苛ただせる。

「悔いなどと……この私、セシリア・オルコットにそのような事は起きませんわ!!……：……
そして、お別れです！」

セシリアはレーザーライフル、「スターライトmkⅢ」を撃つ。一夏は軽々と避ける。
「よく避けられましたわね。ではこれはどうです！」

更に本機の最大の特徴であるブルー・ティアーズ4機を腰から分離させ、ビットによるオールレンジ攻撃が開始する。

「さあ、踊りなさい！私とブルー・ティアーズが奏でるワルツで！」

「遅せえなあ……これならリリモンのフラウカノンやライラモンのライラシャワーの方がよっぽどマシだぜ……」

表情はわからないものの一夏は聞こえないぐらいの小さな声で呆れながら攻撃を避けていく。

試合開始二十分後

「な、何故当たりませんの．．．．．」

セシリアは焦りを感じながら攻撃を避け続ける一夏を見る。

「ほら鬼さんこちら、手のなる方へ〜」

顔は見えないが一夏に疲れている様子はない。一方のセシリアはブルーティアーズによる攻撃で精神力が削られていく一方だった。にもかかわらず一夏のシールドエネルギーはほとんど減っていない。

「どうした？もう終わりか？」

攻撃が止み、一夏はセシリアを見ながら言う。

「今までの戦い方から考えればどうやらまだ完全には使いこなしていないようだな。顔から丸わかりだぜ？」

「くっ！馬鹿にして！」

セシリアは屈辱を感じながら攻撃を再開する。

「馬鹿だな。そんな状態での攻撃が当たると思っているのか？」

「う、うるさい！」

「えっと俺の武器は……これか。」

一夏は両腕の装甲からブレードを展開する。そして、一つ一つ丁寧にビットを切り裂いて破壊していく。

「まだです……私はまだ！」

セシリアは最後の抵抗かブルー・ティアーズの腰元から2本のミサイルビットを発射する。

「やはり判断が甘いな。」

一夏はあっさりとミサイルを避ける。

「そ、そんな……」

「さあて、セシリアさんよ。俺はあんたに言ったよな？容赦はしないと。」

セシリアは一夏を見て思わずゾツとした。一夏の全身から凄まじいオーラを発して

まさに獲物を狩る獣のように見えたからだ。

「さて、アンタも武器がなくなっちゃったから素手で決着をつけようじゃないか？」

一夏はゆっくりとセシリアに近寄る。セシリアは震えながらスターライトmkⅢを構えるが一夏は一瞬にして近づき、腹部に強烈な一撃をお見舞いする。

「ぐうー！」

セシリアは思わず腹部を両腕で押さえるが一夏は距離を取る。

「お前にちよつとしたものを見せてやる。」

「う・・・？」

「はああああああああ!!!」

構えを取り一夏は声を上げる。すると炎龍の全身が赤く発光し始め、やがて燃えているような姿になる。そして、セシリアより上空へと飛ぶ。

「バーニングダッシュユー！」

一夏は高速で落下をし始め、セシリアに突っ込んでいく。

「くっっ！」

セシリアは避けようとし始めたが既に一夏は近くに迫っていた。

「終わりだ！」

一夏は急停止すると赤く発光したエネルギーのみがセシリアに突っ込んでいく。セ

シリアは避けることもままならず命中し、地面に激突する。
「がああ!!」

同時にシールドエネルギーもゼロになる。

『勝者……織斑一夏。』

無機質な機械音声が一夏の勝利を告げる。一瞬静かになった客席ではあつたがすぐに歓喜の声を上げる。

「あれがデジタルワールドで実力を身に付けた一夏の力か……。」
箒は唾然としながら言う。デジモンの姿でもないにもかかわらず、あそこまでの実力を誇るとは予想以上のものだった。

管制室

「す、凄いです〜!」

「あれが一夏の実力か……。」

千冬と真耶は一夏の圧倒的な実力に驚いていた。

「まさかオルコットさんをほとんどノーダメージで倒すなんて……」

「これでは私でも敵わないかもしれないな……」

そこへセシリアを抱きかかえた一夏が入ってくる。

「オルコットさんが気を失ってしまったから保健室に運ぼうと思うのですがよろしいですか？」

「……ああ、許可する。」

「それと織斑先生。」

「なんだ？」

「これって俺がクラス代表辞退するって言うことはできないんですか？」

「お前が辞退するにしてもオルコットが代表を引き受けるかどうかによつてだな。」

「やっぱそうなるか。」

「私の考えでは他のクラスのバランスを考えてオルコットを代表にしたほうがいいと思うのだが……」

「まあいい、それは彼女が目覚めてから聞くさ。」

「そうか。」

「じゃあ、俺はこれで。」

そう言うで一夏はセシリアを抱えながら管制室から去って行った。

???

「東、予定通り書き換えには成功したわよ。」

薄暗いラボの中でマスクを外し、代わりにサングラスを掛けるベルスターモンは椅子に腰を掛けながら言う。

「お疲れさまベルちゃん〜！これで心置きなくいつくんの力を調べられるよ〜！」

「しかし、本当によかったのでしょうか？白式をあんな風に改造してしまつて……」

クロエと共に散らかつている書類を片付けているパイルドラモンが心配そうに聞く。

「大丈夫だよ、パル君。別に正体をばらすようなことはしないのだからね。」

「しかし、こんなことを向こう（倉持技研）にはどういう風に言い訳するんです？」

「それは本人に合わせて形態移行つて誤魔化せばいいよ。」

「まあ、その方が敢えて都合がいいのかもしれないけどね。」

「クロエ、君まで……」

「それにこうでもしないと奴らに先を越されちゃうのかもしれないからね……」

束は急に険しい顔をしながら言う。それはいつもの束とは違い気難しい顔だった。
「早くしないとこつちの世界もデジタルワールドも……」

姉は今どこに

一夏&箒ルーム

「おめでとう兄貴！」

「私はきつと一夏が勝つと信じていたぞ！」

「よせよ……なんかもうクラス代表が決まったように見えるじゃないか。」

箒たちは一夏の初のIS戦の勝利をささやかに祝っていたが一夏は困った顔をしている。箒の隣にいるアグモンはブイモンと一緒にお菓子にありついている。

「しかし、本当にいいのか一夏？ あんな奴にクラス代表任せといても。」

「ああ、俺がクラス代表になったらバランスが非常に悪くなるからな。」

「それにしても一夏のISはなんであんな姿になったんだ？」

「それは千冬姉が倉持技研に問い合わせてみたんだがどうやら形態移行による変化らしい。」

「うむ……なんかすごく怪しく感じるな。」

そのとき、部屋のドアを誰かがノックしてきた。

「誰だ？」

「きつと千冬姉ちゃんだよ！わざわざ兄貴にお祝いの言葉を言いに来たんだ。」

「グイモンはそう言うつと玄関の方へ走って行こうとする。」

「待てチビ。この時間はまだ千冬姉は勤務中で寮にはいないはずだぞ。」

「え？じゃあ誰が。」

「取り敢えず俺が見てくるからお前はそこでアグモンと一緒に菓子でも食べてろ。」

「わかった。」

「一夏は玄関の方へと行く。」

「どなたですか？」

「玄関を開けるとそこにはセシリアが照れくさそうな顔をして立っていた。」

「……ちよつと宜しいですか？」

「別に構わないけど。」

「その……気を失っていた時は保健室に運んでいただいてありがとうございます。」

「先生から聞いたのか。」

「ええ。それと……」

「うん？」

「この間はある失礼なことを言つてしまい本当に申し訳ございませんでした。」

「そのことについては気にしなくてもいい。俺もあの時はからかい過ぎたと思つたから

な。謝るんなら明日みんなの前で言ってくれ。」

「わかりました。」

「それと言うのもなんだけど……クラス代表、アンタが引き受けてくれないか？」
「え？」

一夏の頼みにセシリアは一瞬驚いた。

「しかし、今日の試合で私に……」

「確かに俺はアンタに勝った。でも、よく考えて見てくれ。教官を倒したほどの実力を持ったアンタを倒した俺を代表にしてみる？ パワーバランスが悪くなっちゃうだろう？」

一夏はセシリアに説明して引き受けてもらえないかと言うがセシリアは首を縦には降らない。

「今日の試合で分かりましたの。私は自分の力に自惚れていたのだと。そんな私にクラス代表は務まりませんわ。それに代表は織斑さんの方が務まると思いましたの。」

「そうか。」

「勝手に来て、申し出まで断ってしまったって本当に申し訳ありませんでした。では、私はこれです。」

「ああ、今までのことはそんなに気にするなよ。」

「ありがとうございます。」

そう言うとセシリアは去って行く。

「あ、あと織斑さん。」

「ん？」

ドアを閉じようとした一夏にセシリアが呼び止める。

「これからは一夏さんと呼んでもいいですか？」

「いいけど。」

「後、私のことはセシリアと呼んでください。」

「ああ、わかった。じゃあ、また明日会おうなセシリア。」

翌日、一年一組のクラス代表は一夏に決まった。そのすぐ後にセシリアがクラス全員に謝罪の言葉を述べクラス代表決めは幕を閉じた。

「それでは本日より実践訓練を始める。」

白ジャージを着た千冬はグラウンドで生徒を見ながら言う。

「織斑、オルコット！前に出る。」

「はい！」

千冬の指名で二人は前に立つ。

「二人とも専用機を展開しろ！」

「ブルー・ティアーズ！」

「炎龍！」

二人はそれぞれ自分の専用機を展開する。

「よし、そのまま飛べ！」

指示通りに2人は上空に向けて飛んだ。一番着は一夏であり、セシリアは少し遅れて到着する。

「早いですわね、一夏さん。」

「機体の性能差だろう。」

「そのまま急降下して急停止をするんだ。地上との差は10センチだ。」

「了解。セシリア、君から先に降りてくれ。」

「わかりましたわ。それではお先に。」

セシリアは地上に向けて急降下していった。

地上との誤差はほぼゼロ。

「上出来だ。次は織斑の番だ。」

「わかりました。」

一夏はそう言うのと急降下していく。

セシリア同様地上との誤差はゼロ。

「次は武装展開だ。まずは織斑。」

「はい！」

一夏はすぐに両腕のブレードを装甲から展開する。

「0.3秒・・・上出来だ。次はオルコット。」

「はい！」

その後、セシリアは武装展開をするのだが時間がかかるというダメ出しを喰らうのであった。

放課後の食堂

「織斑君、クラス代表決定おめでとう〜!!」

「いやあ、どうもありがとう。」

クラス全員が一斉にクラッカーを鳴らす。しばらく盛り上った後、一夏と箒は並んでいる料理を皿にとると外へ出る。

「あれ？織斑君に篠ノ之さんどこ行くの？」

二人は思わずギョツとする。

「い、いや〜ちよつと外の空気を吸いに。」

「わ、私はちよつとトイレに……」

箒は慌てて料理を隠す。

「もしかして……二人って付き合っているの？」

「違います。」

そう言うのと二人は慌てて食堂から出ていく。

「どうだ？うまいかチビ？」

「うん!」

「僕たちもできるんだっいたらみんなと食べたいんだけどな……」

ブイモンが喜んで料理を食べている中アグモンが残念そうに言う。

「そう言うな、お前たちが出てきたら大パニックになるかもしれないぞ。」

「二人ともそこで何しているんだ?」

そこへ千冬がやって来た。千冬を見たアグモンは慌てて隠れようとする。

「大丈夫だ、私はもう知っている。」

千冬は安心させるように言う。

「ところで千冬姉、東さんとは連絡できたか?」

「いや、私も過去の連絡先を調べてみたんだが全くと言っていいほど応答がない。篠ノ之の方はどうだ?」

「私の方もダメでした。しかし、姉さんはどうしてデジモンの存在を知っているんでしょうか?」

それが箒にとっての一番の謎だった。東がデジモンを知っているうえにデジタルワールドと現実世界を行き来できる方法を知っている……このことから姉が何を企んでいるのか心配だった。

「だが東のことだ。おそらくそのうち向こうから接触してくるだろう。」

「今は待つしかないってことか。」

「なあ箒、その・・・箒の姉ちゃんってどういう奴なんだ？」

ブイモンは気になるように聞いてくる。

「はつきり言って私も姉さんとあまり話したことがないからな・・・でも、私よりも以前にデジモンのことは知っていると思う。」

「どうして？」

「そもそもアグモンも私のデジヴァイスも姉さんが送ってきた物なんだ。」

「僕がデジタマの時にね。」

「それはいつ頃だ籐ノ之？」

「姉さんが消息を絶って私たち家族が重要人物保護プログラムでバラバラにされた後です。」

「つまり東さんはそれよりも以前にデジモンを知っていたということか・・・」

一夏は星空を見上げながら今もどこかに身を隠している東が何をしているのか考えているのであった。

翌日 I S 学園前

「ついに……ついにこの日が来た！」

ツインテールの小柄な少女が腕組をしながら言う。その隣には自分の体より大きい耳を持った小さい動物が立っている。

「ねえねえ、鈴。」

「何テリアモン？」

「この学園から僕と同じデジモンの臭いがするんだけど本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だって！ 私たちは無敵のパートナーなんだからね！」

少女、凰鈴音はテリアモンを抱いて、学園の中へと入っていく。

「待つてなさいよ一夏！ 私が来たからにはアンタのハートを驚掴みにして見せるんだからね！」

「鈴、これ目立たない？」

「大丈夫！」

「そうかな。」

テンションが高い鈴に対してテリアモンはできるだけ人形のフリをするのだった。

宣戦布告と友達

一年一組

「この日、一年一組ではある噂で持ちきりだった。

「ねえ、織斑君知ってる？ 今日、二組に新しい転校生が来るんだって！」

「転校生？ この時期にか？」

本を読みながら一夏は意外そうな顔をする。

「織斑君はどんな子が来ると思う？」

「さあなく。」

「その転校生のことだけど中国の代表候補生だそうだよ。」

「中国か……（鈴の奴元気かな……そう言えば弾たちにもまだ会っていないし……）。」

一夏はかつての旧友たちのことを頭に思い浮かべる。

「でも、織斑君が代表ならフリーパスもウチの組に間違いなしでしょ！」

「そうそう、専用機持ちも一組と四組だけだし優勝は……」

「ちよつくと、待ったあああ!!」

クラスの女子たちが話を盛り上げている最中、扉の方からの声が会話を止めた。

見るとそこにはツインテールで頭の上に小さな動物の人形を乗せた少女が扉にもたれ掛かっていた。

「生憎だけどその情報はもう古いよ!」

女子生徒たちは啞然としていたが一夏の方はもつと驚いていた。

「お、お前……鈴か?」

「久しぶり一夏!」

「ま、まさか二組の転校生ってお前のことなのか?」

「その通り!そして今日一組代表のアンタに宣戦布告しに来たのよ!覚悟しなさいね!」

鈴は一夏を指で指しながら言う。そのとき、一夏は鈴の頭の上に乗せている人形に目が着く。

「鈴、それは?」

「ふっふっくん!コイツは私の相棒のテリアモンなのだ!可愛いでしょ?」

鈴はちらちらと見せながら自慢する。しかし、一夏はそれ以外のことを気にしていた。

(なんでデジモンを堂々と見せているんだ……)

「と言う訳で今後とも……」

その直後鈴の頭を何かが叩いた。鈴は思わず後ろを振り向く。

「もう予鈴が鳴っているぞ。さっさと自分の教室に戻れ。」

「ち、千冬さん！」

「ここでは織斑先生だ。返事は？」

「わ、わかりました！」

鈴は慌てて自分の教室へと走っていった。

「鈴……僕、頭が痛いよ……」

走っている鈴に対してテリアモンは泣きそうな声で言う。

「ごめん……まさか千冬さんが一夏のクラスの担任だとは思わなかった……」

「改めて紹介するぞ、箒。彼女は風鈴音、お前が引越してから入れ違いで俺の学校に転

校してきた友人だ。」

「よろしく！鈴って軽く呼んでもいいよ！」

昼休みの食堂で一夏は鈴を箒に紹介する。

「私は篠ノ之箒だ、よろしく。」

「へへ。篠ノ之箒か。まあ、よろしく！」

「ところで鈴。」

「ん？何？一夏。」

「そのテリアモンどこで見つけた？」

「え？」

「私も聞きたいと思ったがなんでデジモンを堂々と人前に見せているんだ？」

二人の質問に硬直する鈴。頭の上に抱き付いているテリアモンは一瞬ビクツとしたがすぐに人形のフリをし直す。

「……あの……お二人さんもしかして……デジモン知っているの？」

一夏と箒はデジヴァイスを取り出して鈴に見せる。ブイモンたちが収納されているデジヴァイスを見て鈴は啞然とする。

「そんな使い方があったの？」

「知らないで持っていたのか？」

「いや、私はてつきり進化するための道具かなと思って……テリアモンは知ってたの?」

「……………」

テリアモンは黙って首を縦に振る。

「そうだったの〜!」

「僕は鈴がワザと出していてくれたんだと思ったから……………」

テリアモンは申し訳なさそうな顔をして言う。

「まあ、気づかれないうちにさっさとデジヴァイスにしまったほうがいいんじゃないのか?」

「え〜!でもさ別にこのままでも気にならないんじゃない?テリアモン一目見ても人形にしか見えないんだからさ。」

「お前な……………」

「あら?お三方一体何を話していますの?」

そんなところへセシリアがやって来た。テリアモンは慌てて人形のフリをする。

「おおう、セシリアも来たのか。」

「ええ、ところでその方は?」

「ああ、箒にも丁度紹介したところだ。彼女は凰鈴音、小学五年から中二までの同級生

だ。」

「アンタがセシリア・オルコットだね！一夏にコテンパンにやられたって言うのは！」
鈴はお構いなしにセシリアに向かって言う。セシリアは急に顔を赤くする。

「な、なんですのこのおチビちゃんは!?!」

「ところでさ一夏、今度のクラス対抗戦だけどさ……私が勝つたらさ……」

「人の話を聞きなさい！私はこれでもイギリス代表……」

「あつ、ゴメン。そこまでは興味ないから……」

「なんですつてえええ!!!」

鈴の反応にセシリアは思わずカツとなる。

「おいおい、二人ともお互い国は違うと言えど代表候補生なんだからそう怒るなよ。」

「もう怒りましたわ！一夏さん、クラス対抗戦でこのおチビちゃんを懲らしめてくださいましー!」

「フッフーんだ！私は負けはしないよくだ！アンタは素直に指を咥えて大人しくして
るんだね!」

二人の喧嘩はエスカレートしていく。

「な、なんかすごいことになっていないか?」

「やれやれ、おかげで昼飯が不味くなりそうだ。」

一夏は呆れながら二人の様子を見るのであった。

放課後アリーナ

『兄貴、今日は何しに来たの?』

「ああ、炎龍の武装確認だ。まだ使っていない武装もあるから今日確認するんだ。」

「そう言いながら一夏はアリーナの整備場に歩いて行く。」

「ん?」

『どうしたの兄貴?』

「どうやら先客がいるようだ。」

一夏は扉の陰に隠れながら様子を見る。整備場では水色の髪で眼鏡を掛けた一人の少女、更識簪が未完成状態のIS「打鉄式式」を制作していた。

「よっ!隣ちよっといいかい?」

「ひっ!」

いきなり声を掛けてくる一夏に簪は驚く。

「いやあ、悪い悪い。黙ってはいるのもなんかと思つてさ。」

「お、驚かさないでください。」

そう言うのと簪は再び手を動かし始める。一夏はそんな光景を見ながらも炎龍を展開させる。

「この翼は電磁砲としても応用できるのか……。」

「……………」

「……………アンタ、毎日ここでIS作っているな。」

「え？」

今まで黙って手を動かしていた簪は手を止める。

「どうしてそれを？」

「……………一週間、俺のことをこっそり見ていただろう？」

「うっ！」

一夏の急な発言に簪は黙る。

「俺のISを見て自分の専用機にそのノウハウを応用しようとしたんだろ？」

「……………はい。」

「素直に聞きに来てくれればいいのをどうして隠れて見ていたりしたんだい？」

「……………私は……………友達とかそう言うのいないから……………」

「自分から作ればいいじゃないか？」

「それはそうだけど……」

一夏の質問に簪は戸惑う。

「自分の姉と比べられていると思って言えないのか？」

「!?」

「やっぱりな。俺も似たような境遇があつたからよく分かる。」

簪の反応に一夏は納得する。

「二人で努力することは確かに大事だ。でもな、時には支えてくれる友達も必要なんだ。」

「あ、あの……織斑さん……」

「一夏でいい。」

そう言う一夏は炎龍を待機状態に戻し、未完成状態の簪の専用機の方へと行く。

「手伝ってやるよ。」

「え?で、でも……」

「俺はこれでも少しは機械に強い方なんでね。友達と手伝ったほうがいいだろう?」

「友達?」

「ああ、友達だ。それにその小さい奴も一緒に手伝っていたんだろ?」

「え!?!」

簪は驚いた顔をして言う。すると機材の物陰から白く四足の小さい生き物が出てくる。

「こ、これはその……」

「隠さなくてもいい。俺もデジモンを知っているからな。」

一夏はデジヴァイスからブイモンを出す。

「あ、貴方もデジモンを?!」

「まっ、そんなところだ。じゃあ、早速……」

「だ、大丈夫です! 私もそろそろ今日は終わろうと思ったので!」

「え?でも、まだ途中……」

「いいから!先に戻ってください!」

簪は何故か顔を赤くして一夏を押し返す。

「そうか……じゃあ、また今度来るわ。行くぞチビ。」

「え?でも兄貴……」

「迷惑になると失礼だからな。じゃあな、簪。聞きたいことがあつたらいつでも来てくれ。」

そう言いながら一夏はブイモンをデジヴァイスに戻してその場から去って行った。現場には簪と小さい生き物トコモンが残された。

「簪……どうして手伝ってもらったの？」

トコモンはピヨコピヨコと歩いて簪に近づいて聞いてくる。それは簪自身もよく分からなかった。それでも自分の中の何か熱く感じられた。

「ど、どうしてなんだらうね……」

簪は落ち着きながら言う。

（変わった人……でも、格好いい。）

これが簪の一夏の第一印象だった。

三大進化！謎の襲撃者

寮

簪と別れた後一夏は夕食の買い足しを済ませ寮に戻る途中だった。そんな一夏の後ろをコソコソ追いかけている少女がいた。彼女は一夏が通路の角を通り過ぎると物陰から出てきて後を追う。

「何してるんですか生徒会長。」

「きゃあ！」

角を曲がろうとしたら一夏が立っていたので彼女は思わず叫んでしまった。

「い、いきなりびつくりするじゃないのよ!?!」

「大体生徒会長が一人の生徒を尾行している時点でアウトですよ。」

「な、なんでそこまで分かっているのよ?」

生徒会長、更識楯無は思わず動揺しながらも聞く。

「俺は少し勘が鋭いもんでね。それと出してください。」

「はあ?」

「アリーナの方でも見てたんでしょ? トコモンやチビのことも。」

「え!?ええ……つとその……」

楯無は冷や汗を掻いて誤魔化そうとする。

「どうしたんです?あの二匹を見て驚かないということはあなたにもパートナーがいるのでしょ?」

「あく!私まだ生徒会の仕事が残っていたの忘れていたわ!じゃあ私はこれで。」

楯無は脱兎の如くその場から去ろうとする。

「あ、後先輩。」

「え?」

「妹さんと仲が悪いなら自分から手を差し伸べた方が効果的ですよ。」

「……ど、どうもありがとう……」

楯無はそれを聞くとすぐさま走り去って行くのであった。

(あの先輩から発せられた妙なプレッシャー……ひよつとしたらかなり上位のデジモンなのかもしれないな……)

一夏は僅かに感じた気配から楯無もデジモンの事を知っていると直感した。一方の楯無は

「……そう言えばあの子、どうして私の事を知っていたのかしら?」

鈴の宣戦布告から数日後のアリーナ

「いよいよこの日が来たわね一夏！」

鈴は専用機「甲龍」を身に纏い炎龍を身に纏う一夏と対峙する。

「まさか初戦からお前とやり合うことになるとはな。でも手加減する気はないぜ？」

「それはこっちのセリフよ！私が身に付けた力を見せてあげる！」

試合開始のブザーが鳴る。両者ともに構えを取りながら動きを伺う。

「私から行かせてもらおうよ！」

鈴は近接武器「双天牙月」を展開し、一夏に接近する。一夏は応戦するべく炎龍のブレードを展開し、双天牙月を受け止める。そして、距離を置いた後小型のレーザーライフルを発射する。甲龍はすぐに回避行動に移るが何発か命中する。

「やるねえ! だったらこれはどう?」

(空気の流れに変化が……まさか衝撃砲って奴か!)

一夏はすぐに回避行動に移る。それでも掠ったのか体に若干ながらの衝撃が走った。

「あ、危ねえ……」

「え? 見えない龍咆を避けた!?!」

切り札ともいうべき「龍咆」を避けられたことに鈴は思わず驚く。

「あれが衝撃砲って奴か。だったら俺は電撃砲だ。」

「電撃砲?」

一夏は構えを取ると翼がバチバチと音を出し始める。そして頭上に電気を帯びた球体のような物が形成されていく。

「な、なんかすごいくやばい感じなんだけど……」

「電撃砲、発射!」

炎龍の頭上から電撃砲が鈴に向かって発射していく。鈴は回避をしようとするが電気の弾は追いかけてくるように鈴の後を追う。

「え〜！な、なんで付いて来るのよ!？」

そう言っている間に甲龍に着弾。体に予想以上の痺れが起き、シールドエネルギーが
一気に削られる。

「ま、不味い・・・あんなの何発も撃たれたらこっちが先にやられちゃう・・・(汗)。」

「どうした？さっきので諦めちまったのか？」

「んなわけないでしょ！これからが本当の見せ場よ！」

鈴は戦術を変え再び双天牙月を持つ。

「そうこなくちゃ面白くない。俺も本気で行くぜ！」

一夏も炎龍のブレードを再展開し構える。

「行くよ一夏！」

「来い！」

鈴はある程度様子を見ると一夏に急接近する。

そのときだった。二人の間に一筋のレーザーが降り、何かがシールドをぶち破ってア

リーナに落下してきた。

「何?」

「何なのよ、いきなり!」

アリーナの土煙のせいで姿は隠してしまっているが二人とも侵入者の反応を捉えた。

「どうやらサプライズってレベルでもなさそうだな。」

土煙が晴れるとそこには一夏の炎龍と同様の全身装甲で大きな腕が特徴的な機械兵士と言ってもおかしくないISの姿があった。ISはあちこちから霧状のガスを散布しアリーナの状況は客席からでは確認できなくなった。

「ちよつと、ちよつと誰よアンタ!人の勝負を邪魔しに来て!どこの所属……」

「避ける鈴!」

一夏は咄嗟に鈴を掴んで距離を取る。無言のISは鈴のいた場所に向かってレーザーを撃った。一瞬でも遅ければ鈴が餌食になる所だった。

「あ、ありがとう一夏。」

「しっかし、あの威力は恐ろしいもんだ。これだとアリーナのシールドバリアが持たないぞ。」

二人に通信が入る。管制室にいる真耶からだった。

『織斑君、凰さんすぐに避難してください!』

「そんなこと言ったって山田先生、そいつは難しいぜ。どうやらこいつは俺たちをロツクしているようだ。」

一夏が言っているように敵は既に一夏と鈴をダーゲツトに定めていた。ガスの影響か真耶からの通信が途絶えて応答がない。

「鈴、お前は一般生徒の避難に回ってくれ。」

「な、何言ってるのよ！一夏一人で……」

言いかけた鈴に一夏はデジヴァイスを見せる。

「幸いこのガスで客席からじゃ俺たちの姿は見えない。俺とチビで時間を稼ぐ。お前は壁をぶち壊してでも生徒たちを避難させるんだ。その後テリアモンと一緒に来い。客席の友達に預けているんだろ？」

そう言われると鈴は何も言えなくなる。

「恐らくアリーナ入り口のドアもロックされて出れなくなっているはずだ。お前の龍咆の出番だぜ？」

「しようがないね……分かったわよ！無理はしないようにね！」

そう言うとき鈴は客席の方へと向かう。それを確認した一夏はデジヴァイスからブイモンを出す。

「行くぞチビ、アーマー進化だ。」

「分かった!」

デジヴァイスからデジメンタルが出現しブイモンと接触する。

「ブイモン、アーマー進化! 勇気の炎、フレイドラモン!」

ブイモンはフレイドラモンに進化し、敵へと向かって行く。

「上級生の応援が来るまで時間を稼ぐ! いいな!」

一夏も両腕のブレードを展開して向かって行く。

???

「ようやく戦えるわね坊や。」

東のラボでバイザーを付け無人I S「ゴーレム」を操作するベルスターモンは笑いながら言う。

「ベルちゃん、飽くまでもデータ収集だから程々にね。」

「はいはい。ある程度戦ったら引き返すわよ。」

隣でまた何やらの設計を行っている束に言われながらもベルスターモンはゴーレムを操作する。

「デジタルワールドで身に付けた実力の拝見と行かせてもらいましょうかね……」

アリーナ客席

「みんな、早くここから逃げて!」

鈴はロックが掛かっていたドアを甲龍の龍咆で無理やり破壊し、生徒たちを誘導する。その中には箒も入っていた。

『箒、どうするの?』

「一夏が一人で戦っているんだ。私達も加勢するぞ!」

箒はアリーナから一旦出た後、第一ピットの方へと行き、そこでアグモンを出す。

「アグモン、進化だ。」

「久しぶりだね、こういうのも。」

「今回は二段階進化で行くぞ。」

箒はデジヴァイスをかざす。デジヴァイスから光が発し、アグモンに当たる。

「アグモン進化……」

アグモンの形状が変化し始める。体が巨大化し、頭部は角が生えた兜のような表皮が加わり、体のあちこちから突起物が形成され攻撃的な外見に変化する。

「ジオグレイモン!」

「ジオグレイモン、超進化……」

ジオグレイモンから更に形状が変化し、機械的な翼が展開され頭部も機械的な物に変化し、右腕の巨大な砲塔が追加された。

「ライズグレイモン!!」

「急いで一夏を助けに行くぞ!」

「分かった!」

ライズグレイモンは箒を背中に乗せるとアリーナの方へと飛んで行く。

アリーナ

「うわあ!」

フレイドラモンはゴーレムの体当たりで壁に激突し、ブイモンへ退化してしまう。

「無人のくせにここまでの実力だとはな。流石にこのままじゃ劣勢だな……」

一夏は厳しいそうにゴーレムを見る。このままでは炎龍が活動限界を迎えるのも時間の問題だ。

「残りは本来の姿に戻って戦うしか……」

ゴーレムは再び一夏に目標を定めて突撃してくる。

「くっ！止むを得んか！」

一夏はブレードを展開し構える。そのときアリーナの壁を破壊して何かゴーストに激突した。ゴーストは勢いよく壁にぶつかる。

「一体何が……」

「一夏！」

一夏は振り向くとそこにはライズグレイモンに乗った箒の姿があった。

「箒！お前な……」

「こんなことをしても迷惑なのはわかっている。でも、どうしても心配になって……」
箒は申し訳なさそうに謝罪する。

「全く、そういう無茶なところは昔とちつとも変わらないな。」

「一夏……」

そこへテリアモンを乗せた鈴が駆けつける。

「避難は終わったのか？」

「うん、もうすぐ上級生たちが応援に来るって。」

「だったら話が早い。」

一夏はゴーストの方へと向き直る。

「先輩たちが来る前にゴーストを片付けるぞ！」

そう言った直後、一夏のデジヴァイスが発光し出す。

「どうやらアイツも本格的な進化の時が来たようだな・・・チビ！まだ戦えるか!」

一夏は下で倒れているバイモンに声を掛ける。バイモンは起き上がるとVサインを送る。

「いつでもOKだよ兄貴!」

「よし、進化だチビ!」

「私達も行くよテリアモン!」

「分かった!」

一夏と鈴はデジヴァイスを掲げると進化が開始する。

「バイモン、進化!」

「テリアモン、進化!」

二体の形状は変化をし始め、一体は翼が生え、体が一回り大きい竜の姿の形に、もう一方は両腕がガトリングでジーンズを履いた獣人型へと変化する。

「エクスバイモン!」

「ガルゴモン!」

今、ゴーレムの目の前に三体のデジモンが立ちはだかった。

二人の転校生

アリーナ

「行くぞみんな！」

「おう！」

エクスブイモンを筆頭にライズグレイモン、ガルゴモンがゴーレムに向かって行く。ゴーレムは照準を三体に合わせレーザーを発射する。

「当たってたまるか！」

ガルゴモンはレーザーを避けながらガトリング砲で牽制する。

「ダダダダダダダアアア！」

「うおおおお!!!」

ライズグレイモンはトライデントトリボルバーを剣のように使いゴーレムに砲身を叩き付ける。クロンデジゾイドで出来た砲身にゴーレムの装甲は凹む。

「これはさつきのお返しだ！」

エクスブイモンは拳をゴーレムに打ちつける。フレイドラモン以上に上がった腕力を前にゴーレムはどんどん押され気味になっていく。

「ダムダムアツパー！」

「トライデント面打ち！」

二体の攻撃でゴーレムは壁に激突する。

「ストロングクランチ！」

エクスブイモンは壁に激突したゴーレムに隙を与えず腕を噛み付き引きちぎる。装甲が頑丈なゴーレムではあるがどうとう故障でも起こしたのか動きが鈍くなる。

「今だ！全員で集中攻撃だ！」

「ライジングデストロイヤー！」

「エクスレイザー！」

「ダダダダダダ！！！」

三体は一齐にゴーレムに向かって攻撃をする。ゴーレムは攻撃に耐えられず、その場で大爆発を起こした。

「……………どうにかなったね。」

「アイツは無人机だったのか。」

「どうやら何かありそうだが問題はこれからだな……………」

「これから？それはどういふことだ一夏？」

一夏の言葉に箒は問う。鈴も箒と同じ考えだった。

「考えて見ろ。」

「？」

「こんな大惨事を起こして学園が俺たちをみすみす見逃すと思うか？」

「……あつ。」

「??？」

「あちやく。ゴメン東、あの坊やたちの実力舐めすぎていたわ。」

ベルスターモンはバイザーを外して残念そうに言う。

「別に気にすることじゃないよベルちゃん。送信された映像だけでも大収穫なんだから。」

束はゴーレムから送られてきた映像を見ながら言う。

「まさか箒ちゃんのアグちゃんが完全体にまで進化するなんてね……」

束は満足そうに言う。

「ところで束。箒ちゃん専用の『紅椿』はあとのくらいで完成するのよ？
開き直ったのかベルスターモンは束に聞いてくる。」

「ほとんどできているから後は仕上げだね。渡すのはそうだね……」

生徒指導室

「全くお前たちという奴は……」

千冬は呆れながら一夏たちを見る。幸い指導室は千冬のみだったのでバイモン、アグ

「モン、テリアモンまでもが立たされていた。

「今回はあの所屬不明機が破壊したというので片付けられたが、一歩でも間違えればお前たちの存在を知られるところだったんだぞ？」

「で、でも千冬姉ちゃん。俺たちが兄貴たちに加勢しなかったら……」

「確かにお前たちや織斑が生徒の避難の時間を稼いだ判断は正しいのかもしれない。しかし、一歩でも間違えれば命に関わるんだぞ？特に篠ノ之、お前の行動が一番危うい行為だ。」

「うう……」

千冬の言葉に箒は何も言えなくなる。

「僕たちもやり過ぎたね……」

「やり過ぎたと思うなら今後気をつけるように。」

「……めんなさい。」

三匹は申し訳なさそうに頭を下げる。

「と言う訳でお前たち三人は反省文提出と三日間自室謹慎。いいな？」

「……はい。」

三人は言い終わると一夏と箒はブイモンたちをデジヴァイスに、鈴はテリアモンを頭の上に乗つけると指導室から出ていった。

「……それにしてもあの無人機……まさかな……」
千冬は今日アリーナを襲ったゴーレムのことを考える。

一夏&箒ルーム

「ゴメン兄貴、俺たちのせいで……」

ブイモンは申し訳なさそうに言う。

「気にするな。千冬姉が言うのも正しいが俺たちがやらなかったらあの無人機の被害はもっとひどくなっていたはずだ。」

「私も軽率にあの行動を取ったことも問題があった。すまない。」

「でもさ、あのＩＳどこから来たんだらう？」

アグモンは気になるように言う。

「まあ、いろいろ気になるだろうがそんなことよりも反省文だ。これは長いからきついで。」

一夏は話を切り替え黙々と反省文を書く。

「しかし、残念だったな。」

「何がだ？」

「フリーパス。」

「・・・・・・・・それはみんな同じだから諦めようぜ。」

「うう・・・・・・・・デザートが・・・・・・・・」

本音を言うのと反省文よりも優勝賞品のデザートのフリーパスがパーになったのが残念な二人であった。

「フランスから転入してきたシャルル・デュノアです。よろしくお願いします。」

シャルルが自己紹介をした瞬間教室は沈黙する。そして

「「「きやあああああ~~~~~!!!」」」

一気に歓声が爆発するかのように響き渡った。

「うひゃあ……スゲエ響き……もんざえモンのラブリーアタック喰らっても
起きれるぐらいの破壊力だな……。」

一夏は耳栓をしながら驚く。

「二人目の男子来た〜!!!」

「頼りになりそうな織斑君と違って守ってあげたい系の男子〜!」

「金髪の王子様みたい!」

教室の女子生徒の大半がシャルルについて感想を思い思いに叫ぶ。この光景にシャルルは少し驚いているようだ。

「お前たち、いい加減に静かにしろ。」

「そうですよ〜!まだ一人残っているんですから。」

千冬と真耶の注意で騒ぎが治まると一夏は耳栓を外す。

「次はお前の番だ。」

「はい!教官!」

銀髪で左目に眼帯を付けた少女は千冬に向かつて敬礼する。一夏はおそらく千冬のドイツ軍で教官をしていた頃の教え子だったのだらうと思つた。

「私はもうお前の教官ではない、担任だ。それとここでは織斑先生と呼べ。」
「わかりました。」

少女は千冬に返事をすると思つたと教壇の前に出て自己紹介をした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。」

簡潔に自分の名前を名乗る。これには一夏も含めて生徒全員が唾然とした。当のラウラはそれを無視して自分の席へと向かう。その途中、一度一夏の席の前で足を止める。

「……貴様が織斑一夏か？」

「いかにも俺が織斑一夏だけど何か？」

ラウラは一瞬睨むと自分の席へと歩いて行つた。

（俺、恨まれるようなことしたか？）

一夏はそう考えながらも朝のHRは終わりを告げた。

「今日の1時限目は2組と合同でI Sの実習だ。全員、急いで着替えてグラウンドに集合しろ！遅れた者は鉄拳制裁だ、分かったか。わかったならばとつとと急げ！」

千冬に言われると生徒は、全員脱兎のごとく凄く速さで移動を開始し始めた。

「織斑、すまないがデュノアの面倒を見てやってくれ。こつちに来てまだ慣れていないからな。」

「わかりましたよ、織斑先生。」

一夏はそう言うとしヤルルの方へと行く。

「君が織斑一夏君だね、まだこつちに来て間もないけどよろしくね。」

「ああ、じゃあ早速更衣室に行こうぜ。」

そう言う二人は更衣室へと行く。中で一夏は着替えを始めるがシヤルルは何か戸惑っているようだった。

「どうした？着替えないのか？」

「え、えつと僕……人前で着替えるのが苦手で……」

「なあんだ、恥ずかしがり屋なのか。じゃあ俺は先に行くから急いで来いよ？ 織斑先生の鉄拳制裁はきついで？」

「う、うん。分かったよ。」

「そんなじゃ、お先に。」

そう言うのと一夏はさつさと更衣室から出て行った。更衣室にはシャルルのみ残された。

「……………彼、僕の正体に気づいていないよね？」

シャルルは誰もいないはずの更衣室で聞く。すると狐のような人型の生き物が一瞬にして現れる。

「……………少なくともまだ少し変わっているとしか思っていないだろう。」

「それならよかった。」

「それよりもシャルルも急いで準備したほうがいい。遅いと怪しまれるから。」

「ありがとう、レナモン。」

そう言うのとシャルルは急いで着替えを終える。

「行ってくるね。」

シャルルが更衣室から出ていくとレナモンはまた再び姿を消した。

様々な心境

グラウンド

「全員揃ったようだな。それでは本日より格闘、および射撃を含む実戦訓練を開始する！」

千冬は授業の内容を説明する。そんな中一夏は箒、鈴と共に何かを小声で話していた。

「じゃあ、四組にもデジモンを知っている奴がいるのか？」

「ああ、それとその姉である更識生徒会長はまだ見ていないがおそらく俺たち以上のデジモンを連れている可能性がある。」

「でもさ、それを知ってどうするの？」

「まだ把握はできていないがこの間の事件のようなことがいつ起こるか分からないからな。一応連携できるようにしておいたほうがいいだろう？」

「確かにアグモン達だけだと限界があるしな……。」

箒は納得したように言う。

「簪には夕食のとき俺から言って合流させる。内気だからあまり苛めるなよ？特に箒は

あまり強く言うなよ?」

「わ、私だつてもう昔みたいなのはしない!」

「とか言っちゃつてき、この間言われてたんじゃないの?」

「むむむ……」

鈴に言われて箒は何も言えなくなつてしまった。そのとき丁度千冬の説明が終わつた。

「では私が指名した二人に模擬戦をしてもらう。オルコット、嵐は前に出る!」

「はい。」

二人は千冬に言われて前が出る。

「私の相手はセシリアつてことね!」

「負けませんわよ!」

「落ち着け、お前たちの対戦相手は……」

「きやあああ~~~~~退いてください!!!」

千冬の言葉を誰かの悲鳴が遮つた。生徒たちが上空を見るとそこにはIS「ラファール・リヴァイヴ」を装着した真耶が落下してきていた。それもよりによつて一夏たちの真上だった。生徒たちは慌てて逃げ出すが一夏はすぐに炎龍を展開し、受け止めた。

「あ、ありがとうございます……」

「気をつけて下さいよ山田先生。一步間違えれば骨折はしていたぜ。」

一夏は真耶を降ろした後すぐに炎龍を解除して生徒たちの所へと戻った。

「……………」お前たち二人にはこれから山田先生と模擬戦を実演してもらう。二人とも、山田先生はこんな感じだが、これでも元日本代表候補生だった優秀な人だ。あまり甘く見るなよ。」

「……………はい！」

真耶の登場の仕方に沈黙した千冬であったがそう言うと、二人は気を引き締めて返事を返す。

そして三人による模擬戦が始まった。

模擬戦中に千冬がシャルルに真耶が使っているIS『ラファール・リヴァイヴ』について説明するように命じると、シャルルは丁寧に皆に聞こえるように説明し始めた。

結果はセシリアと鈴のチームワークの悪さもあり真耶の勝利に終わった。二人のコンピネーションは最悪な物であり、真耶はそれを的確に見極めて反撃し、二人は同時に倒されてしまった。

「まあ、今の奴らではこんなものか。諸君もこれで教員の實力は理解出来ただろう。以後は敬意を持って接するように。」

模擬戦が終わった後は実際に訓練機を用いての歩行訓練などを行い授業は終了した。

昼休み

「あつ、織斑君。ちよつといいかな？」

昼食を終えた後、一夏はシャルルに呼び止められる。

「ん？なんだデユノア？」

「よ、良かったら、この後、僕と模擬戦しないかい？」

「いいぜ。別にすることは特にねえし。」

放課後アリーナ

「つ、強いね。織斑君……」

「まあな、デュノアもやるじゃないか。」

「ラピッド・スイッチで逆転できると思ったんだけどな……」

結果は一夏の勝ちでシャルルはちよつと落ち込んでいた。ちなみにアリーナには鈴、セシリアが見学に来ていた（箒は行く前に真耶に呼び出されてこれなかった）。

「よし、一夏。今度は私と勝負よ！」

鈴は甲龍を装着し一夏の前に立つ。

「おいおい、連続でやるなんて反則だぜ？」

「誤魔化したって無駄よ！今度こそリベンジ……」

「敵同士で仲良しごっこはな、反吐が出る。」

「!?!」

一夏と鈴は声をした方を向く。そこには黒いISをまとったラウラ・ボーデヴィツヒが立っていた。

「な、何よ!?!あのISは!?!」

鈴は驚きながら見る。

「アイツは確かドイツの最新型……まだ完成していないはずだが……」

一夏は驚きながらもラウラの専用機「シユヴァルツエア・レーゲン」を見る。

「織斑一夏、私と戦え。」

「何故だ？」

「何故も何もない。貴様の存在が教官の弱点となり、弱くしている！だからこそ、消えてもらおう！」

「ちよつとアンタ！一夏に向かってその態度は何よ！」

ラウラの暴言に鈴は思わず怒る。

「断ると言ったらどうする？」

「そのときは私から仕掛けるまでだ！」

「調子に乗っちゃって！それなら私が相手になるわ！」

鈴はすぐさま龍咆を発射する。ラウラは余裕の態勢で避けようとしなかった。

「どうしたの？怖くなつて体が動かなくなっちゃった？」

「その程度の攻撃避けるまでもない。」

ラウラは手を翳す。すると龍咆は彼女に当たることなく無力化してしまった。

「あり!?どうなつてんの!？」

鈴は思わず驚く。

「コイツはお返しだ。」

ラウラはレールカノンを放つ。

「きゃあ!!」

鈴は命中し、後ろに吹き飛ばされる。

「貴様!」

炎龍を纏った一夏はラウラを睨み付ける。

「どうだ? やつとやる気になった……」

「いい加減にしろよ小娘が。」

ラウラは呆気にとられた。さつきまで前方にいたはずの一夏が一瞬にして背後に回っている。そして、レールカノンを素手で捻じ曲げている。

(なんなんだこの殺気は!?! さつきの奴が出したとは思えないものだ。それも一瞬にして私の背後に回るなど……)

さつきまでの威勢を忘れ、ラウラの頭は恐怖に支配されていた。一夏から発する殺気はただ物ではない。まるで蛇に睨まれて動けなくなつた蛙のようなものだった。当然蛙は自分で蛇は一夏だ。今の自分はまさに逃げることでできない獲物同然だった。

『お前たち一体何をしている!』

そのときアリーナのスピーカーから千冬の声が響いてくる。その声を聞いてラウラは我に返ったのかISを解除してアリーナから出て行き、それを確認した一夏も炎龍を解除した。さすがにこのまま特訓(別の意味で)を続けても意味がないと全員が思い、今日はそのまま解散となった。

寮

「うとうう……」

「箒、そう落ち込むなよ。」

「だけど……だけど……」

箒は落ち込みながら言う。実はと言うとシャルルが転校してきたことにより同性である一夏と同室にしたほうがいいという判断で箒は別の部屋に移動することになったのだ。

「僕もブイモンたちと一緒にだから安心してベッドの上で寝れたのにな。」

アグモンは残念そうに言う。

「そう二人そろって落ち込むな。まあ、やりづらくはなると思うがしばらくすれば慣れてくる。それまでの辛抱だ。」

「一夏も気をつけろよ。私はアグモンと一緒にいたからそこまで驚かなかったけど、お前の正体を知ったら誰もがびっくりするだろうからな。」

「わかっている。じゃあ、また明日な。」

そう言い一夏は自分の部屋へと行く。

「はあ、箒の時は異性で戸惑ったが今度は恥ずかしがり屋と同室か。全く苦勞をするぜ。」

一夏は部屋のドアに手を掛けようとする。しかし、その直後後ろから誰がか自分を見ているような気がした。一夏は後ろを振り向いてみるがそこには誰もいない。

（なんだ？一瞬確かに誰かがいたような気がしたんだが……）

一夏はそう思いながらも部屋に入ってしまった。そのすぐ後にレナモンが現れじつと

していた。

「私がいることに気づくとは……奴は本当に人間なのか？」

レナモンはそう言いながらもすぐにその場へと消えていった。

ラウラの部屋

「くそ！なぜ教官はあそこまで私を拒むんだ！」

ラウラは悔しそうに机を叩く。一夏との一件の後、彼女は千冬にドイツ軍に戻ってきたてほしいと懇願したのだが学園を侮辱するような発言から逆に千冬の逆鱗に触れただ

けだった。

「そもそもアイツ（一夏）は何なんだ！私は教官に直接鍛えてもらったんだぞ！奴よりも上のはずなんだ！なのに奴に手も足も出ないなんて……」

騒いでいることもあり同室の生徒は怖がって外出しており、部屋にはラウラ一人しかない。ただ一匹毛皮を被った黒い生き物がいるが。

「くそ……」

「ねえ、ラウラ。怒る気持ちにはわかるけどそんなに怒っていたら疲れちゃうよ？」

黒い毛皮を被った生き物ガブモンはそう言いながらラウラのために作ったのか食事を盆の上に乗せて持ってくる。

「うるさい！お前に何がわかる！」

「でも、怒っても何も始まらないよ？先生だってラウラのことをきつと自分の大事な生徒だと思っているよ。だから少し落ち着いて……」

「先生じゃない！教官だ！」

「うわあ！」

怒った勢いでラウラはガブモンを突き飛ばす。ガブモンが持っていた盆は床に落ちて食事も滅茶苦茶になってしまった。

「お前がいるだけで目障りだ！さっさと私の前から消え失せろ！」

「ゴ、ゴメン……」

ガブモンは落ち込みながら割れた食器を拾い片付ける。

(やっぱりラウラは俺のことが嫌いなのかな……いつまでも進化できなくて役にも立たない俺が……)

ガブモンは食器を片付けてラウラに気づかれないようにこっそりと部屋から出る。

「……さようなら、ラウラ。」

ガブモンは泣き顔でラウラの部屋の前から去って行く。幸い生徒のほとんどが夕食で部屋を開けているためガブモンを見る者はいなかったがただ一人、そんなガブモンの姿を見ている者がいた。目も鼻もないあの顔が。

「ガブモン……精神的に追い詰められていて実に丁度いいサンプルですね。あのお方の言う通りこのプログラムのテストにはもってこいの実験材料です。」

メルキュールモンは笑いながら悟られぬようにすぐに姿を消していった。

シャルルの正体

僕がレナモンと出会ったのは7年前のことだった。その頃はまだ母さんも生きていて僕が今のようになるとはまだ思つてもいない時期だった。

出合いは母さんがある日僕に持つて来たデジタマが始まりだった。

「お母さん、これ何の卵?」

「ふふふ、さあ?何の卵かしらね?」

母さんは笑いながら僕を見ていた。僕はそのとき何の卵か分からず肌身離さず自分の布団の中で温めた。

それから数日後の夜だったかな?その日の夜は満月で僕は寝る前にいつものようにデジタマを布団で一緒に寝ようとしていたところだった。そのとき卵にひびが入った。

「お、お母さん!」

僕は急いで母さん呼びに行った。部屋に来た母さんはどうしたのかと言う顔をして来たけど僕にとっては卵がどうなつちやうのかと言うので不安だった。

「お母さんどうしよう!卵にひびが入っちゃった!」

僕は悲しい顔で卵を見せるけどそのときに丁度卵が割れて中から何かが出てきた。

丸くて手も足もない黄色の体に狐の尻尾。それがレレモン、後のレナモンだった。

「レレ！レレレレ！」

レレモンは僕たちを見ると尻尾だけ残して僕の部屋にあったボールに化けてしまった。

「お母さん、この子はどうしてボールになったの？」

僕はボールに化けたレレモンを持って母さんに見せる。

「それはね、シャル。この子はとても恥ずかしがり屋さんだからなの。」

「恥ずかしがり屋？」

「今あなたに出会ったばかりでしょ？だからどうすればいいのかこの子にもよく分からないのよ。」

母さんはそう言うのとレレモンを撫でる。普通のボールとは違ってレレモンは何か暖かかった。僕はレレモンを見て言った。

「大丈夫だよ、私は友達だから。」

「レレ？」

するとレレモンは元に戻って僕を見て笑った。

この次の日にレレモンはポコモンに進化して僕と話せるようになった。母さんから家から出るときは鞆に隠していくようにって言われたよ。でも、ポコモンってなんて言えばいいのかわからないな姿になれるもんだから隠すのには苦労しなかったけどよく眠るから探すのに時間がかかった。

でも、今になって気になることがある。

母さんはどうしてデジタマなんて持っていたんだろうか？

僕がそれを聞こうと思ったとき母さんは事故にあって死んだ。車での事故だったんだけど遺体は何故か発見されることがなかったんだ。僕とポコモンはその後、父さんが経営するデュノア社に引き取られた。父さんは本妻と結婚していたんだけど母さんの話とは違って何事も常に黙っていた。本妻……お義母さんは母さんと父さんの友人だったそうだけど僕はどうしても話しかけづらかった。だって、母さんには僕がいたのにならぬ人は父さんと結婚しても子供がでなかつたから。それ故に嫉妬されているんじゃないかと思って……。

「シャルロット、お前にはＩＳ学園に入学してもらおう。男としてな。」

数か月前、父さんは僕を呼び出して僕の意志に関係なくそう言った。僕は黙って従う

しかなかった。僕には居場所がないから。

現在（シャルル転入数日後） 一夏&シャルルルーム

「デュノア、恥ずかしがり屋なのもわかるけど男同士なんだから別に問題ないんじゃないのか？」

一夏はシャルルに冗談を言う。

「気持ちはずれいいけど……どうしてもできないんだよ。」

「うーん、まあしょうがねえな。俺はちよつと買い物に行ってくるから先にシャワーでも浴びててくれ。今日も練習疲れたからな。」

「分かったよ、ありがとう。」

そう言うのとシャルルはシャワールームに行き一夏は外に出て行った。

「さて今の内にシャワーでも浴びておこうかな。」

シャルルは安心してシャワールームでシャワーを浴びる。

数分後

「ふああゝ良く寝た。」

ブイモンはこっそりベッドの下から出てくる。シャワールームは誰かが使っているのか音がする。

「兄貴が使っているのかな？そう言えばシャンプー切れていたと思っただけど……」

ブイモンはそう思いシャワールームに向かう。

「あつ、でも兄貴じゃなかったら不味いな……でも、こっそり入り口に置いとけば問題ないか。」

そう言うのと棚から買い置きシャンプーを取り出し入り口に置こうとする。

「あつ、シャンプーが切れてる。」

同時にシャンプーがないことに気づいたシャルルは慌てて入り口を開ける。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

一方には青いトカゲのような生き物、もう一方は金髪 of 全裸の少女。二人は同時に顔を合わせた。

「うわああああ!!!」

「きやああああ!!!」

二人は同時に悲鳴を上げる。そこへレナモンが煙の如く現れる。

「シャル!」

レナモンはすぐにブイモンを捕まえる。

「ぐううう!!!」

首を絞められブイモンは苦しむ。

「本当の事を知ったからには消えてもらおう!」

「待つて、レナモン!」

シャルルはタオルを体に巻いてレナモンを止める。

「でも、シャル。コイツを逃がしたら・・・・・・・・」

「だからと言って殺すなんて酷いよ!」

「なんだなんだ!?!この騒ぎは!?!」

玄関から一夏の声が聞こえる。一夏は何事かと思つてシャワールームに入る。

「おい、デュノア。シャンプー入れ忘れたからつてそんなに騒がなくてもいい……」

一夏は目の前の光景に黙つてしまう。そして、レナモンが掴んでいるブイモンを分捕り、シャワールームから退散した。

「……………」

「兄貴、大変だ!あの人胸が……………」

「チビ、こういう時は逆に考えるんだ。女でもいいんだとき。」

「どこの人の言葉言つてんの!あれはどう見てもおん……………」

「ちよつといいかな?」

そこへシャルルが入ってくる。その姿はいつものシャルル・デュノアとしてではなく一人の少女としての姿だった。

「……………幻でもなかったんだな。」

「うん。」

「詳しく聞かせてもらおうか。」

シャルル説明中……………

「なるほどそう言うことか、酷い親父だな。性別を偽って娘にデータを盗むように命令するなんて。」

「デュノア社も他の社に追いつくために三世代型の開発を急いでいるからね。」
「でも、こうして俺にはバレた。これからどうするつもりだ？」

一夏に言われシャルル、シャルロットは黙る。

「……………どの道僕は祖国に強制送還されて牢屋に入れられるだろうね。」

「あっさり言うな。」

「仕方ないことだよ。バレちゃったんだから。」

「なんか俺のせいで最悪なことになっちゃったみたい……………」

「すまないシャル、私のせいだ。私が無力なせいでシャルを……………」

「レナモンが謝ることじゃないよ。それに話したらなんかすつきりしたし……………」

「まだあきらめるのは早いぜ？」

「え？」

一夏は悪戯するような顔で言う。

「それはどういふことなのかな?」

「簡単に説明する。お前には三つの道がある。一つはこのまま大人しく牢屋行きになること。もう一つは俺が渡すデータを受け取る。そして最後が……これだ。」

一夏は生徒手帳のあるページをシャルロットに見せる。そこには「IS学園特記事項第二十一」と書いてあった。

「うっかり忘れているだろうが生徒は学園に入学してしまえばどの国も干渉できなくなる。つまり、向こうはお前に三年間手を出すことができなくなるということだ。」

「確かに……考えて見ればそうだね。」

「このことに関しては黙っておく。正体を明かすかどうかはお前次第这件事情……」

一夏はレナモンの方を見る。

「お前がデジモン持ちだとは恐れ入ったぜ。まさかまた一人メンバーが増えるとはな。」

「また?もしかして君以外にもデジモンを知っている人がいるの?」

「千冬姉も含めて何人かな。」

「そんなに……」

「まあ、今日のことは忘れて明日からまたよろしく頼むわ。ええつと……今まで通りデユノアでいいか。」

「シャルでいいよ。」

「分かったシャル。それじゃあ明日も練習頼むぜ。」

一夏はそう言いながら笑う。

母さん、天国で僕の事を見ていますか？

今日は嬉しいことがあります。

僕にレナモン以外の友達ができました。

ちよつと悪戯つぽい人だけどいい人です。

僕もいつまでも周りに振り回されずに前に進もうと思います。

でも、裸の所を見られたかもと思うと少し恥ずかしいです。

いつまでも僕のことを見守っててください。

シャルロット・デュノア

龍の怒り

放課後のアリーナ

一夏とシャルルは放課後、アリーナでセシリアと鈴とのタッグで模擬戦をすることにしていた。

「さてと、今日の模擬戦をしてから簪の様子を見て……」

「織斑君！」

「おりむく大変〜！」

一夏とシャルルが向かっていたところに布仏含む女子生徒たちが慌ててやって来た。

「おいおい、どうしたんだ？みんな揃いに揃って。」

「そんな場合じゃないのよ！」

生徒の一人が大きな声で言う。

「んで、何がどうしたんだ？」

「実はね、オルコットさんと鳳さんが模擬戦やってたらね、ボーデヴィツヒさんが挑発してきて二人で戦ったんだけど……」

「どっ？」

「ボーデヴィツヒさんがオルコットさんと鳳さんを徹底的に痛めつけているのよ！」
「何!？」

一夏は急いでアリーナの方へと向かう。

「はあ．．．はあ。」

「どうした？その程度か？」

ラウラは余裕の表情で二人を見る。鈴はボロボロになった甲龍を纏ってラウラの方を見る。近くでは既にセシリアが気絶していた。そこへ一夏がやってくる。

「こ、これは．．．」

「やっと来たようだな、今度こそ勝たせてもらう！私と戦え！」

「．．．．．」

「どうした？こいつ等がやられてショックを受けているのか？それとも．．．」

そのとき、アリーナ全体に恐ろしいほどの殺気が発せられた。一夏は炎龍を身に纏うと内側からヴリトラモンとしての本来の姿に戻る。元々外見が同じため相手から見ても気づかれない。しかし、鈴だけは直感で感じた。

「何このすごいプレッシャーは……」

本来の姿に戻っている影響が炎龍は既に全身が赤く発光していた。

「な、なんだ!?!この間のはケタ違いだぞ!?!」

状況が不味いと思ったラウラはレールカノンを放とうとする。しかし、一瞬にして一夏は彼女の目の前に来ていた。緊急でワイヤーブレードを展開し拘束するが一夏は何事もないように近づいてくる。ラウラはAICを展開しようとした瞬間、一夏は彼女の振り上げようとした右手を抑える。

「ぐっ!」

「いい加減にしろ。貴様、千冬姉をどれ程尊敬しているのか分からねえが一体どこまでこの学園をバカにすれば気が済むんだ?」

「は、離せ!」

ラウラは何とか突き放そうとするが一夏の腕の力は強まり外すことができない。

「俺だけじゃなく鈴やセシリアまでこんなことをしやがって……」

「くっ!」

ラウラは左手のプラズマ手刀を展開し、一夏の頭を斬りつける。炎龍の頭部の装甲の一部が切断され、そこから本来の姿のヴリトラモンの頭部の一部が露出し、ヴリトラモンの目がラウラを睨んでいた。

「あ、あれは！」

鈴は思わず驚く。鈴だけではない、遠くから見ていたシャルルや異常なプレツシャーを感じて見に来た簪も驚いていた。

「い、一夏の顔が竜!?! 一体全体……」

ラウラは何とか拘束を振り切り距離を取る。

「貴様、その姿は……」

「もう謝っても許さねえぞ！この屑やろう!!!」

一夏の咆哮と共にアリーナが大きな衝撃破が発生する。ラウラは目の前で起き上がることがわからなくなってきた。

「な、何が一体……」

「許さねえぞ。」

「！」

一夏はオメガソードを展開しラウラを切ろうとする。ラウラは咄嗟に避けるが更にメテオバスターの弾丸を数発受ける。すると彼女の体が徐々に凍り付いて行った。

「なんだ？なんなんだこれは!!」

凍り付いたラウラは動きが取れなくなり、一夏は炎を右手に集中させる。

「終わりだ、バーニング……」

(や、やられる!!)

「そこまでだ、織斑。」

そこへ聞き覚えのある声が聞こえる。一夏が後ろを振り向くとそこには千冬が腕を組んで立っていた。

「織斑先生!!」

「きよ、教官!」

「二人がやるのは自由だがアリーナのバリヤーが崩壊するほどの行為は黙秘しかねる。

この決着はトーナメント戦の時につけてもらう。いいな?」

「……」

「後、三人は気を失っているオルコットを保健室に連れて行け。織斑からも大事な話があるからな。」

「は、はい……」

「ボーデヴィツヒは私の所に来い。」

「わかりました。」

千冬の介入もあり、ラウラはその場で九死の一生を得ることができた。

保健室

「……と言いつたんだ。」

保健室で一夏は眠っているセシリアを除いたメンバーに自分の正体を話す。鈴は目を丸くして見ていたが簪とシャルルは落ち着いた顔で聞いていた。

「じゃあ、一夏はそれでこの世界に来たんだね？」

「まあな。」

「ふわあく！一夏がデジモンになっていたなんて正直ビックリしたわ！」

「でも、一夏には変わりないんだよね？」

「ああ、確かに俺の体はデジモンだが心は織斑一夏のままだ。」

一夏の一言に全員が黙る。

「みんなはこのことを黙っててくれるか？」

「勿論だよ。」

「約束する。」

「私も同じだよ！」

「ありがとうみんな。」

「でもさ、セシリアは気絶していたからいいけどどうする？」

「アイツは時が来れば言うかもしれないからそれまでは黙っておいてくれ。」

「わかった。でも、まあ一夏が来てくれたおかげで二人とも怪我もひどくなかったから

よかったよ。」

「まあ、私もセシリアも専用機があの様だから今回のトーナメントはお預けかな？」

「まあ、それは仕方のないことだろう。次の機会でやろうぜ。」

「でも、あの姿には・・・。」

「ならんわ。って言うかそんなことしたら今日のようなことでは済まないぞ。」

「一夏はそんなことを言いながら仲間としての絆を一層深めたような気がした。」

「じゃあ、俺とデュノアはちよつと専用機の修理と整備に行つてくるわ。」

「あつ、私もまだ組み立て中だから一緒に行く!」

一夏、シャルル、簪が保健室のドアを開けた瞬間

「「「「「織斑君く!!!デュノア君く!!!」」」」」

同時に多くの女子生徒たちが一斉に押し寄せてきた。簪は思わず引き下がる。

「な、なんだ!?!この集まりは!?!」

「私とペア組んでください!」

「違う違う。私と組んでもらうの!!」

「アンタ邪魔よ!」

「私が組むの!」

「おいおい、アリーナでの騒動の次は何だ?」

「これ見てこれ!」

女子生徒の一人が一枚のピラを見せる。

「なにになに……今回のトーナメント戦はタッグマッチに変更?」

「デジタルモンスター？」

「ああ、それが織斑の正体だ。」

「では奴は偽者……」

「そういうわけじゃない。あれは私のせいで死んだ一夏が生まれ変わった姿でもある。」

千冬はラウラに一夏についての話をしていた。

（まさか、ガブモンと似たような奴だったとは……）

「これで分かったか？だが私にはその資格がない。自分の弟を見殺しにしたんだからな。」

「しかし、教官は……」

「何度も言ったはずだぞ？ここでは織斑先生と呼べ。」

「は、はい。」

「このことはくれぐれも外には言わないように。分かったな？」

「わかりました。」

ラウラは生徒指導室から出ていく。

「……ガブモンに少し言い過ぎたな。」

ラウラは既にいなくなってしまうたパートナーの事を考えながら言う。

「でも、アイツに負けるわけにはいかない。私はこれでも軍人なんだ……負けるわけには……」

ラウラは自分のプライドにかけても一夏を倒すことを誓った。

箒ルーム

「ねえ、箒。本当にあのラウラって人と組むの？」

アグモンは心配そうに箒に言う。

「一夏がおそらく決勝まで勝ち進んだとしたら私もそれなりに強い奴と組まなくちゃ勝ち残れない！故に態度は気に入らないが決勝まで勝ち残れそうなのはアイツしかない。」

「それはそうだけどさ……あの人なんか怖いよ。」

「まあ、本人はまだ答えを聞いていないからそれまでの間に他に組める奴を探せばいい。それに……」

箒はアグモンの隣で震えているガブモンを見る。

「コイツのためにもアイツの目を覚まさせないといけないしな。」

学年別タッグマッチトーナメント当日

「……………」

ガブモンは誰もいない寮の屋根の上から空を見ていた。

「おっ！ガブモン！」

そんなガブモンの所にアグモン、ブイモン、テリアモン、トコモンがやってくる。実は今日は試合に集中したいからと言う理由でみんなお留守番になっているのだ。

「みんなどうしたの？」

「これからさ箒たちの試合見に行くんだけど君も行かない？」

「試合？でも、俺たちは……………」

「実はね、僕とトコモンで誰にも見つからない秘密の場所見つけたんだ。」

「俺たちがまとまって入っても余裕なくらいなんだってさ！お前も一緒に来いよ！」

ブイモンたちは行く気満々だった。

「……………ゴメン、俺はここにいますよ。」

「どうして？あのラウラって言う怖いお姉ちゃんのことまだ気にしているの？」

悲しそうな顔をするガブモンにトコモンは聞く。

「それもあるんだけど今日はあまり体の調子が良くないんだ。だから今日はここで大人しくしてるからみんなで行ってきなよ。」

「ふん。俺だったら意地でも行くんだけどな？」

「ブイモン、あまりガブモンを苛めちゃダメだよ！」

「じゃあ、僕たちだけで行こう。早くしないと鈴たちの試合も始まっちゃおうし。」

「そうだ！そう言えば箒の試合第一試合だった！」

「みんな急げ〜！」

アグモン達は急いで屋根の上から降りて行った。ガブモンはみんながいなくなるまでその様子を見続ける。

「……みんなはいいな。信頼できるパートナーがいて。」

「お困りのようですね？」

「だ、誰!？」

突然の声にガブモンは後ろを振り向く。そこには怪しい笑みを浮かべるメルキュレモンが立っていた。

「これはこれは失礼。私はメルキュレモン。貴方と同じ孤独なデジモンですよ。」

「は、はあ……」

ガブモンはメルキュレモンと距離を取ろうとする。

(まずい……この人なんかやばそうだ……)

「貴方、進化ができないことに悩んでいますね？」

「え!? どうしてそれを!？」

自分の本心を見破ったメルキュウレモンに驚くガブモン。

「私はいくらでも人を見る目がありましてね。いや〜可哀想に。」

「俺をバカにしているの?」

「いえいえ、実はそんなあなたに打って付けの物があるんですよ?」

「本当に!?!」

ガブモンは目を光らせながらメルキュウレモンを見る。

(もし俺が進化できればラウラもきつと俺のことを見直してくれる! そうすれば……)

「欲しいですか?」

「はい!」

ガブモンはすぐに答える。

「ではこちらに……(こんな単純な手に引つかかるとはまだまだ甘いですね。フ

フフフ……)」

メルキュウレモンは案内するかのようになガブモンを導いていく。

漆黒の機械龍

アリーナ
???

「おい、テリアモン。一体どこまで行くんだよ?」

狭い通路を潜りながらブイモンは言う。

「もうすぐだよ。」

先頭を歩いているテリアモンは走りながら言う。

「あ!なんか明るくなってきた!」

トコモモンが前を見ながら言う。

「ここが僕たちでも見れるところだよ。」

テリアモンは自慢そうに言う。

「これって……」

アグモンは顔を下に向けて覗く。

「アリーナの排気口の通路だったのか!!」

「しかもよりによってアリーナの客席の入り口の真上!」

「ここなら鈴たちにもバレないで済むでしょ?」

テリアモンは笑みを浮かべながら言う。

「あ！箒と一夏だ！」

「いきなり兄貴と対決なんだ。」

「頑張れ箒！」

人間にしては窮屈な空間でもデジモンたちにとっては十分なスペースだった。

アリーナ

「いきなり箒たちとぶつかるとはな……」

一夏は腕を組みながら言う。

「でも、相方のボーデヴィツヒさんとなると苦戦は免れないね。」

「ああ。」

ラウラの方は妙に大人しく待機していた。

(・・・このトーナメントが終わったらガブモンに謝ろう。いくら弱いからと言っても落ちこぼれていた私と同じ境遇だし、長い付き合いだからな・・・)

「おい、ボーデヴィツヒ。そろそろ試合が始まるが大丈夫か？」

「ん？あ、ああ大丈夫だ。」

箒に声を掛けられラウラは現実を引き戻される。目の前では炎龍を身に纏った一夏たちがいる。

「作戦は私は一夏と・・・」

「篠ノ之、すまないが奴は私にやらせてくれないか？」

「なっ！何を突然!？」

「私には今迷いがある。それを振り払うためにどうしても奴とやり合いたいんだ。」

ラウラはいつもの威勢がない顔で言う。

「・・・ガブモンのことですか？」

「き、貴様！何故それを！」

「数日前、私の部屋の近くにいたのを保護した。後で会えばいい。」

「・・・すまないな。」

ラウラは箒に礼を言う。

「それじゃあ、この間の続きをやりうじやねえか？」

「私は負けない。負けるわけにはいかないんだ！」

ラウラは一夏を睨み付けながら言う。その瞳は何か決意を感じさせるものだった。

「コイツは思っていたよりも面白い試合になりそうだ。」

言うと同時に試合開始のブザーが鳴る。

「行くぞ！」

「うん！」

二人は互いに相手に向かう。

「彼じゃなくてごめんね！」

「一夏と試合できる機会は授業以外でも模擬戦でいつでもある。お前は一夏とやる前にウォーミングアップだ！専用機だからと言って私を舐めると痛い目に遭うぞ！」

箒は打鉄の近接ブレード「葵」を展開し、シャルルは対抗すべく射撃・近接の両方を扱うことができる「ミラージュ・デ・デザート」で応戦する。一夏はラウラに向かって腕のレーザーバルカンで威嚇を始める。対するラウラはプラズマ手刀で薙ぎ払う。

「その手には乗らん！」

ラウラはレールカノンで砲撃を開始する。

「コロナブラスタァー！」

一夏は両手を合わせ火球を作り出し、レールカノンの光弾を掻き消した。

「ちいー！（やはり一筋縄ではいかんか．．．）」

「もう一発！」

一夏はコロナブラスターをもう一段放つがラウラはA I Cを発動させ、停止させた後、プラズマ手刀で掻き消す。しかし、その直後一夏は彼女の目の前から姿を消した。

「や、奴はどこに!?!」

「上だ！ボーデヴィツヒ！」

シャルルと攻防を繰り返している筈は自分も余裕がないにもかかわらずラウラに言う。

「何!?!」

「遅い！」

一夏はラウラに向かって電撃砲を数弾発射する。

「これしきー！」

ラウラはレールカノンとワイヤーブレードで電撃砲を全弾相殺させようと試みるがそのうちの数段は軌道を変え、ラウラに着弾した。

「な、まさか、偏向射撃か!?!」

「ちよつとした手品さ。」

一夏はラウラの一瞬の隙を逃さず、一気に彼女の目の前まで接近し、タツクルをする。

彼女は勢いよく壁に激突する。

「くー私はこのまま負けるわけにはいかないんだ!!」

ラウラは、脇腹を押さえながら立ち上がり、ワイヤーブレードを向かわせるが一夏はワザと腕に巻き付けさせラウラを振り回し、床に叩き付ける。

「……私は……また同じ屈辱を味わうのか？あの時のように……」

ラウラは拳を握り締めながら起き上がる。シユヴァルツエア・レーゲンは既にポロポロでシールドエネルギーはほとんど削れてしまい勝負は目に見えている。

(嫌だ……またあの時のように落ちぶれるなんて……そんなの……)
「嫌だああああああ!!!」

ラウラが叫ぶと同時にシユヴァルツエア・レーゲンから紫電を放ち始め、本機は黒いどろどろとした泥のようになり、ラウラを包んで紫の鎧を纏った人型の何かに変わっていった。

「あ、あれは確か……」

それは一夏にとつても見覚えのある姿だった。

「暮桜……だっ？」

一夏は思わず口にする。

暮桜。

それは第一世代ISにして千冬が現役時代に使用していた物である。一夏が納得したと同時にアリーナの壁を何者かが突き破ってきた。

「な、なんだ今のは!？」

試合に集中していた箒とシャルルは思わず破壊された壁の方を見る。煙が晴れるとそこには以前襲ってきたゴーレムよりも一回り大きい竜の形をしたロボットが立っていた。

客席入り口上の排気口

「あれ?下にいた人たちがみんななくなっちゃたよ?」

トコモンは下を覗きながら言う。下では一般生徒たちが前回のトラウマもあつてかさつさと避難していなくなっていた。

「と言うよりもなんか変じゃないか?煙で見えないし。」

「箒たち大丈夫かな？」

「行ってみよう。」

四匹は生徒が全員いなくなったのを確認すると排気口のふたを取り外し客席の方からアリーナの方を見た。

「あ、あれは！」

「確か……ムゲンドラモンだ！」

四匹は急いで客席から移動する。

「俺とアグモンは兄貴たちの所へ行ってくる！」

「じゃあ僕たちは織斑先生所に行くてくるね！」

アリーナ

「なんでムゲンドラモンが……」

一夏は唾然としながら見る。一夏だけではない、箒もシャルルも驚いていた。

「な、何なんだあれは!？」

「どう見てもISじゃないよね？」

「ムツフツフツフツフ！ここまでうまくいくとは予想以上です！」

「!この声は!」

一夏はムゲンドラモンたちの真上を見る。そこには以前自分たちを嵌めたメルキューレモンが笑いながら浮いていた。

「メルキューレモン!」

「お久しぶりですね、ヴリトラモン。いや、ここでは織斑一夏でしたね。」

メルキューレモンは平然と言う。

「一夏、アイツは?」

「奴はメルキューレモン、よく分からない奴だが悪者だつて言うのは確かだ。」

「フフフフ、まあそれは否定しませんよ?」

メルキューレモンがヘラヘラする中ムゲンドラモンは苦しそうな頭を押さえていた。

「う、うとうう……助け……」

「この声……もしかしてガブモン?」

「ご名答、確かに彼はガブモンです。」

「貴様、ガブモンに何をした!」

「なあに、ちよつとお手伝いをしてあげただけですよ？強くなるためのお手伝いを。」
「それつてどういうことかな？」

「私の仕えているあるお方の生みだした特殊な究極体進化プログラムを彼に与えただけです。それ以外は何もしていませんよ？」

「貴様！」

箒はアサルトライフル「焰備」を放つがメルキューレモンが腕の鏡を翳すと跳ね返されてしまった。

「無駄ですよ。」

「くそう……ガブモン！私のことがわかるか！」

箒はムゲンドラモンに向かって言う。

「うう……ほうき？」

「そうだ！」

「ラウラ……は？」

「お前の隣にいる。」

ムゲンドラモンは隣にいる暮桜モドキを見る。

「そ、そんな……俺のせい……」

「おおっと、お楽しみはこれからですよ。」

メルキューレモンは光る球体をムゲンドラモンに投げつける。

「ぐ、ぐおとおおお!!!」

ムゲンドラモンは咆哮をあげて暮桜モドキを取り押さえる。すると同化が始まり、ムゲンドラモンの体色が漆黒に染まっていき、胸部には気を失い、IS解除状態になったラウラが拘束されていた。

「これでダークムゲンドラモンの完成です。」

「ぐわああああ!!!」

「同化!?!」

「さて、後は存分に楽しんでくださいね。私はこれで失礼しますから。」

「待て! 貴様、逃げるつもりか!」

「逃げる? 私はこれでも忙しい身なのです。あなたたちに付き合っている暇はないんですよ。」

そう言うともメルキューレモンは姿を消してしまう。

「どうする一夏?」

「どうするも何もこのままほっといたらこの間の無人機事件のようにすまないぞ?」

「でも、僕たちが攻撃したらボーデヴィツヒさんに・・・」

「兄貴〜!」

「箒〜！」

そこへアグモンとブイモンが走ってくる。

「チビ！アグモン！お前たち寮にいたんじやないのか？」

「話は後だよ！」

「アグモン、テリアモンたちはどうした？一緒にいたんじやないのか？」

「今、鈴たちと合流して織斑先生に知らせている。」

「生徒たちは既に避難を終えている。」

そこへ更にレナモンが現れて言う。

「な、なんだ!?お前は？」

「あ、レナモンは僕のパートナーなんだ。」

「まあ、誰もいないんなら問題はなさそうだ。」

一夏は炎龍を解除し、ヴリトラモンの姿に戻る。

「チビ！進化だ！」

「分かった！」

「アグモン、行くぞ！」

「OK！」

「レナモン、僕たちも。」

「わかってる。」

三人は同時にデジヴァイスを翳す。

「ブイモン進化！」

「アグモン進化！」

「レナモン進化！」

三体は同時に光り、徐々にその姿を変えていく。

「エクスブイモン！」

「ライズグレイモン！」

「キュウビモン！」

「箒とシャルルは後方で援護してくれ。行くぞ、お前たち！」

一夏はオメガソードを展開すると三匹を従えてダークムゲンドラモンへと向かって行く。

究極進化、ビクトリーグレイモン！

アリーナ

「行くぞ!!!」

一夏はメテオバスターで威嚇射撃する。しかし、ムゲンドラモンの全身は全てクロンデジゾイド製であり、更に暮桜モドキと一体化している影響かさらに高度が上がり、メテオバスターの弾丸を寄せ付けなかった。

「なんて硬さだ！」

「うおおおお!!」

「はあああああ!!」

ライズグレイモンとエクスブイモンはムゲンドラモンを殴りかかる。ムゲンドラモンはそれを難なく避け二体同時に吹き飛ばす。

「狐炎龍！」

キュウビモンは体を回転させ炎を纏い、その炎から竜のような状態へと変化させムゲンドラモンに放つ。

「ブラフマストラ！」

同時に一夏は両腕から超高熱弾を発射させる。二体の攻撃は同時に当たり爆炎を上げるがムゲンドラモンは傷一つついていなかった。

「うおおおお!」

エクスブイモンは上空から突っ込んでくるがムゲンドラモンは逆にジャンプして頭突きをし、下へと蹴り上げた。

「がああ!」

更に接近してきた一夏とライズグレイモンをムゲンキャノンで吹き飛ばし、エクスブイモンを上空へ蹴り上げた。

「どわああ!」

更にそこへムゲンキャノンを発射する。

「ぐわあ!」

エクスブイモンは壁に激突しそのまま倒れる。

「な、なんて強さだ……この間の無人機とはケタ違いだ!」

「一体どうして……5対1のはずなのに。」

「奴が究極体だからだ。」

一夏は負傷した右腕を押さえながらシャルルに言う。

「究極体?」

「その名のとおりに完全体すら超えた進化ということだ。更に人質まで取られたとなると非常に厄介だ。」

箒も気まずそうな顔をして言う。一夏はムゲンドラモンの方を見る。ムゲンドラモンの胸部にはラウラが未だに意識が戻らぬ状態で体を固定されていた。

???

「……………ここはどこなんだ?」

ラウラは暗い空間の中で目を覚ます。

「私は確かアイツらと試合をして……………」

ラウラがそう言いかけると目の前に一筋の光が見えた。ラウラはそこを指指して歩いて行く。

「こ、これは……」

ラウラはその光景に驚く。そこは彼女のいた場所、ドイツ軍の訓練所だった。但し、彼女が驚いていたのは自分の目の前でしゃがんで泣いている少女だった。自分と同じ銀髪で同じ眼帯を付けている少女、その隣には一本角を生やした奇妙な生き物がいた。

「う……うう……」

「ラウラ泣かないでよ。また頑張ればいいじゃないか。」

ツノモンはラウラの目の前でびよびよこしながら言う。

「私はもうダメだ……。今日も成績が上がらなかった……。私はやっぱり出来損ないなんだ。」

「そんなことはないよ!ラウラ昨日だって最後まで残って頑張っていたんじゃないか!」

ツノモンは必死に彼女を説得していた。その光景をラウラは見つめる。昔のラウラは眼帯を外してツノモンに左の金色のオッドアイを見せる。

「これでも、私が出来損ないじゃないと言えるのか!」

「そんなことは関係ないよ!僕にとってはラウラはラウラままだよ!失敗作でも出来損

ないでもない……ただ、僕の大切な家族なんだ……大切な……。」

そこまで言うとうらウラはツノモンを抱きしめて泣いた。ただひたすら泣いた。

「……そうか、教官に会うまではいつも挫けそうな私をアイツがいつも慰め、支えてくれた。私は私であればいいのだと。大切な家族なんだと……。」

ラウラがそう言うとうらの目が再び暗くなる。

「それなのに私は！教官の訓練を受けるようになってからアイツを邪魔者扱いするような眼でしか見ないで自分のことしか考えなくなつて……その上にアイツを……。」

ラウラは跪いて言う。そこへ何かの音が聞こえてきた。

「これを取り込めればあなたのお望みの力が手に入ります。」

「ほ、本当?!」

ラウラが顔を上げるとそこにはガブモンとデジモンがいた。デジモンはガブモンに光る球体をガブモンに渡す。ガブモンがその球体を取り込むと苦しみ始める。

「ぐ、ぐう……!!」

「耐えなさい。そうしなければ力には入りませんよ!」

「ぐう!!! (耐えるんだ……進化することができればラウラはきつと俺のことを見直してくれる!)」

ガブモンの体から黒い光が放ち始め、そこからガブモンは徐々に機械の龍へと姿を変

えていく。

「ぐ、ぐ……」

「や、やめろガブモン……」

ムゲンドラモンへと変化していくガブモンにラウラはただ見ることしかできなかつた。

「ぐわあああああ!!!」

「やめろおおおお!!!」

アリーナ

「・・・・・・・・・・はっ！」

ラウラは意識を取り戻し周りを見る。アリーナの壁はあちこちにヒビが入り、周辺には倒れているエクスブイモン、キュウビモンに支えられて起き上がるライズグレイモン、そして一夏、箒、シャルルが自分たちに向かって射撃をしている姿があった。

(そうか・・・・やはりあれは本当のことだったのか。)

ラウラは拘束されている自分の手足を見て悟る。一方の一夏たちはラウラが意識を取り戻したのを確認した。

「どうやらアイツ意識が戻ったようだな。」

「でも、僕たちが不利なものには変わりないね。」

ムゲンドラモンは再びムゲンキャノンの発射態勢に入る。

「やめろ、ガブモン！お前が憎むのは私だ！奴らは関係ないはずだ！ガブモン！」

ラウラは必死に言うがムゲンドラモンは無視したままムゲンキャノンをチャージし続ける。

「頼む！やめてくれ！」

ラウラの叫びもはやムゲンドラモンには聞こえない。ムゲンドラモンは標準を合わせる。

「・・・・・・までか・・・・・・」

「ガブモオオオオオン!!!」

一夏は諦めの言葉が出る。ムゲンキャノンの砲塔が一夏たちに向かって発射され、全員思わず目を閉じる。

しかし、いつまでも当たる様子はなかった。

一夏たちは目を開けてみるとそこにはムゲンドラモン。そして、ラウラを掴んだエクスブイモンの姿があった。

「チビ!」

「やっとこのタイミングが来たぜ……。」

エクスブイモンは息を荒くしながら言う。

「グ、グウウ……。」

「デユノア、お前のキュウビモンの力まだ残っているか？」

「え？」

「私はまだ戦えるが？」

箒は一夏の方を見る。

「一夏、デユノア、二人のデジヴァイスを私のデジヴァイスに向けてくれないか？」

「どうするつもりなんだ？」

「いくら奴が弱体化したとはいえ今の手負いの私たちが戦っても止めはさせない。だが、ライズグレイモンに残りの力を集中させればもう一段階進化できるはずだ。」

箒の言葉に一夏は哑然とする。

「今まで話したことがなかったんだがアグモンは何度か究極体に進化することができたんだ。でも、短時間しかかなれない上にしばらく進化できなくなるのが欠点なんだが。」

「でも、究極体だと威力が強すぎて僕たちも危ないんじゃない？」

「だが、今の俺たちにはそれぐらいしか方法がなさそうだ。」

一夏はライズグレイモンを見ながら言う。そのは真剣そのものだった。

「わ、分かったよ。やるだけやってみよう……。」

三人が同意すると箒はデジヴァイスを翳す。

「行くよ！」

「一か八かだ！」

一夏たちもデジヴァイスを翳す。すると二人のデジヴァイスが光り、一直線に箒のデジヴァイスにエネルギーが注がれる。それと同時にライズグレイモンが光り始める。

「力が溢れてくる……箒や一夏、シャルル……三人の力が俺の体に……」

「進化だ！ライズグレイモン！」

箒のデジヴァイスが一瞬赤くなる。

「ライズグレイモン！超進化!!!」

ライズグレイモンの体が金色に光りだす。形状が変化し始め、その姿は大剣を背中に背負った竜人騎士を思わせる。

「ビクトリーグレイモン!!」

鎧を纏ったビクトリーグレイモンは巨大な大剣を持ち上げるとムゲンドラモンに向かって振り下げる。

「ドラモンブレイカー!!」

ムゲンドラモンは何とか支えようとするが剣の予想以上の質量に耐え切れず一刀両断され大爆発を起こした。

「伏せろ！」

一夏の手で箒、シャルルは伏せられ、ラウラを抱えたエクスピモン、キュウビモン

は爆風に吹き飛ばされ壁にぶつかり退化する。アリーナには大きなクレーターができている。

「チビ……無事か？」

一夏は人間の姿に戻り立ち上がる。箒、シャルルはISを解除して辺りを見回す。

「レナモン！」

「私は……だ……。」

レナモンは壁際の方で力なく寄り添っていた。ブイモンは気を失っているラウラの上に乗っていた。

「アグモン！アグモーン！」

「……」

力ない声が瓦礫の中から聞こえる。箒は急いで瓦礫を掘り始める。少し掘り進めるとそこにはコロモンが埋まっていた。

「大丈夫か、コロモン！」

箒はコロモンを抱える。

「僕は大丈夫……でも、ガブモンは？」

箒はクレーターができて見える方を見る。クレーターの中央にはガブモンが気を失って倒れていた。しかし、どういうわけか黒い体は黄色に毛皮も水色っぽくなっていた。

「どうにか止められたようだな．．．．．」

「お前たち大丈夫か！」

そこへ千冬が駆けつけてくる。一夏は右腕を押さえながら言う。

「大丈夫だ。取り敢えずみんな生きている．．．．痛！」

「一夏！」

千冬は一夏の方へと向かう。

その後、一夏、箒、シャルル、ラウラの四人は手当てのため保健室に行くことになり、学年別タッグトーナメントは公式にはラウラの機体の暴走と発表され、トーナメントは中止で参加者のデータを集めるため1回戦のみ行うという事になった。理由としてはラウラの機体に開発が禁止されている「VTシステム」が組み込まれていたことも挙げられている。

この後、一夏は千冬にのみメルキユーレモンの存在を教え、ムゲンドラモンの件もどうにか暴走ということで誤魔化してもらったのであった。

ラウラとガブモン

放課後 保健室

「……………」

保健室のベッドでラウラは目を覚ました。

「……は……………」

「やっと目が覚めたようだな。」

「!」

ラウラはゆっくりと上半身を上げる。ベッドの隣には右腕に包帯を巻いた一夏が座っていた。

「お前が私を？」

「いや、正確に言うとな俺と箒、シャルルの三人でだ。」

「……………その傷。」

ラウラは一夏の右腕の方を見る。

「ああ、心配すんな。数日でもすれば治る。」

「ガブモンは？」

ラウラの質問に一夏は黙る。

「……………」

「まさか……………」

「いや、無事だ。今は俺とデュノアの部屋で面倒を見ている。だが、暴走した件についてはかなり責任を感じていたようだ。」

「……………すまない。」

「うん?」

「私は許せなかつたんだ。教官の弟であつたお前が。」

ラウラはゆっくりと言う。

「私は軍で出来損ないとしての烙印を押され、自分の存在意義を見失いかけていたんだ。」

「存在意義?」

「私は試験管ベイビー、つまり戦うために作られた存在なんだ。」

ラウラは眼帯を外して一夏に見せる。

「この目はI Sの適合率を上げるために投与したナノマシンの副産物だ。私は何故か適合しきれず自分の力を制御できなくなり、軍からも見下されるようになった……………」

「……………それが千冬姉の指導のおかげで本来の実力を取り戻せたと言う訳か。」

「教官は落ちぶれていた私を一から鍛え直してくれた。だから私は教官を師として、人として尊敬していたんだ。．．．だけど教官は私ではなくお前のことを一番気にしていた。」

「俺のことをか？」

「それ故に私は教官の弟であるお前が許せず、教官の肉親で恥さらしと言われてたお前に嫉妬していたんだ。」

ラウラの顔から涙が流れ落ちた。

「自分勝手すぎるだろ？教官にただ自分を見てほしいばかりに私はこれまで支えてくれたアイツを見なくなっただ．．．今までくじけそうになった時何度も励ましてくれたのに．．．。」

ラウラは拳を握り締める。

「もう、私の所にアイツは戻ってきてくれない．．．それだけの仕打ちをしてアイツを闇に落とすようなことをしたのだから．．．。」

「それはもつと自分勝手すぎるんじゃないのか？」

「え？」

一夏の言葉にラウラは思わず驚く。

「確かにお前のやったことは許されることじゃないのかもしれない。でも、このままお

前が自分を責めてもガブモンには何も伝わらないし、ガブモンの方も自分のせいだともっと自分を責めるようになる。お前はそれでいいのか？ラウラ・ボーデヴィツヒ。」

一夏はそう言うと言子から立ち上がる。

「俺が言えるのはそれぐらいだ。後はお前とパートナーの問題、解決するのはお前自身の行動だ。」

「私の行動……」

「そう、俺は一度自分の部屋に戻ってガブモンの様子を見ておくから休んで……」
そのとき保健室のドアが開き、千冬が入ってきた。

「織斑、ボーデヴィツヒは？」

「さっき目を覚まして……」

「それよりも一大事だ。」

「どうしたんだよ？もしかしてアリーナで事で……」

「ガブモンが行方不明になった。」

「え？」

千冬の言葉に一夏、ラウラは啞然とする。

「さっき、寮の廊下を慌てて走っているブイモンに会ってな。目を離れた隙にいなかったそうだ。今、篠ノ之と鳳、更識、デュノアが手分けして探しているが……」

「ガブモン！」

ラウラはベッドから起き上がり、急いで保健室を後にした。

「おい、ボーデヴィッツヒ！まだ動いては……」

千冬の言葉に目を向けずラウラはただひたすら走っていった。

寮 ラウラの部屋

日が沈みかけ、薄暗くなった部屋の中でガブモンは何かをまとめていた。それは自分とラウラが写っている写真が貼ってあるアルバムだった。

「君と僕の思い出」

アルバムにはそのようなタイトルが書いてあり、その上に置手紙のような物を置いた。

「これで心おきなくここから出ていける。」

ガブモンはそれをラウラの机の上に置くとどこから持って来たのか風呂敷に缶詰をいくつか入れ、包んでいく。

「あんなことをしたらもう俺はここにはいられない。もう、ラウラに会わせる顔もないし……。」

ガブモンは部屋に別れを告げ玄関の方へと歩いて行く。

「俺もこれからどうしようかな……行く当てもないのに。」

ところがガブモンが玄関に着く前に玄関のドアが開いた。

「……………ガブモン。」

「……………ラウラ。」

目の前にはラウラが立っていた。二人はしばらく硬直状態になっていたがガブモンが先に部屋を出て行こうとした。

「待て、ガブモン！」

ラウラはガブモンを押しさえる。

「離してよ！もう、俺はここにいられないよ！」

「お前は何も悪くない！悪いのは全部私なんだ！」

「そんなことはないよ！ラウラはただ自分のやりたいことをやっていただけなんだ！全部俺のせいなんだ！」

二人は離れようとしたり捕まえようとしたりとしばらく続いたがやがて疲れ果て両者共に背中を合わせて倒れた。

「なんで……なんで……俺のことをつかまえるのさ？邪魔でとんでもないことをしたのに……」

「……まない。」

「？」

「本当にすまなかった！」

ラウラはガブモンに向き直り土下座をする。

「私が落ち込んでいた頃お前はいつも励ましたりして支えてくれたのに……気がつけばお前の恩を仇で返した上に邪魔者扱いして……」

ラウラは泣きながら謝罪した。ガブモンはそれを黙って聞いていた。

「私の自分勝手でお前を追い詰めた上にあの姿になるまで何もしてやれず私はお前のパートナー……！」

そのとき、ガブモンはラウラの左頬を思いつきり叩いた。ラウラは少し唾然するがガブモンの顔は涙でぐしょぐしょよになつていた。

「ラウラも打つてよ……俺はあんなことをしてみんなに迷惑かけちゃったんだ……本当ならもういちやいけないはずなんだ……だから……」

ラウラも思いつきりガブモンの顔を叩いた。そして、二人は抱き合つて思いつきり泣いた。

「ゴメンなさ〜い!!わあああああん!!」

「すまない……本当にすまなかつた……うう……」

玄関の方では一夏、千冬、ブイモンがこつそり覗き込んでいた。

「なんか邪魔したら不味いね兄貴。」

「そうだな。」

「このままそつとしておいてやるのがよきそうだな。」

三人はそのままこつそり部屋を後にしていくのであつた。

???

「はあ……はあ……」

広い荒野の中で一人の騎士型デジモンがボロボロになった鎧にマントを靡かせながら辺りを警戒していた。近くには真紅の特攻服を着こんだ妖精型デジモンが白い剣を背負って彼の後ろを警戒していた。

「このゲートを通れば時間はかかるが人間界に行くことができる。奴ら来るまでに早く行け！」

「でも、そんなことをしたらあなたが！」

「貴様がここに残っては無念に散ったオメガモンとマグナモンに見せる顔がない。我が屍を超え、ヴリトラモンにこのことを伝えろ！」

「イチカ……」

彼女は首にかけてある首飾りを見つめる。そのとき上空から巨大な竜の形状をした

炎が降り立った。

「行け！」

「くっ！」

彼女はデジタルゲートに入る。すぐにゲートは閉じその場には騎士といくつかの影が残っていた。

「無駄なことを……。」

上から竜の姿に似たデジモンが言う。

「いい加減に諦めろデュークモン。貴様一人で我々五人を相手に生き延びられると思っているのか？」

ボロボロに騎士デュークモンは弱つていながらも言う。

「ドウフトモン！貴様は本当にあの指令がイグドラシルの意志だと思っているのか！」

「そんなことは関係ない。現に我らに指示を出したのはそのイグドラシルなのだからな。」

五人の中央にいるドウフトモンは見下すような眼で言う。

「だが、人間の行いがこの世界に悪影響を及ぼしているとなぜわかる！」

「貴様は人間を信用し過ぎだ。現に人間共はたかがISという自ら作り出した物で世界を歪ませている。その歪んだ感情がマイナスエネルギーとなり、このデジタルワールド

でも今だに悪影響を与えている。所詮人間と我々はどちらかが滅ぶしかないのだ。」

「それは思い違いだ！ いいか！ 我々は奴らに……」

「これ以上貴様の戯言に付き合う暇はない。やれ、デユナスモン。」

ドウフトモンが指示を出すと同時にデユナスモンはデュークモンの目の前に立つ。

「さらばかつての同胞よ。最後に言い残すことはないか？」

「ならば言おう、このまま人間を滅ぼせばいずれ我らデジモンも滅ぶとな！」

「確かに聞いた。では、さらばだ。プレス・オブ・ワイバーン！」

「ファイナル・エリシオン！」

デユナスモンが全身から発せられるオーラから形成された竜にデュークモンは応戦するが弱っていた彼の技は空しくも掻き消され、彼は粉々に分解されていくのであった。

「終わったな、我々も撤収するぞ。」

「また人間の姿に擬態か……私はできれば遠慮したいものだな。」

ロードナイトモンは嫌そうな態度で言う。

「文句を言うな、人間界に隠れ蓑があるだけありがたいと思え。」

「では、俺は残りの危険因子を排除に行く。」

クレニアムモンはそう言うのと四人の前から姿を消していった。

「しかし、どうするつもりだドウフトモン。我ら五人はともかく、ロイヤルナイツは空席を除いて後数人かが人間界に潜んでいる。奴らを敵に回せば厄介だぞ。それにエグザモンは気まぐれで今は我らと共に行動しているがいつ気を変えるか分からん。」

デユナスモンはドウフトモンを見ながら言う。

「それには心配に及ばん。いずれどいつもこいつも必ず奴に絡んでくるはずだからな。ヴリトラモン……織斑一夏に。」

I S 学園 寮 セシリアの部屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

朝、セシリアは目の前の出来事を信じられずにいた。それは彼女の寝ているベッドの上にいる体の表面を透明な体組織に覆われた生物がいるのに驚いていたからだ。以前の彼女ならここで悲鳴を上げて大騒ぎをするがこのときばかりは静かにしていた。生物は怯えながらセシリアのことを見つめていた。

「・・・・・・・・怖がっていますの?」

彼女は両手にその小さい生物を持つてみる。生物はさらに震えて不安そうな顔をしていた。

「大丈夫ですよ、私は何もしませんから。」

生物ニヨキモンはそう言うかと安心したのかセシリアの手の中で眠ってしまった。

「あら、まだ朝ですのに・・・・。」

セシリアはニヨキモンをベッドに隠していく準備を始める。このときベッドにデジヴァイスがあつたのを知つたのは帰ってきて進化したピヨコモンに出会つた後だった。

ピヨモンと恐怖の弁当

タツグトーナメントの数日後。

朝のHRの真耶の紹介でシャルルがシャルロットとして再入学を果たした。シャルロットが女だったと知った時はクラス的女子生徒の多くがかなり嘆き悲しんでいたがすぐにクラスのメンバーとして受け入れられた。

昼休み

一夏、箒、鈴、簪、そしてシャルロットの五人は弁当を持って屋上に向かっていた。

「たまにはみんなで弁当を食べるのも悪くないだろう。」

一夏は笑いながら言う。

『僕、箒が作ったご飯が大好きなんだ！』

『兄貴の飯だって美味しいんだぜ！』

「鈴の酢豚は格別だよ。」

『簞のハンバーグだって美味しいもん!』

デジヴァイスの中でデジモンたちがパートナーの料理について言い合っている（但し、テリアモンは鈴の頭の上、レナモンは無言）。そんな会話をしながら屋上へと向かって行く。

「ところで一夏の弁当のおかずは何なんだ?」

「俺か?俺は鶏のから揚げだ。簞は何なんだ?」

「私は肉じゃがだ。私もアグモンも好きなんだな。」

「私は酢豚よ!」

「私はハンバーグ・・・。」

「僕はエビフライ。ちよつと自信がないけど・・・。」

「まあ、これだけいるんだ。お互いおかずを交換するって言うのも手かもしれないな。」

「一夏、それナイスアイディア!」

五人がそんな会話をして屋上の扉を開けたら、見覚えのある人物がいた。セシリアである。セシリアは後ろに五人がいるのに気がつくど慌てて自分の後ろに何かを隠した。

「お、セシリアじゃないか。どうしたんだ?こんなところで?」

「あ!ちよつ、ちよつと・・・。」

セシリアは冷や汗を掻きながら答える。セシリアに足元には何か隠れていた。

「……セシリア。」

「な、なんですの!? 鈴さん!」

「なんかアンタ、後ろに何か隠している?」

鈴の質問にセシリアはオドオドする。

「そ、そんなことはないですわ!」

セシリアは否定をするが顔といい隠し方といい全く説得力がない。

「セシリア。」

「今度は何です? 一夏さん!」

「それ、ピヨモンだろ。」

「!!!」

一夏の一言にセシリアは完全に撃沈する。足元に隠れているピヨモンは更に震えな

がら顔を隠す。

「み、見逃してください! この子はただ……」

「僕もデジモンだから心配いらないよ。」

「え?」

鈴の頭の上に乗っているテリアモンに言われてセシリアは啞然とする。すると、他の

デジモンのデジヴァイスから出てくる。

「俺たちの他にもデジモンがいたんだ！」

「君がこの娘のパートナー？」

ワイワイ寄ってくるブイモンたちにピヨモンはそつと顔を出す。

「……うん。」

「みなさん……まさか知っていましたの？その……この子が何者だったのか
もっ。」

「……うん。」

五人に言われてセシリアはポカッンとしてしまった。

「まあ、そんなことよりも一緒に弁当食べないか？」

「え？は、はあ……」

セシリアは戸惑いながらも一緒に弁当を食べることになった。全員弁当を広げるとそれぞれ食べ比べて見る。

「一夏のから揚げ、衣がサクサクしているうえにジューシーね！」

「箸の肉じゃが……なんか田舎の懐かしい味がする……」

「それはどういう意味だ一夏？褒めているのか？」

「褒めてるのさ。」

「簪さんのハンバーグもおいしいね。」

「テリアモンのパートナーの人の酢豚美味しいね！」

「このエビフライ、美味しい！」

会話が弾んでくる。ピヨモンも楽しそうにしていた。

「そうですわ！みなさん、今度は私のを食べてみてください！」

セシリアは自分の弁当箱を開く。中にはおいしそうなサンドイッチが入っていた。

「おっ、今度はセシリアのか。」

「なかなかおいしそうなサンドイッチだな。アグモンもそう思うだろう。」

「美味しそうだね！」

全員サンドイッチを取り口へ運ぼうとする。そのとき、咄嗟にレナモンは口に運ぶのをやめる。

「みんなそれを口に入れてはいかん！」

「いただきます！」

みんな一瞬手を止めるがトコモンはさつきと食べてしまった。次の瞬間トコモンの顔色がどんどん青くなっていく。

「トコモン！」

簪は慌ててトコモンを抱き上げる。

(ま、不味い……僕……このままだと死んじゃう……)

「トコモンしっかりして！」

簪は何度もトコモンを呼びかける。

「セシリア、お前一体何を入れたんだ！」

「トコモンが苦しがつているぞ!？」

「し、失礼ですわね！私はただレシピと違う材料でアレンジしただけですわ！」

一同が言い合っている中、トコモンの体が光り始める。それと同時に簪のデジヴァイヌも光る。

「トコモン……進化……進化……」

トコモンは苦しみながらも進化する。

「パタモン！」

どうにかパタモンに進化したがその瞬間倒れてしまった。一夏はパタモンを抱き上げて様子を見る。

「どうやら進化の作用で毒（セシリアのサンドイッチ）を解毒したようだ。最もその分体力が減って倒れたようだ……」

「一体全体どうしてですの!?! 私の料理のどこが毒……」

「食べてみればわかる。」

レナモンに言われてセシリアは自分で食べてみる。その瞬間彼女は白目をむいてそ

のまま倒れてしまった。

「セシリア〜!!」

ピヨモンは泣きながらセシリアのことを揺さぶる。

次にセシリアが意識を取り戻したのは保健室で今度作るときはレシピ通りに作ろうと決めるのであった。

東のラボ

「どう東？なんとかなりそう？」

ベルスターモンは作業をしている東に言う。

「そんなことを言われてもね．．．ここまでひどいとは東さんも驚きだよ。ほとんどデータ分解しているんだもん。」

「では、助からないんですか？」

パイルドラモンはカプセルに入っている何かを見ながら言う。

「何しろパル君たちが回収してきた段階でほとんど崩壊しかけていたからね。一樣このまま安静にしていれば大丈夫だけど、意識が戻るのはまだまだ先になるだろうね。」

東はカプセルを見ながら言う。

「ところでクーちゃん、例の物の復元はどう？」

「はい、現在40パーセントを超えましたが何よりもデータが少ないので完了しても本来のスペックが再現できるかどうか未知数です。」

クロエはシミュレーションを行いながら言う。

「うくん、こういうのはやつぱりミーちゃんに聞くしかないか。」

東は頭を掻きながら言う。

「でも、彼女との通信はまだ安定していないからつながる可能性はかなり低いです。何しろ別世界に連絡を取るようなものなんですから。」

「だよね。でも、東さんも残された時間が限られているからね。」

東はコーヒーを飲みながらパソコンを操作し、とある人物と連絡を取ろうと図る。

「繋がってくれるか……なっと！」

しばらくコールが続くとパソコンにある人物が写る。

『そっちから連絡してくるなんて随分焦っているようね、東。』

「ミーちゃん久しぶり〜！ いや〜つながってよかったよ〜！」

東はパソコン画面に映っている水色の髪に眼鏡を掛けた女性を見ながら言う。

「そんでお願いしたいことがあるんだけどいいかな〜？」

『先に要件を頼もうとする性格は相変わらずの様ね。まあ、いいわ。あなたが欲しいのはこれでしょう？』

女性はある画像を東に送る。

「そうそう、それだよ〜！ さすがミーちゃん！」

『全く、あなたは相変わらずね。ベルスターモンは良くあなたのことを呆れずに面倒見ているものだけわ。』

彼女は呆れながら言う。

『あなたでもこれを復元するのは簡単な仕事ではないものね、そっちに詳しいデータを送っておくわ。』

「ありがとうミーちゃん。それともう一つなんだけど……」

『彼のことでしょう？ そうね……一言で言い表すのなら死してもなおデータ体として酷使されている……』

「ストツ〜プ！ いくくんの悪口は言っちゃダメ！」

『あら、そんなつもりで言ったわけではないんだけど？』

束は彼女の言葉を止める。

「それだけ束さんにはあまり時間が残っていないからね。クーちゃんやベルちゃんのことなんだけど頼めるかな？」

『別に構わないわ。ただ、こっちも準備がまだ整っていないからまだ先になるわよ？ 何しろ次元がまだ安定していないんだから。』

彼女がそう言うのとパソコンの画像が荒くなる。

「それはわかっているけど早く来てね。こっちもそろそろアイツらが動こうとしている

から。」

『わかっているわ、あなたも悟られないように気をつけなさい。何しろそこには死にか
けとはいえロイ……』

言いかけたとき彼女の映像が途切れた。

「東様、御神楽様から『グラニ』のデータが送信されました。」

クロエは送信された書類を束に渡す。束はそれをある程度見終えたとクロエに渡す。

「じゃあ、クーちゃんはこのを持って復元作業に戻って。」

「わかりました。行きましょう、パイルドラモン。」

「分かった。」

そう言うときクロエとパイルドラモンは元の持ち場へと戻っていく。

「さあて、東さんはクーちゃん達に会う前にもう一仕事でもしますかね。」

準備と再会

とあるショッピングモール

一夏たちは臨海学校の準備のためにショッピングモールに来ていた。用事と言っても水着を買いに来ただけではあるが。

「ちよつと、そのあなた！これを元の場所に戻しなさい！」

水着コーナーに足を踏み入れた瞬間、近くの女性水着コーナーにいた女性にいきなり命令された。しかし、一夏は無視して海パンを探しに行く。

「待ちなさい！男の癖……」

女性が一夏の肩を掴んだ束の間、一夏はあり得ないほどの殺気を放った。

「……俺に何か用ですか？」

一夏は鋭い目つきで女性を睨む。それはまるで鷹が獲物を狩るような目で女性は恐怖を感じた。

「え、ええつとその……」

「ならどうして俺の肩を掴んだんですか？」

「え、ええ……」

「何故なんだ？」

一夏は更に殺気を放つと女性はあまりの恐怖に白目を剥いてその場で棒立ち状態になり、動かなくなってしまった。

「さて、箒たちが選り終える前に俺も選ぶとするか。」

一夏はさつさと水着を選りに行こうとした瞬間

「一夏？」

聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くとそこには懐かしい友たちが立っていた。

「弾、数馬？」

「やっぱり一夏だ！」

確信した弾は一夏の方へと駆けていく。

「久しぶりだな。」

「久しぶりだなじゃねえだろ！お前ニュースで報道されるまで一体どこに行ってたんだよ！心配してたんだぞ！」

弾は一夏の肩を揺さぶりながら言う。その顔には数年ぶりの再会でうれしいのか嬉し涙が出ていた。

「いやゝすまなかつたな。本当はお前たちにも会いに行くつもりだったんだが……」

「お兄いゝ！どこに行ってるのよ！あれほど待っててねって言ったのにゝ！」

「一夏が謝罪の言葉を言おうとしたときさらに懐かしい声が聞こえ、前の方を見る。蘭も一緒だったのか！」

「い、一夏さん!？」

「一夏を目の前に蘭は思わず顔を赤くした。突然とはいえ友との再会がこんな所で起こるとは思ってもみなかった。

「そう言えば弾、お前たちどうしてここにいるんだ？」

「え? いや・・・蘭の買ひ物の付き合いと数馬と後で学校の宿題のことで・・・」

「おゝい、一夏! まだ選んでいるのか?」

「そこへ更に箒たちがやって来る。その光景に弾たちは驚愕する。

「おい、一夏! この集まりは何だ!？」

「ああ、俺の仲間だが・・・」

「この野郎! 羨ましいことしやがって!」

「弾は思わず一夏にちよっかいを出す。

「おい、お前! 一夏になんてことを・・・」

「落ち着きなよ、箒。アイツらは一夏の友達だよ。」

「箒が止めに行こうとした瞬間鈴が言う。

「友達だと!？」

「久しぶりね、弾。」

シヨツピングモールのレストラン

「え、こっちにいるのが弾とその妹の蘭、そして、こっちが数馬だ。」

一夏は昼食も含めてレストランで弾たちのことを紹介していた。弾と数馬は思っていたよりも馴染んでいたが蘭は少し警戒気味になっていたが。

「それよりも一夏。学園の方はどうなんだよ？」

「はつきり言ってやろうか？俺以外は全員生徒が女だから大変なんだぜ？」

「うわゝ（ある意味羨ましいわ）。」

そんな会話をしながら一同は食事を楽しむ。

「そう言えば一夏。」

「なんだ数馬？」

「お前、千冬さんとは仲直りしたのか？」

「ああ、それがどうかしたか？」

「いや、千冬さん。ドイツから帰国した頃、かなりシヨックだったようだからさ。あれから立ち直れたかなって思って……」

「そうか……」

「あのとき弾の奴がさ、千冬さんがお前のことを見捨てたと思つて頭にきていてよ。思いつきりぶつ飛ばしちまったもんだからさ。」

「おい、数馬！そこまで言わなくてもいいだろ！」

「でも、あの時のお兄本当に頭に血が昇っていたからね。私でも思わずギョツとしたわよ。」

「蘭まで……」

二人に言われて弾は何も言えなくなりました。

「そんなことがあったのか。」

「すまないな一夏。俺、あの時本当に頭にきていたもんだからさ。」

「気にするなよ。でも、本当によかった。三人とも相変わらずの様だな。」

一夏は笑いながら言う。

この日、一夏たちは夏休みに弾たちの所に遊びに行くことを約束した。

とある山奥

「えい！やー！！」

一匹の銀色の体に赤いマントを身に付けたデジモンが熱い日差しの中で修行をしていた。

「てい！とりやあー！」

デジモンは今度は木刀を持ちながら目標を打ちつける練習をする。その隣では白と黒の修道服を着た二人の少女が日陰で飲み物を飲みながらその様子を見る。

「相変わらず頑張っていますね、ハックモン・・・。」

猫耳が付いた白い修道服を着たデジモン、シスタモン、ブランは言う。

「全く、こんな暑い時によくあんなに大声出しながら練習できるもんだわ……」

隣にいるシスタモン、ノワールは飲み物を飲みながらその様子を見る。

「はあ……はあ……」

暑い日差しの中、ハックモンの体からは物凄い汗が流れていた。それでも彼は練習をやめない。彼は内心であることに焦っていた。

「えい！やあああ!!」

「……姉さん。」

「つたく、あのバカ……」

ノワールは日傘をさしながらハックモンの方へと行く。ハックモンは彼女が近づいてきても練習を続ける。

「ちよつとハックモン。」

「やああ……え？何？姉ちゃん？」

ノワールに呼び止められてハックモンは練習を中断する。

「アンタさ……練習するのはいいけどこんな暑い日差しが指すような場所で続けるとアンタ死ぬわよ？」

「それは精神を統一するために……」

「そういう頭の固いところがアンタの一番悪いところなのよ！こんなところで倒れたんじや何の意味もないのよ？」

「そんなことないって！俺はいつも……」

言いかけた瞬間ハックモンは倒れてしまう。

「はあ、だから言わんこつちやないわ。ブラン。」

「はい。」

物陰からブランも日傘をさして歩いてくる。

「ちよつと付き合ってくれない？このバカを少し冷やさないといけないから。」

そう言うとなワールはハックモンを抱き上げ、山の下の方へと歩いて行った。

やまの下に流れている川

ノワールは川でタオルを濡らすとハックモンの体の汗を拭き取る。ブランはハックモンに飲み物を飲ませて膝で休ませていた。

「う、うう……」

「最近いつもこうですね。」

「コイツ、どうも焦り気味なのよ。ここ数カ月、夜も朝も眠くなくときはいつも修行するし。」

ノワールは呆れながらハックモンを見る。

「姉さん、いつも苛めみたいな修行していたのにハックモンのことよく見えていますね。」

ブランは珍しそうに言う。

「か、勘違いするんじゃないわよブラン！コイツが倒れちゃったらガンクウモンに会わせる顔がないでしょ！」

ノワールは顔を赤くしながら言う。

「それにしても、ガンクウモンいつ戻ってくるんですかね？」

「それもそうね。ハックモンの修行に付き合うのはいいけど、ふらつといなくなってもうずいぶん経つけど……」

「うう……お、お師匠様……」

気を失っているハックモンはそんなことを言いながらブランの膝の上で休んでいた。

イグドラシル

「なるほど……それで私にも力を貸せと言うのか。」

イグドラシル内でガンクウモンは腕を組みながら言う。

「デジタルワールドは人間と接触して以来、徐々にだが崩壊をし始めている。それは貴様とてわかっているだろう？」

ドウフトモンは後ろにデュナスモン、ロードナイトモンを従えながら言う。

「確かに……人間界に大きな変化が起こればこのデジタルワールドも悪影響を受ける。」

「だが、オメガモン、マグナモン。そして、デュークモンはそれを信じず人間に加担しようとした。それ故に抹殺したのだ。」

ロードナイトモンが残念そうな態度で言う。

「ガンクウモン、貴様とてこのデジタルワールドでの異変が人間のせいであることはよく分かっているはずだ。我々と共に人間を……」

「だが断る。」

「何？」

ガンクウモンの一言にドウフトモンは顔を歪ませる。

「人間がどうだろうと私には関係ない。私の目的は飽くまで我が弟子ハックモンを新たなロイヤルナイツとして、我が後継者として育て上げること。それ以外に干渉することはない！」

そう言うとガンクウモンはデジタルゲートを展開し、その場から去って行ってしまった。

「やはり相当な頑固者だ……。」

ドウフトモンは呆れた顔で言う。

「どうする？ 後は行方がわからぬスレイプモンだけだぞ？」

「心配には及ばん、現にオメガモン、デュークモンを含めた三人は葬った。後は選ばれていない空席だけだ。」

ドウフトモンはデジタルゲートを展開し、デユナスモンたちと共にその場から消えていった。

???

「申し上げます。計画通り、ロイヤルナイツは人間界への攻撃を着々に勧めよう
です。」

暗い空間の中で一体のデビモンが何者かに報告する。

「そうですか、ご苦労様です。彼らにまた何かの変化があれば報告をお願いします。」

「はっ。」

そう言うとデビモンは飛び去って行く。

「さて、みなさん。計画は我々が思った通りに侵攻しています。」

暗い空間の中で左右に悪魔と天子の翼を持ったデジモンが言う。周りには悪魔、魔獣
のような姿をしたデジモンが並んでいる。一人だけ欠員がいるようだ。

「彼はまた欠席ですか・・・仕方ありませんね。」

「放つて置けばよからう。元々奴はこの計画には賛同していなかったのだからな。」

「まあ、いいでしょう。それでは今回の会議ですが・・・」

暗い空間、ダークエリアでは何かが動き出そうとしていた。

海の思い出

旅館「花月荘」

「本日からお世話になる旅館の方だ。皆、ちゃんと挨拶をしろ！」

「……よろしくお願いします！」

生徒一同はこれからお世話になる旅館の女将に挨拶をした。その元気な挨拶を聞いた女将は微笑む。一夏は自分の部屋が誰となるのか気になっていたが他の女子生徒のことも考慮して千冬と同室と言う訳になった。一瞬動揺したもののその方がブイモンのくつろぎやすいということもあつたのでむしろ安心した。一夏は荷物を置くと水着とタオル、デジヴァイスを持って更衣室に行った。

一夏が海に来た時は既に周辺では女子生徒たちが騒いでいて賑やかになっていた。

「暑いな……。」

一夏は岩辺から海の方を見る。デジタルワールドの海も綺麗だったが現実世界での海を見るのは本当に久しぶりだった。

「あ、一夏さん。ここにいましたの。」

青いビキニを身に付けたセシリアが歩いてきた。

「お、セシリアじゃないか。水着かなり似合っているぞ。」

「そ、それはよかったですわ……じゃなくて、宜しければサンオイルを塗って頂けないでしょうか？」

セシリアは少し顔を赤くしながら言う。

「ピヨモンに塗ってもらえばいいじゃないか。」

「あ、あの子をこんな場所ですすわけにはいきませんわ。」

「しかし、今俺もそんな気分じゃないしな……」

一夏は近くにいたピンクのスポーツツピキニを着た鈴を見る。

「な、何よ!? 私の顔を見て。」

「代わりに鈴が塗ってくれるだとき。」

「はあ!? 何急にそんなこと言ってるのよ!？」

「頼むよ、今度なんかあったら付き合ってるから。」

「うう……仕方がないわね。ほら行くわよ、セシリア!」

「そ、そんな……」

「悪い、セシリア。今度機会があったら考えるわ。」

そう言うのと一夏はセシリアたちと別れ、釣竿と餌を借りて人気のない場所へと移動した。

生徒が来ていない所で一夏はデジヴァイスからブイモンを出し、近くを泳がせながら一人釣りをしている中、考え事をしていた。

(この現実世界に来てからもう数カ月。デジタルワールドではすでに一年以上過ぎている……。こつちで本来なら経験することのない学生生活を楽しんでいるが本当にそれでいいのだろうか……)

一夏は首に付けている首飾りを見る。彼女ももう向こうで自分のことを諦めているのかもしれない。そう考えると心境が複雑になる。

「あ、一夏ここにいたんだ。」

一夏は後ろを振り向くとそこには水着姿の簪と隣にはパタモンがいた。簪はパタモンをブイモンと遊ばせて一夏の隣に座る。

「んで、用事は何だ？」

「いや……。まだお礼言っていないかったから。」

「お礼？ 式式が完成したことか？」

「それもそうなんだけど他のことなんだ。」

簪は少し顔を赤くしながら言う。

「お姉ちゃんに私のことを言ってくれたの一夏でしょ?」

「あく!生徒会長の事か!」

一夏は思い出したのかのように言う。

「あれからね私……少しずつだけお姉ちゃんと話すようになったんだ。お姉ちゃんの方も私のことを見てくれるようになっていってくれたし。」

「そうか、少しずつ仲良くなっているんだな。」

「なんか一夏にはいろいろ助けてもらっちゃったね。その……本当にありがとう。」

「気にするなよ、友達だろう?」

一夏は照れ臭そうに言いながらも釣れた魚を引き上げる。

「簪も少しは楽しんで来いよ。俺といるんじやなくてさ。」

「え?でも、一夏は?」

「俺はちよつと一人でいたい気分なんでね。パタモンの方は俺が見ておくから安心して泳いで来いよ。」

一夏に勧められ簪は一人、みんなのいるところへと戻っていった。

十分後

「一夏、こんなところにいたのか。」

今度は箒がアグモンを連れてやって来た。一夏はそれを確認するとまた海の方を見る。

「隣、いいか？」

一夏が黙っていると箒はアグモンを遊ばせ、隣に座る。

「綺麗だな・・・海って。」

「ああ、デジタルワールドの海も綺麗だった。」

「デジタルワールドにも海があるのか？」

「昔、旅の途中で何度か船とかで渡ったことがある。そのときはチビがライラモンと水遊びをして俺は今のよう釣りをしていた。」

「そして、隣にはリリモンがいたということか。」

「そんなもんだな。」

二人は海を眺める。

過去 デジタルワールドの海

「わ〜い！海だ〜！」

チビモンははしやぎながら海に入っていく。

「コラ、チビちゃん！泳ぐ前に準備体操しなくちゃダメでしょ！」

ライラモンは怒りながらチビモンを連れ戻そうとする。その光景をヴリトラモンは岩場から釣りをして眺めていた。

「どうイチカ？」

隣ではリリモンがヴリトラモンの顔を見ながら言う。

「・・・ダメだ。全然釣れん。」

「場所が悪いのかしらね？」

「そうかもしれないな・・・って、そう言っていた矢先に掛かりやがった！」

ヴリトラモンは急に引き始めた釣竿を引っ張り上げる。

「コイツは相当な大物だ！」

「私も手伝う！」

リリモンも一緒に引つ張る。すると目の前に白い物体が現れる。

「……………」

「あつ、どうもどうも俺はゲソ……」

「帰れ！」

「ああアあんまりだアアアア!!」

自己紹介する暇もなくゲソモンは二人に殴られ、空の彼方へと消えていった。

「なんか期待外れだったわね。」

「そうだな。」

「助けて兄貴く!!」

ヴリトラモンがチビモンたちの方を見るとチビモンとライラモンはアノマロカリモンに追いかけられていた。

「しようがねえな。」

一夏は胡散晴らしに釣竿を折るとチビモンたちの方へ飛んで行く。

「あく待って、イチカ！私も行く〜！」

リリモンは後を追いかけていく。

現在

「……………」

「なあ、一夏。」

「なんだ？」

しばらく懐かしそうに海を眺める一夏に箒は心配そうに声を掛ける。

「一夏は姉さんからスピリットを取り戻したらデジタルワールドに帰ってしまうのか？」

箒の質問に一夏はしばらく黙るが口を開く。

「そう言うことになるだろうな。東さんからスピリットを取り戻せば残りはメルキューレモンが持つ10個のスピリットになる。」

「そうか。」

箒は寂しそうな顔をする。

「だが、しばらく帰れそうにないな。」

「え？」

「メルキュレモンがあのとキアリーナから逃げたがデジタルワールドに帰ったとは考えづらい。それに奴はガブモンの時もそうだが明らかに何か目的があったようなことを言っていた。」

「つまり、奴がこつちの世界に残っているということか？」

「そう言うことだ。だから、メルキュレモンを倒してスピリットを取り戻すまではまず帰ることはできないな。」

一夏は立ち上がるとブイモンに戻ってくるように言う。

「まあ、せっかくの海だ。こつからはみんなの所で楽しくやっていこうじゃないか。」

一夏は釣竿をしまい、箒の手を引っ張る。箒はそのときの一夏の後ろ姿に少し寂しさを感じた。

(一夏は今私達の所にいてくれるがいつかは……)

夜 花月荘

その後、一夏は夕方風呂にのんびり入り、夜の夕食では大宴会場に集まって豪華な食事をいただいていた。本当なら後は部屋で眠りたいところなんだが千冬に外で散歩でもしてろと言われ、ブイモンと一緒に敷地内を散歩しに行った。

「……………」

一夏は夜空に光る星を見る。

「兄貴、何で星を見ているの?」

ブイモンは気になるかのように聞く。

「チビ、俺たちがこの世界に来てからどれくらいたったと思う?」

「えつと……………もう何カ月も経ってるね。」

「俺な……………リリモンにこの空と同じぐらい星が見えていた夜にこんなことを言われたんだ。俺がどっかに行っっちゃう夢を見たって。」

「それで?」

「俺はそんなことを信じなかったからな。だがそれも現実になっちまった。」

「兄貴……」

「リリモンたち……まだ俺たちのことを待っていてくれるといいが……」

「大丈夫だよ。」

「ブイモンは一夏に肩車しながら言う。」

「何故そんなことが言える？」

「だって姉ちゃん兄貴一筋なんだから。兄貴が姉ちゃんのことを忘れない限りは姉ちゃんも兄貴のことを待っているよ！きつと！」

「……ふつ、なんかお前と話すと考えていたことが馬鹿馬鹿しくなった。」

「一夏はまた夜空を見上げる。」

「次の日は装備試験だ。今日はもう部屋に戻ってさっさと寝るぞ。」

「おう！」

「ブイモンは両手を上げながら言うのであった。」

紅椿起動

翌日

臨海学校二日目

この日は専用機持ちちにとってはかなり大変な一日である。本国より送られてきたパッケージのテストが行われ、各種装備試験運用とデータを取るからだ。しかし、集められた専用機持ちたちはある疑問を持っていた。それは専用機持ちではない筈がこの場にいることだった。

「あの織斑先生〜！どうしてこの現場に筈がいるんですか？」

代表として鈴が千冬に質問する。

「それはだな、篠ノ之は今日から……」

「ち~~~~~ちや~~~~ん!!!」

千冬が答えようとした瞬間、何者かが砂煙を上げながら無茶苦茶な速度で此方に走ってきた。

「こ、このプレツシヤーはまさか！」

ウサギのカチューシャに胸元が開いたデザインのエプロンドレス、それは紛れもなく

ISの開発者であり、千冬の友人で箒の姉。そして、一夏が探していた相手篠ノ之束そのものだった。

「会いたかったよ、ちーちゃん！早速ハグして……」

「UUURRRRYYY!!」

一夏は反射的に千冬に接近してくる束にライダーキックを喰らわせようとする。

「おっとー!」

「何!?!」

束はそのキックを紙一重に避けた。

「甘いよ、いっくん!その程度の攻撃で束さんにダメージを与えられると思つて……

アダダダ!?!」

一夏の攻撃を避けた束を千冬はアイアンクローで手加減なしに掴む。

「痛いよ、ちーちゃん。」

「……自己紹介ぐらいしろ、束。」

束は苦しみながらも千冬のアイアンクローを外す。

「やあ!私が天才の篠ノ之束さんだよ!以上自己紹介終わり!」

束のあつけない自己紹介に生徒一同は沈黙する。

「束様、そんな自己紹介では生徒が困るだけですよ。」

少し離れた所から金髪の女性が歩きながらやって来る。顔にはサングラスを付け、胸元を大きく開いたシャツ一枚とホットパンツ、ストール一枚を巻くのみという束と同じくらい独特な格好をしたのでそれを見た生徒たちは更に啞然とした。

「え．．．あ、貴方は？」

「申し遅れました。私は暮海杏子、束様の助手をしています者です。」

杏子と名乗る女性はサングラスを取ると丁寧に挨拶をする。一方の束は箒の方へ行く。

「久しぶりだね箒ちゃん。元気そうでなによりだよ。」

「ね、姉さん．．．」

親しげに接してくる束に箒は戸惑いを感じる。

「まあ、そんなわけで気を取り直して。さあ、大空をご覧くださいあれ！」

束が直上に指差すと金属の塊が落下してきた。

「ジャン、ジャジャンン!! これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』なのだ! 全スペックが現行 I S を上回る束さんお手製 I S だよ!」

金属の塊と思われる物体はどっかの昔話に出てくる桃のように開き、中から真紅の装甲に身を包んだ I S 『紅椿』が現れる。

「、これが私の専用機．．．」

箒は驚きながらも紅椿に乗り、束の元で最終調整を行う。

調整をしている束の変わり、杏子が紅椿の性能を説明する。そのカタログスペックに他の専用機持ちはただ唾然とするばかりだった。

（まだ世界各国が第三世代の開発を競っているときにこんなイレギュラーなものを創り上げるとは……束さんは一体何を考えているんだ……。）

他の生徒が騒いでいる中一夏はそう考えながら調整をしている束を見る。

「さて、箒ちゃん。今度は各部のチェックをするから試しに飛んでみて。」

「は、はい。」

箒は試しに紅椿で空を飛んでみる。そのスピードは順来のISを遥かに上回っており専用機持ちたちはただ茫然とその姿を見ていた。

（す、すごい！打鉄とは比べ物にならないくらい速さだ！これなら一夏と互角の勝負ができる！）

箒は思わずうれしくなった。この紅椿なら一夏の炎龍と互角の勝負が望める。だが一夏はそんな箒の表情に対して複雑な顔をしていた。

そんなときである。

「お、織斑先生！た、た、た、大変です〜!!」

真耶が血相を変えて走り、普段とはまるで違う真面目な表情……と言うよりも大混乱な状態で千冬に何かを話す。その途端、千冬は真剣な目で生徒たちを見る。

「全員注目！ 現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。尚、専用機持ちは全員集合しろ！」

そう言われると女子たちは一瞬騒ぐが千冬の一括ですぐに静まった。

旅館 宴会用の大座敷

暗い照明の中で一夏含める専用機持ちたちは大型の空中投影ディスプレイで映し出されている映像を見ていた。

「数時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の

軍用IS『銀の福音 シルバリオ・ゴスペル』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった。これに対しIS委員会はIS学園に対処を要請、日本政府及び学園上層部がこれを承諾した。よって、今回の作戦は、福音の沈黙及び操縦者の救出だ。」

千冬は映像を見せながら事の重大さを言う。集められたメンバーは全員福音に対する意見を出し合う。

「ちよつと、待った！ここからは私の出番だよ！」

いつから聞いていたのか天井から束がどっかの蜘蛛男のようなポーズで登場する。

「こんな時になんだ束？今作戦を……」

「この作戦はね……断然、紅椿の出番なんだよ！」

「何？」

束の言葉に千冬は顔をしかめる。

「紅椿は高機動パッケージ無しでも超音速飛行が可能なんだよ！さらに展開装甲のスピードがあれば直ぐに福音に近づけるのよ！これが！」

束は紅椿のデータを見せながらどっかのテレビショッピングの紹介のように説明する。

「ちよつと待った。」

「ん？何いっくん？」

東が紅椿の出番と言っている中一夏は険しい表情で言う。

「確かにアンタの言う通りこの作戦には紅椿は最適なのもかもしれない。だが、箒は紅椿を使い始めたばかりでまだ使いこなしていない。それ故に今回の作戦に参加させるのは危険だ。」

「な、何を言っているんだ一夏！私は……」

「そう焦るな箒。別にお前をこの作戦に参加させないとは言っていない。」

箒が問い詰め問うとした瞬間一夏は制止する。

「では、織斑。お前に何か作戦はあるか？」

「俺は、前線で後方に更識、篠ノ之。俺が応戦をするが更識と篠ノ之はバックアップとして待機してもらう。だが場合によっては援護をってもらう可能性がある。」

「待ってくれ！どうして私が待機なんだ！」

「箒……今のお前では作戦をする以前に返り討ちに会う危険性がある。」

「な、何?!」

「お前はさつき紅椿を動かしていたとき、自分でもわかっているだろうがお前はあまりの性能に笑っていた。」

「それは……そうだが……」

「俺が何を言いたいか分かるか？自分の機体の性能に自惚れている奴に前線を任せることはできないと言っているんだ！」

「そ、そんなことはない！私は……」

「静かにしろ、篠ノ之。」

「ち、千冬さん……」

「今回の作戦にまだ専用機を扱いきれないお前を参加させることは本来ならできないことだ。参加できるだけでもいい方だ、諦めろ。」

「う……」

箒が落ち込んでいる中、千冬は命令を下す。

「よし、では本作戦は織斑による目標の追跡及び撃墜を目的とする。そしてバックアップで更識と篠ノ之。残りは旅館に待機。作戦開始は10分後。各員、直ちに準備にかかれ！」

出撃前

「織斑先生、ちよつといいですか？」

「夏は出撃前に密かに千冬に声を掛ける。」

「なんだ織斑？」

「今回の作戦……ブイモンたちを連れて行く。今回の作戦は福音の撃墜だが今の箒は何か焦っている。それ故に暴走する危険があるからその抑えとして連れて行く。」

「構わないが大丈夫なのか？」

「箒のアグモンは完全体にまで進化すれば飛行可能だし、簪もパタモンは成熟期までは進化できる。全員飛行可能なら問題もないだろう。」

「そうか。」

「後、もし俺が撃墜された時のために鈴たちをいつでも出せるようにしておいてくれ。」

「何？どういうことだ？」

「今回の事件……何か嫌な予感がする。」

???

「予定通り、福音は奴らがいるポイントへ誘導させた。」

「そうか。それで潜ませておいた奴は？」

「ああ、福音のコアに寄生虫のように群がってデータを捕食しながら成長している。」

「騎士としてはあまり気が進まんな。」

薄暗い照明で照らされている空間で四人の黒い影が語り合う。

「ヴリトラモンは確実に現れ、福音を撃墜する。最も奴が敗れば話は別だが・・・」

「なぜ奴が負けると言えるのだドウフトモン？」

「あのデジモンは別の世界とはいえ、一度はオメガモンを倒した個体の同類。いくら十

闘士の力を引き継いだ奴とて敵うはずがない。」

「しかし、奴が表に出る前に倒したら・・・」

「そんなことで敗れる程度の機体ならこんなことはしないさ。」

「む・・・」

四人は移動している福音の映像を見る。

「さあ、諸君。それでは見物しようではないか。十闘士の遺志を継いだ者の最後を。」

白い悪魔と覚醒

海岸

作戦開始まで僅かとなり、一夏、箒、簪が海岸で待機していた。彼らの隣にはブイモン、アグモン、パタモンが立っていた。

「そろそろ時間になる。チビ達も準備できたか？」

「OK！いつでも大丈夫だぜ兄貴！」

準備体操をしながらブイモンはVサインをする。一方の箒は考え事をしていた。

（どうしてなんだ？なぜ一夏は私にあんなことを．．．私はただ．．．一夏を守る力が欲しかっただけなのに．．．）

「箒。」

（やはり、恋人がいるからなのか？私はその程度の扱いと言う．．．）

「箒ってば！」

「はっ！」

箒は我に返ってアグモンを見る。

「どうしたの箒？もう作戦開始するのに。」

「す、すまないアグモン。」

箒は謝ると紅椿を展開する。

「箒、パタモン。もし、箒に何かがあったら頼む。」

「わかった。」

「うん！」

「……。」

「箒、どうした？みんな進化させるぞ。」

「あ、ああ！」

三人はデジヴァイスを翳す。すると三匹は光に包まれそれぞれ異なる形態へと変化
する。

「ブイモン、進化！」

「アグモン、進化！」

「パタモン、進化！」

三匹は竜型、人型へと変化する。

「エクスブイモン！」

「ライズグレイモン！」

「エンジエモン！」

三人は目的地へと移動を始める。

「今回は初の実戦だ。気を抜くなよ。」

「俺も兄貴の足を引つ張るつもりはないよ！」

「二人はもしものことがあつたら援護をしてくれ。」

「了解。」

「……。」

「箒？」

「……あ、すまない。了解した。」

箒は複雑な表情で一夏の後ろ姿を見つめていた。

海上

海上で福音と接触した一夏は激戦を繰り広げていた。

「つたく！全方位からエネルギー弾を撃つてくるとはやってくれるぜ！」

一夏は炎龍のバーニアを全開にして、福音が撃つてくるエネルギー弾を避けていく。

「エクスレイザー！」

エクスブイモンも援護をするが福音は大型スラスターを利用してことごとく避けていく。

「この野郎！」

一夏はブレードで福音を斬りつけるが致命傷には至らず掠っただけだった。

「コンセプト的にはセシリアのブルー・ティアーズと同じだが性能は桁違いだな・・・。」

一夏はブレードをしまうと右腕を巨大なクロウに変化させる。

「できれば能力を使うのはやめたかったがこうなったら仕方がない。」

一夏は一気に接近し、福音を斬りつけ背後に回り蹴り飛ばす。態勢を立て直そうとする福音に対して一夏はクロウを飛ばし固定した後振り回すと急いで左腕を銃型に変化させ、狙い撃ちにする。

「す、すごい……あんなに速く動き回れるなんて……」

簪が驚いている中、簪は不安な目で見つめる。

(今までで一番速い動きをしている……ラウラの時でもあんなに速くなかったはずなのに。やはり私は一夏に必要とされていないんじゃないのか……)

簪がそう感じている中一同の脳裏に謎の声が響く。

『マスターを傷つける奴らは……許さない!』

「……声?これはまさか福音の意志なのか!」

次の瞬間、福音は輝き出し形状が変化し始める。

「この期に及んで二次移行!」

「いや、それにしても何かが変わだ!見ろ!」

一夏が言う通り、形態移行には何かがおかしかった。姿を変え始めている福音の装甲にひびが入り、そこから巨大な腕が形成され始める。更にあちこちの装甲もひびが入り始め人型から徐々に巨大な姿へと変化していく。

「ば、馬鹿な!」

一夏たちは唖然とした。虫のような巨大な六本の足、長い尾、そして、狂気を感じさせるような眼。

「……コイツは……」

一夏はこれに似た個体を一度だけ記録で見たことがある。

アーマゲモン。

かつて、突然変異で誕生したクラモンが大量に融合したことによって誕生した究極体デジモン。しかし、ここにいる個体は通常の個体と違って体色が白に統一されており、体のあちこちには福音の装甲が出ている。

「箒、簪！コイツは危険だ！お前たちはすぐに引きかえせ！」

一夏はオメガソードとメテオバスターを展開して攻撃に備える。

「何を言っているの!?そんなことをしたら……」

「コイツは究極体だ！それもムゲンドラモンとは比にならないぐらい。俺が時間を稼いでいる間に……」

「私だって……私だってやればできるんだああ!!」

箒は雨月を展開し、アーマゲモンに向かって斬りかかる。

「馬鹿！簪すまないが先に引き上げて、織斑先生にこのことを報告してくれ。」

「わ、分かった。」

「エンジエモン、しっかり守るんだぞ。」

「わかった、あまり無理なことはしないでくれ。」

そう言うのと簪とエンジエモンは急いでその場から離脱していった。一夏は急いで簪の後を追う。

「私は一夏の足手纏いになりたくない……姉さんがくれたこの紅椿で一夏の役に立つて見せる！」

簪は雨月でアーマゲモンに斬りかかる。雨月は一瞬アーマゲモンの体に傷を付けるがアーマゲモンの体はすぐに修復してしまった。

「ならば！」

簪は一瞬距離を置き、空裂を装備しエネルギー刃をアーマゲモンに向けて放つ。アーマゲモンの尾を切断することには成功したがこれもまたすぐに生え変わって無意味になった。

「な、なんて……再生能力だ。」

アーマゲモンは背部にエネルギーを収束させて上空に放つ。するとエネルギーの塊は雨のように四散し、簪にめがけて降り注ぐ。簪はすぐに展開装甲で防御するがあまりの威力に吹き飛ばされる。

「くっ……こんなことで……！」

箒は自分の死を感じた。目の前には口にエネルギーを集めているアーマゲモンの顔、もはや避ける時間がなかった。彼女は以前言っていた一夏の言葉を思い出した。

自惚れている奴に前線を任せるわけにはいかない。

自分は自惚れていたんだと。やっと手に入れた力を見せたいあまりに。

「箒！逃げろおおお！！！」

遠くからパートナーの声が聞こえる。だがもう間に合わない。彼女は咄嗟に目を閉じた。もうどの道助からない。アーマゲモンの口から強力なエネルギー波が発射される。

しばらく経つてもエネルギー波は届かなかった。

彼女は目を開けると目の前のことに愕然とした。そこには全身の装甲がボロボロになり所々からヴリトラモンの姿が露出した一夏が立っていた。アーマゲモンの攻撃を彼が代わりに受け止めてくれていたのだ。

「い、一夏………」

箒の声に一夏は反応することなく海へと落ちて行った。

「イチカアアアアアアアアア!!」

箒は急いで一夏を回収しに行く。アーマゲモンがそれを追おうとしたがそこへエクスブイモンとライズグレイモンが立ちはだかった。

「よくも兄貴を……よくも兄貴を!!」

エクスブイモンは怒りの拳でアーマゲモンを殴りつける。ライズグレイモンを援護でトライデントリボルバーを放つ。しかし、アーマゲモンは何事もないような顔をして二人を見る。

「くそ！俺のもつと力があれば！」

エクスブイモンは歯ぎしりをしながら言う。

「エクスブイモン……」

「俺がもつと強ければ……もつと早く動けば……兄貴をあんな風になることがなかったのに……」

エクスブイモンは悔しそうにアーマゲモンを見る。アーマゲモンはそんな彼らをあざ笑うかのように咆哮をあげる。

「くそ！あんな奴に舐められてたまるか！」

エクスブイモンはアーマゲモンに向かって突っ込んでいく。

「ま、待てエクスブイモン！」

ライズグレイモンが呼び止めるがエクスブイモンは動きを止めようとしなない。

「箒、俺を究極体に進化させてくれ！」

ライズグレイモンは海面から一夏を回収している箒に向かって言う。

「何を言っているんだ！あの形態は……」

「わかっている！でも、このままじゃアイツがやられてしまう！」

「しかし……」

「俺もエクスブイモンを連れ戻したらすぐに離脱する。だから……」

「わ、わかった……」

箒はデジヴァイスを翳す。するとデジヴァイスは一瞬赤くなりライズグレイモンは輝き出す。

「ライズグレイモン、超進化！」

ライズグレイモンは瞬く間に金色の竜騎士へと変化する。

「ビクトリーグレイモン！」

ビクトリーグレイモンはドラモンキラーを構えるとアーマゲモンに向かって行く。

近辺の孤島

アーマゲモンをビクトリーグレイモンに任せた箒は重傷を負った一夏を回収した後、

近くの孤島に身を隠した。

「一夏！一夏！」

箒は紅椿を解除して動かなくなった一夏を揺さぶる。

「ゴフツ……」

一夏は大量の血を吐き出す。その血の多さに箒は一瞬目を逸らしかける。一夏は焦点が定まらない目で箒を見る。

「箒……逃げろ……」

「何を言っているんだ！お前一人を置いて行けるわけがないだろう！」

箒は一夏を担ぐと肩を貸す。

「何故俺を置いていこうとしない？早くアグモンとチビを連れて逃げろ……」

一夏は箒を突き放すとブリトラモンの姿になって飛ぼうとする。だがすぐに倒れ動かなくなってしまう。

「一夏！」

箒は慌てて一夏を抱く。一夏はもはや瀕死寸前だった。

「みんな……私のせいだ。私が姉さんから紅椿を受け取らなければ……調子に乗って作戦に参加しようとするから……一夏の命令を無視したから……」

箒は涙を流しながら泣き始める。その涙は彼女の瞳から落ち、一夏の顔を濡らしてい

く。すると彼の体が光り始めた。

「い、これは？」

箒は思わず自分のデジヴァイスを見る。自分のデジヴァイスも光り始め、そこから二つの物体が出現する。

「確かこれは姉さんが私に……」

出撃前

「箒ちゃん！ちよつといいかなく？」

準備を整えている箒の元へ束がやって来た。

「なんだ姉さん？私は今準備を……」

「まあまあ、すぐに済む用事だからちよつと箒ちゃんのデジヴァイス貸して。」

箒は少し怪しみながらもデジヴァイスを束に渡す。束は二つの奇妙な置物を懐から

出すとデジヴァイスに収納させる。

「な、何を入れたんだ姉さん？」

箒は不審な目で束を見る。

「私からのちよつとしたお守り。箒ちゃんやいっくんが危ないとききつと助けてくれるよ！」

そう言う束はふらりと去ってしまった。箒は後を追おうとしたが入り口まで来るとすでに束の姿はなかった。

「もしかしてこれが一夏の言っていたスピリットという奴なのか？」

箒が驚いている中一夏の体が自然に宙に浮いた。そして、彼のデジヴァイスからも六

つのスピリットが出現し、箒のデジヴァイスから現れた二つも加わり、一夏を中心に円を描く。それと同時に箒は自分のデジヴァイスに何やらかのメッセージがあるのがついた。

「絢爛舞踏」

「絢爛舞踏? もしかして!」

箒は再び紅椿を展開し、一夏に近づく。

「もし私の考えが正解だったら」

箒は一夏に触れる。

「一夏 死なないでくれ。」

箒が強く願うと紅椿の展開装甲から黄金色の粒子が放出され、彼女を周辺一帯を金色に包み込む。一夏の体は更に光を増し、体が分解・再構築が始まった。そして、それは段々鎧を纏った戦士へと変えていく。

「一夏」

彼女は目の前で見た。

金と赤の鎧を纏い、ビクトリーグレイモンにも劣らぬ大剣を背負った戦士の姿を。

ハイパースピリットエヴオリューション

花月荘 宴会用の大座敷

「そんなことがあったのか……」

簪の報告を聞いて千冬は驚きを隠しながらも言う。

「それで一夏が時間を稼いでいます……」

「炎龍と福音の反応がロストしたのはおかしいと思っていたがまさかISがデジモンに変化するとは予想外の事件だ。」

千冬は首をかしげながら考える。本来の一夏の話ではもしものことがあつたら鈴たちを向かわせるようにと言われていたが簪の話によればアーマゲモンは福音と同化しているうえに搭乗者を人質にしているため迂闊に攻撃できない。

「困っているようだねーちーちゃん？」

そんな千冬の所へまたもや束がひよつこりと顔を出す。

「……何の用だ束？」

「またまた、いっくんたちがピンチなんですよ？」

束はニヤニヤしながら千冬の顔を見る。一夏を心配している千冬は思わぬことを言

う。

「東……まさかだとは思いますが今回の事件、お前が黒幕なんじゃないだろうな？」

「ひどいなくちーちゃんは。いくら私でも我が子（紅椿）を傷つけるような行為をすると思おう？」

「しかしな、このぐらいの芸当ができるのはお前……」

「あの……」

二人が会話している間にパタモンが困った顔をして言う。

「早くしないと一夏とブイモンたちが危ないんだよ。だから早く助けに行かないと……」

「織斑先生、早く二人の救援に私達を行かせてください！お願いします！」

簪は頭を下げてお願いする。千冬は戸惑うがこれ以上時間が過ぎると二人が危ないと判断し、決意を固める。

「仕方ない。更識は鳳、オルコット、デユノア、ボーデヴィツヒと共に織斑、篠ノ之の救助に向かえ！ただ恐らく福音はまだ近辺にいる危険性がある。くれぐれも注意して行動するように！」

「ちよつと待って、ちーちゃん。」

千冬が命令した直後に束が割って入るように言う。

「はつきり言うけど、あの個体の目を誤魔化していつくんたちを助けるのは難しいと思

うよ？なにしろ究極体はそこら辺のデジモンじゃ敵わないほど強いからね。行ってもさらに被害が増えるだけだと思うよ？」

「だつたら他に方法があるのか!?!現に一夏の反応は福音の反応が消えると同時に消えているし、篠ノ之の反応は現場近辺の孤島で留まっている。それに奴はもはや生物だ。獲物を見つげるまでは探し続けるぞ？」

「そんなことがあるのかと思ひましてね・・・杏ちゃん。」

「はい、こちらです。」

いつの間にか来ていた杏子は持っていたケースを開け、そこからタグ端末のような物を見せる。

「なんだそれは？」

「束様がデジモン強化用に調整した進化プログラムです。」

「これをえくつとカンちゃんだったかな？」

「は、はい！（かんちゃんって本音にしか呼ばれたことがないのに何でいうのかな？）」

「これを君たちのデジヴァイスにインストールすれば今よりもつと進化できるようになるよ。」

「ほ、本当ですか!?!」

「僕ももつと強くなれるの!?!」

簪とパタモンは驚いた顔で言う。

「た・だ・し！このプログラムで進化できるのは一段階だけ！それも一回使ったらしくばらく使えなくなるから気をつけて使うようにね。」

「東、これを使ったら救助の可能性はどのくらいになるんだ？」

「見積もっても60パーセントが限界かな。飽くまでも時間を稼いでいる間にいつくんなちを助けると言うのが前提だから。福音の搭乗者を救助するのを踏まえたらかなり下がるよ？」

「方法は？」

「はいはい、説明するから。杏ちゃん。」

東が言うと杏子は空中投影ディスプレイでアーマゲモンの映像を見せる。

「これが通常のアーマゲモン、これを今の奴と重ねて見るとおそらく奴の胴体の中心に福音のコアと一緒に搭乗者が囚われているんだよ。」

「さつきから気になっていたがなぜ福音はそいつに変貌したんだ？」

「ISのコアはネットワークと繋がっているからね。おそらくデジタマの状態で潜入して暴走時にはすでにデータを捕食して成長していたんだよ。それがいつくんなちと交戦して形態移行しようとした衝動でその個体が急成長し内部から外部へと進出しちゃったってわけ。」

「お前ではないというんだな？」

「束さんはそこまで悪人じゃないよ。つてわけで話を戻すけどアーマゲモンの巨体を維持するためにはこのコアが重要になるんだよ。」

「つまり、そこを攻撃して搭乗者ごと救出すれば……」

「倒せなくても一気に弱らせることはできるね。でも、それには究極体クラスの強さじゃないととてもだけど奴の体に傷を付けるのは難しいね。」

「そうか……」

「束さんは今回はいつくんたちを優先して助けることを勧めるよ。流石に今回は分が悪すぎるからね。」

束はそう言うのと部屋から去って行く。簪は残された端末を見ながら言う。

「織斑先生、やらせてください！可能性が低くても私は必ず一夏たちを救出します！」

「僕も頑張るからお願います！」

二人は揃って頭を下げる。

「……どの道これしか方法はなさそうだな。更識は鳳たちを呼び集めてくれ。作戦開始は二十分後だ、分かったな？」

「はいー」

そう言う簪はパタモンと一緒に部屋を後に行った。

「一夏、篠ノ之……無事でいてくれ。」

???

「ここはどこなんだ?」

一夏はヴリトラモンの姿で見知らぬ森の中を歩いていた。その森はどこかで見たような光景で辺りは霧に包まれていた。

「……もしかして俺は死んだのか?だとしたらここはあの世で……」

そのとき、物凄い地震が起きた。一夏は目の前を見る。そこには一体の龍の姿が見えた。姿は自分とそっくりであった。

「エンシエント……グレイモン……」

「待つていたぞ、我が遺志を継ぎし者よ。」

エンシエントグレイモンは一夏を見つめていた。

「俺があなたに会ったということは俺は死んだのですか？」

「それは違う。今のお前は瀕死の重傷を負い、この空間に流れ着いた。」

「この空間？」

「簡単に言えばスピリットの中に込められている我等十闘士の記憶の世界、また別のこ
とで言えば貴様の夢の中と言ってもおかしくないだろう。」

「……」

「どうやらまだわかってはいないようだ。貴様は一時的に気を失いこの記憶の世界へ
と飛ばされたのだ。」

「それは何とかわかりますが俺は一体どうすれば元いた場所に戻れるんですか？このま
まだと……」

「わかっている。だが、そのままの実力で奴（アーマゲモン）に敵うと思うか？」

「それでも……俺は大切な仲間を守りたい。それに約束をしているんだ、必ず帰ってく
るって。」

一夏の目には強い意志が込められているように見えた。それを見るとエンシエント
グレイモンは安心したように言う。

「その心得があればあるのならもう心配いらんだろう。」

そう言うと同時にヴリトラモンの体が光り始める。

「これだけは言っておく。これから先、お前は更に強大な敵と戦うことになるだろう。だがそれを自分の力だけで何とかしようとは考えてはならん。仲間を信じろ。それがやがて強い力を生み出し、お前をさらに強くしていく……」

エンシエントグレイモンの周りに他のデジモンも姿を現す。

エンシエントイリスモン、エンシエントボルケーモン、エンシエントメガテリウムモン、エンシエントトロイアモン。五体のデジモンから光が発せられヴリトラモンを包み込んでいく。

「行け、我らの意思を継ぎし者よ。」

「その力を善に使うか悪に使うかは貴様次第だ。」

「己の力を信じろ。」

「その手で未来を掴め……」

そこから一夏の意識は現実へと引き戻されていく。

孤島

「……………」

一夏はゆっくりと目を開ける。目の前では泣いて後なのか涙の流れた跡が顔に残っている箒の姿があった。

「一夏……………戻ってきてくれたんだな……………」

箒は思わずまた泣きそうになる。一夏は自分の姿を確認する。ヴリトラモンに比べ、龍の要素は減り騎士と言ってもおかしくない姿になり、背中には巨大な剣「龍魂剣」が装備されていた。

「よかった……………」

箒は思いっきり一夏に抱き付き、結局泣いてしまった。

「心配をかけたようだな。」

一夏は箒を落ち着かせると空を見上げる。

「さて、散々待たせちまったようだから行かなくちやな。」

一夏はゆつくりと浮遊する。

「い、一夏！」

箒に呼び止められて一夏は振り向く。

「私は……確かに足手纏いかもしれない。さっきお前が倒れたのも私の責任だったし……でも、私はお前の力になりたいんだ！私も手伝わせてくれないか？」

一夏は箒の目を見つめる。箒は覚悟を決めたのかその意志は強く見えた。

「わかった、着いて来てくれ。」

一夏は優しく箒に言う。

「ありがとう、一夏。」

箒も上空に移動し一夏たちは自分達のパートナーを助けるべく、急行した。

エクスブイモン・ビクトリーグレイモン side

「はあ、はあ……くそ……」

エクスブイモンはボロボロの状態でアーマゲモンを睨み付けていた。

「うおおおおお!!」

ビクトリーグレイモンもドラモンブレイカーでアーマゲモンの体を斬りつけるが切れた部分は自己形成を始めケラモン、クリサリモンへと変化していく。

「こ、こんなことってありか……」

ビクトリーグレイモンはあまりの現実に戦意喪失しかけていた。本来ならエクスブイモンを助けた後、高速離脱する予定だったが斬り落としたアーマゲモンの足が変形し、クリサリモンなどの同種属のデジモンになったため逃げる事ができなくなってしまうのだ。

「俺は……兄貴の敵すら討てないのか……」

エクスブイモンはクリサリモンの集団に包囲される。そこから全個体がインフェルモンに進化し、総攻撃を行おうとしていた。

「兄貴……あの世でまた会おうぜ……」

エクスブイモンは諦め潔く攻撃を受けることにした。そして、インフェルモンはヘルズグレネードを口から発射しようとしていた。

「炎龍撃!!」

光の矢が包囲していたインフェルモンを一掃した。エクスブイモンは思わず矢が放たれた方を見る。

「あ、兄貴……?」

その先には龍魂剣を持った一夏、カイゼルグレイモンと箒がいた。

データスキヤン

海岸

「逃げ逃げ〜！」

海上を移動している兎のような鎧と言ってもおかしくないような物体が付き進んでいる。

「待ちなさいよ、ラピッドモン！」

その後ろを甲龍を装備している鈴が追いかける。更にその後ろにはホーリーエンジェモン、バードドラモン、タオモンなどが続いていた。

「まさか本当に進化できるなんて思わなかったよ。」

シャルロットは進化したタオモンを見ながら言う。

「私もここまで進化するのは初めてだ。」

「ピヨモンも進化できたのは流石に驚きましたわ。」

「でも、一番驚くのはあれよね。」

鈴はしかめっ面で前方を見る。そこにはシュヴァルツエア・レーゲンを纏ったラウラと全身がほとんど金属で覆われたメタルガルルモンが高速で移動していた。

「あれって究極体よね？アイツだけどうしてあそこまで進化できるのよ？（汗）」

「ボーデヴィツヒさんによると鍛え方が違うと言っていましたけど……」

「どんな鍛え方しているのよ……」

「前方に何か見えてきたぞ。」

ラウラは速度を遅くし停止する。全員はその場で止まると目の前の出来事に驚いていた。目の前では巨大なアーマゲモンと竜の顔を持った騎士カイゼルグレイモンが睨み合っていた。そして、彼の後方には箒たちがいる。

「よかった、篠ノ之さんたちは無事の様子ですわ。」

「でも、あのごつつい鎧騎士は誰？」

鈴たちはカイゼルグレイモンを見ながら箒に合流する。

「箒〜！助けに来たよ〜！」

ラピッドモンは慌ただしく言う。

「みんな来てくれたか！」

「一夏は!?見た限りいないようだけど……」

「あれが一夏だ。」

箒はカイゼルグレイモンに指を指す。全員一斉に驚いた顔になる。

「あ、あれが一夏!?!」

「あんなに大きくなるものなの？」

「進化であそこまで変化するんだ．．．そりゃあ、パタモンのそうだったけど．．．」
全員の会話にセシリアは困惑する。

「ど、どういうことですか!? あれはもしかして一夏さんの炎龍の第二移行ですか!?」

「あつ、そう言えばセシリアには教えていなかったね。」

シャルロットはできるだけセシリアが混乱しないように説明する（結局混乱したが）。

「うおおおおお!!」

一夏はアーマゲモンに向かって一気に接近して顔を殴る。巨体に似合わずアーマゲモンは吹っ飛ばされるがすぐに態勢を立て直し、背部と「銀の鐘」から光弾を発射する。一夏は高速移動で回避しアーマゲモンの尾を掴み、ジャイアントスウィングをしたうえに海面に向かって投げた。

「グワアアアアアア!!」

アーマゲモンは怒り、アルティメットフレアを放つ。一夏は背中から龍魂剣を引き抜くとアルティメットフレアを真つ二つにし、突き進んでいく。

「ねえ……あんなのあり?」

鈴は隣にいるメンバーたちに言う。

「あれほどのエネルギー波をあんなやり方で防ぐとは……」

「いくらなんでも無茶し過ぎだと思っけど……」

「まるでドラ○ンポー○の戦いだな……」

一同はそれぞれの意見を言いながら一夏の様子を見る。

「獣王拳!」

一夏は拳に気を込めてアーマゲモンの頭部に直接放つ。怯んだアーマゲモンの隙を利用して一夏は龍魂剣でアーマゲモンの胴体の中心部を突き刺した瞬間、奇妙な現象が起こった。

「何？」

一夏が気がついたとき目の前は真つ暗な空間の中に立っており目の前で戦っていたはずのアーマゲモンはどこにもいなかった。

「馬鹿な。これは一体全体……」

一夏は飛行しながら移動するとどこからか鳴き声が聞こえてきた。

「この声……もしかして……」

一夏は方向を変更して移動する。すると目の前に真つ白なシャツを着て、背中に大きな翼を生やした福音をイメージしたような少女が泣いていた。

「ごめんなさいマスター……本当にごめんなさい。」

「あの少女はまさか……福音の意思？」

一夏は少女の目の前に降り立つ。少女は突然現れた一夏に驚く。

「ひ、ひいー！」

「おい、お前は福音の意識なのか？」

「あ、ああ……」

「あ、突然現れてすまない。お前は福音の意思なのか？」

「は、はい……」

突然現れて驚かしたことを謝罪する一夏に少女は頷く。

「まあ、見た目はこうだが俺はお前の敵じゃない。お前とお前のマスターを助けに来たんだ。」

「で、でもその恰好……」

「見覚えがあるのか？」

「昨日の夜、貴方に似たような連中が私のコアのプログラムに変な卵を送り込んだの。そのときは単なるデータだったんだけど今日になって化け物が生まれて私のデータを壊しながら成長して……」

「似たような連中？おい、それはどんな奴らだった？」

「一人はあなたとは似て龍のような顔をしていて、他の人は西洋騎士の甲冑のような頭、そしてリーダーみたいなのは獅子をイメージしたような奴らだったの。」

「獅子？」

一夏は一つ思い浮かぶことがあった。獅子のイメージをした騎士。

「まさかだとは思いますが……」

「うー！うー！」

福音は突然頭を押さえる。

「どうした!?!」

「またあの化け物が私の中に……い、いやあああああ!!」

「おい!……う、うわああああ!!」

一夏は強制的にその空間から追い出されていった。

「うおお!?!」

一夏はアーマゲモンに振り落とされ、墜落するところを箒に受け止められる。

「大丈夫か一夏?」

「すまないな、もう大丈夫だ。」

「グオオオオオオ!!」

目の前にいるアーマゲモンは咆哮を上げると徐々に巨大化し始めた。

「アイツまさかさらに成長しようというのか!？」

「どうやらその様だな、このままだとパイロットを助けることができなくなる。だが、このままおめおめと引き下がる俺じゃない。」

一夏は龍魂剣を構え直すとアーマゲモンに向き合う。そこへ鈴たちが来る。

「一夏、冗談言っている場合じゃないよ!?! アイツは強すぎて私達じゃ歯が立たないって!。」

「動いていない今が引き上げるチャンスですわ。」

鈴たちは撤退を勧めるが一夏の決意は変わらなかった。

「俺がアイツと接触したとき、福音が助けを求めていた。逃げればアイツのことを裏切ることになる。」

一夏は一同の方に向き直る。

「みんな、すまないが俺に力を貸してくれ。はつきり言って俺一人の力ではアイツを倒すことは不可能だ。みんなの力がどうしても必要なんだ。頼む。」

鈴やセシリアは戸惑うが箒は真っ先に答えた。

「私は一夏が言うのなら協力する。いくら暴走したとかデジモンに取り込まれたから手を付けられないからと言って見殺しにすることはできない。」

「俺も箒の意見に賛成だ。やるだけやってみよう。」

箒の言葉にラウラ、簪、シャルロットも頷く。

「私も軍人としてこの場に奴だけ残すわけにはいかん。」

「みんなで戻らなくちゃ話にならないし。」

「僕もできる限る手伝うよ。」

残されてしまった鈴とセシリアは困った顔をしていたがパートナーの方を見て考えを改める。

「一夏さんだけ残すなんてできませんわ。」

「こうなったらとことんやらないとね!」

「ありがとうみんな。」

すると一夏のデジヴァイスが光りだす。光はエクスブイモンにあたり体が大きくなり始める。

「これは・・・超進化か?」

「エクスブイモン、超進化!」

エクスブイモンの体は大きくなり始め、翼はさらに大きくなり肘には剣の様は刃が生

える。

「エアロブイドラモン！」

エアロブイドラモンは自分の進化に驚きながらも一夏を見る。

「行くぞチビ！」

「分かった兄貴！」

全員で巨大化しつつあるアーマゲモンへの攻撃を始める。

「行くぞ！メタルガルルモン！」

「了解！」

ラウラとメタルガルルモンはレールガンとミサイルを発射しアーマゲモンの目をそちらに向ける。アーマゲモンはすぐにブラックレインを展開し、これを全て相殺させる。

「へブンズゲート！」

密かに背後に回っていたホーリーエンジェモンは空中に円を描くとゲートが現れ、アーマゲモンは亜空間へと引きずられていく。

「奴に効くか分からんが……」

ラウラは一気にアーマゲモンに接近しA I Cを展開する。完全にとまではないかなかったがアーマゲモンに動きは一気に鈍った。

「今だ！」

一夏の指示と同時に全員はアーマゲモンの胴体の中央部に総攻撃を仕掛ける。

「トライデントガイア！」

「ドラゴンインパルス！」

「メテオウイング！」

「梵筆閃！」

「ゴールデントライアングル！」

更に箒たちの一斉攻撃でアーマゲモンの甲殻にひびが入る。

「一夏！」

「うおおおおお!!！」

一夏は龍魂剣を振り下ろしアーマゲモンの甲殻を砕き中に腕を突っ込む。予想外の出来事にアーマゲモンは抵抗しようとするがラウラに変わって、メタルガルモンがコキュートブレスで手足を凍らせた上にタオモンが結界を張り動きを完全に封じてしまった。

「待つてろよ……もうすぐ……これだ！」

一夏はとらえたものを引きずり出す。既に福音は待機状態になっており、パイロットは気を失っていた。

「一夏、早く離れて！私の力でも限界だ！」

タオモンが言うと同時にアーマゲモンを固定していた氷と結界が解ける。コアを抜かれたアーマゲモンは縮小し始め、同じ種族のディアボロモンに退化する。

「姿が変わりましたわよ!？」

「完全に退化したのか？」

「いや、本来はあの姿が究極体なんだ。」

「え〜！それってまだ危ないってことじゃん！」

「いや、よく見ろ。」

よく見るとディアボロモンの顔色はかなり悪そうだった。

「大方コアが抜かれたせいで大半のエネルギーはなくなつて弱っているんだ。」

「じゃあ早く止めを……」

「待つてくれ。元々は何の悪意もなしであんなことをしたんだ。」

「ではどうするつもりなんだ一夏?」

一夏は自分のデジヴァイスを取り出す。

「やったことはないがコイツの悪意のあるデータだけスキャンする。そうすれば普通のデジモンに戻るはずだ。」

そう言うで一夏はパイロットを箒に任せてディアボロモンに近づく。デュアボロモ

ンは抵抗しようとするがもう既に力がなくなっているため攻撃することができなかつた。

「その穢れた魂を……このデジヴァイスが浄化する！」

一夏のデジヴァイスが光りだしディアポロモンは光に包まれる。するとコードのよ
うな物がディアポロモンを多い、一瞬ではあったが周辺を眩い光に包まれた。箒たちが
目を開けるとそこにはすでにディアポロモンの姿はなく一夏の姿だけがあった。

「一夏、あのデジモンは？」

「これだ。」

一夏は自分の両手を見せる。そこには小さなクラモンが眠っていた。

「なんか意外とかわいいかも……」

鈴はじつとクラモンを見つめる。

「信じられませんわね。こんなに小さい生き物がさつきまで戦っていた怪物だったなん
て……」

「でもさ、私達とて考えを誤ればパートナーさえもあの怪物のようになかねない。」

ラウラはそう言いながらメタルガルルモンを見る。セシリアはバードラモンを見な
がら言う。

「もし、私も悪い考えを持っていたらピヨモンもあんな怪物に……」

「そんなことはないと思うよ。セシリアは私に優しいし、私のことを本当の家族のように大事にしてくれるから。」

バードラモンはセシリアに優しく言う。

「取り敢えず戻ろう。織斑先生たちが心配しているだろうからな。箒、重いだろうからコイツと取り換えよう。」

一夏はクラモンを助けたパイロットと取り換えようとする。

「大丈夫だ。このぐらいなら私でも運べる。一夏はさつきの戦いで疲れているから無理しないでくれ。」

「そうか、ならその言葉に甘えさせてもらう。」

一夏はエアロブイドラモンを見る。

「やつと完全体まで進化できるようになったな、チビ。」

「うん！これでデジタルワールドにいるリリモンとライラモンの姉ちゃんにちゃんと合わせる顔ができたぜ！」

エアロブイドラモンが喜んでいると各パートナーデジモンは突然光りだす。

「な、なんだ!?!」

一夏たちは驚きながら見ていたがエアロブイドラモンたちはみんなチビモン、アグモン、ツノモン、トコモン、ポコモン、グミモン、ピヨコモンに退化してしまった。突然

の退化に全員驚いたが慌てて自分のパートナーを回収した。
「箒、助けて〜!! (汗)」

一匹だけ成長期のアグモンは箒の足に掴まりながら叫ぶ。箒は一旦福音のパイロットを鈴に持ってもらい、アグモンを背中に移動させる。

「どうやら全員エネルギーを使い過ぎて退化したよだな。」

「そんな〜! やつと完全体にまで進化したのにまたチビモンからやり直し!?」

一夏の肩の上でチビモンはしょぼんとする。

「そう落ち込まないでよチビモン。」

ツノモンがチビモンを慰める。

「そうだよ、しばらくすれば元に戻るんだから。」

「僕もトコモンの時が長かったから気持ちちはよく分かるよ!」

「み、みんな……」

「さあ、帰ろう。」

一夏は全員その場を去って行った。その直後、ゲートが開き黒い影がじつと一同を見ていた。

「まさかアーマゲモンが敗れるとはな……それにあのヴリトラモンの姿は初めて見た。もしやヴリトラモンは我らロイヤルナイツでさえも凌ぐ力を持つ危険因子かもしれ

ん
・
・
・
・
」

そう言い終わるとゲートは再び閉じ、海は再び静けさを取り戻した。

束、最後の挨拶

花月荘 宴会用の大座敷

「全員よくやってくれた。」

千冬は帰還した一夏たちに言う。

「箒ちやくくん！無事でよかったです！」

束は嬉しそうに言うが箒は少し困った顔をしていた。

「織斑先生、実はコイツが犯人ですよ。今回の事件の。」

一夏は大きな虫かごに入れたクラモンを見せる。クラモンは一つしかない大きい目を開いてじつと周りを見ていた。

「こんなちっちゃい奴が今回の暴走事件の犯人だったのか（汗）。」

「でも、これは戦いで力を使い切ったからこうなっているだけで本気の時はずっと怪物そのものだったぜ。」

一夏が話している間、窮屈なのかクラモンはこつそりと籠を開けて逃げ出そうとする。

「今回はこれで済んだがもし一歩でも遅かったらさらに巨大な奴に……」

「兄貴！アイツ逃げていくよ！」

「何？」

一夏は虫かごを見る。丁寧に蓋を開けられ空っぽになっていた。クラモンは急いで襖を開けようとするが

「織斑先生！救出された搭乗者のことなんですけど……ん？」

クラモンは事件の報告をして来た真耶にぶつかった。

「……あつ……」

全員沈黙する。真耶はクラモンを掴むとじつと見つめる。クラモンは不味そうだと考えて逃げようとするが捕まって動けない。

「山田先生、それは……」

「かわいい！何ですかこの生き物!!」

「「え？」」

真耶はクラモンを上になげながら言う。

「この生き物織斑先生のペットですか？それとも誰かの……」

真耶が目をを輝かせながら一同に聞いてくる。

夕方 露天風呂

「ふう．．．．」

一夏とチビモンは風呂に浸かっていた。

「今日は本当にかっこよかったね兄貴。」

チビモンは泳ぎながら言う。

「ああ、でもあの時の俺の姿は一体何なんだ？」

一夏は空を見ながら考える。

「やはり、あの人しか答えを知らなそうだな．．．。」

夜 花月荘近くの砂浜

既に誰もいない砂浜で二人の人物が立っていた。東と箒だ。

「こんな時間に一体どうしたの？箒ちゃん。」

東は笑いながら言うが箒は態度を変えず真面目な顔でいる。

「姉さん、あなたのおかげで私達家族がバラバラになったのは今でも恨んでいます。」

「それはそうだろうね。でも、聞きたいのはそれじゃないんでしょ？」

「……………いくつか聞きたい。姉さんはいつデジモンの事を知ったんだ？」

箒の質問に東は楽しそうに言う。

「うーんとそうだね。私がデジモンを知ったのは丁度ちーちゃんと知り合ってからすぐ

だったかな？」

「……………」

「そのときは突然変異の生き物だと思っていただけですけどそれからしばらくしてデジタルワールドの存在を知ってからは正直言って驚いていたよ。」

「……………」

「箒ちゃんは知らないだろうけどね。私は結構デジタルワールドで旅をしたことがある

んだよ。他の人たちと知り合って……ちーちゃんにぶたれる以前は誰とも仲良くやろうとしていなかったのもデジタルワールドの存在をできるだけ知られないようにするためなんだよね。」

箒は黙って話を聞く。そんな箒の後ろからアグモンが出てくる。

「じゃあ、僕を箒の所へ送ったのはどうして?」

「アグちゃんを箒ちゃんの所に送ったのは箒ちゃんたちに重大なことをやってもらっためだよ。(本当は寂しい思いをしないようにつて思つて送ったけど)」

「その重大なことつてなんなんだ!」

箒は束に言う。

「それは今は言えないな……でも、時が来たら束さんの知り合いが伝えに来てくれるよ。」

「どうしても今は話してくれないのか……じゃあ、一夏がデジモンになったのはどうしてなんだ?」

「いっくんがデジモンになったのは私でも予想外の出来事だったよ。まさか調べていたデジタルワールドの言い伝えがいっくんのことだったとはね……」

「言い伝え?」

「そうだね……箒ちゃんには話してあげようかな?十闘士のお話を。」

東談 十闘士のお話

大昔、それはデジタルワールドができて間もない頃でした。多くの古代型デジモンがそれぞれの大陸で栄え、ある種は新たな進化をし、ある種は環境に適応できず滅び、それを繰り返していきました。ところがある日、その滅んでいったデジモンたちの残留データがダークエリアに集まり、一体の凶悪なデジモンを誕生させました。

そのデジモンの名はアポカリモン。

アポカリモンはダークエリアから出るとデジタルワールドは闇に包まれ、多くのデジモンを滅びました。もちろん彼らは必死に抵抗しました。しかし、強大な力を持つアポカリモンを倒すことはできず一匹、また一匹と死んでいきました。

そこへある十体の究極体デジモンが立ち上がり、アポカリモンに挑みました。彼らは己の種の存続のために命を懸けて戦い続けた末、アポカリモンの上半身を消滅させることによつて彼の動きを完全に封じることになりましたが、長い戦いの末彼らはほとんどの力を使い果たしてしまいました。しかし、アポカリモンは消滅する寸前こう言い残

しました。

「私は必ずまた蘇る。そのときはもはやだれも止める者はいない。」

十体のデジモンはこの言葉を聞き、いずれまたアポカリモンが復活するのではないかと考えました。そこで彼らは自分達の力を獣と人の形をした物に吹き込み、デジタルワールド各地へと飛ばしました。彼らはアポカリモンをダークエリアに封印するとそれぞれ自分たちの故郷に帰り、そこで生涯を終えました。それから彼らは十闘士と呼ばれ語り継がれたのでした。

花月荘近くの砂浜

「……その話が一体一夏の何に関係するんだ？」

話を聞いた箒は怪しそうに束を見る。

「このお話にはね……続きがあるんだよ。その十闘士の魂の一部を吹き込んだ物はいずれ人の魂が受け継ぎ、必ず悪を再び闇に葬るであろうって書いてあるんだよ。束さん

の仮説だけとそれはおそろくいっくんだと思っただよね。」

東はそう言うとおくびをする。

「はあく。私としたことが久しぶりに眠くなってきちゃったよ。」

「……じゃあ、最後に一つ聞いていいか？」

「何？」

「一夏が昼間になったあの姿もスピリットの影響なのか？」

「それも一様言い伝えに記されていた一つの可能性なんだよ。だから可能性は十分あったわけ。」

「……姉さん、私は……」

「いっくんのことを守りたいんでしょ？」

「……うん。」

「それはいいと思うよ。でもね、これから先の戦いはもつと苛酷なものになる。それだけはちゃんと覚えておいて。」

そう言うとお東は砂浜から去って行く。箒は黙ってその姿を見送った。

「箒。」

アグモンは心配そうに箒を見る。

「大丈夫だ。」

箒はそう言うがなんか落ち着かなかった。

(なんか姉さんとはもう会えないような気がする……)

花月荘 一夏・千冬の部屋

千冬は窓を開け、一人夜の星を見ていた。

「……東。いるんならさつきと入ってきたらどうだ？」

「へへへ、流石ちーちゃん。」

東が部屋にあがって来る。

「いっくんは？」

「お前を探しに行ったところだ。しばらくは戻ってこないだろう。」
「そう。」

そう言うとき東は千冬の隣に来る。

「東、一夏の話が正しければお前がスピリットを持っているのは確かなんだな？」
「その通り、ほら。」

東は千冬に水をモチーフにしたような形状の水のヒューマンスピリットを渡す。
「これがそうなのか。だが一夏の話では闇とか言っていたが。」

「闇の方はね、まだ渡すことはできないんだよ。」
「それはどうしてなんだ？」

「悪いけどちーちゃんにもこれだけは言えないな。でも代りにこれをあげるよ。」
東は寂しそうな顔をしながら千冬に普通の形状とは違うデジヴァイスを渡す。

「これは？」
「ちーちゃんがいつくんを守りたい時にきつと役に立つと思うよ。」

「東……」
「あくこれで心残すことなく行くことができるよ。」

東は背伸びをしながら言う。

「それはどういう意味だ？」

「ちーちゃんやいつくんに会えるのがこれが最後かもしれないということ。」
「え？」

「ちーちゃん、この世界は楽しいと思う？」

東の突然の質問に千冬はすぐに答える。

「一度は最悪だと思っていたが今はそこそこだ。」

「そう。」

一瞬風が吹く。千冬が再び隣を見るとそこにはもう東の姿はなかった。

花月荘 通路

東は杏子を連れて移動ラボへと戻ろうとしていた。

「……いつまで着いて来る気かな？ いつくん。」

東は後ろを振り向く。すると物陰から一夏がチビモンを肩に乗せて出てくる。

「やっぱり気づいていたか。」

「私とちーちゃん部屋で話していた頃から聞いていたんでしょ？ ちーちゃんは気づかなくても東さんにはわかるよ。」

「やっぱ天災だなアンタは。」

「ところで用事は何？ やっぱリスピリット？」

「ああ、アンタのパートナーと思われるデジモンが奪ったって言うのはロイヤルナイツから聞いていたからな。」

「でも、今はあげられないんだよ。いつくんのためにも。」

「俺のためにも？」

「確かにいつくんは強くなっている。昼間の戦いのようにね。でも、闇のスピリットの

闇の力はいつくんでさえも悪魔のような存在にしかねない代物なんだよ。だから調整が済むまで待つてくれないかな？」

「ハツタリかどうかはわからないが俺がそんなことに従うと思ってるのか？」

一夏はヴリトラモンの姿へと変わる。

「アンタの開発したI Sのせいで俺は今の自分になった。それを引き起こしたアンタは責任を感じているのか？」

「勿論だよ。だからいつくんと話せるのもこれが最後かもしれないんだよ。」

「どういうことだ？」

「ゴメンね、いつくん。そして、さようなら。箒ちゃんをよろしく。束さんはもう何もしてあげられないと思うから。」

「おい、話を……」

「ベルちゃん、お願い。」

杏子は何かを床に落とすと煙幕が発生し、一夏は何も見えなくなる。

「くっ！」

一夏は翼を羽ばたかせ煙幕を掃うがそこに束の姿はなかった。

「一体何だったんだ……さようならって。いつもなら『またね〜！』とかいうあの人が。」

花月荘 真耶の部屋

「クラちゃん、お待たせ〜。」

東が千冬と会話する少し前、真耶は少し外に出てジュースを買いに行っていた。「ずっと待っていたから怒っているかな〜。さあて、あの顔でどんな・・・。」

真耶は襖を開ける。

「バアア!!」

「・・・・・・・・」

目の前にいたのはケラモンではなく不気味な顔をしたケラモンだった。突然変異ということもあって短期間で進化していたらしい。ケラモンは不気味な声で真耶を驚かせようとしていたが……

「かわいいく!!!」

「!?!」

真耶の意外な反応にケラモンは啞然とする。

「バカナ!?!オレノカオミテオドロカナイニンゲンガイルナンテ……」

「あれ?クラちゃんもしかして言葉が喋れたんですか?」

「!?!シマッタ!」

「その滑る所もかわいいですね〜!今夜は先生と仲良くおねんねしましょうね〜」

真耶は笑いながらケラモンに言う。

「バ、バケモノダ……オレノコトヲアンナヨビカタシテ、ビビライナンテバケモノダ……(汗)」

この日以降、ケラモンは真耶のペットということになった。

夏の計画とある記憶

臨海学校が終わってしばらくした後、I S 学園は夏休みに入り、生徒たちはそれぞれ自分の故郷に帰ったりしていた。一夏は自宅へと戻り、久しぶりの我が家の掃除をした。

「チビ、雑巾をちゃんとかけろよ。」

「わかっているよ、兄貴！アグモン達が泊まりに来るんだからさ！」

ブイモンはそう言いながら雑巾がけをする。今回に限っては千冬も自宅で細かい仕事をすることにし、今買い物に行っている。

「それにしても四人来るとなると準備するのは大変だな……セシリアは実家、ラウラは軍の用事で帰るって言ったから減って助かったけど……」

一夏は散らかっている家の中を見る。

「随分開けていたからそうだったけど入学で出ていく前にちゃんと全部片付けておくべきだったな……」

「兄貴がそんなこと言ったらダメだよ！俺もすっかり頑張るからさ！」

そう言うブイモンはペースを上げる。

「チビもいいこと言うな。今日の夕飯は手作りプリンでも作るか。」
「マジで!？」

ブイモンは思わず興奮する。すると玄関から声がして来た。

「一夏いるか!」

「こんにちは。」

玄関に行くときと箒とアグモンが鞆を持って来ていた。

「これからお世話になるけどよろしく頼む!」

「ああ、ところで鈴、簪とシャルは? 確か一緒に来るって聞いていたが……」

「更識は生徒会長の付き添いで少し遅くなるそうだ。鈴とシャルロットは途中まで一緒だったんだが大量の買い物袋を持った千冬さんと会って、手伝うから先に行ってくれと言われてみんな私に荷物寄越して手伝いに行ってしまったんだ。」

確かに箒とアグモンの後ろを見ると大きなカバンが二つあった。

「なるほどな。」

「箒く僕、喉が渴いちゃったよ。」

「麦茶ならあるけど。」

「私ももらっていいか?」

「ああ。」

そう言うで一夏は荷物を運びながら二人を部屋に案内する。箒とアグモンは麦茶を頂いた後、一夏の手伝いをした。

夜 織斑家

「うくん、やっぱりこういう集まりの時は焼肉よね！」

鈴は笑みを浮かべながら焼けた肉をタレに付けて食べる。今夜の織斑家の夕飯は焼肉だった。テーブルだけでは足りなかったので今回は小さいテーブルも用意してやっていた。ちなみに今回の材料費は千冬の奢りだと言う。

「簞はお肉食べないの？」

「わ、私は……ちよつとこういうの苦手で……」

「簞はよく食べるね。」

「アグモンも人のこと言えないだろう。」

「鈴、僕の分も取ってよ。」

「はいはい。」

「兄貴酷いよ！それ俺が食おうと思ったのに！」

一同騒ぎまわってはいたが一夏にとってはかなりいい風景に見えた。

(デジタルワールドを旅していた時に宴会とかあつて参加していたがこれ程騒がしく面白いと思ったのは今回が初めてだな……)

思わず笑えた。

「兄貴〜！そろそろデザート出そうよ！」

ブイモンは近くに寄ってきてねだる。

「わかった、わかった。持ってくるから待っている。」

「え!?!デザートあるの?」

「一夏、デザートって何?」

「プリンだ、手作りのな。」

その後、一夏の手作りプリンのおいしさに全員目を丸くしていたのであった。

東のラボにあるカプセル

カプセルに入っている何かは遠い夢を見ていた。

彼にとっては懐かしい夢であった。

彼はとある少年の想像から偶然誕生したデジモンだった。

故に何の知識もない彼を少年はいろいろ教えてくれた。

始めて学校に行った時、はじめて戦った時、初めて進化して戻るのがに苦労したとき。

彼の頭の中ではそれが繰り返し、物語のように続く。

デジタルワールドを旅したとき、はじめて究極体として一緒に戦ったとき……

そして、別れの時……

それは彼にとってはつらいことであった。少年は退化してデジタルワールドに戻る彼を見て別れを惜しんだ。彼はそのとき約束した。

『また一緒に遊ぼうね！啓人。』

それが彼が少年に行った最後の言葉だった。

彼は長い間デジタルワールドで待ち続けた。自分から動こうともした。そして、長い年月が経ち彼も少年の力なしで進化した。

騎士の姿となった彼はイグドラシルの任務で偶然にもデジタルワールドから人間世界へ行くことに成功し、人間の青年の姿になって少年に会いにいった。変わってしまった街。彼は少年の元の家に行った。しかし、そこにはもう知っている人間はいなかった。

た。学校にも行った。学校はいつの間にかなくなっていた。

結局彼が見たのは少年がいなくなってしまうた世界だった。彼は来るのが遅すぎたと悟った。彼は悲しみに堕ちた。

「すまない………啓人……ゴメン……タカト……」

彼が長い時を体験したように少年も長い年月を生き、そして彼が会いに来た時は既にその人生を終えていた。彼はパートナーの墓を訪れ、数十年ぶりに泣いた。あの時と一緒に泣いたのに今はたった一人で……。

東のラボ 現在

「彼、泣いているように見えませんか？」

作業をしながらパイルドラモンが書類の整理をしているベルスターモン（もはや杏子）に言う。

「夢でも見ているのよ、多分昔の夢をね。彼が泣くと言ったらそれぐらいしかないから。」

「でもデータ復元中の彼ですよ？」

「誰だつて忘れたくない過去がある。いくらイグドラシルに忠誠を誓ったと身でもそれは変わらないのよ……。それより『グラニ』の復元は？」

「ミレイさんが送ってくれたデータのおかげで85パーセントは完了しました。後は最終調整と彼の回復次第でいつでも出せる状態になります。」

二人が報告し合っているとき東が普段とは違う真面目な顔で作業室に入ってきた。

「全員ちゅうもくく！」

「?!」

「これから重大なことを言います！」

束はクロエも含めてみんなを集めて言う。

「これからの作業はもうすぐ着く無人島にある束さんラボ（通称 束本部ラボ）に着いたら、ラボの開発物及び資料とかの重要機材をこの『吾輩は猫である（まだ名がない）』に詰め込みます！その後、スピリットと束さんは束さんラボに残って、クーちゃん、ベルちゃん、パール君はそのうち来るミーちゃんに合流してちーちゃんたちの所へ行くように！以上！」

その言葉に三人は沈黙した。

「本当のことなのね、束。」

「こっちはまだ長い間使うからね。後は向こうでちよつと改造……じゃなくて改修するからね。」

束は敢えて顔を見せずに言う。

「束様！本当に自分だけ残るつもりなんですか！？それじゃあ私が助けてもらった恩を……」

「パール君、あの時は私が助けたんじゃないよ。あれは君の生命力と君の生きたいという意志が君を進化させたのであって束さんはそのきっかけを与えただけ。」

「し、しかし！」

「パール君もデジタルワールドに帰ったらちゃんと自分の故郷を守るんだよ。」

東はそう言うのと作業室から出る。クロエは無表情でそれを見送る。

「クロエ、君からも言ってくれ！東様は……」

「あの方は一度決めたことは絶対にやる人です。言っても無駄でしょう。」

「君まで……！」

パイルドラモンはクロエの顔を見て思わずギョツとする。無表情と思っていたクロエの目から涙が流れていた。

「私達には与えられた役割があります。それを実行しなければ……本当に東様を裏切る
ことになります……」

クロエはそう言い残し、部屋を後にした。

「なんか複雑だ……」

「クロエも私ほどじゃないけど東との付き合いは長いからね。」

ベルスターモンは再び書類の整理に戻る。

翌日 織斑家

朝、朝食を終えた一夏たちはパートナーも含めて何かを話し合っていた。

「つまり、前回のアーマゲモンやムゲンドラモンことを考えて明らかにこの現実世界においてもおそらくだがデジタルワールドの異変が影響しているんじゃないかと俺は思っている。」

一夏は今までIS学園で起きた事件をまとめ上げながら仮説を言う。

「じゃあ、一夏はスピリットがこっちの世界に来たのが影響し始めているとも言いたいのか?」

「現にメルキュレモンや謎の勢力がいるようだからな。だが今の俺たちのままじゃ対応するにも限界がある。」

「どうしてよ？この間だって一夏が勝ったじゃない？」

「甘いぞ鈴。俺が倒したと言つてもあれは全員の力で何とか倒したようなもので実際一人だったら危なかったんだ。つまり相手が複数いれば終わりだ。」

「つまり僕たちも強くなりなくちゃいけないってことだね。」

「その通り。」

「じゃあ……修業するって言うこと？」

「え〜！私は面倒臭くてやだ〜！」

「まあ、デジモンたちを鍛えるのも必要だがあんまりやり過ぎると嫌になるだろう。そこで俺と千冬姉のアイディアなんだが……千冬姉、よろしく。」

一夏に言われると千冬は全員にしおりを配る。しおりの表紙には「デジモン強化キャンプ」と書いてあった。

「一夏、これは何だ？」

箒は不思議そうにしおりを見る。

「少し離れた山の方にキャンプ場があつてな。そこでパートナーの軽い特訓とリラックスを兼ねてキャンプしようと言う訳だ。」

「キャンプ？」

「あつ、シャルは知らないのか。」

「キャンプと言うのは……」

そのとき窓のガラスが割れ何かが壁に突き刺さった。

「な、なんだ!？」

「や、矢!？」

「誰だよ!人の家にこんな悪戯するのは……」

一夏は怒りながら矢を見る。矢には矢文が巻き付いており、それを開けて見て見た。

『挑戦状』

織斑千冬へ

○○山の神社にて、貴様に決闘を申し込む!○月○日に来い!

貴様に恐怖を与えられ

た女より』

紙を見て一夏は千冬を見る。

「千冬姉、アンタまさか人に恨まれるようなことしたか?」

「そ、そんなわけないだろう!……あつ。」

「何か思い当たることがあるのか?」

「あれは中学校の時に篠ノ之の道場に通っていた頃だったんだが……」

燃えるろ！ハツクモン！

とある山のキャンプ地

矢文が織斑家に飛んできた日から数日後、一夏たちは予定通りパートナーたちの強化合宿を踏まえてのキャンプに来ていた。本来千冬は学園に戻らなければならぬのだが副担任の真耶に「家族との大事な時間だから」と言っただけでなんとかわりにやっもらうことになった。

「鈴、早く薪を持ってきてくれ！」

「わかってるわよ！テリアモンもしっかり持って！」

「重いよ〜！」

鈴とテリアモンはそれぞれ薪を運んでくる。一方のシャルロットと簪は釣竿とバケツを持ってくる。

「じゃあ、僕と更識さんは魚を釣って来るね。」

「蛇出てこないよね・・・」

「そのときは僕がやつつける！」

「蛇には毒があるぞ。」

「嘘?!」

レナモンの一言で、パタモンは啞然とする。箒とアグモン、そして、ブイモンはキャンプに残ってテントやご飯を炊く準備をしていた。

「そう言えば一夏と千冬さんは?」

「確かこの間の挑戦状とかの場所がこのキャンプ場の近くの神社らしいんだ。一様どういう奴なのか顔は見に行くそうぞぞ。」

「ふ〜ん。」

一同はその後それぞれの役割へと移っていった。

キャンプ場近くの山

一方の一夏たちはキャンプ場近くの山の神社を目指して歩いてきた。どういふ偶然なのかキャンプの日と決闘を申し込んだ日は同じだったのだ。

「なあ、千冬姉。そのときの女の子が本当に俺たちに挑戦しに来ると思っているのか？」
「私の記憶が正しければな……」

千冬 中学生時代

丁度私が中学生の頃だ。篠ノ之道場に少し変わった女の子が道場破りに来てな（と言っても普通は空手とか柔道でやるもんだと思うのだが）、私よりも年下に見えたその子に門下生は舐めてかかった。だがその子はかなりの実力だったんだ。全員ほとんどやられてしまい門下生は私だけになってしまった（このとき一夏と箒は不在）。

「ははははは！こんな程度！弱いもんね！」

少女は笑いながらやられた生徒たちを踏みつけていた。

「もう終わり？ 終わりなら後はそこのおじさんだけだよ！」

少女は竹刀で柳韻さんを指した。柳韻さんは自分から動こうとしたが私が代わりに相手をすると言つて彼女と試合したんだ。

「今度はお姉ちゃんが相手？ せいぜい楽しませてよね！」

少女は試合開始後すぐに私に攻撃を始めた。確かに彼女は強かった。だがそれは自

分の強さを見せつけるためのもので相手への敬意とか全くこもっていなかった。それ故に私は許せなかった。

結局その試合は私の勝利で終わった。少女は初めての敗北だったのかかなり泣いていた。私は彼女がこれ以上同じことをしないよう敢えて追い打ちをした。

「お前程度の実力では私の弟にも勝つことはできん。」

それを聞いた少女は「いつか勝つてやる!」とか言つて大泣きしながら去つて行った。その後、あの少女がどうなったのかは知らない。

現在

「それつて千冬姉の言い方が悪くてこうなつたんじやないのか? それもよりによつて俺のことまで持ち出していたのかよ。」

一夏は少し呆れながら千冬を見る。

「まさかこんな形で挑戦状を送り込んでくるとは思わなかつたんだ。それにアイツぐら

いの腕なら当時のお前でも十分勝機があると考えていたからな。」

千冬はそう言うのと一夏は突然足を止める。

「どうした一夏？」

「何か声がしなかったか？」

千冬は静かにして見る。確かに小さくだが大きな声が聞こえる。

「行ってみよう。」

一夏たちは少し道を外れて声がした方へと歩いてみる。しばらく歩いてみると森に丁度ぼつかりと穴が開いたような感じの場所だがに股の筋肉ムキムキのおっさんとマントを着た爬虫類のような生物が何かをしていた。その近くの木の下には修道服を着た姉妹が座っている。

「あれはガンクウモン……」

「知っているのか？」

「ロイヤルナイツに属しているデジモンだ。ということはあの小さいデジモンの方は弟子のハックモンか……」

二人は茂みに隠れながらその様子を見る。

「どうしたのだハックモン！いつもに比べて動きに迷いがあるぞ！」

「は、はい！すみませんお師匠様！」

ガンクウモンの言葉にハックモンは謝る。

「どうやら何か迷いがあるようだな。」

「……はい。俺、ずっとお師匠様に修行してもらっているんですけど本当に強くなっているんでしょうか? 本当にこのままでいいのかと思つてきて……」

「なるほど、己の力に自信がないということか。ならば……」

ガンクウモンは一夏たちが隠れている茂みの方を見る。

「地神!・神鳴!・神馳!・親父!」

突然、自分の上に浮いているヒヌカムイで突然攻撃してきた。一夏は一瞬でヴリトラモンに姿を変え避ける。

「そこにいたのはわかっていたぞ、ヴリトラモン。いや、織斑一夏。」

「流石に参つたな、でも攻撃するのはひどいと思うぜ?」

「人の修行を勝手に覗き見などするからだ。それよりもこんな場所へ何しに来たのだ?」

「ちよつとした挑戦状さ。」

「うん?」

一夏は手紙をガンクウモンに見せる。すると納得したかのような顔をする。

「大体話がかつた。ハックモンよ、お前に試練を授ける。」

「試練？」

ハックモンはガンクウモンに近づく。

「その人間と行動を共にするのだ。さすれば今のお前に足りないものが見つかる。」

ガンクウモンは千冬を見ながら言う。ハックモンはシヨックなのか驚きながら答える。

「ど、どうして人間なんかと!?俺はお師匠様以外に教えてもらうことなんて……」

「……」

ガンクウモンは黙る。

「俺が修行してもいつまでも弱いから?だから人間に預けるのですか?お師匠様にとつて俺は……」

「否!」

「うわああく!!!」

その瞬間、ガンクウモンはハックモンをアッパーで空高く飛ばした。シスタモン達もその光景に思わずギョツとしたがしばらくしてハックモンが再び見え、地上に激突した。

「ぐへ……」

「ハックモンよ、私が言う足りない?何か?をこの人間と共に見つけ出してみよ。それ

が見つかるまでここに戻ってきてはならん!」

「う……お、お師匠様……」

地面に激突したハックモンはなんとか起き上がって来る。

「お前に授ける試練、それはその人間と共にこの山の上の神社にいる『メルヴァモン』を倒すことだ! さすれば、私の言う? 何か? が見つかるであろう。」

「メルヴァモンだと!?!」

ガンクウモンの言葉に一夏は驚く。

「そんな……今の俺の力じゃまだメルヴァモンには勝てません……」

「それならばそれでよし、弱いままにいるがよい。」

そう言うガンクウモンはその場から離れて行く。

「あつ、ちよつとガンクウモン!」

シスタモン達も慌てて彼のことを追う。その場には一夏と千冬、そして、ハックモンだけが取り残された。

「……お師匠様……俺がいつまでたつても弱いから呆れられちゃったんだ……」
ハックモンはしよんぼりする。千冬たちは何と言えいいのか迷うがハックモンは急に真面目になって言う。

「絶対にお前たちの力なんか借りないぞ! 俺一人でメルヴァモンを倒すんだ! 俺一人の

力で倒せばお師匠様はきつとまた俺の事を見てくれる……絶対にいつて来るなよ！」

そう言うのとハツクモンは神社の方へと走り去って行ってしまった。

「……どうする一夏？相手はまさか……」

「詳しい話はキャンプに戻ってから話す。今は一度戻ろう、箒やチビ達も心配しているだろうし……」

二人は一度キャンプに戻ることにした。

夕方 キャンプ場の近くの山の神社

「……………もうすぐか……………」

神社の拜殿の目の前で一人の女性が大剣を持ちながら座っていた。

「もうすぐだ……………もうすぐであの時のリベンジを……………」

「おい!メルヴァモン!」

「ん?」

彼女、メルヴァモンが目の前を見るとそこにはハックモンがいた。

「なんだ、デジモンには挑戦状を送った覚えはないんだがな……………」

「この俺と勝負をしろ!」

「勝負?別に時間もあるからいいけどアタシに喧嘩を売った奴には……………」

メルヴァモンは大剣を構える。

「容赦しないよ。」

(勝つてみせるんだ……………そうすればきつと!)

キャンプ場 夜

一夏たちは夕飯を終えると焚き火を囲んで話をしていた。

「メルヴァアモンと言うのはオリンポス十二神に例えて、知恵・勝利を司る女神ミネルバに当たる名のデジモンだ。」

「オリンポス十二神？」

「ギリシャ神話の中で大神とされるゼウス以下十二の神々のことを指す語だよ。」

疑問に感じていた鈴の隣でシャルロットが助言する。

「しかし、それにしても変よ。本来ならミネルバモンって名前になるんじゃないの？」

「メルヴァアモンは本来ミネルヴァアモンと言うデジモンだったんだ。しかし、どういうわけかいつの間にか改名したらしい。」

「それはどういうことだ一夏?」

「メルヴァモンはミネルヴァモンの頃と比べてかなり外見が変わってらしくてな。本人も気づかれないのがシヨックで改名したらしい。」

「ちなみにそのミネルヴァモンの姿は?」

「これだ。」

一夏はデジヴァイスから映像を見せる。そこには大剣と盾を持った小柄な少女の姿が写っていた。その映像を見て千冬は口を開いて驚いていた。

「どうしたんだ千冬姉?」

「似ている!あの時道場に來た少女と!」

「え?」

「じゃ、じゃあ道場に來ていたのは人間の姿になっていたミネルヴァモン!」

千冬は神社がある方を見る。

「一夏。」

「どうやらハックモンの奴は俺たち姉弟の因縁(笑)に巻き込まれちゃったようだな…」

一夏たちは急いで神社の方へと行く。

神社

「おりゃあ！」

「うわああ!!」

メルヴァアモンの大剣の一撃でハックモンは吹き飛ばされ、近くにあった木に激突する。木は衝撃に耐え切れず、倒れてしまった。ハックモンはそれでも立ち上がってメルヴァアモンに向かって行く。

「甘いー!」

「うわあ!」

メルヴァアモンの強い蹴りにハックモンはまたも吹き飛ばされ、とうとう倒れてしまった。

「……………やっぱり勝てなかった……………お師匠様……………ごめんなさい……………」

「ふん!だらしないわね……………もう立ち上がる気力もなくなるなんて……………ア
ンタの力はそんなもん?」

「やっぱり俺がロイヤルナイトになるなんて……………お師匠様の跡を継ぐなんて……………
無理だったんだ……………」

ハックモンがしよげている姿を見てメルヴァアモンはため息をつきながら言う。

「アンタは昔のアタシによく似ているわ……………強くなろうとガムシヤラに努力して……………
突っ走って……………答えを見つけ出そうとする。それ自体は間違っていない。でも、そ
んなんじや本当の一人前にはなれないのよ。本当の一人前には本物の強さ……………自分
の力に自惚れず、何かを守ろうとする覚悟が必要なのよ。アンタにそれがある?」

「俺には……………そんな……………」

「ないってことね。」

メルヴァアモンはそう言うのと剣を振り上げる。

「それじゃ……アンタの戦いはここまで。アタシがアンタの戦いを終わらせてあげる。」
メルヴァアモンは剣を振り下ろす。だが剣はハックモンにまで届かなかった。

「え？」

ハックモンは上を見上げるとメルヴァアモンの剣をカイゼルグレイモンの龍魂剣が受け止めていた。

「誰よアンタ？」

カイゼルグレイモンは剣を弾き飛ばすと距離を置き、ハックモンを降ろす。既に後ろには千冬、ブイモン、箒、アグモン達が来ていた。ハックモンは驚いた顔をしていたがメルヴァアモンは千冬を見た瞬間思わず笑った。

「どうやら本当に来てくれたみたいね、織斑千冬。」

「やっぱりあの時の奴だったか。」

「アンタに負けてからアタシはデジタルワールドに戻って一から修行をした。アンタにリベンジをするためにね！」

メルヴァアモンは大剣で千冬に指差す。

「と言うことはその騎士型のデジモンはアンタのパートナー？」

「私の弟だ。」

「ふくん、まあいいわ。あの時のようにアタシはアンタと勝負を……」

「なんで来たんだよ!」

「ん?」

メルヴァモンが言いかけたときハックモンが千冬に怒鳴る。

「ついて来るなつて行つただろう……もういいんだ……俺はもう……」

「たわけ!」

「!?」

ハックモンは千冬にぶたれる。ハックモンはいきなりの攻撃に驚く。

「なんで諦めようとする?お前は今まで何のために修行してきたんだ?」

「そ、それは……」

「自分の師の跡を継ぐためなんだろう?ならまだやれるんじゃないのか?」

「お前らに何がわかるんだ!どうしてそこまで言えるんだ!お師匠様に言われたから?」

それだつたらもう言わなくても……!」

言いかけたハックモンはカイゼルグレイモンの後ろ姿を見てふとガンクウモンの言葉思い出す。

『ハックモンよ、ロイヤルナイツの称号は誰かに与えられるものではない。世界を守ろうとして戦う姿を見ていつからかそう呼ばれるようになるのだ。守る者になれ!ハックモン!その手で世界を、友を、そして……デジタルワールドを!そこから生まれ

る鋼の意思は必ずお前をロイヤルナイツへと導く!」

「そうか、分かったぞ!俺に足りなかったものが!それは戦う意味……誰かを守ろうとする覚悟だったんだ!一番大切だったのはそれだったんだ!」

ハックモンは千冬から離れるとカイゼルグレイモンの前に立つ。

「俺は戦う……この庇ってくれた人のためにも……大事なことを思い出させてくれただの人のためにも!」

ハックモンの反応を見てメルヴァアモンは一瞬驚いていたがすぐにやりと笑う。

「はははは!少しはマシな面になったじゃない!いいわ、アンタのその覚悟が本物かどうかもう一度試してあげる!全力で掛かってきな!」

メルヴァアモンは剣を構える。すると千冬のデジヴァイスが光り始めた。

「な、なんだこれは……もしかしてこのデジヴァイスはIS!?!」

デジヴァイスは千冬の右腕に装着されると展開されていく。その姿は一夏の炎龍と箒の紅椿を足して割ったような感じだった。コードには『白蓮』と表示されていた。

「千冬姉のデジヴァイスは千冬姉のISの待機状態でもあったのか!」

「まるで一夏の炎龍の体に私の紅椿の展開装甲を合わせたような感じだが白と言うのは……」

一夏と箒は驚いていたがむしろ鈴たちのリアクションの方がすごかった。

「この勝負……私も加勢する!」

千冬とハックモンはメルヴァモンへと挑んでいく。

対決！千冬対メルヴァモン！

神社

「行くぞ！織斑千冬！」

メルヴァモンは大剣を振り上げながら向かってくる。千冬はすぐに白蓮の武装を確かめる。

「雪片参型！」

肩の展開装甲から柄が現れ引き抜く。雪片は大剣を受け止めるとその周辺に衝撃波が起こる。思わず一夏は全員を庇う。

「大丈夫かみんな！」

「だ、大丈夫だ。」

「なんなのあの衝撃波は!？」

「離れている私達でもこうだから直接受け止めている織斑先生は……」

一同は心配な顔で千冬を見る。千冬は大剣をはじき返して距離を取る。

「やるねえ……それだからこそやりがい……」

「よそ見をする前に周りを見たらどうだ？」

「何?・・・!」

メルヴァモンは咄嗟にその場から離れる。彼女のいた場所にはハックモンが着陸し、すぐに千冬の方に戻る。メルヴァモンは一瞬避けるのが遅かったのか頬から血を流す。

「舐めた真似をしてくれたもんね・・・」

「言っただろう?この勝負はお前と私ではなくハックモンとお前の戦いだ。私は協力しているに過ぎない。」

「私にとつては同じことだ。」

ハックモンは千冬を見ると腕が震えていることに気がついた。どうやらさっきの衝撃波かなり効いたらしい。

「この人はあの攻撃を無理して・・・」

「ハックモン。」

「は、はい!」

「私のことは千冬と呼んでくれればいい。それに私のことは気にするなお前は目の前のアイツを倒せばいい。」

「わ、分かったよ千冬。」

ハックモンは再びメルヴァモンの方へと向き合う。

デュノア社 会議室

ここはデュノア社。シャルロットの実父の経営しているIS企業なのだがここで何やら不穏な動きがあった。

「現在デジタルウェイブ発生装置はどこまで完成している？」

デュノア社長は部屋に集められている三人に声を掛ける。

「完成間近にまでなっているがパワーが不安定で調整に手間取っている。」

「調整完了まであとのくらいかかる?」

「早くて3カ月……」

「二カ月で完成させろ。」

「わ、分かった。」

その会議の中で一人だけ黙っている男にデュノア社長は声を掛ける。

「どうしたデュナスモン? 浮かない顔をして?」

「い、いやなんでもない……」

「貴様……まさかあの女のことをまだ思っているのか? かつてのパートナーを?」

「そ、そんなことはない! 私のイグドラシルへの忠誠心に揺るぎはない!」

「ほう? ではなぜ我々がこのデュノア社を乗っ取った時なぜすぐにあの女だけは殺さなかった?」

「そ、それは……」

デュナスモンは黙る。その中で眼鏡を掛けたキザな顔の秘書官はデュノア社長に言う。
「ここで本来の名前で呼び合うのは別に構わないがいつまでこの姿をせねばならん

だ。私は人間の姿と言うのはどうしても気に入らない。」

「致し方あるまい。人間界において我々の本来の姿ではあまりにも目立ちすぎる。」

「では決行は……」

「もう決まっている。いよいよ実行だ。我々ロイヤルナイツによる『人類抹殺』の計画が。」

神社

「はああ!ナイトストーカー!」

メルヴァモンは左腕のメデュリアを伸ばし、ハックモンを飲み込もうとする。

「させん!」

千冬は展開装甲を切り離しビットにしてハックモンを乗せる。うまく避けたビットはメルヴァモンに近づき、ハックモンは飛びかかる。

「ファイフラッシュ!」

「うおお!」

思わぬ攻撃にメルヴァモンは怯む。千冬はこの瞬間を見逃さず、雪片参型を構える。すると肩と背部の展開装甲が分離、刃に装着され巨大な大剣へと変える。

「で、デカイ!」

ハックモンを追い払ったメルヴァモンは大剣を構え直しジャンプし前転しながら千冬に振り下ろす。

「ファイナルストライクロール!!!」

メルヴァモンの攻撃と同時に大剣とかした雪片参型は光を纏い、メルヴァモンの大剣オリンピア改とぶつかり合う。するとオリンピア改に亀裂が走る。

「何!」

「はあああああ!」

千冬が気合の一声を上げると大剣の出力が上がり、オリンピック改は折れてしまいメルヴァモンは吹き飛ばされた。

「馬鹿なああああああ!!!」

メルヴァモンは吹き飛ばされ、地面に激突する。ハックモンは様子を見て見るが既に彼女の全身は傷だらけになり気を失っていた。

「すごい……倒しちゃった……千冬がメルヴァモンを倒したんだ!」
ハックモンは千冬を見ながら言う。

「否! お前と千冬で倒したのだ! ハックモン。」

「え?」

ハックモンは声をした方を振り向くそこには師であるガンクウモンが立っていた(簡単に言うると一夏たちの後ろ)。

「お、お師匠様!」

「え!? 誰このおっさん!」

「全然気がつかなかった。」

「でも、お師匠様。どうして……現にメルヴァモンは千冬の攻撃で……」

「では、お前が時間を稼がなければ千冬はどうやってメルヴァモンを倒していたという

のだ?」

「そ、それは……」

「それにお前自身は気づいてはいないが成長期であるお前は二人がやり合っているとき邪魔者になっていったか?」

ハックモンは千冬の方を見る。千冬は首を横に振る。

「私とシスタモン達との修行でお前は確かに強くなっていた。だが真のロイヤルナイツになるにはそれだけではダメなのだ。何かを守ろうとする志と思い、そして、力が合わさった時ようやく真のロイヤルナイツへの道が開かれるのだ。それは私達との修行だけでは決して得ることができぬものなのだ。」

「だから……お師匠様は俺を千冬に任せたんですね。」

「うむ、その甲斐があつたようだな。」

ガンクウモンがそう言うのと既に白蓮を解除していた千冬のデジヴァイスが光り、ハックモンに向けられる。ハックモンの体は光り始め、形状を変えていく。

「え!?まさかの進化!?!」

鈴は驚いた顔で言う。

「でもなんか変。まだ姿を変えている。」

そこへ今更ながらシスタモンたちが来る。

「ガンクウモンったら急にいなくなったと思ったたらこんなところへ……」

「姉さん大変です。ハックモンが進化しています。」

「そう……って！ブラン、アンタ落ち着きすぎよ！」

彼女たちが騒いでいる中でハックモンはようやくやく一体の聖騎士型デジモンへと進化する。

「こ、これは……」

「新たなロイヤルナイツ、ジエスモンの誕生だ。新たな姿となったお前が、私の跡を継ぐのだ。」

「はい！俺、やってみます！」

「やってみるのではない！やってみせるのだ！ジエスモン！」

「はい！……ありがとうございました、師匠！」

この光景にノワールは号泣していた。

「姉さんすごく泣いていますね。」

「な、泣いてなんかいいわよ！これは汗よ！」

「君にも迷惑をかけたな、織斑千冬。」

「いや、私もいい経験させてもらった。」

「君にはすまないと思っっているがこれからしばらく我が後継者ジエスモンと共に行動を

「してはもらえまいか?」

「なぜ?」

「これから先おそらく大きな戦いが起こる。そのときは私も君たちと共に戦うことになるであろう。そのときにまた今日のように力を貸してやってほしい。」

「……わかった。あなたの後継者のことは任せてくれ。」

「ジエスモンよ、パートナーを守り抜いて見せよ!」

「はい!」

「元気でねハック……じゃなくてジエスモン。」

「ありがとう、ブラン姉ちゃん。」

「アンタね〜!迷惑かけるんじゃないや……ひつく……ないわよ〜! (号泣)」

「わ、分かったよノワール姉ちゃん……。(汗)」

そう言うときガンクウモンたちは去って行く。その場には一夏たちと気を失っているメルヴァモンのみが残されていた。

「……それでどうしようか?このメルヴァモン?」

シャルロットは気を失っているメルヴァモンを見る。

「このまま放置すると変なコスプレ姉ちゃんだと思われるかもしれないから……ん?」

一同が考えていると千冬のデジヴァイスがまた光り始め、メルヴァモンに放たれる。すると彼女の傷は徐々に回復し、折れたオリンピア改も元通りになっていた。

「え!? 一体全体どうなっているの!?!」

簪は驚きながら言う。

「もしかして千冬姉のデジヴァイスは二体以上パートナーを持てるというのか?」

(束の奴……さっきの白蓮といい一体何を組み込んでいるんだ!?)

「う、うう……」

メルヴァモンがゆっくりと目を覚ます。彼女は起きた瞬間体の傷と剣が直っているのに驚いた。

「一体全体何が起こって……」

「千冬さんのデジヴァイスの光で直したんだよ。」

鈴があっさりと言う。メルヴァモンは照れ臭そうに千冬を見る。

「な、なんかよく分からないけど……あ、ありがとう。」

「あ、ああ……」

メルヴァモンは剣を背中に背負うと一同の前を見る。

「アタシはまた修行をする、アンタに負けられないようにね! 今度会ったときは勝たせてもらうぞ!」

メルヴァモンは千冬の顔を見ながら言う。その顔は何か楽しみができたのかのよう
に嬉しそうだった。

「望むところだ。」

「それからえつと・・・」

「ジエスモンです。」

「ジエスモン、アンタも修行するんだよ。一対一で勝負できるようにね。」

「勿論。」

「後・・・織斑一夏。」

「なんだ?」

「今度会ったときはアンタと勝負してもらおうわ、楽しみにしてるわよ。」

「ああ、言っておくが俺は負ける気はないぜ。」

そう言うのとメルヴァモンは去って行った。

「俺たちもキャンプに戻るか。」

「そうだな。」

「僕も眠くなってきたやつた・・・」

一夏たちは山を下りていく。この日、千冬とジエスモンはパートナーとなった。

「よろしく、千冬。」

「こちらこそよろしく頼む、ジエスモン。」

番外的な短編集

『真耶とケラモン』

真耶自宅

「ケラちゃん、ただいま。」

「オカエリ！マヤ！オカエリ！」

真耶が買い物袋を持って玄関に入ってくるとケラモンがはしやぎながら抱き付いてきた。臨海学校を終えた後ケラモンは真耶の家で生活している。最初は自分に驚かなかった真耶に恐怖を感じていたケラモンだったが真耶と生活していくうちに次第に自分のことをまっすぐ見てくれる真耶に懐くようになっていった。ケラモンは真耶を引っ張りながら部屋の中へと行く。

「ハヤクアソボ！アソボ！」

「あくちよつと待ってて。織斑先生に頼まれて仕事増えちゃったからそれ終わったら遊んであげるから。ね。」

真耶はそう言うのとケラモンに抱き付かれたまま夕飯の準備をする。

夕食を終えた後真耶は早速仕事にとりかかっていた。隣ではケラモンがその様子を見ていた。

「マヤツテ、ドウシテシゴトシテイルノ？」

「それは生活するためには大事だからですよ。」

「ニンゲンノオンナハイバルノニドウシテマヤハイバラナイノ？」

「女の人がいばるのは女尊男卑の社会だからと思うけどそう長く続かないかもしれないかな？」

「ドウシテ？」

「だって織斑君がI Sを動かしたことによって今までの常識を覆しちゃったから……それにこれから先も同じ人が出てきたらもっと変わるだろうし。」

「マヤツテ、オリムラセンセイスキナノカ？」

「尊敬しているんですよ！だってI Sの競技大会ではV2を飾って、たくさんの人から『ブリュンヒルデ』と呼ばれて尊敬されているんですよ！それに比べて私と言ったら……」

真耶は少し悲しそうな顔をする。

「マヤハヤサシイノニソンケイサレナイノカ？」

「ケラちゃんが考えているほど世の中優しくないんですよ。私も頑張ったけど代表にまではなれなかったし……」

「マヤハケラモンニヤサシクシテクレルシ、ケラモンノコトヲカワイイツテイツテクレタ。ダカラマヤハケラモンニトツテハイチバンスゴイヒト！」

「ケラちゃん……」

真耶は思わずケラモンを抱きしめる。

「そうですね……丁度一区切りもついたら一緒に風呂でも入りましょうか？」

「ハイルハイル！ケラモンコンドコソナガブロデカツ！」

「ふふふ、私だつて負けませんよ！」

この数十分後、真耶とケラモンはゆでだこの状態で倒れた。でもその顔は何か満足しているような顔だった。

「ケラモンハマヤノコトガダイスキ。ダカラコレカラムズツトイツシヨ。」

ケラモンはそう言いながらその日の夜も真耶の胸の中で眠るのであった。

『箒&アグモンストーリー』

私がアグモンに出会ったのは父さんと母さんと別れてからすぐだった。その日も学校で同級生に『男女』と馬鹿にされ、制裁をくわえたら先生とそいつらの両親に怒られた。アイツらは笑って私だけは落ち込みながら家に帰ってくる。当然ながら私の家には誰もいない。いるのは私だけだった。

「う、うう……」

私はしゃがみこんで泣いた。私の味方は誰もいない。いるとしたら引越す前に一

度助けてくれた一夏ぐらいたった。でも、その一夏にも会えない。故に私は孤独だった。そんな時、家のチャイムが鳴った。私が玄関に行くところにはサングラスで目を隠し帽子を深く被った人が大きな段ボール箱を持っていた。

「宅急便です。」

「私は何も頼んでいないのだが……」

「まあまあ、宛先はここなので。」

そう言うのと配達人は荷物を置いてすたこらきつきさと行ってしまった。私が箱を開けてみるとそこには見たこともない大きな卵が入っていた。

「な、なんだこれは!?!」

私は他に何か入っていないか調べて見た。すると一通の手紙が入っていた。

『箒ちゃんへ』

元気? お姉ちゃんのせいで寂しい思いをしている箒ちゃんにプレゼントを贈ります! この卵を大事に温めてね。そうすれば箒ちゃんのお友達が生まれるよ。どんな子かはわからないけどきつと力になってくれる。だから頑張つてね。

P. S. 女の子らしくならないといっくんにもまた会えたとき嫌われちゃうぞ!

箒ちゃんの

お姉ちゃん 東さんより。』

「……姉さん？」

どうやら姉さんからの贈り物だったらしい。私は半信半疑で取り敢えず卵を自分の布団で温めることにした。

そして、一週間ぐらいが過ぎた頃、学校から帰ってきたら布団の中で黒い生き物が生まれた。それがボタモン、今のアグモンだ。私は一瞬毛皮で手足が隠れている黒猫に見えてしまった。最初は震えて物陰に隠れていたが私が声を掛けるとピョンピョン跳ねながら近寄ってきた。なんか弟ができたのかのように嬉しかった。

更に三日経つと私が予想もなかった出来事が起きた。ボタモンの進化だ。朝私が寝ていると

「箒……箒！」

「う……誰だ？」

私が目を開けると目の前には進化したボタモンことコロモンが目の前にいた。突然のことだから私は流石に悲鳴を上げた。

「きゃあああああ!!!」

「箒、起きた起きた〜！よかつた〜よかつた〜！」

「私のことを知っている?」

「箒起きたよかった〜!」

まだパジャマ姿で驚いている私の周りをコロモンが跳ねまわりながら言う。コロモンは笑顔で私の目の前に来る。

「お、お前は何なんだ!?!」

「僕、コロモン! 箒の友達!」

「友達?」

「箒昨日言ってた! コロモン友達だって!」

「お、お前もしかして・・・」

「僕、昨日までボタモンだったんだよ!」

コロモンは笑いながら私に話した。

その日を境に私には楽しみができた。コロモンと言う友達ができたから。

コロモンは私の学校の出来事を聞いて一緒に行きたいなということもあれば私が悪いことは悪いと言って私のことを指摘した。流石の私もそれを受け入れるしかなく何とか直そうと努力した。特に料理に関してはかなり言われたもんだな。コロモンがコンビニ弁当の味は変とか言って手作りに切り替えたときに。

私が中学に入るころにコロモンはアグモンに進化した。アグモンに進化すると私と一緒に剣道の練習をしてみたりといろいろ楽しい時間が過ぎた。その頃になると小学生時代の頃の私が恥ずかしいと思えるほど自己中心だったなと考えるようになる。

「……つと言つて私が一夏を鍛えようとしたんだがアグモンはどう思う?」

「それ絶対箒が悪いよ。友達のを聞かないでやるんだから。」

「やっぱりそうか?」

「うん。箒が悪いよ。」

「……うう、もし一夏に再会したときに合わせる顔がない……」

そんな話を話しながらあつという間に三年が過ぎ私はIS学園に入学した。本当はまだいろんな話があるんだけど今回はここまで。続きは……

「箒……早くしないと一夏が怒るよ!」

おっと、アグモンの声だ。早くしないと一夏の機嫌を悪くしてしまうな。私は急いで巫女服に着替える。

今日は私の叔母、雪子おばさんが管理している篠ノ之神社の夏祭り。もう既に一夏が鈴たちとこの間会った五反田たちと一緒に来ているはずだ。

今日は私の巫女服姿を披露するんだ。一夏、似合うって言ってくれるかな?

『黒い花』

デジタルワールドのある荒野。数日前、私はその光景を見つめていた。ここはかつて彼と私、そしてライラモンとチビちゃんが旅した場所の一つでもあった。あの頃はここは緑の草原が広がり、遠くには大きな湖があった。

でも、今は何もなく、黒い荒野となっていた。

全てはイチカが人間界に旅立って二年ぐら以後だった。

それまで平和だったデジタルワールドは突如出現したデジモンと異なるある生命体によって崩壊の一途を辿った。その生命体はデジモンを捕食し、周りの環境までも破壊

すると言う恐ろしい奴だった。その生命体の手によってライラモンが死んだ。成長したチビちゃんを見るのが楽しみだと言っていたのに……。ライラモンだけじゃない。他の多くのデジモンたちもその生命体によって捕食された。デジタルワールドの大半がこの生命体によって変わり果てた姿になった。彼と共に旅した地のほとんども。私は変わり果ててしまった大地を目の前にイチカのお守りを見つめる。

「どうして……。どうしてこうなったの……。」

私はライラモンが亡くなつてから強くなるうとその頃まだ無事だったヴァイクモンの雪山で修行をすることにした。本来なら出てくるはずのロイヤルナイツが動いていない以上私達一般のデジモンで対応するしかない。そのために私は厳しい修行をした。その修行の中で私はかつて敵対したサイバードラモンたちと再会した。彼らも今のデジタルワールドを救うために修行をして力を身に付けるのだと言っていた。

私達は必死に修行した。滅びゆく故郷を守るために。その長い修行の末、私たちはそれぞれ究極体へと姿を変えた。その中で私はバンチョーの名を引き継いだ。私たちは修行を終えた後にそれぞれの故郷へと戻り防衛に就いた。そんな中私の故郷の街に意外な人物が訪れた。オメガモンである。私たち二人は街から離れた見晴台で話をした。

「すまないな。こんな時に。」

「一体何しに来たのよ！ デジタルワールドがこんな風になるまで放っておくなんて！ ア

ンタ達ロイヤルナイツは今まで何をしてきたのよ！」

「実はと言うと我々の方でも問題が発生しているんだ。」

「問題？」

「イグドラシルが現在生き残っている全てのデジモンを人間界に一時避難させることを決定した。」

「え？」

オメガモンの一言に私は驚いた。そこへ慌ただしくマグナモンが現れる。彼は物凄い重傷を負っていた。

「マグナモン！これは一体……」

「予想外のことがあった……今回の計画……それは人間界の破滅だ。」

「何?！」

「今回の事件でイグドラシルはあの生命体をイーターと命名し、奴がデジタルワールドの全てのデータを捕食・破壊する恐ろしい生物だと判断し、現在生き残っている全てのデジモンを人間界に避難させるため、人間界に進出し人間を滅ぼすと決定を下した。」

「どういうことよ！人間を滅ぼすって！」

「今回のイーターの出現は人間がISというもので世界を一気に狂わせたことでその影響から誕生したと推測されている……よって、イーターを完全に滅ぼすには人

間を滅ぼすしかないと言っておられた……うう……。」

マグナモンは苦しそうに言う。もはや彼の体は崩壊寸前にだった。

「だが……私はイグドラシルの判断が少しおかしいと感じていた……そのためにはイーターが最初に現れたというダークエリア近辺を調査してみた……それで分かった……今回の事件の犯人はル……」

言いかけた瞬間マグナモンは奇跡のデジメンタルを残して消滅してしまった。ライラモンの時と同じだ。私は思わず恐怖した。

私はその後オメガモンと一緒にイグドラシルの所へ向かった。でも、すでにそこではデュークモンと残りのメンバーが対立している所でその争いの末、オメガモンは私を庇って死んだ。彼は最後に私にこう言った。

「私の……力を……ヴリトラモンに……」

彼の体は剣に変わり私はこの剣をイチカに渡すために人間界に向かうことになった。

今、私は人間界へのゲートを進んでいる。イチカは私の事を覚えているのだろうか……。

後ろから誰かが迫っている……急がなくなっちゃ。

私はもうあの頃みたいに美しい花じゃない。黒く汚れてしまった。それでも私は死
ねない。

ライラモンやみんなのために、そして

イチカ、貴方に会うために……。

登場人物（デジモン）紹介3 プラス制作中に逸話

IS学園

織斑一夏／ヴリトラモン（ハイブリッド体・魔竜型・ヴァリアブル種）

スピリットを回収するために人間界を訪れる。帰還してそうそう実の姉である千冬と和解し、偶然の出来事でIS学園に通うことになる。箒たちと交流を深めるとともに以前あった人間への不信感も薄れている。現在は自分の所持しているスピリットでカイゼルグレイモンへと進化する。

炎龍

一夏の専用機。本来は白式として届いたのだが一夏が装着した瞬間、現在の形状に変化した。両腕に装備されているブレードの他に背部のウイングから「電撃砲」を撃つことができる。この姿でもヴリトラモンの技は使えるがシールドエネルギーは減るので要注意。世代的には三代目であるが四世代にも劣らない。

ブイモン（成長期・小竜型・フリー）

一夏の相棒。人間界に来てからエクスブイモン、エアロブイドラモンへと進化できるようになる。一夏の手料理が好物である。姉の様だったライラモンとの約束を守るために進化する練習をしているらしい。

フレイドラモン（アーマー体・竜人型・フリー）

エクスブイモン（成熟期・幻竜型・フリー）

エアロブイドラモン（完全体・聖竜型・ワクチン種）

ブイモンの進化形態。

篠ノ之箒

一夏のファースト幼馴染。一夏に好意を寄せている。パートナーのアグモンとの交流で原作の自己中はある程度改善されている。姉に対して不審に感じるところがあるが一樣信用している。一夏の正体を千冬に次いで知った者で出来るだけ正体がバレないように努めている。一夏がいずれ自分の目の前から消えてしまうことを恐れている。専用機は「紅椿」。

アグモン（成長期・恐竜型・ワクチン種）

箒のパートナー。箒とは小学校からの付き合いで固い絆で結ばれている。箒のストッパー役でもあり、箒の性格を改善するのに大きく貢献している。外見は「アドベンチャー」のアグモンにX抗体版のベルトを付けた物。好きな食べ物は箒が作る肉じやが。嫌いなものは飲み薬。

ジオグレイモン（成熟期・恐竜型・ワクチン種）

ライズグレイモン（完全体・サイボーグ型・ワクチン種）

ビクトリーグレイモン（究極体・竜人型・ワクチン種）

アグモンの進化形態。ライズグレイモンでは箒が教えた剣道の技も使う。

織斑千冬

一夏の姉でありIS学園の教師。一夏を失った後、しばらく自暴自棄の生活を送っていたが一夏と和解したことによって教師として復帰する。現在はロイヤルナイツの一角、ジエスモンのパートナーとなっている。

白蓮

四世代型の千冬専用機。東が渡したデジヴァイスから展開する。一夏の炎龍と箒の紅椿の特徴を合わせたもので白式の単一仕様能力「零落白夜」を使用できる。外見は炎龍の体（尾はない）に紅椿の展開装甲が付いたような物。実は東が封印状態になっていた彼女のかつての愛機「暮桜」を初期化して制作した物。

ジエスモン（究極体・聖騎士型・データ種）

ロイヤルナイツであり、ガンクウモンの弟子。ハックモンの時の千冬との交流でパートナーになる。現在はデジヴァイスで待機しているが千冬が窮地に陥ったらすぐに出てくる模様。

セシリア・オルコツト

イギリス代表候補生。女尊男卑主義者であったが一夏との決闘で改心。現在はピヨモンのパートナーである。料理は殺人レベル。

ピヨモン（成長期・雛鳥型・ワクチン種）

セシリアのパートナーでヒロイン勢では最も遅い登場。恥ずかしがり屋ですぐに彼女の後ろに隠れてしまう。

バードラモン（成熟期・巨鳥型・ワクチン種）

ピヨモンの進化形態。

鳳鈴音

中国代表候補生で一夏のセカンド幼馴染。中国に帰国したときにパートナーであるテリアモンと出会ったようにいつも自分の頭に乗せている。一夏がデジモンだと知った後も諦めていないようである。

テリアモン（成長期・獣型・ワクチン種）

鈴のパートナー。マイペースでいつも鈴の頭の上に乗っている。鈴の作った酢豚が好物。

ガルゴモン（成熟期・獣人型・ワクチン種）

ラピッドモン（完全体・サイボーグ型・ワクチン種）

テリアモンの進化形態。

更識簪

日本代表候補生で生徒会長更識楯無の妹。内気で臆病な性格ではあるが一夏とパートナーのパタモンとの交流で明るい性格になってきている。

パタモン（成長期・哺乳類型・データ種）

簪のパートナーで初期はトコモンだった。セシリアのサンドイッチを食べて食中毒なりかけた状態で進化する。小さい体ではあるが勇気は人一倍ある。

エンジエモン（成熟期・天使型・ワクチン種）

ホーリーエンジエモン（完全体・大天使型・ワクチン種）

パタモンの進化形態。

シャルロット・デュノア

フランス代表候補生。初期は原作同様「シャルル・デュノア」と名乗っていた。現在は実家との縁を切って一夏たちと行動を共にしている。パートナーのレナモンは亡き

母の贈り物であり大事な家族でもある。

レナモン（成長期・獣人型・データ種）

シャルロットのパートナー。シャルロットとは箒とアグモンペアと同じぐらいの付き合い。シャルロットのことを一番大事に思っている。ある意味親代わり。

キュウビモン（成長期・妖獣型・データ種）

タオモン（完全体・魔人型・データ種）

レナモンの進化形態。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツ代表候補生でドイツのIS配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」隊長。階級は少佐で千冬のことを「教官」と呼んでる。最初は一夏打倒を優先していたあまりにパートナーのガブモンを見向きもしなかったため彼の暗黒進化を促してしまっている。その後は関係を見つめ直して良きコンビになっている。

ガブモン（成長期・爬虫類型・ウイルス⇨データ種）

ラウラもパートナー。ラウラとはドイツ軍時代からの付き合いであるが徐々の距離が広がり、自分の必要性のなさを感じるようになった。彼女に見てもらいためとばかりにメルキュールレモンによってダークムゲンドラモンへと暗黒進化してしまう。事件解決後はラウラと和解。元々実力が高かったのか筈以外のメンバーで唯一究極体に進化できた。

メタルガルルモン（究極体・サイボーグ型・データ種）

ガブモンの進化形態。

山田真耶

一夏のクラスの副担任。天然でドジっ子ではあるが真面目。臨海学校においてクラモンと出会い、現在は一緒に住んでいる。カワイイの基準が謎の人。

ケラモン（成長期・不明・不明）

一夏に保護されたクラモンが進化した姿。突然変異ということもありカタカナ言葉で話す。最初は真耶を警戒していたがすぐに懐くようになる。

更識楯無

二年の生徒会長でロシア代表。妹の簪とどうにかして仲直りしたいと思っている。現在は一夏の一言である程度まで改善できた模様。パートナーは未だに謎。

束側

篠ノ之束

相変わらずの天災。箒に「紅椿」をプレゼントした上に土のスピリットを一夏に水のヒューマンスピリットを千冬に託す。何故か自分はもうすぐ死ぬ的なことを言っている。

ベルスターモン（究極体・魔人型・ウイルス種）

東のパートナー。人間に近い姿だと言う事を利用して暮海杏子と名乗っている。人前では「東様」、東とクロエたちだけの時は「東」と時と場所をわきまえている。

クロエ・クロニクル

東と共に行動している少女。パイルドラモンをパートナーにしている。

パイルドラモン（完全体・竜人型・フリー）

「ウィルスバスターズ編」で登場したステイングモンが進化した姿。現在は東たちと共に行動している。

敵陣営

ドウフトモン（究極体・聖騎士型・データ種）

ロイヤルナイツの一角。デジタルワールドの救済のため、人間界の人間を抹殺しよう

と動いている。現在はデユノア社を掌握していることが発覚。

ロードナイトモン（究極体・聖騎士型・ウイルス種）

クレニアムモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

デユナスモン（究極体・聖騎士型・データ種）

エグザモン（究極体・聖騎士型・データ種）

ロイヤルナイツ。ドウフトモンと共に行動している。

メルキュールモン（ハイブリッド体・突然変異型・ヴァリアブル種）

「ウイルスバスターズ編」にも登場した謎のデジモン。今回も何か企んでいた模様。

???
（???
???
???）

ダークエリアにいる謎のデジモン。ロイヤルナイツの動向を見守っている。

その他のデジモン

オメガモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

マグナモン（究極体・聖騎士型・フリー）

デュークモンの口から死亡していることが発覚。

リリモン？（究極体・妖精型・データ種）

一夏と旅をしていたデジモン。現在一夏に会うために人間界に向かっている。

デュークモン（究極体・聖騎士型・ウイルス種）

デュナスモンの攻撃で死亡したと思われていたが実は束たちに回収されていた。実は「テイマーズ」のギルモンが進化した姿。

初期案ではセシリアのパートナーとして考案していたデジモン。その設定ではデュナスモンの殺された後デジタマに転生し、デュークモンとしての記憶と取り戻していくという展開にしていた。そのため、ピヨモン初登場のシーンは本来幼年期のギギモンになるはずだった。投稿寸前、それを聞いたこの作品の理解者の作者の知人が「デュークモンは好きなキャラだから殺してジャリモンからやり直す案は勘弁してくれ！」と猛抗議され、已む得ず現在のピヨモンに変更された。そのため当初は啓人のギルモンという

設定は考えていなかった。尚、他にも登場予定をまだ考えていなかったアルファモンの案もあつたがセシリアにしては進化系統が地味ということもあり没にした。

ダークムゲンドラモン（究極体・マシン型・ウイルス種）

ラウラのガブモンがメルキューレモンの特殊プログラムを取り込んで進化した暗黒デジモン。最初は通常のムゲンドラモンであつたがVTシステムで暴走したラウラごと取り込んだため体色が黒に変わっている。能力も通常個体よりも上昇している。胸部にはラウラを拘束している。本編では一夏、シャルロット、箒の三人がかりでも大苦戦していたがラウラを拘束している所がメイン動力源だとエクスブイモンに見抜かれラウラを取られたときは急激に弱体化した。最後はビクトリーグレイモンにドラモンブレイカーで倒され、ガブモンに戻った。

アルビノアーマゲモン（超究極体・種族不明【突然変異】・不明）

アーマゲモンの亜種。IS福音を暴走した元凶であり、二次移行の時の影響で突然変異をして急成長した。能力は驚異的再生能力。武器は福音の「銀の鐘」と背部から放つ「ブラックレイン」。更に切断した体の一部は分解・再構成され、ケラモンやクリサリモンへと変わる。胴体の中央には搭乗者と福音のコアがある。第一戦では紅椿の武装も

通じず、一夏に致命傷を負わせるほどの実力を見せるがカイゼルグレイモンに進化した一夏と箒たちの連携によって肝心のコアであった搭乗者を引きずり出されたため、デアボロモンに退化。その後はデジスキャンで浄化され、クラモンとして保護される。

ロイヤルナイツ編

さらば束

〈束さんラボ〉

一夏たちが夏休みを充実に過ごしている間、束たちは来るべき時に備えて移動式ラボ『吾輩は猫である（まだ名がない）』をどこかの某宇宙戦艦のような形に改造したりと忙しい日々を送っていた。

そして、今日束はラボの空っぽになった研究室にクロエ、ベルスターモン、パイルドラモンを集めた。

「後もう少して奴らが来るからクーちゃんたちは急いで「新生 吾輩は猫である（まだ名がない）」に乗ってここから離れてね。」

「束様……本当に考え直す気はないんですか？」

パイルドラモンは束のことを真面目な顔で見ながら言う。

「パル君、束さんのゴールはここなんだよ。」

「束様。」

「確かに私はまだ生きていたいよ？ 箒ちゃんともまた会いたいし、いつくんにちゃんと

謝ったり、ちーちゃんとも話したい。でも、ここで時間を稼がないと奴らは確実にいつくんたちの方へと行く。今のいっくんでは奴らと戦ったらきつと殺される。だから私が必要があるんだよ。そのための闇のスピリットなんだから。」

束はポケットから傷だらけのデジヴァイスを取り出す。

「束……」

「ベルちゃん。ベルちゃんがブラックテイルモンの頃から一緒に旅をしていた時は楽しかったよ。でも、ベルちゃんには箒ちゃんを守ってほしいんだ。だから、これからは箒ちゃんと一緒にいて。」

ベルスターモンは束からデジヴァイスを受け取る。クロエは腕時計で時間を確認する。

「もう時間みたいですね。」

「じゃあ、お別れ。ミーちゃんには迷惑かけないようにね。」

「束様ほどは迷惑をかけないように心得ています。」

「グフ……最後の最後で酷いことを言うねクーちゃん。」

そう言うところクロエたちはさっさとラボを後にしていく。

「さて……こつちも最後の足掻きっていうものを見せようかな……」

三十分後

『ラボニ侵入者アリ！警告！侵入者アリ！』

ラボ中から警報が鳴る。束は研究室の椅子に座ったまま監視カメラの映像を見る。そこには黒い竜人、悪魔のような姿をした生物や竜の姿が多数写っていた。

『セキュリティロックが解除サレカケテイマス！警告！スグニ脱出……』

そのとき特殊合金でできた研究室の扉が何者かによつて食い破られた。その犯人は赤いワニのような姿の生物だった。その後ろでは赤いローブを纏った者、悪魔の仮面を付けた老人のような者、獣神と言つても過言ではないぐらいの巨体の黒い獣など合わせて六体がいた。

「やつと見つけましたよ？篠ノ之束。」

リーダーらしき左右に天使と悪魔の翼を持った者が前に来る。

「やつて来たようだね、六大魔王。」

「七大です。まあ……一人欠員なのは認めますけど。」

天使？は束の冗談を軽く受け流す。

「探すのに手間がかかりましたよ。何しろこんな所に本拠地を隠していたとは。我々でも想像していませんでしたからね。……おっと、一様名乗らせていただきますが私はルーチェモン。一様このメンバーたちをまとめています。」

ルーチェモンと名乗るデジモンは頭を下げながら言う。

「さて、私達がここに来た理由はもう既に御存知でしょう。」

「一つはスピリット、もう一つは東さんだね?」

「その通り。」

「そして、狙いは人間、デジタルワールドに存在しているデジモンの全滅。そして、データエリアのデジモンによる新世界を作る。」

「おやおや、そこまでご存知だとは驚きですね。」

ルーチェモンは褒めるのかのように笑う。後ろでは他のデジモン、特に女性型はイライラしながら待っていた。

「ではここで言いましょう。私たちと共に来ていただきたい。我々にはあなたの頭脳が必要だ。」

「やだよ。」

「あつさりと断りますね。」

「東さんが手伝わたらあれが復活しちゃうもん。」

「そこまで見破っていましたか。」

「東さんは天才だからね。」

ルーチェモンを挑発するかのようによく言う東。しかし、挑発に乗ったのは背後にいたワニのようなリヴァイアモンと女性型のリリースモンだった。

「この人間、調子に乗って！」

「オレ、モウマテナイ！オレ、コイツヲ食ス！」

「落ち着いてください、まだ交渉の途中ですよ？」

ルーチェモンは軽く二人に言う。

「では、あなたが渡さないというのなら我々にも手があります。」

「どんな？」

「エム、こつちに来なさい。」

ルーチェモンが言うその後ろの五人のさらに後ろから黒い竜人と共に一人の少女が現れた。

「ん!?これは!?!」

「そつくりでしょ?あなたの友人に?」

ルーチェモンはエムと呼ばれている少女を隣に寄せる。少女の瞳は黒く染まっており、生気を感じさせないものだった。

「もし、あなたが断ると言うのなら私はこの少女の首を刎ねます。それでもよろしいですか?」

「……負けたよ。東さんの負け。」

「ではまず最初にいただきましようか? 闇のスピリットを。」

東は机のボタンを押す。すると容器に入れられた闇のスピリットが机の上に現れる。

「おお、これが闇の……」

「ごちゃごちゃ言っている間にさつきと取りなさいよ! 全くこれだから……」

リリースモンは感心しているルーチェモンを待つのが嫌なのかさつきと闇のスピリットを取ろうとする。しかし、このときラボ全体に異変が起こった。

「む!?!」

「ナ、ナンダ!?!」

「な、なによ!?! 私が何かしたって言うの!?!」

魔王たちが混乱している原因、それは東が密かに操作していたプログラムにある。

『ラボ自爆装置作動、自爆マデ後3分。総員、直ちに脱出セヨ!』

「じ、自爆だど!?!」

赤いローブで素顔を隠しているデーモンが驚く。

「な、なあお主ら。さつきから思っておったんじゃが体が少し重くはないか?」

「オレ、体ガオモイ！」

「まさかあの女！」

一同は東の方を見る。東は満足そうな顔で見ていた。

「篠ノ之東、一体何の真似ですか!？」

「何って？ 邪悪なオーラ全開の君たちを一時的に動かなくするために自爆するんだよ。」

「なんですって！」

「な、なんじゃと〜!？」

「正気ですか？ もしそんなことをすれば私たちは重傷で済んだとしてもあなたは助かりませんよ?。」

「元々その気でここにいたんだよ。だから後悔なんてしてないよ。」

『自爆マデ後1分、ミンナ脱出シタカ?』

「急いでここから出るぞ！」

デーモンが後ろを振り向くと足元が光りだし魔王たちを拘束する。

「な、何なのよこれ!？」

「対七大魔王用に調整した拘束プログラム。これで逃げられないよ。」

「お、おのれ! やってくれましたね! 篠ノ之東!。」

ルーチェモンたちは必死に拘束を解こうとする。東は物静かに座っているエムを見

つめる。

「ゴメンね、エム……いや、マドカちゃん。せつかく生きていたことがわかったのにな、つくくん達に会わせることができなくて……」

『自爆マデ後10秒。9, 8, 7, 6, 5, 4……』

東は机の中から写真を取りだす。ずいぶん昔の物ではあるがそこには幼い頃の箒と東が並んで写っていた。

「箒ちゃん……東さんは箒ちゃんにとっていいこと一つもできなかったね……」

二学期に入り一夏は箒と同じ部屋に戻っていた。箒は思わずうれしくなっていたがその初日

「あつ！しまった！」

自室から出ようとした箒はうつかり、付けようとしていた腕時計を落としてしまった。拾い上げて見ると何故か時間が止まり、レンズは割れていた。

「あゝ、壊れちゃったな……」

「……」

「どうした箒？」

「これ……姉さんがくれた腕時計なんだが……」

この時間は丁度、東のラボが自爆した時刻と同じだった。

シャルロット&ラウラルーム

一方のシャルロットとラウラも二学期から同じ部屋になっていたのだがシャルロットとレナモンは朝のテレビのニュースで愕然としていた。その内容は『デュノア社、謎の社員失踪！社長及び社長夫人も消息不明』

「……シャル。」

「一体何が起こっているんだ？」

シャルロットにとってこれが何を意味するのかよく分からなかった。

文化祭と忍び寄る影

IS学園

二学期が始まって数週間後、一夏たちの通うIS学園では文化祭が行われていた。「お帰りのさいませ、お嬢様。」

執事服の一夏は丁寧に客を迎え入れる。一夏のクラスではホストクラブやらゲームなども考案していたが最終的にメイド&執事喫茶をやることになった(ホストクラブは当然却下された)。一夏の他にはメイド服を着た箒やセシリアの姿もあった。厨房では鈴とシャルロットを筆頭に調理を行っている。

「よっ！一夏！精が出てるな。」

そんなところへ文化祭を見に来た弾たちが覗きに来た。

「おかえりなさいませ、ご主人様。」

「弾、数馬。丁度良かった。手伝ってくれ。」

「おいおい、冗談は勘弁してくれよう！俺たちはこの生徒じゃないんだぜ!？」

「そんなこと言わずに頼むよ。ここに来るのみんな俺目当てで来るんだからさ。」

「そんなこと言われてもな・・・。」

「織斑君、6番テーブルお願い！」

「ほらな、こういう風に出番が多いもんで・・・」

一夏はしょんぼりしながら指定されたテーブルへと行った。席に座っているのは緑色のカールの髪にベージュの女性用スーツを着用、胸元を大きく露出して色気全開の状態の女性だった。

「おかえりなさいませ、お嬢様。」

「あら。あなたが織斑一夏くん？」

「え？は、はい。」

女性のしやべり方に一夏は思わず動揺する。

「うふふふ私はね〜IS装備開発企業『み・つ・る・ぎ♡』の渉外担当の岸边リエって言うの〜。」

「り、リエさんですか・・・」

「きようは〜織斑くんに〜う・ち・の・会社で開発した装備を使ってほしいな〜って思っ
て♡」

「お断りします。」

「え〜♡せつかくこうしてきたのに〜いきなり断られるなんて〜お姉さん悲しいわ〜。」

リエと名乗る女性は残念そうに言う。一夏は何かを感じた。

(この女・・・何か変だ)

???

「もうすぐ……もうすぐ人間界に！」

真紅の特攻服を纏ったりリモン？は急いでゲートの出口へと向かっていた。しかし、後ろから徐々に巨大な影が迫っていた。

「逃がさぬぞ！小娘！我が君イグドラシルの計画のためにも貴様を消さねばらん！」

「トウインペダル！」

彼女はトゲモンをモデルにしたようなヨーヨーを回転させながら迫って来る者に攻撃する。しかし、強固な盾を防がれ、彼には傷一つつかない。

「無駄だ！このアヴァロンは我が君イグドラシルからの賜りし物。その程度の攻撃ではビクともせぬ！」

そして、魔槍クラウ・ソラスを回転させる。

「不味い！」

「もう遅い！エンド・ワルツ！」

衝撃波は彼女を襲い、彼女は傷だらけの状態でゲートの奥へと吹き飛ばされる。

「きやああ！」

「とどめだ！」

巨体を誇るクレニアムモンはクラウ・ソラスを彼女に向けて振り下ろそうとする。しかし、その直後彼の背後から何かが発射され、彼は吹き飛ばされた。

「ぐおおお!? 何奴!？」

クレニアムモンは後ろを振り向く。背後には自分と違って漆黒の重厚な鎧にマントを纏ったデジモンがいた。

「貴様、我が使命を邪魔する気か!」

クレニアムモンは謎のデジモンに向かってくる。デジモンは手を翳し魔方陣を展開する。

「デジタライズ・オブ・ソウル!」

すると魔方陣から緑色の光線が発射され、クレニアムモンは吹き飛ばした。

「ぐおおああああ!」

クレニアムモンはゲートの彼方へと吹き飛ばされていく。リリモン?は謎のデジモンの方を見て身構える。

「大丈夫だ、私は敵ではない。」

「.....」

「別にそこまで警戒しなくてもいいのよ?」

女の声に驚いてリリモン?は謎のデジモンをよく見る。彼の肩には長い金髪の女性が乗っていた。リリモン?は初めて見た人間に驚いた。

「あなたが行きたいのは彼がいるIS学園でしょ?」

「そ、そうだけど……」

「私も娘に会いに行くところなの。一緒にどう？」

女性は優しく声を掛ける。リリモン？は彼女からは敵意を感じなかったことから警戒を解く。三人はゲートを進んでいく。

「アンタ名前は？」

「ノエルよ、あなたは？」

「リリモン……今はバンチョーリリモンって名乗っているけど……そう言えばアンタ娘に会うって言っているけど娘さんの名前は？」

「シャルロット。二年前、何も言わずに別れたつきりなのよ。だから……」

「ゴメン、へんなことを聞いちゃった。」

「いいのよ、この子が助けてくれなかったら今の私はいなかったから。」

「あつ、そう言えばアンタは……」

「アルファモン、ノエルのパートナーだ。ずいぶん昔のな。」

IS学園

「つたく、こんな鬼畜イベントしやがって……」

一夏は昔話に出てきそうな王子様の恰好をして走っていた。

「待ちなさい！一夏く！」

「大人しく私に王冠を寄越せ！」

「一夏は誰にも渡さん！」

「私が頂きますわ！」

シンデレラのようなドレスを着たセシリア、鈴、ラウラなど大勢の女子生徒たちが武装を持ちながら一夏を追いかける。実はこれ生徒会長の楯無が箒が再び一夏と同室になったことに不満を抱える女子生徒たちに対しての生徒会主催大イベント「シンデレラ」なのだ。これで一番最初に一夏の王冠を取った者に一夏との同室の権限が与えられるという無茶苦茶なサバイバルゲームなのだ。ちなみに王冠には外そうとすると電流が流れる仕掛けを施されている。一夏は飛んでくる銃弾やナイフを避けながら女子を一人一人と倒していく。ちなみに箒は一夏の秘密及び自分のプライドを守るために防戦している。

「いくらなんでもこれだけの数じゃきりがない。こうなったら奥の手だ。」

「奥の手!? 一夏この大軍団にどう挑もうというのだ？」

「なんですの!?!」

「奥の手ってなによ!?!」

一夏の言葉に女子一同は硬直する。一夏は自信満々に言う。

「いいか、お前らがいくら武器を持っていようとも格好はお姫様が着るドレスだ。故に

運動性は悪い。」

「「うんうん。」」（生徒一同）

「だから俺はこの足を使う。」

「それでどうなのだ!?一夏!?!」

箒が聞くと一夏は後ろを振り向く。

「逃げるんだよお〜〜!!!!箒〜!!」

「なんでそうなるんだ〜!」

一夏に乗せられ箒も一緒に走り去っていく。しばらく嘖然としているセシリアたちだったがすぐに正気に戻り追いかけて行った。

「箒〜!一夏〜!こつち!」

「アグモン?」

一夏たちは建物の陰に隠れていたアグモンに誘導される。

「はあはあ……助かったアグモン。」

「へへへー！」

「……やれやれ、これで電流を流すシステムは解除した。」

一夏と箒は更衣室に隠れていた。デジヴァイスでシステムを解除すると一夏は王冠を箒に渡す。

「ほら、箒。これで一件落着だ。」

「え!? そんなのでいいのかわか？」

「お前の方が秘密は守ってくれるからな。だからやるよ。」

「い、一夏……」

箒は思わず顔を赤くした。こんな感情があっても無駄なことはわかっているつもりなのに。そんな雰囲気に含まれている中更衣室のドアが開いた。

「ん!?」

「もう気づかれ……」

「やっぱりここにいたのね。」

しかし、二人の目の前に現れたのは喫茶の時に一夏が会った岸辺リエだった。

「貴方はリエさん……」

「あなたたち二人があの子たちから逃げてくれたおかげで手間が省けたわ。いっぱいいると目立って大変だから。」

「……貴様、一体何が狙いだ？」

一夏は鋭い目つきになりリエに警戒する。リエはニコニコしながら思わぬことを言う。

「別にその子に手は掛けないわよくだつて私が欲しいのはあなたのス・ピ・リ・ツ・ト♡なんだから。」

「貴様、まさかメルキューレモンの仲間か!？」

箒は思わず身構える。するとリエはさつきまでの態度と一変して、二人に対して殺気を放ち始める。

「メルキューレモン? あんな騎士の風上にも置けぬ奴の仲間だと? 騎士たるこの私が?」

「とうとう本性を現しやがったな。」

「ヴリトラモン、貴様はここで消えろ!」

リエは一夏の首を掴む。一夏はそれを振りほどくと窓から外へと飛び出していった。

「一夏!」
箒は急いで二人の後を追う。

???

「ロードナイトモンがヴリトラモンと交戦状態になったか。」

「かつてデユノア社だったビルの会議室で一人の男が言う。周りには人ではない二つの影がある。」

「エグザモンは既に向かった。兵であるカオスドラモンも既にデジタルゲートで間もな

く合流する。」

「では我々も行くとするか。」

男の体が分解し始めすぐに獅子の顔を模した騎士の姿へとなる。

「クレニアムモン、今度はしくじるなよ？」

「心得ている！今度は絶対に人間共に正義の鉄槌を下す！」

「それでいい。デュナスモン、お前はどうか？」

「本当に約束通り彼女を生かすのなら私は戦う。」

「最初っからそう言えばいいのだ。」

三人はゲートを展開し、入っていった。

「では始めよう。我々の『人類抹殺』計画を……」

今、この世界の平穩が崩れ始めた。

それぞれの戦い

IS学園

一夏とリエはそれぞれISを展開して戦っていた。リエの方は赤色の装甲に包まれた機体で超高熱火球を放ってくる。一夏は避けながらコロナプラスターを放つ。

「くっ！やはりこんな玩具では戦った気にもならんわ！」

彼女はISを解除すると騎士の姿に変貌する。一夏は見た瞬間その正体がわかった。

「貴様はロードナイトモン！」

「憶えていたか。」

一夏は炎龍を解除し、ヴリトラモンの姿になる。

「何故だ！何故俺を狙う！」

「イグドラシルの命令の邪魔になる危険性があるからだ。」

「何!?!」

「イグドラシルはこの世界の人間を殲滅することを決定した。故に元人間であるお前は我らの任務に支障をきたす危険性がある。その前に殺させてもらう！」

「どういうことだ！なぜ人間を滅ぼす必要がある!?!」

「これ以上聞く耳は持たん！間もなくその手始めとしてこのIS学園に我々ロイヤルナイツとその精鋭たちが送り込まれる。デジタルワールドを歪ませた元凶のISを操縦するため技術を学ばせるここだからこそ最初の攻撃対象にふさわしい！」

ロードナイトモンは赤いバラを持ちながら言う。

「それは間違っている！人間すべてがそんな思考に……」

「これ以上聞く耳は持たんと言ったはずだ！行くぞ！スパイラルマスカレード！」
ロードナイトモンは鎧から伸びる4本の帯刃でヴリトラモンの体を切り刻む。

「グウオオオオ！」

一夏は吹き飛ばされる。

「止まりなさい！この怪物！」

ISを纏った教師たちは赤い機械の龍に向かって言う。

『ターゲット、殲滅対象ト確認。殲滅スル！』

『ハイパームゲンキャノン、発射。』

カオスドラモンはハイパームゲンキャノンを発射する。命中した教師はISもろうとも一瞬にして灰と化した。

「ひ、ひいいいい!!!」

一瞬にして消えたことに他の教師たちは一目散に逃げようとする。しかし、その後、ゲートが開きクレニアムモンが現れる。

「たかが仲間一人が死んだぐらいで逃げ出すとはけしからん！万死に値する！」

「いやああああ!!」

教師たちは一斉に射撃を行う。

「こんな戦う気力を失った者たちの攻撃など痛くも痒くもないわ！」

彼はクラウ・ソラスを高速回転させる。

「その醜い己の心を知らぬまま碎け散れい！ エンド……」

「轍剣成敗！」

「む!?」

いきなりの背後の攻撃にクレニアムモンはすぐに防御する。後ろにはジエスモンと白蓮を纏った千冬がいた。

「貴様はガンクウモンの！ 奴は人間に味方したというのか！」

「ジエスモン、奴もロイヤルナイツの一員なのか？」

「ああ、奴の名はクレニアムモン。ロイヤルナイツの中でも屈指の防御力を持ち、なおイグドラシルに絶対忠誠を誓っているデジモンだ。」

千冬は警戒しながら雪片参型を構える。

「なるほど……貴様がヴリトラモンの姉か。ならば貴様も殲滅対象よ！」

「一つだけ聞きたい。なぜロイヤルナイツがこの学園を襲った。」

「ふん、この学園は我が故郷デジタルワールドを汚したISに乗る人間共を養育してく施設。ここを叩き潰し、我々に対してはISは無力だということを世界に知らすため

よ。故にこのI S学園には我らロイヤルナイツが集結しつつある！」

「師匠が言っていたのはこのことだったのか……」

「これで分かったであろう。貴様ら人間共は我々にとつては害をなすものでしかないのだ。」

「それは違う。」

「何？」

「確かに人間は世界の情勢が一変すればコロコロと変わる。戦争をしようと思えば殺し合い、憎いと思えば憎しみ合う。でもその中でも純粹に平和を望んだり、その世界を変えようとする者もいる。全ての人間がお前たちの考えているような物ばかりじゃない！」

「ほう？ かつてI Sでブリュンヒルデとまで言われていた貴様の口からそんな言葉が出るのか？」

「ああ、だがその後に残ったのは己の情けなさと後悔だけだ。私は一夏を守ろうと思っていたことがすべてアイツを追いつめる形になってしまったことも私が東と共に『白騎士事件』を起こさなければラウラもあんな風に落ちこぼれることはなかった。だが、それを知って進んだからこそ私も少しは変わることができた。だから言えるんだ。」

千冬はクレニアムモンの顔を真剣な目つきで見ると、その目を見てクレニアムモンは

思わず笑った。

「フハツハツハツハ！面白い！ならば貴様が罪から学んだ心得と我、クレニアムモンの忠誠心のどちらが勝っているか雌雄を決そうではないか！」

「望むところだ！」

二人の対決が始まる。

一方で体育館では無数の騎士型デジモン・ナイトモンがベルセルクソードを引き抜いて近づいてきていた。更に後方ではムゲンドラモンが待機していた。

『ニンゲン、滅ボス。ニンゲン滅ボス。』

「何あの化け物は!?!」

「来ないで〜！」

『ターゲット殲滅……』

ムゲンドラモンのムゲンキャンオンが生徒たちに向かって放たれようとしていた。

「ガイアフォース！」

「ガルルトマホーク！」

後方からの攻撃でムゲンドラモンは吹き飛ばされる。生徒たちが見るとそこには専用機「ミステリアス・レイデイ（霧纏の淑女）」を纏った楯無と黒い竜人と獣がいた。

「これ以上学園の生徒に手出しするならこの生徒会長、更識楯無が許さないわ！」

ナイトモンが無言で楯無に斬りかかろうとするがすぐに黒い竜人、ブラックウオーグレイモンに返り討ちされる。

「みんな今のうちに逃げて！敵が追ってきたら私が相手をするから！」

『人間にしては随分な度胸だな！』

ゲートが開き、そこから紅い巨大な龍が現れる。龍は体育館の天井を破壊しながらその全体を現し、生徒たちを怯えさせた。

「我が名はエグザモン！イグドラシルに仕えるロイヤルナイツの一員にして全ての竜型デジモンの頂点に立つ龍帝なり！」

エグザモンは巨大なランス「アンブロジウス」を持ちながら楯無の前に現れる。その

巨大な姿の前では楯無がちっぽけに見えてしまうぐらいだった。

「コイツは……きつそうね。」

「お嬢様！」

楯無の下では生徒会会計・布仏虚が心配そうに見ていた。

「虚、悪いけど生徒たちをお願い。」

「はい！」

虚は急いで生徒たちを誘導を始める。

「お姉ちゃんだけ残して行けないよ！」

簪もデジヴァイスからパタモンを出すと打鉄式式を展開する。

「行くよパタモン！」

「うん！」

簪のデジヴァイスから光は照射され、パタモンが光り始める。

「パタモン！ワープ進化！」

パタモンはエンジェモン、ホーリーエンジェモン、そして、鎧を纏った天使へと姿を

変える。

「セラファイモン！」

セラファイモンに進化したパタモンと簪が楯無の隣に立つ。

「簪ちゃん！ここは……」

「お姉ちゃんに守られてばかりなのが私じゃない。だから……私もお姉ちゃんを守る。」

「……簪ちゃん……ありがとう。」

楯無は思わず涙目になった。

「簪ばかりにいい格好はさせないよ！シャル、アンタはセシリアと一緒に一夏たちを見つけて！……ここは私とラウラでやるから！」

「お、おい！私の意見も聞かずに勝手に話を……」

「わかった！」

「後はお任せしますわ！」

セシリアたちはさっさとその場を後に行ってしまった。

「……」

「ラウラ、大丈夫？」

「大丈夫だ、問題ない。ガブモン。」

鈴とラウラもデジヴァイスでテリアモンとガブモンを進化させる。

「テリアモン、超進化！」

「ガブモン、ワープ進化！」

二体も巨大な姿へと変わっていく。

「ラピッドモン！」

「メタルガルルモン！」

四人と五体のデジモンを目の前にエグザモンは面白そうに笑っていた。

「いいぞ、相手が多ければ多いほど俺はうれしい。存分に俺を楽しませてくれ！」
「逆に泣かせてやるわよ！アンタのことを！」

「私達は負けぬ！」

「フツハツハツハツハ！そうこなくては面白くない！」

巨大な龍を目の前に楯無たちは立ち向かっていく。

「ハイパースピリットエヴォリユーション！」

「エクスブイモン超進化！」

一夏たちはロードナイトモンを相手にカイゼルグレイモンとエアロブイドラモンとなって戦っていた。

「カイゼルバスター！」

「ドラゴンインパルス！」

「ふん、いくら強くなったとはいえまだまだ甘い！」

ロードナイトモンは巧みに攻撃を避けながら瞬時に一夏の懐に入り込み、右腕のパールバンカーで衝撃波を撃ち出す。

「アージエントファイアー！」

「ぐ！ぐうう・・・」

「兄貴！」

カイゼルグレイモンは腹部を押さえながら跪く。そこへ紅椿を纏った箒とビクトリーグレイモンが合流する。

「貴様！これ以上好き勝手なことはさせんぞ！」

「雑魚がノコノコやって来よって……」

ロードナイトモンは呆れながら相手をしようとするが箒の目の前でゲートが現れ、ドウフトモンが現れる。

「お前の相手はこの私だ。」

「ドウフトモン……」

「お前はヴリトラモンからさっさとスピリットを取り出せ。」

「了解した。」

ロードナイトモンは目標を戻し、再び攻撃を始める。

「一夏はやらせないぞ！箒、君は一夏の方に行くんだ！」

「でも、そうしたら……」

「俺は大丈夫だから早く！」

「わかった。頼んだぞ！」

ビクトリーグレイモンはドウフトモンを見ながらドラモンブレイカーを構える。それに対してドウフトモンは剣を構える。

「行くぞ！」

「貴様一人にやられる私ではない。」

IS学園はまさに戦火に包まれていた。

再会と元凶の正体

I S 学園

「ぐうう……」

「大丈夫？ シャル？」

「セシリア！」

「大丈夫ですわ、ガルダモン。」

一夏と箒がドウフトモンたちと戦っている頃、セシリアとシャルロットは突然現れた騎士型デジモンに苦戦していた。外見はデュークモンに酷似しているが武装はランスと盾ではなく魔槍のみで慈悲もない冷徹な目で彼女らを見ていた。

「究極体サクヤモンと完全体のガルダモン……所詮はこの程度か。」

デュークモンに似たデジモンは呆れた口調で言う。セシリアたちは悔しそうに見る。

「いきなり現れて襲っておいでなんですその態度は！失礼にもほどがありますわ！」

「一体君たちの目的は何なんだ！ どうしてこんなことを。一夏の話だとロイヤルナイツはデジタルワールドの秩序を守るのが使命じゃ……」

「その秩序を守るためにやっているのだ。」

彼は見下すような目つきのままシャルロットたちを見る。

「そもそも俺はロイヤルナイツではない。緊急招集で呼ばれたに過ぎん。わざわざ義兄弟と誓った者が離反をして散るとは思ってもみなかったからな。」

「え？つまり、ロイヤルナイツ同士で殺し合ったとでもいうの？」

シャルロットはデュークモン似のデジモンに聞く。彼は全く答えることなく自分の話を続ける。

「デジタルワールドは貴様ら人間のI.Sの登場による影響によって壊滅的打撃を受けている。イグドラシルはそのために生き残ったデジモンをこの人間世界に避難させることを決めたのだ。だが、それにはこの世界をゴミのように張っている人間が邪魔だとは思わんか？」

「そ、そんな……ゴミだなんて……」

「貴様らが思うのも尤もだが人間たちとして我々を単なる害虫だと思うだろうか？道理は同じだ。」

「そんなことはないよ！デジモンも人間も共存して行ける！人間との間だって話し合えば……」

「俺は貴様らの話を聞く気はない。作戦に支障をきたすのなら貴様らも排除する。」

デュークモン似のデジモンはそう言うと言うと魔槍を光らせ、セシリアたちに向かって放

つ。

「ファイナル・クレスト。」

光線は徐々にシャルロットたちに向かって迫る。

「シャル！」

サクヤモンはパートナーを守ろうと金剛界曼荼羅を展開する。ファイナル・クレストは結界に大きな衝撃を与える。

「無駄なことを……レイジ・オブ・ワイバーン。」

デュークモン似のデジモンは技を使用している最中にも関わらず、槍から更に巨大な竜の形をした炎を形成する。炎を結界に突っ込ませると結界は一瞬にして消滅し、シャルロットたちは吹き飛ばされた。煙が晴れるとそこにはボロボロになった彼女たちが倒れていた。

「シャ……ル……」

「セシリア……」

サクヤモンとガルダモンはパートナーの名を呼ぶがダメージの影響で動くことができない。セシリアたちもダメージを受けすぎて動けなくなっていた。

「そこまでのようだな。心配することない、すぐに楽にしてやる。」

デュークモン似のデジモンは魔槍を振り上げ、まず手始めにシャルロットの首から斬

り落とそうとする。

「ゴメン……母さん……」

シャルロットは目を閉じて覚悟を決めた。

ガキン！

そのとき金属同士がぶつかり合う音がした。目を開けてみると巨大な剣を持った黒いデジモンが彼の魔槍を防いでいた。

「……何者だ？ 貴様。」

「ノエルの子供に指一本触れさせない！」

彼はそう言うとその場から離れる。シャルロットは何が起こっているのか分からなかったが次に自分の顔を見た人物に唾然とした。

「シャルロット！ 大丈夫？ シャールロット！」

「母……さん？」

シャルロットは目の前に死んだはずの母親の顔を見て言葉を失った。

一夏&箒

「ぐううううー！」

「どうした？息が上がっているぞ？」

ドラモンブレイカーを息も切らさずに受け止めるドウフトモンにビクトリーグレイモンは驚かされていた。

「Vウィングブレード！」

エアロブイドラモンは空中からV字状のエネルギー体を形成しながら突っ込むがドウフトモンは受け流すかのように避けてしまう。

「エルンストウエル。」

ドウフトモンは剣から爆発的なエネルギー波を放つ。二人は急いで回避をするがこれはドウフトモンの策だった。

「レオパルドモード。」

ドウフトモンは瞬時に騎士から獣の姿へと変わる。そして、地上を高速で移動し飛翔する。

「ブロッカーデ。」

「ぐうー！」

「うわあああ!?!」

二人はガードするがどんどん傷ついていく。一方の箒はダメージを受けている一夏をサポートしながら戦っていた。

「人間にしてはいい腕だ。だが私を相手にするにはまだ未熟なようだな。」

「それでも私は、一夏を守って見せる！」

箒は雨月と空裂を巧みに使いながら応戦する。一夏はダメージの影響で動きづらく

なつた体に鞭を打つて戦つていた。

「炎龍撃！」

「アージェントファイアー！」

二人の攻撃が同時にぶつかる。どちらの攻撃も五分五分の威力であつたが相殺した瞬間をロードナイトモンは見逃さなかつた。

「スパイラルマススカレード！」

ロードナイトモンは接近して来た箒に向かつて攻撃をする。

「しまった！」

「箒！」

一夏は咄嗟に箒を庇う。ロードナイトモンの鎧から伸びる四本の帯刃が一夏の体を切り刻んでいく。

「ぐうう………」

「一夏！」

傷ついた一夏を箒は押さえる。

「今が好機！止めを刺させてもらう！」

ロードナイトモンは一旦距離を置くと一気に畳み掛けようとするがそのとき少し離れた場所から声がした。

「トウインペダル！」

ヨーヨーのような物がロードナイトモンの腕に巻き付いて動きを封じる。箒は向こうを見るとそこには妖精型デジモンがいた。

「あ、あれは……」

それはドウフトモンの攻撃を受けて動けずにいるエアロブイドラモンも驚くものだった。

「リリモン姉ちゃん？」

セシリア&シャルロット

「ど、どういふことですか?! デュ、デュノアさんのお母様は死んだはずじゃ……」
ボロボロの体でありながらセシリアは立ち上がりシャルロットの方へと歩いて行く。
シャルロットは唾然としながらも母の顔を見つめていた。

「母さん……本当に母さんなの?」

「そうよ、シャル。元気だった?」

シャルロットはなんとか起き上がり母の顔を見直す。何度見ても母の顔だ。

「母さああああん!!!」

シャルロットは号泣しながらノエルに抱き付く。ノエルも久しぶりに娘の顔を見て嬉しかったのか嬉し涙を流していた。

「母さん、どうして? あの時事故で死んだはずじゃ……」

「確かに私はあの時事故に遭ったわ。でも、ぶつかる直前あの子がゲートを開いて私を

守ってくれたの。」

ノエルはデュークモン似のデジモンと戦っているアルファモンを見ながら言う。

「あのデジモンは母さんのパートナーなの？」

「ええ、とは言ってもあなたが生まれる何年も昔に別れてそれっきりだったんだけどね。」

「じゃあ……どうして、どうして早く戻ってきてくれなかったの？ 僕も……レナモンも悲しかったんだよ。」

「ごめんなさいね。それにはどうしても調べなくてはならないことがあったのよ。」

ノエルはシャルロットの顔を見ながら言う。

「二年前の時、エリザ……今のあなたのお義母さんだった彼女から連絡が来てね。お父さんの様子がおかしいから来てほしいと言われたのよ。」

「え!? 母さんはお義母さんと仲が悪かったんじゃないの!？」

シャルロットは驚いた顔でノエルに聞く。ノエルも意外な反応に驚いていたがすぐに首を横に振る。

「私とエリザ、そしてお父さんのマークは元々学生時代からの親友同士だったの。私とマークは元々恋仲だったけど家の事情で別れざる負えなかったのよ。それが私があなたを身籠った時だったんだけど、エリザはそのことについては責めるようなことはしな

かったわ。むしろ赤ん坊の頃のあなたの顔を見にこっそり遊びに来たほどだし。」

「じゃ、じゃあどうして僕が来た時何も……」

「おそらく誰かに脅されたと言う方が合っていると思うけど……話がそれたから戻すわ。私はその連絡を受けて車で行ったんだけど例の事故に遭った。その原因を調べたらあることがわかったの。」

「あること?」

シャルロットは不思議そうな顔をしながら聞く。

「あの事故は仕組んであったの。私を殺すためにね。」

「こ、殺す!?ということは……」

「でもエリザが仕込んだことじゃない。仕込んだのはマーク……いや、体に乗っ取って彼を演じていたデジモン、ロイヤルナイトのドウフトモンだったの。」

「ロイヤルナイトが父さんを?でもどうして?」

シャルロットの質問にノエルは少し言いづらそうだった。

「母さん?」

「……ドウフトモンは……マークのパートナーだったの。私とエリザの三人でデジタルワールドを旅していた頃の。」

「え?」

ノエルの答えにシャルロットは言葉を失った。他に何か聞きたかったが苦戦しているアルファモンを見ると今はそれどころではないと判断した。

「サクヤモン、立ててる?」

「大丈夫、いつでも行ける。」

サクヤモンは金剛錫杖を構えながら言う。ガルダモンの方も体力がある程度回復した。

「デュノアさん。」

「大丈夫だよ、セシリア。母さん、詳しいことは後で聞いてもいい?」

「勿論よ。」

二人はデュークモン似のデジモンに向かって行く。その後ろにはサクヤモン、ガルダモンがついて行っていた。

復活のデュークモン

???

「これが祖父が残していったものです。」

いつ頃の夢だろうか？私は啓人の墓に行った後、昔の知人と名乗って遺族を尋ねに行った。そのとき私は啓人の孫と名乗る女性からある機器を受け取った。それは啓人のデジヴァイスだった。

「これを啓人が？」

「祖父は良く私に話してくれました。ギルモンは今でも自分のかけがえのない友達だつて。例え今は会えなくてもこれがあるからギルモンと繋がっているって。」

女性は私に様々なことを教えてくれた。啓人は私と別れた後もいつか会えると信じていたと言う。それは年をとっても変えることなく信じ続けていた。話によれば「ギルモンに会うためなら百歳越えても待つている！」と笑いながら話していたと言っていた。

「でも、祖父は自分の最後がわかった時にこれを私に渡して言いました。ギルモンはきつと会いに来る。私はもうダメだけど渡したらこう言えと。」

「その言葉は?」

「僕たちはずっと繋がっている。だからこれを僕だと思つて大切に持つていてほしい。僕はいつまでも君の隣にいるよ。』と。」

「啓人……」

私は女性からデジヴァイスを受け取つた。もはや何も動いてはいなかったが何かを感じさせられた。啓人は私の中で生き続けている。たとえ昔みたいに話すことができなくてもすぐそばで見ている。

そう……これがあつたから私はロイヤルナイツとしてここまでやってこられたのだ。私がそう思うと夢の風景は消え、目の前に啓人が現れる。あの頃の姿のまま。啓人はにっこりと言う。

「……行くんだね。」

「ああ、私にはやり残したことがある。」

「ギルモンならきつとできるよ。僕たちは今までいろんなことを潜り抜けてきたんだから。」

「啓人……」

「僕はギルモンのそばにずっといるよ。ずっと……」

啓人は私の目の前から消えていった。

「ありがとう、啓人。」

私も早く行かなくては……

吾輩は猫である（まだ名がない）通信室

『……そう、東は逝ったのね。』

「はい。」

『辛いことでしょうかけれどあなたもまだやらなくてはいけないことがあるわ。それだけはわかってちょうだい。』

「わかっています。」

ラボの中でクロエたちは日本に針路を取りながらミレイと連絡を取っていた。

『私の方もようやくマステイモンの時空が安定したからそちらに行けるわ。そっちに到着し次第まずはIS学園に……』

ミレイが通信で会話をしている中パイルドラモンが慌ただしく通信室に入ってきた。

「た、大変だ!」

「どうしました?パイルドラモン?」

クロエは不思議そうに聞くがパイルドラモンは焦った顔のままだった。

「カプセルに入っていたデュークモンが消えた!」

「え!?!」

「何を言っているのよ!アイツはまだ意識が戻るまで後三日ぐらいかかるはずよ!」

「そのはずなんですすがカプセルは空っぽでまだ起動システムが調整していない『グラニ』までもなくなっていて……」

三人とミレイは顔を合わせる。

『……とりあえず私も準備が整ったらそっちに向かうわ。あなたたちも急いで彼の後を追ってちょうだい。』

「わ、分かりました。」

クロエはそう言い終わると急いでデュークモンを追跡した。

「ぬう
SS学園

「はあああああああー！」

千冬とクレニアムモンの戦闘はもはや戦闘と言ってよいのかという状態になっていた。本来クレニアムモンの体はブラックデジゾイドで普通の人間では傷一つつかないのだが白蓮を纏った千冬の一撃はその鎧さえも凹ませた。

「はあはあはあ．．．．．やるではないか。」

「お前もな．．．．．」

二人の戦いを前にジエスモンはただ見ていることしかできなかつた。クレニアムモンは魔槍クラウ・ソラスと盾アヴァロンを捨てて拳に、千冬は雪片参型が攻撃に耐え切れずに壊れてしまったためどこから持って来たのか出席簿でやっていた。クレニアムモンは満足そうに千冬を見る。

「ぬう．．．．まさかそんな武器にもならんはずのものでこの鎧を凹ませるとは．．．どうやら人間を見くびっていたようだ。」

「これで大人しく引きかえしてくればうれいんだがな。」

「．．．．貴様、確か織斑千冬と言ったな？」

クレニアムモンは構えを解き千冬を見る。

「そうだ。」

「貴様の心得．．．いや、覚悟は確かに本物だ。その覚悟に敬意を表し、我は貴様に正

式な決闘を申し込む。」

「決闘？」

クレニアムモンはゲートを開いて剣を取りだすと千冬に向かって投げる。千冬が剣を受け止めるのを確認すると自分も同じ型の剣を取りだす。

「この剣は特殊な剣でどんなに硬いものであるうとも切断する切れ味がある。」

「つまり？」

「この勝負は一発勝負。どちらかの剣が相手の体を両断する。即ちどちらか一人が生きて、どちらかが死ぬゲーム！この勝負に貴様が我の体を切断したならば我は貴様ら人間を認めよう。だが！もし貴様が死ねば我は作戦を続行する！」

クレニアムモンは剣を持つと構える。

「千冬！この勝負は危険だ！そんな賭けに乗っては……」

「大丈夫だ、私は負けない。いや、負けられないんだ。この学園のためにも……一夏たちのためにも！」

千冬は剣を構えるとクレニアムモンに向かって突っ込んでいく。

「その覚悟はよし！だが、我が主のためにも我も負けられぬのだ！」

クレニアムモンも千冬に向かって突っ込んでいく。

「うおおおおおおお！」

「はああああああ！」

二人はこの瞬間、激突した。

「ハツハツハハハ！どうした？その程度か!？」

一方体育館（元）ではエグザモンが大笑いしながら楯無たちを見ていた。楯無たちが

ボロボロになっていているのに対してエグザモンは無傷だった。

「これは流石にまずいわね……。」

楯無は冷や汗を掻きながら挽回できる策を考えていた。楯無たちの攻撃は全て彼の体を覆うクロンデジゾイドで構成された特殊な翼「カレドヴェールフ」によつて防御されてしまっているのだ。おかげでいくら攻撃してもこちらの疲弊していく一方なのだ。

「あのさ……このままじゃまずいんじゃないの？」

「あの翼のガードを一時的にでも封じることができれば何とかなるけど……。」

鈴の質問に簪は何とか答える。しかし、意志を持つている翼を一時的に封じると言うのは不可能なことだ。エグザモンは一同が疲弊しているのを確認すると空高く舞い上がる。

「そろそろ限界のようだからな。そろそろ引導を渡してやろう！」

エグザモンは自身の技「ドラゴニックインパクト」を放とうと急降下し始めた。

「本来、この技は大気圏からやるものだが貴様らへの敬意だ。責めて貴様らが吹き飛ばす程度に威力を抑えてやる！」

エグザモンは急降下をし始める。

「マズいんじゃないのあれ！」

「いくらISを纏っている私達でもあの威力には耐えられん！」

「簪ちゃん、急いでここから離れて！」

「いや！お姉ちゃん一人だけ置いて行くわけにはいかない！」

四人が急いで離れようとする中エグザモンは学園の真上に戻ってきていた。

「これでとどめだ！ドラゴニック……」

「ファイナル・エリシオン！」

「何?！」

付き進もうとしたエグザモンの目の前を大出力の光線が阻んだ。エグザモンはすぐに技を中止し、距離を取った。突然の技の中止に気になった楯無たちは上空へ上がっていった。そこには翼竜のような乗り物に乗った騎士型デジモンが膝をつきながらもエグザモンを見ていた。

「はあ……はあ……エグザモン！これ以上の人間界への攻撃はこのデュークモンが断じて許さぬ！」

「……くっ、くっくっくっハッハッハッハッハッハッ！生きていたのかデュークモン！儂はあの時貴様が木端微塵に吹き飛んだと思っておったぞ！」

エグザモンは笑いながらデュークモンを見る。楯無たちはデュークモンを見るが少なくとも敵ではないということだけは理解した。

「しかし、その体ではまだまともに戦うことができないのではないか？」

「このデュークモン、戦う意志があるならばたとえこの身が果てても戦い続ける！それが今亡き友、啓人が教えてくれた人間に秘められた可能性！」

「まだパートナーの人間のことを忘れられんのか……ん？」

エグザモンは上空を見る。上空では巨大な穴のような物ができていた。

「何よ！あのブラックホールみたいなのは!？」

鈴は啞然としながら見る。

「どうやら時間が来たようだな。」

エグザモンは笑いながら言う。

「どういふことだ！」

「ラウラ、落ち着いて。」

メタルガルルモンがラウラを落ち着かせている合間エグザモンは言う。

「我らの潜伏先のデユノア社地下に設置したデジタルウェイブ発生装置で開いたデジタルワールドへの扉……つまり、人間滅亡へのカウントダウンだ！」

ダメージ

デュノア社 地下

「デジタルウェイブ発生装置、出力安定。ゲート展開。」

デュノア社の地下でデュナスモンはデジタルウェイブ発生装置を稼働させ、世界各地にデジタルシフトを起こし、ロイヤルナイツの率いる精鋭デジモンたちを送り込もうと
していた。そんなデュナスモンの所へ一人の女性がやって来る。

「やめてデュナスモン！こんなことをしてなんになるの？」

「エリザ……ここには来るなど言っただはずだ。」

デュナスモンは女性エリザ・デュノアの方を見て言う。

「私はもう君のパートナーではない。イグドラシルに仕えるロイヤルナイツのデジモン
なんだ！ノエルをこの手で殺めてしまったときからそう覚悟を決めたんだ。」

「だからって……だからと言ってこの世界を滅ぼすなんておかしいわ！あなたは言っ
ていたじゃない。人間は滅ぼすべきではないって。」

「ああ、この世界で君に再会するときまではそう思っていた。だが、この現実はどうだ！
この世界は何もしなくてもいずれは滅びる。君たち人間の手で！私は……君たち人

間がそこまで汚い考えをする生き物だとは思わなかった！」

デユナスモンは怒りの目でエリザを睨み付ける。彼にとつて人間は誰もが平和を望むような生き物だと信じていた。だが実際見て見れば人間は己の欲のために時には騙し、時には脅した上に屈服させ最終的に殺し合う。更にこの女尊男卑の世界を見て彼は更に人間に対して失望した。

「現にドウフトモンのパートナーであつたマークもこの腐つた世界のために疲弊し倒れた。デジモンと人間の共存を考えていた彼がだ！君はそれでも滅ぼすべきではないと言えるのか？」

「そ、それは………」

エリザは何も言えなくなつてしまつた。それを言い終えるとデユナスモンは装置の制御に戻る。

「大人しく部屋に戻るんだ。今度勝手に出てきたら君と言えど容赦しない。」

彼女はわかり合うことができないう元パートナーに涙を流しながら去つて行つた。デユナスモンは気づいていなかったが自分自身の手が震えていた。

IS学園

「ついに開かれたか……人間世界の滅亡への扉が……」

ドウフトモンは通常の形態に戻り空に現れた時空の穴を見る。

「ヴリトラモン、よく見るがいい！あの扉から我らロイヤルナイツが率いる精鋭たちが世界各地に出現し、人間共を滅ぼすのだ！」

「何!?!」

一夏は時空の穴を見る。そこからは騎士型・マシン型・サイボーグ型などを中心に成熟期・完全体のデジモンたちが降りてきていた。

「何故だ……なぜこうまでして!」

一夏はドウフトモン、そして先ほどリリモンの拘束を解いたロードナイトモンに向かって言う。

「全てはこの世界でISと言ういうものができたのが原因だ。本来なら製作者の篠ノ之束を先に殺したかったが我らの手でも見つからなかったのな。優先順位を変えたのだ。」

「確かにISのせいでこの世界はおかしくなった。だが、それとデジタルワールドの異変がどう関係しているというんだ!」

一夏にはわからなかった。どうしてそこまで人間を滅ぼさなくてはいけないのか。ドウフトモンはリリモンの方を見ながら言う。

「貴様は元々人間だったのだから言うのも無理ないな。だが現にその異変のせいでコイツの友も無残に消されたのだぞ?」

「な、何?」

一夏は驚いた顔をしていたが一番ショックを受けていたのはエアロブイドラモンだった。

「……死んだ？ライラ姉ちゃんか？」

エアロブイドラモンはリリモンの方に来る。

「嘘だろ？姉ちゃん？嘘だろ？ライラ姉ちゃんが死んだなんて？」

リリモンは首を縦に振らなかった。

「そんな……ライラ姉ちゃんが死んだなんて……」

エアロブイドラモンはブイモンにまで退化して跪いた。

「ブイモン！」

「嘘だそんなことおとおお！うわあああああああ！」

ブイモンは拳を握り締めながら泣き始めた。

「見ろ、ヴリトラモン。これが現実だ。貴様が人間を庇っている間にもデジタルワールドでは更に犠牲者が増え続けているのだ。それでも貴様は人間の味方をするのか？」

一夏は知らぬ間に自分の腕は震えていることに気づいた。自分は元は人間だった。しかし、今はデジモンだ。そんな自分がこのまま戦い続けたらデジタルワールドでは更に犠牲者が出るのではないか？そう言う恐怖が彼の体を震えさせていた。

「一夏！しっかりしろ！」

箒が必死に揺さぶるが一夏は何も反応しない。

「貴様ら！」

箒はドウフトモンたちを睨む。

「ほう、我らを憎むか？箒ノ之箒？いいだろう、憎め。ドンドン憎め！それは憎しみに満ちた顔が故郷を失った我々への最大の喜びよ！」

箒は突っ込もうとするがリリモンに押さえられる。

「ダメよ！あんな奴の策に乗せられちゃ！」

「離せ！私はアイツらを許せない！」

「箒、落ち着くんぞ！今の俺たちじゃアイツらに勝ち目はない。」

ビクトリーグレイモンにも言われ箒は抵抗するのをやめる。しかし、その直後ゲートは急に閉じてしまった。

「何!?ゲートが閉じた。どういうことだ!?!」

驚いているロードナイトモンの横でドウフトモンは通信を行う。

「デユナスモン、一体どういうことだ。ゲートが閉じたぞ?」

『すまない、やはりまだパワーが安定していないからゲートを維持することができなかつたようだ。』

「……こうなるのならもう少し万全な状態で行うんだつたな。」

ドウフトモンは軽く舌打ちをしながら一夏たちの方を見る。

「ヴリトラモン、貴様は運がいい。貴様に最後のチャンスをくれてやる。我々の元に来

い。そうすれば貴様に今は亡きオメガモンの席を与え、我らロイヤルナイトのメンバーとして迎え入れてやる。それとそこにパートナーデジモンたち、貴様らも候補者として考えてやつてもいい。」

ドウフトモンは笑いながら言う。そんなドウフトモンをビクトリーグレイモンは睨み返す。

「そんな話なんかに乗ると思ってるのか！俺は筈のパートナーだ！」

「明日にでも世界に重大ニュースを流す。それを聞いても考えが変わらないのならいつでもデュノア社に来るがいい。そこが貴様らの墓になる。」

そう言うとうとうドウフトモンはゲートを開いてロードナイトモンと共に去って行く。その場にはリリモン、箒、ビクトリーグレイモン、そして、硬直状態になった一夏ことカイゼルグレイモンと泣いているブイモンだけが残された。

セシリア&シャルロット

「……ふん、時間か。」

デュークモンに似たデジモンは戦闘中にもかかわらずゲートを開けた。

「貴様！逃げる気か！」

アルファモンは構えを取りながら言う。その隣ではセシリア、シャルロットたちがいる。

「作戦は一樣成功したのだ。これ以上やり続けるつもりはない。」

彼はゲートの入ろうとする。

「そう言えば名を名乗っていなかったな。俺の名はメディーバルデュークモン。別に覚

えなくてもいいけど・・・」

「メディーバルデュークモン・・・」

シャルロットたちは既にシールドエネルギーがほとんど残っていないなかったため追うことはできなかつた。

千冬VSクレニアムモン

「・・・」

「・・・」

両者は沈黙する。

「……………うつ！」

千冬の肩が切れそこから血が噴き出す。

「千冬！」

一方のクレニアムモンは

「……………見事なり。」

上半身下半身が泣き別れになって倒れた。千冬はジエスモンに抱きかかえられながらクレニアムモンの方を見る。

「一瞬の出来事だった……………後一步、もしあと少し深く踏み込んでいなかったら私は確実に腕に一本は余裕でなくなっていた……………」

「……………満足だ……………見事だ織斑千冬。貴様の勝ちだ。我は確かに貴様ら人間の目には見えぬ可能性を見た……………その覚悟さえあれば我が同胞たちも打ち破れよう……………」
クレニアムモンの体が崩壊をし始める。

「貴様……………体が……………」

「ふつ、これが我らデジタルモンスターの末路よ……………もう我は助からん……………だが後悔はしていない。貴様と言う素晴らしき戦士に出会えたのだからな。」

クレニアムモンは嬉しそうに言う。ジエスモンと千冬は何とも言えない顔になる。

「千冬……もし、我がもつと早く貴様と出会えたのであれば我らは良き友になれたのかも知れんな……実に惜しい。」

クレニアムモンの体は既に上半身のみとなっていた。

「だんだん眠くなってきた……その若造。」

「はい。」

「貴様もロイヤルナイツなのならよく見ておくがいい。これが敗者の最後だ……」
「ん!? またデジヴァアイスが!」

クレニアムモンが最後の言葉言いかけた瞬間千冬のデジヴァアイスが光りだし、クレニアムモンを包み込み、デジヴァアイスの中へと戻ってしまった。デジヴァアイスの映像を見ると体が元通りになって気を失っているクレニアムモンの姿が写っていた。

「ち、千冬……これは一体?」

「私にも分からん。束め……一体コイツにどういう機能を付けたというのだ?」

そのとき二人は気づかなかったが破壊活動を行っていたはずのカオスドラモンの姿はすずでなかった。

楯無チーム&デュークモン

「引き上げろか……惜しいのう。やっと面白くなってきたと思っておったのに。」

エグザモンもゲートを開いて引き上げようとする。

「小童共！今回の勝負はしばらくお預けだ！今度会う時まで腕を磨いておけよ！ハハハハハ！」

エグザモンは大笑いをしながら消えていった。楯無たちはただ黙っていることしかできなかった。

「終わったか……どうにか……」

デュークモンは気を失ってグラニの上で倒れた。鈴たちは近くによって調べる。

「気を失っただけ見たい。」

「でもこのデジモン、一体どうして私達のことを……」

『その方々、聞こえますか?』

突然の通信に一同は驚く。

『あつ、失礼しました。え、私たちは敵ではないので敷地内に着陸許可をして欲しいのですが……』

気がつくとも目の前には某宇宙戦艦のような「新生 吾輩は猫である（まだ名がない）」があった。

「え、えつと……」

楯無が考えている所に千冬からの連絡が来た。

『着陸OKだと言っておけ。少なくとも敵ではない。』

「はっ、はい。着陸許可します。」

「吾輩は猫である」はゆっくりとIS学園のグラウンドに着陸した。

決意の夜

IS学園 会議室

ドウフトモンたちロイヤルナイツの襲撃の後、千冬、クロエ、ベルスターモン、パイルドラモン、デュークモン、更識姉妹、シャル母娘、鈴たちデジモン組が集められた（おまけに真耶とケラモン）。箒とアグモンは、精神が不安定になっている一夏とブイモン、負傷しているリリモンを介抱するため参加していなかった。そして、彼女らの目の前にはなんと用務員であるはずの轡木十蔵が座っていた。実は彼こそがこの学園の学園長だったのだ。彼の肩には白い細長い生き物がいる。

「集まってくれてありがとうございます。一年の君たちには初めて顔を見せるね。私がこの学園長の轡木十蔵です。以後お見知りおきを。」

「え？ 轡木さんって用務員じゃなかったの!？」

鈴は思わず言う。鈴だけではない、ここにいる一年メンバー全員が思ったことだ。轡木は苦笑いしながら答える。

「女性が扱うISの技術を学ばせる場所の学園長が男と言われると周りから反感を招いてしまいますからね。だから表上では本来教頭である妻に学園長になってもらって

るんですよ。」

「は、初めて知りましたわ……」

「よ、世の中ってわからないこともあるものなのだ……」

一年組はもはや啞然としていた。

「学園長、今回の事件に関してですが……」

「ええ、分かっています。襲撃犯はデジタルワールドの神・イグドラシルに仕えている口イヤルナイツですね。」

「え!?が、学園長がどうしてそのことを!」

楯無は思わず驚くと今までしやべりもしなかつた彼の肩にいた生き物が彼女らの方を見てしやべった。

「それは私がいるからだ。」

「「「しや、しやべった!!」「」」」

「この声!もしや貴様は!」

「久しいなデュークモン、我が同胞よ。」

肩に乗っていたデジモン、クダモンは轡木の肩から降りると赤い六本の脚を持ったデジモンへと姿を変える。

「貴様はスレイプモン!確か貴様は行方不明になっていたのでは!」

「スレイプモンだつて！」

デュークモンの言葉にジエスモンは驚きの声をあげる。

「知っているのか？ ジエスモン。」

「師匠から聞いたことがある。でも確か途中で姿を見せなくなり周りからは死んだという噂も流れていたんだ。でも本人が生きていたなんて……」

「スレイプモンと私は旧知の知り合いでしょ。この世界にISが発表された頃、この人間界に来たんです。人間界の監視役として。」

「待て！ それはイグドラシルの命令か!? そのような話は我々の元には来ておらぬぞー！」

デュークモンは驚きながらも言う。スレイプモンは轡木の隣で答える。

「それは飽くまでイグドラシルが私に与えた極秘任務だったからだ。ISが本当にデジタルワールドに悪影響を与えるのかを調べるために。」

「そのことについてはクレニアムモンからも聞いた。しかし、まさかロイヤルナイツがすでに学園内にいたとは……」

「デジモンと私達は住む世界が違うとはいえ奇妙なつながりを持っています。例えば、人間が科学を発達させればデジモンも進化し、こちらの世界の環境が悪化すれば僅かながらデジタルワールドにも影響します。言ってしまうえばデジタルワールドと私達の世界は表裏一体の存在なんです。」

「つまり……人間側の世界で悪い考えを持つ人間が多くなればデジタルワールドでもそう言うデジモンが増えていくということ?」

シャルロットは考えながら言う。

「大体の考えではおそらくそうなるでしょう。しかし、彼らは飽くまでもイグドラシルに仕えるデジモンたちです。彼らに限ってそのようなことはないでしょう。」

「でも、おかしくないですか?もし、そうだとしたらパタモンたちの故郷でもあるデジタルワールドはどうして……」

『その話し合い、私も混ぜてもらえないかしら?』

「!？」

「だ、誰の声ですの!？」

「ま、まさかロイヤルナイトのスパイ!？」

鈴たちは周りを見回しながら声の主を探す。すると一同の目の前にドウフトモンたちが作ったゲートほどではないが丁度人間一人が入れそうな穴が現れる。そこから左右に天使と悪魔の翼を持った女性型デジモンと一人の不思議な雰囲気を感じさせる女性が見えた。

「何者だ貴様!どうやってここに……」

「お待ちしていました、御神楽様。」

「「「「え?」」」」(一年組一同)

「えっと、自己紹介からしたほうがいいかしら? 私は御神楽ミレイ。篠ノ之東のちよつとした知り合いよ。」

「た、東の知り合いだと!?!」

千冬たちが騒ぐ間も会議室での話し合いは続く。

IS学園 寮 夜

「・・・・・・・・・・」

一夏はカイゼルグレイモンの姿のまま寮の屋根の上に座っていた。彼は両手を見ながら昼間のドウフトモンの言っていたことを思い出していた。

自分は何者だ？

人間か？それともデジモンか？心が人間でも体はデジモンだ。

同胞を皆殺しにするつもりか？

人間に味方するつもりか？

自分はどっちの味方なんだ？

自分は何のためにいるんだ？

「分からない・・・・・・・・俺はどっちなんだ・・・・・・・・。」

一夏は頭を抱えながら考えていた。人間とデジモン……どっちを選ぶか、かつて人間世界に来る前の自分なら必ずデジモンを選んでいただろう。しかし、今は千冬、簞たちがいる。それでもデジモンを選べるのだろうか。そう考えるだけで一夏は胸が張り裂けそうになる。

「……一夏。」

そこへ簞が屋根の下から声を掛けてきた。一夏は体を降ろしながら彼女を見る。

「簞か。リリモンは？」

「今死んだように寝ている。さつきは普通に見えたがやはりかなり疲れていたようだ。」

「……チビは？」

「今、気分転換させるためにアグモン達と大浴場に行った。学園長の許可で入れるようになったんだ。」

「そうか、何もなければいいんだが……」

大浴場

「うわあ〜！これが箒が言っていた大浴場か！」

アグモンは喜びながら風呂を泳ぐ。

「お風呂はプールじゃないよ。」

耳を浮き輪代わりにして浮かぶテリアモン。

「ガブモンは入らないの？」

「お、俺はちよつと……」

「わ〜い！お風呂だ！」

「オフロ！オフロ！」

デジモンたちははしやぎながら浸かっていた。

「でも……」

ピヨモンが周りを見ると昼間のことでデジモンに警戒している女子生徒たち。

「しようがないよ、僕たちが無害だって言う証拠どこにもないんだもん。」

「それは違うと思うが……」

アグモンの感覚がずれていることを言うレナモン。隣では顔をあげないままブイモンが風呂に浸かっていた。ちなみにジエスモンたちはあまりにも危険に見えるため入らなかった。浴場にいる女子たちは警戒しながらアグモン達の事を見ていた。ただ一人は例外で。

「うう〜テリアン可愛い〜。」

本音は気持ちよさそうにテリアモンを捕まえていた。テリアモンは苦しそうに本音の手から逃れようとする。

「いいな〜おりむーたちはこんなかわいい生き物と一緒にいたなんて〜。私も欲しいな〜デジモン〜。」

「……みんな……あの人はなんかすごく馴染んでない？」

ピヨモンは不思議そうにその光景を見る。

「本音は元々頭のネジが一本か二本抜けている感じだから……」

「ひどいな〜パタパタは〜。」

「パ、パタパタ!？」

「だってパタモンだからパタパタ〜他に何かいいあだ名あったかな〜?」

本音は次のターゲットをガブモンに切り替える。のほほんとした顔でもガブモンにとつては一瞬どこかの巨人が人間をニタつと笑っているような光景に見えた。

「君の毛皮の下の素顔は何なのかな〜? 私一番気になるな〜。」

「う、うわあああ!!」

ガブモンは風呂から逃げようとする。それを追いかける本音。その光景を見て女子たちはこの日を境に警戒していた自分たちが馬鹿馬鹿しくなってきたと感じて普通にアグモン達に近寄るようになってきた。

一夏&箒ルーム

「・・・・・・・・俺にはわからない。」

一夏は姿を人間に戻って机に座りながら言う。箒はそんな一夏の姿を見ていた。

「俺はかつて人間だった。だからこの世界の人間の狂った考えもわかる。・・・・でも、その中にも箒や千冬姉のようないい輩もいる。だから俺はどうしても人間を裏切ることはできない・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・一夏。」

「すまないな、こんな弱気になって・・・・チビの方が辛いはずなのによ。」

一夏は頭を抱える。自分はどうしたらいいのか。それがどうしてもわからなかった。そんな一夏と箒の所にブイモンがドアを開けて入ってきた。

「……………兄貴。」

「……………チビ？」

「俺……………どうしたらいいんだろ？」

「……………さあな、俺もそれについて話していたところだ。」

「俺、悔しいよ。ライラ姉ちゃんが死んだのに何もできないなんて……………」

「チビ……………俺もな……………」

「俺！ドウトモンが言っていたことがどうしても信じられないんだ！確かにこの世界の人間は傲慢だったり、我儘だったり、色々いるけど……………でも箒や千冬姉ちゃんみたいないい人もいる！なのに、どうして人間が悪いなんて言いきれるんだよ！」

ブイモンは泣きながら言った。それは一夏とて同じ考えだった。

「イーター……………よ……………」

「ん!？」

「リリモン姉ちゃん!？」

二人の会話で目が覚めたのかさつきまで死んだようにぐっすり眠っていたリリモンがベッドから起き上がる。

「そいつが突然デジタルワールドに出現して浸食していったの。多くのデジモンがそいつに取り込まれて……………デジタルワールドの大半が汚染されてしまったの……………イ

グドラシルはその元凶がこの世界の人間だと結論を出したのよ……」

「ほ、本当なのか!?それは!？」

箒はリリモンを見ながら言う。でも、リリモンは言葉が続ける。

「それは飽くまでも表上のことで私にもよく分からないの。でも、マグナモンはそれを不審に思っただけでイーターが最初に確認されたダークエリア近辺を調査していたそうよ。そして、何かを突き止めた直後の何かに襲われ、消された。」

「では、ISの登場によって起こったこの女尊男卑の社会の影響でデジタルワールドがおかしくなったとは言い切れないんだな？」

「ええ、でも決定的な証拠がないから断定できないわ。」

「………だったらやるべきことは一つだな。」

箒は一夏とブイモンを見る。一夏も話を聞いて考えをまとめたようだ。

「………なら俺は人間を守る。いくらグドラシルの命令だからと言って滅ぼそうと考えているのは間違っている。例えばそれが神に逆らうことでも俺は戦う!ヴリトラモンとしてではなく、人間・織斑一夏として!」

「兄貴……」

「チビー!お前はどっちに付くかは自由だ。リリモン、お前もだ!」

一夏に言われてリリモンは即答、ブイモンは遅れながらも決断する。

「私は最後までイチカと一緒にについて行くわ！」

「お、俺も一緒に戦う！ライラ姉ちゃんが死んだのは悔しいけどこんなことで人間を滅ぼそうというのはいくらライラ姉ちゃんでも許さないはずだ！」

「よし！こうなったら明日にでもデュノア社に殴り込みだ！」

「おお！！」

「よし！こうなったら私も行くぞ！」

「みんな一緒になに騒いでいるの？」

一同が意気投合している真つ最中にアグモンがブイモンよりも遅く部屋に戻ってきた。

「アグモン！明日は早いから今のうちに休むぞ！」

「え!？」

「よし！見ていろよドウフトモン！」

「打倒！ロイヤルナイツ！」

「「えいえい、おー!!」」

叫び声をあげる一夏たちにアグモンは啞然としてしまっていた。

「あつ！そうだ！これをイチカに・・・」

リリモンはベッドの脇に置いてあつた白い聖剣を渡す。

「これは何だリリモン？」

「オメガモンが最後にこれをイチカにつて。」

「・・・オメガモンが・・・」

一夏は聖剣を持つてみる。すると確証はなかったが何か力が沸き上がったような気がした。

宣戦布告

IS学園 寮の外 早朝

「よし、これで準備が整った。」

一夏は一通りの準備を整えると寮の部屋を後にする。

「ねえ、箒。本当に行く気なの？（汗）」

「ああ、一夏の行くところなら私はどこまでも行く。」

箒も待機状態の紅椿の最終確認を行い、カイゼルグレイモンの姿になった一夏の上に乗る。

「リリモン、俺について来れるな？」

「当たり前よ！バンチョーになったのも伊達じゃないんだから！」

一夏は空を見上げる。そして、某巨大ヒーローのように飛び立とうとしていた。
「行くぞみんな！」

「「「おう！」「」」

「とう！」

一夏は勢いよく空へ飛んで行った。しかし、その直後目の前に穴が現れ、通った先

は……

「「「「……」」」」

早朝なのにもかかわらず学園の生徒たちが集められている体育館（天井は昨日エグザモンに壊されたけど何とか修理できた）。

「「「「ええええええええええ!!!」」」」

「どうにか間に合ったようね!」

驚いている一夏たちの隣で何気に言っているミレイ。更に隣では千冬と鈴たちがいた。

「これは一体全体……っていうか俺の姿丸見えじゃん!」

「たわけ!」

「あだ!」

千冬に出席簿でたたかれるカイゼルグレイモンこと一夏。その光景が面白いのかくすつと笑う生徒一同。一夏にはよく分からない状態だった。

「……みんな……俺の姿を見てビビらないのか? っていうか俺が誰だがわかる?」

一夏は不思議そうに聞くと本音が先に答えた。

「だって、やっていることが人間の時のおりむーのまんまだもん。姿が変わってもバ

レバレだよ。」

「そうそう、昨日の奴らと違って織斑君はやっていることが同じだから丸わかりだね。」

「デジモンって本当はいい生き物で私達と全然変わらないってこともよく分かったし……」

生徒全員に恥ずかしいところを突かれまくられ一夏は顔を隠しながらしやがみこんでしまった。

「おおう……それじゃ、今日こつそり出ようとしたことや悩んでいたことが無駄に感じてくるんじゃないか……(泣)」

「そ、そういうわけじゃないよ！」

「そうそう！織斑君たちが戦ってくれなかったら今頃、私達もここにいなかったのかもしれないし！」

落ち込んでしまった一夏を慰めようとする生徒一同。箒もよく分からず鈴たちに聞く。

「昨日の話のことはよく分からないがどうしてこんなことになっているんだ!? って言うかデュノア、その隣にいるお前に似ている女の人は誰だ？それにその隣にいるボーデヴィッツヒの姉さんみたいな人は？」

箒はシャルロットの隣にいたノエルとクロエを見ながら言う。

「この人は僕の母さんだよ。それとその隣にいる人はクロエ・クロニクルさん、東さんの助手らしいよっ。」

「お母さん!?!それと姉さんの助手!?!」

「えつと……話が長くなるんだけど……」

シャルロットは一夏と箒たちに昨日の話とどうして生徒全員が集まってしかも一夏のことを知っているのかを順に説明した。

昨日 会議室

「と言う話し合いから私はこのことについて生徒全員に伝えようと思うのですがどうでしょうか？」

轡木は千冬から聞いた一夏のこと、そしてデジモンのことについてを学園の生徒全員に伝えようと言うことを長い話し合いの末に下した。その決断は千冬にとつては不安だった。昔のように一夏が孤立するのではないかと（以前聞いた弾からの話で）心配だったのだ。それは鈴たちも同じ考えだった

「今回の事件でIS学園の教師の被害も甚大です。それと同時に生徒の大半がデジモンに対して危害を加える生き物だと考えるでしょう。しかし、デジモンの全てがあのような攻撃的な生き物ではありません。むしろデジモンたちの方もデュークモンからの話で小さいデジモンでさえも人間に対して警戒心があります。そのようなことをできるだけ和らげるのも大事なことです。それにロイヤルナイツに対してはおそらくISでは太刀打ちするのは厳しいでしょう。それは織斑先生含めるここにいる皆さんがよく分かっているでしょう。」

「確かに幼年期デジモンでさえもデジタルワールドにイーターが出現したのは人間のせいだと言う考えが芽生えている。この状態のままではおそらくどちらも争い続ける危険性がある。」

「そのためにも私は織斑君ことも今回打ち明けるべきだと思つています。デジモンと人間の関係を繋ぎ合わせることができる僅かな可能性なのですから。」

轡木は真剣な目で言う。その信念のある考えに千冬たちも納得した。

「おそらく一夏は自分のせいだと考えて明日にでも奴らの本拠地だと思われるデユノア社に単独で向かう危険性があると思います。この話は学園長にお任せします。」

「ありがとうございます、織斑先生。」

「轡木学園長、私から少し頼み事をしてよろしいかしら？」

「なんでしよう？御神楽さん？」

「ミレイでいいわ。今回のデジタルゲートを開いた影響でロイヤルナイトに属するデジモン以外にも多くのデジモンたちがこちらの世界に迷い込んだはずよ。そのデジモンをこちら側で保護するためにどうしてもこの学園のネットワークシステムを貸してほしただけでもいいかしら？」

「いいでしょう。デジモンに関してはあなたの方が詳しいですし、私達もあなたの方が力が必要です。是非お願いします。」

「わかりました。クロエ、ベルスターモン、パイルドラモンは私と一緒に来てちょうだい。」

「了解。」

「分かりました。」

「分かったわ。」

四人は部屋を後にして行く。千冬はそのときミレイに束がどこにいるのかを聞き取ったが次にどのようように生徒たちに説明するかについての話し合いになったためすぐに忘れてしまった。

体育館

「と言う訳で昨日、生徒会長が二人が部屋にいる間にこっそり全員を体育館に誘導してそのことに関して話していたんだよ。それでミレイさんが多分こうすればいいでしょうって言うって今の状態になったわけなんだよ。」

「……じゃあ、僕たちが風呂に入っていた時必要以上に見られていたのもその話をしていたから?」

アグモンに質問にテリアモンたちは首を縦に振る。

「」「うん。」「」

「そ、そんな……」

アグモンは尻もちを着く。一夏は姿を戻すと生徒全員を見る。

「みんな俺のことを敵だとは思わないのか?今まで正体を黙っていたのに……」

「だって織斑君いつも明るく振舞っていたし、手伝いが必要な時はいつも協力してくれ
たし、私達に悪いこと何もしていないじゃない。」

「私なんて最初は男の人だからどうしようと思っただけでも警戒していたのに普通に接してくれまし」

「鳳さんたちのデジモン見ていたら私達と変わりないんだな……って思っちゃってさ！」生徒たちは一夏を見ながら言う。その中にはかつて女尊男卑主義者で一夏に危害を加えようとした者もいた。そんな彼女等でも一夏の戦いや世界の危機を聞いて自分たちの行いを反省して、今は一つになるべきと改めて考えてくれたのだ。一夏は思わず涙が出てきた。

「あ、ありがとな……なんか感動したら涙が……」

「兄貴……」

「よかつたな、一夏……」

「チビ、箒、アグモン、みんな……」

「私のこと除外されてない？」

「リリモンもだ……」

なんか生徒全員で一夏を苛めているように見えてしまったのでみんな一夏のことを慰める。そのとき、体育館にセットしていた空中投影ディスプレイの映像が何者かにジャックされた。

「な、なんだ!？」

泣き止んだ一夏は生徒たち全員と映像を見る。映像にはドウフトモンが映し出された。

『全世界の人間諸君に次ぐ。この時間帯は少し我々がジャックさせて頂いた。我々の名前はデジタルモンスター、君たちの世界とは別のデジタルワールドからやって来た知性を持った生き物だ。我々の故郷は君たちが最強の兵器だと言うI Sのおかげで壊滅的な被害を受けた。故に我々は失った故郷に変わって君たちの世界をいただく。』

ドウフトモンの宣戦布告は全世界に流されていた。

『我々は君たちと共存するという意志はない。どうしても気に入らないのなら君たちご自慢の兵器I Sでデュノア社本社まで攻めてくるがいい。我々が手加減して君たちをお相手しよう。言っておくが我々の計画はまだ遂行段階ではない。それまでの間じっくり対策を練っていてくれたまえ。なお、まず手始めにこのロードナイトモンが率いる部隊を日本に出撃させる予定だ。日本政府の諸君、気の毒だがせいぜい抵抗してくれ。……言っておくが我々の攻撃に終わりはない、一つの国が消えればまたもう一つと人間が一人残らずこの地上から消えるまで我々は攻撃を続ける！分かったか！ハハハハハハ！……』

そう言うとう通信ジャックは終わり空中投影ディスプレイも停止した。

「くそ！奴らとうとう動き始めやがった！」

「夏はカイゼルグレイモンの姿になると体育館から出る。

「チビ！行くぞ！」

「おう！」

デジヴァイスが光りブイモンは光り始める。

「ブイモン！超進化！」

ブイモンは巨大な竜へと姿を変える。

「エアロブイドラモン！」

それに続いて箒、鈴、セシリアも専用機を展開しながらパートナーを進化させる。

「ビクトリーグレイモン！」

「ラピッドモン！」

「ガルダモン！」

「あれ？シャルロットたちは行かないの？」

鈴は不思議そうに言う。

「僕たちは万が一に備えて母さんと一緒にここに残るよ。」

ラウラは何かの連絡があったのかすぐに一夏たちの方に来る。

「祖国からの帰還命令が下った。どうやら他の国の部隊と共同でデユノア社に攻撃を仕掛ける気だ。」

「何!? 本当かそれは!」

「ああ、どうやら祖国も本気らしい。」

「一夏、ラウラは私とジエスモンが一緒に行く。お前たちはロードナイトモンの方を頼む。」

「わかった、千冬姉も気をつけて。」

そう言うラウラはガブモンをメタルガルルモンに進化させ、千冬はジエスモンに乗って飛んで行った。

「さて、俺たちも急がなきゃな!」

「ああ!」

「アイツらの好きにはさせないわよ!」

「織斑君気をつけてね!」

「帰ってきたら私とデートするって約束して!」

「何言っているのよ! 私がするの!」

「.....」

生徒たちが喧嘩をするのを一夏は黙って見た。箒たちも思わず唾然とした。そんなかでリリモンは怒りながら怒鳴った。

「もう! イチカは私のものなの! 誰のも渡さないわよ!」

「姉ちゃん……（汗）」

「お前まで言うんかい！リリモン！」

怪鳥オニスモン

ドイツ軍基地

日本から飛び立ったラウラと千冬は数時間後ドイツ軍基地に降り立った。基地では副隊長クラリツサ・ハルフオーフがIS配備特殊部隊「シユヴァルツェ・ハーゼ」隊員たちと共に待っていた。

「お帰りなさいませ、隊長……って、織斑教官！どうしてここへ！」

「久しぶりだなクラリツサ、話は後だ。私はラウラの担任として、協力者として来たまでだ。それに私はもう教官ではない。」

「あなたは我が部隊の教官であったことには変わりありません。ですから教官と呼ばせていただきます。」

「勝手にしろ。」

「クラリツサ、他の部隊は？」

「現在我がシユヴァルツェ・ハーゼを除いた部隊は既にフランスへ飛び立っています。後10分後にデユノア社に向けて攻撃を開始します。」

「……まずいことになったな。いくら各国の精鋭を集めたとはいえ相手があのエグ

ザモンだとしたら歯が立つかどうか……」

ラウラは首をかしげながら言う。それは昨日戦ったラウラだからこそわかることだった。しかし、このまま放置しておけば犠牲者が現れかねない。

「……随分遅れてしまったが我が『シユヴァルツェ・ハーゼ』もフランスに向けて出撃するぞ！」

「はっ！直ちに発進します！」

「シユヴァルツェ・ハーゼ、出動！」

「はっ！」

眼帯をした黒ウサギとトレードマークにした部隊が急ぎフランスへ向けて飛んで行った。

日本

一方日本では一夏たちが破壊された街にたどり着いていた。街は燃え、どっかの映画の巨神兵が並び立つような姿でナイトモンたちが蹂躪していた。

「こ、こいつは酷い……」

箒は予想以上の光景にゾツとした。

「兄貴！このままで俺たちの家までアイツら来ちゃうよ！」

「それどころかこの辺だと五反田食堂が近いから弾たちにまで被害が及ぶわ。」

「よし、俺と箒、リリモンであの軍団進行を阻止する。その間にセシリアと鈴はこの近辺でまだ避難している人たちを見つけたら誘導してくれ。」

「了解！」

「任せて〜!」

「一夏さんたちも気をつけて!」

「行こう、セシリア。」

「お〜い!」

「ちよつと待ちなさい!あなたたち!」

「うん?」

一夏たちが後ろを振り向くと簪と楯無が後を追ってきた。

「おいおい、大の生徒会長がよりによつて学園を離れていいと思つていいのか?」

「それどころじゃないの!更識本家がよりによつてあの巨神兵のまねごとをしている奴

らの通つている所にあるのよ!」

「私も家族のことが気になって……」

「マジかよ!それなら急がなくなっちゃまずいじゃないか!」

「だったら私が二人の方に行くわ。」

リリモンが簪たちを見ながら言う。

「もうライラモンみたいなのは見たくないから……」

「姉ちゃん……」

「……わかった、簪たちのことはリリモンに任せる。セラファイモン、お前も頼んだぞ。」

「了解した。」

「それと……お前たち見るのは初めてだけど頼んだぞ。」

「……………」

一夏の言葉に黙るブラックウオーグレイモンとブラックメタルガルルモン。

「じゃあ、後で合流ってわけで！」

「ああ！行くぞ！チビ！箒！ビクトリーグレイモン！」

「おおう!!」

一夏たちは別れ、迫りくるナイトモンたちに攻撃を開始した。

フ
ラ
ン
ス

デ
ュ
ノ
ア
社
近
辺

「こ、これは……」

輸送機からラウラたちが見た光景は想像を絶するものだった。本来この時間ではすでに世界各国から招集されたIS部隊の精鋭たちが占拠したデュノア社の本社であるビルを攻撃しているはずなのだ。しかし、その精鋭たちが一匹の怪鳥に次々と撃ち落されていった。その体はエグザモンよりも巨大で人間など本当にちっほけに見えるほどだった。その怪鳥はISを纏った女性たちをその巨体で吹き飛ばし、時には口に咥えた上にかみ砕いて捕食していた。

「な、なんなんだ！あの化け物は！あの大きさからにしてエグザモンよりも巨大だ！」
「また性懲りもなく来たな。」

「ん!？」

ラウラたちが声が出した方を見るとそこには腕を組んだデュナスモンがいた。

「お初目にかかる、俺はロイヤルナイツの一人、デュナスモンだ。」

「またしてもロイヤルナイツか！」

「と言うことはあの巨大なデジモンも……」

「いや、それにしておかしい。」

クラリツサの言葉に対して千冬は言う。

「それはどういふことですか、教官？」

「さつきからアイツの行動を見ていたが明らかに奴は本能のみで動いている。日本で見たロイヤルナイツたちは明らかに自分の意思を持っていた。つまり奴はロイヤルナイツではない。」

「流石だな、その通り。コイツの名はオニスモン。かつてデジタルワールドで絶滅したデジモンを我々が復元して蘇らせたものだ。」

「何!?! 復元!?!」

「……と言つても完全な復元は我々にも不可能だ。つまりコイツはそのコピー、ロボットみたいなものさ。だから我々の操作で動いている。」

「デユナスモンはそう言うとおニスモンを呼び寄せる。オニスモンはまるで犬のようにデユナスモンに頼ずりをする。」

「なるほど……でも、このまま引き下がるわけにもいかんな。あんなデジモンを野放しにしたらドイツは愚か近辺の国々にまで襲い掛かって来る。」

「ラウラはそう言う専用機のシユヴァルツェア・レーゲンを展開し、クラリツサと千冬のISを展開する。」

「ラウラ……大丈夫なの?」

「ガブモンは心配そうに言う。」

「私もこれ程恐怖を感じたのは初めてだ。他の国の精鋭が全滅するなんてこと

は………しかし、私は祖国のためにもこのままおめおめと逃げるわけにもいかん！」

ラウラはガブモンにデジヴァイスを翳す。ガブモンも光に包まれ一気にメタルガールモンに進化する。

「じゃあ、俺はラウラを守るよ。コイツを倒して一緒に帰ろう！一夏たちにまた会うために！」

「おう！そして、教官……いや、織斑先生をちゃんと日本に返すためにもな！」

「……少しは言うようになったな……」

「千冬もしっかりしないとね。」

「では隊長、行きますよ。」

ラウラたちは輸送機のカタパルトに接続させ、発進準備を整える。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ、シユヴァルツエア・レーゲン出る！」

日本 更識本家

「そ、そんな……」

楯無は燃える本家を見ながら唾然とする。既にブラッククウォーグレイモンとブラックメタルガルルモンが屋敷内部に入り、家族がいなかどうか調べていた。セラフィモンとリリモンは近づいてきたナイトモンを手あたり次第倒していた。簪も中に入ろうとしたが二人に「見るべきものじゃない」と言われここで待たされていた。簪は心配そうに屋敷の外から眺めていた。

「お姉ちゃん、私達も行っただろうがいいんじゃないかな？やっぱり自分たちの手で……」
簪が言いかけたときブラッククウォーグレイモンとブラックメタルガルルモンが帰っ

てきた。二匹は複雑な表情で戻って来る。楯無はもしやと思った。

「どうだった？」

「・・・・・・・・・・」

二人は無言で首を横に振った。簪は思わず跪いてしまった。楯無は慌てて妹に駆け寄る。

「簪ちゃん！しっかり！」

「だ、大丈夫・・・・・・・・一夏だって、自分の存在と苦しみながら戦っているんだもん……わたしもしっかり……しなく……ちや……」

簪は思わず泣いてしまった。ブラックウオーグレイモンは慌てて彼女に言う。

「落ち着いてくれ、俺が言うのは死んだというのじゃなくて避難していたということなんだよ！」

「え？」

「現に俺たちが来た時は既にもの抜けの殻だ。きっと避難しているからなんだと思う。だからそう泣かないでくれ。」

「そ、そう言うことなんだ……は……なんかよかったのかよくなかったのか……」

簪は姉に対して恥ずかしいことをしてしまったと思い慌てて顔を隠すのであった。

別エリア

「はあ……はあ……」

「弾、蘭、二人とも大丈夫？」

破壊された街の中を荷車まで作って移動している家族がいた。五反田家族だ。

「しっかし、本当に信じられないぜ……昨日までは何事もなかった日常がこんなにも変わっちゃうなんてさ……」

「弾！少しは黙らねえか！そんなこと言っちゃったらこのチビ達がかわいそうだろう！」

荷車を引っ張っている彼の祖父、敵は隣で走っている小さい生き物たちを見ながら言った。それはトコモン、ニヤロモン、ウパモン、ワニヤモンなどの幼年期デジモンたちだった。実は昨日の夕方五反田食堂に迷い込んだデジモンたちなのだ。

「確かにこいつらを見たらあのテレビで言っていた奴らが全部同じ考えじゃないって言うのはよく分かるよ。でも、何もこんなひどいことを……！おい、じいちゃん

「前！前！」

「ん？．．．．．おお！」

敵は慌てて足を止める。一家が向かう先には既に一体のナイトモンが向かってきていたのだ。

「コイツは不味いな．．．．．弾！お前は蘭と母さんとそのチビ達を連れて逃げろ！」

「じいちゃんはどうすんだよ!？」

「儂はここであの鎧野郎の目を引かせるわい！」

「無茶苦茶すぎるだろう！」

そう言っている間にもナイトモンは敵に向かって剣を振り下ろそうとしていた。

「お父さん！」

「おじいちゃん！」

剣は振り下ろされ、蘭と蓮は思わず目を瞑ったがそのとき金属同士がぶつかり合う音がした。二人とも目を掛けて見るとそこにはナイトモンを一刀両断にした。一夏ことカイゼルグレイモンがいた。一夏は敵を荷車ごと持ち上げて弾たちの方に持ってきて降ろす。

「この先に避難所がある。早くそこへ行ってくれ。」

「え!?!その声．．．まさかお前一夏!?!」

「一夏さん!?! どうしてそんな姿に!?!」

「話は後だ! 急いでここから離れ……」

「人間を助けるとはやはり我々と敵対することにしたか、ヴリトラモン。」

一夏が振り向くとそこには赤いバラを持ったロードナイトモンがいた。

「ロードナイトモン……」

「同じデジモンでありながら人間側に付くとは……おのれの恥を知れ!」

「黙れ! いくら俺がデジモンになっただろうが俺は人間・織斑一夏だ! それ以外でも何でもねえ!」

一夏は龍魂剣を構える。弾たちの方にはエアロブイドラモンが来ていた。

「チビ! すまないが弾たちの避難に手を貸してくれ! その後、箒たちに合流してここに来てくれ!」

「分かった兄貴! さあ、早くこっちに……」

エアロブイドラモンは弾たちを誘導しながらその場を後に行行った。

「さあて……昨日の再試合と行こうぜ! ロードナイトモン!」

「汚らしい! 貴様などに倒される私ではないわ!」

ロードナイトモンも構えを取る。

フランス デュノア社近辺

一方ラウラたちはオニスモンに苦戦していた。レールカノンやワイヤーブレードで応戦しようとするが規格外の大きさに致命傷を与えられずにいた。

「このデカさではどうにも……」

「ガルルバースト！」

メタルガルルモンは全身からミサイルを発射し、オニスモンに攻撃する。オニスモンは巨体な上に避けられず攻撃を受けるが怯むことなくメタルガルルモンに向かって体当たりをした。

「ぐわあ！」

「メタルガルルモン！」

ラウラはメタルガルルモンに声を掛けるがオニスモンはその勢いのままラウラの方に向かった。

「ま、不味い！」

ラウラはレールカノンで目を狙うがオニスモンはそれでも方向を変えず迫って来る。

「間に合わない！」

「隊長！」

「ラウラ！」

「ボーデヴィツヒ！」

千冬たちが叫んでいる中ラウラとオニスモンは接触しようとしていた。

覚醒のオメガ

フランス デュノア社近辺

「ぐう！」

「迫りくるオニスモンに対してラウラは思わず逃れるのを諦めようとしていた。

「!?」

そのとき彼女はオニスモンの上に何かが巨大な剣を振り下ろそうとしている姿を確認できた。その影は徐々にオニスモンの近づいていることがわかった。

「おりゃ！」

剣が刺さった瞬間オニスモンは背後に何かがいるのに気づきラウラから目標を変えらる。ラウラは一時的に硬直状態になる。

「何ぼさつとしてるんだい！早くそこから離れな！」

「わ！わかった！」

ラウラは急いでオニスモンから距離を取り千冬たちと合流する。

「大丈夫か、ボーデヴィツヒ？」

「はい、心配をおかけしました。」

「よかった……俺も一時はどうなるかと思ったよ……」

メタルガルルモンはホツとする。ラウラはオニスモンの方を向くとオニスモンは一体の女性型デジモンと戦っていた。夏休みに千冬との再戦を誓って別れたメルヴァモンだ。

「まさか奴がこんな所にまで来るとはな……」

「織斑教官のお知合いですか!」

「ちよつとしたな。」

「すごい……あのオニスモンと互角に渡り合うなんて……」

千冬たちは戦闘をしているメルヴァモンのことを見る。メルヴァモンは千冬たちの安全を確認するとニヤツとしながら叫ぶ。

「織斑千冬!早くここから離れろ!コイツはアタシが何とかする!早く行け!」

「何を言っている!そんなことをしたらお前が……」

「そんなこと言ってもお前たちの機体のエネルギーも限界だろ!一回帰らねえと本当に死ぬぞ!」

メルヴァモンの言う通り千冬たちのシールドエネルギーはもう残り少なかった。逃げるには屈辱的だがこのまま続けなければ確実に負ける。

「クラリツサ、他の部隊の生存確認は?」

「輸送機の通信で生き残った部隊は既に戦闘地域から離脱しています。我々もこのまま留まり続けられれば……」

「止むを得ん。我が黒ウサギ……シユヴァルツェ・ハーゼ隊の屈辱的撤退になるが部隊の安全が第一だ。一時撤退する！」

ラウラは状況的にも自分たちが不利だと判断し輸送機へと戻っていく。メルヴァモンは千冬たちが離脱したことを見届けた後にオニスモンに向かって剣を構える。

「どうやら逃げてくれたみたいで助かったわ。このとっておきの技はまだ見せたくないからね……」

メルヴァモンはオリンピア改とメデュリアを広げると高速で回転を始める。何かの攻撃だと感じたオニスモンは破壊光線「コズミックレイ」を放つ。放つ頃にはメルヴァモンは巨大な竜巻と化していた。

「マッドネスメリーゴーランドDX!!」

メルヴァモンはそう言いながら回転を続けてオニスモンへと接近していく。破壊光線を竜巻の防御壁で防ぎ切り、オニスモンの体を切り刻んでいく。オニスモンは危険だと判断したがすでに時は遅く徐々に体を削り取られていき、悲鳴を上げることなく消滅した。デユナスモンはこの結果に驚いていた。

「馬鹿な！コピーとはいえオニスモンは古代のデジタルワールドで猛威を振るったデジ

モン！たかが神人型デジモンの一人の手でやられるなんて……！奴はどこだ!?どこへ消えた!？」

デユナスモンは近くにいたはずのメルヴァモンがいないことに気づき慌てて探し始める。一方のメルヴァモンは目を回しながら崩壊しているピルの陰に隠れていた。

「この技の欠点は……やった後に強烈な目まいと吐き気が一気に襲ってきて戦える状態でなくなるという……おえええええ!!！」

彼女は誰にも悟られぬように嘔吐した。

日本

「ここまで来れば避難所までもう少しだ。」

エアロブイドラモンは弾たち家族を避難所近くまで誘導し終えた所だった。途中で荷車を代わりに牽いてくれたため弾たちは荷車に乗って休むことができた。

「じゃあ、俺は兄貴の助けに行かないと……」

エアロブイドラモンはそう言うのと翼を広げて飛び去ろうとした。

「あつ、ちよつと待ってくれ！」

弾が呼び止める。エアロブイドラモンは気まずそうに振り向く。

「あ、兄貴のことだけど……その……あんまり責めないでくれ。兄貴だつて苦しいんだ。人間でもないし、デジモンにもなりきれない自分と今でも必死に戦っているんだ。」

「やっぱりあれは一夏だったのか……」

弾たちはエアロブイドラモンから簡略ながらも一夏の過去について聞いた。しばらく黙っていた五反田一家であったがその目は敵視とか侮辱をしているものではなく真つ直ぐに見ているものだった。

「一夏の奴……そんなことならちゃんと言ってくれてたらいいのに……」

「一夏さんもきつと辛かったんだろうな……自分が人間じゃないと知られると何をされるか怖かっただろうし……」

弾と蘭の母親である蓮はエアロブイドラモンの顔を見ると笑顔で答えた。

「チビちゃん……だったかしら？一夏君に会ったら伝えてちょうだい。私たちはいつでもあなたのことを信じているって。あなたは私たちと同じ人間だって。」

「これ言うのもなんだがよ……この騒ぎが治まったら家にいつでも遊びに来いって伝えてやってくれ。俺も弾も蘭も待つてるってな！俺らから見たらお前さんはいつまでも一夏君だということも伝えてくれ！」

敵もニヤツと笑いながら言う。エアロブイドラモンは思わず嬉し泣きをした。一夏にはこんなにも信用してくれる人がいたんだなど。

「は、はい！絶対に兄貴に伝えます！」

そう言うのと彼は急いで箒たちと合流して一夏のところに行くべく飛び去って行った。

カイゼルグレイモンVSロードナイトモン

「どうした！動きが鈍くなってきているぞ！」

ロードナイトモンは己の俊敏な動きを利用して次々と一夏に一撃を加えていく。一夏は応戦しようと攻撃していくがロードナイトモンに次々と避けられていく。

「な、なんて速さだ！学園の時と大違いだ！」

「あの時はほんの小手調べ、こんなこともできる！」

ロードナイトモンが彼の目の前に立つと驚くべき光景が現れた。

増えたのだ。ロードナイトモンが、それも四人に。

「こ、これは！」

「言っておくが私は一人だぞ？これでもお前は私を倒せるかな！」

ロードナイトモンはそう言うのと四人一斉に襲い掛かってきた。

「くっ！九頭龍陣！」

一夏は地面に龍魂剣を突き刺すと地面から八つの龍脈を放ち、己も竜の姿になってロードナイトモンを襲い掛かっていく。しかし、攻撃したロードナイトモンはすべて消えてしまった。

「残念だったな！そいつらは私の分身だ！」

「あれは増えたのではなく高速で動いて見せることによって増えたのかのように見せていたのか！」

「隙あり！アージェントファイアー！」

ロードナイトモンは技を放ち終えたカイゼルグレイモンの腹部に向かって右腕の衝撃波を打ち込んだ。

「ゴフッ！」

一夏は思わず口から血を吐き出した。ロードナイトモンは更にスパイラルマスカレードを放ち、一夏を吹き飛ばす。

「ぐっ！俺の実力じゃまだロイヤルナイツに勝てないと言うのか・・・」

一夏は拳を握り締めながら立ち上がるが目の前にはロードナイトモンが分身を引き連れながら迫っていた。

「今の攻撃でお前の剣は向こうに飛ばされ私の攻撃をカードする物がなくなった。つまり今の貴様は殻を失い弱りかけたヤドカリに等しい！」

「く、くっそ・・・」

ロードナイトモンはパイルバンカーを構えて一気に接近する。

「これでとどめだ！」

ロードナイトモンは一夏に止めのアージエントファイアーを打ち込もうとした。

「はっ！そうだ！まだこれがある！」

一夏は咄嗟にデジヴァイスを構える。

「無駄無駄無駄無駄無駄！そんなもので私の攻撃を防ぐことはできん！」

ロードナイトモンの攻撃が一夏に命中した。

IS学園 ネットワークコンピュータ

IS学園ではミレイがクロエたちと共に作業を進めていた。

「……………」

「ん？御神楽様、言っただうかされましたか？」

クロエは突然手を止めたミレイを見る。ミレイは薄く笑みを浮かべる。

「いよいよね……今までの世界で起こったことがない聖騎士と十闘士の力が合わさる瞬間が……………」

「？」

ミレイの反応はクロエにはどうしても理解できなかつた。
（束様も不思議な方だったが御神楽様はそれをさらに上回るお人だな・・・）
これがクロエのミレイに対する印象だ。

カイゼルグレイモンVSロードナイトモン

「な、なんだと……」

ロードナイトモンは目の前の光景に目を疑っていた。確かに自分の攻撃は一夏に命中した。それは紛れもない事実だ。しかし、目の前の出来事は違う。

白い剣だ。白い剣が己の攻撃を受け止めていたのだ。しかもその剣は

「そ、それは確かオメガモンが残した剣……どうしてそれを貴様が……」

一夏は黙ったままだったが剣は光輝き、その光を強めていった。思わぬ出来事にロードナイトモンは思わず距離をとった。剣は一夏の手から離れると一夏の体ごと浮き、剣はいくつもの光となって一夏の体に次々と付けられていく。両腕に籠手のように装着されるウオーグレイモンとメタルガルモンの頭部、両肩、膝、足に追加される白い装甲。そして、ロードナイトモンの後ろにあつた龍魂剣が何かに引き寄せられていくかのように飛んで行き、彼の背中に戻つたと思いきやそこへ下地が真紅の白いマントが付けられる。そして頭部のも白い装甲が追加され、胸の中央にオメガモンの紋章が現れた。一夏は目を開くとゆっくりと地上に着地した。

「ヴリトラモン……貴様、一体何をした？」

ロードナイトモンはさつきまでの態度とは裏腹に焦つた口調で一夏に問いてきた。

「……………」

「何をしたのだと聞いているのだ！」

「……俺にも分からない。でも、何となくわかる気がする。オメガモンもデュークモンのように人間の可能性を信じてたんじゃないかって。」

一夏はロードナイトモンを見る。ロードナイトモンからは一瞬一夏がオメガモンに見えた。

「おのれ……オメガモンの亡霊が！」

ロードナイトモンは咄嗟に突っ込んでくる。一夏は右腕のカイゼルバスターを展開するとガルルモンの頭部と一体化する。

「オメガ・バスター。」

一夏の右手の銃口が火を噴いた。膨大なエネルギー破はロードナイトモンの体を焦がしながら後方へと飛ばしていく。

「ぬぬぬぬぬぬ!!馬鹿なああああああ!!」

ロードナイトモンは瓦礫にぶつかったおかげでエネルギー波から離れることができた。しかし、彼の顔に右半分は見事に黒く焦げていた。

「おのれええええ!人間風情があああああ!!」

ロードナイトモンは怒りながら一夏に襲い掛かる。

デジラボ

日本

「鈴、セシリア！逃げ遅れた人たちは？」

「探し回ったけどどうやらみんな終わったみたいよ。」

「私達の方ももう大丈夫ですわ。」

一夏がロードナイトモンと戦っている間に箒は進行していたナイトモンたちの撃退し、鈴やセシリアもすでに逃げ遅れた人たちの避難を済ませていた。後は簪と楯無だがこのまま一夏と合流するつもりだ。

「しかし、日本政府は一体何をしてたのだ？このぐらいの規模なら部隊が出撃してもおかしくないのに・・・」

「もしかして、ボーデヴィツヒさんが言っていたデユノア社の攻撃に出動して残っていなかったのでしょうか？」

「もしくはあのデジモンの数にビビって見て見ぬふりをしたって言うのもありね。」

三人はそう言いながら一夏が言った方角へと飛んで行く。

「おーい！みんな！」

そこへエアロブイドラモンが合流する。

「ブイモン！一夏は？」

「今、ロードナイトモンと戦っている！俺は兄貴の頼みで兄貴の友達を避難所近くまで連れて行ったところなんだ。」

「ロードナイトモンって……昨日のエグザモンと同じロイヤルナイト!？」

「それは不味いですわ！ほっといたら一夏さんが！」

「みんな！急いで一夏と合流するぞ！」

箒たちは急いで一夏の元へと向かった。

カイゼルグレイモンVSロードナイトモン

「うおおおおおおお!!」

ロードナイトモンは高速で移動しながら一夏を斬りつける。その残像はさつきとは比べようがなく遠くから見ればロードナイトモンは十人に見えるぐらいだった。しかし、一夏は掠りもせず避け続ける。

「何故だ……何故当たらないのだ!!」

ロードナイトモンは一夏に向かってアージエントファイアーを打ち込む。すると一夏はグレイモンの籠手から剣を展開し、受け止めた。

「ぐぬっ!？」

「不思議だ……今まで見えなかった動きが見える。これもオメガモンの能力なのか？」

一夏は不思議そうに剣を見る。剣はオメガソードの頃に比べオメガモンのグレイソードとほぼ変わらぬものへと変化していた。一夏は龍魂剣を引き抜くと二刀流で

ロードナイトモンを斬りつけ始める。ロードナイトモンは大量の残像を形成して挑んでいくが一夏のスピードは徐々に速くなっていった。

「馬鹿な……この……一時的にはいえ、スレイプモンに匹敵するほどの私の動きについて来るようになるだ！」

「はああああ!!」

一夏は高速でロードナイトモンの体を斬りつけていく。一つ、また一つとどんどん傷は増えていく。

「認めん……こんなこと……絶対に認めん！」

「ダブルソードスラッシュ!!」

一夏は両方に剣に力を籠め、ロードナイトモンの体をバラバラにしてしまった。ロードナイトモンは首だけになっても言い続けた。

「私が……負けるなどと……そんなことは……」

やがてロードナイトモンは消滅した。一夏は戦いが終わったと感じると剣は元の姿に戻り、一夏も通常の形態へと戻っていった。

「……それにしても一体何だったんだあの姿は？オメガモンの力を使えたって言うのは確かかだけ。」

一夏は不思議そうに剣をデジヴァイスに戻した。

「一夏！」

それと同時に箒たちの声が聞こえてきた。

デュノア社 社長室

「・・・・・・・・・・またあの時の夢か。」

ドウフトモンはゆっくり目を開けながら明かりを付けていない部屋を見る。あまりにも静かだった。

「オニスモンの鳴き声が聞こえんな……ISを身に纏った愚かな人間共を捕食して満足して眠っているのか、それとも誰かに倒されたのか……人間とは本当に醜い生き物だ。」

そう言うと彼は机から離れ社長室の隣の部屋のドアにパスワードを入力し、中に入る。中には一人の男性が眠り続けていた。意識が戻る様子もない。

「……マーク、君はかつて私に人間の可能性を説いてくれた。人間に秘めたる可能性を。しかし、私はイーターの実態を調べるために君の世界に来た時、私は絶句したよ。君の言う人間とこの世界の人間、同じ人間のはずなのになぜ人間は薄汚い考えしか持たぬようになったのだ？ 女尊男卑、IS……すべてが狂っている。その世界の中で君は疲れ切り、倒れた。だから私は思ったのだ。」

ドウフトモンは眠り続けるマークの顔を見ながら言う。

「君を……まで追い込んだ世界を徹底的に破壊すると……君が安らかに眠れるように。」

日本 避難所

ロードナイトモンが倒されたことにより、ナイトモンたちは撤退していった。一夏は一緒に避難したデジモンたちが迫害されていなか心配だったが行ってみると弾たちが説得したのか、幼年期デジモンなどはいじめられている様子はなかった。

「それにしても一夏がなかったという姿、本当にこの剣と関係しているの?」

鈴は一夏から借りた剣を見ながら言う。どういう反動であの姿になれるのか正直一夏にもよく分かっていなかった。鈴は不思議そうに剣を見た後一夏に返す。

「弾たちの方も無事だと分かったから後は簪たちの方だな。」

「ついでに申しますと五反田さんたちの家も無事でしたわ。」

「そう言えば簪たちの方はまだだったな。」

一同が話している中、楯無たちが戻ってきた。楯無はともかく簪はいろいろ疲れたという感じだった。

「どうだったんだ?」

「両親は軽傷で無事だったわ。でも、一つ気まずい情報があるわ。」

「どういうことだ?」

「デュノア社の攻撃に向かった日本のIS部隊が全滅したそうなの。」

「なんですって!」

鈴が大声で言うのを全員で口を塞いで止める。

「ムガガガ……」

「鈴は大声出し過ぎだよ。」

「とにかく学園に戻りましょう。織斑先生とボーデヴィツヒさんのことも気になるし。」

「あの御神楽さんって言う人ならロイヤルナイツについてももつと詳しい情報を知っているかもしれないし……」

「御神楽？あの朝いた不思議な雰囲気を感じさせた人か。」

「一夏さんも疲れているようですし引き上げましょう。」

「俺たちもくたくただしな。」

そう言うと全員学園へと戻っていった。

ドイツ ドイツ軍基地

帰還したラウラたちは軍の上層部に現状を報告した後、基地の格納庫で休息をとっていた。今まで遭遇もしたことない敵に隊員たちは暗い顔をしたまま重苦しい空気が続いていった。

「……まさか、世界各国の精鋭があの一体の巨大なデジモンでほぼ全滅するとはな……」
ラウラはコーヒーを飲みながら言う。ガブモンは申し訳なきように基地の端で体育座りをしていた。そこへ上層部へ行っていたクラリツサが戻ってきた。クラリツサは座っているガブモンを見るとやつと笑って悟られぬように近づくと思いつきり抱き付けて来た。

「えいー！」

「わ、わあああああ!?!」

いきなり抱き付かれたガブモンは声をあげながらクラリツサから離れようとする。いきなりの出来事にコーヒーを飲んでいたメンバーは思わず吹き出してしまった。

「な、何をやっているんですか!?!お姉様！」

「ふふふ、あんまりにも暗いもんだからちよつと明るくしようかと思つてね！」

「が、ガブモンで遊ぶんじゃない！」

ラウラは落ち着こうとしながら注意する。

「隊長も隊長ですよ！隊長がすっかりしなないとこの子も自分のことを考えて暗くなっちゃうんですから気をつけてください！」

クラリツサはガブモンを降ろすとラウラの方に向かって書類を見せる。ラウラはしばらく読むと頭を傾げる。

「世界各国の首脳会談でデジタルモンスターへの和平交渉だと？しかもこのことは我が祖国を含める一般市民には極秘だと？」

「今回の作戦でデジタルモンスターに対してはISも含める現存兵器は無力だと判断して出のことだそうです。それに女性権利団体にまで知られると何を引き起こすのか分かりませんので。」

クラリツサは悔しさを隠しながらも答える。

「ゴメン、ラウラ……俺たちのせいであんなことになっちゃって……」

ガブモンはしょんぼりしながら言う。ラウラはガブモンを抱きかかえると落ち着かせるように背中をさすった。

「お前のせいじゃない。悪いのはあのロイヤルナイツだ。お前が責めることはない。」

「……しかし、これからどうするかが問題だな。」

今まで隣で黙っていた千冬は首をかしげながら言う。

「それはどういうことですか？織斑教官。」

「奴らは自分達の計画はまだ遂行できる段階じゃないと言っていた。それに気になるのは奴はまだ日本以外を攻める様子を見せないことだ。やる気になれば世界各国を攻め落とすことも簡単なはず、それをしないということはまだ何か足りないということだ。」

「つまり、今の奴らはまだ行動に何らかの制限がある？」

「まだ私の直感であるが……お前なら何か知っているんじゃないか？クレニアムモン。」

千冬は自分の持っているデジヴァイスを見ながら言う。中には後ろを振り向いて答える様子がないクレニアムモンと困った様子のジエスモンがいた。

「……………」

「まあ、見た感じどうやらその様だ。」

「まだ我らにもチャンスがあるということですね！教官。」

ラウラも明るさを取り戻して言う。そのとき、基地の通信機に着信が入った。隊員の一人がとるとすぐに千冬とラウラ宛てだと言った。通信を受け取ってみると相手はミレイだった。

『ごめんなさいね、極秘回線を使っているものだからあなたたちに出て欲しかったの

よ。」

「は、はあ。それで私達に何の用で？もしかして一夏たちに何か・・・」

『いいえ、彼の方は無事、ロードナイトモンを撃破したわ。』

「本当か！それは!?!」

『ええ、紛れもない事実よ。やっぱり彼は私の見込んだ通りの人だった様ね。』

「見込んだ通り？」

『その話はいいわ。それよりもあなたたち、デジヴァイスは？』

「ここにあるが？」

『それを基地の端末に接続してくれないかしら？』

「わ、分かった。」

二人は端末をデジヴァイスに繋げる。すると二人はスクリーン吸い込まれるように消えた。

「隊長と織斑教官が消えた!!」

「!!」

「ラウラ〜!」

『かつてに人が死んだようなことを言うな。』

スクリーンにラウラと千冬の姿が映る。隣にはミレイの姿もあった。

「隊長！これは一体どういうことですか!？」

『これはデジヴァイスを利用して学園のネットワークコンピュータにある「デジラボ」に転送できるようにしたの。簡単に言えばネットワークを利用した瞬間移動、またはテレポートと言ったほうがいいかしら?』

「つまり、いつでも日本にいる一夏たちと合流できるということ?」

『そう言うふうになるわ。』

『ガブモン、私は教官ともう少しこのデジラボについて聞きたいからしばらくその基地で待っていてくれ。』

「え〜!」

『クラリツサ、しばらく頼む。』

「了解しました。」

クラリツサは通信を切ると笑顔でガブモンに迫って来る。それ顔に何故かガブモンは不気味さを感じた。

「あ、あの・・・」

「さあて、隊長に任されたのはいいいけどさつき抱き付いて気持ちよかったからもう一度抱き付かせてもらっていいかしら?」

「え?」

「お姉様だけずるいです！」

「私達にも抱かせてください！」

隊員たちはまるで獲物を取り合うかのように睨み合う。ガブモンはその中で三つの選択肢を考えた。

この中から一つ選びなさい。

- ①賢いガブモンはこの隊員たちから逃げきれぬ名案を思い付く
- ②ラウラが戻ってくるまでとにかく逃げて待つ
- ③このまま大人しく全員に抱き付かれる 現実には非情なり！

「.....②。」

ガブモンは隊員たちが揉めあっているうちに逃げた。この後、ラウラが戻ってくるまでガブモンとシュヴァルツェ・ハーゼ隊による「逃走中」が繰り広げられるのであった。

リナ登場! ブイモン対ブイブイ

翌日 I S学園 会議室

「あ、千冬さ……じゃなくて織斑先生が戻ってきた!」

会議室で昨日の疲れを癒した一夏たちの元にドイツから戻ってきた千冬が来た。

「今、帰った。ボーデヴィツヒは祖国の防衛と言う理由でデジラボで別れた。」

「そうですか。」

「みんな揃ったようね。」

そこへミレイとシャルロットたちが来る。

「ミレイ、それにシャルのお母さんまで……どうしたんですか?」

「実は今後の計画について伝えようと思ったのよ。なんだと思う?」

「……とりあえず街のいるデジモンの保護とかですかね? それにいつロイヤルナイツが攻めてくるか分からないし。」

「その逆よ、寧ろこっちから攻めるの。」

「え!? ちよつとアンタ正気!? 向こうにはあのエグザモンが待ち構えているのよ!」

ミレイの言葉に鈴は思わず声をあげる。これはエグザモンと直接戦った鈴だからこ

と言えることだった。

「そのことに関しては大丈夫よ。彼らにあなたたちの特訓に付き合ってもらおうから。」

「彼ら？」

箒たちがミレイの後ろを見るとそこにはデュークモン、スレイプモン、ガンクウモンがいた（ついでにシスタモン姉妹）。

「……つまり、ロイヤルナイツを倒すにはロイヤルナイツにトコトン鍛えてもらわなければならないってことなの？ 母さん。」

「そう言うこと。」

シャルロットの質問にノエルはニツコリと答える。ちなみにアルファモンも付き合うことになっている。

「じゃあ、俺も……」

「いいえ、貴方には別のことをしてもらおうわ。」

箒たちと一緒にデジラボに作られた特訓場へ行こうとした一夏をミレイが止める。

「え？ 俺もやるんじゃないんですか？」

「貴方ももちろんやってもらうけどその前にそのチビちゃんの相手が別の場所にいるのよ。」

「俺の相手？」

ブイモンは首をかしげながら言う。ミレイはブイモンの所に来るとしやがんでブイモンを見る。

「貴方には彼のように他のデジモンとは違う何かを秘めている……それを引き出す可能性を作り出すには最終進化をする必要があるの。」

「最終進化? 俺の最終進化って……」

「その答えを知るためにも彼女に会う必要があるの。あなたの先輩と言ったほうが正しいかしら?」

「その人はどこにいるんです? ミレイさん。」

一夏が質問するとミレイはマステイモンにゲートを開かせる。

「彼女ならもう呼び出しておいたわ。」

「呼び出した?」

「もうすぐ来るわ。」

ミレイがそう言うのとゲートの中から胸元からヘソまで大胆に開いた黒のパーカーに黒と白のビキニにスパッツ、そして首にはゴーグルを掛けている緑色の髪をした一夏たちと同じぐらいの歳の少女がパートナーと思われる聖騎士型デジモンと共に出てきた。

「もう……やっぱりの移動方法イヤ!」

「リナ……そう言うこと言わないでよ。それに頼まれて引き受けたのはリナなんだよ。」

「そんなこと言ったってこのトンネル移動するとなんていうか……フワア〜って言うか、ビューーン！って言うか、とにかくなんかすり抜けていくような感じで気味が悪いの！大
体ブイブイの後輩教育とかって言ったもんだから……」

「……ミレイさん、まさか相手って……」

「紹介するわ、彼女は四ノ宮リナ。あなたの世界とはまた別の世界のブイモンをパート
ナーにしていた少女よ。」

「……どう見ても相手をしてくれそうには見えないんですが？」

「見た目はあんな感じだけどやるときにはやる娘よ。」

「えーっと、きみがおりむ……」

「織斑一夏だよ、リナもいい加減覚えなよ。彼に失礼だよ?」

「そんなこと言ったって、名前がすんごいわかりづらいんだもくん!」

「あの……そろそろ始めさせてもらってもいいか?」

「オーケー、オーケー! 一つ一つでもいいよ! それじゃあブイブイ、やっちゃってください!」

リナと名乗る少女はパートナーのアルフォースブイドラモンことブイブイに言いながら何故か自分も構えを取っている。一方の一夏もブイモンをエアロブイドラモンに超進化させて準備をする。近くにはミレイが見張っている。

「それじゃあ、リナの方は倒れたら終了。一夏の方は進化が解けたら終了、それまでは一切試合は中断しないわ。いいわね?」

「ダイジョーブだって! 言っておくけど私とブイブイはチョー強いからね! きみもガンバってね!」

「チビ、お前の力がどれだけのものなのか見せつけてやれ。」

「わ、わかった……(ゴクリ)」

エアロブイドラモンはブイブイと正面で向かい合うが明らかに向こうの方が実力は上だった。でも、このまま引き下がったら面目ない。

(何とかして攻略方法を見つけないと・・・)

「ちよつと君・・・なんかすごく神経質な目になっているようだけど大丈夫？」

「だ、大丈夫です・・・」

どう見てもそうには見えないと言いたかったブイブイだったが敢えて黙っておくことにした。

デジラボ訓練所

「つまりどういうことなんだ?」

箒はガンクウモンを見ながら言う。

「簡単なこと、お前たちの最初の試練、それはシスタモン達から三時間逃げ切ることだ。三時間逃げ続けることができればお前たちは次のステップとして我らの特訓を受ける。しかし、もし途中で降参すれば彼女たちの特訓を受けてもらう。」

「どっちにしても特訓としか聞こえないんだけど……あの二人成長期と成熟期じゃなかったの?」

「あまり舐めないほうがいいと思うけど……」

千冬の隣でジエスモンは冷や汗を掻いて言う。

「どういうことだ? ジエスモン。」

「師匠が姉ちゃんたちを相手に選んだということはあのとつておきあれを使わせるということなんだ。」

「とっておき?」

「見ればわかるよ。俺の修行時代味わった悪夢を……」

ジエスモンは心配そうに箒たちを見る。シスタモン達は武器の状態を確認すると箒たちの方を見る。

「私と姉さんの準備は整いました。皆さんも早く専用機とパートナーを進化させてください。」

「本当にいいのか?」

「ええ、構いませんよ。」

そう言われると箒たちは専用機とアグモン達を進化させる。

「よし! さつさと三時間済ませて次の特訓に入るわよ!」

「鈴、やるときはやるね。」

真面目な鈴にラピッドモンはからかいながら言う。

「向こうも準備できたようだしこっちもやるわよ、ブラン。」

「うん。」

シスタモン姉妹は被り物を深く被る。するといきなり爆風が発生した。

「な、なんだ!」

「何が起こりましたの!」

しばらくして煙が晴れるとそこには姿がかなり変わったシスタモン姉妹が立っていた。面影は多少あるがそれでも体形が大人に近づいていることと若干人間の要素が薄まってデジモンと言ってもおかしくないぐらいのものになっていた。それよりも一同が感じたのは二人の異常な殺気であった。

「覚悟しなさいね♡この状態になったらさつきまでの私達とは違って優しくから♡」
「対象確認、殲滅する。」

さつきまでの態度とは違い、ノワールはどう見てもドS的な女性の口調にブランは戦闘マシンのような口調に変わっていた。一同は恐怖を感じた。

「………こんなときにボーデヴィツヒさんがいてくれたら心強いのに……」

「簪ちゃん、それは言っちゃいけないことよ。」

「あ、悪魔ですわ……」。

その後、箒たちが30分で降参したのは言うまでもなかった。

デジラボ 特別闘技場

「はあああああ!!!」

「遅い!」

エアロブイドラモンの突進はブイブイの腕の剣で弾かれ、エアロブイドラモンは一旦間合いを取る。

「ドラゴンインパルス!」

「シャイニングVフォース!!」

本来なら威力が上のはずのブイブイの攻撃をエアロブイドラモンは何とか防ぐ。

「はあ……はあ……はあ……」

「ちよつときみ……スつごく疲れてない?」

特訓を初めて既に一時間以上が過ぎていた。エアロブイドラモンは極限にまで体力を消費し、かなり疲労していた。今まで数多くのデジモンを見てきたリナであったがここまで究極体を相手に互角に戦ったデジモンは初めて見た。

「きみが強いのはよおくわかったからさ、ね? いったん休憩しない? 流石にこれ以上やるとなんか危なそうだし……」

「俺は……弱かった……」

「え?」

「俺はずつと兄貴の背中を見てきた……何年も。でも、兄貴がどんどん強くなつていくのに対して俺はいつまでも置いて行かれっぱなしだ。何度も兄貴とも戦ったことがあるし……アグモン達とも一緒に戦った。でも何かが足りないんだ! あと一歩のところで何かが足りない! ジエスモンの時のような何かが!」

エアロブイドラモンは跪きながら言い続ける。

「俺はどうしても強くなりたい! このままだったら兄貴の足手纏いになつちまう! だからどうしても……」

「バッカモン!」

「グハツ!!」

エアロブイドラモンはいきなりリナから強烈なライダーキックを喰らわされる。

「何するんだよ!」

「リナ! いきなり攻撃するなんて……. どういう意味で……. . .」

「なんとなく!」

「はあ!」

「だつてさくきみ考えすぎなんだもん。あたしは難しいことを考えるのとか苦手だけどさくやるときはとことんやるつて決めているんだよね。それは昔もそうだし今だつて変わらない。」

「考えすぎつて……. アンタはこの世界の抱えている問題を!」

「ダイジョーブだつて! 私もミレイの頼みであつちこつちの世界に飛んだことあるけどどんなにピンチになつても必ず切り抜けてきたんだから! ねえ、ブイブイ。」

リナは笑いながらブイブイに言う。

「確かりナは普段はこんな感じだけどやるときはトコトントレーニングしたりしてきたんだ。君だつて自分の力を信じれば必ずどんな相手にも負けない。」

「自分を信じる……. そう言えばあの雪山でも!」

エアロブイドラモンは思い出したのかのように立ち上がる。

「俺が初めてアーマー進化したときも兄貴の力になりたいという勇気があったからこそ進化することができた! 勇気、それは怖さを知ることツ! そして、恐怖を我が物にする! そうすればどこまでも強くなれる!」

エアロブイドラモンは戦意を取り戻して再びブイブイに攻撃を始める。ブイブイも応戦するがラツシユの速さが徐々に加速していることを悟った。

「(このままじゃ・・・やられる!) シャイニングVフォース!」

ブイブイはエアロブイドラモンに向かって胸からVマークの光線を放った。ここでいったん避けた隙を利用して時間を稼ごうと考えたからだ。

しかし、エアロブイドラモンは突っ込んで行つた。膨大は光を収束したエネルギーの中へと自ら入っていったのである。そして、彼は光の中を川を泳ぐ魚のように移動して行く。

「えく!! ちよ、ちよつとくあんなのアリ!?!」

リナが驚いている間に影は徐々にブイブイの方へと向かって行く。そして、光の中から出たときその中にはブイブイと酷似した金色の聖騎士がいた。

「なっ!?!」

「オラー!」

聖騎士はブイブイの顔を殴る。

「は、速い!!」

「はああああああああ!!」

聖騎士の拳のラツシユが連続で続き、ブイブイを吹き飛ばした。リナは一瞬茫然としていたが一夏は腕を組んだまま黙っていた。

「まさかとは思ったけど……彼ら、ひよつとしたら私が見込んでいた以上にすごいコンビかもしれないわね……」

「……………」

一夏は聖騎士と化したブイモンを見る。その目は純粹そのもので強い闘志を燃やしていた。

デュナスモンの記憶

デジラボ 訓練所

ブイモンを究極体に進化させることに成功した一夏はリナとブイブイと共に箒たちの方へと来た。

「……………」

「ほらほら♡早くしないとまた撃つわよ♡」

「「はあ……………はあ……………」」

目の前にある光景はノワールに調教と言われてもおかしくない猛特訓が行われている、箒と簪、楯無を除いては既にそこら辺で死体のように伸びていた。

「うつわく、あそこまで猛特訓するなんて……………流星のあたしもあそこまでやったことないわ……………」

リナは驚きながら言う。一夏は唾然と思いつつも倒れている鈴に声を掛ける。

「おい、鈴。大丈夫か？」

「あ、ああ……………一夏……………時が見え……………」

「……………だめだこれ。」

一夏は鈴を寝かせると近くで特訓の様子を見ているガンクウモンたちの方へと歩いて行く。ちなみにリナは倒れている鈴たちにちよっかいを出して遊んでいる。

「……その様子だと第一難問は突破できたようだな。」

「ああ、チビは成長できた。次は俺の番だ。」

「では次はこのデュークモンがお相手いたそう。」

そこへデュークモンがパイルドラモンに止められながらやって来た。

「ちよつと待っててください、デュークモン！あなたはまだ寝てなければだめですよ！」

「そういうわけにもいかん。このデュークモンには稽古を付けねばならぬ理由がある。」

そう言うデュークモンは一夏の前に来る。二日前の戦闘で体にギプスを付けていて、明らかに重傷に見えてしまっているが目の闘志は燃え上がっているように見えた。

「織斑一夏、次はこのデュークモンとの一騎打ちの修行に付き合ってもらおうぞ。」

「あ、ああ。（大丈夫なのかよ、これ）」

デュークモンの指示の元、一夏はブイモンをその場においてまた別のエリアへと行く。そこはさつきとはまた違う無重力の空間だった。

「では織斑一夏、貴様はあの姿……オメガモンの力を受け継いだ姿を今どのぐらい維持できてる？」

デュークモンが先に前を行き、一夏に問う。

「どのくらいって……まだそんなに長くは維持できない。長く持つても3分が限界だな。それ以上続けると体に持たない可能性がある。」

「そうか、なら……」

デュークモンは体のギプスを全部外し、聖槍「グラム」と聖盾「イージス」を構える。一夏も何となく納得したのかカイゼルグレイモンの姿へとなる。

「ならばこのデュークモンの相手をしてもらおう。我らロイヤルナイツは何度も同じ偶然を与えるほど生ぬるいものではない！死ぬ気で戦わねば命を落とす！いつでも同じ、いや！それ以上の力を引き出さねばならぬのだ！」

「なるほどな。でも、何度も言うがアンタの体は大丈夫なのか？」

カイゼルグレイモンは龍魂剣を引き抜いて構える。

「このぐらいの傷で動けぬようなら長年ロイヤルナイツはできぬ。このくらいなら貴様にいいハンデだ。」

「そうかい、俺も舐められたものだな。だったらこっちは初めから本気で行かせてもらうぜ！」

「そうだ！その意気でかかってこい！」

「うおおおおお!!!」

カイゼルグレイモンはデュークモンに向かって行く。

???

どのくらい昔の夢なのだろうか・・・

「ん？もうこんな時間か？」

私、いや僕は目を覚ましながら起き上がる。日はすっかり昇り、目の前には川が広

がっついて綺麗な水が流れていた。そしてその向こうには一人の赤毛の少女が水遊びをしている。僕はその光景を楽しげに見ていた。

「綺麗だな……」

それが僕の彼女に対する第一印象だった。

出会いは本当に偶然と言ったところだった。僕が夜の道を歩いて……と言うよりも浮いて自分の寢床に行っていたところを偶然彼女が現れて大騒ぎだった。そのときはひどかったなく僕のことを蠟燭のお化けだって言っただ。まあ、僕キャンドモンは確かに見た目は蠟燭だけだ。彼女にどこから来たのって聞いたら自分でも覚えていないって言われてしまうがなくしばらくついて行ってやることにしたんだ。

そんなこんなでそれが今に至っているということ。彼女はしばらく水遊びをしていると僕の方へと寄ってきた。

「キャンドモンは遊ばないの？」

「僕は蠟燭だよ？入ったら死んじゃうよ。」

「え、残念だな。」

彼女はそう言うのと僕の隣に座った。僕は何か分からなかったけど彼女に隣に座られると恥ずかしく感じた。

「あのさ……エリザって、どこから来たの？」

「フランス！」

「ラ・フランス？」

「違う！フ・ラ・ン・ス！」

僕はこの少女エリザをよくからかった。この頃は一番楽しかった。

それから三日ぐらいしてエリザは偶然開いていたゲートを見つけて自分のお家へと帰っていった。そのときは「また一緒に遊ぼうね〜！」と言う言葉を僕に送った。なんか照れ臭かったな……。

それから僕とエリザはパートナーになった。どんな時もどんなにピンチになっても一緒に乗り越えていく。それはいつの間にか僕たちの合言葉になった。僕は一緒に旅をしているうちに彼女のことを好きになり、好意を持つようになった。綺麗な人だと言うのは勿論、彼女の優しさと明るさが僕をより惹かせた。

でも、その思いは届くことはなかった。

彼女は人間、俺はデジモン。種族としてあまりにも壁が大きすぎた。それと彼女に行ったら拒絶されるのではないかと思いついても言うことができなかった。

彼女が13になった時二人の友達を連れてきた。マークとノエルって言う人でとてもいい人だった。パートナーはドルモンとガオモン。旅のメンバーが増えて楽しいことがいっぱいあった。それと同時に僕はエリザの思いを知った。

彼女はマークに恋をしていた。
シヨックだった。

僕の心はこの瞬間一気に壊れ、彼女といるだけで心苦しくなった。

僕は彼女の次の誕生日の時彼女にコンピを解消しようと言った。理由は聞かせたくないって言ったら彼女は何も聞かないでくれた。やっぱり彼女は優しかった。それだけはよかった。

僕はその後デジタルワールドを放浪した。ウィザーモンに進化しても、ミステイモンになってもずっと……。

それから何十年（彼女にとっては約十年ぐらい）、私は龍の姿に似た姿になってイグドラシルにスカウトされ、ロイヤルナイツにメンバーとなった。彼女を忘れられない私にとってこれは過去を忘れられるいい機会だと思った。偶然、そのとき懐かしい仲間に出会った。それはドウフトモンへと進化したガオモンだった。私たちは久しぶりに楽しい会話をした。まるで昔に戻ったのかのように楽しい時間だった。だが謎が一つあった。ドルモンのことだ。彼もエリザたちと別れたとき別の道を行ったそうだがドウフトモンも会っていないらしい。

その数年後、デジタルワールドでイーターと言う得体の知れない物が現れた。最初の頃は数体の個体だけの目撃だったが年を重ねるごとにその個体数は急激に増えていった。私たちロイヤルナイツは直ちにイーターを駆除するために行動を開始した。しかし、その頃にはすでに奴らはデジタルワールド中に範囲を広げていた。

イグドラシルはその原因を人間界にあると判断した。私とドウフトモンは啞然とした。ドウフトモンは人間界に自分から調査を行うと志願した。許可を得ると彼は「マークならきつと人間が無実だと証明してくれるはずだ。」と言って行った。本当なら数日で戻るはずだった。だが彼は戻ってきたとき悲しげな顔をしていた。彼はイグドラシルへの報告をこう言った。

「人間はやはり害を為す者です。この危機を打破するには殲滅もどうかと。」

私はこの言葉を聞いたとき衝撃を受けた。彼はパートナーを裏切ったのかと。でもそれは違う。彼のパートナー、マークは女尊男卑という急激に変化した人間社会に耐えられなかったのだ。そして、度重なる疲労で倒れた。後から聞いた話では目を覚ます可能性は低いと言う。パートナーを失ったも同然のドウフトモンはこれを機に人間への憎悪を募らせた。自分のパートナーをここまで追い込んだ人間は全て悪だと。

それからすぐにイグドラシルは人間界の壊滅を下した。私に最初に与えられた任務はノエルの抹殺だった。手が震えた。何故かつての仲間を撃たねばならないんだと。でも、ドウフトモンは冷徹な目で言った。

「人間は全て善人と言いながら実はその皮を被った欲のためなら手段を択ばぬ獣に過ぎん。要は獣を狩ると思えばいいのだ。」

かつてガオモンの時はあんなに人間のことを信じていた頃の彼はもう既にそこにはいなかった。私はやむを得ず彼女の乗った車を爆薬を積んだトレーラー（プログラム操作した物）と衝突させて爆破した。彼女の憐れな亡骸は見たくない。そう思ったうえで判断だった。それから私は悟った。エリザを自分の手で葬らなければ私の過去と言う名の呪縛は解けない。新しい自分になるにはそれしかないことになるにはそれしかない

いと理解した。この心にいつまでもへばり付くあの思いを消すためにも。
デジモンと人間は恋などできないのだから。

デュノア社地下

「……う、また見てしまった。」

デュナスモンは頭を掻きながら目を覚ます。デジタルウエイブ発生装置の再調整のために地下に戻ってそのまま眠ってしまったらしい。

「私としたことが居眠りをしてしまっていたか。こんなところをドウフトモンに見られたら大変だった……。」

彼はすぐにシステムの再調整に入る。彼の座っていた席には小さい頃のエリザと成長期時代の彼が並んで写っている写真が置かれていた。戻ることのできない時代は口では言っても忘れることのできない記憶なのだ。

一か月後 ドイツ軍基地

「みんな、よく聞いて欲しい。この一か月間、我らシュヴァルツェ・ハーゼ隊はデジタルモンスターの拠点であるデユノア社の攻略のために密かに計画を進めてきた。」

ラウラは部下たちに向かって作戦を伝えていた。その途中でゲートが開き、一夏たちがやって来た。彼らは一か月間の特訓を終え、ドウフトモンたちロイヤルナイツを倒すためにデユノア社に攻めることにした。

「我らシュヴァルツェ・ハーゼ隊は、彼らをデユノア社近辺まで護送し、待機。隊では私とクラリツサが前線に向かう。残りの者たちは作戦開始から48時間経過して私かクラリツサのどちらも戻ってこなかった場合は戦死として扱い本国に撤退せよ！この作戦に異議を唱える者は前に出ろ！」

反論する者は誰もいなかった。ラウラはそれを確認すると一夏たちの方を見る。「見ての通り、準備は整っている。作戦はいつでも開始できる。」

「初めて見るけどやっぱりラウラって軍人なんだな・・・隊長としてのお前、十分迫力があるぜ。」

「それは褒め言葉なのか？」

「まあ、褒め言葉だと思ってくれ。」

「一夏はそう言うのと輸送機に乗り込む。通信機の方にはミレイがいる。

「オペレーターは私がやるけどよろしいかしら？」

「構いません、どうぞ。」

隊員は席を譲り、ミレイは確認をしながら操作する。

「エンジン、及び機器に異常なし！」

「では出撃する！この作戦は最悪な場合、命を落としかねない！みんな、すまないが私に命を預けてくれ。」

「了解！！」（隊員一同）

輸送機が発進する。

目指すはドウフトモンの本拠地、デユノア社。

今、ロイヤルナイツとの決戦の火ぶたが切られようとしていた。

一夏たちの大作戦

フランス デュノア社 近辺

「隊長、目標エリアに到達しました。」

「よし、出撃準備！」

ラウラの指示の元、箒たちは専用機を展開し、パートナーたちを進化させた。

「これより私とクラリツサは彼らと共にデュノア社に接近、内部に潜入した上に敵の作戦の要と思われるものを破壊。そして、奴らを叩く！」

「隊長、お気をつけて！」

隊員たちは全員敬礼をする。ラウラも敬礼すると全員地上へ降下していった。

「ここからデュノア社までは1km。全員気をつけて接近してデュノア社に乗り込むぞ。ミレイ、ナビゲートを頼む。」

『わかつているわ。でも地上からの移動だと建物の物陰とかで丸見えね。ここは二班に分けるわ。地上から移動して相手の目を欺く班と地下水路から侵入を試みる班。この二手に別れて行うわ。班分けは、地上を……』

「御神楽ミレイ、そのことに関しては私の分けたチームにしてくれないか？」

『何かしら？ボーデヴィツヒ隊長。』

「地上波おそらくエグザモンが出るはずだ。そこで地上は私と嵐、オルコット、織斑先生、生徒会長。地下を移動するのは一夏、篠ノ之、デュノア、更識で分ける。クラリツサは一夏の方に行ってくれ。後、作戦上ではデュークモンたちも駆けつけるのだったな？」

『ええ、今クロエたちが別ルートで向かっているわ。ただマステイモンのゲートを通るのは違って、合流には時間がかかるかもしれないわね。』

「了解した。そのときは彼らにも指示を出してくれ。」

『今、一夏たちの端末に地下水路のマップを転送したわ。くれぐれも気をつけて、健闘を祈るわ。』

そう言うのとミレイは通信を切る。それと同時に箒たちは一旦ビクトリーグレイモンたちをアグモンに戻してデジヴァイスにしまい、専用機を待機状態に戻した後、カイゼルグレイモンの体の上に乗る。

「それじゃあ、お互い気をつけて行こうぜ。」

「ああ。ではクラリツサ、一夏たちのことを頼む。」

「了解、では隊長も教官たちと共にお気をつけて。」

そう言うのと一同はそれぞれの場所へと別れて行った。

デユノア社 社長室

ドウフトモンは社長室から地上のあちこちに偵察に出しているエアドラモンに付けたカメラからラウラたちがこちらに向かってきているのを確認していた。

「ふん、全く人間というものはあきらめが悪いときたものだ。大人しくしていれば地獄を見ずに済んだものを……」

ドウフトモンは通信回線を開く。

「エグザモン、お前に丁度いい獲物がこつちに向かってきているぞ。相手をしてやったらどうだ？」

『何？あの小僧共、もう来やがったか！面白い、丁度腕がウズウズしておったところだ！』

エグザモンは嬉しそうに答える。ドウフトモンは次にメディーバルデュークモンに繋げる。

「メディーバルデュークモン、貴様はエグザモンは逃がした場合に備えて途中の階の守りにつけ。」

『……了解した。』

「デユナスモン、お前は万が一に備えてデジタルウェイブ発生装置の護衛に回れ。あれが破壊されたら元も子もないからな。」

『分かった。』

「さてと。」

メンバーに命令を下した後ドウフトモンは昏睡状態になっているマークを人が丁度入るぐらいのカプセルへ収納させる。そして、ゲートを開きどこかへと運び込んでいった。

「もうすぐだマーク。これは君をここまで追い込んだこの世界の人間への復讐であり、我らデジモンの救済するための措置でもある。君が安らかに眠れるよう私はこの世界の薄汚い蛆虫どもを一掃する。それまで地下で待っていてくれ。」

ドウフトモンは目を開けることにはないパートナーを入れたカプセル地下へ移動させた。そして彼はデュノア社の屋上へと向かう。

「取るに足らんムシケラたちよ、このドウフトモンの計画を邪魔しようとする者がどれほど恐ろしい末路が待っているのか楽しみにしているがいい。」

地下水路

「こつちの方向で間違いないな。」

一夏たちはミレイのマップを確認しながら移動していた。

「一夏、お前はこの戦いの後どうするつもりなんだ？」

「なんだよ箒？いきなり。」

箒の突然の質問に一夏は言った。

「いや、だってデジタルワールドはイーターという奴にやられているのだろうか？もしこ

ここでドウフトモンたちを倒したとしてもデジタルワールドは……」
「箒、今は目の前のことに集中しよう。戦場では一瞬の迷いが命を落とすことだってあるんだよ。」

不安そうな箒にシャルロットは一喝する。箒は我ながら情けないと思った。

「すまないシャルロット、私としたことがついこの先のこと……」

「それはみんな同じだと思うよ?」

「え?」

「だってデジタルワールドは一夏の第二の故郷でもあればレナモンたちの大事な故郷でもあるし、そのことを考えるのも大事なことだと思うんだよ。だってみんなかけがえない仲間なんだから。」

「シャルロット……」

「だから一人で悩み事を抱えないで頑張つて行こう! そうすればきつとデジタルワールドも救い出せるいい方法も見つかるよ!」

「……そうだな。私もしつかりしなくては!」

箒は気を引き締め直す。それと同時に一夏は動きを止める。

「ん? どうしたの一夏? まだ目標地点までまだのはずだけど?」

「……静かに、何かがいる。」

「「え!？」」

「静かに!こんなところで大きな声を出して見つかったらすべて水の泡に・・・」

「クラリツサ、アンタも声が大きい。」

「あ・・・。」

クラリツサは慌てて口を閉じる。一夏は箒たちを降ろした後、龍魂剣を引き抜き、そつと歩いて行く。そして、剣を振り上げて見たものは

「・・・・・・・・・・」

「ぐが~~~~ぐが~~~~zzzzzz」

水路の少し空いたスペースでいびきをかいて眠っているメルヴァモンだった。

「・・・・・・・・こ、この者は確か我々が一時撤退したときに助太刀してくれた・・・」

「な、なんでこんなところで寝ているんだろう(汗)。」

「ひよ、ひよつととしてずつとここに隠れていたんじゃ・・・」

「zzzzz・・・ん?何かいると思ったら千冬の弟とその愉快的仲間たちか。」

メルヴァモンは眠そうに目を擦りながら言う。

「あんたこんなところで何やっているんだ?」

「何つて?ここを隠れ家にしてたのさ。ロイヤルナイトの奴らアタシのこと目の敵にしてさ、そのおかげでここに隠れて過ごしていたって言う訳。」

「・・・そ、そうか。」

「ところでメルヴァモンさん、あなたはデユノア社に続いている通路をご存知ですか？」
「え？通路？それなら上にあるけど。」

簪に聞かれ、メルヴァモンは上を差しながら言う。そこにはマンホールの蓋がさされていた。

「・・・冗談ですよね？」

「冗談もへったくれでもないわよ。水路のあちこちがデジタルと混ざり合っている所があちこちにあっただろう？」

「そ、そう言えばあちこちにそんなところがあつたね。」

「あれはデジタルシフトって言って現実とデジタルの世界がゴツチャ混ぜになっちゃまっているのさ。本来なら小規模にしか起きないんだけどアイツらがデジタルウェイブを強制的に発生させる装置を作っちゃったからこの辺の水路はみんなそんな感じになっちゃまっているのさ。」

「デジタルウェイブ？なんだそれは!？」

「一言で言えばデジタル情報の流れだ。」

箒の質問に対して一夏は険しい顔をして言う。

「一夏、どうかしたの？」

「不味いぞ……おそらく奴らはその装置を使って世界規模のデジタルシフトを起こすつもりだ！」

「どういうこと？」

「この間の文化祭の時、空にでっかい穴ができただろう？あれは膨大なデジタルウェイブが発生したことにより世界各地でデジタルシフトが起きたという証拠なんだ。」

「でも、この水路のような状態にはなっていないかったが。」

「おそらくだがあの時はまだその装置が未完成だったから途中で消えたんだと思う。奴らが世界各地で暴れまわらなかったのはデジタルシフトが完了していないエリアでは体力が急激に消耗してしまうからだだったんだ。現実世界で普通の人間が高山に登って息がしづらくなるのと同じように。だからシステムを再調整する時間が必要だったんだ！」

「じゃあ、もしかたデジタルシフトが発生したら……」

「おそらく奴らの活動制限はなくなり世界各地に猛威を振るい、各国の主要都市に総攻撃を仕掛ける！」

「……作戦を急がなくてはいけないな。隊長に連絡を……」

「いや、ここではまずい。通信をしたらかえってドウフトモンたちに知られてしまう危険性がある。もう既にエグザモンと交戦している可能性もあるし、俺たちが先に潜入し

て装置を破壊するしかない！」

一夏はそう言うのとマンホールから外を除く目の前にはデユノア社がそびえたっている。

「どうやらラウラたちはまだようだ。俺たちが先に潜入してその装置を破壊するんだ！ そうしなければ奴らの手で人類を滅ぶる！」

一夏はブイモンを出し、マグナアルフォースブイドラモンに進化させる。箒たちも後に続く。

「アタシは悪いけど千冬たちの方に行かせてもらおうよ。この面子だと私は邪魔者になるかもしれないからね。」

そう言うのとメルヴァモンは飛んで行ってしまった。

「クラリツサ、アンタはここで千冬姉たちが来るのを待っていてくれ。俺たちは先に入って装置を破壊する。」

「分かりました。武運を祈ります。」

「ああ。」

一夏たちはデユノア社に乗り込む。

「俺と箒はドウフトモンと戦う。そして……」

「ちよっと待って。」

「どうしたのシャルロットさん？」

「そのデジタルウェイブを起こす装置は多分地下の方にあると思うんだ。」

「何故お前がそんなことを……」

「僕が入学する前、研究員たちが何度か地下の施設の方へ集められたところを見たことがあるんだ。ラファール・リヴァイヴの後継機の開発だと思っていたけどもしかしたら。」

「じゃあ、シャルと簪、俺と箒に分けて……」

「いや、地下の施設の方は僕とサクヤモンでやるよ。」

「な、何言っているの!? そんなこととしてもし地下の方に敵がいたら……」

「でも、ドウフトモンはおそらく最上階にいると思うんだ。おそらく最上階までの間に敵もいるはずだし、地下の方に戦力を割くわけにはいかない! だからみんなは上に向かって!」

シャルロットの言葉に一同は悩む。そこへマグナアルフォースブイドラモンが言いだす。

「俺と一緒に行くよ。」

「チビ……」

「俺だって強くなつたんだ。だから兄貴たちは上に向かってドウフトモンを倒してく

れ。」

「ブイモン……」

「俺たちも装置を破壊したら向かうよ。だから、シャルロットのことは俺に任せてくれ。」

マグナアルフォースブイドラモンは真剣な目で言う。

「……立派になったもんだなチビも。」

「兄貴にはまだ敵わないけどね。」

「じゃあシャルのことは頼んだ。」

「任せておいてよ！」

そう言うのと一夏と箒、簪は上に向かい、シャルロットは地下へと向かって行った。

デジタルウェイブを断ち切れ!

デユノア社 地下

「ここって本当に会社の地下なんだよな?」

マグナアルフォースブイドラモンは周りを見ながら言う。明らかに地下の空間は広く、迷路のようになっていた。

「僕は地下に行く所しか見たことがなかったからね。それにここは僕がいたときもトツプ・シークレット扱いで一部の研究員しか通れなかったんだ。」

シャルロットはそう言いながら迷路を進んでいく。やがて通路は二手に別れた。

「これじゃあどこに繋がっているか分からないな。」

「ここは二手に別れていくしかない。」

サクヤモンは札をマグナアルフォースブイドラモンに渡す。

「もしその装置らしいものを発見したらこの札を何処でもいいから近くに貼ってくれ。そうすれば私の能力で場所を確認することができる。」

「わかった。お前たちも見つけたら俺もすぐに駆けつけるよ。」

そう言い、三人は二手に別れて行った。シャルロットとサクヤモンはしばらく移動す

ると行き止まりになっていた。

「私達の方ははずれのようなだシヤル。」

「と言うことはブイモンの方かもしれないね。急いで彼に合……」

「どうしたシヤル？」

突然止まったシヤルロットにサクヤモンは聞く。

「聞こえない？声が？」

「声？」

サクヤモンは耳を澄ませる。すると近くで誰かが泣いている声が聞こえてきた。小さい声だが確かに近くからだ。

「まさか、この壁の向こう!？」

シヤルロットはシールド裏に装備されている「グレー・スケール（灰色の鱗殻）」を壁に打ち込む。すると壁が崩れ、一つの隠し部屋があった。その部屋の片隅で一人の女性が泣きながら何かを言っていた。

「ごめんなさい………ノエル……マーク……キャンドモン……」

シヤルロットは女性の正体が自分の義母であるエリザだと一目でわかった。

「お義母さん！」

シヤルロットは一回ラファール・リヴァイヴ・カスタムIIを解除してエリアに近づく。

エリザはシャルロットの声を確認すると驚いた顔をしていた。

「シャルロット! どうしてここに!？」

「ドウフトモンたちの計画を止めるために来たんだ。でも、どうしてお義母さんがこんな所に……」

「……ごめんなさい、シャルロット。」

エリザは涙を流しながらシャルロットを抱きかかえる。

「あなたのお母さん……ノエルを殺したのは私なのよ……私のせいでノエルが……」

「落ちていてお義母さん。今は急いで外に出ないと……」

「私は一足先にブイモンの方に行く。シャルは急いでエリザを。」

「待ってちようだい! 私も……私も一緒に連れて行って!」

エリザの言葉に思わず驚くシャルロットたち。エリザは涙を拭きながら話を続ける。

「私は……キャンドモン、デユナスモンのことを何もわかっていなかった。彼が何に苦しんでいたのかも。だから今度こそ……」

「デユナスモン!? デユナスモンって確か……」

「ノエルの話ではエリザの元パートナーだ。」

「ノエル!? ノエルって……」

「ああ、話せば長くなるから取り敢えずここから離れよう。もしかしてお義母さん、デユ

ナスモンの居場所を知っているの？」

シャルの質問にエリザは真面目な顔で答える。

「彼は確かデジタルウエイブ発生装置というものを調整していたわ。」

「装置……一夏が推測していた機械か。」

「教えてちょうだいシャルロット、ノエルに聞いたって……」

「実は……」

シャルロットは移動しながらエリザの質問に答える。

デユノア社 上空

「フハハハハハ！この間よりはできるようになったではないか！」

エグザモンは高笑いしながらラウラたちを見ていた。作戦を開始してからすぐにエグザモンと接触した彼女らであったがエグザモンの圧倒的強さに苦戦を強いられていた。

「やはり強い……」

「機能増幅。パツケージを付けて威力を上げた龍咆でも効かないなんて……いくら何でもチート過ぎるでしょ！アンター！」

「んく聞こえんなく？」

「完全に私達のことを舐めているな。」

「ガルルトマホーク！」

「ジャイアントミサイル！」

メタルガルルモンとセントガルゴモンは同時にミサイル砲撃を行うがエグザモンは翼で全身を包み込んで防御する。

「フハハハハ！いくらやっても俺の体に傷一つ付けられ……ぬっ!?この水のベールは!?」

エグザモンは知らぬ間に自分の周りを覆っている水のベールに驚く。水のベールは彼の全身を包み込んだ。

「!?う、動けん!」

「どうかしら?私のミスティアス・レイディの単一使用能力『セックヴァベック(沈む床)』のお味は?」

エグザモンの背後から楯無が現れる。後ろにはブラックウオーグレイモンとブラックメタルガルルモンが攻撃準備を整えていた。

「お、おのれ……小癩な真似を……」

「みんな急いで!同時攻撃よ!」

「行きなさい!ティアーズたち!」

「龍咆、発射!」

「ガルルバースト!」

「シャドーウイング!」

「ガイアフォース!」

「いっけ〜!」

全員一斉に砲撃を始め、体の自由を奪われたエグザモンに攻撃を当てていく。

「これしき……」

「まだこれからよ!」

「零落白夜。」

千冬は雪片参型に展開装甲を装着させ、光を帯びた出せる。後ろからはジエスモンが続く。

「はああああ!」

千冬は一気にエグザモンに接近し、無防備となった腹に斬りつける。更にジエスモンは「轍剣成敗」を繰り出す。

「ぐううう!!」

「とどめは私よ! 蒼流旋!」

楯無は特殊ナノマシンによって超高周波振動する水を螺旋状に纏ったランスを千冬たちが作った傷口に撃ち込む。

「グボツ!?!」

エグザモンは傷口と口から血を出しながら地上へと落下していった。

「やった!」

「何とか倒せたわ……」

ブイことアルフォースブイドラモン、そして、スレイプモンとリリモンがいた。

「奴は確かに龍帝に恥じぬ見事な生命力がある。だが、そこにも弱点がある!」

「じゃ、弱点!？」

「そんなものがありますの?」

「あれを見ろ!」

デュークモンはデユノア社の方に指を指す。屋上では膨大なエネルギーの流れが見られた。

「あれはおそらく地下で人工的にデジタルウェイブを発生させて怒っている現象。つまり、それを断てば川が干からびるように奴も不死身ではなくなる。」

「しかし、こんな状況では……」

「お前たちはエネルギーを使い過ぎた。『猫である』で一旦補充し、体勢を立て直せ。すでに織斑一夏たちもデユノア社内部に乗り込んでいるはずだ。」

デュークモンはそう言う構え、エグザモンへと向かって行く。千冬たちは一旦機体の限界も考え「吾輩は猫である」に着艦する。中では既にクロエが補充するための準備をしていた。

「補充は私が済ませておきますので皆さんは休んで作戦を練ってください。」

「かたじけない。」

そう言うのと千冬たちは中へと入り、デュークモンたちの映像を見る。いかに同じロイヤルナイツと言えどあれほどの巨体であるエグザモン相手では苦戦は当然だった。ちなみにブイブイのパートナーであるリナの姿は見当たらない。クロエの話によるとささいからIS学園に残ってもらったという。ラウラたちは室内にある機器を利用してデューク社内部をスキャンしてみた。すると上階途中でIS反応が3つ、地下で一つ確認できた。

「おそらく織斑たちはこれを見る限りでは無事に内部に乗り込めたようだ。そして、地下に反応があるのがデューク社にいた経験があるデュークだ。織斑が篠ノ之と更識を連れているということはおそらくピルの頂上にドウフトモン、地下にデュークモンが言った装置がある可能性がある。」

千冬は内部の構造で反応している点を差しながら言う。

「でも、シャルロット一人で大丈夫なの!?!もし向こうにもロイヤルナイツがいたら……。」

「いい方法がありますわ!」

「いい方法? どういうことオルコットさん?」

楯無はセシリアの顔を見ながら聞く。

「御神楽さんの話ではこの船にマステイモンを乗せていると聞きましたわ。だからデューク

ノア社までデジタルゲートを繋いでもらって乗り込めばいいんですわ!」

「なるほど…….とりたいところだが問題が多い。」

「どういうことラウラ? セシリアのアイディアならすぐに一夏たちにも合流できるし、あのうるさいエグザモンを弱らせることもできるのよ?」

ラウラの言葉に鈴は不思議そうに言う。

「特訓の時、ミレイに聞いた話ではマステイモンはゲートを開くときかなり体力を消耗すると言っていた。つまり、私達全員で一夏の所に合流しようとしたらどうする? マステイモンの体力が持たない。」

「「あつ。」」

「確かにボーデヴィツヒの言う通りだ。それに万が一成功したとしても装置を壊す前にデュークモンたちが全滅する危険性がある。と言うよりもお前ももう少し頭を使わんか、更識。」

千冬に言われ楯無は頭を抱える。そのとき、シャルロットの母親であるノエルがアルファモンと共に来た。

「方法ならありますよ。」

「え!? 本当!?!」

「鳳は少し落ち着け。それで方法とは?」

「アルファモンもゲートを開く能力を持っているわ。」

「つまり私と共に来れば一気にデュノア社に乗り込むことができる。」

「やったー!」

「これなら一夏さんたちと合流できますわ!」

「ただし、私のゲートで連れて行けるのは一組だけだ。それ以上連れて行けば最悪の場合ゲートの取り残してしまう危険性がある。」

「ちなみにゲートに取り残されたらどうなるのかしら?」

「いい質問ね、流星生徒会長。残された場合は最悪一生その空間を彷徨うことになるわ。」

「[[[.....]]」

ノエルの言葉に何も言えなくなってしまう鈴たち。しかし、千冬は真つ先に言う。

「では私を同行させてほしい。シャルロットは私の生徒でもある。」

「え!?ち、千冬さん!?!」

「お前たちは引き続きエグザモンとの戦いに合流しろ。デュークモンたちは歴戦の勇士だ。私よりも頼りになる。」

「織斑先生。」

「ボーデヴィツヒ、一人前になったところを私に見せて見ろ!」

「はいー!」

千冬の激励にラウラは敬礼する。それと同時にクロエが来て全員に待機状態の専用機を渡す。

「一通りの整備は完了しました。これでいつでも出撃できます。」

「了解した。ではノエルさん、お願いします。」

「分かったわ。行きましよう、アルファモン。」

「ああ。」

そう言うのとアルファモンはゲートを展開する。千冬とジエスモンは二人の後に続いてゲートの中へと入っていく。

「では、我々も行くぞ!」

「おお!」

ラウラとガブモンは馬鹿みたいに興奮していた。

「鈴、どうしてあの二人はあんなに元気になったの?」

「私に聞かないでテリアモン。」

「どうしてなの?」

「私にも分かりませんから気にしなくてもいいですよ、ピヨモン。」

デュノア社 地下

「これは……」

マグナアルフォースブイドラモンは目の前の光景を驚きながら見ていた。目の前では膨大なデジタルウェイブが螺旋状になって蠢いていた。

「これだけのデジタルウェイブを発生させ続けたらこの世界は……」

「そう、全てが新しく生まれ変わらせるためにな。」

マグナアルフォースブイドラモンは後ろを振り向くとそこにはデュナスモンが座禅を組んで座っていた。

「このデジタルウェイブこそ、この世界の全てを塗り変えるための恵みの雨。そして、デジモンたちはその雨で肥えた土を踏みしめながら新たな世界を築き上げていくのだ。」

「お前もロイヤルナイツか!」

「いかにも、私はデュナスモン。この装置の防衛に就いているロイヤルナイツだ。」

マグナアルフォースブイドラモンは拳を構える。

「この装置には触れさせはしない。この世界の邪魔な人間たちを一掃し……そして、私の未練を完全に断つためにも。」

「言っていることがわからないが敵だということには変わらないようだな。」

デュナスモンは座禅と解き、マグナアルフォースブイドラモンに近づいていく。

「俺はお前を倒す!そして早いとこ、この装置を壊して兄貴たちと合流する。」

「不可能だな、貴様はここで私に敗れて哀れな姿で分解されていくのだからな。」

両者とも近づいていく。その間にもシャルロットたちは急いで合流しようとしていた。

逆転への布石

デュノア社 地下

「急いでサクヤモン！このままだとデュナスモンとブイモンのどちらかが・・・」

「分かっている！」

シャルロットたちは急いで迷路を抜けようとしていた。行く時もかなり迷っていたが戻るときも一筋縄ではいかなかった。

「こうしている間にも戦っているのかもしれないというのに・・・。」

そのとき、三人の目の前でゲートが現れた。サクヤモンとシャルロットは身構える。

「あのゲートは!!？」

「まさかドウフトモンたちに気づかれた!？」

しかし、中から出てきたのは千冬とジエスモン、そしてアルファモンとノエルだった。ノエルを見た瞬間、エリザは目を丸くした。

「ノエル!？」

「エリザ、久しぶりね。」

「ねえ、言った通りでしょ?」

ノエルは久しぶりに会う友を抱き、エリザは思いつきり泣いてしまった。

「ごめんなさい……本当に！私のせいであなたを！」

「いいのよ、あなたが全部悪いわけじゃないんだから。」

再会を喜んでいる二人に対して千冬は口を開く。

「お二人とも感動の再会のところを申し訳ないと思っっているが今は一刻を争う時だ。すまないがここからは私とデュノアで……」

「織斑先生、そのことなんですけどお義母さんを一緒に連れて行かせてください。」

「デュノア、それは……」

「デュナスモンはお義母さんのパートナーなんです！もし、このまま誰かと戦ってどちらかが負ければお義母さんは一生後悔する。だから、その前に説得をしたいと思います！お願いします！」

シャルロットは頭を下げてください。サクヤモンも同様に頭を下げた。

「……千冬さん、エリザなら私とアルファモンで守ります。ですから娘のお願い事を聞いてはくれませんか？」

「ノエルさん。」

「私の記憶が正しければデュナスモンはおそらくエリザの昔のパートナー、キャンドモン。昔別れたときから彼女もずっと心配していたんです。だからチャンスを与えてく

ださい。責任は私がかかります。お願いします。」

ノエルも頭を下げながら言う。エリザは土下座までして頼み込んでいた。流石に千冬もこんな大勢で頼まれては拒否できない。

「……分かりました。デユノア夫人の動向を許可します。但し、説得をしても止められないと判断した場合は諦めてもらいます。それで構いませんね？」

「はい、ありがとうございます！」

エリザは頭を下げながらお礼を言う。

「よかったわね、エリザ。」

「しかし、問題はブイモンの方だ。一夏との特訓でアイツは相当実力を付けている。最悪な場合は既に同士討ちかどちらかが倒れてしまっているのかもしれない。」

「急ぎましょう、早くしないと外の方々も……」

四人は急いで目的地点を目指して行った。

デジタルウエイブ発生装置前

「マグナラツシュ!!!」

「ぬううう!!!ドラゴンズロア!」

「あぶ……グフツ!」

デユナスモンとマグナアルフォースブイドラモンが交戦を始めてから既に数十分が経過していた。両者とも相当なダメージを受けており勝負はいつ着いてもおかしくなかつた。

「……予想外の力だ、私をここまで追い詰めるとは。」

「言つたら、兄貴に鍛えられて強くなつたつて。」

マグナアルフォースブイドラモンは傷から流れる血を拭いながらデユナスモンを見

る。デユナスモンは鎧のあちこちに拳の後が付いていながらもまだ立ち上がって来る。

「あのよ、俺はただその装置を止めたいだけなんだ！なのはどうしてまだ立ち上がってくるんだよ！アンタだってもう限界だろ！なのはどうして……」

「わ、私の未練を完全に断つためだ……」

「未練……」

「私にもかつて貴様らのようにパートナーがいた……私は自分のパートナーを信賴し、共に行動していくうちに好意を寄せるようになった……しかし、私はデジモン。パートナーは人間、結ばれることは決しないのだ……うっ！」

デユナスモンの脇腹から大量の血が流れる。傷口にはマグナラッシュをした時にヒットした拳の後が付いていた。

「ひ、皮肉な物だろ？パートナーに恋心を持つなど……それも彼女が同族の男性に恋をしているにもかかわらず……私はそれに耐えることができず逃げてきたのだ。パートナーの前から。」

デユナスモンは口からも血を吐き出し、息が荒くなりながらも歩み寄る。（それでも傷は治りつつあるが）

「だが運命とは決して逃れることができないもの、どんなに逃げてもいずれは会わなくてはならない。だから私はこの計画でこの世界を破壊し、全てのけじめをつける。」

彼はそう言うのと必殺技「ドラゴンズロア」を放とうとする。

「・・・おかしい。」

「何？」

「おかしいじゃないか？ 相手が違う種族なら好きになっちゃいけないという決まりがあるのか？ お前の話を聞くとお前はパートナーに何も言わず一方的に逃げているだけじゃないか。」

「なんだと！」

「俺の兄貴の周りなんかさ、兄貴がデジモンだつてわかっても諦めない奴らばっかりなんだぜ？ だから種族が違うとか関係ないと思うんだ。それに兄貴は複数だけとお前は一人、それが言えないんならパートナーを信じ切れなかったつてことじゃないのか？」

「黙れ黙れ！ 貴様に何がわかる！ 彼女はパートナーでもいずれば私のことを捨てその男の所へと行く！ 私を忘れて！ 人間だつて同じだろ？ 好きな男でも見た目が醜くなればその場で切り捨てるし、富を手に入れるために偽りの愛を誓う！ それに私はすでにその仲間を・・・・・・何？」

デュナスモンは啞然としながらマグナアルフォースブイドラモンの後ろを見る。後ろを振り向いて見るとそこには千冬達が来ていた。デュナスモンはその中でノエルがいたことに驚いていた。

「ノエル……馬鹿な！お前はあの時死んだはず！」

「久しぶりね、デュナスモン。いや、キャンドモン。」

「どうして……どうして貴様がここにいる!？」

「私が彼女の車が衝突する寸前にゲートを開いて救い出した。」

アルファモンはデュナスモンを見ながら言う。

「お、お前は何者だ！」

「忘れたのか？昔ガオモンと一緒にみんなで旅をしたじゃないか。」

「まさか！お前はドルモンか！」

「ああ、そして今はロイヤルナイツのアルファモンだ。」

「なら同士のはずのお前がなぜ我らの計画を阻む!？我らの指令は人間の抹殺だ！」

「デュナスモン、貴方はどれだけエリザが苦しい思いをしているのか分かってるの？」

「黙れ！私はもうキャンドモンではない！ロイヤルナイツのデュナスモンだ！もう貴様ら人間と共にいた頃はとは訳が違う。」

「でもあなたはエリザのパートナーよ。パートナーならどんなことでも打ち明けることが大事なのよ、エリザの事を思ったことも。」

「!?き、貴様何故それを！」

「エリザはあなたが思っているよりもあなたのことを心配していたの。あなたが知らな

い場所でも、あなたのことを傷つけてしまったんじゃないかって別れた後もずっとあなたの事を思い続けていたのよ。だからこんなた……」

「うるさい！ 貴様が何を言おうがもう手遅れ！ 私は貴様らを倒して全てに決着をつける！」

デュナスモンは全身のエネルギーを集めブレス・オブ・ワイバーンを繰り出そうとした。

「私に残された力を全て結集させた技だ！ このままここもろうとも吹き飛ばしてくれる！」

「やはり説得には応じないか。」

千冬は止む得ず雪片参型を構える。ジエスモン、マグナアルフォースブイドラモンも攻撃態勢にかかる。

「エリザさん、残念ですがもはやこれしか方法がありません。」

「デュナスモン……」

エリザは顔を隠しながら泣く。だがアルファモンとマグナアルフォースブイドラモンは気づいていた。デュナスモンの手が震えていたことを。

「……マグナアルフォースブイドラモン、君の速さで彼の目の前まで技を撃つ寸前に瞬時に止めることはできるか？」

アルファモンは小声で聞く。

「まだそこまではやったことがない……でも、やらなきや一生後悔する！ そう言うのは俺一人でもう十分だ！」

マグナアルフォースブイドラモンは構えを取り、力を入れ始める。

「はああああああ!!」

「ふん！ バカめ、このぐらい距離を取れば貴様らに発射を阻止される心配もない。それにもし避けたとしても装置が爆発しこの空間は瓦礫の埋もれて助かる可能性はゼロだ！」

デュナスモンはブレス・オブ・ワイバーンを放とうとする。

「これで全員まとめて……何!? 奴は!? 金色の奴がいない!」

デュナスモンは目の前にいる千冬たちに人数を再確認し始めた。何度数えてもさっきまでいたマグナアルフォースブイドラモンの姿が見当たらない。

「奴め……さては逃げたな。こうなればすぐにでも……何!」

デュナスモンは突然目の前に現れたマグナアルフォースブイドラモンの姿を見て驚く。マグナアルフォースブイドラモンは驚いて隙ができたデュナスモンに対して容赦なくラツシユを浴びせる。

「オラー！」

「ぐう!!」

「はああああああああああ!!!」

「こ、こんな筈は……」

デュナスモンは体に次々と拳を当てられながら言う。

「パートナーという方が強いとでもいうのか……」

信じられないと思う間も彼の体はボロボロになっていく。

「馬鹿なああああああ!!!」

「オラ!」

マグナアルフォーブイドラモンのラッシュによりデュナスモンは全身ボロボロの状態で吹き飛ばされた。

「デュナスモン!」

エリザは倒れたデュナスモンに駆け寄る。

「デュナスモン、デュナスモン!」

「大丈夫ですよ、急所は外していますから。」

「よし、デュノア。すぐに装置の解除を……」

千冬はシャルロットと共に装置を停止しようとする。しかし、パネルを操作しても応答がない。

「無駄．．．．だ．．．．」

デュナスモンはダメージを受けすぎた体を起こしながら言う。

「その装置は．．．．．ビルの頂上にいるドウフトモンにしか止められぬように設定している。もはやだれにも止めることはできん．．．．ゴフツ！」

デュナスモンは口から血を吐き出した。倒れる。エリザは彼に寄り添って心配そうに見る。

「デュナスモン．．．．．」

「エリザ．．．．．私は．．．．．君のことが好きだった。でも．．．．．言うのが怖かった．．．．．拒絶されるのが怖くて言えなかつたんだ．．．．．」

エリザは黙ってデュナスモンの言葉を聞き続ける。

「そうしているうちに．．．．．君はマークに恋をし．．．．．君の答えがわかってしまったから私は君の前から去った．．．．．でも、いつまでもこの心は変わることがなかった．．．．．だから．．．．．君を殺してでも忘れてしまいたかった．．．．．」

エリザは思いつきりデュナスモンを抱きしめた。

「そうならもつと早く言ってくればよかつたのに．．．．．」

「これで私のことを嫌いになつただろう？」

「ううん、もう一度やり直しましょう。貴方は私のパートナー、そして私の一番大切な

人。」

彼女はデュナスモンに口付けした。

「お帰りなさい、デュナスモン。」

「ただいま……エリザ……。」

一方の千冬たちは何とかデジタルウェイブを止めようと考えていた。そのとき、人知れずクレニアムモンが千冬のデジヴァイスから現れた。

「方法なら一つだけある。」

「一つだけ？」

「それは、この装置を完全に破壊することによってデジタルウェイブの流れを完全に断ち切ることだ。さすればこれ以上我らロイヤルナイツが我が物顔で暴れる心配はない。」

「しかし、そんなことをしたらこの空間が……。」

「ここには我、クレニアムモンが残る。お前たちは早くここを去れ。」

クレニアムモンはそう言うのと装置の前に立つ。

「クレニアムモン！」

「織斑千冬、我を救ってくれたこと大いに感謝する。しかし、我はロイヤルナイツ！イグドラシルを完全に裏切ることはできない。だがここは責めて貴様に救ってもらった恩と

してこの役割、我が引き受けようぞ！」

「クレニアムモン……」

「貴様らがここを出て十分後にここを爆破する。急いでここから脱出するのだ！」

クレニアムモンは魔槍クラウ・ソラスを構える。

「デュナスモンは私のゲートで運ぼう。」

アルファモンは急いでゲートを展開し、そこからノエルとエリザも一緒に連れて行く。

「私達二組はこのまま一夏たちと合流する。」

「私達も彼女たちを預けた後、急いで駆け付けます。シャルも気をつけてね。」

「分かっているよ、母さん。」

そう言うのと千冬たちは急いで地下から出ていく。

「デュノア、デュノア社の外に誰かいないか確認できないか？」

「調べて見ます……」

「クラリツサか、丁度いい。彼女にデュノア夫人とそのパートナーが向かうから保護して『猫である』に送るようにとメッセージを送ってくれ。」

「分かりました。」

十分後

「我はかつて主君イグドラシルに絶対的な忠誠を誓っていた……本来ならすでにな

いはずの命……滑稽な者よのお。」

クレニアムモンはクラウ・ソラスを回転させ始める。

「だが、織斑千冬。貴様は我がこれまで戦ってきた中で最も勇敢な戦士であった！故に
我は後悔などしていない！この命、貴様のために捧げようぞ！」

クレニアムモンは技を放つ。

「さらばだ！エンド・ワルツ!!」

技を放った瞬間、装置は真つ二つに切断され、地下で大爆発が起こった。その強力な
衝撃波にクレニアムモンは吹き飛ばされていく。

「ぐっ、ぐおおおおお!!」

デュノア社 屋上

「………地下のデジタルシフト発生装置が破壊されたか。デュナスモンめ、結局甘いところは甘いな。」

ドウフトモンはデジタルウェイブで発生したエネルギーを自分に供給させていた。

「だが、それも計算の内。我が超究極体になるための布石はほぼ整っている。後はエグザモンとメディーバルデュークモンがどこまで持つてくれるかだ。」

ドウフトモンは構えを解かないまま考え続ける。

（マークの所はおそらくあの程度の爆発なら崩れる心配はあるまい。しかし、だとしたら奴らの仲間の何人かも犠牲になっていると思うが………）

「やっとなどり着いたぜ、ドウフトモン。」

「何!？」

ドウフトモンが後ろを振り向くとそこにはカイゼルグレイモンの姿の一夏と紅椿を纏った箒、ビクトリーグレイモンが立っていた。

「貴様ら!メディーバルデュークモンを倒したというのか!？」

「いや、奴なら今簪とセラファイモンが相手をしている。」

「なるほど、仲間を身代わりにしたということか。」

ドウフトモンはそう言うのと剣を構え、一夏たちに近づく。

「本来なら更なる力で倒したかったが止むを得ん。貴様らの命、今ここでいただく!」

「そうはさせない!俺たちは勝つ!そう決めてみんなでここに来たんだ!」

一夏は龍魂剣を引き抜き、箒は雨月と空裂を構える。

「行くぞ、箒!」

「ああ!」

今、デュノア社でロイヤルナイツと一夏たちの戦いは決戦真つただ中へと突き進もうとしていた。

禁断のジョグレス

デュノア社 近辺上空

「ぬう!？」

デュノア社のデジタルウェイブ発生装置の爆発でエネルギーの供給が止まってしまったため、エグザモンの動きは突然鈍くなっていた。

「ロイヤルセイバー!」

デュークモンの一撃がエグザモンの脇腹を掠る。

「ちい! やつてくれるわ!」

「後ろがから空きですわ!」

セシリアは空かさずティアーズで集中攻撃をする。隣ではセントガルゴモン、ガルダモン、鈴が砲撃と援護をしている。

「おのれ!」

「ビフロスト!」

「シャイニングVフォース!」

隙を与えずにデュークモンたちは攻撃を続ける。エグザモンは全てカレドヴェールフ

で防御するが徐々にダメージが蓄積され始める。

「馬鹿な……ダメージが回復しないだ?! デュナスモンの奴、まさかしくじりおつたか!」

エグザモンはデュノア社の方へと飛んで行く。

「アイツまさか逃げる気?! ここまで散々人のことを馬鹿にしておいて!」

「デュークモン、私はこのまま追撃するのが一番だと思うがあなたは どう思う?」

「あのボーデヴィツヒさん、そう言うのは生徒会長の私に一番先に聞く……」

「無論、このまま追撃したほうがいいだろう。デジタルウェイブの供給が途絶えたとはいえエグザモンは長年龍帝として竜型デジモンの王として降臨していたデジモンだ。僅かにダメージを受けたとはいえ逃げるような輩ではない。」

そう言うトラウラたちはエグザモンの後を追って行く。

「ちよつとく、生徒会長の私に話も聞いてよく! ……しよぼん。」

「追うしかないようだ楯無。」

「我々も急いで行こう。」

二匹のパートナーに言われ楯無もトラウラたちに続いて行こうとした。そのとき、通信が入る。

「誰からかしら? ミレイさん……いや、この人は確か篠ノ之束さんの。」

『更識楯無、私の通信が聞こえますか？』

「貴方は確か・・・クロエさん？」

『つい先ほどクラリツサ・ハルフオーフからの連絡でデュノア社入り口の方でデジモンと女性一人を回収して来てください。近くにはノエルさんとアルファモンがいるのですぐにわかります。』

「え？ちよつと待つて頂戴よ。私も急いで・・・」

『何か嫌な予感がするんです。御神楽様にも合流を呼び掛けてこつちに向かっています。急いでください。』

そう言うときクロエは通信を切ってしまった。楯無は不思議そうにパートナーたちと顔を合わせる。

「なんだったのかしら？今のは。」

「少なくとも何かが起こると思ったんだろう。」

「とにかく急いで回収しに行こう。それから合流しても遅くはないよ。」

そう言うとき三人は急いでデュノア社の方へと飛んで行った。

デュノア社 中階層 数分前（一夏たちがドウフトモンと接触した直後）
「セブンヘブンズ！」

セラフィモンの攻撃と同時に簪は春雷の連射型荷電粒子砲を放つ。メデイーバル
デュークモンはそれを防御して受け止める。

「以前の小娘らと比べればかなり実力を上げているな。それに……」
「はああああ!!」

簪はすかさず超振動薙刀「夢現」を持ってメディーバルデュークモンに攻撃してくる。メディーバルデュークモンはデユナスで受け止める。

「攻撃と攻撃との間隔が短くなつて隙を与えないようにしている。ここまで成長する人間とは本当に不思議な生き物だ。」

「私だけじゃない!」

「何?」

「私もパタモンも一人だけじゃ何もできなかった。一夏が手を差し伸べてくれなかったら式式も完成しなかったし、お姉ちゃんともいつまでも仲直りできなかった!パタモンも一緒にいて、みんなと友達になれて守りたいと思うようになったから強くなろうとしてここまで来れたの!だから私は最後まであきらめない!」

簪は一旦距離を取ると夢現を構え直し、セラファイモンも隣に近寄る。

「なるほど……それなら奴のあの未知なる力もわかる。だが、それには……」
その直後爆発音が響き、建物が揺れる。簪も何かと思い、辺りを見る。

「どうやらデユナスモンは防衛しきれず、装置を破壊されたか。」

メディーバルデュークモンはゲートを展開し、中に入っていく。

「逃げるつもりなの!?!」

「私は騎士ではないからな。だが一つだけ教えておいてやる。ドウフトモンはお前たち

がここまでやるのは想定範囲内だ、奴にはとっておきの策がある。今まで試したこともない恐ろしい進化をな。」

そう言うのとメディーバルデュークモンはゲートの中に入り消えてしまった。

「一体どういうこと……」

「更識！」

「簪さん！」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえ、簪は振り向く。

「織斑先生！デユノアさん！」

「織斑と篠ノ之はどうした？一緒じゃないのか？」

「私とセラフィモンがここでメディーバルデュークモンを相手している間にドウフトモンの方へ。」

「メディーバルデュークモンは？簪さんが倒したの？」

「ううん、逃げられちゃった。でも、なんか気になることを言い残したの。」

「それはどういうことだ更識。」

「ドウフトモンはまだ恐ろしい進化を用意しているって……」

「それはおかしい。ジエスモンやデュークモンたちから聞いたがデジモンは究極体までが限界だ。現にそれを超える超究極体がいると言われてるがあまりにも体に負担が

かかりすぎるうえ進化する者もないと……待てよ。ジエスモン、確かデジモンには2体のデジモンから進化するものがあると言っていたな？」

千冬はふとジエスモンに聞く。

「ジョグレス進化のことかな？でも、あれは進化するデジモン同士の相性に問題があつてみんなできるわけじゃないんだ。ミレイさんのマステイモンも本来は相容れないもの同士の進化だそうだし……」

「しかし、今残っているロイヤルナイツの戦力はドウフトモンとエグザモンのみ。」

「ちなみに他の階にいたデジモンたちは私と一夏たちで倒しました。」

「つまりこの二体だけで我々を倒す方法……ん？確かノエルさんの話ではドウフトモンは元アグモン達同様の……まさか！」

千冬たちは急いで屋上を目指した。

デュノア社 屋上

「トライデントガイア!!」

ビクトリーグレイモンは大気中から集めたエネルギーを剣先から放つ。ドウフトモンは避けるがそこに一夏と箒の連携の追撃を受ける。

「ここまで腕を上げるとは……これならデュナスモンたちが負けたのも無理はないな。」

ドウフトモンは体に軽い傷を受けながらも余裕の口調で言う。その様子に一夏も箒も不信に思っていた。

「一夏………なんかおかしくないか？」

「お前もそう思うか箒。俺も感じているがアイツはさっきまで膨大なエネルギーを吸収し続けていた。にもかかわらず俺たちの戦いではその力の片鱗すら見せない。一体何を企んでいるんだ……」

一夏は早くオメガモードになって決着をつけることを考えた。デュークモンたちとの特訓もあり、あの姿にはいつでもなれるようになっていた。ドウフトモンは空を見上げながら黙る。

「そろそろ来る頃だな。」

すると少し離れた上空からエグザモンが飛翔して来た。後ろからは鈴たちの姿が見える。ドウフトモンはエグザモンの近くまで飛んで行く。

「遅かったなエグザモン。」

「ドウフトモン、これは一体どういうことだ！デジタルウェイブの供給が止まっているぞ！デユナスモンは一体………なっ！」

その光景に一夏たちは啞然とした。

ドウフトモンが仲間であるはずのエグザモンの胸を腕で貫いたのだ。

「ドウ、ドウフトモン………貴様………」

「悪いな、エグザモン。丁度お前の力が欲しかったところなんだ。悪いがもうぞ。」

ドウフトモンは懐から小さな電子機器を取り出す。それは箒たちが持つデジヴァイスに酷似していた。

「アイツ、仲間の手を………一体何をするつもりなんだ!？」

箒が驚きながら言うのと一夏はハッとした。

「まさか！デジグレス進化すると言うのか!？」

「デジグレス? どういうことだ一夏?」

「デジグレスは二体のデジモンが合体する事によって通常の進化以上の力を引き出す合体式進化だ。しかし、それには二つある人格を一つにしなければならぬ上に相性によってはできないものもある。」

「その通りだヴリトラモン！私が貴様らと本気で戦わなかったのはデジグレス進化後のエネルギーを温存するためだったのだ！同時にマークのデジヴァイスを触媒にすることによって人格の主導権を私にすることができる!」

ドウフトモンとエグザモンの体が崩壊し始め、一つの新たなデジモンへと姿を変えて行く。それはエグザモンの二倍以上もありそうな巨体にドウフトモンの印象を残した

鎧と六枚の翼、そして「アンブロジウス」が繋がった尾、腕にはドウフトモンと同様の剣を持っている。

「これが私がこの世界を破壊するための姿、『ドウフトモン ドラゴンモード』と言っておこう。」

あまりにも巨大な姿になったドウフトモンに対して一夏と箒は何も言えなかった。

「織斑！篠ノ之……」

やつと駆けつけてきた千冬たちも思わず言葉を失う。ドウフトモンは一夏たちを見下ろす。

「ヴリトラモン、これから始まるのは私のパートナーを追い詰めた世界への復讐であり、我らデジモン、デジタルワールドの未来を救うための計画の遂行。そして……私の計画を邪魔し続けた貴様らの公開処刑だ!!」

空中大決戦！

デュノア社 地下

「む、むう……」

デジタルウェイブ発生装置が破壊されたところの近くで巨大な何か瓦礫をどかして起き上がってきた。

「まさか、イグドラシルから与えられたアヴァロンが私の盾になってくれるとは……ん？」

死んだとばかり思っていたクレニアムモンは瓦礫で埋もれている空間の中で一か所だけ壁に穴が開いている場所を見つけた。

「あそこは……まさか爆発の時に空いた穴か？」

クレニアムモンはあちこち痛む体に鞭を打ちながらもそこへと歩いて行く。中を除くとそこだけシエルターになっていて一人の男性がカプセルの中で寝かされていた。

「この男は？……まだ生きてるようだが……」

デュノア社 屋上

「コイツは驚いたぜ……」

一夏はほぼ竜と言ってもおかしくないドゥフトモンの姿を見上げながら言う。箒たちも冷や汗を掻いていたがここで逃げるわけにはいかない。

「うーくん、流石は龍帝と呼ばれていたエグザモンの力だ。溢れていると感じるほど力
がみなぎる。これ程の力をフルに活用するにはやはり膨大なエネルギーが必要だった
な……」

ドウフトモンは試しに剣を構え、エルンストウエルを放つ。幸い何もいないところ
だったがその地形は一瞬にしてただの焼け野原と化した。

「威力も数倍……いやそれ以上に上がっている！この力があればこの世界の人間を
皆殺しにするなど造作もない！」

ドウフトモンは狂気に満ちた顔で笑っていた。それを見た一夏は恐怖を感じていた
がすぐに龍魂剣を構え直し、隣にいた箒たちも装備を持ち直す。

「ほう？まだ私に挑もうとでも言うのか。もう力の差が圧倒的に私の方が有利だと言う
の？」

「そんなことは関係ない、仲間を利用してまで俺たちを倒そうなんていくらなんでも
狂っているお前が許せないんだ！俺は正直がっかりしているぜ。かのロイヤルナイツ
が俺たちを皆殺しにするために仲間まで犠牲にするなんてよ！」

「黙れ！勝てばよかろうなのだ！ここで貴様らを葬れば私の邪魔になるものは消える。
デジタルウェイブ発生装置はその後に作り直せばいい！すべては我らデジモンの未来、
そして我がパートナー・マークの吊いのために！」

ドウフトモンは剣を一夏に向ける。

「千冬姉！悪いが箒と簪、シヤルを連れて逃げてくれ、流石にアイツと戦うとなると命の保証がない！はつきり言ってテレビで見る悪の組織の戦闘員が仮面ライオンに丸腰で死に行くようなもんだぜ・・・」

そう言うで一夏はマグナアルフォースブイドラモンと共にドウフトモンへ向かって飛んで行く。

「一夏！」

「箒、一夏のことには俺たちに任せろ！」

「私達が戦っている間に早くここから離れて！」

ビクトリーグレイモンもセラファイモンとサクヤモン、ジエスモンと共に後を追う。

「くっ！私たちはただ見ることしかできないのか！」

箒は悔しそうに言う。そんな箒に対して千冬は冷静な顔で彼女に指示を出す。

「篠ノ之、お前は更識、デュノアと一緒に一回『猫である』に行つてシールドエネルギーを補充し直して来い。」

「千冬さん！あなたまで！」

「いいから落ち着け、お前たち三人はここに来るまでの戦闘でかなり消耗している。武器がない兵士が戦場に行くことは死を意味する。故に補給は必要だ。」

「でも……」

「織斑の最後の言葉を忘れたか？つまり簡単に言えば今の状態ではお前は仮面ライオンに武器も持たずに戦いに行く戦闘員と変わらないと言っているんだ。」

「……あつ。」

「そういう意味としても取れるね。」

「じゃあ、取り敢えず三人でいったん戻ろう。織斑先生も話ではいったん戻ったって言っていたし。」

箒たちは急いで屋上から遠くに見える『吾輩は猫である』に向かって飛んで行った。千冬はそれを確認すると雪片参型を構え、一夏たちの方へと飛んで行く。

デュノア社 地上

一方の楯無はブラックウオーグレイモン、ブラックメタルガルルモンと共に地上でノエルからエリザとデュナスモンを受け取り、「猫である」に運搬しようとしていたがそこへミレイたちの乗った輸送機が到着した。

「状況が変わったわ、あなたは急いで彼らと合流して。」

「え!?でも、この凶体デカイヤツはどうするのよ?」

楯無は気を失っているデュナスモンを見る。

「私とアルファモンが彼女たちの護衛に回るから更識さんはシャルたちの方に行つてあげて。」

「ノエルさん……」

「妹さんたちのことも心配なんですよ?」

「……ありがとうございます。」

楯無は頭を下げてその場をノエルに任せて上空へと飛んで行った。

「私達も早くここから離れないといけないわね……ノエル、貴方はアルファモンで私達のガードをお願い。」

「分かりました。アルファモン、お願いね。」

「ああ、ここは急いでここから離れないとな。」

アルファモンはドウフトモンの攻撃に警戒しながらミレイたちと共にその場を後にして行った。

デュノア社 屋上上空

「炎龍撃！」

「ファイナル・エリシオン！」

「ビフロスト！」

「シャイニングVフォース!!」

「ジャイアントミサーイル！」

「ガルルバースト！」

「シャドーウイング！」

「セブンスヘブンス！」

一夏たち含む全員が一斉攻撃を仕掛ける。しかし、そこは計算済み、ドウフトモンは翼でガードをする。

「むむ……流石にこれ程の技を一斉に喰らったら私が不利になるな……」
「飯綱！」

「フォービドウンテンプレーション！」

背後からサクヤモンとリリモンが追加攻撃をする。

「だがこのドウフトモン、そのようなことは既に予定範囲内のことよ！」

ドウフトモンは更に上空へと急速に上昇して行つた。

「奴はまさかエグザモンの最大の技『ドラゴニックインパクト』を仕掛けるつもりか！」

デュークモンが言う和一夏はオメガモードとなり、後を追う。

「何をするつもりよ！一夏！」

「一か八か奴が降下する前に狙撃を試みる！みんなは急いで距離を取ってくれ！」

「待ってくれ！兄貴！俺も行く！」

「私も行くわ！」

マグナアルフォースブイドラモンとリリモンは後を追っていく。

「お前たち、急いでこの場から離れるぞ！」

「分かつてまゝす！」

「了解しましたわ！」

千冬の命令に鈴たちも了解し一同は急いでビルから離れて行く。

「このデュークモンは万が一に備えてここで待つ。」

「一夏のことをお願いします、デュークモン。」

千冬はデュークモンに頭を下げると急いで離脱して行った。一方の楯無は………

「あら？みんなどうして離れて行くのかしら？」

「見た所ドウフトモンが追っている様子はないが……。」

大気圏外

「フフフフ………ヴリトラモン、この一撃で貴様らは一瞬にして木っ端みじんだ。地下の施設は元々この攻撃に耐えられるよう設計しておいたからマークを吹き飛ばす心配もない。ロードナイトモン、クレニアムモン、デユナスモン、そしてエグザモンよ……このドウフトモン、お前たちの犠牲を決して無駄にはせぬぞ！」

ドウフトモンは大気圏外から一気に降下をし始める。スピードは徐々に上がっていき、遠くから見るとその姿は地上に向かって放たれた赤い矢のようにも見えた。

「はくはつはつはつ……このぐらいの速度ならば例え距離をとったとしても地上はこの衝撃波で吹き飛ばす！貴様らには逃げ場などない上に地上はたった一撃で地上の人間共を一掃することができるのだ!!……ん？」

ドウフトモンは降下しながらも下にいる者の姿を確認した。それはオメガ・バスターを構えた一夏と技を撃つ態勢を整えたりリモンたちの姿だった。

「いいか？奴がもしこのままの速度で地上に激突したら映画で見る巨大隕石のように地上が跡形もなく消し飛ばすぞ！それは何としても阻止するんだ！」

「分かっているよ、兄貴！」

「私だってイチカカの彼女！やれるものはとことんやってやるわ！」

三人は構えるとドウフトモンに向けて技を放とうとする。

「ふん！無駄なことを。この速度で私を撃つ落とせると思っているのか！」

ドウフトモンは更に速度を上げて三人の前に迫っていく。

「邪魔をしようと言うのなら貴様らを先に吹き飛ばしてくれようぞ！」

「行くぞ！二人とも！オメガ・バスター最大出力！」

「はああああああ！シャイニングVフォー・ス・マグナ!!」

「フォービドウンテンプティション！」

三人はほぼ同時に技を放つ。ドウフトモンは速度を上げたまま三つの光線を同時に受ける。

「ぐううううううう!!!」

「う・・・うう!!」

「怯むな・・・二人とも・・・」

三人は高度が下がりながらも技の威力を上げていく。

「おのれ・・・」

速度は徐々に落ち始めていく。

(このままでは私はまともに技を喰らってしまうことになる・・・ならば！)

ドウフトモンは瞬時に技を中止し、三人の光線を受け流した。

「何!?!」

「技を中断した!?!」

「私の技を阻止したことは褒めてやる、だがこれはもはや防げまい! エルンスト・アヴァ
ロンズ!!」

ドウフトモンは尾のアンブロジウスを腕に装備し、光線を帯びた大型特殊弾を地上に
向けて撃った。

「なんだあの弾は!?!」

「あの弾は本来エグザモンが『アヴァロンズゲート』と言う技に使う特殊弾だ。本来は相
手の体内で爆発させるものだが空中で爆発すればその辺周囲一帯はドラゴニックイン
パクトほどではないが衝撃波で吹き飛ばされる! つまりあのビル周辺は一瞬にして瓦
礫すら残らぬ荒野となるのだ!」

「くっ!」

一夏はすぐに速度を上げて降下する。リリモンとマグナアルフォースブイドラモン
も後に続く。

「どうするの!一夏!」

「もはやあれの爆破は阻止できない!ならばせめて地上に到達する前に破壊する!」

一夏はオメガ・バスターを再展開し構える。

(勝負は一発だ……ここです外したりしたら地上にいる千冬姉たちが……)

一夏が不安に感じていた時リリモンはそつと手を握る。

「リリモン……」

「大丈夫、きつと止められるから。だってイチカは今までそんなことをひっくり返してきたんだから。」

リリモンはうつすらを笑う。

「……ああ、チビも俺に掴まれ。衝撃に備えろ。」

「了解！」

三人は一塊になり降下速度を速めた。特殊弾は既に視覚で捉えられる距離に入り、一夏はオメガ・バスターにエネルギーをチャージし始める。

「うまくいってくれよ！オメガ・バスター!!」

一夏の放った光線は弾を貫き通した。弾は爆発すると強力な衝撃波を発生させた。

「二人ともしつかり掴まれ！このまま地上に降りるぞ！」

一夏たちは速度を上げたまま地上へと降下していった。

デュノア社 屋上

「……ドゥフトモンが降りてくる気配がない。ヴリトラモンたちは阻止できなかったということがあるか？」

デュークモンは屋上から空を眺めていた。そこへ「猫である」から通信が入る。

『デュークモン、そこに更識楯無は来ていませんか?』

『どうしたクロエ? 急に連絡をしたかと思えば。』

『先ほどこちらに到着した御神楽様からの情報でそちらに向かったはずなのですが……』

そのとき、突然通信が切れた。

「クロエ? どうしたクロエ?」

そのとき空から何かが来たような気がした。

「ん!? ここの気配……いや、違う! ドウフトモンではない! 他の何か……」
そのとき何かに吹き飛ばされるかのようにデュークモンは吹き飛ばされる。

「こ、この衝撃波は……うわあああ!!?」

一方の楯無達も

「な、何!? 急に!」

「楯無、危ない!」

二体は楯無を庇いながら衝撃波に牽き飛ばされていく。

「うわあああああ!!」

「きやあああああ!!」

そこから楯無の意識は一時的に途絶えた。

その名はズワルト

『吾輩は猫である まだ名がない』 休憩スペース

ドウフトモンが放った砲弾の爆発による衝撃波は千冬たちのいる「吾輩は猫である」にまで響いていた。

「な、なんだこの揺れは!？」

「ドウフトモンはこっちに來ていないのにどうなっているのよ!？」

「皆さん掴まれるものに掴まってください!！」

全員、衝撃から身を守るためにとりあえず何か掴まって衝撃を凌いだ。その衝撃はデユナスモンの治療が行われていた医療室にも響いていた。

「何なのこの衝撃は?！」

「ド、ドウフトモンの……攻撃だ……止めなければ……」

「気持ちわからないまでもないけど今のあなたの体では無理よ。いくら体の急所は外してあったとはいえ、その体で行けばあなたは確実に死よ。」

デユナスモンの治療を行っているミレイは無表情で言う。

「しかし……」

「今は彼らの事を信じましょう。彼にはどんな困難も打ち破れる力を持っている、私達にできることはそれを信じることよ。」

「・・・・・・・・・・」

ミレイの言葉にデユナスモンは黙った。それと同時にクロエからの連絡が来る。

『御神楽様、衝撃が治まったので千冬様達を再出撃させますがよろしいですか?』

「ええ、構わないわ。ところで更識楯無とはまだ連絡が着かないの?」

『あれから何度も呼びかけているのですが・・・・・・・・デュークモンも今のところ・・・・・・・・』

「そう、連絡は定期的に続けてちょうだい。」

『分かりました。後、急速度で降下してくる反応を三つ、そのあと後方から来るのを一つ

確認しました。』

「おそらく彼らね。織斑千冬たちにはできるだけ彼らの援護をするようにと言っておい

て。」

『では失礼します。』

クロエは通信を切る。

「頼んだわよ、ここでの戦いに勝利しなければこれから先の戦いも・・・・・・・・」

デュノア社近辺のビルの残骸

「う、うう……痛！」

楯無は左腕を押さえながらゆっくりと起き上がる。どうやらさっきの衝撃波に吹き飛ばされた影響で左腕を痛めたらしい。

「シールドエネルギーはまだ大丈夫……はっ！ブラックウオーグレイモン？
ブラックメタルガルルモン!？」

楯無はパートナーの名前を呼びながら辺りを見回す。近くには動く様子のない二体が倒れていた。楯無は一回ミスティアス・レイディを解除し二体の所へと走って行った。

「楯無……よかった……傷はそこまでひどくなかったようだ……」

ブラックウオーグレイモンは無理やり体を起こして言う。ブラックメタルガルルモンに至っては体中から火花が出ていた。

「ごめんなさい、私が頼りないばかりに……」

「楯無のせいじゃないよ。だからそんなに気にしないでくれ。」

ブラックメタルガルルモンはそう言いながら体を起こす。

「ぐっ!」

「二人とも無理しないで。今ミレイさんに連絡を……」

楯無がそう言おうとした瞬間、彼女の目の前に妹の簪とパートナー・セラフィモンが飛んで来た。

「お姉ちゃん、大丈夫だった!？」

「簪ちゃん!」

「織斑先生の連絡が届いていなかったようだから心配していたけど……っ、その腕大丈夫なの!？」

簪は心配そうに楯無の左腕を見る。よく確認はしなかったがかなり出血していた。セラフィモンは倒れているブラックウオーグレイモンとブラックメタルガルルモンを背負う。

「簪、この二人もかなり重傷だ。急いで手当てをしないと。」

「そうだね。こちら更識、織斑先生応答願います。」

『織斑だ。今、降下して来た三人とドウフトモンを確認したところだ。どうした?』

「お姉ちゃんを無事保護しました。怪我をしているので一旦『猫である』に戻ります。」

『了解した。こちらは織斑たちと合流した後、ドウフトモンへの攻撃を再開する。お前は彼女を収容した後、次はデュークモンの捜索にあたってくれ。彼のことだからおそらく無事だとは思いますが……』

「わかりました。お姉ちゃん私にしっかりと掴まって。」

「ありがとう、簪ちゃん。」

そう言う簪は楯無に肩を貸して「猫である」を目指して行った。

デュノア社 入り口

「どうにか出られたか。」

クレニアムモンはカプセルを背負って入り口から出る。外は何かの衝撃波でも起こったのかビルのガラスはすべて割れていた。

「今まで無事だったガラスがすべて割れている……エグザモンの技にしては大規模な破壊はされていないようだが……」

クレニアムモンはカプセルで眠り続けているマークを見ながら歩き始める。「とにかくこの男を一旦御神楽ミレイに診てもらわねば……おそらくこの男がドウフトモンの言っていたパートナーだ。彼の目さえ覚ませば……あるいは。」

そう言いながら彼はゲートを開いて中へ入っていった。

デュノア社近辺

「うおっ!？」

一夏たちは地面へと激突する寸前、低出力でオメガ・バスターを撃つたことで衝撃を和らげて着陸した。三人が上を見上げるとドウフトモンが天空から舞い降りる竜のよう姿を現していた。

「どうにか地上にでつかい穴が開くことだけは阻止できたようだな。」

「私はもうあんな体験はしたくないわ・・・怖いんだもん。」

「俺もリリモン姉ちゃんに賛成だな。」

「一夏!？」

三人がドウフトモンを見上げている中千冬たちが駆けつけてきた。

「無事だったか?？」

「ああ、運良くな。それで千冬姉、楯無生徒会長とデュークモンは?？」

「更識(簪)が保護して、『猫である』に収容した。デュークモンはまだ確認できないが。」

「あの人のことだ、きつと無事だろう。」

一夏はグレイソードを展開する。同時に千冬たちも装備を展開する。

「ふん、さっきの攻撃はまんまと外れてしまったがいくら貴様らが束になってかかってこようともこの私を倒すことは不可能なのだ!」

「それはどうかな？ドウフトモン。」

「ん？どういうことだ。」

「確かに今のアンタはとてつもなく強い。だがそんな強い奴でも必ずどこかに弱点というものがある。だからそれを叩く！」

「馬鹿め、超究極体となった私に弱点などない！故に貴様らが私を倒すことなどありえないのだ！」

ドウフトモンはそう言うのと体を変形させて竜人に近かった形態を竜へと移行していく。それは一見にしてインペリアルドラモンをイメージさせた。

「この我がレオパルドモードを見ろ！かのインペリアルドラモンと似ているが本領を發揮するのはその逆！この姿でこそ私の力をフルに使うことができるものよ！」

ドウフトモンは牙をむき出しにして一夏たちに襲い掛かる。

「みんな気をつけろ！向こうも全力だ！一瞬の隙が命取りになる！」

一夏たちは一斉に攻撃を仕掛ける。

「吾輩は猫である　まだ名がない」　治療室

「.....」

ミレイはデュナスモンの治療を終えた後すぐに運ばれてきたブラックウオーグレイモンとブラツクメタルガルルモンを診ていた。近くには既に手当てを済ませた楯無が座っていた。

「私はデュークモンを探しに行くからお姉ちゃんはここで休んでて。」

「ごめんなさいね簪ちゃん。こんなに頼りないお姉ちゃんで……」

楯無は申し訳なさそうに簪を見る。本来は姉である自分が守らなければならないのに怪我をするなんてと思つた。

「そんなことはないよ、お姉ちゃんはいつも私のことを守ろうとしてくれたんだから。」

「簪ちゃん……」

「でも、やり過ぎだと思つうから程々にしてね。私のことを大事に思つうのはいいけどそれ以上だと私に迷惑になるし。」

「ぐっ！最後に痛い一言が……」

「行こう、セラフィモン。」

「分かつた。」

若干凹んでいる楯無を置いて簪はセラフィモンと共に治療室を後に行つた。その直後にミレイが無言で楯無の方に来た。

「どうだつた？あの子たちの治療には……」

「……残念だけど楯無さん、あなたのパートナーたちはもう助からない可能性があるわ。」

「え？」

ミレイの一言に楯無は思わず言つてしまう。ミレイは残念そうな顔で話を続ける。

「あの二体のパートナーの体を調べて見たけど見た目に反してかなりの重傷だったわ。」
「待って、それはおかしいわよ！だってついさっきまで普通に……」

「きつとあなたのことを心配させたくなかったのよ。それだけに今は眠ったままよ。一様修復プログラムと束が残したジヨグレス進化プログラムを合わせて急速治療用に改良したけど……」

「そんな……」

楯無は跪いた。パートナーが重傷を負わせてしまうのはパートナー失格と言われてもおかしくない。

「ブラックウオーグレイモン……ブラックメタルガルモン……」

楯無は寝かされているパートナーたちを見ながら思わず泣いた。

「ゴメン……私のせいで……ごめん!!」

「刀奈……」

ブラックウオーグレイモンはうつすら目を開けながら楯無の本当の名を呼んだ。それは諦めていないという証拠でもあった。

「必ず……また、戦えるようになって見せる……絶対に……」

それに促されるかのようにブラックメタルガルモンも目を開ける。

「俺も……頑張るから……だから泣かないで……ね?」

「二人とも……ん？」

そのとき不意に彼女はデジヴァイスを落とした。拾い上げるとデジヴァイスに何か文字が表示された。

『MATRIX JOGRESS EVOLUTION』

「ジヨグレス？」

二体の体が光り始め分解・再構築を始める。楯無はその中に巻き込まれて行く。

デユノア社近辺

「ぐっ……」

吹き飛ばされていたデュークモンは大量の瓦礫にグラニもろうとも下敷きになっていた。

「瓦礫のせいで動けん……はっ！」

彼は慌てて辺りを見回す。

「デジヴァアイス！啓人のデジヴァイスは!?」

デュークモンは亡き友の形見でもあるデジヴァイスを探す。急がないと思つて混乱していたがデジヴァイス・ディーアークはすぐ近くに転がっていた。彼は手を伸ばすがわずかな距離で届かない。

「後もう少し……もう少しで……」

彼は少し少しと手を伸ばしていく。フレームはかなり傷ついているが自分とパート

ナーが本当に一緒に戦ったかけがえのない大切な物、ここで失くすわけにはいかない。しかし、瓦礫は彼が僅かに動いただけでも崩れようとしている。

「啓人……私に……僕に……ギルモンに……力を貸して……」

デュークモンはやつとのことでデジヴァイスに手が届く。そのとき突然起こった衝撃で崩れそうだった瓦礫は彼の手にあるデジヴァイスを押し潰そうとしていた。

「啓人！」

彼は咄嗟にデジヴァイスを掴む。その瞬間長い年月起動することがなかったデジヴァイスに文字が表示された。

『MATRIX EVOLUTION』

デュークモンと近くに墜落していたグラニが光りだす。その近辺で彼を搜索している簪とセラフィモンがいた。

「セラフィモン、あれを見て！」

「あの光は一体!?!」

デュノア社上空

「うお!!」

「一夏！」

「イチカ！」

吹き飛ばされた一夏を箒とリリモンがキャッチして受け止める。

「ダブルシャイニングVフォー스!!」

「デアーズ集中射撃！」

「龍咆連続発射！」

「トライデントガイア！」

「ジャイアントミサーイル！連続発射！」

「ガルルフルバースト!!」

「無駄だ！エグザモンのカレドヴェールフよりも硬度が上がったこのブラックデジゾイドの翼で貴様らの攻撃は通ることはない！貴様らに残されているのは死のみだ！ギガデスー！」

竜の姿のドウフトモンは口から光弾を吐き出す。一夏たちは急いで避けるがその周囲一帯にあつた建物のがれきなどは一瞬にして消滅し、巨大なクレーターができた。

『みんな気をつけてください！あの攻撃は皇帝竜インペリアルドラモンと同じ技です。命中すれば一巻の終わりです！』

通信でクロエは助言する。一夏たちは警戒しながらも反撃をするが全て防御されてしまう上に反撃の目途が立たない。長期戦のために一同はダメージが大きくなり箒な

どの専用機組はパートナーに支えてもらうことで動けるのが精一杯だった。それを確認したドウフトモンは人型に戻り、アンブロジウスを構える。

「よく超究極体であるわたしを相手にここまで持ったものだ。褒美として一瞬で消し飛ばしてくれる。行くぞ、ファイナル・アヴァロンズゲ……」

「ガルルキヤノン!!」

「何?」

背後からの声にドウフトモンは回避行動をとる。ドウフトモンがいた場所には大出力のビームが飛んで通過していった。一夏たちが目にやるとそこには黒ではあるが見覚えのある騎士が飛行して来ていた。

「あ、あれは……」

「嘘!? 死んだはずなのに!」

「何なんだあのデジモンは?」

箒たちも不思議そうに見る。その後ろからはデュークモンらしきデジモンと簪達が来ていた。

「この感覚……もしかしてお姉ちゃん?」

「貴様! なぜ生きている! オメガモオオオオオオ!!」

ドウフトモンは亡き同胞の名を言う。しかし黒き騎士は否定する。

「否。我が名はズワルト、オメガモンズワルト。聖騎士にして我がパートナーと一心同体となり戦う戦士なり!!!」

「一心同体!?!.....まさか!」

「どういうことだ一夏?」

箒は不思議そうに一夏に聞く。

「あれはもしかして.....更識生徒会長!?!」

騎士の裏切り

デュノア社 上空

「オメガモン．．．．．ズワルトだど？」

ドウフトモンは目の前にいる黒いオメガモンに向かって言う。見た目は確かにオメガモンのままだがその体から発せられるオーラはオメガモン以上に感じられた。オメガモンズワルトはグレイソードを展開するとゆつくりとドウフトモンに近づくと、

「バカめ！ゆつくり近づいて私を斬れるとも思っているのか！」

ドウフトモンは剣をズワルトの胸に向かって突き刺す。

「お姉ちゃん!!」

「更識楯無！」

簪とデュークモンは愚かこの場にいた全員が何をしているんだと唾然したが一番驚いていたのはドウフトモンだった。

「何!?!残像だど!?!」

斬ったのはズワルト本体ではなく水のヴェールに映されていた残像だったのだ。そして気がつくのとドウフトモンの翼の一枚が切断されていた。振り向くとそこにはズワ

ルトが立っている。

「ちつ、ワザとらしいトリックを使いおつて。私の翼を斬り落とした代償、高く付くぞ!!」

ドウフトモンは怒りの目で容赦なくズワルトに斬りかかたつた。ズワルトは水のヴェールを利用して応戦するがパワーとスピード、テクニックを兼ね備えたドウフトモン相手には厳しい戦況だった。

「俺たちも加勢するぞ!」

我に返つた一夏たちはズワルトを援護すべく全員ドウフトモンへと向かつて行つた。

「吾輩は猫である まだ名がない」 治療室

「この様子だともう大丈夫そうね。」

ミレイはベッドで寝かされたデユナスモンの様子を見ながら言う。

「それにしてもまさかあの娘がデジモンと合体するなんて想像もつかなかったわ・・・私が知っている個体でもデュークモンも含めて数少ないはずなのに・・・この世界には私が予測できないことが多いわね。ひよつとしたら他にも未知数の可能性が・・・」

ミレイがこう考えるのも無理はない。何しろ数分前、彼女の目の前で楯無が二体のパートナーの輝きに巻き込まれ、目の前に黒い聖騎士が現れたと思いきやすぐにゲートを開いて消えてしまったのだ。その後、クロエからの連絡で一夏たちとすぐに合流したと聞いたときは何とも言えない感じだった。

「それにしてもあの合体の仕方は基本的にはデュークモンのものと変わらないけど、あの能力はどう見ても彼女の専用機の単一使用能力。もしかしたら他の娘たちも同じことが出来る可能性も少なくは……」

「すまぬ、御神楽ミレイはいるか？」

治療室の入り口から声が聞こえる。

「用事があるのなら入って来なさい。」

「我は大きすぎるため入ることができぬ（汗）。」

「それで用事はなにかしら？」

「デュノア社の地下からドウフトモンのパートナーと思われる男を発見した。昏睡状態のようなのだが意識を覚醒させることはできるか？」

「……ちよつと入り口開けるからその男性を見せてもらえないかしら？」

ミレイがそう言う入り口を開けて顔が見えないクレニアムモンからカプセルを受け取る（と言ってもクレニアムモンがしゃがんだ後、両腕を伸ばして置いてくれたのだ）。ミレイは眠っているマークの様子を見ながら無言になる。

「どうだ、何とかなりそうか？」

「わからないわ。でも、方法はいくつもあるわ……」

デュノア社 上空

「後は貴様らだけだ．．．．ちつ、まさかここまでダメージを受けてしまうとは私
もとんだ誤算をしたものだ。」

ドウフトモンの目の前には一夏、デュークモン、マグナアルフォースブイドラモンと
リリモン。そして、オメガモンズワルトがいた。箒たちはダメージによる活動限界の上

にシールドエネルギーが切れてしまったためビクトリーグレイモンたちに守られて少し離れた場所から見ていた。

「くそ！一夏たちが追い込まれているというのに私たちはもう何もできないなんて！」
「なんでこんな時にシールドエネルギーが切れちゃう上にガタがくるのよ！こんななんら余計な追加装備でエネルギーをムダ使いするんじゃないわ！」

箒と鈴は悔しそうに見ていた。それは一緒に騒いでいるセシリア、ラウラ。黙って見ているシャルロット、簪と千冬も同じ考えだった。しかし、ドウフトモンは確実に弱ってきている。戦況的には有利に見えるが必ず勝機はあるはず、彼女たちはそれを信じるしかなかった。

「箒、今は一夏たちを信じよう。俺たちだつて精一杯頑張つたんだ。その証拠にドウフトモンは確実に弱っている。」

「確かにそうだが……」

箒は淋しそうな顔で応え、一夏たちの方を見る。

（箒つてば、また一夏のことを考えているんだ……好きなのはわかるけど……）
（リリモンは負傷をしていながらも一夏に後れを取らないようにうまく奴の隙を見つけ出そうとしている……やはり私の力では一夏の隣に立つことはできないのか？……）
箒がそんなことを考えている間にも一夏たちとドウフトモンの戦いは決着をつけよ

うとしていた。

「はあ．．．はあ．．．俺たちの体力もそろそろ限界だ。この一撃に全てを掛ける。」
一夏は龍魂剣とグレイソードを構え、精神を集中させる。隣ではデュークモン、マグナアルフォースブイドラモン、そしてリリモンが準備を整えていた。対するドウフトモンは目まいでもするのか体が少しふらついていた。

（いかん．．．いくら力を制御したとはいえこいつ等との戦いでスタミナを消耗させすぎたか。早くこいつらを倒して休息を取らねば．．．）

彼もまた剣を持ち直し一同は牽制し合っている。先に動いたのは一夏たちの方だった。他の面子はそれぞれの方角へと瞬時に移動し、一夏は真正面から突入していった。

「うおおおおお!!!」

「ふん、真正面から突っ込んでくるなど気でも狂ったか?」

ドウフトモンはアンブロジウスに持ち直して一夏に向かって発砲する。しかし、一夏は位置をずらすとそこにはガルルキャノンを構えたオメガモンズワルトがいた。

「ぬ?」

「ガルルキャノン!!」

オメガモンの射撃でドウフトモンの弾丸は相殺される。一夏はその間にも接近していく。

「ならば防御で……何!？」

ドウフトモンはいつの間にか自分の翼が何かに拘束されているのに気がつく。よく見ると翼をにヨーヨーのような物が縛っていた。紐の方を見て見るとその先にはリリモンがいた。そして、左右には剣を展開しているデュークモンとマグナアルフォースブイドラモンたちが剣を構えていた。

「貴様ら!まさか!」

「許せドウフトモン!インビンシブルソード(無敵剣)!!」

「アルフォースセイバー!」

「おのれ!」

ドウフトモンは斬られる寸前に全力で羽ばたきをし、リリモンを吹き飛ばす。それと同時に拘束も解けたためデュークモンたちは翼を一枚ずつしか切断することができなかつたがそれだけでも十分。巨体を支えるための翼を一部失ったドウフトモンは空中でのバランスがとりづらくなっていた。

「くっ!翼をかなり失ったせいでバランスが……!」

「ドウフトモオオオオオオオオオ!」

一夏はグレイソードと龍魂剣を合わせてドウフトモンに斬りかかる。ドウフトモンもアンブロジウスに剣を差し込み、エネルギーを収束させて一夏に向かって振り下ろ

す。二人の剣？ 同士のぶつかり合いで周囲に衝撃が起こる。

「ぬ、ぬうううううう!!」

「ぐおおお……」

「イチカ!」

「どうなんだデュークモン？ 兄貴はドウフトモンに勝てるのか!?」

マグナアルフォースブイドラモンは心配そうに一夏のほうを見る。どう見てもドウフトモンが防ぎ切ったようにしか見えない。

「防ぎ切られちゃった?」

「いや、それは違うな。」

「ば、馬鹿な……」

ドウフトモンは啞然としながら自分の剣先を見ていた。アンブロジウスと合体させた剣は徐々に一夏の剣が食い込んでいき切断された。一夏の剣はそのまま彼の体を切り裂き、自分の何かが切れた。

「この私が……このドウフトモンの完璧な計画が……」

「散滅すべし、ドウフトモン!」

一夏はさらに一撃を切り刻む。ドウフトモンは落下しながらデータ分解が始まり、光ったかと思いきやエグザモンと分離し、共に落下していきながら叫んだ。

「マアアアアアアアアアアアクウウウウ!!!」
彼はパートナーの名を叫びながら落ちていった。

「．．．．．???
．．．．．どうやらロイヤルナイトの方々は退場されたようですね。」

暗闇の中でルーチエモンは椅子に腰を掛けながら言う。周りには五体のデジモンた

ちが囲んでいた。

「それで……わざわざ顔見せに行くというのか？」

デーモンが聞く。

「ええ、何しろこれから始まる世界を賭けたゲームにみなさん揃って参加していただくのですからちゃんと自己紹介をしなくては失礼ですからね。」

「アンタって、どうしてこんなこともゲームとして考えられるのかしら……」

彼の隣であきれるリリスモン。

「オレ、喰エレバ何デモイイ！」

「ZZZZZZZZ……」

「ふふふふ、では彼らにご挨拶に行きましょう。ついでに我ら七大魔王の新たなメンバーを迎えに。」

ルーチェモンはそう言うのとゲートを開いてほかのメンバーとともに入っていく。ただリリスモン一人は空席になっている席を見つめていた。

「……アイツ、どうして抜けたのかしら。」

旧デュノア社周辺

「や、ヤッター！一夏たちが勝ったわよ！テリアモン!!」

「ばんざーい！勝った勝った！」

「やったねラウラ！」

「ああ。」

「これでセシリアたちの世界は助かったのね！」

「そうですわね!」

「でも、僕は複雑だな。父さんのパートナーを倒したということについては……」
「しかし、倒さなければこの世界は確実に奴の手で破壊されていた。仕方のないことだ。」

一夏の勝利で鈴たちは喜んでいた（シャルロットは複雑な顔であったが）。ビクトリーグレイモンもアグモンに戻り、ロイヤルナイツのメンバーたちもほっと息をして座っていた。一夏たちも箒たちのところに戻り、ほっと息をしていた。

その直後だった。

「まだだああああああ!」

後ろを振り向くとそこには体が分解されかかっているドウフトモンが再び飛んでいた。目はすっかり充血しており体のあらゆるところは強制的にジヨグレス進化した響でポロポロになっている。とても戦える状態ではない。それでも彼の闘志は折れることはない。

「まだだ………私はまだ戦えるぞ!」

「アイツまだ戦おうというのか!?!」

「ドウフトモン、もうやめろ。お前の負けだ。」

一夏は落ち着かせるように言うがドウフトモンの態度は変わらない。

「黙れ!!いくら進化が解けたとはいえ私はまだ戦える!マークがこの世界で受けた屈辱に比べれば私の傷などどうとでもないわ!!」

「どうしてあそこまで……」

「シャルロット!お前にはわかるまい、彼がどれほどこの世界の圧力に耐えかねていたのかを……。親の都合で貴様の母親と強制的に別れさせられ、篠ノ之東というキチガイの作ったISの登場で会社の経営と女性権利団体からの圧力という日々精神を削り取られるような日々、その積み重ねが彼を発狂させ、二度と目を覚まさぬ状態にまでしてしまった!!私のパートナーはこの世界によつて殺されたようなものなのだ!貴様らにそれがわかるか!」

ドウフトモンの言葉に全員が言葉を失う。特にシャルロットと箒は唾然としていた。

「私は許さん!パートナーをこんな仕打ちをし、わが物同然にあの下らん道具を弄ぶこの世界の人間どもを!!ゆえに私はこの世界に鉄槌を……」

「そこまでにしておけ、ドウフトモン。」

ドウフトモンの会話を別の声が止めた。ドウフトモンが後ろを見るとそこにはメディーバルデュークモンがいた。

「メディーバルデュークモン!貴様、今までどこに行っていた!」

「お前は負けたんだ。敗者がこれ以上減らず口を叩くのは騎士としての恥なんじゃないのか？」

「質問を質問で返すな!!今までどこ……!!」

「もう終わったんだ、貴様の計画も俺の芝居も。」

ドウフトモンは自分の首から下のほうを見る。黒い鋭い爪を持った腕が自分の胸を貫いていたのだ。

「貴様……」

「言ったはずだ、お前の出番はここで終わりなんだ。」

メディーバルデュークモンは体を黒く染め、ドウフトモンを一夏たちの方へと投げる。ドウフトモンは動くことなく倒れる。

「メディーバルデュークモン、その姿は!？」

「久しいなデュークモン、我が義兄弟よ。とはいってもとうの昔の話だな。」

デュークモンは黒くなったメディーバルデュークモンを対峙する。すると彼の隣にゲートが現れ、六体のデジモンたちが現れる。

「これはこれは既に集まっていたとは驚きましたね。」

「貴様らは七大魔王!!」

スレイプモンは驚きながら言う。一夏は直接見たことはなかったが噂ぐらいは聞いて

ていた。

「旧ロイヤルナイツの方々に、ヴリトラモン、そしてそのお仲間たちも集まっていたとは……これは手間が省けました。」

ルーチェモンは感心しながら言う。一夏は再びカイゼルグレイモンの姿になり龍魂剣を構える。

「落ち着いてください、私は戦いに来たのではないのですよ？今回はあなた方とのゲームについて話をしようと思っただけです。」

「ゲームだと？」

「ええ、そうですよ。あなた方の世界とデジタルワールド、その全てを賭けたゲームですね。」

ルーチェモンは笑みを浮かべながら言う。

ゲームの予告

旧デユノア社周辺

「世界を賭けたゲームだと!？」

千冬たちも驚きながら答える。ルーチェモンはその反応を楽しんでいるのか笑みを浮かべたままだった。

「ええ、その通りです。……っと、そういえばまだ自己紹介をしていませんでしたね。私の名はルーチェモン、七大魔王の『傲慢』を司る者です。そして……」

「我が名はデーモン、『憤怒』の称号を持つ者だ。」

「オレ、リヴァイアモン! 『嫉妬』!」

「ZZZZZZZ……」

「あつ、彼はベルフェモン。司る称号は『怠惰』です。」

「私はリリスモン、『色欲』の称号を持つ者よ。よろしく、ガキンチョなお嬢ちゃんたち。」

「儂は……」

「お前はバルバモン! 確か……『強欲』!」

老人のようなデジモンが言いかけたときブイブイの言葉で紹介が止まってしまった。

バルバモンは思わずシヨック泣きした。

「わくく!! 儂が言いかけておつたのに!!」

「……………貴様ら、ベルゼブモンはどうした？ 奴も七大魔王の一員だったはずだぞ？」

デュークモンはルーチェモンの顔を見ながら聞く。

「彼なら我々の元から去りました。七大魔王の『暴食』の称号まで捨てて。」

「何!？」

「故に私たちは彼の後釜を探していました。それで無事採用されたのがメディーバルデュークモンです。彼はダークデュークモンと名を変え、我々七大魔王の新たな『暴食』を司るデジモンとなったのです。」

「そういうことだ、分かったかデュークモン。」

ダークデュークモンは腕を組みながらデュークモンを見る。デュークモンは複雑な心境だった。

「さて、自己紹介でだいぶ話がそれてしまいましたでしたがそろそろ私たちが行うゲームの説明をしましょう。」

ルーチェモンは話題を変えるように言う。一夏たちは警戒しながら聞く。

「私たちが行うゲーム、それは我々七大魔王とあなた方の試合です。」

「試合だと?」

「あなたたちの世界にあるISもアラスカ条約というものでモンドグロツソという世界大会で実力を競うというのは知っています。ですからあなた方のメンバーを数名に分け、我々七大魔王のメンバーと戦っていただきます。」

「なあんだ、相手が一人ずつだったら複数で分けられる私たちのほうが有利じゃない。」

鈴はほつとするように言うがデュークモンは首を横に振る。

「いや、七大魔王の実力は我々ロイヤルナイツと互角、それ以上の者もいる。それにやる場所はおそらく奴らの本拠地であるダークエリア、奴らが最も自分の力を発揮できる場所だ。甘い考えを持っていては命取りになる。」

「そ、そんな……」

「さすがデュークモン、ロイヤルナイツの中でも古参の方だけのことはあります。ご察しの通り試合をするのは私たちの本拠地ダークエリア内です。」

「貴様ら! いきなり現れておいて一方的に有利な試合を押し付けるとは卑怯だぞ!」

箒は思わず言う。ルーチェモンはそんな箒に対しても態度を変えず丁寧な口調で話を続ける。

「しかし、あなた方は戦わなくてはならない。何しろこちらには人質やあなた方の世界を滅ぼすためのものがあるのですから。」

「滅ぼすもの?」

「こちらをどうぞ。」

ルーチェモンがいうと配下のデスモンの目から映像が映し出される。それは両手足を鎖で拘束され服は多少ボロボロになっていたが一夏たち、とくに千冬と箒には一番わかる人物だった。

「束!」

「姉さん!」

「彼女は我々の依頼を拒否した上に自爆で道づれにしようとしましたがからね。そのため彼女は我々の本拠地で拘束しています。命に別状はありませんよ?」

「貴様ら……」

「おっと、別に我々全員に勝てば彼女は解放します。それはご安心ください。ただし我々に敗北した場合はこれによってこの世界は滅びます。」

デスモンが映す映像が白黒の模様とオウムガイのような形状をした生物のものに切り替わる。その瞬間、リリモンは急に顔を真っ青にしロイヤルナイツのメンバーたちも啞然としていた。

「あれは!」

「あ、あああ……」

「姉ちゃん?」

「リリモン、いったいどうした?」

一夏と退化していたブイモンが呼びかけるがリリモンには聞こえていないのか彼女は震えて動かなくなつた。箒も心配そうに近寄る。

「このリリモンの震え……普通じゃない。まるで何かにおびえているようだ。」

「彼女が震えるのも無理はない。あれこそが我らの故郷デジタルワールドを壊滅にまで追いやつた元凶なのだからな。」

スレイプモンは落ち着きのない顔で言う。

「それはどういふことなんですの?」

「あの生物イーターこそ、このデュークモンたちが恐れた存在なのだ。」

「「あれがイーター!?!」」

鈴、簪たちはじつとそのイーターの映像を見る。不気味に光る眼は思わず体が震えてしまう。

「あなた方が私たちのゲームに参加されなかつたらこのイーターたちがこの世界に現れ、この世界の人間はみな一人残らず生きた屍へと変わるでしょうね。」

「生きた屍? それはどういう意味だ?」

「奴らが捕食するのはデジモンだけではない。人間の精神データさえも捕食する。デー

タを捕食された人間は二度と目を覚ますことのない。まさに生きた屍というものだ。」

「何それ!? 死んでいるわけじゃないのに二度と目を覚まさないなんて!」

「だがおかしい、イーターがデジタルワールドを壊滅寸前にまで追いやっていのにどうして貴様らダークエリアのデジモンは何ともなっていない? 同じデジモンならばイーターに捕食されるはずだ。それも貴様ら七大魔王も例外ではないはず。」

一夏はルーチェモンを見ながら言う。ルーチェモンは面白いのか愉快そうに答える。

「あなたは十闘士の物語を読んだことがありますか?」

「物語?」

「あつ! 姉さんが臨海学校の時に話していたあれか!」

「どうやら知っている方がロイヤルナイト以外にいるようですね。では簡単に説明いたしましょう。太古、我ら暗黒デジモンの住処であるダークエリアはかつて十闘士によって倒されたアポカリモンが眠る地、そしてイーターが現れ始めたのもダークエリア……」

「まさか!!」

デュークモンとスレイプモンは何かを察したように言う。

「そう、イーターが我々を襲わない理由。それはイーターが我ら暗黒デジモンの祖先アポカリモンの一部から生まれた存在だからです。」

「アポカリモンの一部?」

「でもおかしいよ、アポカリモンってさつき聞いた話だとずいぶん昔に倒されたんだよね?倒されたはずのデジモンがなぜ……」

「そうよ!チョー昔に死んだはずのデジモンがまるで体だけ残ったまんまみたいな話じゃないのよ!」

「……その通りだ、多分。」

「え?ちよつと箒、アンタ今なんて言った?」

「姉さんの話した話だと十闘士が倒したのはアポカリモンの上半身と言っていた。つまり、まだ体自身は残っているんだということなんだと思う。」

「えつと……つまり……」

「まだ下の部分が残っているということ。」

箒に言われて鈴は何も言えなくなってしまった。

「下半身が残っていたとしてもどうして今になってその一部からイーターができましたの?」

「俺の頭から今までの話を整理すれば空っぽになってしまった器には何かを入れなければ満たされない。それは現実と言う人間が己の欲望を満たそうとする行動と同じ原理なんだろう。つまり本体を失ってしまったアポカリモンの体は復活するために本体の

代わりになるものを探そうとした。しかし、それだけではどうにもならない。そのためにやつの体は独自の進化をし始め、太古のデジタルワールドの時のようにほかのデータの塊であるデジモンを取り込むことによって変わりの器を作ろうとしているんだ。」

「つまり、そのために大量のデータを必要としているわけか。それに暗黒デジモンなら自分と同じ存在だと認識されて襲う心配はない。」

一夏の仮説に千冬は結論を言う。

「その通りです、いやはや見事な推理ですよ。」

「っていうことはこのままほっといたら鈴たちの世界も僕たちデジモンの住むデジタルワールドみたいになっちゃうの?」

テリアモンが心配そうに聞いてくる。パートナーである鈴はどうにも答えることができなかった。一夏は覚悟を決めてルーチェモンを再び見る。

「ルーチェモン、お前のゲームを受けてやるぜ。」

「一夏!」

「ほう、では・・・」

「ただし、条件を付けさせてもらう。」

「ん? 何でしょう?」

「一つは今すぐにはやらないということだ。見ての通り俺たちはドウフトモンたちとの

戦いで心身ともに疲弊している。それに今の俺たちじゃ相手不足だろう?」

「なるほど、要は時間がほしいということですか。そのくらいなら認めましょう。」

「それともう一つ、お前と俺は一对一の勝負だ。俺はこの中で一番実力がある、他のペアがいたら邪魔だろうし、他のほうに分ければアンタも俺の全力で戦える。」

「それは面白いことを言ってくれますね、いいでしょう。」

「ルーチェモン!」

「お主、あんな小童の言うことを聞くというのか!」

ルーチェモンの言葉にリリスモンとバルバモンは驚く。

「しかし、こちらは無条件で要求を呑むわけにはいきません。こちらも条件を出させていただきます。」

「それは?」

「一つは織斑千冬が所持している水のスピリットをこちらに渡していただきます。そしてもう一つは逃げ場がないように私たちがデジタルワールドで特殊なステージを用意させていただきます。場所はまだ言いませんが。」

「よし、分かった。」

一夏は千冬から水のスピリットを受け取り、ルーチェモンに向かって投げる。ルーチェモンはすんなりと受け取った。

「これで取引は成立です。イーターについてはしばらくゲートを封鎖しますのでご安心を。篠ノ之東の身柄の安全は保障しましょう。期間は1カ月、入り口はあなた方の学園からゲートでご招待します。よろしいですね？」

「了解した。」

「それでは皆様方、御機嫌よう。1か月後を楽しみにしていますよ。」

ルーチェモンはそう言いながら再びゲートを開いて去って行った。ダークデュークモンはデュークモンを見ながら無言でゲートに入って行った。ゲートが閉じると箒たちは一夏たちの方へ集まる。

「一夏、どうしてあんな奴のゲームを受ける気になったんだ？」

「いくらお前とはいえ奴と一対一でやるなど命がいくつあつても足りんぞ。」

「あつちには東さんが捕らえられている。こつちが断れば無論奴らは殺すだろうし、たとえ断れてもこの世界の滅亡を早めるだけだ。」

「でも、私たちみんなで力を合わせれば……」

「さつきこの場で戦って勝てるという保証があるか？ほとんど力を使い果たした俺たちが。」

一夏の一言に全員黙る。その中リリモンは若干顔が青いままだったが立ち上がって歩き始める。

「リリモン、お前……」

「今更くよくよしても仕方ないわ、とりあえず戻りましょう。いま必要なのは休息、特訓はその後からでもできるわ。」

そういうと彼女はふらついた状態でありながらも飛んでいく。

「確かにリリモンが言うのも正しいことだ。私たちも相当疲弊している。休めるうちに休むのも大事だ。私たちも戻ってI S学園に帰るぞ、返事は？」

「……はい。」

「了解しました。」

千冬の指示で全員「吾輩は猫である」の方へと向かう。その中シャルロットは違う方向へと歩いていく。

「デュノア、どこへ行くつもりだ？」

「織斑先生は先に戻ってください。僕とレナモンは少しやることがあるので。」

そう言うときシャルロットとレナモンは千冬たちと別れて行った。一方の筈は人間の姿に戻らず歩いている一夏の姿を見て考えごとをしていた。

（一夏は最近無理しすぎているような気がする……でも、私にできることはあるのか？こんな私に……）

友へのメツセージ

???

私がマークと出会ったのは私がまだガオモンに進化して間もない頃だった。私は偶然デジタルワールドに来てしまった彼を見つけ、話していくうちに仲良くなった。彼も私と同じ好奇心旺盛な性格で瞬く間に意気投合し、自分が元の世界に戻る方法を見つめることと冒険を一緒に楽しみ、私たちはかけがえのない友（パートナー）へとなった。そんな彼にはある日課があった。

「何を書いているんだよマーク？」

「え？何って日記だけど。」

「ニツキ？なんだそれ？食い物の名前か？」

彼は自分の一日の出来事を記録していた。私は強引にも読ませてもらったが私と彼が行ってきたことがまるで物語のように書かれていた。

「スゲー！マークってデンキとかっていう感じに自分のこと書けるのか！」

「いや・・・そういうわけじゃないけど。っていうかそれを言うなら伝記物だよ。」

彼は困った顔をしながら言う。私は面白がりながら日記を読み続けた。

「いいな、俺もこんな風を書いてみたいな。」

「書いてみる？書き方なら教えるけど。」

「本当!？」

ここから私たちの交流はさらに深まった。

彼が12のとき、初めて自分のガールフレンドを私に紹介した。これが後に彼が愛した女性ノエルだ。彼女は最初は驚いていたもののすぐに打ち解け、後にドルモンがパートナーとして加わりデジタルワールドでの旅を始めた。その一年後にはエリザとキヤンドモンが加わり旅は楽しいものへと変わった。マークはこの旅で次第にノエルに惹かれていき、彼女もまた彼に惹かれ後に恋人同士になった。そして、一日一日がかけがえないものへと変わった。

しかし、物語に終わりがあるように私たちの旅にも終わりが来た。彼ら三人はどんなに嫌でもいずれば大人へと成長する。大人になれば社会と向き合わなくてはならない。それが人というものだった。彼らは社会と向き合うためデジタルワールドから離れな

「これでも考えたほうなんだぞ！」

「わかってるよ、約束だ。それまで元気だな。」

「ああ！またいつか会おうな！」

私たちは再会を誓って別れて行った。

私はその後自力で進化できるようになり、ドウフトモンと名乗るようになった。その後ロイヤルナイツのメンバーとなり、主君イグドラシルに仕えた。この時期にキャンドモンことデユナスモンと再会した。その後デジタルワールドでイーターが発生、私たちは恐るべき敵を駆逐するためにロイヤルナイツ総動員で行動を開始した。しかし、予想以上のイーターの数に苦戦、その後私たちはある選択肢に迫られた。

一つはイグドラシルによるデジタルワールドのリセット。これは別のデジタルワールドを作り、現在のデジタルワールドの中から一部のデジモンだけを移動させ、全てを消すことである。これならイーターを確実に仕留められるのかもしれないがデジタルワールドを新たに作るには時間がかかるうえにイーターによってすべてのデジモンを捕食されかねない。それに大半のデジモンを皆殺しにするのは神とはいえ許されざる行為だ。

もう一つの方法は人間界への一時的な避難だ。こちらもデジタルワールドのリセットではあるが人間界へのゲートを封鎖してしまえばイーターが追ってくる心配はない。しかし、人間の反応によっては一つ目以上に危険が多い。

私は一つの賭けに出ることにした。

マークに会ってデジモンの危険性の無さと我々の目的を話してもらうのだ。最初は

小さな動きでもやがてはそれが大きいものへと繋がっていく。それにエリザやノエルもいる。私はこのことをイグドラシルに伝え、人間界へと向かった。これがうまくいったら彼に私のこれまでのことを伝えよう。そう思いながら私は向かった。

．．．．．伝えるはずだった。

私は病院で目の覚めることのない彼の姿を見た。私は思わず跪いた。

「嘘だろ？マーク．．．．．目を覚ましてくれ、私だ、ガオモンだ．．．．．」

私は彼の遺品でもあった私の日記で全てが分かった。

彼は家の事情でノエルを別れ、エリザと結婚した。だが、その後の会社の経営、ISの登場、女尊男卑。全てが彼の夢をぶち壊し、追い詰め、そして、自殺へと追い詰めた。そして、彼は永遠に目覚めぬことのない眠りへとついた。

「．．．．約束したじゃないか。再会するときまで書き続けるって？楽しい時も、つらい時も、苦しい時も書き続けるって．．．．．なあ？」

私は涙を流しながら彼に声をかけた。彼は何も答えない。ただ私の話だけが聞こえて虚しくなるだけだった。

「なぜ．．．．なぜ彼がこのような運命を歩まねばならんのだ!!」

私は泣いた。己の生涯の中でおそらく一番辛いことだったことであろう。私は誓った。

この世界を壊す。例え仲間が消えようとも、どんな手を使つても。

デジモンの未来のために．．．．マークを奪つたこの世界に復讐するために．．．．

デュノア社 周辺

「ゴフツ！」

ドウフトモンは血を吐きながら目を覚ます。視界は不安定であつたが辺りを見回すことはできた。誰かが自分を運んでいるようだ。彼は視界を下にやると見覚えのある少女が自分をパートナーと一緒に運んでいるのを確認できた。

「なんの………つも、りだ………シャル、ロット………」

ドウフトモンの意識が戻ったことに気が付いたのかシャルロットは言う。

「何って、治すんだよ。君の傷を。」

「な………?」

「確かに君がやったことは許されることじゃない。でも、父さんのパートナーだったってことは変わらないんだ。だから一緒に連れていく。」

「………」

ドウフトモンは黙って彼女を見る。明らかに母親の面影をあり、父親に似た性格だった。

「もうすぐ着くから、そこで治療すれば………」

「無駄だ………メディーバルデュークモンの一撃は私の急所を貫いた。私はもう助からん。」

「希望は捨てちゃダメだよ!やってみないと………」

「ふん、貴様は父親と母親のいいところを受け継いでいるようだな。……ゴフツ!」

ドウフトモンは再び吐血する。もうあまり時間が残されていない。そこへ遅かったことを心配したのかノエルとアルファモンが迎えに来た。

「シャルロット。」

「母さん。」

「・・・私も手伝うわ。」

ノエルはそう言うに加わった。アルファモンも手伝おうとしたが気を使ったのか敢えて見守ることにした。

『吾輩は猫である まだ名がない』 治療室

「じゃあ、この方法でやればシャルの親父さんは……」

「可能性はあるわ。でも問題は……」

「兄貴！レナモンたちが戻ってきたよ！」

シャルロットたちが戻ってきた頃、けがの当てを受け終えた一夏たちはミレイから何かの話を聞いていた。

「ミレイさん！いますか！」

「シャルか。今丁度話を……ってドウフトモン!?」

シャルロットたちがドウフトモンを担いで運んできたことに一夏たちは思わず動揺した。

「デュノア！なぜそいつをここへ連れてきたんだ！そいつは私たちを殺そうとしたやつなんだぞ！」

「でも……!!」

箒の言葉に答えようとしたとき、シャルロットは一夏たちの後ろにあるカプセルの中で眠っている男に目が付く。

「お父……さん？」

「な……何!?!」

今までぐったりしていたドウフトモンが突然シャルロットたちを突き放して一夏たちの前に立つ。

「貴様ら！マークに触るなっ……ヴッ!!」

血をまた吐き出しドウフトモンは倒れる。再び立ち上がろうとするが手を見た時すでに分解が起こりつつあることを理解した。それでも彼ははっついていく。

「誰も……触るな……」

「ドウフトモン……」

「……あなたのパートナーを救う方法はあるわ。」

ミレイがドウフトモンを見ながら言う。突然の言葉にドウフトモンは思わず顔を上げる。

「どういうことだ?」

「彼らが戻ってくる前にあなたのパートナーの状態を調べてみたけど確かに身体の機能のほとんどがすでに停止して蘇生は不可能に近いわ。でも、唯一脳はまだ無事だった。」

「だからどうだというんだ?」

「デジモンの体の中枢機能とも言えるデジコアを模した物に彼の記憶・および人格を移し替えるの。そこまではいいんだけど問題はここからなの。」

ミレイの隣にいた一夏が代わりに言う。

「つまり、問題はそのデジコアを何に移植すればいいのかということだ。コンピュータに移植することも可能だがその場合だと本人の精神が不安定になる。かといってデジモンに移植するのはあまりにも非人道的だ。」

ドウフトモンは黙りながら話を聞く。シャルロットたちは何となく予想ができた。

「……それは私の体に移植することも可能なのか？」

「できるにはできるわ。でも彼の人格がかつての彼のものだという確証は持てないわ。それに逆に本体であるあなたが回復するだけなのかもしれない。それにもし成功したとしても人間ではなくなった自分を受け入れられるのかというのも問題になるわ。」

「……それでもいい。私はどのみちこのままでも死ぬ。せめて彼のために何かができるのはなら本望だ。」

ドウフトモンはシャルロットの方を見て言う。

「シャルロット……私が貴様に言うのはこれで二度目になるが今度は命令などではなくこのドウフトモンの頼みとして聞いてはくれないか？」

「うん。」

ドウフトモンは答えを聞くと彼女のデジヴァイスの端末に何かの情報を送り始める。

「それは……私がマークと別れた後の人生を日記としてまとめていた物、つまり自伝のようなものだ。」

「これをどうすればいいの?」

「もし、マークが無事に目覚めることができたらそれを彼に見させてくれ。……」
私の口からではもう伝えることはできんからな。」

ドウフトモンは真剣な目で言う。シャルロットはもう何を言おうと彼の考えは変わらないと理解した。

「わかったよ。」

「それともう一つ頼みたいことがある。」

「頼みたいこと?」

数時間後

ドウフトモンの体にコアを移植する手術はそれからすぐ始まった。一夏たちは全員退室し、手術はミレイとクロエのみで行われた。一夏たちはお互い休息をとるために離れて行ったがシャルロット、ノエル、エリザとそのパートナーたちは残った。

「……………すべて私の責任だ。」

体中に包帯やギプスを付けているデュナスモンは申し訳なきような表情をしていた。

「私をもっと早く彼を止めていれば彼はこんな暴虐をすることはなかった。それなのに……………」

「デュナスモン……………」

エリザは彼の顔を見ながら何も言えなくなる。シャルロットは複雑な心境で手術の成功を祈っていた。

（この手術がうまくいってミレイさんの推論通りだったら僕はお父さんに会うことがで

きる。でももし、お父さんが混乱したら僕や母さんたちで支えることはできるのだろうか？お父さんは僕のことを本当の娘として見てくれるのだろうか？」

「シャル。」

「はっ！どうしたの母さん？」

シャルロットは考え事をしていてせいでノエルの声掛けに驚いてしまった。

「お父さんに会うのが怖い？」

「そ、そんなことは……」

「隠さなくてもいいわよ。」

「う、うん……何しろドウフトモンが演じていたお父さんの方しか知らないもんだから。」

そのとき丁度ミレイたちが出てきた。三人は心配そうに見る。

「……どうだったんですか？ミレイさん。」

「崩壊しかけていたドウフトモンの体はマーク・デュノアの記憶・人格を記録したコアを移植したことによって体の修復には成功したわ。」

三人はとりあえずホツとする。

「でもここからは私でも保証できないわ。マーク・デュノア本人の意識が戻るかどうかは確認できないし、成功してもそこから先はあなたたち三人でやっていかななくてはなら

ない。それだけは覚悟しておいてちょうだい。」

ミレイの一言に三人は息をのむ。

「私とクロエは一時間ぐらい休息をとったらドイツに向かつて本艦を移動させるわ。シユヴァルツェ・ハーゼ隊を送り届けなくてはね。彼も間もなく意識が戻るわ。後はあなたたちと彼次第よ。」

そういうと彼女たちは歩き去って行った。三人は部屋の中に入っていく。部屋では包帯を巻かれたドウフトモンが寝かされていた。三人はその寝顔を見る。

「・・・マーク。」

ノエルの口から言葉が出る。すると意識が戻ったのかドウフトモン？は目を開ける。

「・・・・・・・・・・。」

「マーク？」

エリザは心配そうに彼の名を言う。彼は不思議そうに二人の顔を見ていた。

「・・・・・・・・・・私は確かあの時・・・・・・・・・・エリザ・・・・・・・・・・ここは・・・・・・・・・・！」

ドウフトモン？は起き上がって自分の体を見る。

「これは!?!私の体は!?!」

「・・・・・・・・・・それはお父さんが一回死んだからだよ。」

シャルロットの言葉にドウフトモン？に言う。彼はシャルロットの方を見ると戸惑

うように言う。

「お父さん？それは一体どういうことなんだ？」

「マーク、あなたはあの時本当に死んだの。」

エリザが複雑な顔で言う。それを聞いた彼はさらに戸惑う。

「ではどうして私はこの姿になっているんだ？今いる私は一体何者なんだ!？」

「……それはね、ガオモンがあなたに残した最後の贈り物よ。」

「ガオモンが？ガオモンはどこにいるんだ!？ノエル、エリザ。ガオモンは……。」

「お父さんの体がドウフトモンのものだったんだよ。」

シャルロットは端末をモニターに差し込み映像を映す。そこには手術前のドウフトモンの姿が映し出された。

「わ、私!？」

『マーク……これはもし君の意識が戻った時に備えて私が残したものだ。これから君に置きた事のすべてを話す。私はかつての君のパートナーであるガオモンだ。そして……』

ドウフトモンの言葉をマークは黙って聞き続けた。

自分が世界を滅ぼそうとしたこと。

ノエルを事故に見せかけて殺そうとしたこと。
娘であるシャルロットを利用したこと。

手術までの経緯。

彼はただその言葉を聞くしかなかった。

『君を私と同じ姿、デジモンにしてしまったことは本当に済まないと思っている。だが、君にはどうしても生きていてほしい。君にはエリザ、ノエル、そして君の子供のシャルロットがいる。私は許されざる者ではあるが君はまだ死んではならない。故に君のすべてを私の体に移し替える。厳しいことかもしれないが君と同じ境遇を生きている一人の少年もいる。だから二度も死ぬようなことはしないでくれ。ウツ！』

会話の途中でもドウフトモンは傷口から血を流していた。

『これ以上話すと手術に響く。私は言うのはここまでだ。最後に一つ言い残しておきたい。……私は君と共にある。もうあの時のようには話すことも見ることもできないが私は君と共に生きている。だから君も懸命に生きてくれ、ロイヤルナイツのドウフトモンとしてではなく、ノエルのかけがえのないパートナーでシャルロットの父親である人間マーク・デュノアとして。』

ドウフトモンのメッセージにマークは思わず涙が流れてきた。

『君と出会えてよかった。ありがとう。』

「ええ、もうあの三人の前じゃ私はなんか居づらいから。」

エリザはそういうと小さな声で言った。

「よかったわね。マーク、ノエル。」

この後、「吾輩は猫である（まだ名がない）」はドイツでラウラを除くシユヴァルツェ・ハーゼ隊を送り届けた後に日本へと帰還した。マーク・デュノアは生徒の混乱をできるだけ避けるために妻と共にデジラボでリハビリ、一夏たちは七大魔王との対決に備えるべくロイヤルナイツのメンバーたちと共に特訓を開始した。

傲慢の影

フランスのドウフトモンとの決戦を終えてから早くも数日。

戦いの傷が癒えた一夏たちは次なる強敵七大魔王打倒と束の奪還、そして、自分たちの世界とデジタルワールドを救うために特訓を続けていた。

その一方で荒廃しきっていたデジタルワールドで一人オートバイに似た乗り物を使い回す者がいた。

「……か。」

マシンから降りたデジモンは荒廃しきった荒野の手を触れてみる。すると彼の手が見えない壁に当たった。

「やっぱり結界を張って生き延びていやがったか。あの老いぼれども。」

彼はそういうとマシンに乗り直し真っ直ぐと進む。するとゲートが開き中へと吸い込まれた。彼はそれでも真っ直ぐとマシンを走らせる。

しばらくすると一筋の光が見えてきた。そこを通り抜けると

「よう、まだくたばっていないとは流石だな。」

「ふん！貴様とてよくここが分かったな。」

真紅の体に複数の翼をもつデジモンが言う。

「まあ、イーターを侵入できないような対策は万全つてところのようだな。現にここに来るまでイーターはここを見向きもしなかった。」

「だがそれも時間の問題だ。奴らは我等デジモン同様に進化を続けている。いずれはここも感づかれるだろう。」

「ところでお主とてただでここに来たわけではあるまい。」

竜のようなデジモンと亀のようなデジモンが聞いてくる。

「ああ、ちよつとアンタらに預けたあれを取りに来たんだ。」

「あれじゃと!?あれは貴様が七大魔王に上がると同時に封印を決めたはずではないのか？」

「やめた。」

「「何!?!」」

四体のデジモンは驚いたように言う。面倒くさそうに愛機「ベヒーモス」から降りてベルゼブモンは言う。

「なんていうか最近あそこにいるのが嫌になったんでな。それに……」

「デュークモン、あの小僧が死んだことか？」

「いや、連中が俺にとつては気に入らねえことをしたからやめたままで。」

「……人間界か。」

「そんなわけだ。あれは大事に保管しておいてくれてたんだよな？」

「無論。貴様の言う通りに厳重に封印をしておる。しかし、今のお主にその封印を解くだけの力があるのかのう？」

「俺をなめてんじゃねえぜ？ 四聖獣の神様方がよ！」

彼はそういうと彼らが展開した空間の穴へと飛び込んでいった。穴はすぐに閉じ四体は沈黙した。

「……今の奴なら恐らく封印はあの力を取り戻せばかつてデ・リーパーと戦った時の倍以上の強さになるだろう。」

「チンロンモン、それは過大評価し過ぎではないのか？」

「いやいや、スーツエーモン。僕も今の小僧にはそれだけの力が秘められておると思つておるぞ。」

「シエンウーモン、貴様まで……」

四体はそう言いながら彼、ベルゼブモンが戻ってくるのを待った。

???

ベルゼブモンはひたすら続く道を歩き続けていた。そして突然現れる黒い影を次々と二丁のシヨットガン「ベレンヘーナ」で打ち消していった。それでも影は現れ様々な形へと変えていく。

「……………お前で最後のようだな。」

ベルゼブモンは最後の影を見ながら言う。影は形を変え黒ではあるものの彼のもつとも知っているデジモンへと姿を変える。

「懐かしい面だ。そう言えばやりあったのはスーツエーモンの爺が俺に力を与えた時以

来た。」

黒い騎士は無言でランスを構える。ベルゼブモンは銃をしまい、爪を鋭く尖らせる。「だがな、奴から感じられる気迫はこんなものじゃねえ。まあ、所詮はコピーだからしゃあねえがな。」

接近戦で岸の攻撃をかわしながらベルゼブモンは重厚な鎧を切り裂く。

「オラ！ 奴の姿借りてんならもつと俺を楽しませやがれ！」

「……………」

黒い騎士は盾から光線を発射するが彼は避けもせず受け止める。煙が晴れるとそこには少し焦げたぐらいいの状態で近づいてきていた。

「!？」

「こんなもんか？」

ベルゼブモンは一気に接近し、騎士の体を貫いた。騎士の体は分子状に砕け散り、彼の手には小さな電子機器と玩具の銃があった。

「……………懐かしいもんだな。これを拝むのも。」

彼はそつと銃をとる。あちこちが傷だらけで普通の子供なら捨ててしまうような状態だが彼は大事そうに見ていた。電子機器の方は大切にしまった。

「……………マコト、お前これ渡してくれた時言ったよな。『これで悪いやつやつつけ

て』ってよ。まあ、お前もアイももういなくなっちゃったから本来ならどうでもいい約束だ。だから、俺は七大魔王になるとき、お前たちとの思いを踏みにじらねえように四聖獣の爺共にコイツを預けてもらった。……だが、連中が世界が違うとはいえお前たちと同じ人間に手を出すなら話は別だ。どんなに汚ねえ人間ばかりでもお前らのようないい奴らまで見捨てるほど俺は鬼じゃねえ。だからよ……」

ベルゼブモンは銃を大事そうに握りしめる。

「俺にもう一度あの力をくれ！」

彼が念じるとともにしまったデジヴアイスが光を発しはじめ、玩具の銃は大型化し、右腕と一体化した。そして背中からは黒い翼が生え、広げる。

「……ありがとよ。アイ、マコト。」

そう言うときベルゼブモンは陽電子砲を頭上に向けて撃つ。すると空間に大きな穴が開く。彼は翼を羽ばたかせて飛んでいく。

外では四聖獣たちが微妙な顔をして待っていた。

「本当になりおったぞ。あの姿に。」

「話に聞いていたが先ほどとは比べようがない力だ。」

「すまなかつたな、驚かせちゃまって。」

「い、いや……気にせんでもよい（不味のう……これはわし等が予想してい

たのとは比べようにならないぐらい強くなっておる。」
シエンウーモンは冷や汗をかきながら答える。

I S 学園

「はあ………」

夜、箒は一夏が寝ているのを確認するとこっさり外に出て敷地内を歩いていた。ここ数日の特訓も思うようにはかどらずパートナーのアグモンの足を引つ張っているような感じで仕方がなかった。

「このままじゃいけないっていうのはわかっているのに……でも、やっぱり怖い。あのロイヤルナイトよりも強い相手だと聞くと尚更毎晩恐ろしくて眠れない。私はどうすれば……ん？」

その時箒は気の物陰で誰かが座っているのを確認した。

「あれって……もしかしてリリモン？」

箒は悟られぬようにそつと様子を見る。今日は特訓が終わっても今日は自分一人でもう少しすると言って一人どこかへと去って行ったのだ。まさかここにいるとはと考えた矢先に彼女は震えた声で独り言を言っていた。

「ライラモン……私、やっぱり怖いわ。最近いつも同じ夢ばかり見ている。どうしよう………」

箒は何事かと思いい近づいてみた。よく見ると彼女は涙を流して震えながら泣いていたのだ。いつも人一倍気が強く、自分たちのことを手加減なしで相手をし、一夏の頼り

になるパートナーだと箒は考えていた。でも、目の前で泣いている彼女はその反対の泣き虫で日頃の気の強さは感じられられず、寧ろ自分たちより弱く感じた。

「……………リ、リリモン?」

「!!!」

箒に後ろから声をかけるとリリモンは慌てて涙を拭きとつて前を向いた。本人はいつもの態度を装っているが顔には泣いた跡が残っていた。

「な、なんだ。箒じゃないの。どうしたの?最近の特訓がきついから眠れなくなっちゃったの?」

「リリモン。」

「ああ、私?ここでなんて言うか……………精神を説き済ますための……………えつと……………」

「すまない、実はさつきからお前が泣いているところを見てしまった。」

「……………」

箒に言われてリリモンは黙ってしまった。二人は近くのベンチで腰を掛けた。しばらく黙ったままだったがりリリモンから先に話した。

「……………昔のことを思い出していたの。」

「昔って一夏とデジタルワールドを旅していた時のことをか?」

「正確には私とイチカ、そしてライラモンとチビちゃんとの旅。」

「一夏から以前聞いたことがある。ライラモンのことについても。ブイモンが本当の姉のように慕っていたというほどだからよっぽど優しい奴だったんだな。」

「ライラモンは昔からそうだったの。私が言いづらいことはいつも代わりに行ってくれるし、私が悲しいことがあってもいつも励ましてくれた。．．．でも．．．」

「イーターにやられたのか。」

「そう、私は彼女を助けることすらできなかった。だから強くなりたかった。それで修業をした。でも．．．」

　　リリモンはそこまで言うと思わず顔を伏せる。

「最近いつも夢を見るようになったの。私が死ぬ夢を。」

「お前が？」

「ライラモンを死なせてしまったから当然の報いだとは思うけど．．．でも．．．」

「やっぱり怖い。」

　　リリモンは泣きながら言った。これが本来の彼女の姿なのだ。泣き虫でいつも肝心なところで泣いてしまう、一夏とデジタルワールドを旅していたころのままなのだ。箒はそんな彼女をそつと抱きしめて背中をさすっていた。

「．．．大切なものをなくして．．．そして次は自分が死ぬかもしれないと感じて．．．」

それに比べて私は……本当はお前が一番苦しんでいたんだな。すまない。」
箒はそつと慰めた。リリモンはそれからしばらく泣き続けた。落ち着くときまで
ずつと。

……一時間ぐらい泣いてようやくリリモンは落ち着いた。彼女は恥ずかしい一
面を見せてしまったのか少し顔を赤くしていた。

「……なんか、恥ずかしいところを見せちゃったわね。」

「いいさ、私もなんか少し落ち着くことができたし。」

「……そろそろ戻りましょう。明日の特訓に響くといけないし。」

「そうだな。」

二人はゆつくりと寮を目指して歩いて行った。

「……箒。」

「なんだ？」

「あなた……イチカのことが好き？」

「……ああ、好きだ。」

「……そう。……だからってイチカは渡さないわよ。」

「もちろん。でも私だって一夏の傍にいたい。だから諦めるつもりはない。」
「ふふふ、あなたといい友達になれそうね。」

リリモンは思わず笑った。箒も思わず笑った。

この日を境に箒とリリモンは仲が良くなり、特訓中でもデジモンと人間という差に問わず競い合うようになっていった。二人は誓った。

この戦いが終わったら一夏に告白してどっちが好きなのか決めてもらうと。

ダークエリア

「……………ふう。」

ルーチェモンは自分の居城でデビモンたちに音楽を弾かせながら紅茶を味わっていた。そこへ相変わらず無表情のメルキユールモンが体中に包帯を巻いた少女を車椅子で引きながらやってきた。

「おや？エムはもう連れていける状態にまで回復したのですか？」

ルーチェモンは相変わらず生気を感じさせない少女を見ながら言う。エムは相変わ

らず無表情だが何かブツブツと言っていた。

「ええ、自分で歩くことはできませんが私の依代には十分なぐらいに回復してきました。一時はどうなるかと思いましたがホツとしましたよ。」

「ホツホツホツ、そうですか。ゲームが本当に楽しみになりましたよ。」

ルーチェモンは笑みを浮かべながら言う。メルキューレモンは愉快そうに話しを続ける。

「後、ダークデュークモン様はデュークモンのクリムゾンモードを超えるために超究極体の進化を試みているようです。」

「ほう。」

「リリースモン様は機嫌が非常に悪いので見ない振りをしました。後、バルバモン様は休眠しているベルフェモン様を使って何かを考えておられますよ?」

「みんな腕がウズウズしているのですよ。……とところで例の物は揃いましたか?」

「……ええ、全てはあなた様のご指示通りです。」

ルーチェモンは楽しげな顔から急に真面目になりメルキューレモンを見た。メルキューレモンも態度を改め、エムを引きながら案内を始める。しばらく歩き続けると二人は居城のはるか地下へと移動していた。そして彼らの目の前には巨大な正十二面体

の物体、その隣には特殊な鎖のようなもので固定されている光り輝く球体があった。

「おお、この光輝く物が……」

「はい、イーターにより機能が停止していたイグドラシルのコアです。」

メルキュレモンは慎重に一部の拘束を解除する。

『……』

「お久しぶりですね、イグドラシル。会ったのは十闘士が昔の私を倒した時以来ですかね？」

『……』

「ふっ、全ての力を失った状態では話す元気もなくなりましたか。」

ルーチェモンは残念そうに言う。

「しかし、その己の無力感を味わうのももうすぐ終わりです。私は彼らとのゲームを終えた後にあなたを超えた神となる。以前の十闘士たちを圧倒したあの時以上の力を。」

『……ルーチェモン、貴様は再びあの愚かな行為をしようというのか？』

今まで黙っていたイグドラシルのコアはルーチェモンに向かって言う。

「愚か？フツフツ、それは違いますよイグドラシル。あの時は十闘士の予想以上の力に敗北しましたが今度はそのようにはいきません。そのために私は生まれ変わった後、長い時をかけてデジタルワールドを裏から見続けていたのです。同じ過ちは繰り返

「しませんよ?。」

『貴様は何もわかっていない。あの少年、織斑一夏に秘められた可能性を。』

「可能性ならわかっていますよ。彼の底知れぬ力、そして未知なる進化もしっかりと見させていただきました。だから私は今度は本気でいかせていただきます。あなたとかつての私と一体化して。」

『我を取り込んだところでデジタルワールドと人間世界をすべて手に入れられると思っているのか? ルーチエモン。……いや、アポカリモン。』

「その名前で呼ぶのはやめてもらえませんか? デジタルワールドの元神イグドラシル。」

そう言うルーチエモンは再びイグドラシルの拘束を戻し、地下を後にしていったメルキユレモンも後に続く。

「かつての彼女でしたらいかに今の私でも簡単に殲滅できたでしょう。しかし、イーターの浸食を一部でもされてしまったのが運の尽き。今頃彼女の本体は完全にイーターと同化され、ただのバグの塊となっているでしょう。」

彼は暗いダークエリアを唯一照らす不気味な月を見ながら言う。

実はこの会話を静かに聞いていた者がいた。

ルーチェモンの居城から遠く離れた古城

「……やはり、ルーチェモンの正体はアポカリモンの転生した姿だったか……」
人型の上半身に四足歩行の体を持った吸血鬼デジモンの王グランドラクモンは不気味な光を発する水晶を見ながら言う。彼の隣では側近かメイドなのかレディーデビモンがいた。

「いかなさるおつもりですか？」

「……いや、この件に関しては私は関係ない。それに私も奴のゲームというものは興味があるのでね。」

「では。」

「ああ、我々はここから彼と神が選んだ少年の行く末を見守ろうじゃないか。……ただし、私たちにも刃を向けてきたときは別だが。」

「存じております。」

レディーデビモンは頭を下げる。

「そう言えばさつきお茶が淹れると言っていたね。せっかくだから一杯もらおうか。」

「あつ、ちなみにローズティーで頼むよ。」

「わかりました、すぐに淹れてきます。」

レディーデビモンはゆっくりとその場を離れていく。

「ルーチェモン、いやアポカリモン。君のなるという神をじっくり見させてもらおうじゃないか。」

デジタル戦隊デジレンジャイ！

ルーチェモンの世界を賭けたゲームのことは世界を混乱させるという理由で各政府はこのことは極秘事項として黙認していた。その裏では対デジタルモンスター装備の開発を急いでいた。しかし、一方で人間を悪と思っっているデジモンも少なくはなかった。

翌日 I S学園一年一組

「久しぶりの授業だな．．．．」

一夏たちは久しぶりに教室にいた。ルーチェモンのゲームの詳細は学園の生徒たちにも公開していないため、学園ではようやく以前のような授業が再開された。但し、教室にはデジラボから出ているデジモンたちも複数授業を見ていた。

「．．．．とこのようにI Sは拡張領域の限界においても今後の課題が．．．．」

織斑君、聞いていますか?」

「……え? あ、はい! すみません。」

心配そうに聞いてきた真耶に対して一夏は慌てて答える。一夏はこれから先の戦いのことで頭が一杯だった。これからの戦いで勝てるかどうかかわからない上に最悪な場合、ここにいる全員も含めて消えてしまうという恐怖が脳裏からどうしても離れなかつた。

「疲れているならあまり無理しちゃダメですよ? あまり疲れると倒れちゃいますから。」

真耶がそう言い授業を再開しようとした瞬間、教室のドアが開き鬼のような外見に巨大な大剣を持ったデジモンが真耶を取り押さえた。教室は騒然とする。

「な、何なんですか!?! あなたは!?!」

「全員動くな! 動いたらこの女の命はないぞ!」

鬼神のような外見をしたデジモン、タイタモンは愛刀「斬神刀」を真耶の首に向け脅す。生徒と教室にいた幼年期デジモンは怯える。

「俺の名前はタイタモンだ! この女の命が惜しかったらお前ら全員俺の奴隷に……」
「待てー!」

タイタモンが言いかけたとき聞き覚えの無い声が教室に響いた。すると教室のドアから別のデジモンが入ってきてポーズを決めた。

「ジャステイモン！」

更に窓から箒のアグモンとは違うグレイモン系統のデジモンが入ってきた。

「シャイングレイモン！」

更に教室の後ろドアから天使の翼を八枚持った女性の姿をしたデジモンが少し顔を赤くしながら入ってくる。

「……………エ、エ、エンジエウーモン！」

更に天井からゲートを開いてなんかの遺影を持ったブイモンにちよつと似たデジモンが落ちてくる。

「ガムドラモン！」

「五人揃って」

「『『デジレンジャイ!!!』』」

「……………」

思わぬ乱入に沈黙してしまうタイタモンと一組生徒一同。

「さあ、今のうちに逃げるんだ！」

「さあ急いで！」

「え、えつと……………」

なんか流されるままに教室の外へと追い出されていく生徒たち。教室には一夏と箒

たち、そしてタイタモンに捕まった真耶のみとなった。

「おう！」

「さあ来い！」

「デジレンジャイが相手だ！」

「五人揃って」

「『デジレンジャイ！』」

ジャステイモンたちは挑発してくる。

「……一夏、あいつら何者なんだ？」

「戦隊みたいなことしているけど……」

「俺に聞くなよ。」

「セシリア、戦隊って何？」

「それは……」

「一夏たちが困惑している中、タイタモンはどういうわけか真耶を離れた。」

「……違う。」

「え？」

「君らおかしい。君ら五人じゃなくて四人じゃねえか。」

「か、数のことは気にするな！」

「いや、気にするだろう。」

「それは言うな！」

「そもそも登場の仕方の方の時点でアウトだし……その姉ちゃん顔赤くしながらやっていだろう。」

「黙れ！俺の恋人なんだからそのぐらいは許容範囲内だ！」

ジャステイモンの言葉に一夏はなんか思い当たるデジモンを思い出した。

「もしかしてアイツか？」

「何か見覚えがあるのか？」

「本人かどうかはわからないが。」

一夏はジャステイモンに近づいていく。

「お前もしかしてサイバードラモンか？」

「ん？まだ逃げていなかったのか？さっさと……」

一夏はヴリドラモンの姿に戻って見せる。するとジャステイモンは啞然とする。

「ヴ、ヴリトラモン!?!やっぱりここにいたのか！懐かしいな！」

ジャステイモンは驚いた声で言ったかと思うとまたタイタモンの方を振り向く。

「さあこれで五人だ！文句はないだろう！」

「はあ？」

「ま、まあ確かに五人になったけど……そのチビ、それで戦えるのか?」

タイタモンは遺影を持ったガムドラモンを見ながら言う。

「あの遺影に写っているの生徒会長のブラックウオーグレイモンに似ていない?」

シャルロットの言う通り遺影にはウオーグレイモンが写っていた。タイタモンは戦意が失せてしまったのか生徒の席をどかして床に座る。

「座れ。」

全員（何故か一夏も）床に正座する。

「うんじゃ、まず君。」

「はい。」

タイタモンはエンジエウーモンを指名する。

「君やる気あんの?」

「……は、はい。」

「やる気あるならもつと声出していこうよ。」

「そんなにエンジエウーモンをあまり苛めないでくれ。これでも恥ずかしがりや何なんだ。」

「いやいや、恥ずかしいならしなければいいだけだろ。」

「でも……紅一点の役割だし……彼の隣の配置だし……」

「大事なところでもじもじするな！このリア充が！次、その遺影チビ。」
「……………」

ガムドラモンは遺影を持ったままタイタモンを見る。

「お前なんで遺影なんて物騒なもん持ってんの？」

「だ、大事なもんだからだ！」

「大事なもんなら戦う場所に持ってこねえだろ？普通。」

「うるせえ！てめえには関係えねえだろ！」

「えつと……………これには深い事情があるんだ。」

ジャステイモンは真剣な顔で答える。

「……………こいつが本当の五人目だ。」

ジャステイモンは遺影を指さしながら言う。ガムドラモンは思わず泣き目になる。

「え？五人目死んだんか？」

「こつちに来る前に逃げ遅れたコイツを助けるためにイーターに……………」

「兄貴く!!!」

ガムドラモンは思わず泣き始める。

「コイツ、ウオーのこと本当の兄貴のように慕っていたもんだから……………」

シャイングレイモンも何とも言えない顔で言う。

「ゴメンな、最近人間の女はみんな偉そうでムカついていたもんだからつい……」
「……いい、いえ大丈夫ですよ！でも、そんな暴力で返すようなことをしちやダメですよ。」

そう言われるとタイタモンは丁寧に教室のドアから去って行った。

『お嬢ちゃんたちさつきは怖がらせて悪かったな。』

外にいた生徒たちにも謝罪していた。ジャステイモンたちはため息をつくと自分たちも帰る準備をし始める。

「じゃあ、俺らも出直すか。敵帰っちゃったし。」

「おい待て！急に教室に入っておきながら俺らには謝罪の言葉はないのか!？」

一夏は慌てて去ろうとするジャステイモンたちを止める。ジャステイモンたちは訳が分からないと言いたそうな顔をしていた。

「えっ？だって助けるために来たもんだし。敵もいなくなったんだからもう……」

「いやいや、そもそも教室から生徒追い出してまでやることかよ!？」

一夏は思いつきり突っ込む。するとジャステイモンは急に真面目になる。

「まあ、テンションが落ちただがここから本題に……」

そこへ千冬やリリモンたちまでやってくる。

「教室に凶悪な面をしたデジモンが入ってきたとは本当か!？」

「あ、織斑先生。」

「あの怖そうなデジモンならもう山田先生に謝罪して帰りましたわ。」

「ではその集団の方は？」

「あっ！ジャステイモンたちじゃない！」

「おお！誰かと思ったら我等の同志のリリモンじゃないか！よかった生きていたんだな
！」

「どこをどう言えばいいのか千冬たちは状況を把握するまで一組の授業は中断せざる
終えなかった。」

デジラボ

「……なるほど、つまりデジタルワールドからこっちに飛ばされた後、俺のことを探していたのか。」

デジラボで一夏たちはジャステイモンたちの話を聞いた。彼らの話によればドウフトモンたちがゲートを開いたときにこちらの世界に運よく逃げられたらしくデジタルワールドは既にほとんど壊滅状態だったと言う。

「俺たちはその後、お前を探したんだが何しろ名前がイチカと言うぐらいしか知らなかったからな。人間界にイチカと言う名前は結構あったから探すのに苦労したぜ。」

「随分な長旅だったんだな……。」

箒は感心しながら言う。

「そしてついこの間ロイヤルナイツとこの学園の連中が戦ったという情報を入手したからこっちに来てみたんだ。来てみて正解だったぜ。」

「それで話は分かったけどアンタたち一夏に何の用があつてきたの？」

「よくぞ聞いてくれた。えっと……スズオトさん。」

「誰がスズオトよ! 私の名前はリンイン! 読み間違わないでよ!」

「失礼、実はと言うとイチカに頼みたいことがあるんだ。」

「俺に?」

ジャステイモンは急に一夏の前で土下座をする。

「頼む! 俺たちのリーダーになって一緒に来てくれ! そして、イーター共を駆逐して故郷を取り戻そうじゃないか! なあ! この通りだ!」

「お願いします!」

シャイングレイモンとガムドラモンもジャステイモンの後ろで土下座をする。そのことに千冬たちは哑然とした。土下座に関することではない。彼らはまだイーターを裏で操っているルーチェモンたちの存在をまだ把握していないことだった。一夏は土下座しているジャステイモンの顔をあげさせようとする。

「まずは顔を上げろ。」

「顔を上げれば受け入れてくれるか!」

「そうじゃなくてお前たちは知らないことが多すぎると言いたいんだ。」

「何!?! それはどういうことだ!?!」

「まず第一にイーターをいくら叩いたとて解決にはならないぞ。それに……」

一夏は仕方なく一から説明するのであった。

一時間後

「ぐおおおおお！なんてこった！」

ジャステイモンは一夏の説明で跪く。

「すべてはかの有名な七大魔王が元凶だったとは……」

「今説明した通り、奴らがイーターに捕食されないのはイーターと同じくアポカリモンの末裔にあたるからだ。」

「くそ！こうなったらダークエリアに殴り込みだ！」

ジャステイモンはそう言いながらデジラボを後にしようとするが途中から来たデュークモンに止められる。

「そこを退いてくれ！ウォーの……弟の仇をとる！」

「行こうにもダークエリアに通じるゲートは全てイーターに埋め尽くされている。強行突破するには無謀すぎるぞ。」

「だが！」

「来月奴らのゲームが行われる。どうしても奴らを倒したいのならばそれしかない。」

「ゲーム？」

「そのゲームで我々が敗北すればデジタルワールドは愚かこの世界までもが奴らの手に堕ちる。そこでこのデュークモンの提案だがお前たちもそのゲームに参加する気はな

「いか？」

ジャステイモンは黙る。

「無論、ゲームに参加したからと言って我々が不利であるのには変わりない。お前たちとて最悪な場合命を落としかねない上に強制するつもりもない。選ぶのはお前たちの自由だ。」

ジャステイモンは一旦悟りを開くような座り方をして考える。少しするとまた立ち上がり仲間たちの方を見る。

「みんな、俺は魔王共のゲームに参加しようと思う。どの道これしかウオーの仇は取る方法はねえし、参加しなくても負ければ終わりだ。それに……」

ジャステイモンは一夏の方を見る。

「ヴリトラモン、俺はまだあの時助けてもらった借りを返していねえ！だからそのゲームとやらで返してやるぜ！」

「……決まりのようだな。」

「待っていやがれルーチェモン！てめえの首、このジャステイモンが討ち取ってくれるぜ！」

「兄貴かつこいいい！」

「そこに痺れる、憧れる！」

「いや、それほどでも、照れるじゃねえか。」

ガムドラモンたちの褒められて照れ臭くなるジャステイモンだったが千冬は何げなく一言言った。

「あつ、教室の窓ガラス割った分はこれから五日間、お前たち四人で用務員の仕事をして弁償するように。」

「何!?!」

「これでも日数を減らしんだ。文句は言わせんぞ。」

「お、おのれ……やっぱり人間の女は悪……」

「言っておくが千冬姉は俺の姉だぞ。」

「ははー! すみませんでした! きつちりやらせていただきます!」

文句を言おうとしたジャステイモンは一夏の一言で一瞬で千冬に謝罪の言葉を送った。

結局ジャステイモンたちが一夏たちの特訓に加わったのはそれから五日後の話で

あつた。

決戦前日

一夏の特訓はジャスティモンたちの参戦でより熾烈なものとなり、ついにルーチエモンの予告したゲームの前日へととなった。

IS学園 朝 デジラボ

「え？休み？」

千冬の言葉に一夏たちは動揺する。

「聞いての通りだ。お前たちは今まで死に物狂いで今日までの特訓を続けてきた。だから今日一日は奴らとの決戦に向けて休め。」

「でも、今そんなことをしている場合じゃ……」

「している場合じゃないと言いかけた一夏の頭を千冬は出席簿でたたく。
「いってーな！」

「最後の一日だからこそ休むことが重要になる。今日まで全力で特訓して疲労を残したまま明日の奴らとの戦いで勝てると思うか？」

「確かに織斑先生の言う通りですわ。」

「でも、明日の戦い次第で世界の運命がかかるとなると安心して休めないわよ。」

「部屋で一日寝ているのもいいし、外出も構わん。但し、外出する際は門限を守って戻ってくるように。以上、解散！」

千冬はそう言うときささとデジラボから出て行ってしまった。その場に残った一夏たちはしばらく黙り込む。

「……………どうする？一夏？」

「……………そうだな、どっちにしても明日は来るからな。みんなは部屋で休むなり好きにしてくれ。俺はちよつと出かけるから。」

「何？それはどういうことだ!？」

ラウラは気になって聞くが一夏は答える前にブイモンと一緒に去ってしまった。

「じゃあ、僕はここに残って母さんと一緒に父さんのリハビリを手伝いに行くよ。行くう、レナモン。」

「わかった。」

シャルロットとレナモンも離れていく。

「あ~~~~~どうしようかテリアモン？何かおいしいものでも食べに行く？戦う前のスタミナ付けに。」

「僕、たまには外で食べたいな。」

「よし、決まり！今日は外で食事でもしようか！セシリアたちも行く？」

「ご一緒してよろしいんですか？」

「もちろんよ！テリアモンたちも息抜きさせた方がいいし。」

「私も一緒にいいかな？」

「私とガブモンも一緒に行っているか？」

鈴たちが話し合っている中、箒は一人考え事をしていた。アグモンはそんな顔を伺いながら少し心配そうにしていた。

「箒はどうするの？私たちと一緒に行く？」

「……………」

「箒？」

「あつ、ああ！すまない、私は用事があるから遠慮しておく。」

そう言うのと箒は逃げるように去って行く。

「箒、待つてよー！」

アグモンも後を追っていく。

「変な箒。」

「じゃあ、私は一回お姉ちゃんも誘ってみるね。多分、虚さんに捕まると思うけど。」

「そんじゃ私たちも準備終わり次第寮で待ち合わせってわけで解散！」

一同はデジラボを後にしていった。

IS学園 寮 一夏&箒ルーム

「はああ．．．．．」

箒はベッドで寝っ転がりながら大の字になりため息をついていた。本当は用事など

なかったのだ。そんな箒の上にアグモンは大の字になりながら心配そうに聞く。

「ねえ箒、どうしてみんなと行くの断ったの？」

「体がだるいんだ……」

「嘘だ。本当は一夏がいらないから寂しいんでしょ？」

アグモンは起き上がって箒の顔を見る。どうやら凶星だったようだ。箒は顔を赤くしていた。

「一夏とブイモン、どこへ行ったんだろね？」

「そうだな……」

二人は寂しそうに天井を見る。そのとき不意に声が聞こえた。

「イチカなら自分の家に行ったわよ。」

「はあっ!？」

箒が慌てて飛び起きるとそこにはリリモンが腕を組みながら立っていた。

「り、リリモン！いきなり声をかけないでくれ！」

「僕は一瞬心臓が止まるかと思った……」

「だってイチカが出かけたのに箒の姿がなかったもんだから部屋にいるんじゃないかなって。」

リリモンは意地悪そうに笑う。

「今だったら途中で会えるから行って見たら？」

「で、でも一夏に迷惑なんじゃ……」

「何言ってるのよ。明日で全員お別れになるかもしれないだし、一緒にいたいときにいなくてどうすんのよ！」

リリモンの一言に箒は思わず驚く。

「それもそうだがそのことを知っていながらなぜ一夏についていかずに私に知らせに来てくれたんだ？いつもは一夏の傍は私と言い張っていたお前が。」

「勘違いしないでちょうだい。もし私たちが勝手イグドラシルの機能が回復したら私たちは恐らくデジタルワールドに強制的に戻されるわ。私やチビちゃんも愚かアグモンやイチカもね。だから……その……後悔しないように……と、とにかく思い出を作って来なさいよ！」

リリモンは恥ずかしそうな顔で箒に言い張った。箒は一瞬きよんとしてしまったが彼女なりの気遣いと思いアグモンと一緒にさつきと部屋を後にして行った。リリモンはいなくなったのを確認すると一夏のベッドの上に座った。

「……やっぱり、私じゃ敵わないかもしれないわね。箒には。」

彼女はそう言いながら一夏からもらった首飾りを眺める。

織斑家

「懐かしいね、兄貴！」

ブイモンはそう言いながら家の中へと上がり込んでいく。一夏は家の中を見回しな

がら考え事をしていた。

「これで家を見るのも最後かもしれないな……。」

しばらくした後、彼は入れたコーヒーを飲みながらアルバムを見ていた。それは千冬と再会した後から続くこの世界での記録でもあり、自分が再び織斑一夏として生きてきた記憶でもあった。

「このとき、セシリアのサンドウィッチでパタモンが死にかけたことがあったよな……ハハハ。」

「俺あの時食わなくて本当によかったよ。あれ食っていたら俺今頃……なんか考えたら怖くなった。」

二人は笑いながらアルバムを捲っていく。

臨海学校と福音事件

夏休みとキャンプ

文化祭

ロイヤルナイツとの戦い

一夏は黙ってアルバムを閉じる。

「兄貴？」

「チビ、俺たちが明日の戦いで勝ったらどうなるんだろな……」

「え？」

一夏の質問にブイモンは思わず驚く。

「俺たちは以前のような生活に戻るのか？それともデジタルワールドに戻るのか？どう思う？」

「それは……」

「奴らを倒してイグドラシルの機能を取り戻せばデジタルワールドは救われる。だが同時にこの世界にいるデジモンたちは全てデジタルワールドへ戻る。無論、リリモンや俺も例外じゃない。」

「う……ん……俺には難しすぎるよ。」

「簡単に言えば俺がこの世界での任務も終わるということだ。つまり……」

「俺たちも帰るの？デジタルワールドに？」

一夏は黙る。ブイモンは何をしに織斑家に来たのか何となく見当がついた。

「兄貴の本当の家に帰れるのが今日しかないと思ったからこっちに来たんだね。」

「デジタルワールドには俺の本当の家はないからな。だから、この家に少しでも居たいと思ったんだ。千冬姉と俺、そして、今までの思い出が詰まったこの家に。」

一夏は寂しそうに言う。ブイモンは何とも言えない表情になる。一夏はアルバムから一枚の写真を取り出す。千冬と箒、そして学園のみんなまで写った集合写真を。

「守って見せるさ。こっちの世界もデジタルワールドも。そのためにも明日のゲームは勝たなきゃな。」

一夏は少し寂しそうな顔で言うがその瞳には強い決意が込められていた。そこへチャイムが鳴った。誰かと思いい行ってみると箒とアグモンが来ていた。

「箒……。」

「リリモンからここにいて聞いてたから……すまない。迷惑だったか？」

「いや、そんなことはないさ。コーヒーでも一緒に飲むか？ちようど俺も飲んでいたところなんだ。」

「あ、ああ私も飲む。」

二人の姿を見てアグモンは何気にニヤツとしていた。

「……やっぱり一夏のが好きなんだね。箒。」

「
．．．
．．．
．．．
．．．
．．．
いよいよ
いよいよ
明日か。」

デュークモンは屋上で腕を組みながら空を眺めていた。この短い期間自分の持てる全てを一夏たちに叩き込み、彼ができることは明日のゲームで全員が生きて戻ってこれることを祈るぐらいだった。それには理由がある。

三日前 デジラボ

「我等ロイヤルナイツをゲームに出さぬだと?」

「ええ、あなたたちには万が一に備えて人間界で待機してもらおうわ。」

ミレイの一言にロイヤルナイツ一同（マークは除外）は態度には出さないが驚いていた。今までの彼らの方針ではゲームには全員ではないとはいえ参加する予定だった。

「何故だ!?! 私たちが参加しなければ奴らが断然に有利になるんだぞ!」

デュナスモンは思わず怒鳴った。それをスレイプモンが鎮める。

「ではなぜそう決めたのか聞かせてはくれないか? 御神楽ミレイ。」

「状況からしてこの事態は私がこれまで経験してきた事件の中でも今回のケースは何

が起こるかわからないわ。一様、学園の生徒達でもデジモンを扱えるようにISにデジモンキヤプチャーの簡易型をインストールしたけど、これも気休めにしかならないわ。」
「しかし、我等の主イグドラシルは既に魔王共の手中の中。ヴリトラモンたちだけでは……」

「そのためにあなたたちは彼らに手ほどきをしたんじゃないの？」

「ぬっ!」

ミレイの質問にクレニアムモンは思わず黙った。一本取られたと気づいたらしい。するとほとんどのメンバーが嘖き出し、デュークモンでさえも笑ってしまった。

「ぬぬ……我としたことが逆に笑いものにされてしまうとはくくく。御神楽ミレイ、貴様技と言わせたな!」

「あら、私はそんなつもりはなかったわよ。」

「まさかあのクレニアムモンが一本取られるとは……ぶぶぶ……」

「ええい!笑うでない!」

「「ぶ、はははははははは!」」

「あの時はああやって誤魔化してはいたがやはり心配だ。それにメデー……いや、
ダークデュークモンの動きも気になる。」

デュークモンがそう考えている中、偶然千冬が屋上に来た。
「うん？」

「あ、まさか来ているとは思わなかったの。」
「気にする必要はない。」

そう言われると千冬は隣に立って景色を眺めていた。

「よかったのか？ 弟と共に行かなくて。」

「……………私は教師として他の生徒を守る義務がありますから。」

千冬が少し寂しそうな顔をして答えるとデュークモンはため息をついて言う。

「このデュークモンにもかつてパートナーがいた。」

「あなたにもデユノア夫妻や学園長のような人間のパートナーが？」

「この世界とは少し違う世界の人間でな、私はそのパートナーの少年に命を吹き込まれ、一緒に学び、一緒に戦い、強い絆で結ばれていた。」

「ロイヤルナイツは神に仕える集団と聞いていたがやはりあなたも変わらないのだな……………。それでそのパートナーは？」

「……………もうこの世にいない。」

「……………失礼した。」

「私が帰ってくる時が遅すぎたのだ。デジモンと人間の寿命は違う。それ故に別れが本当の別れになってしまうことがある。私と啓人と同じように。」

「啓人……………それがあなたのパートナーの名前か。」

「他にもたくさん仲間がいた。テリアモンとジェン、留姫とレナモン、樹莉、健太と博和……………そしてインプモン。みんな一時忘れることなくこのデュークモンの記憶に刻まれている。」

デュークモンは一枚の写真を千冬に見せる。それはゴーグルを付けた少年と赤い恐竜のようなデジモンなど仲間ですろつた集合写真だった。

「この赤いデジモンがあなたか？」

「ギルモン……それが昔、啓人が私につけてくれた名前だ。」

「そして、このゴーグルの少年が啓人……」

「このデュークモンが言いたいののはたった一つ、大切な者と過ごせる時間を大事にすることだ。ヴリトラモン……一夏とて、明日のゲームに敗北しても勝利しても恐らく別れを告げることを避けることはできない。戻ってこれたとしてもそれはお前がこの世を去った時かもしれない。それでも行かんのか？」

そう言われると千冬は思わず走り去ろうとしたがそこへ丁度真耶が来た。

「あっ！織斑先生。ここにいたんですか。」

「山田先生、丁度良かった。すまないが私も一日外に出る。生徒たちを頼めるか？」

「えっ!？」

「急な話なのは分かっている。だが、弟と一緒に過ごせる時間がもう今日しかないんだ。お願いします。」

千冬は頭を下げて真耶に頼んだ。真耶は動揺していたがすぐに落ち着いて了解する。

「わかりました。でも、織斑先生も時間を守ってくださいよ。」

「すまない。」

そういうと千冬は急いで走って行った。その様子を見届けた後、真耶はホッと息をした。

「演技にしてはうまいものだな。」

「すみません。ああでもしないと織斑先生きつと行こうとしませんから。」

実はこの真耶が千冬に一夏との時間を過ごしてもらうためにデュークモンに頼んで仕組んでいたことだったのだ。

「織斑先生には、家族との時間を大事にしてほしいですよ。織斑君、いつまでこの世界にいられるかわかりませんし……」

「パートナーから聞いたのか？」

「最近ケラちゃん寂しそうに言うんですよ。『モウスグバイバイ。』って。」

「恐らくほとんどのデジモンが同じ考えを持っているだろう。現にこのデュークモンもその別れの時は思いもしなかった時だからな。」

デュークモンは再び空を見上げた。

空は青く澄み渡っており、明日が世界の運命がかかったゲームになるとはとても思えない天気だった。

そして、
運命の日が訪れる。

登場人物（デジモン）紹介4 & 没キャラ

IS学園

織斑一夏／ヴリトラモン／カイゼルグレイモン（ハイブリッド体・魔竜型／竜戦士型・ヴァリアブル種）

本作の主人公でスピリット回収のために人間世界へとやってくる。ロイヤルナイツとの戦いにおいてデジタルワールドがイーターにより浸食されたことを知ったときはどちら側につくか迷うがリリモンや箒たちのことを考えロイヤルナイツと戦うことを決意する。ロードナイトモン戦においてオメガモンの力を引き継いだオメガモードへと覚醒する。

ブイモン（成長期・小竜型・フリー）

一夏の相棒。イーターによって姉のような存在だったライラモンが死亡したことにショックを受けていたが一夏や箒たちによって立ち直る。自分の力の無さを痛感していたが異世界から来たリナのおかげで吹っ切れ、マグナアルフォースブイドラモンへと

進化することに成功した。デユノア社攻略戦ではデユナスモンと激戦を繰り広げる。進化形態はエクスブイモン、エアロブイドラモン、マグナアルフォースブイドラモン。

マグナアルフォースブイドラモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

リナとの戦いにおいて進化したブイモンの究極体。アルフォースブイドラモンの鎧部分が金色で一樣騎士ではあるがこちらはVブレスレッドで拳を包み込んだ上に威力を上げて相手に打ちつけるという戦法を取っている（ちなみに通常個体同様の剣とかも展開可能）。こちらに進化した理由は過去に一度だけマグナモンにアーマー進化した影響。必殺技はマグナラッシュ。

篠ノ之箒

現在メインヒロイン化しつつあるヒロイン。様々な葛藤を抱えながらも一夏たちと共に戦う。現在はリリモンと友人関係であり一夏をめぐるライバル関係になっている。

アグモン（成長期・恐竜型・ワクチン種）

箒のパートナーデジモン。箒が一夏に好意をよせていることを知っている。進化形態はジオグレイモン、ライズグレイモン、ビクトリーグレイモン。

リリモン（究極体・妖精型・データ種）

一夏に会いにデジタルワールドからやってきた。実際はバンチョーリリモン。実力はかなりあるが実は泣き虫だったところは変わっていない。デジタルワールドではずいぶん年月が過ぎていいるはずなのだが未だに一夏一筋。

織斑千冬

一夏の姉でクラスの担任。ロイヤルナイツがIS学園を攻めたときはクレニアムモンと互角の勝負をしていた。一度ラウラと共にドイツに向かい、世界各国のIS部隊による「デユノア社総攻撃」に参加するが敵の予想以上の戦力に苦戦、メルヴァモンの援護によって一時撤退する。その後デユノア社攻略戦では一夏の援護に回った。

ジエスモン（究極体・聖騎士型・データ種）

千冬のパートナー。ドウフトモンとの戦いにおいては時間稼ぎをしていた。

セシリア・オルコット

イギリス代表候補生。ロイヤルナイツによるIS学園攻撃においてメデイーバルデュークモンとの戦いで苦戦する。

ピヨモン（成長期・雛鳥型・ワクチン種）

セシリアのパートナー。メンバーの中で唯一究極体に進化できずにいる。進化形態はバードラモン、ガルダモン。

凰鈴音

中国代表候補生。学園での戦闘ではエグザモンに苦戦した。

テリアモン（成長期・獣型・ワクチン種）

鈴のパートナー。エグザモンに敵わなかったのが悔しかったのかデュノア社攻略戦時には究極体に進化してリベンジをした。進化形態はガルゴモン、ラピッドモン、セントガルゴモン。

更識簪

日本代表候補生。IS学園での戦いでは姉である楯無と共にエグザモンに挑み、デュノア社攻略戦においてはパートナーのセラファイモンとの連携でメディーバルデュークモンと渡り合った。

パタモン（成長期・哺乳類型・データ種）

簪のパートナー。メンバーの中で一番成長期に進化したのが遅かったのにもかかわらず、アグモンとガブモンに次いでワープ進化をした。進化形態はエンジエモン、ホーリーエンジエモン、セラファイモン。

シャルロット・デュノア

フランス代表候補生。IS学園での戦いにおいて窮地に追いやられていたが、死んだはずの実母ノエルと再会する。その後、実父マークがドウフトモンとすり替わっていたことを知る。デュノア社攻略戦においては義母エリザを救出、敵であるはずの致命傷を負ったドウフトモンを助けようとするなど良心がある。その後はドウフトモンの体を通じて蘇生した父と再会する。

レナモン（成長期・獣人型・データ種）

シャルロットのパートナー。IS学園襲撃時には昨夜門にまで進化することができたがメディーバルデュークモンとの戦いにおいては苦戦を強いられた。進化形態はキュウビモン、タオモン、サクヤモン。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

ドイツ代表候補生。IS学園襲撃後一時ドイツに帰国、デユノア社総攻撃に参加するが一時撤退。以降は自分の部隊である「シユヴァルツェ・ハーゼ」で行動をしていたがルーチエモンとのゲームのため日本に戻る。

ガブモン（成長期・爬虫類型・データ種）

ラウラのパートナー。メンバーの中ではアグモンに次いで究極体に進化できるがイマイチ足を引っ張っているように感じている模様。ラウラの部隊である「シユバルツェ・ハーゼ」の隊員たちからはかなりいじられている。進化形態はメタルガルルモン。

更識楯無

ロシア代表。IS学園襲撃などにおいては生徒を避難を優先し自らが囷になるなど判断力に優れている。パートナーであるブラックウオーグレイモンとブラックメタルガルルモンとは長い付き合いでメンバーの中では彼らと合体するという規格外なことを起こす。

ブラックウオーグレイモン（究極体・竜人型・ウィルス種）

ブラックメタルガルルモン（究極体・サイボーグ型・ウィルス種）

楯無のパートナー。その存在は簪ですら知らなかったが長い付き合いのようで普段から究極体でいられるというメンバーの中でも規格外的な存在。パートナーである楯無の本名を知っているなど双方ともに信頼している。

オメガモンズワルト（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

ブラックウオーグレイモン、ブラックメタルガルルモン、そして楯無がマトリックスイヴオリューションで一心同体になった姿。本作ではオメガモン以外似たタイプのデジモンが登場していないため一夏たちは愚かドウフトモンからさえもオメガモンと勘違いされた。実力は合体前以上に向上し、楯無の専用機「ミステリアス・レイデイ」の単一使用能力も使用できる。楯無と合体しなくても進化可能だがその場合は通常の個体と変わらない。

山田真耶

一夏のクラスの副担任。ケラモンをパートナーにしている（但しデジヴァイスは所持していない）。

ケラモン（成長期・種族不明・不明）

真耶のパートナー。元々は一夏たちに保護したクラモンが進化した個体。真耶からは「ケラちゃん」と呼ばれている。

デュークモン（究極体・聖騎士型・ウイルス種）

旧ロイヤルナイツの一人。ドウフトモンと対立したために重傷を負わされるが束に保護され治療カプセルの中で昏睡状態で眠っていた。かつて「ティマーズ」で登場したギルモンの成長した姿。元々パートナーデジモンであったこともあり人間を信用している方であったのパートナーだった啓人のデジヴァイスを肩身離さず所持している。デユノア社攻略戦の時はティマーズの最終回以来のクリムゾンモードへと変わった。

クレニアムモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

旧ロイヤルナイツの一人。最初はドウフトモン側の方でIS学園を襲撃したが千冬と交戦。千冬を好敵手と認め、一騎打ちをした後に致命傷を負うが千冬のデジヴァイスの收容され完治する。以降はデジヴァイスに籠って登場しなかったがこれは主君であるイグドラシルの命令に背いたと自己嫌悪によるものだった。デユノア社攻略戦の時は千冬への恩としてデジタルシフト発生装置の破壊を自ら行い死亡したかに見えたが

頑丈だったこともあり生還する。

轡木十蔵

IS学園の責任者。実は昔ロイヤルナイトのスレイプモンとゾンビを組んでいた。現在はゾンビを解消しているがその信頼は厚い。所持しているデジヴァイスは本編には登場していないが箒たちのおぼぼ同型。

スレイプモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

十蔵の元パートナーでロイヤルナイト。現在でも十蔵達人間を信用しており、イグドラシルからドウフトモン以前に長期調査に訪れていた。普段はクダモンの姿で十蔵の首に巻き付いている（そのため生徒たちからも単なる手ぬぐいにか見えなかった）。ロイヤルナイト内でも行方不明扱いになっており何名かが死んだと思っていた。

ノエル

シャルロットの実母。事故で死んだと思われていたがかつてのパートナーだったアルファモンに助けられ、二年間姿を隠していた。IS学園襲撃時にアルファモンと共に現れ、シャルロットに事の真相を伝える。その後は一夏たちと共に行動し、最終的に

マークと再会する。現在は彼のリハビリに付き添っている。

アルファモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）

ノエルのパートナーでロイヤルナイト。一度別れを告げたがドウフトモンの不穏な動きを察知し、彼女を危ないところで救出し、共に行動する。シャルロットのことはノエルから聞いており、初対面であつたのにもかかわらず一目でわかつていた。

エリザ・デユノア

シャルロットの義母でノエルの親友。夫であるマークの異変に疑問に思っていたが気が付いたときは既にと気が遅く長い間、デユノア社本社に幽閉されていた。かつてのパートナーだつたデユナスモンに対しては過去に自分の元を離れた理由がわからず苦悩していた。その後、シャルロットに救出された後はデユナスモンの説得のために同行し、傷ついて倒れたデユナスモンの告白を受け入れ、和解する。ノエルに対してはかなり罪悪感を感じており、彼女が死んだと思つたときはシャルロットがいた時期も声をかけられなかった。

デユナスモン（究極体・聖騎士型・データ種）

エリザの元パートナーで現ロイヤルナイツ。かつてはパートナーであるエリザに恋心を抱くようになったが拒絶されるのが怖く言えずにいた。後に彼が仲間であったマークに恋をしていると知ると傍に居ることが耐えられず自分から彼女の元を去った。ロイヤルナイツに入ったのちにかつての仲間だったドウフトモンと再会、人間に対して憎しみの感情を抱いた彼に戸惑いながらもエルを事故死に見せかけるように殺そうとしたりなど本意ながら行った。デュノア社攻略戦の時はデジタルシフト発生装置の守備に回りマグナアルフォースブイドラモンと交戦。重傷を負うがこのときに彼女に自分の気持ちを受け入れてもらえたことで長い間のわだかまりが消えた。

クロエ・クロニクル

束と共に行動していた少女。現在はミレイの指示の下で行動している。

パイルドラモン（完全体・竜人型・フリー）

クロエのパートナー。

ベルスターモン（究極体・魔人型・ウィルス種）

束のパートナー。現在はミレイと共に行動している。

御神楽ミレイ

別の世界の束の友人。「サイバースルウース」「next order」のミレイと同一人物。何らかの経緯で束と知り合ったらしく後に彼女に代わって「吾輩は猫である（まだ名がない）」を指揮している。未知数の可能性を秘めている一夏と箒たちに興味を示している。

マステイモン（究極体・天使型・ワクチン種）

ミレイのパートナーであるエンジェウーモンとレディーデビモン（両个体本編未登場）がジヨグレス進化した姿。主に別世界へのゲートを開く役割を持つ。

マーク・デユノア／ドウフトモン（究極体・聖騎士型・データ種）

シャルロットの実父でエリザの夫。本作ではすでに死亡扱いになっていた。元々、ドウフトモンはパートナーであり、別れの際に再会を誓い合ったが現実社会に押され、自殺を図り昏睡状態になっていた。ミレイの手術とドウフトモンの犠牲によりドウフトモンの体で蘇生に成功する。現在はデジラボでリハビリをしている。

四ノ宮リナ

「デジモンワールド リ：デジタイズ」で登場した少女。ミレイの頼みで一夏たちの世界にパートナーのブイブイと共にやってきた。現在は学園の外で楽しんでいる模様。考案では、彼女にもIS適性があり、彼女の機体も出す予定だった。

ブイブイ／アルフォースブイドラモン（究極体・聖騎士型・ワクチン種）
リナのパートナー。彼女とは違い、デユノア社攻略戦には参加していた。

ベルゼブモン（究極体・魔王型・ウイルス種）

かつて「テイマーズ」でデユークモンたちと共に戦ったインプモン本人。七大魔王に属していたがルーチェモンのやり方に不信を感じやめる。以前自分に力を与えた四聖獣に預けたパートナーのデジヴァイスを受け取り、「ブラストモード」へと覚醒する。

ジャステイモン（究極体・サイボーグ型・ワクチン種）

「ウィルスバスターズ編」に登場したサイバードラモン本人。ドウトモンが開いたゲートから人間界へと来た。

エンジエウーモン（完全体・大天使型・ワクチン種）
ジャステイモン同様「ウイルスバスターズ編」で登場した本人。

シャイングレイモン（究極体・光竜型・ワクチン種）

「ウイルスバスターズ編」のライズグレイモンと同一人物。

ウオーグレイモン（究極体・竜人型・ワクチン種）

「ウイルスバスターズ編」のメタルグレイモン本人。故人。

ガムドラモン（?・小竜型・?）

ウオーグレイモンを兄貴と呼んでいる。

メルヴァモン（究極体・神人型・ウイルス種）

「IS編」終盤に登場した女性型デジモン。千冬へのリベンジのために修行に言っていたがオニスモンに苦戦していた千冬たちを救出に来た。以降はドウフトモンたちに目を付けられてしまい地下水路で過ごしていた。描写はないがデユノア社攻略作戦後は千冬たちと共にIS学園へ行った。

敵陣営

ロイヤルナイツ

ドウフトモン（究極体・聖騎士型・データ種）

マークのパートナーデジモン。別れの際に再会を誓ったが人間界で昏睡状態になった彼を見てショックを受ける。デジタルワールドのデジモンの救済のため人間界の間を全滅させることを計画し、二年前からデュノア社を拠点にデジタルシフト発生装置の開発、かつての仲間であったエリザを幽閉、ノエルを抹殺などで邪魔者を消し、計画を裏で進めていた。デュノア社攻略戦時は膨大なデジタルウェイブからエネルギーを大量に取り込んだ上にエグザモンと強制的にジヨグレス進化し「ドウフトモン ドラゴンモード」へと進化する。

ドウフトモン ドラゴンモード（超究極体・聖騎士型・データ種）

ドウフトモンがマークのデジヴァイスを触媒にしてエグザモンと強制的にジョグレス進化した姿。イメージ的にはインペリアルドラモンに近い。技の大半はドウフトモンとエグザモンの物を合わせたような物。本来ならできないジョグレスだがドウフトモンが膨大なエネルギーを取り込んだことによって可能にした。こちらもレオパルドモードにモードチェンジ可能だがレオパルドモードもはやインペリアルドラモンとほぼ瓜二つ。デユノア社攻略戦の時曾於圧倒的な力で一夏たちを一気に追い込んだがオメガモンズワルトとデュークモンの参戦によりまさかの長期戦へと強いられ最終的に一夏の一撃で敗北。エグザモンと分離した。このジョグレスは元々不可能に近いものでドウフトモンがデジタルシフト発生装置を作ったのはこの進化の膨大なエネルギー消費を軽減させるためだった。敗北後はドウフトモンの姿に戻り一夏に再度挑戦しようとするがメデイーバルデュークモンに致命傷を負わされる。最後はミレイの説明でマークを蘇生できるかもしれないということを知り、自分のメッセージを残した後自分の破損したデジコアを抜き取りマークの記憶をすべて移植したデジコアを移植。自分の体をパートナーに託した。

エグザモン（究極体・聖騎士型・データ種）

ロイヤルナイトの一人で竜型デジモンの王を名乗っている。実力はロイヤルナイト内で一位二位を争うほどのもので学園での戦いでは鈴たち相手に圧倒的な力を見せた。デュノア社攻略戦時も同様の実力とデジタルソフト発生装置による驚異的な再生能力で圧倒したが装置が破壊されたことにより形勢が逆転、ドウフトモンに問い詰めようと向かうが逆にドウフトモンに強引にジョグレス進化されてしまう。その後は死亡した模様。

ロードナイトモン（究極体・聖騎士型・ウィルス種）

最初に一夏が交戦したロイヤルナイト。学園際は「岸辺リエ」と名乗って忍び込んでいたが一夏と箒が孤立した際に本性を現し、交戦を始めた。第一戦はドウフトモンの撤退により手を引いたが翌日に日本襲撃のためにナイトモンの部隊を率いて再び現れる。このときは俊敏なスピードを活かして一夏を追い詰めるがオメガモードに覚醒した瞬間に逆転、細切れにされる。人間界において初の死亡者。

オニスモン（究極体・古代鳥型・ウィルス種）

ロイヤルナイトが復元した古代デジモン。デュナスモンの話によれば古代のデジタルワールドで猛威を振るっていたという。本作で登場した個体はコピーであるためオ

リジナルには程遠かったそうだが総攻撃に参加した世界各国のIS部隊などの精鋭を撃退した。最後はメルヴァモンの新必殺技「マッドネスメリーゴーランドDX」で倒される。

七大魔王

ルーチエモン フォールダウンモード（完全体・魔王型・ウィルス種）

七大魔王のリーダー格。同格である他の魔王や部下にも丁寧語で話すなどかなりの

カリスマ性を秘めている。元々イーターによる行いも彼が行ったもの。実はアポカリモンの転生した姿で神以上の存在になろうと考えている。

デーモン（究極体・魔王型・ウィルス種）

七大魔王。普段はローブを身に纏っている。

リリスモン（究極体・魔王型・ウィルス種）

七大魔王唯一の女性型。意外に短気。

バルバモン（究極体・魔王型・ウィルス種）

七大魔王。印象が薄い。

リヴァイアモン（究極体・魔王型・ウィルス種）

七大魔王。あらゆるものをかみ砕こうとする。

ベルフェモン（究極体・魔王型・ウィルス種）

七大魔王。現在はいかかわいらしい姿をしているが……。

メディーバルデュークモン／ダークデュークモン（究極体・戦士型⇒魔王型・データ種⇒ウイルス種）

かつてデュークモンが義兄弟と呼ばれるほど姿がよく似ていた。一時はロイヤルナイツで活動していたが現在は七大魔王の新メンバーとなっている。ダークデュークモンになってからの姿は全身が黒くなり、目が赤く発光している。

メルキュウレモン（ハイブリット体・突然変異型・ヴァリアブル種）

「ウイルスバスターズ編」から暗躍をし続けていたデジモン。実はルーチェモンの部下だった。エムと呼ばれている少女を何かに利用しようとしている。

エム／マドカ

東のラボを襲った際に連れてこられていた千冬そっくりの少女。東のラボの自爆に巻き込まれ死亡したと思われていたが現在全身を包帯で巻いた状態で治療されている。東の話によると織斑姉弟と何らかの関係があるらしい。

没キャラ（本編に登場を検討していたが没にしたキャラ。一部は初期設定。）

ナターシャ・ファイルス

アメリカのテスト操縦者で「福音」の操縦をしていた。本編では名前が出ることなく退場したが没案ではデュノア社総攻撃でオニスモンに捕食されてしまう予定だった。

スコール・ミューゼル

こちらもIS編開始時に登場を検討していたキャラ。こちらではパートナーを黒いギルモンにして、過去のトラウマで前線で戦わせることを恐れているという設定があった。没案ではロイヤルナイトと手を組むという案もあった。ちなみにパートナーのギ

ルモンは「テイマーズ」の性格をベースにするはずだった。

オータム

こちらではデビモンをパートナーにする予定もあつた。

受け継がれる伝説編

ゲーム開始

IS学園 グランド

一夏たちはグラウンドの外に出てゲームの予告の時間を待っていた。

「……………そろそろのはずなんだが。」

一夏は真剣な目で空を眺めていた。ルーチェモンの話ではゲーム当日にゲートを学園に繋げると言っていた。しかし、予告の時間まであと5分にもかかわらず現れる様子はない。

「あまりにも静か過ぎるわ……………」

リリモンは不安そうに言う。それは一夏たちも同じだった。早朝は快晴だった空もだんだん黒い雲に覆われ、緊張感を感じるようになっていく。

「……………チビ。」

「ん？何、兄貴？」

一夏は隣に立っているブイモンに言う。

「リリモンと箒のことを頼んだ。二人の身が危なくなったら時は全力で守ってくれ。」

「……………わかってるよ。でもさ、兄貴も負けちゃダメだよ。」
「ああ。」

一夏はヴリトラモンの姿へとなる。マントに身を包んでいる姿になるのはデジタルワールドを去ってからずいぶんのことだった。

「懐かしいわね、デジタルワールドを旅していたあの楽しかった日々のこと……………」
「だから取り戻すんだ。この戦いで全てを。失った者たちのためにも。」

一夏は覚悟した顔で言う。そんな一夏の後姿を箒は心配そうに見ていた。

「……………一夏。」

そう思った矢先に空に異変が起こった。

黒い雲が渦を巻くように動き出し、ブラックホールのような光景を作り出したのだ。その渦の中心は広がっていき、やがて青く不気味な光が差した。

『フッフッフッフ、どうやら皆様方全員お待ちしておられたようですね。』

光りの先からルーチェモンの声が聞こえてくる。一同は顔をしかめながら警戒する。
「ルーチェモン、ゲームの参加者はここに集まっている！お前の言うステージに案内してもらおうか！」

『やる気満々のようですね。結構、結構。では皆様方を世界を賭けたゲームの会場へとご案内しましょう。』

ルーチェモンの話が終わると一夏たちの周りが光りだし、渦の中へと引き寄せられるかのように吸い込まれて行った。その光景はデジラボ内からでも見る事ができた。

「……………行つたか。」

「無事に戻ってきてくれればいいが……………」

ロイヤルナイツのメンバーたちは心配そうにその映像を見る。その中には車椅子に座っているシャルロットの父であるマーク、そしてノエルとエリザも見ていた。

「シャルロット……………」

「シャル、何があつても絶対に諦めちゃダメよ……………」

その中でミレイはただ一人冷静に見ていた。

「この戦い……………何か裏がありそうね……………」

ゲート内

一夏たちは暗い空間の中を移動していた。かつてデジタルワールドから人間界へ移動したときのゲートとほぼ同じだが違いと言ったらすぐ近くで蠢くイーターたちぐらいいだ。イーターたちは不気味に目を光らせながら一夏たちをとらえようと待ち構えている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『御心配には及びませんよ。あなた方が通っているゲートは特殊なシールドで防御していますから。イーターに接触する危険はありません。』

しばらく進んでいくと目の前の道は5つに分かれた。

『ここからは各々が考えた構成でお進みください。一つの道には織斑一夏、あなた一

人だけで来てもらいます。それがあなたの言った条件ですからね。』

一夏は黙って中央の道を進んでいく。

「一夏！」

箒は思わず駆け寄ろうとするが何か見えない壁でもあるのかそれ以上進むことができなくなっていた。

「な、何なんだ?!これは?!」

「箒。」

一夏は箒たちの方を向く。

「これからの戦いは、みんな今まで以上に激しい戦いが予想される。だが忘れてはいけない。」「

一夏は真剣な目で全員を見る。

「俺たちの戦いにはこの世界、デジタルワールドの未来がかかっている。負けは絶対に許されない。もちろん生きて帰れる保証もない。だが俺たちはやれるだけのことはやった。だから自分の力を信じて戦ってほしい。」「

「一夏……」

「みんな、また生きて会おうぜ。」「

一夏はそう言うのと後ろを向いて歩き始める。

「兄貴！俺の進化は!?」

「おっと、いけねえ。忘れるところだった。」

一夏はデジヴァイスを取り出し、ブイモンに向かって翳す。ブイモンは一瞬にしてマグナルフォースブイドラモンへと姿を変える。一夏はそれを確認するとまた後ろを振り向いて歩いて行った。箒たちはその後ろ姿を寂しそうに見るがしばらくすると消えてしまった。

「……………ここにいる全員に言っておく。今回の戦いは織斑の言うように私たちの世界の運命がかかっている戦いだ。試合の勝敗とは違い最悪な場合命を落とす。全員決して命を無駄にするな。」

千冬は全員の前で敢えて言う。

「では組み合わせは以下のとおり。篠ノ之・リリモン・ブイモンチームとオルコット・凰チーム、私とジャステイモン・エンジェウーモンチーム、デュノア・ボーデヴィツヒチーム、更識姉妹チームで行く！全員、生きてまた会おう！」

箒たちはそれぞれの道に別れて進んで行った。

一夏ルート

一夏は暗く閉ざされた道をひたすら歩き続けていた。周りは未だにイーターが蠢いて気味の悪い動きをしていた。

「………箒、リリモン、チビ、千冬姉、そしてみんな……死ぬなよ。」

やがてゲートの出口が見え始め、出てみるとそこは薄暗いダークエリアの七大魔王の拠点の一つであるルーチェモンの居城だった。目の前ではルーチェモンが紅茶を飲み

ながらくつろいでいた。

「お待ちしておりましたよ。」

ルーチエモンは笑みを浮かべながら言う。一夏は早速オメガソードを展開する。

「そう早まらないでください。私とあなたの戦いはこのゲームのメインイベント、お楽しみのようなものなんですすよ？」

「ふざけているのか？」

一夏はオメガソードをルーチエモンの首に向ける。

「まあまあ、落ち着いてください。せっかくここに来たのですからそこに座ってお茶を飲みながら他の方々との戦いでも拝見しようじやありませんか。」

「何!？」

一夏は上空を見る。そこにはそれぞれのゲートを移動中の箒たち姿が映されていた。

「これは一体……」

千冬・ジャステイモンルート

千冬たちはゲートを歩き続けていた。

「ジャステイモン……私、なんか怖くなってきたわ……」

エンジェウーモンは体を震えさせながら、ジャステイモンに寄り添う。

「心配するなって！ いざという時は俺が守ってやるからさ！」

「ジャステイモン……」

「エンジェウーモン……」

「・・・・・・・・二人ともイチャイチャしていると悪気が引き締めてくれ。」

二人の後ろを歩いている千冬はジエスモンに抑えられながら言う。危うくいつもみたいに出席簿で叩くところだったからだ。

「わかつてるって、千冬の姐さん！姐さんのことはしつかりサポートしますよ！」

「・・・・・・・・今更思うがその姐さんというのはやめてくれないか。」

「いいじゃないですか！俺の恩人たるヴリトラモンのお姉さん、だから尊敬を意味して姐さんでー！」

「はあ・・・・・・・・こいつは私のクラスのマ鹿どもよりもバカかもしれん・・・。」

「い、いいじゃないかな？こういうのは頼りになると思うし。」

四人はやがて出口に出た。目の前を見るとギリシャの遺跡をモチーフにしたような壊れた建物密集するエリアだった。

「ここが私たちの戦場か・・・・・・・・ん？どうした二人とも？」

千冬は固まってしまったジャステイモンとエンジェウーモンの方を見る。ジャステイモンは辺りを見回す。

「・・・・・・・・ひ、光の街？」

「光の街？どういうことだ？」

「昔、私が住んでいたデジタルワールドの一つの街で光のスピリットが保管されていた

場所なんです。」

「そして、俺が滅ぼした街……」

ジャステイモンは先ほどの態度とは打って変わって暗い雰囲気を漂わせていた。そのとき、離れたところから声が聞こえてきた。

「そう……ここがあなたを暴走への一途を辿られた始まりの場所です！ジャステイモン。」

千冬たちは顔を上げる。少し離れた山の上でメルキューレモンと赤いローブを纏ったデーモンが立っていた。

「メルキューレモン！てめえ!!」

ジャステイモンはこぶしを握り締めてメルキューレモンを見上げる。しかし、千冬はそのメルキューレモンの目の前にいる車椅子に乗っている包帯だらけの少女を見て驚いた表情をしていた。

「あれは……」

その少女は無表情で生気を感じさせない目をしていたが包帯に隠れているところを除けば千冬そっくりだった。

「どうしたんですか!?! 姐さん!?!」

ジャステイモンは唾然としている千冬に戸惑う。そんなジャステイモンたちに対してデーモンは笑いながら言う。

「ハツハツハツハ!! 人のことより自分のことを心配した方がよいのではないか、ジャス
テイモン?」

「うるせえ! 七大魔王に言われるほどまだ有名じゃねえよ!」

「言うところそこ?」

「あれはもしかして………マドカ? いや、そんなはずは………」

一夏ルート

「マドカ?」

千冬たちの映像を見て一夏は不思議そうに言う。

「聞いていないのですか? 消息を絶ったご両親と妹のことを。」

「何?」

一夏は何を言っているのか全然わからなかった。

衝撃

一夏ルート

「妹？そんな馬鹿な！俺の両親は俺と千冬姉を捨てて行方を暗ましたんじゃないのか！？」

一夏はルーチエモンの言葉に驚く。ルーチエモンはそんな一夏の反応を面白がっているのか笑みを浮かべている。

「それは彼女本人に聞くのが一番じゃないのですか？」

「何!？」

「今にわかりますよ。あなた方織斑家の秘密……」

一夏は千冬の姿を見つめる。

千冬・ジャスティモンルート

「マドカ…….そんなはずは……」

千冬は唾然とした顔で言う。そんな千冬をメルキュレモンは笑いながら見る。

「驚くのも無理ないでしょうね。何せエム……いえ、織斑マドカは両親と共にあなたたち姉弟の元を去った姉弟の裏切り者なんですから。」

「そ、それは違う!!マドカにそんな罪はない!」

千冬は否定する。

「それは本当なんでしょうかね?だってあなたは思ったのではないんですか?『どうし

て自分と弟だけは捨てられたのか』と。」

「違う！違う！」

「あ、姐さん……落ち着いて……」

15年前

確かに私は一夏以外の家族、父さんと母さん、そしてまだ生まれていなかったマドカがいた。マドカは一夏が生まれた翌年に生まれる予定で母さんは生まれてくる子がない子だと分かったから名前をマドカにすると言っていた。しかし、新しい家族になるはずのマドカがまさか両親と共に私と一夏の前からいなくなるなんて思いもしなかった。

あれは私が学校から帰って来た時だった。家の中はいつもと違って暗く、ただいまと言っても何も返事がなかった。流石に不審に思い私はリビングの方へと行った。そこには両親の書置きがあった。

『しばらく帰れなくなるかもしれない。悪いと思うが一夏を頼む。』

母さんの出産予定日が近かったこともあったからおそらく病院に行ったのだろうと考えた。だがその後ベッドで寝かされていた一夏を見て病院に行くならおいていくはずがないと思い、不安になった。病院にも連絡してみたが来ていないという連絡だけだった。私は両親がいなくなったことで泣いている一夏をあやしなから両親の帰りを待った。

ずっと、ずっと……

「結局、両親は帰ってくることもなかった。幼かった一夏は当然二人のこともマドカことも知らない。私はこのことを伝える勇気がないばかりに一夏には真実を伝えられなかった。」

千冬はメルキュールレモンを睨む。

「だが、今になって行方すらわからなくなっていたマド力がなぜここにいる！それも貴様たちのところに!!」

千冬の反応を見るやメルキュールレモンは笑いながらあるものを見せる。

「これが何かわかりますか？」

「デジヴアイス？しかし、あの形は……」

それは紛れもなくデジヴアイスだったが形状は配色が黒だということを除けば一夏のデイスキャナーとほぼ同じだった。

「フフフフ、あなた方はデジヴアイスはだれが作ったと思いますか？」

「それはどういふことだ？」

「確かにデジヴアイスはあなたの生徒たちの所持しているものほとんどがパートナーと共にありました。しかし、それらの経緯とは違って人工的に作られた物も存在しています。あなたの持っているものと同じように……」

「まさか!」

「そう、このデジヴアイスと織斑一夏の持つものはあなたのご両親が製作した物なんです。」

一夏ルート

「俺の父さんと母さんが作っただど!?!」

一夏は驚いた表情で言う。ルーチエモンは笑いながら言う。

「ホッホッホッ、今まで知らなかったことを知ってさぞ驚きのようですね。」

「……だがおかしいぞ？あのマドカがデジヴァイスと共に貴様らのところにあるということとはまさか……。」

「フッフフ、この際ですからここで全てを話して差し上げましょう。あなたのご両親があなたたち姉弟を置いていった理由……それはあなたですよ。織斑一夏。」

「何!？」

一夏は混乱していた。

「あなたのご両親はあなたのお友達同様、まだ少年少女の時代デジモンと接触し、デジタルワールドのことも知っていました。あのドウフトモンのパートナーたち同様。しかし、彼らはデジタルワールドのある遺跡で偶然にもある物を発見しました。それは古代十闘士が残した石板、彼らはそこから推測を重ねしらべた結果、十闘士の遺志を継ぐ者があなただということを知り、それを回避するためにあなたたち姉弟の元を離れてあることをしていました。」

「ある……?」

「それは自分たちの持つデジヴァイスをベースに作り上げたデジヴァイスと共に伝説の聖騎士型デジモンを因子を引き継いだデジタマをあなたの元へ送り、あなたを現在の姿にするのを回避させることでした。伝説の聖騎士型デジモンを操ることができればあ

あなたが遺志を引き継ぐことはなくなり、人間からデジモンとして生まれ変わる必要もありませんからね。」

「そして、メルキュールモンの持っていたあれが俺のデジヴァイスのプロトタイプ……」
「しかし、私たちはその動きを事前に発覚していましたね。当然消すためにあなたの両親たちの潜伏先を襲いました。あなたの両親は死の寸前、あなたのデジヴァイスとあるデジタマをゲートを経由してあなたのところへ送ろうとしましたが不運にもゲートが別々の場所へと開きデジヴァイスとデジタマはバラバラにデジタルワールドに送られました。流石の私たちもあなた自身が両親と離れたために事の真相を知らないことから心配がないと思つて手を出さなかったのも不注意でしたよ。そしてデジヴァイスはイグドラシルの元へ、デジタマは生まれたデジモンはあなたと出会いました。すでに遺志を継ぐ準備が整いつつあったあなたの元にね。」

「それがチビだったのか……そして、お前らはマドカの精神を壊し、ただの人間へと仕立て上げたということか!!俺の両親を殺すのに止まらずマドカまで!!!」

一夏は怒りでメテオバスターを発砲する。命中はしなかったものの弾丸はルーチェモンのティーカップを壊した。

「フッフフ、怒りが頂点に達するその表情。いいですね、しかしこのティーカップは私のお気に入り。壊すのはひどいですよ。」

ルーチェモンは残念そうな顔で言う。しかし、一夏の怒りは収まらない。

「ここですぐに決着をつけてやる！勝負だ！」

「言った筈です。私とあなたの対戦はこのゲームのメインイベントであると。」

「そんなこと関係……」

「それにまだあちらの戦いは終わっていませんよ。」

「むっ……」

一夏は拳を握り締めながらも千冬たちの様子を見る。

千冬・ジャステイモンルート

ジャステイモンたちが勝手にデーモンと対戦戦を始めているにもかかわらず千冬は遠くにいるマドカを見つけていた。その様子をメルキューレモンは面白そうに見る。一夏とルーチェモンの会話はこちらでも聞けるようにわざと細工をしていたため話は千冬にも聞こえていた。

「……つまり貴様らが父と母を殺したのか。それだけでなくマドカまで……」
「フッフッフ……やはり怒るでしょうね。しかし、皮肉にもあなたと戦うのは彼女ですよ？」

「何？そんなに傷だらけのマドカを戦わせるといいのか！」

「確かに戦うのは彼女の体です。ですがその体を動かすのは私の意思です。」

「いったいどういう……」

「エム、ハイパースピリットエヴォリューション。」

メルキューレモンはマドカにデジヴァイスを渡す。マドカは力のない声でデジヴァ

イスを翳す。

「ハイパ．．．．．スピリット．．．ト．．．」

「やめろマドカ！」

「エヴォ．．．．．リュ．．．．．シオン。」

マドカが言うと同時にデジヴァイスから一夏が所持していなかったスピリットが出現し彼女の周りを囲んだ。メルキューレモンも二つのスピリットに姿を変え彼女を包み込んでいく。

「．．．．．ちゃん．．．」

「？」

「お姉．．．．．ちゃ．．．．．ん。」

「マドカ．．．．．」

千冬はわずかだがマドカが自分のことを読んでいると気が付いた。やがてマドカは黒い渦に包みこまれそこから黒い金属ボディに戦闘機のような翼、両腕は重火器になっており、頭部はラウラのメタルガルモンに近いデジモンが現れた。

「これが．．．．．あのスピリットが合体したデジモン。」

「調整に少々時間がかかりましたがね。これでこの体は私の物同然です。ちなみに名前前は黒いボディということですからブラックマグナガルモンと名乗りましょう。」

声はマドカではなくメルキユーレモンの物だった。千冬は黙って白蓮を展開し、雪片参型を手に持つ。その姿をジエスモンは心配そうに見る。

「千冬………」

「大丈夫だ、少し気が立っているだけだ。」

そう言いながらも千冬はブラックマグナガルモンを睨みつける。

（待っているマドカ。私がすぐにそいつから引き離してやるからな。）

一方のジャステイモンはデーモンに苦戦していた。

「くそ！なぜ俺の動きが分かるんだ！」

ジャステイモンは血を吐き捨てながら言う。デーモンは不気味に笑いながら言う。

「貴様の動きなど手に取るようにわかるわ、あのころから貴様の戦い方は何も変わってはおらん。何にもな。」

「まるで俺と昔どこかで戦ったような言い方じゃねえか！」

「戦ったことがあるさ。かなり昔にな………ん？」

「ホーリーアロー！」

エンジエウーモンがデーモンの真横から光の矢を放つ。デーモンはそれに見向きもせず長い左腕で受け止めた。

「嘘!？」

「貴様も相変わらず未熟だなエンジエウーモン。」

そう言うを送り返すかのように矢を彼女に向かって放つ。彼女は唾然としていたため翼の一翼に命中してしまった。

「うっ!」

エンジエウーモンは思わず墜落する。ジャステイモンはデーモンなどそっちのけで急いで墜落したところまで走っていく。

「エンジエウーモン!大丈夫か!？」

ジャステイモンは彼女を抱き上げると慌てて言う。

「だ、大丈夫……」

「てめえ!絶対に許さねえ!」

「許さないだと?ではお前は自分が倒してきたデジモンたちも今のお前のようにそう思ったのではないのか?」

「何が言いたい?」

デーモンの言葉にジャステイモンは何かを違和感を感じ始めた。七大魔王の「憤怒」を使わずデジモンが自分のことを知っているように話すなんておかしい。まるでどこかで会ったような話し方だった。

「この街とて同じだ。貴様の手により破壊され、そこに住んでいた多くのデジモンも貴様の一部として取り込まれた。そのとき彼らも思った筈だ。『貴様を許さん』とな。」

「まるで知ったような口で言うんじゃないか！」

「その中に貴様の手によつて葬られたあるデジモンがいた。そのデジモンは正義感が強く、己のことよりも人を大切にしようとする心優しい者だった。だが、そのデジモンは無念にも貴様と戦い散つて逝つた。」

「あ、あなたはまさか！」

エンジェウーモンは何かを察したようだった。

「ジャステイスキック！」

ジャステイモンはデーモンの頭部に蹴り技を決める。するとデーモンの顔にひびが入り、そこから体全身がバラバラになった。中からは所々にひびが入った白銀の鎧、背中に十枚の翼を持っていた。

「オーバーボディだ?!お前は……」

「貴様によつて散つたデジモン……それはこの私、セラファイモンだ。」

「セラファイモン様……」

エンジエウーモンは思わずその名を呼んだ。

セラファイモン。

それはかつてエンジエウーモンの上司にあたる存在でジャステイモンが進化前、つまりサイバードラモン時代に光のスピリット強奪時にオフアニモンと共に倒してすでにいなくなつたはずのデジモンだった。

絆と愛の合体

千冬・ジャステイモンルート

「バカな！デーモンがセラフィモン!?どうなっついていやがんだ!？」

ジャステイモンは啞然とした顔で見ている。

「随分驚いた顔をしているな。まあ、無理もないが……」

「どうして……どうしてあなたが七大魔王のデーモンに……」

二人は驚いた顔で言う。

???

あれは少し昔のことだ。私は十闘士の一人、エンシエントガルルモン様が最後に過ごした土地だと言われる光の街でいつか現れるという十闘士の後継者を待つべく伝説に伝わる光のスピリットを守護していた。光の街はデジタルワールドの中でも有数の美しい街であり、主に天使型を中心に繁栄していた。私もあの二人のように思いを寄せる者がいた。

だが、平穏だった日は突然と崩れた。あの日を境に。

「い、一体どうしたというんだ!？」

私はその日の夜、スピリットを祀っている『光の神殿』のスピリットを確認しに行つた時のことだ。護衛をしていたピッドモンたちが何者かに倒されていたところを発見

した。

「おい！しつかりしろ！何が起こった！」

「しゅ……襲撃者です……」

「誰にやられた？」

「サイバー……うっ！」

ピッドモンたちの怪我はほぼ致命傷だった。

「サイバー……ドラモンに……」

「サイバードラモンだ?!」

私は彼のことを知っていた。部下であつたエンジエウーモンと長い付き合いであり、私も遠くからだが何度もその姿を見たことがある。話に聞く限りだとこんなことをする輩ではないはずだが。

「い……急いでください……オフアニモン様が先に中に入っていておそらく交戦……」

言いかけたときピッドモンは力尽きて碎け散つた。私は急いで神殿の中へと入つて行つた。中ではオフアニモンがすでにサイバードラモンと交戦していた。戦況はやや不利のようだ。

「ハアハア……いくら究極体だからと言っても実戦経験が少ない分俺の方が有

利なようだな！」

「……やめなさいサイバードラモン。あなたはこんなことをする人ではありません。」
オファニモンは殺す気で襲い掛かっている相手であるにもかかわらず説得をしていた。私は彼女を助けるべく奴に攻撃を始める。

「ちっ！もう一人増えやがった！」

「貴様！この神聖なる場所に入るとは……」

「待つてくださいセラファイモン！」

さらに攻撃を加えようとした私の目の前にオファニモンが立ちはだかった。

「何をするんだ！」

「彼は今何かに悲しんでいます。話せばきつと理解してくれるはずですよ。」

オファニモンは昔からこういう性格だった。どんなデジモンでも話し合えば戦わずとも解決の道が開ける。彼女の悪い癖ではあったが私もその考えには肯定的だった。だがこのとき、それは間違いだと悟った。

「やった………ついに手に入れたぜ！」

「なっ！しまった！」

私たちが言い合いをしている間にサイバードラモンは光のスピリットを手に入れてしまっていた。奴は光のスピリットを取り込み体を変化させる。

「おお……予想以上の力だ……まるで体中から力がみなぎってくる……これが十闘士の力か!!」

サイバードラモンの体に鎧のようなものが現れる。

「おのれ!ヘブンズセブンズ!」

私の放った光弾は全て奴に命中した。

だが、流石は神祕のスピリットと言うべきだ。全てガードしてしまっていた。

「この力さえ手に入ればもうここには用はねえ!後はてめえらを消すだけだ!」

「ほざけ!」

私はさらに攻撃を続ける。だが奴は歴戦を潜り抜けた勇士だったこともあり、究極体でありながら戦闘経験が浅い我等に勝てる要素はなかった。私は徐々に押され、致命傷を負い、追い詰められてしまった。

「これで終わりだ!」

「くっ!」

「セラフィモン!」

私が止めを刺されそうになったところをオフアニモンが庇った。意識を取り戻した時にはすでに彼女の姿は、なかった。だがこれだけは憶えている。彼女は私の身代わりになって奴の手に……

「そして、己の力の無さに絶望した私をルーチェモンが目につけ、私を憤怒の魔王として引き入れた。」

「それじゃあ、デーモンはどうしたんだよ？」

「無論いたさ。私に消されたがね。そして、私は悟ったよ。」

「悟ったって一体何を・・・」

「愛やら平和やらそんなことを言っても所詮は口だけ、力がなければすぐに崩れる。力があるものこそが掴み取ることができなのだ。」

「それは間違っています！」

「黙れ！私はデーモンを倒したことのより、その暗黒の力をさらに引き出せるようになった！その力を貴様ら二人に見せてやる！この姿を見せるのは貴様らが初めてだ！はああああああ!!！」

セラファイモンから闇のオーラが発し始める。ジャステイモンはエンジェウーモンを庇いながら下がる。セラファイモンの鎧は黒く染まり、形状が恐ろしく変化していく。手も鋭い爪のようなものになり、翼は四枚に減り、悪魔の翼へと変化する。体も一回り大きくなり、それはデーモンとは違う意味で魔王と言ってもおかしくない姿だった。

「おいおい………」

「さあ……私が味わった苦痛を存分に味わえ。」

セラファイモンの姿は一瞬で消えた。

「何?!奴は……っ!?!」

次の瞬間、ジャステイモンの腹部にセラファイモンの膝が命中し、衝撃で後ろへと吹き飛ばされる。セラファイモンはそれを確認すると高速で後を追う。

「ジャステイモン！」

エンジエウーモンも急いで後を追う。ジャステイモンは腹部をpushしながら態勢を整え反撃しようとするがセラファイモンは既に自分の背後にいた。

「何……」

「どうした？ 同じ究極体でありながらその程度か？」

セラファイモンはジャステイモンの頭部を掴む。ジャステイモンは抵抗しようとするが爪が食い込んでいき、悲鳴をあげはじめる。

「ぐわあああああああ!!」

「いい響きだ、オファニモンに聞かせるには素晴らしい鎮魂歌だ。」

セラファイモンはさらに力を強める。その悲鳴は戦闘中の千冬たちにも聞こえた。

「今のは!」

「千冬!危ない!」

「隙あり。マシンガンデストロイ。」

「なあっ!」

大量のミサイルが千冬へと襲い掛かる。千冬は急いで展開装甲で防御を行うが防ぎきれずに吹き飛ばされる。

「ぐっ!」

「千冬!」

「人のことより自分のことを心配した方がいいですよ？スターライトベロシティ。」

ブラックマグナガルルモンが超高速移動で光の矢となってジエスモンへと迫る。ジエスモンは紙一重に回避するが掠った肩の突起は消滅した。

「ジエスモン！」

「大丈夫だ。それよりも千冬は？」

「ああ、すまない。こんな時に心配かけて……」

「気持ちをよくわかる。なんせ、生き別れの妹が奴に取り込まれているを助けようとするのは……でも、君もわかってるんだろ？」

ジエスモンは千冬の後方に回り、守備につく。千冬は複雑な表情で応えた。

「……私だってわかってる。あのマドカは既に壊れて奴らの操り人形になっていることも、もうどうすることができないかもしれないことも。……でも、怖いんだ。一夏と同じようにマドカも助けられないと思うと……自分の無力さを感じて……」

千冬の手は震えていた。かつて弟を助けられなかったように今度は妹を自らの手で葬らなければならぬかと思うと……その心が彼女に恐怖を与えていた。

「……それを聞いて安心したよ。」

「え？」

「俺も正直怖かったんだ。千冬が復讐の鬼になっちゃったんじゃないかってね。復讐の心に刈られれば敵の策にどんどんハマって自滅していく……千冬がそうなったらどうしようかって。」

「ジエスモン……」

「昔、俺も強くなろうって必死になって前が見えなくなっていた。それを千冬が目覚まさせてくれた。だから、千冬は俺にとって師匠と同じくらい尊敬しているんだ。」

「……お前という奴は……」

「マドカちゃんを助けよう。わずかな可能性でも。」

「……ありがとう。ジエスモン。」

「俺たちパートナーだろ？そのくらい当然だって。」

「ああ。」

そのとき、千冬の白蓮が輝き始めた。それとシンクロするかのようにジエスモンの体も光りだす。

「これは!?!」

「俺の体が……」

「何をごちゃごちゃ言っているんですか？そつちが来ないのでしたらこちらから引導を渡して差し上げますよ！スターライトベロシテイ！」

ブラックマグナガルルモンは再び超高速で二人の前と迫る。

「これで終わりです！」

ブラックマグナガルルモンは光の矢となり、二人にいた場所へと突っ込む。

「があああああ．．．．．」

ジャステイモンは何度も地面に叩きつけられた末に放り投げられた。仮面のような頭部は傷だらけになっていた。

「こんな相手に私は敗れたのか。今思うと実に腹立だしい。」

「くそ．．．」

ジャステイモンは右腕の「トリニティーアーム」のプラグを差し替える。

「メルキューレモンの方もそろそろ終わりそう．．．．．」

「アクセルアーム!!」

余所見をしているセラフィモンの頭部に向かってジャステイモンは大型化した右腕を打ち込む。

「．．．．．今のは少しは効いたな。」

「何!?!」

セラフィモンはジャステイモンの右腕を掴むと地面へと叩きつける。

「ぐうう!!」

「無様だな、それがかつてウィルス種から恐れられていたウィルスバスターズの元リーダーか。」

そう言うときセラフィモンはジャスティモンの右腕を踏みつけた。予想を上回る力のせいでジャスティモンの右腕はバラバラになってしまった。

「俺の右腕が………」

「ふん！」

「ぐはっ………」

セラフィモンはさらにジャスティモンを踏みつける。

「こんなものではないぞ………私が味わった苦しみは!!」

「ブツ!!」

「オファニモンや私の部下たちはこれ以上の苦しみを味わって死んだんだ！貴様にはそれ以上に苦しませなければ私の気が済まない!!」

踏む力はさらに強まる。ジャスティモンが倒れている辺りは彼の血で赤く染められていく。

「どうだ俗物！かつて自分の倒した敵に踏みつけられる気分は！」

「ぐ………」

「ほら、何か言え！『許してください』やら『命だけは助けてください』やら。ほら……言ってみろ！」

「うる………せええ………」

「ははははははは！はっはははははははは!!」

セラファイモンは勝ち誇るように笑う。ジャステイモンは既に息が途切れ途切れになつていた。

「……もう、虫の息か。」

そう言うと彼はジャステイモンを掴みあげる。

「今度は貴様が地獄の業火で焼かれる番だ。」

セラファイモンはジャステイモンを上を放り投げる。

「焼かれる苦しみを存分に味わうがいい、フレイムインフェルノ!!」

セラファイモンは構えを取り、巨大な火球を作りだしジャステイモンに向かって撃つ。

ジャステイモンは既に動くことすらできなくなつていた。

「ジャステイモン!」

エンジェウーモンは命中寸前のところで彼を抱きかかえ、回避するが掠つた左の四枚の翼は一瞬にして焼け落ちてしまった。

「ううっ!!」

彼女はジャステイモンを庇うように墜落する。墜落した場所へとセラファイモンが歩いていく。

「皮肉だな、エンジェウーモン。貴様もそんな奴に着かなければこんな目に合わなかつ

たものを……」

「くっ!」

エンジェウーモンはダメージを受けているにもかかわらず瀕死のジャステイモンを守ろうとする。

「無駄だ、以前ならともかく今の私に完全体である君が敵うはずがない。どうだ? エンジエウーモン。もう一度私の仕える気はないか?」

「え?」

「この勝負、私たちが勝つのは時間の問題だ。しかし、君は以前から優秀なデジモンだ。殺すには惜しい。」

「結構です! 悪魔に魂を売ったような方のところに行く気は一切ありません!」

「その消された翼も治してやる。悪い話ではないだろう? そんなボロくずと共に死ぬよりもいい方ではないのか?」

「ボロくず……彼はボロくずなんかじゃない!!」

セラファイモンの言葉にエンジェウーモンは怒りを露にする。

「彼は確かに許されない過ちを犯した……でも、それは私にも責任があった! だから、彼を探して一緒に罪を償う旅をした。彼は、本当は優しい心を捨てていなかったから。完全に堕ちたあなたとは違う!」

「黙れ！貴様に私の何が分かる!?今まで自分の守ってきたものを壊された者の気持ちがい！」

セラファイモンは手から光弾を作り出す。

「もう一度言う、私に仕えろ。そうすれば貴様だけは助けてやる。」

「私はあなたの元には行かない。」

「そうか……ならばそいつと一緒に消えろ！ヘブンズヘルズ！」

セラファイモンから複数の光弾が放った。光弾は全て命中し、ジャステイモンたちの姿は見えなくなる。

「………私は間違つてなどはない。力があるこそその正義は証明される。」

セラファイモンはブラックマグナガルルモンの方へと向かおうとする。しかし、咄嗟に背後に気配を感じ後ろを振り向く。

「この気配は!?まさか!?!」

砂煙が晴れるとそこには鎧を纏ったデジモンがシールドで防御をしていた。外見はオファニモンと瓜二つだが鎧は白に染められていた。

「奴め!この期に及んで進化したというのか!」

オファニモンはジャステイモンに肩を貸して体を持ち上げる。

「ジャステイモン?」

「………エンジエウーモンか？」

「ごめんなさい、進化………しちゃった。」

「ふん、進化してもいい女だな、お前って。」

殆ど力がなくなっていたはずのジャスティモンが嬉しそうに言う。その光景を見てセラフィモンは、一瞬自分とオファニモンを重ねてしまった。

「何故だ………なぜそうまでしてそいつに肩入れする!? 何故なんだ!？」

「理由なんてないわ。私は彼が好きだから守りたい、それが成長期の頃からずっと思っていたことだから。彼が私にとって大切な人だから。」

「俺も同じだ。好きになった奴は最後まで守る。恩人も仲間もな。………そして、好きなくいつと一緒に明日へ進むためにな。」

二人の体が同時に光りだす。ジャスティモンの壊された右腕も修復されて行く。

「なんだ!?! この光は!?! むっ!?! あっちの方でも………」

「行くぜ、セラフィモン! これ俺たちの………えっと………その………」

「愛の力よ!」

「それだあ!………って俺が言いたかったのに!」

「私が決めたかったの!」

二人は顔を赤くしながらも言い張る。

「ジャステイモン！」

「オファニモン！」

「『ジョグレス進化!!』」

二人は、光りとなり一つになる。光が晴れるとそこには黄金の翼を持ち、白い鎧、光り輝く黄金の右腕に白い強固な盾を付けた左腕、そして、赤いマフラーを首に巻いた仮面の戦士がセラフィモンの目の前に立ちはだかった。

「な、何だその姿は？」

「『俺の名はゴッドジャステイモン!! 悪を倒し、闇に光を灯すために貴様を倒しに来た者だ!』」

「な、何が……何が起こっているんですか!？」

ブラックマグナガルルモンは驚いた表情で見ている。

そこにはさっきの白蓮とは違うISを纏った千冬の姿があった。

「これは一体……」

『俺が千冬のISと合体している!』

その姿はまさにジエスモンの形状をした鎧を身に着けたような姿だった。しかし最も驚くべきことはさっき衝突したはずのブラックマグナガルルモンの巨体を雪片で受け止めているという事だった。ブラックマグナガルルモンは思わず距離をとる。

「ま、まあ……相手が一人に絞られるのはかえって好都合。すぐに消して差し上げますよ!」

「……一人ではない。私たちが一つになったんだ。」

「ん?」

ブラックマグナガルルモンは千冬から奇妙なオーラを感じた。千冬は両手に装着されているブレードを同時に展開する。

「行くぞ！ブラックマグナガルルモン！」

千冬は風の如く向かう。

天使よ、安らかに

「ゴッドジャステイモン? ふつ、もつとまともなネーミングはなかったのか?」

セラファイモンは笑いながらジャステイモンを見る。

『うるせえ!これが一番しつくりくるんだよ!』

「まあいい、いくらお前たちが進化したところで私の優位は変わらない。」

『それはどうかな?伊達にゴッドと名乗っているわけじゃないんだぜ?』

「減らず口を!」

セラファイモンはジャステイモンを殴りつける。しかし、拳はジャステイモンの右手で受け止められてしまった。

「ぬっ!」

『どうした?進化して力の上下関係が変わっちゃったことにビビっちゃまっているんじゃないか?』

受け止められた手から煙が出始め、セラファイモンは思わず手を引っ込める。鎧でガードされているはずの手がまるでやけどをしたかのように焦げていた。

「こ、これは……まさか、私の闇の力が奴の力に押されているというのか!」
「『どうやらわかってみたいだな。それがお前が捨てちまった光の力だ。』」

ジャステイモンは自慢げに言う。

「これが光りの力だ?! 悪ふざけも大概にしろ! フレイムインフェルノ!」

セラファイモンは火球を放つ。ジャステイモンは避けるしぐさも見せずそのまま直撃する。

「ははっはは! 避けずに受け止めるとは馬鹿な奴め! そのまま燃え尽きてしまえ!」

セラファイモンは高笑いしながら言うが炎の中から無傷のジャステイモンが現れる。

「何?! 私のフレイムインフェルノを喰らって無傷だ?!」

「『危ない、危ない。光のボールで防御していなかったら危うく消し炭にされるところだったぜ。』」

「ならば今度こそ消し炭になれ! セブンズ……」

「『おっと、まだ俺の攻撃が始まっていないぜ?』」

ジャステイモンは右腕を変形させ、槍上の物に変える。それはかつてのオフアニモンが使用していたランスに近い形状だった。

「『ランスアーム!』」

「くっ!」

セラフィモンは避けようとするがランスの突きは早く、彼の肩を掠った。傷は光を発し、彼を苦しませる。

「さっきの手と同じ感覚……なんなんだ？私はまだ光りに縋ろうという感情が残っているのか？そんなはずはない！今の私は七大魔王、憤怒の称号を持つ者なんだぞ！そんなはずは……」

「『ぼやぼや考えているうちに隙が大きくなってきているぜ？』」

ジャステイモン突きを避けきれず、どんどん鎧に傷がついていく。その傷からも同様の光が発し始める。

「や、やめろ！これ以上私の鎧に傷をつけるな……やめろおおおお！」

セラフィモンは苦しむかのように頭を押しえ始める。ジャステイモンは距離を取ると右腕をまた変形させ銃のようなものへと変える。

「『あなたは元々いい奴だ。悪いがその力は浄化させてもらうぜ。キャノンアーム！』」

銃口からは光り輝く光線がセラフィモンに向かって放たれる。命中したセラフィモンはさらに苦しそうな状態になる。

「やめろ！私に光を当てるな！！」

セラフィモンの鎧にひびが入り、その割れ目から本来の姿が見えた。

「『もう一息か……』」

ジャステイモンがそう言っている頃、千冬とブラックマグナガルルモンとの戦闘は千冬が優勢になりつつあった。

「この感覚……ここでもないか！」

千冬は高速戦闘しながら本体、マドカがいる場所を確認していた。

「ちよこまかと！そんな攻撃では私は倒せませんよ！」

ブラックマグナガルルモンはブースターを全開にして千冬の後を追う。シールドエネルギーはジエスモンと合体した影響なのか減る様子はない。千冬は3つのオーラ「アト」「ルネ」「ポル」を召喚する。

「マシンガンデストロイ！」

『「シユベルトガイスト！」』

「ぬおっ!？」

千冬は、攻撃を行おうとしたブラックマグナガルルモンに対してカウンターで応戦する。

「このままではマドカまで一緒に傷つけてしまう・・・どうにかして奴から切り離さなければ・・・」

『だったらデジヴァイスの反応を確認してみればいいんじゃないかな?』

「反応?」

『師匠から聞いた話だとデジヴァイスには仲間同士の居場所を探知するための機能があ
るんだ。いくら人の手で作られたと言っても機能は働いているはずだよ。』

「デジヴァイスの反応・・・」

千冬は白蓮と一体化しているデジヴァイスの方を見る。確かに近くに自分と同じ反
応を示すものが写されており、その先はブラックマグナガルルモンから発せられてい
た。

「無駄なことはおよしなさい。いくら合体したとはいえエムは私と一心同体、あなたが
私を倒すのは不可能なのです! スターライトベロシティ!」

ブラックマグナガルルモンは高速モードに切り替えて千冬に迫る。千冬は動きを止
めたままだった。

「後30度右・・・」

「このまま消えなさい！」

「後10メートル……」

ブラックマグナガルルモンが目前にまで迫っているのも関わらず千冬は雪片を構えたまま動かない。

「自らの妹の手で……」

「今だ！」

次の瞬間千冬は雪片を動かし、ブラックマグナガルルモンの胸を突き刺した。急な攻撃にブラックマグナガルルモンは動きを止める。

「何?！」

『アト、ルネ、ポル! 奴を押しさえろ!』

ジェスモンの指示で「アト」「ルネ」「ポル」はブラックマグナガルルモンを押しさえる。

千冬は傷口を広げ、中に手を突っ込む。

「マドカ、もうすぐ私が助けるからな。」

千冬は急いで内部に囚われているマドカを探し出す。

「まさか、妹を助け出すために動きを探っていたとは……しかし、ここまで来てそうはさせません! うおおお……」

ブラックマグナガルルモンはすぐに傷口を自己再生しようとする。

「そうはさせない！」

ジエスモンは白蓮から分離し、ブラックマグナガルルモンを剣で突き刺した。ブラックマグナガルルモンは口から血を吐き出した。千冬はようやくマドカらしき少女を体内から取り出し、距離を取る。ブラックマグナガルルモンは崩壊寸前の状態になった。

「この私がここで終わるとは……だ、だがかし！ただで消えるわけにはいきません！こうなれば私の残った闇の力をセラファイモンへ託します！」

そう言うブラックマグナガルルモンは右腕のスナイパーファントムにエネルギーを収束させ、苦しんでいるセラファイモンに向かって放つ。

「ふ、ふふ……楽しい時間でしたよ……それでは私はこれにて……ぐはっ……」

そう言うブラックマグナガルルモンは光を発してスピリットへと戻り、全てどこかへと飛び去って行ってしまった。エネルギーを受けたセラファイモンは鎧の傷が治り、再び闇のオーラを発し始める。

「何?！」

「私は七大魔王、『憤怒』を司る者だあああああ!!!」

セラファイモンは叫ぶとジャステイモンへ襲い掛かる。その行動はもはや正気ではな

かった。

『・・・・・・・・もう、これしかできないのか・・・・・・・・。』

ジャステイモンは右腕を再びランス状の物へと変形させ、取り外すと左手に持ち変える。

『本当はあの頃のアンタに戻ってほしかった・・・・・・・・本当の意味で正しい心を持つていたアンタに・・・・・・・・』

「うおおおおおおおおおお!!!」

『『エデンズジャベリン!!』』

ジャステイモンはランスを構えてセラファイモンへと突っ込んでいく。

「死ねええええええ!!!」

「あばよ、セラファイモン・・・・・・・・」

『さようなら、セラファイモン様・・・・・・・・』

ランスはセラファイモンの腹部を貫通した。

数分後

「マドカ、マドカ！」

千冬は人形のように何も言わないマドカを揺すりながら声をかける。マドカはしば

らく何も言わなかったが千冬の顔を見ていくうちに目の色が明るくなっていく。

「マドカ!」

「お…….…….ねえ…….…….ちゃ…….…….ん?」

弱っているためかそれとも長い間話することがなかったせいかゆつくりと千冬を見て言う。

「よかった…….…….マドカ…….…….」

「お姉ちゃん…….…….千冬お姉ちゃん…….…….なの?」

「そうだ…….…….私だ…….…….」

千冬はマドカを抱きしめながら泣いていた。その光景をジエスモンは見守る。

「やっと…….…….会えた…….…….」

その一方でジャステイモンたちの方は既に分離し、オフアニモンはエンジエウーモンに戻っていた。二人の先にはランスが突き刺さったセラファイモンが倒れている。死が近いのか鎧は本来の状態へと戻り、翼も本来の輝きを取り戻していた。

「私は…….…….ここは…….…….何をしていたんだ…….…….」

どうやら何をやっていただけのかわからなくなってしまうているようだ。エンジエウーモンはしやがみ込み、セラファイモンを抱きかかえる。

「悪い夢を見ていたんですよ、セラファイモン様。」

セラファイモンはエンジエウーモンの方を見る。

「エンジエウーモン……ここは……どこなんだ？」

「光の街から離れた異国の地です。あなた様がウィルスバスターズの加勢に向かうと言って駆けつけてくださったんですよ？」

嘘だと分かっているながらもエンジエウーモンは優しい声で言う。セラファイモンは記憶が錯乱しているのか彼女の言葉を信じていたようだった。

「そうか……君の彼は……？」

「無事です。全てセラファイモン様のおかげなんですよ。」

「それは……よかった……では、戻らなければな……オファニモンの元へ……」

セラファイモンの体が分解され始める。

「そうですね。オファニモン様、きつと心配されていると思いますよ。」

「そうだな……早く戻らねば……」

セラファイモンの体は消滅し、その場にはもう何もなかった。

「……嘘ついちまったな。」

「仕方がなかったと思うわ。でも、きつと生まれ変わった時はまた会える。あの二人はきつと……」

二人はそう言いながら肩を抱き合った。

「お姉ちゃん……お父さんとお母さんは……」

「わかっている、もうそれ以上は言わなくてもいい。」

「一夏お兄ちゃんは？」

「今、私と同様に戦っている。これから加勢に行くつもりだ。」

「……間に合わなかったんだね。」

「……心配するな。一夏がデジモンでも私たちは姉弟だ。やっと三人一緒になれるんだ。」

千冬はそう言うのとマドカを抱っこしながら立ち上がる。

勝利したおかげか一同の目の前には新たなゲートが現れた。

「千冬。」

「ああ、ここからが本番だ。ジャステイモン、そっちの方は……」

「大丈夫だぜ、姐さん。」

ジャステイモンはジョグレスからの分離で修復された右腕を動かしながら言う。

「こつちだつていつまでも落ち込んでいるわけにはいかねえ。このゲーム、さつさと終わらせてやるぜ。なあ、マイハニー！」

「もう！こんな時に！」

ジャステイモンたちはいつもの調子でまたじゃれ始めた。

一夏ルート

「どうやら千冬姉たちは勝ったようだな。まさか、デーモンがすでに入れ替わっていた

とは意外だったが……」

「ゲームではそれなりのイベントがなければ面白くありませんからね。」

一夏はルーチェモンと対峙しながら言う。七大魔王のうちの浸りが倒されたのにもかかわらずルーチェモンはまだ戦う意思を見せる様子はない。

「では、次の試合を見てみましょうかね？」

上空の映像が再び変わり始める。

そこにはラウラとシヤルロットチームと更識姉妹チームの戦いの様子が見られた。相手はリリスモンとリヴァイアモンで戦況はどちらも優勢になっている。

「どうやら俺たちのチームの方が……えっ？」

途中まで言いかけた一夏は一つの試合の様子を見て言葉を失った。

それはセシリアと鈴のチームの様子である。相手はベルフェモンとバルバモン。そこまではいい、問題は……

「……あの二人、なんで眠っているんだ？」

なんと、戦闘中でパートナーたちが苦戦しているにもかかわらず、セシリアと鈴は眠っているのだ。

夢?現実?二人の夢の世界

一夏ルート

「セシリアと鈴の奴! あんな場所でなんてことしてやがるんだ! 早く起きろ!」

聞こえないのはわかかっていても一夏はつい映像に写っている二人に向かって叫ぶ。

「無駄ですよ、彼女たちは既にバルバモンの策にハマってしまつて夢の世界を満喫しているでしょうから。ホッホホホホホ……」

ルーチェモンは面白そうに笑っていた。

セシリア&鈴ルート

「鈴〜！起きてよ〜！」

セントガルゴモンは寝ている鈴を抱えながら言う。背後からはバルバモンが迫っていた。

「フオフオフオフオ！無駄じゃ無駄じゃ！そやつはもうベルフェモンの夢の世界を永遠に楽しんでおるわ！何も知らぬ間にな！」

「くそ〜！鈴を元に戻せ〜！だだだだだだだだだだ〜！」

セントガルゴモンはミサイルを容赦なくバルバモンに向かって発射する。バルバモンは魔杖『デスルアー』から光線を放ちミサイルを迎撃する。

「どうしよう．．．．鈴も目を覚まさないし、セシリアも起きないし．．．．僕とガルダモンだけでどうやって戦えっていうんだよ〜！」

「ん
・
・
・
・
・
あれ?
私、
確かテリアモン
たちを進化させた
後
・
・
・
・
」

???

s
i
d
e
鈴

鈴はベッドから起き上がる。

「ここって……引越す前の私の部屋？ いったいどうなったの？」

鈴は部屋を見回しながら驚く。そこは中国に戻る前に住んでいた自分の部屋なのだ。しかし、カレンダーを見る限りは中学生の時ではなく明らかに最近の日になっている。

「カレンダーは決戦の日の次の日……どういうこ……」

「よっ！ 鈴！ まだ寝てんのか？」

そこへ部屋に一夏が入ってきた。

「きやあ!？」

「おいおい、どうしたんだよ？ せっかく彼氏が起こしに来てやったのによ？」

「彼氏って……アンタにはリリモンと箒がいるでしょ？」

「リリモン？ 誰だそれ？ それにお前に箒の話なんてしたっけ？」

鈴の言葉に一夏は不思議そうに首をかしげる。その反応に鈴は戸惑う。

「つて言うかアンタあの後どうしたのよ!？ ルーチェモンは？ ブイモンや箒たちはどうなったのよ!？」

「朝から一体訳の分からないことを言っているんだ？ 昨日、ラクロスの試合で負けたシヨックで頭がおかしくなっちゃったのか？」

「えっ?」

「お前なく!昨日相手にボロ負けして俺に泣きついてきたんじやないか。全く世話の焼ける彼女だな。下でおじさんに様子見てきてくれって頼まれたんだぞ?」

一夏の言っていることに鈴は思わず自分の帆を抓ってみる。

夢ではないようだ。いろいろと頭の整理をしようと少し思い出してみる。

第一に自分は一夏と付き合っている。

第二にさっきの会話からにして離婚しているはずの両親が離婚していない。

そして、第三にデジモンが存在していない。無論世間に「女尊男卑」という単語も。

つまり今までのことは全て夢?

「.....今まで悪い夢でも見ていたのかしら? (と言うことはテリアモンも私の夢の産物で今までの戦いも単なる妄想!?)」

「そうに決まっているだろ!ほら、今日は慰めで一緒にデートしに行くんじやなかったのか?何ならキャンセルで俺といいこと.....でもいいけど?」

一夏は意地悪そうに言う。その態度に鈴は思わずぞつとする。

「い、行くに決まっているでしょ!?!今着替えて準備するからさっさと部屋から出ていきなさいよー!」

「はいはい。」

鈴に押されながら一夏はさっさと部屋を後にしていく。鈴は一回机に座るとアルバムや本を少し調べてみた。

「白騎士事件」も「デジモン」に関する情報も何一つない。当然、IS学園にも入っていないようだ。

あるのは東がISを発表したことで宇宙で初のスペースコロニーの建造に成功したというものぐらいだった。

「……やっぱり夢？」

鈴は受け入れられない現実に頭を抱える。

???

sideセシリア

「……………」

「どうしたのセシリア? 浮かない顔しちゃって?」

「具合でも悪いんじゃないのか?」

「……………はっ!?! い、いえ、そんなことはありませんわ!」

セシリアは、目の前に座っている男性と女性に答える。

彼女も鈴同様、身の回りの異変に戸惑っていた。

気が付けば彼女は実家のベッドで寝かされていて、幼い頃に死んだはずの両親が目の前で普通に生きているのだ。そして、なによりも……………

「そう言えば織斑君と言うセシリアのボーイフレンドさん、今日の夕方こちらに来るんですか?」

「確かそうだったな、初めて会うから気になるものだな。娘のボーイフレンドがどんな男なのか。」

いつの間にか一夏と自分が交際しているということだ。母の話によるとI S学園で付き合い始めたのだそうだ。

証拠として実家に自分の直筆で書かれた手紙があったことがそれを物語っていた。

確かに一夏には好意を持ったがここまで親密な仲ではなかったはず……のだが。「この子が理想の人と言うほどですからね。」

「そうだね、せっかくの客人なのだからこちらでも歓迎パーティーの準備をしなくては……」

両親は、娘に親しくしてくれている一夏についての話で盛り上がっているのに対して、セシリアの心は整理がつかない状態だった。

「……今までのことは全て夢だったのでしょうか？」

彼女はそう考えながら両親を眺める。

「プオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「くっ!?!」

ベルフェモンの寝息から発せられる衝撃波からガルダモンは防御しようと身構える。衝撃波は予想以上に強力でガルダモンは後方へと吹き飛ばされる。

ベルフェモンのこの形態は戦闘意思はないものの完全体程度のデジモンなら一瞬で消滅させてしまうほどの破壊力なのだ。

「う、うう………」

ベルフェモンのたった一撃の攻撃でガルダモンの体はボロボロになってしまった。

「やっぱり私じゃダメなんだ………」

ガルダモンは下で眠っているセシリアを見ながら言う。

「私っていつも置いてけぼりだ……みんなはさらに上に進化できるのに私はいつもその辺止まり。みんなの足を引っ張ってばかり………」

ガルダモンの体から黒い正気が発し始める。それを長距離から見てバルバモンは笑い始める。

「フオオフオオフオオフオオフオオフオオ! いいぞ! 儂の計画通りじゃ!」

「計画通り?」

「奴はお前たちの中で一番進化が遅かったからの、うまくベルフェモンを相手にさせて

暗黒進化するように仕向けたのじゃ！いや、あいつはパートナーさえいなければ何もで
きんからやりやすかったわい！」

「よくも鈴を……セシリアを……ガルダモンを！許さないぞ〜！」
セントガルゴモンはミサイルを放ちながらバルバモンに迫る。

夢の世界 鈴 side

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうしたんだ鈴?」

遊園地で一夏とデートをしていた鈴は複雑な顔でベンチに座っていた。そんな鈴に

一夏はアイスを手渡す。

「あ、ありがとう・・・・・・・・」

鈴はそう言うときアイスを食べ始める。

「それにしても今日のお前、本当に変だぞ?いつもだったら嬉しそうな顔をするのによよ。」

「そ、そんなことはないわよ・・・・・・・・。」

鈴はそう言いながら周りを見る。周りでは親子連れが楽しそうに乗り物に乗っている。まるで自分が見てきたものとは違うように。

(やつぱり、今まで見たのは私の夢だったのかしら・・・・・・・・。テリアモンや箒たちと出会ったことも・・・・・・・・無人機相手に三人で組んで倒したことも・・・・・・・・臨海学校

や学園祭も……」

「あの……鈴ちゃん？本当に大丈夫？あまり無反応だと俺、悲しくなるんだけど？」

一夏はしよぼんとした顔で鈴に近寄る。

「ごめん、私ちよつとトイレに行つてくるわ。」

そう言うのと鈴は席を外して近くにあるトイレに行く。トイレに入ると鈴は、鏡で自分の顔を見る。

「……何でこんな暗い顔しているんだろう……私……」

鈴は不意に手提げ鞆を落とす。鞆からは財布やら手帳やらが散乱する。

「あつ……いっけない。」

鈴は鞆の中身を拾い始める。

「あれ？私こんなカード持つてたっけ？」

鈴は入れた憶えのないカードを拾い上げる。そこには耳の大きいかわいらしい動物の絵が描かれていた。それは鈴がよく知っていた顔だった。

「テリアモン……」

自分のパートナーの名前を言った瞬間、カードが目の前で燃えてしまう。パートナーに助けを求めるかのように。

「……やっぱりこっちが夢なのね。」

鈴は思わず言った。すると目の前にデジヴァイスが現れる。

「正直こつちを現実に思えたのは私の願望のせいだったのかもね。お父さんとお母さんが仲が良かった頃の暮らしに戻りたいとか、一夏と付き合えたらとか、I Sなんかと関係なくなればとか……でも、それは今まで積み上げてきた思い出を全部否定するものなんだよね。テリアモンたちと過ごした楽しい思い出も。」

鈴はトイレの外へ出てみる。外では一夏が何かを悟ったのか複雑な顔で待っていた。
「…………バレちまったようだな。」

「まあね、でも正直楽しかった。アンタのすぐ近くにいられたことが。」

「本当に行つちまうのか?」

「うん、あつちに大事な友達が待っているから。」

「いいのか?こつちにいればお前は仲のいい両親と一緒に暮らせるし、俺と一緒にすることだってできる。邪魔者も一切出ないんだぜ?」

一夏は誘惑するように鈴に言う。それでも鈴は首を横に振る。

「これはある意味最後の忠告だ。向こうに戻ればまたつらい現実がお前を待っている。それでも戻るか?」

「答えは同じよ。私の友達が向こうで待ってる、だから私も一緒に行かなくちゃ。」

鈴がそう言うとい夏は納得した顔で道を開ける。すると周りの風景がガラス細工の

様に碎け、一つの道が現れた。

「俺はこっちの方がいいと思っただけだな．．．まあ、俺は飽くまでも夢の存在。お前の意思には何も否定しないさ。」

一夏はそう言うのと透き通るように消えてしまった。鈴は道を走っていく。

友達の元へ。

鈴&セシリアルルート

「うう〜!」

「フオフオフオフオフオフオ〜!どうした?デカブツ。もう疲れたか?」

バルバモンはセントガルゴモンを挑発しながら言う。

「ホレホレ、儂を倒さんとお前のパートナーは戻ってこんぞ?」

「もう怒った〜!」

セントガルゴモンはバルバモンを追いかける。

「馬鹿め!お前のようなのろまに捕まる儂ではないわ!」

「誰がのろまですって?」

「それはあのデカブツの………ってあり!」

バルバモンは前を振り向くとさつきまで眠っていた鈴が甲龍を展開して待ち構えていた。

「貴様、さつきまで眠っ……」

「私の友達の悪口言うんじゃないわよ！」

鈴は、甲龍の双天牙月をバルバモンの顔に叩きつける。

「ブベツ!？」

「これでも喰らいなさい！」

更に追撃にゼロ距離で龍咆を撃ち込む。バルバモンは思わぬ攻撃で地面に叩きつけられる。

「なんで儂がこんな目に……ガクツ。」

バルバモンは気絶してしまう。

「ふん！私にかかれば魔王なんてこんなもんだよ！」

「鈴〜！」

セントガルゴモンが鈴の方へと飛んでくる。

「もう、起きるのが遅いよ〜！」

「ごめんごめん、私もアンタがいなかったら夢の中で永遠に楽しんでいるところだったわ。」

「え？」

「話は後。今度はあの眠っているやつをやるわよ！」

「そうだ！早くセシリアも起こさないとガルダモンが危ないよー！」

鈴たちは続いてベルフェモンの方へと向かう。それと同時にベルフェモンの持っていた目覚まし時計が鳴りだす。同時にベルフェモンの体が分解・再構築され始める。

「なんか嫌な予感……」

鈴は向かいながら言う。予想通りさつきまでのかわいらしさとは打って変わってベルフェモンは凶悪な姿をさらす。

「グウオオオオオオオオオオオ!!!」

その目の前ではガルダモンが黒い正気を発したまま動かないでいた。

ピヨモン、暗黒進化!?

鈴&セシリアルト

「グルルルルルウウ．．．．．」

目を覚ましたばかりのベルフェモンは歯ぎしりをしながら唸っていた。その様子に鈴とセントガルゴモンは思わずゾツとした。

「り、鈴．．．．．」

「わ、分かっているわよ．．．．．でも、あれってどう見ても普通じゃないわよね?」

ベルフェモンは目の前で止まっているガルダモンを無視して鈴たちの方を見る。

「．．．．．俺の眠りを妨げたのはお前たちか?」

「い、いえ．．．．．」

「．．．．．そうか、でも今機嫌が悪いからまずお前たちから血祭りにあげてやる。」

「どう見ても八つ当たりだよ．．．．．これ。」

ベルフェモンは恐ろしい形相で鈴たちに向かって行く。ガルダモンは黒い瘴気に包まれている中、その姿を変えようとしていた。

夢の世界 side セシリア

「.....」

セシリアは自分の部屋の窓から夜空を眺めていた。
夢の世界は彼女にとっては理想的だった。

両親は、生きている。

一夏とは付き合っていて仲も良好。
現実同様に箒や鈴などの友人に恵まれている。
何もかもが理想的だった。

・・・・・・・・しかし、これで本当にいいのだろうか？

あれは本当に夢の出来事だったのだろうか？

両親が死んだことも。

今まで一夏たちと共に過ごしてきたことも。

そして、ピヨモンも。

それが彼女の心を混乱させる。

「私は・・・・・・・・一体どうすれば・・・・・・・・」

セシリアは頭を抱える。今の彼女にどつちが現実なのか見分けるのは困難だった。

「・・・・・・・・？」

そのとき夜の庭で何か大きな影が動いた。それは一見鳥にも見えたが鳥にしては以上に大きく見えた。影は何かを探しているかのように庭を走って行った。

「あれって……もしかして！」

セシリアは急いで私服に着替え、影の向かったところへと急ぐ。

「ば、化け物よ……アイツ……龍咆を口で受け止めて倍に返すなんて……」
「うわあああ!こうなったら一か八かだあ!」

セントガルゴモンは体全身のミサイルを全てベルフェモンに向かって発射する。ベルフェモンは攻撃を受けながらも怯む様子なくセントガルゴモンに向かって行く。

「やつと真面目に戦う気になったようだがその程度の攻撃で俺を倒せると思っっているのか?」

「ジャイアントミサイル!」

とつておきともいえるジャイアントミサイルをベルフェモンに向かって発射する。ミサイルは、ベルフェモンの顔に直撃し、大爆発する。

「よし!鈴!今のうちに接近戦で!」

「わかってるわよ!はあああ………えっ?」

鈴が双天牙月を構えて向かおうとしたとき、何かが高速で彼女のすぐ脇を通り去って行った。後ろを振り向くと前にいるはずのベルフェモンがセントガルゴモンを岩盤に叩きつけていた。余程の衝撃だったのかセントガルゴモンの体のフレームはあちこちが凹み、岩盤には大きなクレーターが形成されていた。

「なんなあんだあ?今のは?」

「う、うう………」

セントガルゴモンはダメージを受けすぎた影響なのか、テリアモンに退化して地面に落ちいく。

「テリアモン!!」

「終わったな、所詮屑デジモンは屑なのだ。」

鈴は急いでテリアモンを回収する。テリアモンは全く動けないように鈴が揺さぶっても僅かにしか動けなかった。

「不味い……このままじゃ……」

鈴はテリアモンを抱えてベルフェモンから距離を取ろうとするがベルフェモンはすぐ後ろまで迫っていた。

「どこへ行くんだあ?」

「あ、ああ……」

鈴は、震えながら双天牙月を構えるがベルフェモンは笑みを浮かべながら近づいてくる。

「随分眠っていてやつと運動になると思ったらこんな雑魚どもの相手をする羽目になると思うと面白くない。ん? そう言えばバルバモンの奴は……さっきの攻撃で死んだか?」

ベルフェモンは独り言を言いながら自分が破壊した方を見る。鈴はこの隙に逃げよ

うとするがすぐさまベルフェモンの巨大な腕に捕まる。

「この俺から逃げられるとでも思っていたのか!」

「はっ、離せ離せ!」

鈴は、双天牙月をベルフェモンに向かって振り回すがベルフェモンに届くことはなかった。ベルフェモンは空いている手に炎を纏わせる。

「ううう……万事休すって奴ね……」

鈴はもう駄目だと納得したのか涙目でテリアモンを抱きしめる。

「今樂にしてやる!ギフトオブダーク……」

「クワアアアア!!」

「ん?」

後ろからの咆哮にベルフェモンは何を感じたのか鈴への攻撃をやめ、手放す。後ろの方ではガルダモンが黒い瘴気を発しながら形状を変え始めていた。

「ガ、ガルダモンが進化した?」

鈴は距離を取りながらその姿を確認する。

形状は人型の女性寄りになり、後頭部に黒い長髪があることを覗けば、以前ミレイにデジモンのデータベースで見せてもらってレイヴモンによく似ていた。しかし、片翼が白銀ではなく黒く染められており、体の鎧や頭部の赤い仮面の部分もひびが入っていて

そこから黒い瘴気を発し続けている。更に目は死人のように視界が定まっておらず、露出している肌は継ぎ接ぎだらけだった。その姿はホラー映画で見るフランケンシュタインやゾンビのような化け物を思わせた。

「あ、あれで大丈夫なわけ？ どう見ても死にかけにしか見えないけど……」

「……屑が。おとなしくしていれば楽に死ねたものを……」

ベルフェモンは高速で進化したレイヴモン（？）へと向かって行く。

「ギフトオブダークネス！」

ベルフェモンは近距離からレイヴモン（？）に向かって斬撃を繰り出す。ベルフェモンの爪はレイヴモン（？）の脇腹に喰い込む。レイヴモン（？）は悲鳴を上げることなくじっとしている。

「!？」

「あ、あああ……」

レイヴモン（？）は持っている剣をベルフェモンに向かって突き刺す。今まで見ようともしなかった敵の攻撃に驚いたベルフェモンは剣を抜きレイヴモン（？）から距離を取る。

「……」

ベルフェモンは自分の傷口から流れる血を手で拭き取るとニヤリと笑いながら手に

着いた血を舐める。

「じ、自分の血を舐めながら笑ってる……」

レイヴモン(?)の変貌ぶりに驚いていた鈴だったがそれに対するベルフェモンの反応に恐怖を感じた。

「フッフッフ……そうこなくちや面白くない。」

ベルフェモンはレイヴモン(?)に向かって行く。対するレイヴモン(?)はまるでゾンビのような動きをしながら応戦していく。

「……………セシリア……………アンタ、いい加減に目を覚ましなさいよ……………」

夢の世界 sideセシリア

「はあ、はあ……こつちにいるはずなのに。」

セシリアは息を切らせながら例の影を探し続けていた。

あれを見つければ今自分に起こっていることがわかる。

しかし、その反面この世界が偽りの世界だったらという不安もあった。それ故に彼女はあれが単なる思い過ぎだと思いたいという感情もある。

もうすでに30分近く外を探しているが見つかる様子はない。

「やはり思い過ぎだったのでしょうか？」

セシリアはホッと息を撫でおろすと自分に部屋を戻ろうとする。

「ア、アアアアア……」

「!？」

その瞬間、何か呻き声が彼女の頭に響いた。声は明らかに聞き覚えのあるものだが何か不気味に感じさせるものだった。

「い、今は……」

そのとき、不意の彼女の目の前に見覚えのあるものが通り過ぎて行った。
ピンクの体で鳥のような生き物。

それが彼女の目の前を通り過ぎて行ったのだ。

「ま、待って!ピヨモン!」

セシリアは急いで後を追いかけていく。ピヨモンはセシリアのことを気にしていないのか走る。

「ピヨモン!ピヨモン!」

セシリアは必死にパートナーの名前を呼びながら走る。

セシリア&鈴ルート

「ア、アアアア………」

レイヴモン（？）は呻き声をあげながら這いずり回るように動く。持っていた剣は既に折れてしまい、翼はベルフェモンに腕がれてしまった。それでも彼女は、戦おうとする。

「死にぞこないめ！」

ベルフェモンはいい加減に飽きたのかレイヴモン（？）の右腕を掴む。レイヴモン（？）は抵抗しようとするがベルフェモンの掴む力は強くレイヴモン（？）の右腕は嫌な音を立てはじめる。

「フーン！」

「あ、あアアアアアアアア！」

ベルフェモンに右腕を引き千切られ、それまで唸り声しか出さなかったレイヴモン(?)が初めて悲痛の声を上げる。ベルフェモンは右腕を投げ捨てるとレイヴモン(?)の体を持ち上げ、バックブリーカーをかける。

「フッフッフッフ．．．．．よく頑張ったがとうとう終わりの時が来たようだな。」

レイヴモン(?)の体から再びミシミシと嫌な音が出始める。

「ま、まさかアイツ．．．．．や、やめなさい!」

鈴はベルフェモンが何をしようとしているのか見当がついた。

バキッ

次の瞬間、レイヴモン(?)の体は真つ二つになり、上半身は眠ったままのセシリアの方へと飛んでいく。残った下半身はベルフェモンの足元へと落ちる。

「あ．．．．あ．．．．」

「フッフッフ．．．．．フハツハハハハ．．．フハハハハハハ!!」

やっと敵を仕留めたことに満足したのかベルフェモンは勝ち誇ったように笑い始めた。鈴は思わずレイヴモン（？）の引き裂かれた体を見る。

「こんな……こんなこと残酷すぎるううう!!」

鈴の目から涙が始め、落ちた涙がテリアモンに当たりテリアモンも目を覚ます。

「り……鈴?」

「ピヨモンが死んだ……そして、セシリアも目を覚まさない。こんな酷すぎるわよ! どうして……どうして殺されなきゃならなかったのよ! 悪魔よ! あいつは悪魔の中の悪魔よ!」

「フフフフツ……」

ベルフェモンは次のターゲットを鈴に切り替え、鈴たちの方へと近づいてくる。

「鈴……」

テリアモンは鈴の手から離れると弱々しく立ち上がる。

「テリアモン!」

「鈴は僕が守るから……」

テリアモンはそう言いながら鈴の前に立つ。

「ハハハハハッ! 雑魚がいくらカツコを付けたとてこの俺に敵うとも思っていたのか!」

「うう……!」

テリアモンが構えようとしたときベルフェモンの後ろから物音がした。一同は振り返り見て見る。

「何い!?!」

ベルフェモンが驚いたのも無理はない。

死んだとばかり思ったレイヴモン(?)が這いずりながらセシリアに向かって移動していたのだ。それどころかバラバラにされた下半身と右腕が自分から移動しているのだ。これには泣いていた鈴さえも泣き止み、テリアモンは不気味さに鈴に抱きついた。

「な、なんて奴だ……」

流石のベルフェモンも冷や汗をかいた。

光りを掴め

セシリア&鈴ルート

「バカな……あのダメージで生きているだと……」

ベルフェモンは目の前で這いずっているレイヴモン(?)を見て唖然としていた。今まで多くのデジモンを葬ってきた彼だがここまでして生きているデジモンを見たのは初めてだった。

「あ、ああああ……」

「化け物めえ！」

ベルフェモンはジャンプをするとレイヴモン(?)を押し潰す。重さで地面にクレイターができるがそれでもレイヴモン(?)は動こうとする。

「フーン！」

ベルフェモンはさらに攻撃を続ける。

夢の世界 s i d e セシリア

「ピヨモン……ピヨモン……はあ、はあ……」

ピヨモンを追いかけていたセシリアだったが見失い、いつの間にか自分の部屋にまで戻ってきていた。疲れたせいもあり彼女はベッドに座る。

「どうして……やっぱりあれは私が見た幻覚？でも、さっきのは確かに……！」

セシリアが頭を抱えていると不意に自分の部屋のドアを開けて出ようとする影を見

つけた。今度こそ間違いなくピヨモンだ。

「ピヨモン！」

セシリアは逃げようとするピヨモンを捕まえる。

「今までどこに……」

「ア、アアアアアア……」

「きゃあああ！」

ピヨモンが一瞬にして下半身と右腕の無いレイヴモン(?)に変わり、セシリアは思わず突き飛ばした。レイヴモン(?)は苦しそうにセシリアを見つめていた。

「セ……シ……リ……ア……」

「その声……ピヨモン？」

聞き覚えのある声にセシリアは、レイヴモン(?)に近づく。レイヴモン(?)は床に血を流しながら這いずつてくる。

「どうしてそんな姿に……」

「セシリアを守ろうとして……でももう抑えられない……もうすぐ私は私じゃなくなる……」

「どういうことですか？」

「力の欲した結果……暗黒面に堕ちるという意味……もうセシリ

アの知っている私じゃなくなる……つまり、ただ本能のままに暴れまわる戦闘マシんに……うう……」

レイヴモン(?)は何か見えない力に引つ張られるように部屋から引きずり出されて行く。セシリアは思わずレイヴモン(?)の左手を掴む。

「もうすぐ私の心も消えてしまう……だから、あなたにお別れが言いたかった……」
「ピヨモン……」

「セシリア、あなたはこの世界で幸せに生きて。あつちに戻ってももう絶望しかないんだから……」

「そんな……」

「私だって結局は何もできなかった……みんなの足を引つ張ってばかりで……」
「ピヨモンがそう言うなら私の方が……」

「もういいの……私にとつてあなたと一緒にいられた時間が幸せだったから……」
そう言うレイヴモン(?)はセシリアの手を解いて引きずられるようにどこかへと消えて行った。セシリアはしばらく呆然としていたが改めて手を見るとレイヴモン(?)を触った時に付着したはずの血が消えていた。しかし、感触からさっきの出来事は本当のことだと理解できた。

「……ピヨモン……」

セシリアはすぐに自分の机に向かってある物を探し始める。

パートナーとの大切な絆を。

・
・
・
・
・
数十分後

セシリアは長い時間をかけてデジヴァイスを見つけた後、屋敷のあるドアの前で立っていた。そのドアには屋敷にはおかしいというほど血が張り付いていて、明らかにいついさつきまで何かがあったことを表していた。

「……ここにピヨモンが来たことは間違いないですね。」

セシリアは、デジヴァイスを握り締めるとドアを開けようとする。

その時だ。

「セシリア、こんな時間に何をしているの？」

咄嗟に声の聞こえたほうを見ると母と父が見ていた。

「お母様……お父様……」

「こんな時間に何をしているんだ？」

「今日は疲れたでしょ？ ゆっくりお休みなさい。」

セシリアは一瞬そうしようと考えた。しかし、すぐに思い直す。

これは夢の世界。

自分の望みが具象化した世界に過ぎない。

今日の前にいる両親も夢の存在に過ぎない。

それが分かっていても離れたくないという思いが強かった。それでも彼女は血の付いたドアを開けた。ドアの先はブラックホールのような巨大な穴が渦巻いている。

「セシリア！」

両親が心配そうに声をかける中、セシリアは涙を流しながらも言う。

「ごめんなさい！でも、どうしても助けたい家族がいるんです！短い間でしたけど、一緒に暮らせて嬉しかったです！さようなら！お父様！お母様！」

叫んだ後、彼女は渦の中へと飛び込んでいった。

彼女が一瞬振りむいて見た両親の顔はどこか寂しそうな雰囲気か漂っていたが何かを悟ったのか少しうれしそうに見えた。

それだけを確認すると前に向き直り、現実で苦しんでいるパートナーを救うために彼女は現実へと戻っていく。

セシリア&鈴ルート

「が・・・・・・・・・・はっ・・・・・・・・・・」

「フフフフフフツフ・・・・・・・・大人しく死ぬば苦しまずに済んだものを・・・・・・・・」

ベルフェモンは血で赤く染まったレイヴモン（？）を岩に叩きつけながら笑う。

レイヴモン（？）の仮面は既に割れ、不気味でなければきれいな女性の顔が露出して
していた。その顔も血に染まり、腕がかすかに痙攣しているだけだった。ベルフェモン
がレイヴモンを放り投げると近くにまで戻ってきていた下半身がくつつき、何とか立ち
上がろうとする。それをさらに面白がって体全体を使って押し潰す。

「もう、やめてよ・・・・・・・・・・本当に死んじゃうじゃないのよ・・・・・・・・」

鈴は既におぞましい光景をもう見ていられなかった。

「あ、ああああ………」

「今樂にしてやる。」

レイヴモン(?)を少し離れたところに投げるとベルフェモンは口を開く。すると周囲が急に揺れだす。

「鈴………どうしよう………」

「どうしようたって………私たちが行ってももう間に合わないわよ………」

鈴たちが見守る中、ベルフェモンは止めを刺すべく一撃を仕掛ける。

「ボイスブラスター!」

ベルフェモンは口から鈴に攻撃したときとは全く比べ物にならないくらい火炎が混ざった衝撃破を放つ。レイヴモン(?)はそれまでのダメージのせいか逃げる様子はなく、直撃した。

「終わったな………ここまで頑張ったところは褒めてやりたいところだ。………つて、いないだとお!?!」

「「え?」」

ベルフェモンが満足そうに言いかけたとき目の前で起こったことに驚く。鈴たちも驚いた声を聞いて顔を上げる。衝撃破が通った場所には何もなくて少し離れた場所まで

シリアがレイヴモン(?)を抱きかかえていた。衝撃破を受けたのか既に愛機のブルーティアーズもボロボロになっていた。

「また一匹、虫けらが死に來たか。」

ベルフェモンは少し残念そうな顔をしながらも獲物が増えたことに喜んでいた。

「セシリア……アンタ、起きるの遅すぎるわよ！」

「やった！セシリアも起きた！」

セシリアは地面に着地するとボロボロのブルーティアーズを解除して拾って來たのか持っているレイヴモン(?)の右腕くっつけ直す。

「……セ……セ……セシ……リ……ア？」

レイヴモン(?)はゆっくりとセシリアの顔を見る。

「どうして……こっちに帰ってきてても……」

「……ごめんなさい。」

「え？」

「一人にしてごめんなさい。」

セシリアは泣きながらレイヴモン(?)に謝った。その涙は頬を通たり彼女の顔に落ちていく。

「ピヨモンも私の大切な家族なのに……一人だけ苦しめるようなことをして……」

「これは私のせい………」

レイヴモン(?)は彼女の言葉を否定しようとしたがセシリアは首を横に振る。

「ピヨモンのせいだけじゃありませんわ。私もあなたが会いに来てくれなかつたらあのまま夢の中で何も知らないで過ごしていましたわ。あなたの苦しみもわからないまま………」

「セシリア………」

「もう私の両親はもういません。……でも、私はもう一人じゃありません。一夏さんや篠ノ之さん、織斑先生やクラスの皆さん。そして、ピヨモン。あなたは来てくれたんですから。」

「………」

レイヴモン(?)が気が付いたとき、自分も目から涙を流していた。

「セシリア………」

「一緒に戦いましょう。みんなで一緒に帰れるように。」

「キツ！面白くない。」

ベルフェモンは少し嫌な顔をして火球を作り、二人の方へと投げ、爆発させる。

「えっ?!こんな感動的ところで攻撃!?!」

「あんた、いくら何でもそれはないでしょ!」

「うるさい！俺は……俺の意思で破壊し尽くすだけだあ！」

鈴たちに批判を喰らいながらもベルフェモンは自分の考えを押し通す。

「あんな無防備の状態じゃ……」

「セシリア……ピヨモン……」

心配そうに鈴たちはセシリアたちの方を見る。

「……ん？」

鈴はそのとき、煙の向こう側が光っているのが見えた。煙が晴れていくとそこにはレイヴモン（？）が体を光らせ始め、セシリアの前で攻撃を受け止めていた。レイヴモン（？）の目はベルフェモンを睨みつける。

「何イ!？」

「セシリアは、私のことを守ってくれた……だから、今度は私が守る！」

レイヴモン（？）の体は輝きを増し、姿が変わり始める。恐ろしい気な鎧が金色へと変化し、黒髪も金色に変わりセシリアに似た雰囲気になる。翼は赤いオーラを纏った状態になり、姿は戦女神ともいうべき姿になった。

「ピヨモン……」

セシリアは驚いた顔で見ている。レイヴモン（？）だったデジモンはセシリアを見ると微笑み、ベルフェモンの方を見る。

「おお．．．おお．．．」

激変した状況にベルフェモンは思わず後ろに下がる。

「私の名はワルキューレモン！闇を照らし、悪を断つ！」

彼女は聖剣を構え、飛び立つ。

夢の終わり

セシリア&鈴ルート

「あれがピヨモンの本当の究極体……」

「すごい……」

少し離れた場所で鈴とテリアモンはベルフェモンに迫るワルキューレモンを見ていた。ワルキューレモンから発する光は荒れた大地に草花を生えさせ、立つのがやっとだったテリアモンたちも本人たち気づかない内に治癒させていた。

「ハハハハハハハッ！雑魚がいくら進化したとて、この俺を超えることはできぬう！」
ベルフェモンは構えを取りワルキューレモンに向かって行く。ワルキューレモンは腰の柄の収納されている聖剣『ガルダソード』を引き抜くと防御の態勢に入る。

「私は負けない。絶対に守って見せる！セシリアも、現実世界とデジタルワールドも！」
ベルフェモンは火球を無数に作り出し、ワルキューレモンに向かって発射する。ワルキューレモンは避けながらもガルダソードに炎を纏わせ、斬撃波を飛ばすことで相殺させる。

「何イイ!？」

「さっきまでのと同じ攻撃が何度も通じると思ったら大違いよ。」
「キイイ！」

怒ったベルフェモンは口から衝撃破を放つ。

「レヴァナント・ヴェール！」

それに対してワルクキュレモンは、全身を光のヴェールに包み込ませることで攻撃を受け止める。

「なんだとお!？」

「私は許さない！みんなを傷つけるあなたを！」

ワルクキュレモンは、翼を広げる。すると光が収束し始め赤く輝き始めた。

「レヴァナント・バースト！」

ワルクキュレモンが叫ぶと同時に光は一带に広がり衝撃波が起こる。

「こつちにも来る！」

鈴とテリアモンは思わず抱き合って目を瞑る。ベルフェモンは光をまともに受けながら叫ぶ。

「ウオオオオオオオオオ!!ばああかあなああああ!!」

ベルフェモンの体は光に？まれていく。それと同時につい先ほどまで瓦礫に埋もれていたバルバモンが起き上がる。

「うう……ベルフェモンの奴、儂にまで攻撃してきおつて！この後休眠期に入ったら……えっ？」

バルバモンも光に吞まれてしまった。

「なんでえええ儂もおおおお!?」

そんな中でセシリアは、ただ一人身構えることもなければ逃げる様子もなくワルキューレモンを見続けた……。

ラウラ&シャルロットルート

「ガバアアアアア！ロストルム！」

リヴァイアモンは巨大な口を開いて突っ込んでいく。それに対してメタルガルルモンは全身のミサイルを展開する。

「ガルルバースト!!」

ミサイルは全弾リヴァイアモンも口へと入っていくがリヴァイアモンは平気な顔で突っ込んでいく。

「くっ！」

ラウラはAICを展開するがリヴァイアモンの予想以上の衝撃に手が震える。

「これ程とは……………」

そのリヴァイアモンの背後からシャルロットが「グレー・スケール（灰色の鱗殻）」を撃ち込む。

「グウウ!?ガウダ！」

リヴァアアモンは怯むことなく長大な尾をシャルロットに向ける。シャルロットはすぐに距離を取る。

「飯綱！」

サクヤモンが結界を展開し、腰に携えた4匹の管狐でリヴァアアモンを攻撃する。

「ウウ……マダ、マダ喰イ足リナイ！モットヨコセ！」

「コイツ……私たちの攻撃を食事とでも思っているのか!？」

「でも、ラウラ。コイツ口の中でミサイルがいくら爆発しても何ともないよ！」

「僕たちの攻撃にビクともしないなんて……正直デュークモンたちが警戒している理由がわかるよ。」

「マダダ！俺ノ空腹ガ満たサレルマデ食事ハ終ワラナイ！オ前タチ雑魚デハ、メイン
ディッシュユ」ハ務マラナイ！」

リヴァアアモンは口を開け、再び四人に向かってくる。

「来るぞ！シャル！」

「うん！」

「メタルガルルモン！」

「わかってる！」

四人は反撃しようとしたその時

「退け、ガキども。」

後ろから聞き覚えのない声でした。

更識姉妹ルート

「はあ……はあ……こんなガキどもにやられるなんて私も無様なもんね……
くっ。」

リリースモンは、ボロボロになった服と破壊されて使い物にならなくなった右腕の魔爪「ナザルネイル」の見ながら気を失った。目の前ではオメガモンズワルトとセラフィモン、そして楯無と簪がいた。

「かつ、勝った……」

「正直言つて奴は予想以上に手強かつた……もし、二体の状態で戦っていたのならさらに苦戦させられた可能性は十分にあつた。」

楯無の隣でオメガモンズワルトは、冷静に言うが体は傷だらけになっていた。

「無論、彼女の武器でもある『ナザルネイル』は触れるもの全てを腐食させてしまう恐ろしい武器だ。グレイソードでなければおそらく完全に腐食されていたのかもしれない。」

「私の夢現もこの有様だもんね。」

簪はボロボロに崩れてしまった『夢現』を見ながら言う。この薙刀もリリースモンの魔爪に触れただけで腐食してしまった。

「正直言つて、篠ノ之さんたちや織斑先生たちがこのルートを選ばなかつたのは正解だつたわね。あの二人は接近戦中心の装備だつたし。」

「接近できたとしても彼女の暗黒の吐息で相手の体を蝕む『ファントムペイン』で全滅もあり得たからね。」

「でも、勝ったのには変わりないわ。見なさい。」

楯無が指を指すと目の前にゲートが現れる。

「これで次の場所へと移動できるわ。」

「でも、織斑先生たち大丈夫かな？」

「大丈夫だよ、きつと。」

楯無たちはゲートの中へと入って行った。

セシリア&鈴ルート

「……………鈴。」

「……………テリアモン。」

しばらく抱き合っていた鈴とテリアモンはそつと目を開ける。目の前はまだ光で眩しいが少なくとも自分たちは生きていると確信できた。

「わあああああ〜!! 私たち、まだ生きてるのね!」

「僕も死んだと思ったよ〜!」

思わず喜ぶ二人だったが咄嗟にセシリアたちのことを思い出す。

「そう言えばセシリアとピヨモンは!」

「でも、眩しくて見えないよ〜。」

二人は目を細めて何とか二人を探そうとする。

しばらくして、ようやく二つの人影らしく物が見えてきた。

「あれは……………一人はセシリアで間違いないわね!」

鈴はテリアモンを抱きながら走って行く。

走った先には確かにセシリアが立っていた。

「セシリア！よかった無事みたいね………ん？」

声をかけようとした鈴は足を止める。

「どうしたの鈴？」

「あれ………」

鈴が指を指した方にはワルキューレモンがいた。そして、ワルキューレモンの目の前にはデジタマぐらいのサイズにまで縮小したベルフェモンがいる。その姿は、先ほどの凶暴な姿ではなく大人しそうなスリープモードに近かった。

「………あれってベルフェモンじゃない！まだ生きて………」

「でも、変だよ？さっきまで感じていた殺気は感じないし、最初に見たときよりも小さくなっている。」

ベルフェモンは徐々に光に包まれていくと透き通るように消えてしまった。

「消えちゃった。」

「どうなってるの？あの光は？」

鈴たちは不思議そうにワルキューレモンに近づくと、ワルキューレモンは、鈴たちの方を見ると微笑む。

「あの光『レヴァナント・バースト』には二つの効力があるんです。一つは負の感情を浄化する能力、もう一つは、相手を癒す能力。」

「あつ、そう言えば私たちが受けていたはずのダメージも……」

「完璧になくなってね。」

ワルキューレモンの説明に何となく納得する鈴たち。

「それでセシリアは何で動かないのよ？それに消えたベルフェモンも。」

「ベルフェモンは負の感情そのもので浄化された今、彼は完全に消滅しました。」

「あつ……本当に消えちゃったんだ……。」

「ねえくねえくピヨモン。それでセシリアは？」

「セシリアは少し……夢を見えています。」

「夢？」

「はい、ほんの少しだけ……。」

セシリアside

セシリアは夢の中で再び両親と対面していた。

「……………今度こそ本当のお別れなのね……………」

母親は寂しそうな顔をして言う。

「私は、あつちでまだやることがたくさんありますから。」

「私たちも少しの間だけ成長したお前を見ることができてよかったよ。」

父親は少し満足した顔でセシリアに言う。セシリアは少し恥ずかしくなった。

「お友達も大切にしないさい。これから先も私たちはあなたのことを見守ることしかできないんですから。」

「お母様……」

「ピヨモンか……いい友達を持ったな。」

「お父様……」

「お別れよ、いつまでも元気だね。セシリア。」

「私たち二人はずっとお前の傍で見守っているよ……」

「さようなら……お父様、お母様……セシリアはこれからも懸命に生きていきます。ピヨモンやみんなと一緒に……」

両親が光りに包まれて行き、セシリアの目の前は真つ白に染まる。

鈴&セシリアルト

「・・・・・・・・・・はあああ・・・・・・・・・・」

「あつ、気がついた。」

三人に囲まれている中、セシリアはゆっくりと目を覚ました。

「全く、また夢の世界に行くなんて何やってているのよ？またピヨモンをあんなゾンビみたいな姿にするつもり？」

鈴は流石に二度も寝たセシリアに対して少しきつめに言った。

「すみません・・・・・・・・」

「まあ、いいわよ。ベルフェモンもピヨモンが倒してくれたし、傷も治っているし。」

「鈴、ゲートが開いたよ。」

テリアモンが言うのと四人の目の前にゲートが現れる。

「何とかクリアつてところね。じゃあ、さっさと本物の一夏のところに行きますか。」

「本物? どういうことですか?」

「えっ!? あ、ああ……それはこつちの話。ところでアンタはさっきまで何を見ていたのよ?」

鈴は少し恥ずかしそうな顔をしながら質問する。セシリアは少し照れくさそうな顔をして答える。

「ちよつとした秘密の約束ですわ!」

外道騎士と予感

一夏ルート

「……どうやらゲームの終盤に迫ったようですね。」

ルーチェモンは余裕の態度を崩さず映像を見ながら紅茶を飲む。

「そうだろうな。……で？いつになったら俺と戦う気になるんだ？」

向かいの椅子にはヴリトラモン姿の一夏がイライラしながら座っていた。その姿を見るやルーチェモンは面白そうな表情をした。

「ホッホホホ……仕方ありませんね。」

ルーチェモンは席から立ち上がる。

「では、残りの試合が終わるまでの間、軽いウォーミングアップと言う意味を込めてお相手して差し上げましょう。」

「……ウォーミングアップだけで済むといいけどな。」

一夏も席から立ち上がり距離を取って構えを取る。

「では、始めましょうかね？」

緊張感のないルーチェモンの声が響く。

箒&リリモンルート

「……ここが私たちの戦場か。」

箒は辺りを見回しながら言う。薄暗くてわかりづらいが何かの神聖さを感じさせる

神殿のような場所だ。

「チビちゃんも箒も気をつけなさいよ……どこから何が出てくるのかわからないんだから……」

リリモンは既に臨戦態勢に入っていた。箒も瞬時に紅椿を展開して備える。マグナルフオースブイドラモンは拳を構え、アグモンはすぐにビクトリーグレイモンに進化させてもらう。

「……私の相手は貴様たちか。」

声が聞こえた瞬間、一瞬にして視界が明るくなった。慣れてきて見ると神殿の奥の王座にダークデュークモンが座っているのが伺えた。

「お前はダークデュークモン!」

「誰かと思いきや篠ノ之束の妹か。私個人では織斑千冬の方がよかったのだが……貧乏くじを引いたようだ。」

「黙れ! 私たちは一刻も早くお前を倒して一夏と合流するんだ! そして、姉さんを助け出す!」

箒は雨月と空裂を構える。

「姉さんを助け出す……ほお、なら丁度いいのではないか?」

ダークデュークモンは指を鳴らすと王座の隣に十字架に磔にされた束が姿を現す。

「姉さんー！」

どうやら意識を失っているだけらしい。しかし、服はかなりボロボロの状態で傷だらけだった。

「貴様！よくも姉さんを……」

「箒、落ち着いて！相手の挑発に乗ったら思う壺よ！」

ダークデュークモンに近づこうする箒をリリモンが止める。その様子をダークデュークモンは面白そうに眺めていた。

「ふむ、しかし四対一では私の方が不利だな。ではこの人質にも参加してもらおうとしよう。」

「何い!?!」

ダークデュークモンは一つの紫色の不気味な液体の入ったカプセルを取り出す。よく見るとスライムのように動いていた。

「き、気持ち悪い……」

マグナアルフォースブイドラモンは思わず引いた。

「どうだ？こいつはISとある物を掛け合わせて誕生した新種のデジモンだ。最もこいつは明確な意思があるわけでもなく私の命令に従う程度しか知能がないがね。名前で呼ぶのならバイオモンとでも呼ぶか。」

「バイオモン？」

「では見本を見せてやろう。」

デュークモンはバイオモンのカプセルを東に向かつて投げける。カプセルが割れ、バイオモンは東に付着するとその体を伸ばして束を包み込み、姿を変え始める。

「では最初に私の姿になってもらおうか。」

ダークデュークモンが言う。バイオモンはグニャグニャと動き、ダークデュークモンと瓜二つの姿になる。

「なっ、姉さんを取り込んで奴と全く同じ姿に！」

「心配するな。こいつは依代の形状を基準にしているから人型にしかなれん。それに依代には何の害もない。最もこいつを引きはがさなければ助けることは出来んがな。」

「くそ……」

「箒、アイツは私が相手をするわ。アンタは早くお姉さんを……」

「何言つてんだよ姉ちゃん！姉ちゃん一人じゃ……」

「今の箒じゃお姉さんのことでまともに戦うのは難しいわ。だから、あなたがサポートして助けてあげて。私だって、時間稼ぎぐらいはできる。」

リリモンはそう言う。と右手にヨーヨー、左手にレイピア状にした棘の鞭を構える。

「リリモン……お前……」

「はつきり言つて私でもアイツに一人で敵うとは思っていないわ。だから急いで助け出しなさいよ。最悪な場合は？アレ？を使うから。」

「でも？アレ？は……」

「正直、長時間使つたらやばいかも……じゃあ、任せたわよ。」

そう言うとりりモンはダークデュークモンに向かつて行く。

「箒、俺たちも急いで束を助けないと。」

ビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーを構え、近づいてくるバイオモン斬撃破を飛ばす。バイオモンは一回スライム状態になり、その攻撃を回避する。

「どうやら一筋縄ではいかないみたいだな。」

「だつたらー！」

マグナアルフォースブイドラモンは、一気に接近し、拳を構える。

「連続の打撃はどうだ！マグナラツシュ!!」

マグナアルフォースブイドラモンの拳は、バイオモンに命中するがその瞬間、バイオモンの形状が変化し始める。

「何っ!?!」

姿は似ているがそれは自分を進化させてくれるきつかけとなったアルフォースブイドラモンにそっくりの姿になった。バイオモンは超高速でラツシュを切り抜けると両

腕のブレードを展開し、マグナアルフォースブイドラモンに斬りかかる。

「コイツ！俺の姿に……」

マグナアルフォースブイドラモンはガードをし、距離を取る。バイオモンは距離を取ったと同時にシャイニングVフォースを発射する。

「わああ!!」

マグナアルフォースブイドラモンは避けようとするが間に合わず、光線をまともに受けてしまう。

「くっ……!!お、俺の腕が!!」

マグナアルフォースブイドラモンは驚きながら自分の右腕を見る。バイオモンに触れた拳の一部がわずかながらデータ崩壊を起こしているのだ。

「そうそう、言っておくのを忘れていたがバイオモンの素材に使われているもう一つはイーターの一部でこいつが対象の姿に変化できるのは相手に触れたときにそいつのデータも捕食しているからだ。」

リリモンを相手にしながらダークデュークモンは余裕そうに説明する。

「なんだと!?!つまり、俺たちが奴に触れただけで奴は俺たちの能力を学習していくというのか!?!」

「それじゃあ、ブイモンもビクトリーグレイモンも奴と戦えば戦うほど……」

箒は、自分が追い詰められているような気がした。それを察したのかダークデュークモンはニヤリとする。

「フフフフ……恐怖しているな？ダメ押しに更に恐怖させてやるか。」

ダークデュークモンはマントからカプセルを取り出し、バイオモンに向かって投げる。

「そのカプセルを喰らえ、バイオモン！」

ダークデュークモンの命令と同時にバイオモンは高速で移動し、カプセルを体内に取り込む。するとバイオモンの姿は再び変わり始める。

「こ、これは……」

箒は、目の前で立ちはだかるバイオモンに驚愕する。その姿は体色を除けばカイゼルグレイモンと瓜二つだった。

「ど、どうしてイチカの姿に!？」

リリモンは驚きのあまりの攻撃の手を止める。その隙を逃さずダークデュークモンは、魔槍「デユナス」を彼女に向かって振り下ろそうとする。

「やばっ！」

リリモンは鞭で防御するが衝撃で吹き飛ばされ、壁に激突する。

「ブッ！」

リリモンは口から血を出す。ダークデュークモンは軽く舌打ちをするとゆっくりと近づいてくる。

「何故、あの姿になったかを教えてやろうか？あのカプセルはお前たちがロイヤルナイツと戦っていた時に回収した織斑一夏の血液が入っていたものだ。」

「あの時の……」

リリモンは何となく納得できた。確かにロイヤルナイツ戦時、一夏はかなり血を流していた。何かに付着して残り、回収されていてもおかしくはない。箒は、戸惑った状態でバイオモンを見る。

「奴と瓜二つの姿の敵にどこまで相手ができるか見物だな……ハハハハハハ……」
「コイツ……もう、騎士の端くれでもない屑だわ。本当に？アレ？使うしかないかもしれないわね……」

リリモンは口の血を手で拭い、体勢を立て直してダークデュークモンを見る。

ラウラ&シャルロットルート

「な、何者だあ!?! 貴様は!?!」

ラウラは突然姿を現したベルゼブモンに驚いていた。後ろにいるメタルガルルモンは少し怯えた声で答える。

「ラウラまずいよ! そいつはベルゼブモン、七大魔王の一人だよ!」
「?元?だ。」

ベルゼブモンは呆れた態度で言う。

「?元?ってどういうこと?」

「つまり今の俺は七大魔王じゃねえってわけだ。」

「だ、だが、我々の味方でもないという事だろう!？」

落ち着いて対処しようとするシャルに対してラウラはかなり警戒をしていた。

「ケツ、信じるも信じないも勝手だが俺はルーチェモンの奴が気に入らねえ。だから、叩き潰しに来た。その前に邪魔が入ったからこつちに来たまでだ。」

「じゃ、邪魔!？」

「てめえらじゃねえよ。この空間の周りにいるイーター共だ。途中までは無理やり突破してきたがこれ以上無駄に体力を使うわけにはいかねえからな。」

「む、無理やりって……まさかイーターを粉碎しながら!？」

「貴様等、イツマデ喋ッテイル!俺、モウ我慢デキナイ!」

長話にしびれを切らしたのかりヴァイアモンは再び大口を開けて襲い掛かってきた。

「……………つたく、これでも喰らってくだばりやがれ!」

ベルゼブモンは右腕のプラスターを構える。

「デススリンガー!!」

プラスターから強力な破壊の波動が放たれた。

一夏ルート

「バーニンググサラマンダー!!」

一夏は、拳に纏った炎をルーチエモンに向かって放つ。

「ふん！」

ルーチェモンはそれをものともせず片手で弾いてしまった。

「この程度ですか？」

「まだまだ！」

一夏は頭の中では今の姿ではルーチェモンには敵わないことは理解していた。しかし、ミレイから事前にルーチェモンの情報を教えてもらっていたため、迂闊にハイパースピリットエヴオリューションをするわけにはいかなかった。

「どうしました？早く私に見せてくださいよ？十闘士の力を引き継いだあなたの力を。」
「ちっ！」

一夏はオメガソードを展開し、ルーチェモンに斬りかかろうとする。

「ん！？」

そのとき首に下げていた首飾りの紐が、千切れて落ちてしまった。頑丈な紐で作られているため普通は切れるはずがないのだが。

「おやおや、何かありましたか？」

「……………何でもない！」

一夏は首飾りを拾い、戦闘を再開する。

(何か嫌な予感がする……………)

一夏は不安を抱きながらも目の前の戦闘に集中する。

箒&リリモンルート

「ハツハハハハハハハハ！どうした小娘共！たかが人質如きで手も足も出ないか！」

「グウ……」

ダークデュークモンは倒れているリリモンを踏みつけながら大笑いする。

バイオモンが束を取り込んでいる上にカイゼルグレイモンの姿のせいで、箒はまともに戦うことができず防戦一方。援護に回っているビクトリーグレイモンとマグナアルフォースブイドラモンもバイオモンに捕食されかねないため迂闊に反撃できず、ダークデュークモンに単独で挑んだりリリモンは圧倒的な力量の差で押されてしまっていた。

『ガルルルル……』

バイオモンは龍魂剣を模した剣を持ちながら箒に迫っていく。

「どうすればいいんだ……アグモンたちが攻撃すれば奴に取り込まれてしまう……私が攻撃をすれば姉さんを……」

戸惑う箒とは反対にバイオモンは容赦なく襲い掛かっていく。このままではやられてしまうのも時間の問題だ。

「何とかしないと……」

リリモンはダークデュークモンに踏みつけられながらも周囲を見て打開策を考える。いくら捕食するといえ必ず弱点はあるはず。

するとバイオモンの行動に一つ気がかりなものがあつた。

「あいつ……火の方には寄ってこないの？」

リリモンが見る限りではバイオモンは宮殿の松明を避けるようにして戦っていた。火を気にしないのならこのような戦いはしないはずだ。

(もしかして……あのデジモン……温度に対して敏感？だとしたら……でも今の筈じゃ見つけるのは困難……だったら……)

「どうした？もう諦めたか？」

「いいえ、まだよ。」

リリモンは隙をついてトウインペダルをダークデュークモンの顔に向かって飛ばす。カッターはダークデュークモンの顔を斬りつけ、ダークデュークモンは思わず手で押さえる。

「がっ!?き、貴様ー！」

リリモンは急いで距離を取る。

「制限時間は3分……それ以上やり続けたら私の体が……でも、やるしかない！」

リリモンはそう言うのと身構え、動かなくなる。ダークデュークモンはリリモンの方を見る。トウインペダルで切り付けられたせいか右目の方は傷がついていた。

「貴様……よくも私の顔に傷を……この薄汚いデジモンがあ!!!」

ダークデュークモンは、リリモンに迫る。

「はあ……はあ……」

リリモンは顔を上げる。彼女の瞳も赤く発光し、苦しむながらも立ち上がる。

「ほ、解けん！貴様、何をしたっ!？」

ダークデュークモンはリリモンを見ながら叫ぶがリリモンには聞こえていない様だった。

「リリモン……バーストモード……」

リリモンはダークデュークモンを差し置いてバイオモンの方へと飛んでいく。

さよならリリモン

箒&リリモンルート

「制限時間、二分五十秒……」

リリモンはダークデュークモンを拘束した後、高速でバイオモンの所へと向かった。突然何かが迫っていると感じたのかバイオモンは箒から目標をリリモンへと切り替える。

「そうよ……お利口さんね……」

リリモンはバイオモンの前に降り立ったと思いきやすぐさま回し蹴りをした。

「後二分四十秒……」

「リリモン！何をしているんだ!?早く離れないとそいつに……」

箒は立ち上がりながら言うがリリモンは攻撃をやめない。リリモンは、鞭を腕に何重も纏わせ、ボクサーグローブのような状態にする。しかし、どう云うわけか鞭も赤く発光し、蒸気を発していた。

「後、一分十秒前……」

息を荒くしながらリリモンはバイオモンに向かってラッシュを仕掛ける。

「ダメだ！アイツに触れたら姉ちゃんも取り込まれちゃう！」

マグナアルフォースブイドラモンは止めようとするが時すでに遅くりりモンの拳はバイオモンに命中した。

「遅かった！」

「ブ、ブロロロロオロ!!？」

「「えっ!?!」」

しかし、三人が予想とは反対で逆にバイオモンが苦しみだした。それに生じた隙を逃さずりりモンは攻撃を続ける。

「ハア……ハア……ハア！」

リリモンの息はさらに荒くなる。苦しんでいるバイオモンを見て箒たちは理解できないでいた。

「どういう事なんだ？俺たち三人で攻撃したときは苦しむ様子すら見せなかったのに奴がりりモンの攻撃で苦しんでいる？」

「つて言うか姉ちゃんが真っ赤になってる！どうなっているんだ!？」

「まさか……?バーストモード?を……」

箒は、今のリリモンの姿を一度見たことがある。それは一時的に己の限界以上の力を発揮する超究極体とは違う姿と言っても過言ではない。

のかバイオモンを箒の方へと吹き飛ばす。

「箒！早くその刀を奴の胸に刺して！」

「えっ!?でも、そんなことをしたら……」

「いいから早く！もうあんまり時間がないの！早く！」

「わ、分かった！」

箒は吹き飛ばされてくるバイオモンに向かって空裂を構え直す。リリモンはバイオモンに向かってグローブ状にした鞭を解き、両手を前に突き出す。

「ハア……ハア……フォービドゥンテンプレーション!!」

リリモンから放たれた光線はバイオモンへと命中し、バイオモンの体はドロドロに溶けていく。

「バイオモンが崩れていく……！箒、あれ！」

ビクトリーグレイモンは驚いた顔で指を指す。バイオモンの体が溶解している中、コアと思われる場所に人の姿があった。

「あれは姉さん！」

箒は、急いでバイオモンへと近づくと、

「ブ……ブ……ブワアアア!!」

溶けかけているバイオモンは抵抗するためか右手を箒に近づけて攻撃しようとする。

「させるか!」

ビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーでバイオモンの右手を切り飛ばす。箒はその間に空裂でバイオモンを斬りつけ、束を体内から摘出する。束はぐったりして身動きする様子はなかったが無事なのは確かだった。

「離れるぞ!」

ビクトリーグレイモンに抱きかかえられ、箒たちはバイオモンから離れる。コアともいうべき束を失ったことによりバイオモンはさらに溶けていき、動きが鈍くなってきた。

「ブオ………ブロオ………」

やがて、バイオモンの動きは完全に止まり、完全にただの液体へとなり果てた。箒たちはその姿を見て安堵するが急いでリリモンの方を見る。リリモンの方はバーストモードを解除したのかフラフラの状態で立っていた。

「リリモン!」

箒は、束をマグナアルフォースブイドラモンに任せ、紅椿を解除してリリモンの方へと向かう。

「リリモン! やったぞ! 姉さんを助けられたんだ!」

箒は嬉しそうにリリモンの方を見ながら走ってくる。リリモンも笑みを浮かべて疲

れ切った体を動かしながら手を振ろうとする。

「……………うっ!!」

そのとき腹部に何か刺された痛みを感じる。リリモンは下を向いてみるとさつきバ
イオモンが落としたはずの剣が自分の腹を貫通していた。

「あ……………ああ……………」

「よくも私を……………まで痛めつけてくれたな!」

後ろにはさつきままで拘束していたダークデュークモンが怒りの眼で睨みつけていた。
リリモンは力を失ったのかのように倒れる。

「リ……………リリモオオオオオンンン!!!」

一夏ルート

(!?なんだ!?この胸騒ぎは!?)

一夏は戦っている最中、思わず嫌な予感を感じていた。

(この感覚……誰かがやられたような気がする……チビか?それとも箒? ラウラ? シャル?……まさかりリモンがやられるとは信じられないが……)

一夏は不審に思っているのを察したのかルーチェモンは戦うのを中断する。

「ん!?!」

「どうやらお仲間のこと気がなくなってしようがないようですね?」

「何?」

「だったら見せて差し上げましょうか? ウォーミングアップもいいところですよ。」

ルーチェモンがそう言うのとデスモンが一匹飛んできて目玉を光らせ映像を移す。映像にはラウラとシャルロットの姿が映っている。

「おや？こちらの方は既に試合終了になつていているようですね？それにかつての同胞の姿も。」

ルーチェモンは少し驚いた顔で一緒に写っているベルゼブモンの姿を見る。

「まさか彼が我々に反旗を翻しているとは………意外ですね。」

「そうかよ。（よかつた……二人は無事なようだ。）」

「では次の映像を見てみましょうか。」

ラウラ&シャルロットルート

「ちっ！無駄にデススリンガーを五発も喰らわせることになるとはな！」

ベルゼブモンは舌打ちしながら言う。目の前では黒焦げになったリヴァイアモンが動く様子もなく沈黙していた。

「わ、私たちがあんなに苦戦していたリヴァイアモンをたった五発で……あれが魔王の力だというのか？」

目の前でくたばってしまっているリヴァイアモンを見てラウラは呆然としていた。無理もない、散々特訓をしてきた自分たちが苦戦していた相手を割り込んできたベルゼブモンがこうもあっさり倒してしまうのだから。そんなラウラの様子に気がついたのかベルゼブモンは彼女の頭に手をのせて言う。

「ぬっ？貴様、何のつもりだ？」

「そうがっかりすんじゃないよ。てめえらが弱らせていたからこれだけで倒せたんだ。流石、あのバカ（デュークモン）が短い間に鍛え上げたことだけはあるな。」

「う、うるさい！べ、別にながかりなど……」

「あのバカ？」

「ああ……それはこつちの話だ。それよりも先に進めるようになったようだけ？」

ベルゼブモンがそう言うのと目の前にゲートが出現する。

「コイツをくぐって行けばルーチェモンのところへ行けるってわけか。無理やり突破していくよりもよっぽど効率がいいぜ。」

「そろそろ僕たちも行かないと。」

シャルに押されながらもラウラは前に進んで行く。

「ラウラ、今は一夏たちに合流することが……」

「分かっている。お前にも心配かけさせてすまないな。」

ラウラはメタルガルルモンを撫でるとゲートの中へと入って行った。

箒&リリモンルート

「がはっ！」

リリモンは血を吐き出す。ダークデュークモンはそんな状態のリリモンを踏みつけ、箒の方を見る。

「篠ノ之箒！ 姉が救出できてうれしいか？ だが、それもここまでだ！」

ダークデュークモンはそう言うどバイオモンが入ったカプセルを取り出す。

「アイツ、まだカプセルを！」

「今度という今度は容赦せん！」

ダークデュークモンはカプセルを自分で割り、バイオモンを付着させる。するとダークデュークモンの体は液体のように溶け始め、倒れているリリモンに向かって落ちていく。

「ぐう！がああ!？」

「アイツ！姉ちゃんに何するつもりなんだ！」

マグナアルフォースブイドラモンは拳を握り締めながらもその光景を眺めることしかできなかつた。しばらくするとダークデュークモンの体は完全に溶けきり、液体はリリモンの体に吸収されていった。

「アイツ……まさか……」

箒は警戒しながらも紅椿を展開しなおす。倒れていたリリモンは起き上がり、箒の方を見るや不敵な笑みを浮かべる。

「そう……そのまさかだ。」

声はリリモンだったが明らかに別人のしゃべり方だった。よく見ると腹部の傷も完全になくなっていく。

「コイツ！姉ちゃんの体に乗っ取りやがった！」

「フフフツ、いくら貴様たちでも仲間には傷つけることはできまい！」

リリモンの体に乗っ取ったダークデュークモンは学ランを脱ぎ捨て甲冑を展開し身に纏う。

「貴様！リリモンの体から出ていけ！」

ビクトリーグレイモンはドラモンブレイカーで斬りかかろうとする。

「いいのか？そんなことをしたらこの娘が死ぬぞ？」

「……………それでも！」

「それに例えこの小娘を殺しても私は分離すれば痛くも痒くもない。それでも殺すか？」

「くっ！」

「レイジ・オブ・ワイバーン。」

「ぐわあああああ！」

ビクトリーグレイモンはデユナスから発する光線に吹き飛ばされる。

「さあ、次はどいつから来る？」

ダークデュークモンはデユナスを担ぎながら箒たちを見る。

「できるはずがない……………リリモンを攻撃することなんて……………」

「箒姉ちゃん……………」

マグナアルフォースブイドラモンは束を庇いながらも心配そうに箒を見る。箒は武

装をしまう。

「どうした？攻撃しないのか？」

ダークデュークモンは箒を蹴り飛ばす。ISの絶対防御があるとはいえ、その衝撃は凄まじく箒の体は勢いよく飛んで行った。

「ぐう……」

「ほれ、どうする？このままだとお前も死ぬぞ？」

ダークデュークモンは箒のところへ飛んでいき彼女の首元にデユナスを傾ける。

「や、やめろ……やめてくれ……リリモン……お前とは戦いたくない……」

「ふん、いくら喋ろうとも奴には届かん。」

ダークデュークモンはデユナスを持ち上げる。

「さよならだ！篠ノ之箒！愚かな虫けらが！」

「……リリモン！」

箒は悔しそうに言う。

「もう駄目だ……見ていられねえ……」

マグナアルフォースブイドラモンは思わず目を瞑った。

「……………ん？」

いつまでも経ってもデユナスが箒の首を切断することはなかった。箒は恐る恐る上を向く。

「……………き、貴様！まだそんな力が！」

「ダークデュークモンは苦しそうな表情をしてデユナスを落とす。

「そ、そう簡単にうまくいくと思っただら……お、大間違いよ……」
「リリモン！」

今の一言で箒は理解した。

リリモンはまだ完全に取り込まれていない。今もダークデュークモンに抵抗しているのだ。

「ほ、箒……」

リリモンは自分の首にかかっている首飾りを外し、箒に渡す。

「これを……」

「こ、これって」

箒は首飾りのことに関しては一夏に聞いていた。だから、今、この場で自分に渡すことに思わず驚いた。

「あ、後は……よろしく……」

リリモンはそう言うのと箒から離れてバーストモードを発動させる。

「何をする気だリリモン！」

「も、もう私は助からないわ……だから……あなたの手で……止めを刺して……」

「そ、そんな！」

箒は思わず泣きたくなくなった。

出会って数カ月。

初めは一夏の恋人と言う認識で打ち解けず、悩んでいたが彼女と話していくうちに打ち解け、かけがえのない親友になったリリモンが自分に止めを刺してほしいと頼んでい
るのだ。

「そんなこと……できるわけないじゃないか！」

箒は泣き始めた。

「なんで友達をこの手で殺さなくちゃいけないんだ！」

「箒……」

「お前も一夏が好きなんだろ！だから帰って一緒に告白して決めてもらうって！これじゃ私の勝ち逃げじゃないか！」

「いい加減にしなさいよ！」

リリモンは思わず怒鳴った。

「今は個人のどうこうよりも世界の行く末の方が重要でしょ！」

「し、しかし……」

「アンタも私もここで死んだらイチカは余計悲しむに決まってるじゃないのよ！アンタが生き残らなきゃ誰がイチカのことを支えるのよ！」

「リ．．．．リリモン．．．．」

箒はリリモンの顔を見る。リリモンの顔も涙で濡れていた。

「こんなこと．．．．アンタにしか頼めないじゃない。だから．．．．お願い。」

「うううう．．．．」

「．．．．．箒姉ちゃん、姉ちゃんの言う通りにしてやってくれ。」

マグナアルフォースブイドラモンは顔を伏せたまま言う。

「姉ちゃんは覚悟を決めたんだ．．．．奴の言いなりになるぐらいなら箒姉ちゃんに止めを刺してもらった方がいいって．．．．兄貴を任せられるのは箒姉ちゃんしかないって．．．．」

箒は震えた声で言うマグナアルフォースブイドラモンを見る。

このままだとリリモンは再びダークデュークモンに乗っ取られて自分たちを殺しにかかる。

そして、自分たちも死ねば一夏も悲しむ。

それだけは避けたい。

だから親友の手で葬られたい。好きな男を任せられる人に．．．．

それが彼女のせめての頼みだった。

「……わかった。」

箒はそう言うと同時に両肩の展開装甲をクロスボウ状に変形させて武装「穿千」にして構える。

「一夏のことをよろしく……」

「ああ……お前と出会えて本当によかった。」

出力を最大にして標準を合わせる。

「くっ……のまま巻き込まれてたまるか！」

ダークデュークモンは死に物狂いでリリモンから分離しようとする。

「無駄よ……」

リリモンのバーストモードの影響かダークデュークモンの分離が止まる。

「く、くそ！こんな奴らに！こんな虫けら共に！」

「私たちが虫けらならアンタはそれ以下よ……」

臨界点を超えたのかリリモンの体が燃え始める。

「うう……うう！」

箒は涙で溢れる目を擦りながら穿千をリリモンに向ける。

「箒!!」

「うわああああああああ!!!」

箒は穿千から高出力のエネルギー波を発射する。

「ぬぐうわああああああああああ!!!」

ダークデュークモンはもだえ苦しむような叫びをあげながら消えていく。
そんな中リリモンは笑みを浮かべて箒を見る。

「さよなら、箒。アンタに会えて………よか………」

「うう………リリモン………」

攻撃を終えた後、箒は彼女の形見である首飾りを握り締めながら泣いていた。傍ではパートナーであるビクトリーグレイモンがせつない顔で彼女を見ていた。

「………ごめん、箒。」

「うう………うう………リリモン………リリモン………」

箒はしばらくの間、泣き続けた。

かけがえない友の死を悲しみながら………。

絶望への序曲

一夏ルート

「・・・・・・・・・・」

一夏は黙ったままデスモンから写されるリリモンの最期を見ていた。

「どうやらお一人退場になってしまったようですね。せつかくこれからメインイベントが始まるというのに。」

「・・・・・・・・・・」

一夏の頭の中にリリモンの言葉が過っていく。

『リ・リ・リリモンです。』

『あなたのことが好きになりました！だから、一緒に連れて行ってください！』

『イチカー！私からの愛のプレゼントを受け取って〜!!』

『イチカ〜!!!!』

『その・・・・これからずっとついて行っていいよね？』

『私は最後までイチカと一緒にいて行くわ!』

『私だってイチカの彼女! やれるものはとことんやってやるわ!』

『イチカ』

『イチカ!』

『イチカ!!』

「.....すまない。」

一夏は目から一筋の涙が流れ落ちていった。

「さて.....どうやら全ての試合も終わったようですし、そろそろ最終試合である私たちの戦いを始めるとしましょうか。」

ルーチェモンは言うと同時に自分の体から黒い瘴気を発し始める。

「……そのようだな。」

一夏はデジヴァイスを取り出す。

(リリモンは自分の身を犠牲にしてまでも勝利に貢献してくれた……。俺がここでくじけるわけにはいかない！)

デジヴァイスから現れるスピリットに囲まれながら一夏は竜の姿から竜騎士の姿へと変わっていく。

「ハイパースピリットエヴォリューション!!」

スピリットの光がすべて集まり、一夏はカイゼルグレイモンへと進化した。

「やっと本気になりましたか……。では私も……」

ルーチェモンは巨大な黒き竜の姿へと変貌する。その姿は、それまでの天使と悪魔が混ざったような姿とは違い、終末をもたらす竜そのものだった。

『コレヨリ、最終ステージニ移行シマス! 準備ハヨロシイデスネ!』

「ああ! この戦いに終止符を打ってやる!」

一夏は竜魂剣を持ちながらルーチェモンへと向かって行く。

箒ルート

「……………」

箒は、泣き止んだ後に簡素ながらもリリモンの墓を建てた。墓とは言っても当然遺体はなく、十字架には捨てられた彼女の学ランをかけた。

「……………リリモン。」

箒は黙ったまま墓を見る。その隣でマグナアルフォースブイドラモンは墓に写真を添える。

「その写真は？」

「俺と兄貴、姉ちゃんとライラ姉ちゃんと一緒に撮った写真さ。まあ、この頃の俺はまだチビモンだったけど……」

「……そうか、ブイモンには悪いことをしたな。ライラモンに続いてリリモンを……」
「その話はもういいさ！今は前に進もう！ルーチェモンを倒せば、デジタルワールドも元通りになるし、箒姉ちゃんの世界も救われる！そうすれば姉ちゃんだって浮かばれるさー！」

「……そうだな。」

「箒！お姉さんの意識が戻ったぞ！」

「何？」

箒は後ろにいるビクトリーグレイモンの所へと戻る。ビクトリーグレイモンに抱えられながら束はうつすらと瞼を開いていた。

「う、うう……」

「姉さん？」

箒は心配そうに束を見る。束の目は箒の方へと向いた。

「ほ、箒ちゃん？ど．．．．．どうしてここに．．．．．」
「姉さん！」

箒は束を抱きしめる。束は、少し驚いていたが久しぶりの妹の再会に思わず涙が出た。そのとき、一同の前にゲートが現れた。ちなみにゲートは既に前方の方に開いていた。

「あれ？ゲートは前の方にあるのに何で後ろからも開くんのだ？」

マグナアルフォースブイドラモンは不思議そうにゲートを見る。ビクトリーグレイモンは箒たちを守るためにドラモンブレイカーを構える。すると、ゲートの中から聞き覚えのある声が聞こえた。

『おっ？？姐さん！出口が見えて来たぜ！』

『鈴！あっちの方から光が見えて来たよ！』

『簪ちゃん、やつと出口が見えて来たわよ！』

『あつ、やつと出口かな？』

「．．．．．もしかして、みんなか？」

箒の言う通り、後ろのゲートからは千冬たちが現れた。

「ここは．．．．．篠ノ之！それに束も！」

「ち．．．．．ちーちゃん．．．．．久しぶりだね．．．．．」

千冬を見て束は嬉しそうに答える。

「どうやら妹も助けられたようだね．．．．」

「あつ、あなたは？」

「あれ？リリモンさんはどうしましたの？」

セシリアの疑問に箒たちは申し訳なさそうな顔になる。

「あ、あの墓つて．．．．．まさか．．．．」

シャルが四人の後ろにある墓標を見る。

「．．．．．ああ、私たちのために．．．．」

「．．．．．一夏のところまで全員来れなかったというわけね。」

鈴も複雑な顔で言う。

「．．．．．戦場ではよくあることだ。だが．．．．惜しい奴を失ったな。」

ラウラは同情するように言う。そんな中、千冬はジエスモンにマドカを任せ、全員の前に出る。

「．．．．お前たちが辛く言うのはよくわかる。だが、大事なことを忘れていないか？私たちの戦いはまだ終わってはいない。」

箒たちは黙って千冬の言葉を聞く。

「確かに我々は七大魔王の内、既に六人を倒してきた。だが織斑、いや、一夏はまだ最後

の一人と戦っているんだ。私たちが苦戦している以上にきつとアイツもきつい戦いを強いられているはずだ。」

「「「織斑先生．．．．」」」」

「今は悲しんでいる時ではない。一刻も早くこの戦いを終わらせることだ！そのためにも我々はこの先のゲートを進む必要がある！」

千冬はそう言い終わるとリリモンの墓に向かって敬礼を送る。

「ここで散ったリリモンのためにもこの戦い．．．．絶対に終わらせるぞ！全員、勇敢に戦って散ったリリモンに敬礼！」

箒たちも敬礼する。この敬礼でしばらく沈黙が続いたがやがて千冬の声でこの沈黙は終える。

「．．．．．では、これより一夏に加勢に向かう！お前たち準備はいいな？」

「わかってる！」

「行くに決まっているでしょ！」

「早く助けに行きませんか！」

「返事は？」

「「「「はい！わかりました！」」」」」

「しかし、問題はマドカと束か．．．．。万全ではない二人を連れて行くのは．．．．」

「私、大丈夫です。」

「東さんもOKだよ。．．．早くいつくんの所へ行かないと．．．」

「．．．．．それでは突入する！」

千冬に続いて全員ゲートへと入っていく。そして、最後になった箒は入る前にリリモンの墓を見直す。

「．．．．．行ってくるな、リリモン。一夏はきつと助けて見せる。そして、この惨劇を終わらせる。」

そう言うのと箒もゲートに入って行った。

一夏ルート

『パーガトリアルフレイム!!』

「炎龍撃!!」

ルーチェモンの口から放たれる炎を前に一夏は斬撃を飛ばして攻撃を防ぐ。

『ドウシマシタ? ソノ程度ノ力デハ私ヲ倒セマセンヨ?』

サタンモードになっても口調を変えないルーチェモンに対して一夏は黙ってチャンスを窺っていた。

(奴をできるだけゲヘナへの警戒心を逸らすんだ……)

数日前のデジラボ

「ルーチェモンの形態には成長期の通常形態、完全体のフォールダウンモード、そして、究極体のサタンモードが存在しているわ。説明した通り、サタンモードになったルーチェモンにはあらゆる技を吸収して無力化してしまう球体『ゲヘナ』を持っていて、伝承でルーチェモンがこの姿になると世界が滅ぶというのはこのゲヘナでどの攻撃も無力化してしまうのが由来するわ。故に倒す場合はサタンモードになる前に倒すか、それかゲヘナの奥に潜んでいる本体である『ラルバ』を倒すしか方法はないわ。」

ミレイからルーチェモンの説明を受けて一夏は頭を抱える。

「……と言うことはやっぱり、フォールダウンモードの内に倒さなくちゃいけないってわけか。」

「でも、おそらく向こうは進化しないほどやさしくはないと思うわ。」

「う……ん。」

考えている一夏に対してミレイは落ち着いた様子で攻略法を提案する。

「あなたのオメガモンから継承した力だったらおそらくゲヘナを破壊することができ
かもしれないわ。」

「ゲヘナを？」

「ええ。可能性は十分にあるわ。ただ、問題は破壊する以前にあなたがゲヘナに近づ
けるかどうかの問題だけど……」

現在 一夏ルート

（奴のゲヘナへの注意を逸らした瞬間、一気に接近して斬る！そうしなければ俺に勝ち
目はない。）

一夏はミレイから教えてもらった情報を思い出しながら戦闘をする。

『逃ゲテバカリデハオモシロクアリマセンネ。何ヲ考エテイルンデス？！』

ルーチェモンはそう言いながらさらに攻撃を加える。

「九頭龍陣！」

一夏は龍魂剣を地面に突き刺し、八つの龍脈と同時に攻撃するがこれも一夏を除いてルーチェモンのゲヘナへと吸収されて行く。

『無駄デス。イクラアナタガ攻撃シヨウトモコノ「ゲヘナ」ノ前デハ無力。』

「……………だとしてもだ。」

一夏はお構いなしにカイゼルバスターを乱射する。それでもルーチェモンに命中することはなく、次々とゲヘナの中へと吸い込まれて行つた。

『イクラ撃ツテモ意味ナイトイウノ……………』

ルーチェモンは少し呆れた様子で言う。同時に彼の頭上に浮かぶ七つの冠が光りはじめる。

「まづいー！」

一夏は撃つのをやめ、距離を取ろうとする。

『ディバインアトーンメント!!』

ルーチェモンの七つの冠から光が一斉に放たれる。一夏はギリギリの距離で回避するが衝撃波に巻き込まれて白の外へ吹き飛ばされる。命中した場所はまるで何かに抉られたのかのように穴が空き、そこは見えなかった。

「あ、危なかった……」

一夏はさつきまで自分が立っていた場所を見て思わずゾツとする。いくら自分でもあれをまともに受けいたらおそらく粉微塵にされかねない。

『外レテシマイマシタカ。シカシ、今度ハ外シマセンヨ。』

ルーチェモンは再び発射態勢を取り始める。

「いくら考えても発射される前にやるしかない！」

一夏はデジヴァイスからオメガブレードを出す。

「オメガモード！」

剣が一夏の目の前で光り、全身を白い装甲を装着しオメガモードへと変化させる。

「オメガインフォース！」

一夏は高速でルーチェモンへと迫る。

『無駄ナコトヲ……。パーガトリアルフレイム!!』

ルーチェモンから放たれる炎を避けながら一夏はグレイソードを展開する。

(チャンスはほんの一瞬、一步でも間違えれば俺はゼロ距離から奴の攻撃を受けることになる。そうすれば俺の負けだ！失敗は許されない……)

高速で移動する中、炎が一夏のマントの一部を焦がす。

『自ラ近ツクトハ……。自滅スル気デスカ?』

「オメガインフォースでもこの攻撃を避けきれないとは……」

『何ヲ考エテイルノカハ知りマセンガコレテ終ワラセテ差シ上ゲマス!』

ルーチェモンは、二度目のデイバインアトーンメントを発射する。

「くっ! オメガ・バスター最大出力!!」

一夏は高速移動の中でオメガ・バスターを発射し、自分に直撃を防ぐ。

「ぐっ!!」

だが同時に弾かれた攻撃の衝撃に耐えきれず一夏の右腕と左足が吹き飛ばされる。

「まだだあああ!」

一夏はさらに勢いをつけてルーチェモンの目の前に迫った。

『ナ、ナント……相殺サセタトハイエ、アソコマデノダメージヲ受ケナガラモ歩

ミヲ止メナイトハ!? 一体ドコニソクナカガ……』

「はああああああ!!!」

一夏はルーチェモンの攻撃を受け続けながらも突っ込んでいく。

『クッ! シブトイ!』

ルーチェモンは目の前にまで来た一夏を手で取り押さえようとする。一夏は、ルーチェモンが一瞬手を離れたゲヘナに向かってグレイソードを突き刺す。

『何!?!』

???

一方、箒たちが去ったエリアでは黒マントで全身を隠した影の姿があった。

「……無様なものだな、私同様の力を与えながら負けるとは。」

影は、無残にも溶け残ったダークデュークモンの鎧を見ながら憐れむ。

「だが、お前は私の代わりに織斑一夏を追い詰める作業をしてくれた。これは褒めるべきことだ。最も分身に褒めてもしようがないがな。」

影の足に生き残りかバイオモンが一匹近づいてくる。影は拾うとバイオモンは何かを吐き出すように体から出した。それは、千冬とデーモンとの戦いでメルキュレモンが断末魔に飛ばしたスピリットの一つだった。

「ご苦労、これで飛ばされたスピリットは全て回収した。後はルーチェモンが織斑一夏を半殺しにするのを待つだけだ。」

影はゲートを開く。

「ルーチェモンめ、世界は貴様には渡さん。何故ならこれから築かれる新世界はこの俺

が築くのだからな・
・
・
・
」

一夏 ルート

ルーチエモンが消滅した後、一夏は力尽きたように地面に落ちた。

「はああ………はああ………くっ。」

一夏は先ほどの衝撃で折れてしまったグレイソードを消し飛ばされた左足に義足代わりとして、マントを破いて作ったロープで固定する。

「これで何とか歩ける………」

一夏は龍魂剣を杖代わりに立ち上がる。さつき爆発のせいか城は完全に崩壊し、辺りは瓦礫で散乱していた。

「うう………さつきの爆発で左目をやられたか………ん？」

一夏は瓦礫の中でぼっかりと空いた穴に気がつく。

「あれは………地下室？」

一夏は骨折した患者のように歩きながら穴に近づく。穴は思っていたよりも巨大でその真ん中には巨大な黒い結晶体のようなものがあつた。

「これは………まさか………」

『そうです。これこそ十闘士の伝説に残されている「アポカリモンの下半身」、つまり私の一部です。』

「!？」

一夏は後ろを振り向く。そこには複数の羽を持ち、初期の胎児の姿に近い姿をしたルーチェモン・ラルバがいた。

「ば、馬鹿な．．．．．オールデリートは完璧だった．．．．お前は完全に消滅したはず．．．．．」

『本来ならそうでしょうね。本来なら。しかし、アレを体内に取り込んで置いたおかげで完全に消滅する前に脱出することができました。』

「アレ?」

一夏はルーチェモンを見る。するとルーチェモンの胸のあたりが光っていた。

「この感覚．．．．まさか、イグドラシル!」

『その通り、今の私はイグドラシルと一体化しています。「神」になるためにね。』

「神だと?」

『ええ、準備はすべて整いました。これより、私はこの世界を全てを創造する神へと進化します。』

「そうはさせるか!」

一夏は龍魂剣で斬りかかろうと思うが思うように動けず倒れてしまう。

『先ほどのダメージが響いているようですね。ホッホホホホ。』

「くそ．．．．．」

『では、そこでご覧になってください。私が神になる瞬間を。』

ルーチェモンはアポカリモンの下半身へと飛んでいく。ルーチェモンがアポカリモンの下半身の真ん中で止まると頭上に七大魔王を象徴する紋章が現れる。

「何が始まるって言うんだ・・・」

一夏は何とか立ち上がりながらその光景を目にする。

まず、ルーチェモン・ラルバがアポカリモンの下半身から出て来た触手に一回拘束される。同時にそのうちのいくつかが体に突き刺さり、ルーチェモンの体が徐々に黒の変色し始める。体が完全に変色すると次は触手がチューブのように動き出し、ラルバの姿から成長していく。羽がドラゴンの翼になり、鋭い爪を揃えた巨大な腕が生えてくる。顔つきも龍のようになり、アポカリモンの下半身と完全に同化した。

「あ・・・あぁ・・・」

一夏は目の前の現実には思わず言葉を失う。

『ついに・・・ついに完全な力を取り戻したぞ！いや、それ以上の力を手にしたのだ！私はずいに「神」へとなったのだ！ハハハハハハハハ!!』

巨大な龍のような姿へと成長したルーチェモンは高笑いしながら叫ぶ。

「・・・・・・・・」

『いなかですか？私の新たな姿は？神に相応しい姿でしょうか？』

ルーチェモンは上から一夏を見下ろす。正直言つて一夏は既に戦える体ではなかった。

『織斑一夏、あなたはよくここまで戦つて来ました。どうです？ここで負けを認めるのならあなたの仲間たちの生存を保証します。世界が滅びてもね。』

「はあ……はあ……」

一夏は跪いて愕然とする。

勝てるはずがない。

こんな敵に対して既にボロボロの自分がどこまで抵抗できるというのだ？

どの道殺される。

もし、負けを認めれば箒たちの命は助かる。

それならいつその事負けを認めるべきではないか？

一夏の脳裏で考えがまとまっていき、負けを認めようとする。

そのとき

「？」

言おうとしたとき一夏の体から何かが落ちた。

自分の首飾りだ。

一夏はそれを見てふと思いつく。

(リリモンは俺たちのために自分の身を犠牲にしてくれたのにそれでいいのか？みんなのやったことを棒に振るといえるのか？それは本当に正しい選択なのか？)

一夏は首飾りを唯一残っている右腕で拾い、考える。

『どうしました？ 負けを認めるのですか？ 私も早く新たな世界を創造するのですから早く答えを……』

「……うるせええ。」

『ん？』

「俺は負けを認めねえ……例えこの体がバラバラになっても、俺は戦い続ける。」

『ほう、自ら「死」を選ぶとは……せめて仲間を生かすと考えていましたがとんだ勘違いでしたね。神に逆らうとは。』

ルーチェモンは巨大な体を浮かせ、一夏の前に立ちはだかる。

『ならば神の名をもってあなたに完全なる「死」を与えましょう！ 選択を誤った己を後悔しなさい。』

「ふん。」

一夏は首飾りを自分の首にかけなおす。そして、能力を失ったオメガブレードを口に咥える。

(リリモン……俺は戦う。たとえ負けて死ぬとしてもだ。それが死んだお前やライラモンたち、父さん、母さんが教えてくれた答えだ。……そして、お前が守ってくれた筈のためにも。)

一夏はゆっくりと上昇してルーチエモンへと向かって行く。

「これが俺の最後の戦いだ!!」

「オ、オメガモン!? そんな馬鹿な!」

結晶はオメガモンの姿になった。体色もオリジナルと同様で一瞬見間違えそうになったが顔を上げると顔の方は単眼になっていて本人ではないことを表していた。

『私が新たに作り出したオメガモンです。いかがです? 一瞬本人と見間違えたでしょう?』

「それも神とかになったお前の力か・・・」

『では、楽しませてください。私の力はまだまだこんなものではないのですから。やりなさい、クローンオメガ。』

「・・・・・・」

クローンオメガは、無言のままグレイソードを展開し一夏に斬りかかる。

「くっ!」

一夏は左足のグレイソードで受け止め、オメガ・バスターを撃とうとする。

「!」

一夏は無くなった右腕を見て思い出した。すでにオメガ・バスターは使用できないことを。戦いに集中しようとするあまりに忘れてしまっていたのだ。思わず動揺している隙を見てクローンオメガはガルルキャノンを発射する。

「ぐう!」

一夏は地面にぶつかりながらもなんとか態勢を整え直す。しかし、クローンオメガはグレイソードで一夏の右脇腹を斬りつける。

「くそー！」

一夏はすれ違い様に龍魂剣でクローンオメガの左腕を斬り飛ばす。

「これでお互い片腕なしだ。」

「……………」

クローンオメガは無言のまま一夏の方を振り向き、落ちた左腕を拾う。するとまるで片手が取れた玩具にくっつけ直すかのように自分の左腕をくっつけ直した。左腕は何事もなかったのかのように動く。

「なんて奴だ。」

クローンオメガはグレイソードを再展開すると一瞬にして消える。

「何？！奴はどこ……………ぶっ！」

探そうとした瞬間、一夏は謎の衝撃に吹き飛ばされる。よく見ると目の前にクローンオメガがいた。高速で自分に攻撃してきたのだ。一夏は岩盤に叩きつけられる。クローンオメガは容赦なくグレイソードを一夏の右胸に突き刺した。

「ぐわああああ!!！」

激痛に一夏は叫ぶ。クローンオメガは自らグレイソードを折ると今度は一夏の落と

した龍魂剣を腹部に突き刺す。

「があ……あ……」

更にとどめとばかりにオメガブレードを奪い、左胸にも突き刺す。そして、ガルルキャノンを発射する態勢に入る。

「こ、こんなところで……」

一夏はどうか龍魂剣を引き抜こうと左腕を伸ばす。しかし、深く喰い込んでいるため抜くのは困難だった。

「こんなところで負けるわけにはいかないんだ……ん？」

その直後にクローンオメガに異変が起き始める。体のあちこちにヒビが入り、ガラス細工のように崩れてしまった。

『おや？どうやらこの能力には時間制限があるようですね。あと少しだというのに。』

ルーチェモンは残念そうに言いながらも一夏の真上に明らかに巨大な赤いエネルギーの塊を撃つ。

『でも、まあここまでやったのですから良しとしましょう。お疲れさまでした。では、そろそろ裁きを受けてもらいましょう。』

一夏はもはや動きようがなかった。

『愚かなデジモンに裁きを！弾けろ！ブラッドレイン！』

ルーチェモンが拳を握ると同時にエネルギーの塊は爆散し、無数の赤い針の雨となつて一夏の全身に突き刺さっていく。

「がはああ………リリモン………箒、チビ、千冬姉……みんな………」

ゲート内

「くっそ〜！一体どこまで続いていやがるんだ！この道は！」

マグナアルフォースブイドラモンはイライラしながら進んでいた。彼だけではない。みんな一刻も早く一夏に合流しなくてはと考えていた。特に箒は何か嫌な予感がするの、か落ち着きがなかった。

「全員、焦る気持ちはわかるがその焦りが時に取り返しのつかないことを引き起こしかねない。そのことを忘れるな。」

「とは言っても姐さん、ここに入ってからもう随分走ってるんだぜ？いくら何でも時間がかかりすぎるぜ。」

千冬の隣でジャステイモンは束を抱えながら言う。実際、一同がゲートの中に入ってから随分経っていた。にもかかわらず出口が見える様子はない。

（……………もう随分走っている。こうしている間にも一夏が……………）
「箒。」

隣でビクトリーグレイモンが心配そうに声をかける。

「ビクトリーグレイモン……………」

「一夏はきつと大丈夫だよ。だって箒だって知っているじゃん。一夏は俺たちの中で一番強いんだからさ。少し落ち着かないと……………」

「でも……」

「箒がそんなに心配していたらブイモンだつてそうだし、織斑先生だつて……」
「……ああ、そうだな。一夏は確かに私たちの中で一番強い。少し心配し過ぎたのかもいけない。すまないな。」

箒はそう言いながらも心配で胸が張り裂けそうな思いだった。自分たちでさえあそこまで苦戦したのだ。一夏だつてそれ以上苦戦していてもおかしくない。もし間に合わずリリモンのような事態になっていたら……

「出口が見えて来たわ!」

鈴が指を指しながら言う。かなり離れた場所にゲートの出口らしきものが見えてきていた。

「やつと出口ですわ!」

「これで一夏と合流できるね。」

全員急いで出口に向かって行く。

(一夏、無事でいてくれ。もしリリモンの時のように一夏を失ったら私は……)

箒は一夏のことと既に頭が一杯だった。千冬たち一同はゲートの出口へと出る。

「出られた!一夏は!?!」

「……お姉ちゃん!あれ!」

「!!」

一夏ルート

「はああ．．．．．はああ．．．．．」

全身と言う全身に血を流しながら一夏は息を荒くしていた。

『この攻撃を受けてもまだ死なないとは………しぶときは褒めて差し上げましょう。』

ルーチェモンはそう言うなり今度は巨大な赤い槍を作り出す。

『しかし、悪運もここまで。そろそろ終わりにしましょう。』

「ぐう……ぐ……」

とどめを刺されそうになっても一夏は動こうと突き刺さっている剣を引き抜こうともがく。

『さようなら、織斑一夏。ブラッドラ……』

「ジャイアントミサイル！」

『ん？』

槍を投げようとしたルーチェモンにミサイルが命中し、投げた槍は一夏から外れて遠くへと飛んで行ってしまった。飛んできた方向を見るとセントガルゴモンがルーチェモンに向かってきていた。

「うお〜！突撃〜！」

『………愚かな。神に対して挑戦してこようとは実に愚かです。』

「みんなで一夏を守るのよ！」

「わあああああ!!!」

鈴たちが一齐にルーチェモンに向かって行く。一方の箒と千冬、東、マドカとジャステイモンたちは倒れている一夏に向かって行く。

「一夏！一夏！」

箒は、一夏のところに行くとき急いで突き刺さっている剣を抜く。一夏はほぼ瀕死状態になっていた。

「はああ……はああ……」

「いっくん……」

東は一夏を見るなりかなり動揺していた。

「ちーちゃん、デジヴァイスを貸して。」

「あ、ああ。」

千冬は東にデジヴァイスを渡す。東は受け取るとデジヴァイスに何かを入力しはじめ、一夏の前に翳す。するとデジヴァイスが一夏の体をスキャンする。

「……」

「姉さん、一夏は……一夏は助かるだよな？ そうなんだろう！ 姉さんならきつと……」

「……もう、手遅れだよ。」

「!？」

東の一言で箒は信じられなかった。

「既に急所を貫かれているし、この多量出血……正直言つて生きて居るのが奇跡なくらいだよ。」

「そんな……嘘だろ？姉さん。姉さんにできないことなんてないだろう？ねえ？」

箒の質問に束は何も答えることはできなかった。千冬は涙目になつていたが涙を流すのを耐え、マドカに見せないように顔を隠させた。ジャステイモンたちは悔しそうに拳を握り締めながらも鈴たちを援護すべくルーチェモンの方へと飛んで行つた。

「嘘だ……そんなの嘘だ！一夏が死ぬなんて！絶対嘘だ！」

「箒ちゃん……」

「リリモンと約束したんだ！一夏を頼むつて！なのに……なのに何もしてないまま一夏が死ぬなんて……そんなの絶対に嫌だあ！」

「束さんだつて同じ気持ちだよ……でもね、私だつて神様じゃないんだよ。どんなに優れている人間でもどうやっても越えることができない壁がある。もう、手の施しようがないんだよ……」

「じゃあ……このまま一夏が死んでいくのを見ることしかできないのか？私たちが……それしかできないのか？」

「……」

「そんな……一夏……一夏……」

箒は、弱り果てている一夏を抱きしめながら泣き始めた。その光景を見て東は複雑な顔をしていた。

「くそ！ 兄貴をこんなにしやがって！ 絶対に許さねえ！」

マグナアルフォースブイドラモンは怒りのあまりにルーチェモンに向かって飛んで行った。

「待て、ブイモン！」

ビクトリーグレイモンも続いて飛び去って行く。千冬は東の方を見る。

「東、本当に一夏を助ける方法はないのか？ せめて命を取り留めることだけでも……」
「……………」

一瞬何かを言おうとしたが東はすぐに黙る。

「本当はないのか？ 一夏を助けることができるんなら私は何でもする！ だから……」

「ならば、そいつを頂こうか！」

「むっ!？」

聞き覚えの無い声かしたかと思いきやいきなり突風が吹き、一夏を何者かが奪い取って行った。

「い、一夏！」

箒は突然目の前から消えた一夏を探し始める。すると謎の黒マントで全身を包んだ

何者かが一夏を片手に掴んでルーチエモンの所へ向かおうとしていた。

「貴様！一夏を返せ！」

箒は紅椿を展開し、後を追う。箒が去った後、束は真剣な顔で千冬の方を見る。

「……ちーちゃん、確かに方法はあるんだよ。でも……」

「返せ！」

箒は、黒マントに向かって空裂のエネルギー刃を飛ばす。しかし、まるで動きを呼んでいるかのように黒マントは攻撃を避け続ける。

「無駄だ。お前の攻撃パターンは既に前の戦闘で経験済みだ。」

黒マントはまるで知っているかのように言う。

「くそー！」

中間距離からでは攻撃が当たらないと判断した箒は一気に距離を詰めて戦おうと距離を縮める。それを察したのか黒マントは移動するのをやめ、箒を待ち構える。

「小娘が。」

黒マントは一夏を持つ手を変えたとランスを展開する。

「はあああ!!」

箒は一夏を取り返さんと二刀流で黒マントに斬りかかる。

「無駄だと言っているだろうが。」

「何故だ！何故私の動きが分かる!?!」

相手の避け方に違和感を感じたのか箒は一旦距離を取り直して黒マントと対峙する。

「言ったではないか。お前の攻撃パターンは既に経験済みだ。」

「そんなはずはない！私は貴様に会った覚えはない！」

「ほう？ではこの顔に見覚えはないか？」

黒マントは自分の顔の部分のマントを外し、その素顔を見せる。

「そ、そんなはずは！お前は!？」

箒は唾然としていた。形状は多少違うとはいえ、その顔は箒にとつて憎い敵の顔だった。

「ダークデュークモン！」

その顔は箒がここに来る前に倒したダークデュークモンそっくりだった。

「正確には私は『カオスデュークモン』だがな。」

そう言うカオスデュークモンは一夏を真下に落とし、盾を展開し箒の前で構える。

「まさか！」

箒は、急いで自分の前に展開装甲で防御態勢に入る。

「ファイナル・エリシオンだと思ったか？馬鹿め！ジュテツカプリズン!!」

カオスデュークモンは盾から暗黒波動を放つ。箒の前に展開した展開装甲は彼女を防御するが次の瞬間、腐食し始める。

「何っ!?! 展開装甲が腐っていく!?!」

「この私、カオスデュークモンの魔盾『ゴーゴン』から放たれるジユデツカプリズンはデュークモンのファイナル・エリシオンと反対にあらゆるものを腐食させ、やがて死に追いやる。そのまま自分の身まで腐ってしまうぞ?」

箒は急いで展開装甲を雨月で切り離し、反撃態勢に入ろうとするが紅椿が警告表示を出し始める。

「これは!?! 紅椿のプログラムまで侵されて……くっ!」

よく見ると紅椿のあちこちが腐食し始めていた。箒は止む得ず紅椿を解除し待機状態にまで戻し、捨てる。同時に紅椿は完全に黒に変色し、粉々になった。

「ハハハツハハハハ! これでもう貴様には何もできん!」

カオスデュークモンは槍を構え、箒に迫っていく。

「その惨めな姿のまま死ぬがいい! デモンズデイザスター!!」

槍の連撃が箒に襲い掛かる。

「くそ……」

箒は何もできないままそこで立ち尽くす。

スサノオ

「轍剣成敗！」

「ぬっ!？」

箒を攻撃しようとしたカオスデュークモンは突然の声に攻撃を中止し、防御態勢に入る。箒が顔を上げると自分の目の前にジエスモンが駆けつけ、応戦していた。

「ちっ！ロイヤルナイツの生き残りか！」

「千冬、早く箒を！」

ジエスモンは、「アト」「ルネ」「ポル」を召喚し、カオスデュークモンに向かって行く。千冬はマドカと束を背負いながら到着する。

「篠ノ之！無事か!？」

「は、はい………」

箒は何でできなかったのが効いたのか力がない声で答える。

「箒ちゃん。」

「……姉さん、ゴメン。姉さんが作ってくれた紅椿が………」

「いいんだよ、箒ちゃんが無事ならそれで。」

東は、箒の頭を撫でながら抱きしめる。一方カオスデュークモンはジエスモンの攻撃を避けながら一夏を回収する。

「ロイヤルナイツの生き残りが……だが、私の計画も叶ったも同然。邪魔することも不可能なのだ！」

「計画? どういうことだ!?!」

ジエスモンは一旦距離を取り、カオスデュークモンと顔を見合わせる。

「全ては私が究極の破壊神になるための計画だ。」

「究極の破壊神?」

その疑問は千冬と箒も同じだった。

今、目の前で暴れているルーチエモンすら恐ろしいというのにそれをさらに超えるというのもつてのほかだ。

「……だが、それが一夏とどういう関係があるんだ?」

「コイツはパーツだ。まあ、生きていようが死んでいようが別にどうでもいいのだがな。」

「き、貴様!」

箒は思わずかつとなったが千冬は彼女を取り押さえ、カオスデュークモンを睨みつけた。

「……一つ聞きたい。貴様はダークデュークモンなのか?」

「ダークデュークモンは昔の名だ。今の私はカオスデュークモン。だが根本的に中身は同じだ。」

「話ではお前は既にリリモンと共に葬られたはずだが……」

「あれは篠ノ之束に作らせた私そっくりに動く人形に過ぎん。」

「何!?!」

箒は思わず束の顔を見る。しかし、驚いているのは束の方だった。

「ふつ、当の本人が驚くのも無理はない。篠ノ之束は我々に鹵獲された後、私の元ではマインドコントロールをしてやらせていたのだからな。故に記憶もない。」

「マインドコントロール!?!」

「どの道貴様らは私かルーチェモンに殺される。冥途の土産代わりに私の計画を教えてやろう。」

カオスデュークモンは一夏を引き上げると話し始める。

「あれは……だいたい1年前ぐらいになるな。デジタルゲートを通じて各地を旅していた私はふとしたことから奇妙な場所にゲートを開いてしまった。それは後にルーチェモンたちが襲撃した織斑一夏の両親が潜伏していたエリアだった。証拠隠滅のためか資料の大半が失われていたがデータの復元など私には容易いことだった。そ

のデータの中で私はある奇妙なデータを発見した。それはオメガモン同様に二体のデジモンを合体させることで誕生する一体のデジモンのデータだった。そのデジモン最大特徴はスピリットを全て使い、最強の破壊神にして再生を司る神と言っても過言ではない大いなる力を引き出すことができる代物だった。これに驚いた私はこのデジモンへと進化すべく様々な策を張り巡らせた。」

「それと一夏がどういう関係があるというのだ!」

「小娘が、まだわからんのか! コイツは言わばスピリットの一つ、進化するための触媒なのだ! だが、進化するためには大きな障害があった。それは同調だ。」

「同調?」

箒の疑問に束が答える。

「奴が言う進化方法は二つの人格を同調させる必要があるんだよ。でも、それには素体となる二人の心をシンクロさせる必要があつて合わせないと合体できないんだよ。」

「その通り、それに織斑一夏が私のために力を貸すはずがない。さらに人格まで統合されてしまう危険性がある以上どちらにしても私の野望は潰えてしまう。だから、私は奴を散り散りに追い詰めていくことにした。」

「それでまさかりリモンを……」

「ああ、本来なら貴様事殺してしまえば奴の精神は確実に追いやられる。だが万が一私

が破れてしまえば元も子もない。だから篠ノ之束をマインドコントロールし、私のデータから生み出したこのボディを作らせ、替え玉にしておいたのだ。」

「そんなもののために……」

箒は悔しいと思いつつ拳を握り締める。あまりにも強く握りしめたのか拳から血が一滴一滴と落ちていく。

「だがことは見事に私の予想通りに進んだ！現に織斑一夏はルーチェモンの手で生きた屍同然！この状態での合体なら奴の干渉を受ける心配はない。つまり、私自身のまま進化することができるのだ！」

そう言うとカオスデュークモンはデジヴァイスを取り出す。形状は一夏とマドカと同系列の物だ。

「このデジヴァイスも篠ノ之束をマインドコントロールしていた時に作らせていたもの。当然、失敗する危険性はない！行くぞ！ハイパースピリットエヴォリューション！！」

カオスデュークモンが叫ぶと同時にデジヴァイスが光り、一夏の体が何もしていないにもかかわらず浮かぶ。

「い、一夏が！」

「さあ！私を神にするのだ！ルーチェモンを超える破壊神にして再生を司る究極の神に

！」

デジヴァイスからスピリットが現れ、バラバラのマグナガルモンのパーツへと再形成されていく。そして、一夏の体はバラバラになり、次々とカオスデュークモンの体に鎧のように纏わり付いていく。

「あれはメルキュールモンのが飛ばしたスピリット！いつの間に回収したのか!？」

「言ったはずだ！私の計画は既に叶ったも同然！既に策は打っておいたのだ！」

やがて全てのパーツが装着し終わり、カオスデュークモンは完全に別のデジモンへと変化した。

「見よ！これこそ十闘士の力を一つとなった存在、スサノオモンだ！」

スサノオモンは箒たちの前でその姿を見せる。

『ん？この感覚は……』

鈴たち全員を相手にしているルーチェモンも遠くで進化を果たしたスサノオモンの力を感じていた。

『……嫌な物だ……しかし、同時に懐かしい感覚ですね。』

ルーチェモンは鈴たちを相手にするのをやめ、スサノオモンがいる方角へと向く。

「アイツ！ 私たち無視するつもり!?!」

「あつちには確か一夏たちが！」

「何とか止めないと……」

「くそ！兄貴の仇だ！シャイニングVフォース！」

マグナアルフォースブイドラモンはルーチェモンに向かってシャイニングVフォースを発射する。

「だったら俺様も付き合ってやるぜ！デススリンガー!!」

「俺も！トライデントガイア！」

三体の攻撃がルーチェモンに命中する。しかし、ルーチェモンは振り向くこともせず掌から黒い結晶を作り出す。

『うるさい虫けらですね。あなたたちはこれでも相手にしていきなさい。』

結晶を砕き、ばら撒くと結晶の一つ一つがデジモンへと変化していく。

「げっ！結晶の一つ一つがアーマゲモンに！」

結晶は次々とアーマゲモンに変化し、マグナアルフォースブイドラモンたちに襲い掛かる。

「こいつ等、よく見たら臨海学校の時に一夏とみんなでやつと倒した奴じゃないのよ！」
鈴は双天牙月で一体を斬りつける。幸い以前ほどの再生能力がないためか斬られたところが再生する様子はない。アーマゲモンたちを相手にしている間にルーチェモンはスサノオモンの方へと向かって行く。

「……ルーチエモンめ、私の気配を感じてこっちに来るな。丁度いい、この機会に奴を完全に抹消してくれる。この究極の姿へとなった私に敵うはずなどないのだからな。」

スサノオモンはルーチエモンの方向へと飛ぶ。その場には箒と千冬、マドカ、東、ジエスモンが取り残された。

「……………私は……………結局何もできなかった……………一夏を守ることも……………」
「奴は自分が神になったというのが……………どの道私たちの命運もここで尽きたということだな。」

「……………いや、アイツはきつとあの力を使いこなせないよ。」
「えっ?」

東の一声に箒は思わず東の顔を見る。

「だって奴は、あの力を発揮するための大事なものを持っていないから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

スサノオモンとルーチェモンはお互いを相手を見下すような顔でにらみ合っていた。

『・・・・・・・・・・ダーク、いや、今はカオスデュークモンでしたね？まさか、そんな玩具で私に挑むおつもりですか？』

「・・・・・・・・ふっ、玩具だと？何を言っているルーチェモン。これは十闘士の全ての力が集まった姿。あらゆるものを無にするほどの力を持つ物だ。」

『・・・・・・・・・・ほう、ではどちらが神に相応しいか試してみますか？』

「無論。」

『では、最初にコレの相手をしてもらいましょう。』

ルーチェモンは掌から再び結晶を作り出す。しかし、黒ではなく純白の光に帯びた結晶体だった。

『デジタルワールド、ロイヤルナイツの祖となったデジモンよ。ここに現れよ。』

ルーチェモンが言うと同時に結晶は光をさらに強く発し、白い鎧をまとった竜騎士へと姿を変える。

「ほう、インペリアルドラモン・パラディンモードか。面白い。」

スサノオモンは武装であるゼロアームズ：オロチを構える。インペリアルドラモンは無言のままオメガブレードを持ち、スサノオモンへと接近する。

「……………」

「ふん……この程度の敵など造作でもない。」

スサノオモンはオメガブレードを振り下ろそうとするインペリアルドラモンに対し、ゼロアームズ：オロチを向ける。

「天羽々斬!!」

ゼロアームズ：オロチの銃口の一部から大出力のレーザーサーベルが発生し、インペリアルドラモンのオメガソードを切断し、本体を真っ二つにした。真っ二つにされたインペリアルドラモンは動くことなくバラバラに碎け散ってしまった。

『……………ほう。どうやら少し見くびっていたようですね。』

「どうする? またくだらない雑魚でも作るつもりか?」

『ふん、いいでしょう。』

ルーチェモンは下半身の結晶体を外し、スサノオモンの前に立ちはだかる。残された結晶体は触手のようなものを出し待機する。

『こうなった以上、私とあなたのとどちらが神に相応しいのか勝負で決めるしかありませんね。負けた方がニセモノ、勝った方が本当の神というので。』

「ああ、当然勝つのはこの私だがな。（馬鹿め、かつて敗北した十闘士の力をすべて手にしたこの私に勝てると思ってるのか?）」

『では行きますよ? パラダイスロスト!』

ルーチェモンの巨大な拳から繰り出される攻撃をスサノオモンは紙一重に避けていく。

「確かに完全体で繰り出すものよりもパワーは比べようがないほど上がっているな。だが巨大になった分スピードが著しく落ちていないか?」

『それはどうでしょう?』

「何?」

『少し速度を上げますよ?』

そう言った瞬間、ルーチェモンの拳の速度が倍以上の跳ね上がった。

「こ、これは!?!」

『見切れますか? この連続で飛ばされるこの拳を?』

スサノオモンは避ける隙がなくなり、瞬く間に地面に叩きつけられた。
『あつけないですね。所詮この程度……何!?!』

ルーチェモンは驚いて叩きつけられているスサノオモンを見る。

『これは残像!?! もしや……』

「残念だったな!」

『むっ!』

ルーチェモンが上を見た瞬間、スサノオモンの拳によって地面に叩きつけられる。

「残像を見切れなかったとは神を名乗って恥ずかしいとは思わないのか?」

『おのれ!』

流星に頭に来たのかルーチェモンは、怒り形相で向かって行く。

『はあ!!』

「うおおお!!」

二人の攻防戦が繰り広げられていく。

カオスデュークモンの最期

「な、なんて戦いをしているんだ……」

箒は目の前で繰り広げられているルーチェモンとスサノオモンの戦いに啞然としていた。

「ロイヤルナイツ、七大魔王、これまで多くの強敵と戦って来たがもはやこの二人の戦いはその次元すら超えている……もはやどちらが勝つかさえ見当がつかない。」

千冬の言う通りだった。

現に二人の神を名乗るデジモンは、千冬でさえもやつとのことで視認できるぐらいの高速戦闘を繰り広げていた。形勢は一様スサノオモンが優勢に見えている。

「はっはっははははは！……どうしたルーチェモン！体が巨大になりすぎたせいで動きが鈍くなったか？」

『ぬう……』

スサノオモンはルーチェモンに一発一発と攻撃を命中させていく。ルーチェモンはすぐに反撃に移ろうとするがスサノオモンのスピードに翻弄され、迂闊に動きが取れず防戦一方だった。

「今は微妙に互角に見えるがこの調子ではスサノオモンの勝ちに……」

「それはないね。」

「ん？どうことなんだ姉さん？」

「よおしく、見てごらん。スサノオモンの方は確かに早いけど徐々に息が上がってきている。それに比べてルーチェモンの方はやられている様には見えるけど実際はそこまですダメージを受けているわけじゃないんだよ。つまり、実際はスサノオモンの方が押されているんだよ。」

「え？」

箒と千冬はもう一度二体の戦闘を見る。確かにスサノオモンの呼吸音は最初の頃に比べて明らかに荒くなってきた。

「はあ、はあ……」

『……………』

戦闘が一時的に終わり、スサノオモンは息を荒くして動きを止める。

（馬鹿な………なんなんだこの体の重みは。重い……最初の時は気づかなかつ

たがまるで体が鉛のように重くなってきている……何故だ?)

『……もう、気は済みましたか?』

「何!?!」

『ホツホツホツホツ、気は済んだのかと聞いているのです。』

ルーチェモンは、面白がりながら聞く。

「どういうことだ!?!」

『いやあ、ずいぶん自信満々でしたのでしばらくやられた振りをしながら様子を見ていましたが……この程度、少し期待しすぎてしまったようですね。』

「ふ、振りだど!?!わ、私の攻撃が通じていなかったというのか!?!そんな馬鹿な!?!」

スサノオモンは哑然とする。

「ほらね、やっぱり言わんこっちゃやない。」

「束、一体どういう事なんだ?」

結果を納得している束に対して千冬は微妙に納得できない様子で聞く。

「それはね……」

「私が説明します。」

千冬に背負われているマドカが言う。

「マドカ。」

「スサノオモンは本来、合体する二人の同調が重要なんですがその強大な力を引き出すと同時にダメージや疲労の負担を二人で受けることになるんです。カオスデュークモンの場合はお兄ちゃんが弱っている上に意識がはつきりしない状態で無理やり合体しました。ですから、本来二人で負担するはずのダメージや疲労の蓄積を一人で受けなくちゃいけなくなっているんです。」

「つまり、今のスサノオモンは完全に力を発揮できていないってわけ。簡単に言えば自分の力を引き出しているかどうかさえも怪しいというわけなんだよ。」

「そ、そういう事なのか……」
「しかし、えっと……」

箒はマド力を見ながら戸惑う。

「マド力がいいです。」

「じゃあ、マド力。どうしてお前はそんなことを知っているんだ？ 姉さんならわかるが今まで奴らに捕まっていたお前がなぜ……」

「……お父さんとお母さんが言ったことなんです。」

「父さんと母さんが？」

マド力の言葉に千冬は反応する。

「お父さんとお母さんは、お兄ちゃんがあのような事態になった時に備えて通常のデジ

ヴァイスをベースにあのデジヴァイスを製作したんです。そのときに全ての力を結束させて進化するスサノオモンの存在を見つけ、その力を完全に引き出す方法を探していたんです。」

「その途中でルーチエモンたちに襲われたのか。」

「……はい。」

マドカは何とも言えない顔で答える。スサノオモンの方は、息を荒くしながらもゼロアームズ：オロチを展開する。

「手を抜いていただくと？ふざけたことを！」

スサノオモンはゼロアームズ：オロチをルーチエモンに向ける。ルーチエモンは結晶と再び合体し直す。

『神がこんな些細なことで怒るとは……さぞかし器が狭いのでしょね。』

ルーチエモンはわざとらしく言う。

「黙れ！こうなったらこの技で貴様をインペリアルドラモンと同じようにしてくれる。いくぞ！天羽々斬!!」

スサノオモンはゼロアームズ：オロチから再び大出力のレーザーサーベルを繰り出す。

『その程度の剣で私を滅ぼそうなど……笑止!』

ルーチェモンはルーチェモンは腕から真紅の大型剣を作り出し、スサノオモンの攻撃を受け止める。

「なっ?! そんなはずは!」

『さて、今度はこちらから行きますよ!』

ルーチェモンは剣を振るいながらスサノオモンの攻撃を押し返していく。

「こ、攻撃が………なんなんだ………この衝撃は………」

スサノオモンは一撃一撃の重みに押されて行く。

『ほらほら! どうしました? 私はまだまだ本気ではありませんよ!』

「くそ! 腕が引き千切られそうだ………」

スサノオモンはルーチェモンの攻撃を防ぐもが精一杯だった。ルーチェモンはそれを察すると思い一撃を放ち、スサノオモンの手からゼロアームズを吹き飛ばす。

「しまった!」

『はああ!!』

ルーチェモンの一撃がスサノオモンの胸を抉り、吹き飛ばす。

「ぐうわあああああ!!」

スサノオモンは勢いよく地面に叩きつけられ、同時にカオスデュークモンが分離してしまう。

「なっ!?しまった!さっきの攻撃でデジヴァイスが!」

『おやおや、これではもう神でもありませんね?』

「くっ!」

戦況不利と判断したカオスデュークモンはゲートを開き、一時撤退しようとする。しかし、ゲートを開いた直後、ゲートから複数のイーターがカオスデュークモンに取り付いた。

「うわああああ!?!何だこのイーターたちは!?!どうして私が開いたゲートの中から!?!」

イーターに捕食されようとしているカオスデュークモンを見ながらルーチェモンは、やつと来たかと言うような顔をする。

『やつと来ましたか。』

「ど、どういう事だ!」

カオスデュークモンは捕食されながらもイーターを引き離そうとする。

『お忘れですか?イーターは元々私の一部から誕生した物。つまり私が復活した以上戻ってくるのは当然ではありませんか?』

ルーチェモンの言葉に千冬と箒は恐ろしく感じた。

「つ、つまり、デジタルワールドを破壊していたイーターのすべてがここに集まるという事か?」

「・・・・・・・・まああ・・・・・・・・そういう事になるね。」

千冬の言葉に東は正直に答える。

ルーチェモンは自分の前に次々とゲートを開き、集まってきたイーターを自分の所へと来させる。イーターは次々とルーチェモンの体に取り込まれていく。

『いやあ・・・・・・・・あなたとの暇つぶしはいい準備運動になりましたよ。消すには名残惜しいですがせめて私の一部となって新世界を築くための礎となつてください。』

「ふざけるなああ!!!誰が貴様の一部なんかにいいいい!!!」

カオスデュークモンはイーターに次々と取り付かれながらも叫ぶ。

「くそあー私が・・・・・・・・この私がああ!!!こんなところで消えるなんて・・・・・・・・消えるなんてえええ!!!ちくしょうおとおお!!!」

「カオスデュークモンがどんどん食われている・・・・・・・・」

「嫌だあああ!!!こんなところで死ぬなんてえええ!!嫌だあああああ!!!」

カオスデュークモンは完全に跡形もなく捕食され、イーターは全てルーチェモンに取り込まれていった。

『はああああ・・・・・・・・・・ようやく一つになりましたか。』

ルーチェモンはそう言うのと自分の真上に巨大なゲートを開く。

『では、そろそろこのゲートを通じて人間界を滅ぼしに行こうとしますか。ここに

方々はもうすでに抵抗する力も残っていないでしょうし、後でゆっくりとお相手をして差し上げます。生まれ故郷を滅ぼした後にね。』

ルーチェモンはゆっくりとゲートの中へと入り、ゲートを閉じて行った。その場には、箒、千冬、東、マドカ、アーマゲモンたちを撃破した鈴たち、そして、動かなくなつたスサノオモンだけが残された。

IS学園 デジラボ

「……………」

ルーチエモンがゲートにはいった頃、デジラボで待機していたロイヤルナイツ一同は一斉に顔を上げる。

「どうしたのデユナスモン？」

「エリザは心配そうにデユナスモンを見る。」

「……………織斑一夏が敗れた。」

「えっ？」

「じゃあ、シャルたちもみんな……………」

デユナスモンの一声にノエルは不安な表情になった。その不安を少しでも和らげようとマークが彼女の手を握りながら言う。

「大丈夫だノエル。シャルはまだ無事だ。どうやら奴らは、あの子たちには手を付けて

いない様だ。」

「……だが、人間界に向かってとてつもない巨大で何か身震いのするような恐ろしい気配が迫っている。」

デュークモンたちは、デジラボから出る準備を始める。

「私も一緒に行かせてくれ。」

マークは車椅子から立ち上がる。ノエルは驚いた顔で止める。

「マーク！無茶よ！そんな状態で！」

「娘やその仲間たちが必死に戦っている中、黙って見ているわけにもいかない！」

「でも、もしものことがあつたら……」

「だが……」

「奥さんの言う通りにした方が賢明だと思うわ。今のあなたが出向いたとしてもおそらく負けるのが目に見えているし、悲しませるだけよ。」

「うっ……」

無理にでも行こうとする彼をミレイが敢えて忠告する。アルファモンとデユナスモンはノエルとエリザの方を見る。

「ノエルは、マークと一緒にここにいてくれ。私たちは外でこの世界を守る。」

「エリザ、私は必ず帰ってくる。だから君もここで二人を守ってくれ。」

「デユナスモン……」

エリザはデユナスモンを抱きしめながら泣く。

「今度は絶対にいなくならない。だから、今回は行かせてくれ。」

「……絶対よ。」

エリザはデユナスモンにキスをすると離れる。

「……では、我等も急いで得体の知れぬ者を迎え撃つ準備をせねばな。」

クレニアムモンはデジラボから出ようとするときシャイングレイモンが入り口に来た。

「よかった！まだ行っていなかったか。」

「どうした？そんなに慌ただしくして。」

スレイプモンは不思議そうに聞く。

「なんかやばそうな奴が来るんだろ？だったら、俺たちも一緒に戦うぜ！」

「俺たち？」

「みんな、入ってくれ。」

シャイングレイモンが言うとき彼の後ろから同じ究極体にあたるタイガーヴェスパモン、ポルトモン、クズハモンなどが入ってきた。

「シャイングレイモン、彼らは？」

「このデジラボにいたデジモンたちだ。俺が訳を話して一緒に戦ってくれるように頼ん

だ。」

「貴様、正気か？いくら究極体とは言え、志が元々バラバラの者が共に戦うと思っ
ているのか？」

クレニアムモンは真面目に言う。

「で、でもよ！少しでも戦える奴がいたほうがいいだろう？どの道、奴がこつちに向かっ
ている以上どこに隠れていても無駄になるんだし！」

「だが、所詮は烏合の衆。後でバラバラになるのがオチだわ。」

「それは、聞捨てなりませんな。」

「ぬっ？！」

クレニアムモンは口を開いたタイガーヴェスパモンを見る。

「この私、タイガーヴェスパモンは元はと言えば昆虫型デジモンの森をイーターによつ
て追われた身。仕えるべき主を失い、故郷を失った我々が悲しんでいる中、あなた方口
イヤルナイツは何をしたというのですか？内輪もめをして、崩壊の一途を辿ろうとし
いたではありませんか。」

「あ、あれは……」

「それに故郷を失ったのは私だけではありませんね。このデジラボにいる多くのデジモン
たちがイーターの魔の手から命からがら逃れてきたのです！故に我々は故郷をあのを

うな姿にした元凶と戦おうとしているのです！それでも志がバラバラだと言いたいのですか！」

「小童が！言えば言いたいほどいいおって！我らが無能だと言いたいのか！」

流石のクレニアムモンもタイガーヴェスパモンの言葉に怒りを感じた。それをガンクウモンが制する。

「やめるのだ！今ここでもめている場合ではない！」

「ガ、ガンクウモン……」

「今迫りつつある気配は恐らく我等ロイヤルナイトだけではおそらく敵わんだろう。ならば、共に戦う意思を持つ者を迎え入れるのは必然ではないか？」

「だが……」

「このデュークモンも同意見だ。今戦える者なら少しでも多い方がいい。シャイングレイモン、学園のグラウンドにできるだけ戦えるデジモンを集めてくれ。但し、今回の戦いは死ぬかもしれない。覚悟のある者だけにと伝えておけ。」

「わ、分かった！」

「ミレイ、君はできるだけ千冬たちと連絡が取れるかどうかコンタクトを取り続けてくれ。」

「分かったわ、今回だけはどこまでやれるかわからないけど最善は尽くすわ。」

「よし、では我々ロイヤルナイツが先行して迎え撃つ。全員急ぐぞ！」

デュークモンたちは急いでデジラボから出て行く。ブイブイも出て行こうとしたとき、同時にデジラボの入り口からリナがあくびをしながら入ってきた。

「ほえ？みんなどーしたの？そんなに慌てて？」

「リナってば！こんな大事な時に何やっているのさ！」

「何って、アリーナでアイエスーってやつの練習。こゝんな、めんどくさがりーのあたしがやるって言うのも珍しいもんでしょ？」

「はあ……もうすぐとんでもないものが来るといふのに……」

ブイブイは一人頭を抱える。

一夏を救出せよ

ダークエリア

「……………」

スサノオモンは動く様子もなく、その場で沈黙していた。そんなスサノオモンに箒は、手を触れる。

「……………一夏。もう終わりなんだな。全て。」

箒の言葉にスサノオモンは答えることはなかった。そんなパートナーの姿を見てビクトリーグレイモンは何も言えずに悔しがっていた。

「リリモンに続いて一夏まで……………私たちは……………いつたいなんのために戦って来たのかしらね？」

「兄貴……………くそ……………どうどう俺だけになっちゃった。」

「……………みんな、よく聞いてくれ。」

全員が悲しんでいる中、千冬はできるだけ落ち着いて話す。

「確かに一夏は死んだ……………だが！だからこそ、一夏のためにも最後まで戦うべきじゃないか？違うか？」

「で、でも奴は、今までの敵以上に強いです……。私たちでどこまでできるのか……」
千冬の言葉に対して簪は不安そうに言う。そのとき、千冬のデジヴァイスから何かの発信音が鳴る。千冬はデジヴァイスを操作する。

『……………ど、……………どうやらやつと繋がった様ね……………』

「ミレイか。そちらはどうなっている？」

『現在、そちらから向かった何かを迎え撃つためにロイヤルナイツが表に出たわ。そちらの状況を詳しく教えてもらえないかしら？』

「わ、分かった。」

???

(こっちは……どこだ？俺は……確か……)

一夏はゆっくりと目を開けながら周りを見回す。辺りは真つ暗で何も見えない。

(なんなんだ……この水の中に沈んでいくような感覚は……でも、動こうにも体が動かない……そうか……俺は死んだんだ……あの攻撃で……だから、ハイパースピリットエヴォリションも解除されているのか……)

一夏はあちこちに傷だらけになった自分の体を見る。これではおそらく動くのは無理だろう。

(俺は結局何もできなかつた……デジタルワールドも……人間界も……なにも救うことはできなかつた。リリモンやオメガモン、他のデジモンたちの犠牲も無駄にしまった。所詮、俺は何もできない「出来損ない」か……)

再び意識が薄れ始め、一夏は目を閉じようとする。

(・・・・・・・・・・一夏・・・・・・・・)

(?)

(一夏・・・・・・・・)

奇妙な声に一夏は目を開く。

(・・・・・・・・誰なんだ?)

一夏が思つて声がした方を見ると目の前に光が現れ、やがて二人の人間の姿となる。その二人に一夏は何か見覚えがあつた。

(・・・・・・・・会つたこともないはずなのにどこか懐かしい気がする・・・・・・・・)

一夏が見る限りは目の前に現れた二人は夫婦の様で女性の方は千冬に雰囲気似ていて、男性の方は何となく自分に少し似ていた。

(一夏・・・・・・・・こんなところでいつまで眠っているの?起きなさい。)

女性の方が一夏に優しく声をかける。

(・・・・・・・・もしかして・・・・・・・・母さん?)

ダークエリア

『……そう、あの反応の正体はルーチエモンだったのね。それもサタンモードを大きく上回る究極……いえ、超究極体にね。私でもデジモンが神を取り込んで進化するというのは初めて見たわ。』

通信でミレイは何とも言えない顔で答える。

「話は以上だ。」

『だとしたら、ことは急いだ方がいいわ。イーターがゲート内にいないというのなら急いでマステイモンの能力でそちらにゲートを展開するわ。おそらくルーチエモンよりも早くこつちに戻れるはずよ。』

「了解した。」

千冬はそう言うのと連絡を終える。

「みんな、聞いての通りだ。我々はゲートが開き次第急いで学園に戻り、ルーチエモンの攻撃に備える！全員、準備を始めろ！」

「でも、一夏はどうするのよ？ここに置いていくつもり？」

千冬の指示に鈴は難色を示しながらも聞く。

「……一夏はお前たちが行った後にベルスターモンに来てもらって束たちと一緒に回収してもらおう。念のため、私も残る。」

「きよ、教官も!？」

「ルーチエモンとイーターがいなくなつたとはいえこのダークエリアが安全と言う保証はないからな。私も束たちを送り次第、合流する。到着後はは最年長の更識が中心にデュークモンの指揮下に入ってくれ。」

「・・・・・・・・し、篠ノ之さんはどうしますの？」

セシリアはスサノオモンに寄り添っている箒を見ながら言う。

「・・・・・・・・そうだな、篠ノ之の方は先に戻って少し休ませた方がいいかもしれんな。何しろ一番辛かったのはアイツだからな。すまないが一緒に連れて行ってくれ。」

「・・・・・・・・はい。」

鈴たちは箒の所へと向かう。

「・・・・・・・・箒、一旦戻るわよ。」

「・・・・・・・・」

「気持ちもわからないわけじゃないけど・・・・・・・・」

「一夏はもう帰ってこないよ・・・・・・・・いくら待っても。」

「・・・・・・・・嫌だ・・・・・・・・私はここにいて・・・・・・・・」

箒はメンバーの説得に応じようとしなかった。

「一夏はここにいるんだ。だったら、せめて世界が終わるときまで一緒にいたい。ほつといてくれ。」

「何弱気なこと言ってるの？」

箒の言葉に箒は思わず言う。

「それじゃ、一夏はなんのために戦って来たの？ 私たちの世界を救うためだよ？ なんて

諦めるの?」

「そうよ!一夏だってそんなこと……」

「ならどうしたらいいんだ!」

箒は鈴たちの方を向いて言う。顔は既に涙で濡れていて、手は握りすぎていたせいで既に血が滴り落ちていく。

「私にはもう戦うことができないんだ!紅椿はカオスデュークモンの戦闘で壊れてしまった!これ以上どう戦って行けというんだ!」

「……箒……」

「私は……私は……うう……誰も助けられなかった……リモンも……一夏も……」

「そんなことはありませんわ!篠ノ之さんだつて必死に……」

「もう私には何もできないんだ……何も……」

箒は跪きながら再び泣き出す。その光景を見て鈴たちは何も言えなくなる。

学園に戻れば、訓練機ではあるが打鉄とラファールがある。しかし、あのルーチェモンに対して訓練機で戦うことはあまりにも無謀に見える。

悲しんでいる箒に対してマドカは我慢できなくなったのか千冬から離れて彼女の所へと向かう。

「・・・・・・・・お兄ちゃんを救う方法が一つだけあります。」

「えっ?」

「ちよっ?!マドカちゃん!!」

マドカの唐突な発言に東は慌ててマドカの口を塞ぐ。

「突然変なことを言っちゃダメだよ〜!もう!」

「マドカ・・・・・・・・お前今なんて・・・・・・・・」

「何でもない!何でもないよ〜!!だから、箒ちゃんはみんなと一緒に急ごうね〜!!」

「姉さん、誤魔化さないでくれ!本当にあるのか一夏を助ける方法が!」

「う〜ん〜ん東さんには何を言ったのかさっぱり〜」

「東、もういい。話してやれ。」

何とか誤魔化そうとする東に千冬は言う。

しばらく黙ってしまった東であったが諦めたのか急に真面目な顔になる。

「・・・・・・・・確かに一つだけ方法はあるんだよ。いつくんを助ける方法が・・・・・・・・」

でも、これは箒ちゃんにも教えるわけにはいかなかったんだよ・・・・・・・・」

「教えるわけにはいかない?どういう事なんだ!」

「それはね・・・・・・・・」

東は言わずにそんな顔をしながらも答える。

「いっくんと一体化して深層心理の世界からいっくんの意識を連れ戻すことだよ。」
「「「「「えっ?」」」」」」

???

(母さん………なのか?)

一夏は目の前にいる女性を見て思わず言う。女性は頷く。

(………でも、と言うことは隣にいる人が父さんなのか?)

(ええ、そうよ。ずいぶん大きくなつたわね、一夏。)

母は嬉しそうに言った。父の方も少し嬉しそうだった。

(………と言うことは俺は死んだつてわけか。だから母さんたちが迎えに………)
 (確かに私たちは既にこの世の者ではないがそれは違うぞ一夏。お前はまだ死んではいない。)

(?)

父の言葉に一夏はよくわからなかった。

(今の私たちはお前に真実を伝えるためにスピリットの力でここに来ているに過ぎない。だからここはあの世ではなく、お前の深層心理の世界なんだ。)

(俺の深層心理の世界………)

(一夏、これから言う事はまだお前が物心がつく前の話だ。信じられないと思うがお前は一度死んだと思っっているな?)

(………ああ、確かに俺は千冬姉の応援に行ったときに誘拐されて………その

ときに殺されたんだ。その後デジモンとしてデジタルワールドに………)

(それは違うわ。)

(何がだよ？ 実際に俺はデジタマから………)

(実はお前はあの時死んだわけではないんだ。)

(何？)

ダークエリア

「い、一夏と一体化………」

箒は束の言葉に思わず顔を赤くする。

「あっ、そういう意味じゃないと思うから勝手な妄想はよして。」

「一体化って……もしかして、さっき聞いたカオスデュークモンのように合体するってことだよね?」

「その通りだ。今の一夏は仮死状態に近い状態だが、カオスデュークモンとの合体で体のダメージがある程度回復している。だが、問題は一夏の意識がほぼ無いに等しいという事だ。」

「そこでカオスデュークモンがかけたもう一方の方をデジヴァイスを利用してスサノオモンと一体化し、いっくんの精神世界に入っていっくんの意識を戻す………」と言わうわけ。わかるかな?」

束と千冬の説明に一同は納得する。

「そ………そうだよね………もう一方の方は既にカオスデュークモンと一緒に………」

「待て！そう言えば千冬さんの話ではマドカが使っているデジヴァイスがあるじゃないか！マドカがあれば………」

「………残念だがそれも無理だ。マドカのは飽くまでもプロトタイプで合体するには危険過ぎるんだ。それにさつき無理やり戦わされた影響でマドカは使うことができない。」

「それでもいい！マドカ、私にデジヴァイスを貸してくれ。頼む。」

箒は、マドカからデジヴァイスを取ろうとする。

「ちよつ、ちよつ、ちよつと！別に箒ちゃんが行かなくてもいいんだよ！ベルちゃんが出来ばすぐにでも新しいデジヴァイスを組み立てて束さんとちーちゃんできつくんを助けに行くから！」

「嫌だ！いくら姉さんがダメだと言っても今回はやはり意地でもやる！」

箒と束は、マドカのデジヴァイスの取り合いになる。

「渡してくれ！」

「ダメ！」

「よせ！」

「いやですよ〜！欲しければ束さんを捕まえてごらんささい〜。」

「うわあああ!!!」

二人が騒いでいる中、一同の前にゲートが開き、わざわざ心配したのかミレイとベルスターモンが来た。

「うまく繋がったみたい……何をしているの？あなたたち？」

「……束つたら、大事なことを言わないからこんなことになるのよ。」

ベルスターモンは溜息を吐きながら束たちの方へと向かい、ミレイは鈴たちの方を見る。

「ゲートが開いたからみんな急いで入ってちょうだい。向こうではクロエがすぐに機体の応急処置を行えるように準備をしているから。」

「わ、分かりました。」

「と、取りあえず急ぎましょう。」

「では、教官。お先に行かせてもらいます。」

鈴たちは急いでゲートの中へと入って行った。ミレイはそれを確認すると箒たちの方を見る。

「……東、残っているのはもう私たちだけよ。いつその事彼女に本当のことを話してあげたら？」

「!?ほ、本当のこと?」

「束はアンタのために言ってるのにアンタがそれに耳を貸さないというわけや。」

「どういう事なんだ?」

ベルスターモンが言ったことに筈は不審になった。

「アンタ……束の言った方法でやったらどうなると思っていたの?」

「そ、それは……」

「ベルちゃん!そのことは……」

「束の言った方法で合体したらアンタは普通の人間ではなくなるのさ。」

「えっ?」

「人間とデジタルモンスターの中間生命体……織斑一夏と同じ存在になるというわけさ。」

真実と告白

ダークエリア

「人間とデジタルモンスターの中間……ちよつと待ってくれ!?一夏はデジモンではないのか!」

ベルスターモンが言ったことに箒は思わず驚く。

「だって、一夏の話では確か一夏は一度誘拐されたとき、死んだと言っていた。だから、姿がデジモンになり、今の人間の姿もイグドラシルからもらった擬態プログラムでなっているって……」

「表面上ではそう言われていたんだろうね。でも、実際は違うんだよ。」

「えっ?」

「いくら擬態したと言えど普通、擬態というものは、単なるカモフラージュにしかならぬ上に定期的に自分の意思に関係なく発作で元の姿に戻っちゃうんだよ。でも、箒ちゃんたちと一緒にいたときいつくんに違和感があった?」

「え……つと……」

箒は首をかしげながら考える。

自分が見た限りでは一夏は自分の意思でヴリトラモンの姿に戻っていた。しかし、今姉が言った話が正しければ一夏は一日の内の何回かは発作的に元に戻ることになる。いくら一夏とは言えトイレのときだけ擬態を解くとは思えない。もしそうだとしたら、一日に何回もトイレに行くことになってしまう。

「……確かに私が知っている限りでは一夏にそんな発作らしきものは起こっていない。でも、それがどういう関係があるんだ?」

「それはね、イグドラシルから受け取ったのは飽くまでも『擬態する機能』ではなく『姿を切り替える機能』だという事だよ。」

「切り替える……って、それじゃあ一夏はどうやってあの姿を保っているというんだ?スピリットしかないなら尚更……」

「もし、いっくんとスピリットが誘拐以前から一体化していたとしたら?」

「一夏が殺される以前に!?まさかそんな!?!」

???

(俺が死んでいないとはどういう事なんだ？父さん。)

一夏は父を見ながら聞く。父はしばらく黙るが真剣な顔で答えだす。

(これは千冬にも話したことがないがお前が生まれて間もない頃の話だ。お前は身体が弱く、生まれたときは医者から持って後数日の命だと言われていたんだ。正直、そのときは私も母さんも悲しんでいたよ。)

(・・・その話と俺が死んでないという話がどうい関係があるんだ？)

(私も信じられなかったが生まれて次の日の夜、母さんが保育器に寝かされていたお前

のことが心配で眠れず、見に行つた時の話だ。)

(私もそのときは単なる幻覚だったかもしれないと思つていたけどあなたが寝かされていた保育器の上が急に光り出して、妙な物体があなただの体の中へと入りこんでいったの。)

(物体………もしかして………)

(そう、眩しくてよくわからなかつたけどそれはまさしく今のあなたと同じ姿をしていたわ。)

(それから数日、まさに奇跡ともいふべき出来事だった。医者でさえ見放していたお前の体調は回復、生まれたばかりの時のことが嘘のように無事退院することができた。)

(……まさか、スピリットが俺の命を救つたとも言うのか?)

(私はお前たちが退院後、母さんの話からデジタルワールドに関係して居るのではないかと思ひ調べ始めた。そして、お前が古代十闘士が選んだ受け継ぐ者だと分かつた。だが、私たちはどうしてもお前ひとりに過酷な運命を背負わせたくなかつた。)

(そして、チビを生み出し、デジヴァイスを製作した………)

(でも、それには時間があまりにも足りなかつた。私たちはあなたとスピリットを分離させる方法を研究中に七大魔王に襲われて、マドカにも辛い思いをさせてしまったわ。)
(……だが、俺が誘拐されたとき、俺は確かに胸を撃ち向かれた。それにデジタマ

（わかってるさ！わかってはいるんだ！でも……でも！あんな化け物にどう戦えって言うんだ!!）

（一夏……）

（ハイパースピリットエヴオリュションをしても……オメガモンの力を使ってもまるで歯が立たなかつた……奴はイグドラシルと融合したことによつてそれ以上の次元ですら超越してしまったんだ。そんな輩にどう勝てというんだ……）

一夏は弱音を吐く。

ダークエリア

「………と言うわけだから、いくらなんでも正確には死んだんじゃない、融合しているスピリットの力でデジモンの体に切り替わったに過ぎないという事なんだよ。」

束は長い説明を終える。

「どう？これで意味は分かった？束の言う通り、合体するにはデジヴァイスを触媒にして人間としての体を全てデータ体に作り替えなくちゃならない。しかも、一度作り替えたら完全に元に戻すことは不可能。合体が成功して解除したとしても、さつき言った中間生命体。それでもやりたい？」

ベルスターモンの言われて箒は黙ってしまった。

無理もない。

人間ではなくなってしまうというのだ。それに運が悪ければ自分も戻ってこれなくなってしまう。東が自分にやらせたくないというのがようやく理解できた。

「……私は、一回デジラボの方に戻るわ。向こうでクロエ一人だけに任せるのも大変だし。東たちは後で来てちょうだい。ゲートはそのままにしておくから。」

「分かったよ、ミーちゃん。ここはもう大丈夫だから。」

東の返事を聞くなり、ミレイはさつきとゲートへと入って行った。

「……俺たちも先に行くよ。みんなが戦っている中、俺たちだけが戦わないなんて言う事は出来ない。行こう、ブイモン。」

ビクトリーグレイモンもゲートへと向かって行く。

「えっ!? ちよっ……ジエスモン、千冬姉ちゃんたちをよろしく。」

「ああ、ここは俺に任せろ。」

「兄貴……俺は信じてるぜ。兄貴が絶対帰って来てくれることをさ。」

マグナアルフォースブイドラモンも急いでゲートへと向かって行った。箒が黙っている中、千冬は東からデジヴァイスを受け取る。

「ちーちゃん。」

「マドカもこの状態だ。助けなら私が行く。」

「でも……」

「これは私たち織斑家の人間でけじめをつけなくちゃいけない問題だと思うんだ。だから、お前がこれ以上関わる必要もない。」

「ちーちゃん……」

「お前には散々振り回されたと思っていたがよくよく考えてみると助けてもらっていたな。ありがとう、東。」

千冬はスサノオモンへと近づいていく。

「お姉ちゃん！」

「マドカ……三人で暮らせるかわからなくなりそうだ。もし、私が戻ってこなかったとしても一夏を攻めないでくれ。」

千冬はスサノオモンの目の前に立ち、デジヴァイスを翳す。

「今助けに行くからな、一夏。ハイパースピリットエ……ブツ！」

千冬が合体をしようとした瞬間、箒が突然動き出し、千冬を不意打ちをする。突然の出来事に千冬は転び、デジヴァイスは彼女の手から離れ、箒の手に渡った。

「な、何のつもりだ篠ノ之！」

「箒ちゃん!？」

「……わ、私が行く。」

「何言ってるのアンタ!? 成功しても失敗してもアンタは……」

「それでもだ!!」

箒は大声で言い張った。そんな箒の姿に千冬たちは唾然とする。

「私だつて……私だつて正直怖い。人間じゃなくなることも……でも、一夏は、そのことに苦しみながら私たちと接してきたと思うんだ。それにリリモンも私と同じ立場だったらきつと同じ選択をする。だから、行くんだ。」

「……それはどういう意味なの？箒ちゃん。」

「……好きだから……一夏を愛しているから支えたい。どんなに辛くても。」

箒はそう言うときサノオモンの方へと向き直る。

「ハイパースピリットエヴォリューション!!」

箒がデジヴァイスを翳すとそこから無数の光が体を帯び始める。同時に反動でデジヴァイスに罅が入る。

（徐々に体が分解されて行くような感じがする……これが作り替えられていくつてことなのか？）

やがて、全身は光に包まれ、反動に耐えられなくなったデジヴァイスが砕けると同時に箒はサノオモンの中へと入って行った。

「箒ちゃん………帰って来てよ………」。

???

一夏は叫んだ後、そのまま動かなくなってしまった。父と母は心配そうに見る。

(・・・・・・・・・・・・・・・・一夏。本当にそれでいいのか?)

(・・・・・・・・父さんたちだつて見ていたんだらう?あの戦いをさ。俺は何のダメージも与えることができず、串刺しにされていたんだぜ・・・・・・・・)

(・・・・・・・・私もお前に対して何もできなかったことを悔やんでいる。)

父は真剣な顔で答える。

(だが、私は謝らない。どんなに目の前にある困難が過剰でもきつと打破する力を秘めていると信じているからだ。かつての私たちが子供の頃のように・・・・・・・・)

(・・・・・・・・俺にそんな力なんてないよ。・・・・・・・・俺は昔からダメな奴だった。何をやっても千冬姉にも追いつけなかったし、周りからは「恥知らず」やら「出来損ない」って呼ばれていたんだ。・・・・・・・・だから、俺にはそんな力なんて・・・・・・・・)

(一夏!)

(ん?)

遠くから何か聞き覚えのある声が聞こえて来た。

(・・・・・・・・どうやら迎えが来たようだな。)

(迎えて……ここは俺の深層心理の世界じゃなかったのか？ 一体どうやって……)

(一夏！)

振り向くとそこには箒がいた。一夏は思わず目を丸くした。

(箒……どうしてここに?)

(ハア……ハア……。お前を迎えに来たんだ。マドカのデジヴァイスを使って。)

(マドカの子のプロトタイプのデジヴァイスを使ってここに来たというのか?)

(あなたたちは?)

箒は後ろにいる一夏の両親を見る。

(……俺の両親だ。)

(両親……亡くなったはずの一夏のお父さんとお母さん!)

(息子がお世話になっています。)

一夏の母はお辞儀をしながら言う。

(えっ……あ、いえ、こちらこそお世話に……じゃなかった! 一夏、急いで戻ろう!)

箒は慌てて目的を実行する。

(……帰るつたて、帰ってどうするんだよ。俺の体はもうボロボロに……)

(お前は、全部のスピリットと一つになってスサノオモンになったんだ。だから体の傷も多少回復している。)

箒は一夏の周りで起こったことを全て話す。しかし、一夏は

(………悪いが帰ってくれ。)

(えっ?)

思いがけない返答に箒は言葉を失う。

(い、今なんて………)

(聞こえなかったのか………帰ってくれと言ったんだ。)

(何を言っているんだ!? 向こうでは千冬さんやみんなが待っているんだぞ!? みんな一夏が絶対に戻ってきてくれるって信じているんだぞ!? それなのに………)

(俺は戻ったところで何になるんだ? どうせ負けて終わりだ。)

(一夏………お前………)

(俺は結局何もできなかった………何も助けられなかった………守ることも!)
一夏は跪きながら言う。

(俺は、所詮何もできないただの「出来損ない」化け物なんだ………人間でも
デジモンでもない! そんな俺が今更なにやっても………)

(馬鹿なことと言わないでくれ!!)

(!?)

自虐しかけている一夏に箒が怒鳴る。一夏が顔を上げていると箒は震えながら泣いていた。

(一夏がそんなことを言っていたら今必死に戦っているみんなはどうなるんだ！今でも諦めずにお前が戻ってきてくれると信じているブイモンたちはどうするんだ!?!千冬さんやマドカまで見す見す見捨てて行くというのか!?!そんなみんなの思いを踏みにじるというのか!?)

(ほ、箒………)

箒の必死の言葉に一夏は啞然とする。

(うう………い、一夏が帰らないなら私も帰らない！一夏が帰るといふまでずっとここにいます！)

(お前何を言ってる……)

(……それに戻れたとしても私も一人になってしまうから……)

(!?!箒、お前………それは一体どういう……)

(……彼女もお前と同じ存在になったんだ。)

(何!?!)

父親の言葉に一夏は驚く。

(ここに来る方法は二つしかない。お前のようにスピリットと同化している者。もう一つは体を完全にデータ体に作り替えて入り込むくらいしかない。まして、スサノオモンになっているのなら後者しかない。)

(そ、それじゃ………箒は………)

(戻ろうがこのまま合体して解除しても完全な人間には戻らない。)

(!?)

父親の言葉に一夏はショックを受ける。

(それじゃあ………俺はまた犠牲者を増やしたようなもの………)

(犠牲なんかじゃない。私の意思でここまで来たんだ。)

(意思?それはどういう………!?)

一夏が言いかけたとき、箒は彼にキスをした。いきなりの出来事で一夏の頭は一瞬真っ白になったがしばらくしてやめると箒は真っ赤な顔をしていた。ちなみに両親は思わず口を開いていた。

(………私は、お前が好きだ。)

(箒………)

(ずっと傍に居たい。………いつまでも離れたくない………一緒にいてくれないと生きていけないって思ったからここまで来たんだ。)

(お前って奴は……俺なんかのために……)

(一夏がいない世界なんて私は生きていけない。どんなにいい世界だとしても。会えないと思うと辛くて胸が張り裂けそうになる。)

箒は一夏を思いつきり抱きしめる。

(ううう……)

あまりの言葉に一夏の日から涙が溢れて来た。

(一夏は化け物なんかじゃない。私もいるんだから。)

(……お、俺でもいいのか?こんな俺でも……)

一夏の言葉に箒は頷く。

(だから、一緒に戻ろう。……そして、守ろう。これから生きる私たちの未来を。)

(箒……ああ。戻ろう。みんなの所へ。)

一夏がそう言った直後、一夏の身体中の罅が広がり始め、崩れ始める。

(お、俺の体が崩れている?)

身体は砕けるように崩れ、中からは人間の姿の一夏が見えた。

(一夏がヴリトラモンの姿から変わった?一体どういう……)

(おめでとうく!!)

(!?、この声は!?)

一夏たちは後ろを振り向くとそこにはさらに思いがけない人物が立っていた。

(リ、リリモン!?)

そこにはダークデュークモンと共に消えたはずのリリモンが立っていた。リリモンは二人の反応を他所に嬉しそうに言う。

(いやあ・・・よかつたわね、箒。)

(お、お前がどうしてここに!?)

(さあ? 気がついたらここにいて、ついさつきアンタの告白を見ていたの。)

(・・・と言うことは俺が嘆いていたところもか?)

(まあね。もう、イチカつたら。何諦めかけてんのよ? こんなことでへこたれるあなたじゃないでしょ?)

(・・・なんか色々と恥ずかしくなってきた・・・)

(私もだ・・・)

一夏と箒は双方ともに顔を赤くした。それを見て満足したのかリリモンの体が透け始める。

(さてと、私もそろそろ行くとしますか。)

(なっ!?! い、行ってしまうのか!?! せつかくまた会えたのに・・・)

(リリモン・・・お前・・・)

(イチカ、箒のこと絶対に守りなさいよ。私と同じぐらい、いや、それ以上に心が傷つきやすいんだから。箒もイチカことを絶対に離すんじゃないわよ！そんなことしたら許さないんだから！)

(（リリモン！）)

(じゃあね！きつとあなたたちにはまた会えるわ！そのときまでにちゃんとくつつきなさいよ！)

リリモンは笑いながら消えて行つた。

(・・・では私たちも去るとするか。)

(そうですね。)

一夏の両親も消え始める。

(父さん！母さん！)

(一夏、千冬とマドカによく頼む。)

(きつとあなたたちなら掴み取れるわ。自分たちの未来を・・・可能性を。)

両親も共に消え、一夏と箒だけが残された。箒は自分のデジヴァイスを取り出すといつの間にか一夏と同じものに変化していたことに気がついた。

(・・・一夏。)

(・・・ああ、行こう。みんなの所へ、俺たちの未来へ！)

二人はデジヴァイスを翳す。

(ハイパースピリットエヴォリユーション!!!)

ダークエリア

「お兄ちゃん………箒さん………」

「いっくんくくく箒ちゃんくくくお願いだから二人とも帰って来てよくく！そうでない
と私はちーちゃんやお父さん、お母さんに会わせる顔がないよくく！」

「……既に私はここにいるがな。でも、信じよう。二人が必ず戻ってくることを……。」
東、千冬、マドカの三人はただ一夏と箒が無事に戻ってくることを祈っていた。その
後ろでベルスターモンとジエスモンは見守っている。

「束も心配性だね。あの坊やがそう簡単にくたばる筈がないというのに……。」

「でも、それはアンタだって同じじゃないか？」

「アタシが？」

「アンタだってパートナーデジモンだ。パートナーを心配しないわけがないだろう？そ
れと同じさ。人間にも深い絆というものがある。」

「……ふっ。確かにそうかもしれないわね。」

ベルスターモンは納得したように言う。その直後、スサノオモンが突然光り出した。

「ス、スサノオモンが!？」

マドカが驚きながら言う。スサノオモンの抉られた胸の傷は高速で再生しはじめ、目

に光が戻っていく。

「……………」

「い、いつくん？それとも箒ちゃん？」

「一夏！お前は一夏なのか？」

千冬たちは心配そうにスサノオモンを見る。スサノオモンは立ち上がるとゆつくり顔を向ける。

「……………千冬姉。」

「一夏！」

スサノオモンの声が一夏の声で千冬はとりあえず安心する。一方で束はまだ心配そうだった。

「いつくん！箒ちゃんは！箒ちゃんはどうかしちゃったの！？」

「大丈夫、今俺と一緒にいる。」

「じゃ、じゃあ無事なんだね！？」

「ああ。」

「ふう〜よかつた〜。」

束は尻餅をつきながら一呼吸置く。スサノオモンはそんな束を見た後自分でゲートを開く。

「……俺たちも行かなくちゃな。みんなの所へ。」

スサノオモンは、ゲートの中へと入って行く。

「ま、待て、一夏！私たちも……」

「千冬姉たちは、後に来てくれ。俺たちは先に行ってくる。」

そう言い残すとスサノオモンは高速でゲートの中へと入り、ゲートは閉じてしまった。

「一夏……」

「よおおうし！いっくんたちを信じて私たちも早く行くよ、ちーちゃん！」

束も千冬の手を引っ張って急いでゲートへと向かって行く。

「ちよつと待て束!?!お前はまだ……」

「ノープロブレム〜！このくらいならまだまだいけるよ〜！さあ、マドカちゃんも！」

「は、はい!?!」

束たちも急いでゲートに入って行った。

ゲート内

「スサノオモンは、ルーチエモンを追うべくスピードを上げて移動していた。……箒、怖くないか？」

「一夏は箒に向かって言う。」

『私は大丈夫だ。一夏のすぐ傍に居るんだからな。』

「そうか。」

会話を終えると一夏は再び前を見る。
「行くぞ、これが俺たちの最後の戦いだ。」

絶体絶命！破壊神ルーチエモン！！

IS学園 デジラボ

「着いたー！」

箒が一夏を迎えに行っていた頃、鈴たちはゲートを通りようやくデジラボに戻ってきた。デジラボではクロエが待ち構えており、すぐさま各専用機の応急修理を始めた。

「……皆さん随分無理したようですね。」

クロエはパネルを操作しながらつぶやく。隣ではパイルドラモンができる限り使用可能なオプションパーツの交換作業を行う。

「ここは私とクロエでやっておきますので皆さんは少し休んでいてください。終わり次第お知らせするので。」

「えっ？でも全員で整備した方が……」

「……人がゴチャゴチャいると逆に迷惑なので大丈夫です。」

「そ、そうですね……」

言われるなり鈴たちはさっさと部屋を後にして行った。

「……それにしても今日のデジラボ……行く前とは違って静か過ぎませんか

「？」

「……確かに行く前と比べると……ほとんどのデジモンがみんな表に出ているからかな？」

シャルルの言う通りだった。デジラボにいるのは、成長期と幼年期が大半で僅かに残っている成熟期のデジモンたちが騒がないように世話をしていた。その中には学園の生徒の姿もあった。

「みんな必死なのよ。世界が終わるかもしれないって思っていないながらも最後まで抵抗する覚悟で戦おうとする……。私たちも見習わなくちゃいけないわね。」

鈴は少し不安そうな顔で言う。そこへデュークモンが戻ってきた。

「……戻ってきたようだ。ベルゼブモン、久しぶりだな。最後に会ったのはデジタルワールドに帰る時以来か？」

「ケツ、まあそのぐらいにはなるな。」

ベルゼブモンは吐き捨てるように言うが何か照れ臭そうだった。

「ええ……。でも、織斑君が……。」

楯無は複雑な心境で報告する。デュークモンはそれを黙って聞く。

「……。そうか。織斑一夏は敗れたのか。」

「はい。残念ながら……。でも、向こうで織斑先生たちが付いているのできつと彼

が戻ってきてくれるとここにいるみんなが信じています!」

「……では、我々も最後まで抵抗しなければな。お前たちは専用機が修復し次第、合流してくれ。間もなく奴もこちらに現れる。その間は何をしていても構わない。」

デュークモンはそう言い残すと再び外へと行く。ベルゼブモンもその後を追う。

「俺たちも先に行くわ。シャインの奴と打ち合わせする必要があるしな。」

「お先に。」

ジャステイモンたちも先に外へと向かって行つた。

「……僕とレナモンは母さんと父さんに会ってくるよ。何かヒントになることが聞けるかもしれないし。」

「シャル……アンタ……」

「勘違いしないでよ!? 僕だつて諦めているわけじゃないんだから!! ……でも、これから先もしものこともあるから。」

「……まあ、それもそうね。それじゃあ、私たちは残っている時間で何かしらの作戦でも立てましょう。少なくとも考えないでやるよりはマシだし。」

30分後 デジラボ ミーティングルーム

鈴たちは一通り話し合いをした後にクロエの連絡を聞いてシャルロットと合流し、ミーティングルームに集まった。クロエは全員来るなり、整備が終わった待機状態に専用機を渡す。ちなみにすでにミレイは戻ってきており、リナと何やら話している。

「……では、現在の状況とあなた方の機体の状態について説明します。時間がもうありませんので一度しか言わないのでしっかりと聞いてください。」

「わかってるわよ。」

「では、まずオルコットさんの『ブルー・ティアーズ』についてです。残念ながらティアーズの修理が間に合わないと判断したため、ティアーズの射撃機能をオミットしてスラストとして使えるように強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』に換装しました。武装も『スターライトmkⅢ』から全長2メートルのレーザーライフル『スターダスト・シューター』に変更しました。」

「ありがとうございます。」

「続いて凰さんの『甲龍』は機能増幅パッケージ『崩山』に手を加えたもので威力は格段と向上していますが衝撃がその分大きくなっているので気をつけて撃ってください。」

「はいはい。」

「次にデユノアさんの『ラファール』ですが防御機能を上げるために防御パッケージ

『ガーデン・カーテン』に左右の肩と背部に1基ずつ増設スラスターを取りつけました。これによりスピードの低下は最小限に抑えてあります。」

「こんな短時間で……すごいとしか言いようがないな……」

「ボーデヴィツヒさんの方は砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』で装備を一通り換装し直しました。」

「了解した。」

「最後に更識さん姉妹ですが両機体共に損傷が少なかったのもそれほど時間が掛からずに済みました。」

「は……はは。まあ……パタモンたちも頑張ってくれたから。」

「目標は間もなくこちらに到着します。皆さんも外に出て待機してください。」

そう言うのと鈴たちは出口へと向かい始める。そこへミレイとすれ違う。

「あつ、ミレイさん。戻ってきていたんですね。」

「ええ、あなたたちもどうやら行くみたいね。」

「はい。」

「……………それならちよつとお願いできるかしら?」

「はあ?」

IS学園 外

学園の外では数百……否、数千以上のデジモンたちが待機していた。ある者は自分の武器の手入れをし、またある者は緊張しながら迫りくる敵を待ち構えている。そんなデジモンたちの中でデュークモンとベルゼブモンは何やら話をしていた。

「なるほど、四聖獣たちはまだ無事だったのか。」

「まあ、今の俺でさえまともに相手にはしたくない老いぼれ共だ。そう簡単にはくたばらねえよ。」

「……………それで二人は？」

「……………」

デュークモンの質問にベルゼブモンは首を横に振る。

「……………そうか。やはりイーターに……………」

「悔やんでいても仕方ねえ。要はルーチェモンの野郎を叩き潰すまでだ。」

「だが、奴はお前の話からでも分かるが我らの次元のさらに先の力を身に付けてしまっている。」

「そんな時は体が動かなくなるまでやってやるまでだ!」

「……………お前らしいセリフだな。」

ベルゼブモンの言葉にデュークモンは思わず笑った。

「笑うんじゃねえ! ったく、てめえはこんな変な時にばかり笑いやがつて!」

「すまない。いや、ついな……………」

「お〜い!」

そこへ鈴たちが合流してきた。

「おう、間に合った……………ん!?」

デュークモンは鈴たちの後ろで遅れてくる者に目が付く。それを見るなりブイブイは思わず啞然とする。

「お〜〜〜い〜〜君たち〜〜あたしを置いてかないで〜〜〜!」

それは見たこともないISを身に纏ったリナだった。

「リナ!? なんてリナまで来てるんだ!?!」

ブイブイは思わず叫ぶ。

「いや……………ミレイさんにどうせだから一緒に連れて行ってあげて言われちゃって……………」

「私たちは、素人を出撃させるのはいけないと断ろうとしていましたのですけど……………」

「本人がああの通りやる気満々で止めても無駄だったから……………」

「コラコラコラ……………!!ド素人とは何だあ!?!ド素人とはあ!?!」

「……………そこまで言っつてはいないけど」

楯無とセシリアに言われてリナは不満そうに言う。

「……………誰かリナのこと戻して来てくれない?」

「にヤニイ……………?ブイブイまで!?!チヨ、君たちホントーにヒドくない!?!」

ブイブイにまで言われて流石のリナもショックの様だった。そんなリナに対して鈴は彼女の肩に手を置く。

「しようがないわよ、アンタ、話ではかなり面倒くさがり屋って聞いていたんだから。妥協しないと。」

「ガク……………あたしそんなイメージで見られていたんだ……………」

「……………リナの日頃の態度が悪いからこうなるんだよ。今度はちゃんとトレーニング一緒にやるんだよ。」

「え……………!!」

「えくじやないよ。全く……」

リナの態度にブイブイはため息をつきながら呆れる。

その直後、デュークモンの表情が急に険しくなる。

「……どうやら来たようだ。」

「だな、野郎……ダークエリアでもねえって言うのにとつともない殺気を感じるぜ。」
ベルゼブモンは冷や汗を吹きながら言う。そう言っている間にも上空に巨大なゲートが展開され、ルーチェモンがその全貌を見せつける。

「……いよいよお出ましね。」

「いよいよ世界の存亡をかけた戦いつて何だね……」

鈴たちはテリアモンたちを全員進化させる。

「よおおくし、あたしも張り切つてあのデカブツをやっつけちゃいますか！ブイブイ、よろしく！」

「……わかったよ。僕がリナを援護する。」

リナは腕を振りながらルーチェモンを見上げる。

対するルーチェモンは、デュークモンたちを見るなり楽しそうな表情をした。

『これはこれは……世界の最期を見るためにこんなに来ていただいていたとは……光栄ですね。神としても嬉しいことですよ。』

「我々はそんなことを望んではない!」

『ほう、ではなんだというのですか?デュークモン。』

「我々は貴様のその歪んだ野望を阻止すべくここで待ち構えていた!貴様に世界を滅ぼさせはしない。」

「おうよ!そうやすやすと滅ぼされてたまるかってんだ!」

『やれやれ……抵抗さえしなければ安らかな死を迎えられたものを。』

ルーチェモンは少し残念そうに顔を手で隠す。

「何を言ってるのよ!一夏はあそこまで苦しめたくせに!」

「それに私たちは滅ぼされたくはありませんわ!!」

『まだそんなことを……織斑一夏は死んだんですよ?』

「死んでなんかいない!私は一夏が帰ってくることを信じてる!」

「僕も!」

『……フツ、フフフハツハハハハ!!新世界を築く前の最後の余興としては最高なものです!!』

ルーチェモンは笑いながら言う。

『では、見させていただきますでしょうか!!あなた方の最後の意地とやらを!本日の最終イベント、「世界最終戦争」を!!』

ルーチェモンは周囲に大量の黒い結晶を形成し、飛ばす。飛ばされた結晶は次々と姿を変え、ある者はオメガモン、ある者はエグザモン、ある者はデュークモンなど様々な形状へとなり、デュークモンたちに襲い掛かる。

「全員、行くぞ！周りのデジモンをできるだけ倒せ！できるだけルーチェモンに近づくんだけ！」

デュークモンはすぐにファイナル・エリシオンを発射し、周囲の複製デジモンたちを一掃する。

「行くぜ！ウォーの仇だ！グロリアスバースト!!」

シャイングレイモンも負けずに複製デジモンたちを次々と薙ぎ払って行く。

「私たちは前進するわよ!!狙うは……」

「ルーチェモンの首だ!!絶対に仕留めるぞ！」

「ちよつと……ボーデヴィツヒさん……私が決めたかったセリフを……」
「お姉ちゃんもいい加減言うのが遅いの認めないと……」

鈴たちもそんな会話をしながら前進していく。一方のリナは独特の戦闘スタイルでブイブイと共にルーチェモンを目指していく。

「はああく!!あたしのこの拳が真っ赤に燃える!!悪を打ち倒せと轟叫ぶ!!」

リナは、右手でエグザモンの顔の掴み、他の複製デジモンをぶつけながら進む。

「必殺く!!リナちゃんフィンガー!ア~~~~ンド、爆発!!」

リナが叫ぶと同時にマニピュレーターが発光し、エグザモン含めた複製デジモンたちは大爆発する。

「よっしやく!!決まった!!」

「決まったじゃないでしょ!まだ敵が多いって言うのに何悪ふざけしてるのさ!」

リナの周りに迫ってくる複製デジモンを撃退しながらブイブイが言う。

「それにさっきのセリフ何!?!どっかの某アニメのモロパクリじゃないか!」

「いいじゃないの!カッコいいんだから!」

そう言いながらもリナは迫ってくる複製デジモンを一発一発とパンチで吹き飛ばしていく。

『『ロケットアーム!!』』

ジョグレス進化したゴッドジャステイモンは右腕を巨大化させる。その光景にルーチェモンは少し驚いたようだった。

『ほお.....これはこれは.....』

『『行くぜ、ルーチェモン!!ゴッドインパクトダッシュ!!』』

巨大化した右腕のブースターでゴッドジャステイモンは複製デジモンを撃破しながら前進する。

「我々も続くぞ！」

デュークモンはグラニと合体し、クリムゾンモードへと変わり後を追う。ゴツドジャステイモンはルーチェモンの目の前に来ると右腕を切り離す。右腕はルーチェモンのデコピンで吹き飛ばされ、後方の複製デジモンと交戦中のデジモンたちを吹き飛ばしてしまう。

「『あつ！よりによって後ろに返すかよ！』」

『ホツホツホツ……そんな攻撃では私に傷を付けることもできませんよ。』

「だったらこれでどうだ！デススリンガー！！」

ベルゼブモンは陽電子砲から最大出力で放つ。ルーチェモンは口からパーガトリアルフレイムを放ち、威力を相殺させる。

「まだよ！みんなで一斉射撃よ！」

楯無の指示と同時に鈴たちは一斉にルーチェモンの頭部に向かって射撃を開始する。

『全く、無駄なことをしてくれませぬ……これでは前が見えないではありませんか。』

「インビンシブルソード（無敵剣）！！」

『むっ！』

ルーチェモンは一瞬顔を動かさず。彼の目の前ではデュークモンが剣を振るい、ダメー

ジには至らなかったものの顔に切り傷が付いた。

「くっ!掠っただけだったか!」

デュークモンは悔しそうに言う。一方のルーチェモンは自分の顔に付けられた傷を見るなりしばらく黙る。

「……なんだ?いきなり攻撃をやめたぞ?」

複製デジモンたちを撃退したデジモンたちは沈黙しているルーチェモンに対して不安そうな顔で見える。

『………神たる私の顔に傷を付けるとは………遊び過ぎたというわけですか……フフフ……』

ルーチェモンは少し笑うとデジモンたちの方を見て一瞬で怒りの形相に変わる。

『許さんぞあ!!虫けらの分際で神の顔に傷つけおつてえ!!』

叫びは衝撃波となり、危うく吹き飛ばされそうになる。

『もう余興はお終りだ!この世界を一瞬で死の世界に変えてくれるわ!!』

ルーチェモンの体のいたるところに目玉のようなものが開き、何やらエネルギーを収束し始める。

「まずい!全員、防御態勢に入れ!」

デュークモンが叫ぶように指示するがルーチェモンの全身が光りはじめめる。

『この世界諸共消え去れええ!! デストロイ・バースト!!』

ルーチェモンは構えを取ると同時に収束したエネルギーが一斉に発射される。

『うおお!!』

「うわああああ!!」

「「「「「きやああああ!!」」」」」

「ああああああ!!」

回避行動に移っていた鈴たちだったがルーチェモンの攻撃の前ではあまり意味がなく全員吹き飛ばされて行く。ルーチェモンから放たれたエネルギー波は次々と拡散していき、世界各地へと振り注いでいった。

デジラボ

その頃、千冬と東はようやくデジラボに戻ってきた。モニターの方では先ほど戻ってきたのかマグナアルフォースブイドラモンとビクトリーグレイモンが呆然とした状態で立っている。

「ミーちゃん！戦況は……！！？」

東がミレイに聞こうとしたとき、彼女たちはモニターの映像を見て目を丸くする。映像は学園から少し離れた街の方でルーチェモンの攻撃によつて大半の建物が破壊され、多くのデジモンたちが倒れていた。

「ハ、これは……」

破壊尽くされた街の姿を見て千冬は思わず声を失った。

「……見ての通りよ。あの街だけではないわ。おそらくさっきの攻撃で世界各地の都市も同じ、それ以上の被害が出ているわ。」

「……まさかあそこまで進化するなんて……奴の強さはもう私の想像をはるかに超えているよ……」

「ば、化け物……いや、神というべきなのか……兄貴の仇を……」

マグナアルフォースブイドラモンは手を震わせながら言う。

「ミレイ、一夏は？奴は私たちよりも早くこちらに向かった筈だが……」

「いいえ、まだこちらでは確認してはいないわ。」

「……このままでは……私も出る！ミレイは凰たちの位置を確認してくれ。ほら、ブイモンたちも一緒に来い！」

「えっ!?あ、ああ！待ってくれよ千冬姉ちゃん!？」

千冬たち四人は急いで外へと向かう。

街

「……………痛。みんな……………生きてる？」

瓦礫の中に埋もれていた鈴は起き上がりながら周囲に仲間がいなか確認する。

「……………な、なんとか……………」

「少なくともまだ全員生きてはいるようですわ。」

「でも、ISはもう使えないみたい……………さっきの攻撃でもう使い物にならないわ。」

「どうやら全員無事なようだ。たださっきの攻撃で互いの専用機は既に大破した様です。すでに待機状態に戻っている。ちなみにテリアモンたちも同様に既に退化して元に戻っている。」

「随分吹き飛ばされた様ね。まさか街にまで吹っ飛んでくるなんて。」

鈴は辺りを見回しながら言う。辺りの家はさっきの攻撃で破壊されていて、人のいる気配はない。

「この辺だと……………鈴の友達の家に近いよ？」

テリアモンは不安そうに言う。

「そうだ……………弾たちの方は無事かしら？」

鈴は瓦礫をよじ登りながら移動し始める。

「ちよっと、鈴！」

「ああ、シャルたちはデュークモンたちを探して!私は、ちよつと見に行くところがあるから。行くわよ、テリアモン!」

「うん。」

テリアモンは、鈴の頭の上に乗る。

「それじゃあ、私たちは先にデュークモンたちを探しましょう。おそらく同じように吹き飛ばされたはずよ。」

「デユナスモンとアルファモンも無事でいればいいけど・・・」

シャルは少し心配そうな顔をしながら楯無たちと共に鈴とは別方向へと移動し始めた。

鈴&テリアモン side

「えつと……五反田食堂は……って、これって……」

鈴は、弾の実家である五反田食堂の前まで来ると啞然とした。

五反田食堂は先ほどのルーチェモンの攻撃により全壊し、入り口の手前では蘭が蓮と敵と共に瓦礫をどかしていた。よく見るとかなり焦っている様だった。

「蘭！」

鈴は走りながら蘭に声をかける。蘭がこつちを振り向くと何やら泣きそうな顔になっていた。

「鈴さん!!」

「いったいどうしたのよ?早く避難しないと……」

「お兄いが……お兄いが家の下敷きになっちゃたんです!!」

「えっ!?弾が!」

鈴は瓦礫の山を見る。目の前では蓮と敵が急いで瓦礫をどかさそうとしていた。その下では弾のと思われる手がわずかながら出ていた。

「声を何度もかけているんですけど返事もなくて……早く助けないと……」
蘭は泣きそうになりながらも作業を再開する。鈴は上空を見る。上空ではルーチェモンの体の一部が見え隠れしていた。このままだと攻撃の第二波が来たとき、逃げきれない。

「弾は私が助けます!ですから蓮さんたちは急いで逃げてください!またいつ同じ攻撃が来るかわかりませんから!」

しかし、蓮と敵は首を縦に振らない。

「鈴さん、ここは大丈夫よ。弾を助けてから私たちも避難するから先に蘭を連れて逃げてちょうだい。」

「ですが!」

「蘭も弾も僕の大事な孫だ。ここにいちやあ、どつちも危ねええ。だから、先に蘭一人だ

け少しでも安全な場所に連れつてくれねえか？こっちの馬鹿は儂と蓮で連れてく。」

「やだあ!!私も一緒にお兄いを助ける!!」

「蘭!」

「みんなとバラバラになるなんて嫌だ!!」

蘭は泣き出しながらも瓦礫をどかす。

「……つたく!あの馬鹿!本当に碌なことしないんだから!テリアモン、私たちも手伝うわよ!一刻もこの馬鹿を掘り出さないと!」

「うん!」

鈴とテリアモンも加わって瓦礫をどかさうとしたその時だ。

『おや?まだ息があったようですね?』

恐ろしい声が自分の真上から聞こえて来た。

「ルーチェモン!」

鈴は急いで甲龍を展開しようとする。しかし、反応はない。

「ちっ!やつぱり無理か!」

「テリアモン、進化!!……ダメだよ、進化できないよ!」

テリアモンも進化を試みたがダメージが大きすぎたのかガルゴモンにすら進化できない様だった。

『先ほどの攻撃で生きていたとは……やはり興奮するとの的をズラしてしまおうようですね。では、今度は一つ一つ丁寧に消して差し上げましょう。』

嫌な予感がする。

「三人とも早く逃げて!」

無駄なのはわかっている。それでも助けたいという気持ちがある中にはあった。

「そんな……お兄いを置いていくなんて……」

蘭は埋まってしまうている弾の手を握りながら跪く。

『涙ほど悲しいものはありませんね。ですがご安心ください。あなた方人間という「あの世」でおそらく再会できるでしょうから。』

ルーチェモンはそう言いながら一筋の閃光を鈴たちむ向けて放つ。

『では、また来世でお会いしましょう。最もそのときは既にこの世界は変わっているとありますが。』

閃光は鈴たちに向かって迫りくる。

「蘭!」

蓮は思わず蘭を抱きしめる。敵は何かを悟ったのかただ空を眺めていた。

「くそ……最後の最後でこんな結末を迎えるなんて……」

鈴は悔しそうに歯ぎしりをした。

おそらくこのような手段でセシリアやシャルロットたちも同じように消されていくのだろう。

やがて世界中の人間も。

「うう……… 私たちは……… 私たちは何故……… 今日まで生きてきたの？こんな最期を迎えるために生きてきたの？そうだとしたら……… あんまりじゃない………」

鈴はテリアアモンと離れ離れにならないように抱きしめる。

閃光はもうすぐそこまで来ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・?」

閃光はいつまでも自分たちを消す様子はない。

鈴はどういうことかと目を開いてみる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・一夏。」

そこには自分たちを消すはずだった閃光を無力化しているスサノオモンの姿があった。

「
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
待たせたな、
みんな。」

スサノオモン対ルーチェモン

「・・・・・・・・」

スサノオモンは左手でルーチェモンの攻撃を防ぎ切った。

「い、一夏・・・・・・・・」

鈴は声をかけるとスサノオモンはゆっくりと鈴たちの方を見る。

「・・・・・・・・待たせたな、鈴。」

スサノオモンは、鈴の顔を見ながら言う。間違いなく一夏の声である。

「もう！来るのが遅過ぎよ！」

「すまない、俺も正直言つて諦めかけていたからな。でも、箒たちのおかげでここまで

戻つてくれた。」

「箒つて・・・・・・・・箒はどうしたのよ!?まさか・・・・・・・・」

『私も一緒だ。』

スサノオモンが別の声で答える。今度は箒の声だった。これには鈴も流石に尻餅をついた。

「本当に合体したんだ・・・・・・・・って、そんな場合じゃなかった！早く弾を助けないと

！」

「弾？弾がどうしたんだ？」

「家の下敷きになっちゃったのよ！さつき蘭たちが掘り起こそうとしていたんだけど瓦礫で……」

鈴は後ろを見る。後ろでは目の前の出来事に驚きながらも生き埋めにされている弾の手を離さない蘭の姿があつた。

「……分かった。」

スサノオモンは蘭たちの方へと歩いていく。蘭は突然現れたスサノオモンに対して怯えている。

「蘭、悪いが少しそこから離れていってくれ。」

スサノオモンは、蘭に離れてもらおうと弾の手に触れる。

「……大丈夫、命に別状はない。ただ気を失っているだけだ。」

そう言うスサノオモンはもう片方の手を翳す。すると周囲の瓦礫が次々と浮かび上がり、生き埋めになってしまっている弾の姿が少しずつ見えてくる。

「すごい……まるで一夏の意味で瓦礫が動いているみたい。」

鈴は目の前に光景に少し驚いていた。やがて、弾の姿が見えた。

「お兄い！」

蘭は思わず弾に駆け寄る。弾は動く様子はなかったが呼吸はしていた。

「お兄い……………」

「大丈夫だ。時間が経てば目を覚ます。」

スサノオモンは、弾を抱き上げ蓮と巖の方へと渡す。

「弾たちを連れてここから離れてください。」

彼はそう言うのと目の前にゲートを開く。

「このゲートを通れば学園のデジラボまで問題なく行けます。少なくともここよりは安全なはずですよ。」

スサノオモンはそう言うのと上空浮かぶルーチェモンの一部を見る。

「い、一夏！アンタどうするつもりよ!?!」

鈴は蘭を連れながら心配そうに聞く。スサノオモンは顔を振り向かないまま答える。

「ルーチェモンを倒す。そして、この戦いを終わらせる。」

「……………でも、アイツ。とてつもない強さになっているわよ。」

「……………フツ、大丈夫さ。今の俺は一人で戦っているわけじゃない。箒とリリモン、父さん、母さん……………みんなと一緒に戦っているんだ。だから心配いらぬ。」

スサノオモンは、ゆっくりと上空へと向かって行く。

「一夏さん!」

「ん？」

蘭の声にスサノオモンは足を止める。

「なんだ？蘭？」

「……その……兄を助けてくれてありがとうございます。」

振り向くスサノオモンに蘭は頭を下げる。

「ああ。」

「それとーもし、この戦いが終わったら……また家に遊びに来てください！今は壊れちゃったけど……母さんもおじいちゃんも私も兄も一夏さんのこと待っていますから!!」

「……ああ、ありがとう。終わったら必ず行く。」

スサノオモンは高速で上空のいるルーチェモンへ向かって飛んで行った。

楯無たち s i d e

「デュークモン！ベルゼブモン！どこですか〜！」

楯無は大声でどこにいるかわからないデュークモンたちへと呼びかける。

「アルファモン！デユナスモン！」

「生きているなら返事をしてくれ！」

シャルロットとラウラも同じように声をかける。すると少し離れた瓦礫の山が少し盛り上がった。

「あそこに誰か埋もれていますわ！」

セシリアと動いた瓦礫の方へと駆け寄る。

「どなたですの!?!」

『僕だ、アルフォースブイドラモン！ブイブイだ！リナと一緒に吹き飛ばされて生き埋めになっちゃったんだ！』

「四ノ宮さんと一緒に!?!」

『おお！いい！誰か助けて。ヘルプミ。』

セシリアはピヨモンと一緒に瓦礫をどかし始める。するとブイブイとリナの頭が見えた。

「でもおかしいね、セシリア。」

「ん？何が？」

「だって、私たちはさつききの攻撃で元に戻っちゃったのにブイブイは進化が解けていないんだもん。」

「……確かに言われてみれば……そうですわね。」

「それは鍛え方に決まってでしょ！何しろあたし達は経験が豊富だからね。」

リナは頭だけ出ている状態で自慢気に言う。

「……ごめん、リナ。この状態じゃ説得力ないよ。」

「……だよね。ガクツ。」

リナはしょんぼりと肩を落とす。

「おい！こつちにはジャステイモンたちが埋まっているぞ！……二人仲良く上半身だけ。」

『ボオ〜イ！ダズゲデグレ〜!!ゾロイニゾロットツマツマツダンダ!!グゾ〜！（おい！助けてくれ〜！揃いにそろって埋まっちゃったんだ！くそ〜！）』

埋もれながらもジャステイモンは足を動かしながら叫ぶ。こちらはラウラとシャルが手分けをしながら掘り始める。

「みんな……無事……とは言えないようだな。」

そこへデュークモンがベルゼブモンに肩を貸しながら歩いてきた。どちらもボロボロの状態で立つのが精一杯の様だった。

「デュークモン。」

「私もこの様だ。ロイヤルナイツの面々も生きてはいるが戦える状態ではない。情けないことだ。」

「ちくしょう！俺とも言おう者がこんな無様にやられるなんて惨めすぎるぜ!!」

かなり傷を負ったのかベルゼブモンは力がない声で悔しそうに言う。

「それでほかのデジモンたちは？」

シャルロットは不安そうに聞く。

「……さっきの攻撃でかなりやられてしまった。幸い死者が出ていないがむしろ人間の方がどうなっているのかが……」

デュークモンは何とも言えない様だった。

あれだけの数の集団で戦ってこのやられ様なのだから致し方ないが。

「……ここまでなのかな？ 私たち。」

「な、何言ってるのよ!? 簪ちゃん!」

簪の一言に楯無は思わず動揺する。

「諦めたらそこで試合終了って言うでしょ!? 諦めなければ何とかなるかもしれない……」

「確かにそうかもしれないね。」

「えっ?」

「ISも使えないし、ピヨモンたちももう進化できる力が残っていない以上私たちにはもうどうにもなりませんわ。」

「……仮に学園に戻って訓練機に乗り換えたとところで戦況が変わるとも言い難いしな。」

「ちよ、ちよつと……」

「へっ、全員揃いに揃って諦めちゃうとは情けねえな。」

全員が諦めかけているときにようやく掘り起こされたジャステイモンが土ほこりを

払いながら駆け寄る。

「ジャステイモン。」

「俺たちにはまだ切り札があるだろ？」

「切り札……でも、一夏は……」

「確かにまだ来ていねえけど来る前に俺たちが先に諦めてどうする？ それこそ奴の思うままだぜ。それにまだすべてが終わったわけじゃねえんだ。奴がまた本格的に攻撃に入る前にこつちの陣営を立て直すのも筋つてもんだぜ。」

「……い、意外なことを言うんだな。私は正直言っただけのこと。なるリア充の熱血馬鹿だと思っただけ。」

啞然とした顔でラウラが言う。

「おい！ リア充と熱血は認めるけど馬鹿とは何だ！ 馬鹿とは!？」

「すみません……私も思っていました。」

「何!？」

「僕も。」

「私も……」

「私もそう思っていたわ。」

「……」

全員に言われてジャステイモンは体育座りをして落ち込んだ。

「いいよ……いいよくだあ。俺はどうせ馬鹿ですよ……脳筋ですよ……グスッ。」

「よしよし、ジャステイモンは馬鹿じゃないんだから。ね？だから元気出して。」

そんなジャステイモンをエンジエウーモンが慰める。

「お前たち、無事か!？」

そのとき千冬がジエスモン、ピクトリーグレイモン、マグナアルフォースブイドラモンを引き連れて現れた。

「織斑先生!」

「教官!」

「どうやら無事の様だな。……ん？風の奴はどうした?」

千冬は人数を確認して鈴がないことに気がつく。

「あつ、さつき友人の家が心配だと言ってそっちに行きました。」

「友人?」

「確かこの間の文化祭で来ていた五反田さんの……」

「五反田の方か。わかった。」

千冬はそう言うと後ろのピクトリーグレイモンとマグナアルフォースブイドラモン

を見る。

「すまないが二人でここにいる全員を学園まで送り届けてくれ。私は嵐の方に行く。その後は……」

（その必要はない。）

「ん!?!」

言いかけた直後、千冬たちの脳裏に聞き覚えのある声が響いてきた。

（鈴たちは既にゲートでデジラボに送った。みんなも今からゲートを開くからデジラボに避難してくれ。）

「こ、この声は!?!」

「間違いないよ!一夏だよ!」

「一夏さん!?!どこにいますの!?!」

一夏だと分かり千冬を除くメンバーは驚いていた。

（今、テレパシーでみんなに心に声を送っている。さつきも言った通り今から目の前にゲートを開く。そこからデジラボに逃げてくれ。）

「い、一体どこに……」

（今、ルーチェモンの所へ向かっている。箒と一緒に。）

「ほ、箒と!?!」

ビクトリーグレイモンは嘩然とする。上空を見るとわずかながら一つの光が上空に上って行く姿が確認できる。おそらくあれが一夏なのだろう。

「一夏はどうするの!?!」

(ルーチェモンを倒す。)

「そ、そんな!?! 一人じゃ無茶よ!」

(大丈夫だ。今度は負けない。)

「でも、たった一人じゃ……」

(私もいるから大丈夫だ。)

「あつ、篠ノ之さん。」

(それにみんなその状態じゃ戦えないだろう? だったらデジラボに戻るべきじゃないか?)

「そうだけど……」

(もうすぐ奴の目の前に着く。これ以上は話すことはできない。また会おうぜ。)

「一夏!」

(千冬姉、みんなをよろしく。)

そう言うとき一夏の声は聞こえなくなった。しばらく全員沈黙するがすぐにゲートが開いたため千冬は動き始める。

「全員、これよりデジラボに帰還する！動けないデジモンは動けるものに手を貸してくれ！おそろくすぐにも戦闘は再開される！急げ！」

「お、織斑先生……」

「今の私たちにできるのは責めてこれぐらいだ。後は二人を信じるしかない。」

千冬は、雲の中へと消えようとする光を見る。

「一夏、篠ノ之。……絶対勝って戻ってきてくれ。」

上空

『………来ましたか。』

ルーチェモンは、目の前に現れたスサノオモンを見下ろす。

「……俺の世界をよくも破壊してくれたな。世界中も勿論、俺の大事な思い出のあの街も………」

『ホッホッホッホッ。』

「何がおかしい?」

『いえいえ……むしろあなた……いや、あなた方にとってはよかつたのではないですか?自分たちの姉弟(姉妹)によつて歪められた世界を壊すのは。あなたたちだつて嫌いだったのでしょ?』

「……ああ。確かにその通りだ。だから俺は死にかけた。そして、箒も一人ぼっち

になった。だが、そんな過去を受け入れたからこそ今日まで生きて来れた。みんなとも分かり合えたんだ。」

「……ほう、そう解釈しますか。しかし、あのまま死んでいればよかったものを……」。そんなに世界の終わりを見たいのですか?」

「違う。俺は世界の終わりを見に来たわけじゃない。」

『ではなんですか?まさかこの私を倒すだけでも?』

「そうだ。」

『ホッホッホッホッホッ……面白い冗談を言いますね。あなたは己の無力さを理解しているのですか?』

ルーチェモンは両腕に結晶体を作り出し、デジモンを複製し始める。

「今の俺は一人じゃない。箒と二人、いや、お前の手で散った者たちと一緒に戦っているんだ。」

『口では何とでもいえるものです。』

ルーチェモンは一齐に複製デジモンたちにスサノオモンを襲わせる。

「……やるぞ。箒。」

スサノオモンは右手を振り上げると複製デジモンたちに向かって振り下ろす。

次の瞬間、複製デジモンたちは何かに吹き飛ばされたのかすべて粉々に吹き飛ばされ

てしまった。

『・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・どうした？あれで本気じゃないんだろう？」

『・・・・・・・・・・どうやら、ダークエリアのスサノオモンとは一味違うようですね。』
ルーチエモンは下半身の結晶体を切り離す。

『いいでしょう。今度は楽しめそうです。どちらが神に相応しいのかここで決めようではありませんか。』

「俺は神なんかじゃない。神としてではなく人間としてお前を倒しに来たんだ。」

両者ともに一定の距離を取って構える。

「・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・フン!』

先にルーチエモンが高速で移動し、スサノオモンを殴る。スサノオモンはすぐにガードをするが衝撃波凄まじく、後方に吹き飛ばされる。

「・・・・・・・・・・」

『どうしました？この程度の攻撃で押されるなら私を倒すなど夢のまた夢・・・・・・・・!!?』
追撃しようとしたルーチエモンの左拳をスサノオモンが受け止める。

『ぬ、抜けない!?こゝ、これは一体・・・・・・・・・・』

「どうした?この程度の攻撃じゃ俺たちは倒せないぞ。」

『ちっ!』

ルーチェモンは無理やり拳を引き抜く。

「今度はこつちから行くぞ。」

『フン、少し舐めすぎていたようブツ!』

スサノオモンの一撃がルーチェモンの顔面にめり込む。

『なっ!?!』

「.....」

スサノオモンは無言で攻撃を続行する。攻撃の一撃一撃がルーチェモンへと命中していく。そのたびにルーチェモンは後方へと押される。

(馬鹿な!?!この私がかが素手の攻撃で押されている!?!そんな馬鹿な!?)

「.....」

『クッ!』

ルーチェモンは、攻撃を避け距離を取りなおす。

『ハア.....ハア.....この私が.....あんな輩に.....!?!』

ルーチェモンは自分の口から流血したをふき取りながら啞然とする。

『ち、血!?!この神たる私が血を流すだ?!?そ、そんな馬鹿な!?!』

彼はスサノオモンを見る。

確かに攻撃した箇所は、傷ついてはいるが血は流れておらず、全くうろたえる様子がない。むしろ何かとてつもない気迫を感じさせられた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

「血を流したことに動揺しているのか？」

『キツ！人間風情が!!』

ルーチェモンは自分の周囲に七つの冠を出現させる。

「・・・・・・・・あの技か。」

『所詮、人間は神など越えることはできん！これで砕け散れ！デイバインアトーンメン ト!!』

七つの冠から光が放たれ、スサノオモンを覆い込んだ。

『まだまだ！まだこれでは足りん！パーガトリアルフレイム!!ブラッドレイン!!』

攻撃を連続で行い、スサノオモンの姿を確認することはできない。更にとどめとばかりに光球で立体魔方陣を作り出しスサノオモンを封じ込める。

『これは完全体の時とはわけが違うぞ!!これを受ければ貴様は確実に「死」だ!!デッド・オア・アライブ!!!』

魔法陣は、大爆発を起こす。周囲の雲は吹き飛ばされ、ルーチェモンは衝撃に耐えな

がらスサノオモンが消えたかどうかを確認する。

『……………!?なんだと!?』

ルーチェモンは目の前の光景を信じられずにいた。

「……………これで満足か？」

そこには、体はボロボロになりながらも気迫が依然として劣れ得る様子の無いスサノオモンが立っていた。

戦いの終わり

上空

『き、貴様！なぜ生きている!?あの攻撃を耐えるとは信じられん!!何故だ！何故!?!』

ルーチェモンはゆっくりと近づいてくるスサノオモンに向かって言う。

「……確かに俺一人だったら危なかったかもしれないな。」

『!?!』

「俺は今まで一人で何でも背負おうとした。この世界に戻ってきてからずっと……でも、今は違う。」

『ぬっ!?!』

ルーチェモンは一瞬、スサノオモンの後ろに一夏と箒の姿が見えた。

「今は、すぐ傍にいる箒はもちろん千冬姉や鈴たち、そしてチビや他のデジモンたちと共に戦っている。それに比べて貴様はどうだ？仲間まで犠牲にしてその力を手にした上に神になる？ひどい話だぜ。」

『くっ！お黙りなさい！あなたに何が分かるのです！二度も消された私の何が分かるというのです!?!滅んでいったデジモンの生への執着、アポカリモンとして舐めさせられた

屈辱、……そう！どれにしても世界から拒絶された私の何が分かるというのです!!』
ルーチェモンは怒りの形相でスサノオモンを見る。

「……だったら、何故手を取り合って生きようとしなない？アポカリモンの時だってお前にその意思があれば十闘士とも戦わずに済んだはずだ。」

『フーン！甘いですね……表の者は裏の者が出ようとしたら必ず排除しようとする。それは人間として同じ、自らの脅威とありかねない存在はどんな手を使っても排除しなければ気が済まない。排除しなければならぬ存在……あなたにはわかりませんか？私は生を受けた時からすでに排除しなければならぬ存在なのです！そんな運命を受け入れる者がいると思いますか？』

「だが、お前はその運命に抗うために多くのデジモンの命を奪って来た。それも二度も!!そして、今度は世界そのものを滅ぼそうとしている!!貴様一人のために全てを犠牲にしているはずがない!」

スサノオモンは、ルーチェモンの言葉に怒りを感じ、拳を握り締める。

『織斑一夏、世間から拒絶されてきたあなたなら少しは私の気持ちを理解してくれると思っていましたか……』

「俺は確かに世間から拒絶された。でも、俺はその中でも生きようとした。滅ぼそうと考えているお前と一緒にするな!」

『ならば、どちらが正しいかここで決めて差し上げましょう！』

ルーチエモンは分離していた結晶体を砕き、自らの体に取り込む。するとルーチエモンの体から蛇のような顔が付いた無数の触手が生えてきた。

『喰らいなさい！ポイズン・ウィップ!!』

無数の触手がスサノオモンを襲う。スサノオモンは大剣を展開し、切断するが次々と再生していく。切断した触手がスサノオモンの体に付着するとそこからまるで硫酸をかけられたのかのような音がし始める。

(・・・不味いな、このままとも受ければ体が溶かされてしまう。)

『ホッホッホッ・・・切断した物がそのまま落ちるとでも思っているのですか？』

「何?！」

スサノオモンは、自分の体を見る。体のあちこちに切断した触手の肉片が付着し、それがまるで意思でもあるのかのように這いずり回っていた。

「、これは・・・」

『隙ができましたよー!』

「ぬっ!？」

一瞬気を取られた瞬間無数の触手がスサノオモンの体に巻き付く。スサノオモンの

身体中から溶け始めているような音がし始める。

「ぐうう……」

『どうですか？体を溶かされる気分は？しかし、それだけでは終わりませんよ？体が動けなくなるところまで溶かして……私の体に取り込んで差し上げますからね。』

「うう!!」

スサノオモンの体が溶けはじめる。

(このままでは溶けてしまう……それにダメージは俺と同時に箒にまで影響を及ぼしてしまう……俺はいい……だが……)

(一夏)

(箒?どうした?苦しく……)

(私は大丈夫だ。それよりも聞きたいことが……)

スサノオモンの中で一夏と箒は何やら作戦を練り始める。

「……」

『おや?抵抗するのをやめた様ですね。どうしたのです?』

ルーチェモンは突然抵抗しなくなったスサノオモンを見る。

「……どうやら、この触手で完全に動くことができなくなっていましたようだ。もう、手足の感覚がほぼなくなっちゃった。」

スサノオモンは戦意を喪失したのか諦めたように言う。

『そうですか。ならすぐに楽にして差し上げましょう。』

触手で完全に固定し、ルーチエモンの胸がバツクリと割れる。そこへスサノオモンは取り込まれて行く。

『イグドラシルに続いて十闘士の力まで取り込めるとは……私はようやく因縁に蹴りが付いたというわけになりますね。』

「……………」

『もはや話す力も残っていませんか。では、さようなら。』

スサノオモンはルーチエモンの体の中へと消えて行った。

デジラボ

「痛てててて!!」

「我慢してください。」

「こっち！早く消毒と包帯！」

デジラボでは、戻ってきたデジモンたちの治療が行われていた。その一方では大破してしまったIS各機をどうにか直そうと悪戦苦闘しているクロエとパイルドラモンの姿がある。ゲートを通じて戻ってきた千冬たちは、別れていた鈴と合流していた。

「千冬さん！」

「嵐、どうやら無事の様だな。」

千冬は鈴の顔を見ながら言う。絆創膏がいくつかしてあるがそれ以外に目立った怪我はない。

「ところで五反田の様子はどうか？ さつき一緒に来たと聞いていたが。」

「はあ、弾以外はかすり傷程度でそこまでひどくはありませんでした。でも、弾の方は、右足の方が瓦礫で骨折した様で……」

「そうか。」

取りあえず命に別状はないと分かると千冬は安心する。

「……しかし、一夏の方が心配です。何しろあんなひん死の状態から戻ってきたから今頃どうしているのか……」

「アイツのことだ。心配することは……」

その直後ラボにあったテレビが突然起動する。映像にはルーチェモンの姿が映し出された。

『人類諸君、御機嫌よう!! 私はルーチェモン、神となった存在です。長きにわたって栄えてきたあなたたち人類ももついに最後の時が訪れました!』

「何っ!?!」

千冬は思わず声を上げる。それは鈴たち、パートナーであるマグナアルフォースブイドラモンとビクトリーグレイモンも同じ気持ちだった。

「い、一夏が負けたって言うの!？」

「そんな!？」

「兄貴が……そんな!!」

『最後まで抵抗した者もいた様でしたが残念ながら神である私の前には全く無力でした。』

「野郎!!」

マグナアルフォースブイドラモンは思わずテレビを殴ろうとする。

「よせ! ブイモン! これはテレビだ! 奴じゃない!」

「くそ……くそ!!!」

ビクトリーグレイモンに抑えられながらマグナアルフォースブイドラモンは跪く。

「……………」

「……………」

そんな状況の中、東とミレイだけは冷静だった。

『これより、私はあなた方人類に対して最後の攻撃を行います。安心していいですよ? ほんの一瞬、苦しむこともなくあなた方の体は消滅するのですから。』

ルーチェモンは悠々話をする。

『ではカウントを始めます。30数えきつたところで攻撃を行います。それでは行きま

すよ、30、29、28……」

「ぐおおおお!!!嫌だあ!まだ死にたくねえ!」

みんな唾然としている中ジャステイモンは一番騒いでいた。

「ジャステイモン……アンタ、最後までいい静かにしなさいよ。」

「黙れ!!俺はまだやりたいことが山ほどあるんだ!!そんな簡単にくたばってたまるか!!」

鈴に言われてもジャステイモンは止めない。

「エンジエウーモンとはまだハネムーンにも行っていないし、俺たちを主役にしたヒーロー番組も作りたいし、後……」

「やめてくれ兄貴!俺たちのライフポイント(いろんな意味で)がゼロになっちゃう!っ
て言うか俺たちの社会的立場がああ!!エンジエウーモンも……」

「嫌嫌嫌嫌嫌嫌!!!私も死にたくない!ジャステイモンと離れたくない!!いやあああ
あ!!!」

「……最後の最後までこれかよ……兄貴もエンジエウーモンも。」

シャイングレイモンは頭を抱える。そう言っている間にもルーチエモンのカウント
ダウンは迫っている。

『12, 11, 10, 9……』

「一夏……くそ、姉である私が何もできないとは……」

千冬も悔しそうにするがそんな千冬の肩に束が手を置く。

「束。」

「大丈夫、いつくんたちはまだやられていないよ。」

「だが、スサノオモンの姿が……」

『6, 5, 4, ……』

「エンジェウーモン！愛しているぞ！」

「私もよ、ジャステイモン!!」

「ええい！人生の最後ぐらい静かにしてくれ!!」

抱き合っているジャステイモンとエンジェウーモンに対してラウラが怒鳴る。

『3, 2, 1……ぐう!?!』

その直後、ルーチェモンのカウントダウンが止まった。

「あれ？止まったよ？」

シャルロットは不思議そうに言う。一同はテレビをよく見てみる。ルーチェモンが突然苦しみだしたのだ。

「な、何が起こりましたの？」

「あつ！よく見て！奴の胸に穴が！」

簪に言われてルーチエモンの胸をよく見ると何か巨大な手が出てきていた。その腕が中から出ようと胸の傷を拡げ始める。

「あれって……」

「まさか!」

割れ目が完全に開きとそこから出てくるものに一同は声を合わせて行った。

「……い、一夏!!」

「ねっ?」

束はニヤニヤしながら千冬に言う。

上空

『ぬ．．．ぬっぐう．．．．．』

ルーチェモンは裂けた胸を押しえながらスサノオモンを見る。

『き、貴様．．．．．何故．．．．．』

「ちよつとしたアイディアでな、お前の体内に侵入させてもらった。」

スサノオモンは右手に光る何かをルーチェモンに見せる。

『そ、それは!?!』

「お前はダークエリアにいたとき、イグドラシルを取り込んだと言っていた。よくよく

考えてみたらお前を倒したらイグドラシルと一緒に倒してしまふことになる。そうしたらデジタルワールドは滅んだままだ。」

『だから、私が一夏に提案して動けなくなつた振りをして貴様の体内に侵入し、イグドラシルの救出を考えた。そして、救出した後元来た所から脱出したんだ。』

『お、おのれ………』

ルーチェモンは傷を治しながら睨みつける。

「痛いかルーチェモン？お前に消されたデジモンも同じ苦しみを味わいながら消えて行つたんだ。かつて自分にされたことをお前はデジタルワールド全てにやつたんだ！」

『黙れえ!!』

ルーチェモンは真紅の大型剣を作り出し、スサノオモンに斬りかかる。しかし、スサノオモンは横に避け素手で叩き割つた。

『何!?!』

「………貴様にために志半ばにして散つて逝つた者たちの苦しみを存分に味わつてもらふぜ。」

スサノオモンは拳を振り上げ、ルーチェモンにぶつける。

『グバアア!?!』

「これは俺とチビの帰りを待つて散つたライラモンの分！」

更に一撃を腹部にめり込ませる。

「これは貴様の策によって消されたオメガモンとマグナモンの分！」

『グウウ!!』

顔面。

『グウオオ!!』

「今度はパートナーのために自らの命を託したドウフトモンの分!!」

更に蹴りを連続でお見舞いする。

『ブツ!ブツ!ブオオ!!』

「これは貴様に殺された父さんと母さん、そして、人形として動かされ続けたマドカの方

!!!」

ルーチェモンは触手で再び拘束しようとする。

「八雷神!!」

八方から破壊の雷を放ち、ルーチェモンの触手を完全に破壊する。

『グワアアアア!!』

「これは俺と箒のために最後まで勇敢に戦ったりりモンの分!!」

ルーチェモンはあまりにも大きいダメージに地上へと落ちていく。

『グハッ!!』
地上

飛ぶ力もなくしたのかルーチェモンは、自らが破壊した市街地へと墜落していった。

『ぐう………さ、再生が遅い……やはりコアであるイグドラシルを抜き取られたのが原因か……』

そこへスサノオモンが冷徹な眼差しを向けたままゆっくりと降下して来る。

『ハア……ハア……（殺される！あの目……間違いなく私を殺しに来た目だ！）』

ルーチェモンはもがきながら移動を始める。

（逃げなくては……ここは逃げなくては……神であるはずの私が負けるはずが……）

「どこへ逃げるつもりだ？」

『!!』

這いずり回っているルーチェモンの目の前にスサノオモンが立っていた。

『た、助けてくれ!!私が悪かった!!大人しくダークエリアに引き返す!!そして、二度と現れない!だから頼む!情けをかけてくれ!!い、命だけは!!』

ルーチェモンは必死に命乞いをする。

「……貴様、そうやって命乞いしてどれだけのデジモンや人間を犠牲にしてきたと思っているんだ？」

『頼む!!』

ルーチェモンは土下座をしながら詫げる。スサノオモンは、そんなルーチェモンに対して後ろを向く。

「……………いいだろう。今回は戒めとして生かしておいてやる。」

スサノオモンは歩き去ろうとする。

(くうう……………この私は神なのだ……………負けは許されない。それもたかが人間如きに……………)

ルーチェモンは真紅の槍を精製し、スサノオモンに向ける。

『この私が絶対にして唯一の神なのだああああ!!!ブラット・スピア!!!』

ルーチェモンは全ての力を槍に込め放つ。槍はスサノオモンの腹部を貫く。

「グウウ!!」

『ハハハハハハハハハ、やったぞ!!私の勝ちだああ!!!』

「どこを見ているんだ?」

『ハッ!?!』

後ろからもう聞くこともないはずの声を聞いてルーチェモンは思わず振り向く。

『ば、馬鹿な!?!どうして貴様が私の後ろに!?!』

そこには目の前で倒したはずのスサノオモンがいた。

「俺はずっとお前の後ろにいたぞ。」

『そ、それじゃ……目の前にいたのは……しかし、スピアはどこに……』
 「お前に刺さっているそれじゃないのか？」

『何……ぐ、グワアアアアア!!』

ルーチェモンは自分の腹部を見るなり悲鳴をあげる。そこには自分が投げたはずの槍が刺さって自分の体突き抜けているのだ。

「それは、お前の攻撃で犠牲になった人たちの苦しみだ。」

スサノオモンはルーチェモンから少し離れ、ゼロアームズ：オロチを展開する。

「そして、これがお前によって両親を失い……苦しめ続けられた……俺と……」

『貴様たちの企みによってかけがえのない友を失った私の……』

『うわあああああ!!!』

「俺と」

『私の』

「『怒りだあああああ!!!天羽々斬!!!』」

スサノオモンはゼロアームズ：オロチから放たれる大出力のレーザーサーベルでルーチェモンを一刀両断する。

『グバアアアア……』

ルーチエモンは真つ二つに切断され、その後さらにバラバラに分解されていき、完全に消滅する。

「……………終わった。」

ルーチェモンが完全に倒されたのを確認するとスサノオモンはゼロアームズを外し、空を眺めた。

『……………勝ったんだな、私たち。』

「ああ、俺たちは勝ったんだ。」

空は先ほどの暗雲が晴れ、青い空が広がっていた。

再生

I S 学園

「雲が晴れていく……」

簪はさつきまで暗雲で暗闇になっていた青空を見ながら唾然とする。それは鈴や千冬たちも同じ反応だった。

「……どうやら、彼らはルーチェモンを倒したようだな。」

デュークモンは空を見上げながら言う。

「……と言う事はセシリアたちの世界は救われたってことだよね！」

セシリアの隣でピヨモンが言う。

「そ……そう言う事になりますわね。」

「やった〜！鈴たちの世界は救われたんだ〜！」

鈴の頭の上でテリアモンはぐったりしながらも嬉しそうに言う。そんな中マドカは空を眺める。

「お父さん……お母さん……お兄ちゃんがやったんだよ。お兄ちゃんが。」

隣では千冬と束も空を眺めている。

「あんな出来事が嘘だと思えるぐらい晴れてしまったな。」

「まあね、でも夢ではないのは確かだよ。」

「しかし、ルーチェモンを倒したのはいいがこれからデジモンたちはどうするんだ東?」「無論、デジタルワールドが現段階でデジモンたちが住めない以上、こっちで暮らすことになるだろうね。でも、人間との共存はかなりの道のりになるよ。ISが兵器から本来の目的である宇宙開発に使われるようになるまでと同じようにね。」

東は少し皮肉そうに言う。

「ルーチェモンを倒した段階ではデジタルワールドは元の姿には戻れないのか?」

「そんなラスボスを倒したら平和になりましたなんてゲームみたいなことにはならないよ。それにイグドラシルがいらない以上デジタルワールドの修復はできないし、当然、デジモンの転生システムも働かないよ。」

「そうか……ん?東、今なんて……」

「あつ!一夏よ!」

「本当だ!!」

東と千冬の会話は、鈴たちの叫び声で途絶える。二人も空の方を見るとスサノオモンが徐々にこっちに向かっているのに気付いた。

「さて、まずは世界を救ってくれたいつくんたちの最後の仕事を手伝わないとね。」

束はそう言うとかロエたちと共にラボの方へと向かって行く。

「最後の仕事？ どういうことだ束？」

「言った通りのことだよ。」

二人がそう言っている間にもスサノオモンはゆっくりと一同の前に着陸する。

「兄貴！」

「箒！」

ビクトリー・グレイモンとマグナアルフォースブイドラモンはアグモンとブイモンに退化し、スサノオモンの方へと駆け寄る。

「兄貴！ 勝ったんだよな！ ルーチエモンに。」

「……ああ。」

「やった！ 流石兄貴だ！」

『私はどうなんだ？』

「あつ……ほ、箒姉ちゃんもすごいぜ！（汗）。本当に兄貴と合体しちゃうなんてや。」

『本当に褒めているのか？』

「お、俺は正直者だから本当だよ!!」

『ハツハハハハハハ。』

ブイモンの反応を見てスサノオモンは笑った。それに続いて見ていた鈴たちも吹き出しながら笑う。

「わ、笑うことはないじゃないか!!」

「でも、本当にあれはまずかったよ。」

「うっ!!」

アグモンにまで言われてしまいブイモンは何も言えなくなってしまう。その光景を見た後スサノオモンは、何をしようというのかデュークモンの方へと行く。

「デュークモン、アンタに聞きたいことがある。」

「なんだ?」

「イグドラシルの居場所を教えてほしい。」

「イグドラシルの!?!しかし、イグドラシルは既にルーチェモンと共に……」

デュークモンが言いかけたときスサノオモンは光る球体を見せる。

「イグドラシルならこの通り無事だ。最も意識はまだ目覚めていないがこのコアを戻せばデジタルワールドも本来の機能を取り戻せるかもしれない。」

「確かに、だが長い間ルーチェモンに取り込まれていたイグドラシルが果たして完全に復活できるのか……」

「でも、可能性はゼロじゃない。それならやる価値は十分あるはずだ。」

「……そうだな、いいだろう。このデュークモンが案内しよう。」
「ありがとう。」

デュークモンは早速ゲートを開こうとするがよろけてうまく展開できない。

「くつ、先ほどの戦闘のダメージで思うように展開できんか。」

『やはりすぐには無理なのか？』

「面目ない。」

「デュークモンでこれじゃ他のロイヤルナイツもしばらく休まなくちゃダメか。」

スサノオモンは首をかしげながら言う。

「その心配はないよ。」

そこへ東が戻ってくる。

『姉さん。』

「東さんのラボのアクセスからイグドラシルの居場所に行けるようにセットしたから箒ちゃんたちがここでゲートを展開して移動すれば自動的にイグドラシルまで行けるよ。」

東の言葉にロイヤルナイツ一同は思わず言葉を失う。

「し、篠ノ之東……貴様、いつそんな情報手に入れた……」

スレイプモンは、質問する。

「私はいろいろ情報通なだけでよ。」

「……奴だけは絶対に敵に回したくないな。」

クレニアムモンは、飄々としている束を見ながら冷や汗をかく。

「わかった。ありがとう束さん。」

スサノオモンは早速ゲートを展開する。

「じゃあ、千冬姉。俺たちもう少し行ってくるよ。」

「ああ。」

『姉さん、行ってくる。』

「行ってらっしゃい。」

スサノオモンはゲートの中へと突入して行った。

デジタルワールド

デジタルワールド。

かつて美しい自然に溢れ、多くのデジモンが暮らしていたその大地はイーターの壊滅的浸食によって荒廃した世界となり果てていた。イーターがすべて消え去った今も緑は戻ることはなく、黒く染まった大地が延々と広がっていた。その上空をスサノオモンは高速で移動していた。

「……リリモンが言った通り、随分変わり果ててしまったな。俺が人間界に戻る前の面影はどこに……」

『ここがアグモンたちの故郷なのか。ここまで荒れ果てているということは余程恐ろしい出来事だったんだろうな……』

そんな会話をしながらスサノオモンはデジタルワールドをひたすら突き進んでいく。そして、どのくらい移動したのか気がつけば周囲は何もない空間へと変化していた。

『……は？』

「以前、オメガモンたちに連行されたときと人間界に行くときの二回しか見ていないがここがイグドラシルの中枢に通じる場所だ。」

スサノオモンはさらに奥へと進む。すると、目の前に巨大な黒い物体があった。イーターに浸食された影響で何だったのかはわからないが一夏は元は何だったのかは何となく見当がついていた。

「随分派手に侵食されていたようだな。」

『い、一夏。まさかこの黒い物体が……』

「ああ、イグドラシルだ。」

『こ、こんなゴミの塊みたいなのが!?!』

『……言葉を慎め。人間よ。』

そのとき、手に持っていた光の玉から声が発せられた。

『?!い、今のは!?!』

「もう目が覚めたのか? イグドラシル。」

一夏はイグドラシルに声をかける。

『……その娘と貴様が移動しながら話している辺りからな。まさか、あのルーチェモンを倒すとは成長したものだ。』

「俺一人の力じゃないさ、箒や父さん、母さん、みんなの気持ちでルーチェモンを倒す力を分けてくれたんだ。俺一人だったら今頃ここには来れなかつたさ。」

一夏は少し恥ずかしそうに言う。

『……ふん。最初に会った頃は、道を外すのではないかと少し心配していたが……その心配は無用だったようだ。最早何も言うまい。』

スサノオモンはイグドラシルのコアをそつと本体の中へと入れる。すると、黒い表層

が崩れ始め、中から女神像を模したような本体が姿を見せ、光を発し始める。

『貴様には、大きな借りができてしまったな。ヴリトラモン。』

「もう、その名前はいいさ。俺は織斑一夏、それ以上もそれ以下もない。ただの人間さ。」

『そうか。』

『あの……』

『ん？何か用か篠ノ之箒？』

『一つ聞いておきたいがおま……じゃなかった。あなたが本体に戻ったという事は機能が回復してデジタルワールドも元の姿に戻すことができるという事なんだよな？』

箒の質問にイグドラシルはしばらく黙る。

『……本来ならそうしたいところだが……』

『無理なのか？』

『いや、いくら私とはいえ長い間コアだけの状態でルーチェモンに取り込まれてしまった影響でな。すぐにデジタルワールドを再構築するのは困難な事なんだ。殆どの力を失いかけたうえ、存在そのものまで奴と一体化されたためにね。』

「と言うことはすぐに元の姿には戻せないというだけで戻すことができないというわけじゃないんだな？」

『ああ、機能が完全に回復するまではデジタルワールドの再構築も時間がかかる。だが、他のことならできる。』

『他のこと？』

『デジタルワールドで散ったデジモンたちの魂の開放だ。』

IS学園 グランド

「……兄貴たち遅いな。もう夕方になっちまったよ。」

ブイモンは空を眺めながら言う。

「もしかして、何かあったのかな？」

アグモンも心配そうに言う。それは、千冬たちも同じ気持ちだった。

「東、一夏たちは本当にイグドラシルの所へたどり着いたのか？」

「いやだなくちーちゃん。東さんは間違っではないよ。」

「織斑先生！あれ！」

簪が驚いた声で指を指す。

「あれは？」

千冬も驚いた顔で見る。

破壊された街の方で何か光るものが無数に飛んでいるのだ。

「あの辺は……一夏と箒がルーチェモンを倒したあたりよね？」

「うむ、間違いはない。」

鈴とラウラが言っている間にも一つの光が一同に向かって飛んでくる。

「こつちにも飛んできましたわ!？」

「みんな離れて!」

楯無の指示のもとに全員急いで落下すると思われる辺りから離れる。光は鈴たちがいたところに丁度落下する。

「みんな気をつけろ! 一体何が……!?」

全員に注意を呼びかけようとするジャステイモンの口が突然止まる。それは落下してきた光の正体を見たからだだった。

「お、俺は確かイーターに……」

金色の装甲を纏ったビクトリーグレイモンとは別系統にグレイモン系デジモンが驚きながら周囲を見る。その姿を見てジャステイモンは思わず叫ぶ。

「ウォー!! ウォーじゃねえか!？」

「えっ? 兄貴!？」

ジャステイモンたちは周りを見て困惑しているウォーグレイモンの所へと集まる。

「間違いねえ! 本物だ!!」

「はっ!?! いや、急に何言っただよ、シャイン?」

「よかった、よかった!」

ジャステイモンは思わず嬉し泣きを始める。

「ちよつ、兄貴一体どうしたんだよ!?!なあ!?!エンジエウーモンも何か言って……」

「よかった……本当によかったわね……」

「エンジエウーモンまで泣かないでくれよ!?!シャインも……」

「うおおくく!!我が兄弟よおおく!!」

「……ダメだこりや。」

周りに泣きつかれウオーグレイモンは参ってしまふ。

そして、また一つの光が一同の前に落ちる。今度はリリモンと同系統の妖精型のデジモンだった。

「……うう……」

妖精型デジモンは頭を押さえながら顔を上げる。それを見た瞬間、ブイモンは口を開いて驚く。

「ね、姉ちゃん!?!」

「……チビちゃん?」

ライラモンはブイモンを見て言う。その声を聞いた瞬間、ブイモンは今まで我慢していたのか目からダムが決壊したかのように涙が開始める。

「うわああくくく!!ライラ姉ちゃああくくくん!!」

ブイモンは泣きながらライラモンに抱き付いた。突然の出来事に驚いたライラモン

ではあったが泣いているブイモンを見るなり落ち着かせようとする。

「あらあら、そんなに泣いちやったら周りから笑われるわよ?」

「姉ちゃああん……」

ブイモンは、ライラモンの声を聞きながら泣くのをやめようとしないう。周りで死んだはずのデジモンたちが次々と目の前に現れているのに鈴たちは驚きを隠せなかった。

「東、これは一体どういう事なんだ!? この二人は確かイーターに捕食されて死んだはずではなかったのか!」

「あ……ちーちゃんには説明しなかったんだけどデジモンには『転生』っていうシステムがあつて、死んだデジモンは僅かな確率で前世の記憶を引き継いだまま生まれるというシステムがあるんだよ。」

「だが、これではただ生き返っている様ではないか!」

「う……ん、多分イグドラシルのせいなんじゃないかな?」

東はとぼけたような顔で答える。そこへオメガブレードを持ったクロエがやってくる。

「東様、先ほど修復したオメガブレードなのですが……」

言いかけた瞬間、今度はオメガブレードに光が落ち、剣は一瞬にしてオメガモンへと姿を変える。

「グハッ!？」

突然の出来事にクロエはオメガモンに押し潰されてしまう。

「クーちゃん!？」

流石の束もこれには参った。オメガモンは驚きながらも体を起こしてクロエを助ける。

学園から少し離れた森

イグドラシルのコアを本体に戻し、スサノオモンは人間界へと戻っていた。

「まさか、イグドラシルが言った開放とはイーターに捕食されたデジモンたちの帰還だとはな。」

スサノオモンは空を見上げる。空には今だに無数の光が飛び回っており、至る所でデジモンたちが復活していた。

『……………一夏。』

「ん?」

『あの光の中にはリリモンもいるのかな?』

「……………いや、リリモンは正確には捕食されたんじゃなくて死んだんだ。だからあの中にはいない。」

『……………そうか。』

箒は一夏の答えに少ししよんぼりする。

「だが、アイツもきつと再生され始めたデジタルワールドで生まれ変わって、きつと俺たちも目の前にまた姿を見せてくれるさ。」

『……………そうだな。』

「それじゃ、俺たちも分離してみんなの所へ帰るか。」

一夏がそう言うすとサノオモンは光を発し、分解され始める。同時に分解された粒子は二つに分かれ、一つはヴリトラモンの姿をした一夏に、もう一つは箒の姿へと戻って行った。

「……………ふう……………えっ?」

「ん?どうした箒……………ゲツ!」

箒の方を振り向こうとした一夏は思わず両目を手で隠す。

確かに箒は元の姿に戻っていた。

だが、そこらが問題だった。

「な．．．．．何で私が裸なんだああ!?!」

箒は両手で秘所を隠しながら近くの茂みに身を隠す。

そう、何故か裸になっていたのだ。

「私は合体するときI Sスーツを着ていたんだぞ!?!なのにどうして裸の状態なんだああ!?!
!?!スーツも一緒に元通りになるんじゃないのか!?!」

「．．．．．お、おそらく元の姿に再構築される際にスーツまで再構成できなかつたんじゃないのか?」

「そんな．．．．．それじゃ、私はどうやって学園まで帰ればいいんだああ．．．．．」
箒は思わず涙目になる。

「……しょうがねえな。」

一夏はマントを脱ぎ、箒に渡す。

「とりあえずこれを体に巻きとけ。」

「でも……」

「心配するな、俺が抱いて行ってやるから。それなら途中で脱げる心配はないだろう？」

「う、うん。」

箒はさつさと体にマントを巻いて一夏に抱いてもらう。

「それじゃ……帰るか。」

「ああ。」

一夏はゆつくりと歩き始める。森を抜けると夕焼けの空が広がっていた。

「……一夏。」

「ん？」

箒は、顔を赤くしながら歩いている一夏を見る。

「その……お前は人間の姿には戻らないのか？」

「はっ、はああ!?!俺まで裸だったらどうするんだよお!?!それこそまずいだろ!!」

箒の質問に一夏は、思わず顔を赤くした。それを見て箒は少し残念そうな顔をする。すぐに一夏の顔を見つめなおす。

「二夏。」

「今度は何だ？」

「愛してる。」

「……ありがとう。」

二人は軽いキスをした後、歩いて学園まで行き千冬や束たちに温かく出迎えられた。

「ただいま。」

エピソード編

それぞれの旅立ち

．．．．．あれから二年間の時が過ぎた。

デジタルワールドの修復は少しずつ進んみ、かつての美しさを取り戻しつつあった。今では一部の地域がまたデジモンが住める環境に戻っており、一年前からデジタルワールドに戻るデジモンが出始めた。

人間界でも、ルーチエモンの手で破壊された都市を人間とデジモンが手を取り合って復興し始めている。

中でも、一番の出来事は束さんのネットを通じての会見だった。

それは、ISの使用制限についてだった。

今回の事件と以前のデュノア社においてのIS搭乗者の死者が多数出たことを理由に束さんはISのプログラムの書き換えを行うことを発表した。

兵器としての役割を切り捨てる。

その名の通り、ISが兵器として使えなくなることの意味していた。同時にプログラムの書き換えで性別の区別なくISを使用できるようになったと説明していた。このプログラムの書き換えは不可能で事実上、ISは本来の使用目的である宇宙開発のみに使われるようになるのだ。

この会見を箒と一緒にテレビを見ていた時、ある意味東さんなのけじめだったと受け止めた。

彼女は、宇宙に夢を見てISを作った。

だが、周りはそれを兵器としてしか見ていなかった。

このままでは、自分の夢をただの武器としてしか使われないと悟った彼女は世界からその姿を消し、同時にISを女性にしか扱えないようにして兵器としての本格的導入を遅らせた。

俺や箒にとっては、大迷惑だったが彼女があのまま政府の指示でISを生産し続けていたらおそらく世界はルーチェモンに攻撃される以前に滅びの道を歩んでいたのかもしれない。

でも、もうその必要は無くなる。

I Sが男性にも扱えるようになることと兵器として使用できなくなることによって
I Sで築かれてきた女尊男卑の社会は終わりを告げたのだ。

これからの世界は、デジモンと人間の共存も含めて考えていかなければならない。
それが新しく作られて行く社会の課題だ。

I S 学園 三年一組

そして、今一夏たちは三年間過ごしてきた I S 学園で卒業式を終え、仲間たちと別れを告げる時が来た。

教室では、一夏と箒、千冬姉、鈴、そして、セシリアたちが残っていた。

「……あつという間なものだな。この三年間という月日は。」

千冬は一夏たちを見ながら言う。

「……そうよね。私も学園に転入してきたときのことかまるで昨日のように感じるし。」
「僕もだよ。二年前の戦いがつい最近みたいを感じるよ。」

鈴とシャルロットはお互いの顔を見ながら言う。今まで笑いあってきた仲だがそれも今日でしばらくお別れになる。

「ところでみんなはこれからどうするんだ？」

一夏は、全員を見て言う。一番先に答えたのは鈴だ。

「そうね・・・私はとりあえず中国に戻ってからね。ISが兵器として扱えなくなったからもう縛られることもなくなつたし。それにお母さんも向こうで心配しているだろうから。」

「そうか。」

「僕は、父さんと母さんと一緒にデジタルワールドに移住しようと思うんだ。新しい足場にするのに丁度いいし。僕もレナモンもデジタルワールドの復興を手伝いたいと思うんだ。」

「私はとりあえず実家でお姉ちゃんの手伝いかな？でも、自分のやりたいことを見つけたらすぐに挑戦しようと思う。」

「私は、実家の家業を継ぐことにしましたわ。お父様とお母様がやってきたことをピヨモンと一緒にやっていきたいと思えますの。」

「私はとりあえず軍に戻る。ISの使用制限で軍上層部も今だに混乱しているしな。これを機に私と同じ存在をこれ以上増やさないように努めていきたいと思うんだ。」

「みんな前向きだな。」

「そう言えば一夏と箒はどうすんのよ？」

「え？俺と箒？」

一夏は箒と顔を見合わせる。

「またとぼけちゃって。二人のこれからはどうするのよ！」

「私も気になる。」

「僕も。」

「そ、そんなことを言われても……なあ、箒。」

「あ、ああ。」

一夏と箒は少し顔を赤くする。

「俺たちは卒業した後、一回デジタルワールドに旅に出ようと思うんだ。」

「えっ!? デジタルワールドに!？」

「本当なら姉さんが中心になる宇宙開発のチームに加わる筈だったんだがどうしても一

夏が旅をしていたデジタルワールドに行ってみたいと思ったんだ。」

「へえ……意外な物ね。私はてっきりこのままゴールインだと思ったのに。」

「ゴールイン？」

「えっ？わからないの？」

箒が驚いた顔で言う。そこへセシリアが教える。

「ゴールインというのは、『結婚』のことですわ。」

「・・・えっ!？」

二人は目を丸くした。

数日後 駅

一夏たちが学園を卒業して数日後。

駅にはデジタルワールドへ向かうためのロコモンが客車を引いてホームに止まっていた。ホームでは旅立つ一夏と箒とそれを見送る鈴たちの姿があった。ちなみに客車には既にシャルロット親子が乗車している。

「しばらく会えないと思うと寂しくなるわね。」

鈴は二人を見ながら寂しそうに言う。その隣ではジャステイモンが何か怒っている様子だった。

「イチカ！てめえ！あと一カ月で俺たちが主役の番組『デジタル戦隊デジレンジャー』が放送されるというのにその前にデジタルワールドに行くってどういうことだ!!」

「落ち着け、ジャステイモン。」

「姐さんも引き止めろよ！今回の番組、姐さんが司令官役で登場するんだぜ!?!見せたいと思わねえのかよ!?!」

「ば、馬鹿！こんなところでデカい声で言うな!!」

千冬は顔を赤くして言う。一夏たちは千冬の意外な一面を見たような気がした。

「ちなみに敵幹部にはメルヴァモンとタイタモン、そして……」

「あつ、そろそろ時間だから俺ら乗るわ。」

「待てええーい!!」

ジャステイモンに言われながらも一夏と箒は列車の中へと入る。客車の窓からも一

千冬はジャスティモンの誘いにうまく乗せられてしまい、彼の番組に出演することに。

東は、この二年間でISの生産方法（もちろんいろいろ細工はしているらしいが）を世界に公開。その後すぐに政府の管理の元、宇宙開発チームを編成。去年は宇宙ステーション、さらに軌道コロニーを作り上げてしまった。

ロイヤルナイツのメンバーは、衰弱しているイグドラシルの護衛のため、体力が回復したらずぐにデジタルワールドに帰って行った。

「いよいよ出発か……」

一夏は線路の向こうを見ようとする。線路の向こうでは既にデジタルゲートが展開されている。

「二度目の旅立ちか。」

一度目は孤独の始まりだった。

でも、今度は一人ではない。

お互いかけがえのない存在となった筈とパートナーであるブイモン、アグモンがいる。

ロコモンがゆつくりと動き出す。

一夏は千冬たちに手を振る。

「……父さん、母さん、リリモン……俺、もうちよつと旅に行つてく
るよ。」

ロコモンはデジタルゲートをくぐり始める。

「行つてきます。」

一夏の新しい旅が始まった。

お帰り！サプライズ結婚式！！

？年後 とある式場

「・・・・・・・・・・・・・・・・こね。」

紅いスーツを身に纏った一人の女性が何やら荷物を持って、式場に入って行く。

式場 新婦控室

「お待たせ〜!!」

「鈴、遅いよ。」

式場の控室では一人の新婦の元に多くの友人が祝福するかのようには笑い合っていた。その中で白いウエディングドレスを纏った新婦は少し恥ずかしそうな顔をしている。

「それにしても本当に綺麗ですわ、篠ノ之さん。」

「セシリア……。」

「ちよつと、セシリア。箒はもう、篠ノ之じゃなくて織斑になるんだよ。」

「……そう言えばそうなるね。」

「アハハハハハハ．．．」

箒も含めて全員で笑う。

「そう言えば、鈴の方はどうなんだ？五反田とうまくやっているのか？」

箒に言われると鈴は照れくさそうな顔で答える。

「それがね、家の旦那と言ったら．．．なんて言えばいいか．．．」

「要は仲良くやっているんだろ？五反田と。」

そこへ千冬が入ってくる。

「あつ、千冬さん！」

「織斑先生！」

「しかし、こう見ると懐かしいものだ。デユノアはファッション企業を設立、更識は小説家、ボーデヴィツヒは退役を機に結婚して二人の子持ちの母、オルコツトは家業をしっかりと引き継ぎ、そして、凰．．．いや、五反田夫人はもうすぐ一児の母親か。この８年で変わっていくものなんだな。」

「母親!?!鈴、妊娠しているの!?!」

全員、驚いた顔で鈴を見る。確かよく見ると鈴の腹部は少し出っ張っていた。

「えつと．．．その．．．うん。できちゃったの。」

「驚いたな．．．鈴がもうすぐママになっちゃうんだ。」

「それでいつ生まれますの?!」

「もう、今日は箒の結婚式よ!!私と弾の子供の話はまた今度!!せつかくの主役が目立たなくなるでしょ!」

鈴は恥ずかしそうに答える。

「そう言えば、織斑先生。一夏の方はどうなんです?」

「ああ、今五反田と御手洗とで懐かしい話をしていたよ。さつき言ったのも五反田の口から聞いたことなんだ。」

「もう、あのバカ亭主!!何余計なこと言っているのよ!」

「でも、一夏は『おめでとう』と言っていたぞ?」

「むっ……ま、まあ……しょうがないわね。」

「そう言えばきよ……じゃなくて織斑先生。この間頂いた翻訳版『デジタル戦隊デジレンジャー・ギャラクシーMAX』でのあなたの戦闘シーンを息子が格好いいと言っていましたよ。」

ラウラは、千冬を見ながら言う。千冬は思わず恥ずかしくなった。

「ボ、ボーデヴィツヒ……こういう場所でその話ほしないでくれ。」

「いや、でも私も夫と一緒に子供たちと楽しんで見えますよ。三歳の娘の方もよく玩具で織斑先生が演じる『コマンダー・チップー』が変身する『ジエスバイオレッド』フィ

ギユアと変身セットが欲しいって言っていましたし。」

「は、恥ずかしいからこれ以上番組の話は……」

「はいはい！お話はそこまで!!」

そこへ東がやってきた。

「姉さん。」

「ささ、箒ちゃん。向こうでいっくんが待っているから一緒に行くよ。」

「……うん。」

箒は東と手をつないで会場の方へと向かう。千冬たちも会場に向かい始める。

「……綺麗になったわね、箒。」

その姿を先ほどの女性がひっそりと見ていた。

式場

「・・・・・・ねえ、ライラ姉ちゃん。」

「何?チビちゃん?」

「今日って兄貴と箒姉ちゃんの結婚式なんだよね?」

「そうよ。」

「・・・・・・俺たち、ずっとこの服着なくちやダメなの?」

「あたり前じゃないの。」

「・・・・・・正直言つて脱ぎたい。」

「ダメ。」

「ケチ！ 鈴姉ちゃんの結婚式に呼ばれた時はこんなことまでしなかったんじゃないか！
ぶう！」

ブイモンは式場の席でライラモンに文句を言いながら座っていた。

ブイモンだけではない。

近くに座っているアグモン、テリアモン、ピヨモン、パタモン、ケラモンまでもが服を着させられていた。式場の席には、友人である弾、数馬、箒の両親、マドカ、真耶、かつてのI S学園の同級生たちなど多くの客が座っている。

そして、箒が束と共に入場し、式が始まる。

「汝……織斑一夏。この女を妻とし、生涯変わらぬ愛を誓うか？」
「誓います。」

「汝……篠ノ之箒。この男を夫とし、生涯変わらぬ愛を誓うか？」
「誓います。」

「では、指輪の交換を……」
神父が目の前で二人は指輪を交換する。

「あー、俺たちもやった時あんな感じだったな〜。」

式を見ている中、弾は懐かしいとでも言いたいようだった。

「何言ってるのよ、私たちは去年したばかりじゃない。」

隣で鈴が小声で言う。

「でもよ……本当に奇妙なもんだな。」

「何がよ？」

「いやさ、お前が俺と結婚するなんて中学のガキの頃想像できたか？」

「それは……」

「あの時、お前つて一夏に惚れていたからさ。俺もてつきり、一夏がそのうち気づいてお前とくつつくと思っていたんだ。」

「でも、私は自分の思いを伝えられなかったわ。また会ったとき、既に箒との仲の方が良かったし……」

「それじゃあ俺とは気まぐれでくつついたわけ？」

「馬鹿。一夏を諦めた後、何年かしてこっちに戻ってきて巖さんが亡くなって、必死に店を切り盛りしていたアンタを見て惚れちゃったのよ。」

「本当か？」

「本当。それに昔と比べたらアンタ、男前になったと思うわよ。」

「そう言われるとなんか昔はそうでもないって言われる気がするな……。それにしても……」

「今度は何？」

「お前、ほんとに結構膨らんだよな。高校までまな板だったのが嘘みたいだぜ……。一人の女としてすごく魅力的になったというか」

「な、・・・・・・・・こ、こういう場所で恥ずかしいこと言うんじゃないわよ!!この馬鹿旦那!!」

「アイタツ!式中に足踏むなよ!」

顔を真っ赤にした鈴に足を踏まれて弾は思わず涙目になる。そんな会話をしている間にも一夏と箒は式の終盤へと入る。

「では、誓いのキスの前にお互い、プロポーズをお願いします。」

「はい。」

二人は、お互いプロポーズの言葉を贈る。

「箒と初めて知り合って19年。最初の頃は馬が合わずよく衝突していたけど、高校の頃からお互いを認め合うようになって、楽しいことも嬉しい時も、悲しい時もいつも一緒にいる仲になって、お互いこうして一緒になることを望んだ。これからも様々なことを分かち合って歩んで行こう。箒、俺と結婚してください。」

「・・・・はい。私も一夏と知り合って19年、最初はほんの少しの出来事から好意をもつてそれからその気持ちがどんどん大きくなって、高校の時に再会してから楽しい時、辛い時を共に過ごして、今では、一緒にいられることが一番の幸せです。これからも様々な試練が待ち構えていたとしても支え合って一緒に乗り越えていきましょう。あなたを心から愛しています。」

二人は顔を赤くする。

その光景に千冬と束は思わず泣けてきて涙をハンカチで押さえる。その隣では箒の両親、マドカが温かく見守っていた。

「それでは暫いのキスを．．．．．」

二人はゆっくりと顔を近づける。

そして

誓いのキスを交わ合わせた。

その直後、式場のドアが開いた。

「ん？」

一夏と箒、式場にいる全員が入り口の方を見る。入り口では赤いスーツにがサングラスをかけた女性が何やらバズーカのようなものを構えていた。その光景に一同は啞然とする。

「な、何者ですの!？」

「まさか、こんな大事な式にテロ!？」

「みんな伏せろ!!」

全員が混乱して逃げようとするが女性はニヤリと笑って引き金を引こうとする。
「くそ!」

一夏は箒を抱いて庇おうとする。

パーン！！

「……えっ？」

二人は思わず顔を上げる。

バズーカから放たれたのは砲弾ではなく、大量の紙テープや紙吹雪、色鮮やかなリボンなどが二人の目の前を舞った。そして、キューピットの代わりなのか天使のコスプレをしたピッコロモン二人が『結婚おめでとう！！一夏&箒！！』という旗を持って二人の真上を飛んでいる。

「こ、これは一体……」

「よっしゃー！！サブライズ大成功！！」

そこへスーツ姿のジャスティモンたちが式場に入ってきた。

「あれ、ジャスティモンたちじゃないの？確か撮影で式には参加できないって……」
ライラモンは、驚きを隠せない状態でジャスティモンたちを見る。

「いやな、ちよつとしたサブライズをするためにワザと出席できないって返事をしてい

「なんだ。なあ? 束さんよ。」

「へ!?!」

箒も含めて全員が束の方を見る。

「いや〜〜ね〜〜我が妹の大事な結婚式だから一番の思い出になるように色々隠しイベントを用意しようと思ってる〜〜。」

「あのかな束……。」

千冬は何とも言えない顔で束に言う。

サンングラスをかけた女性はバズーカをジャスティモンたちに渡し、花束を持って一夏と箒の前に歩いていく。

「……………」

一夏と箒は近づいてくる女性をどこかで見たような気がした。女性は二人を姿を見るなり、ニッコリと笑う。

「結婚おめでとう!! イチカ、箒!!」

どこかで聞いた懐かしい声だった。

「お前……………まさか……………」

箒は何か気がついたようだった。女性はサンングラスを外して頭髪を外す。頭髪はツラだった。

「約束通り、アンタたちのことを見届けに来たわよ。」

女性は笑いながら言った。配色は黒から真紅へと変わっていたが懐かしい顔だった。

「リ．．．．．リ．．．．．」

箒は思わず涙目になった。

女性の姿を見て驚いているのは千冬たちも同じだった。

「あ、アイツ．．．．．そ、そんなはずは．．．．．」

「ねっ？一番のサプライズだったでしょ？」

束は自慢げに言う。箒は嬉し泣きをしながら女性を抱きしめた。

「馬鹿．．．．．何でもつと早く来なかつたんだ。会いたかつたんだぞ．．．．．」

「何言ってるのよ、私が出てきたらアンタと一夏のいい関係が台無しになるじゃないの。」

だから今日だけ戻ってきたのよ．．．．．」

女性．．．．．リリモンは泣きながら抱きしめている箒を離し、一夏の方を見る。

「馬鹿野郎、そんなことは思わねえよ。昔からの仲なんだしな。」

「イチカ．．．．．」

「俺もそうだし箒もお前のことをかけがえのない仲間だと思ってる。だから．．．た

まには顔を出せよ。」

一夏はちよつと気まずそうに言う。リリモンについては箒から聞かされていたから

彼なりの配慮していたのかもしれない。箒は涙をふき取るとリリモンの顔を見る。

「箒……………」

「……………ありがとう、リリモン。私たちの結婚式に来てくれて。」

「……………ええ。」

リリモンは少し恥ずかしそうに眼を逸らした。

「よし!場もいい空気になったところだし、このまま披露宴に突入だ!!」

「ちよつとジャステイモン!なんでアンタが仕切つてんのよ!」

「いいじゃねえか!それと俺たちからの細やかな祝いとして、披露宴では来月公開予定の『劇場版 デジタル戦隊デジレンジャー・ギヤラクシーMAX デジタル対戦! デジタル戦隊デジレンジャー対電磁戦隊メ○レンジャー』を会場のメンバーのみに先行公開するぜ!!」

「何!?それは本当か!?!」

「ラウラまで何言つてんの!?!」

会場は再び騒ぎ出す。

「……………ま、まあ、取りあえず式も終えたことだし披露宴に移るか。」

「そ、そうだな。」

一夏と箒は寄り添いながら移動しようとする。

「リリモンも一緒に行こう。」

「えっ?でも私は……」

「せつかくの披露宴なんだ。お前も楽しんで行ってくれ。」

「……それならお言葉に甘えようかしらね。」

リリモンは笑いながら二人について言った。

「イチカ。」

「ん?」

「箒のことちゃんと言せにしないよ。」

「ああ、もちろんさ。」

「それと……箒もたくさんイチカの子供産みなさいよ!!生まれたら見に行くから!!」

「えっ!?!い、いきなりそんなことを言われても……」

「何言ってるの!どうせ今夜S○Xするんだからすぐにできるでしょ!楽しみにしているからね!」

「は、ははは……」

夜 ホテルの一部屋

「・・・久しぶりにリリモンに会えてよかった。」

箒はベッドで一夏に抱きつきながら言う。

「・・・そうだな。俺も久しぶりにあの顔見れたからなんか嬉しかったよ。俺たちの

ことを覚えてくれていたんだなって。」

一夏は箒を抱き寄せる。

「……………アイツも早く見たがつているから早く作らないとな。」

「作る？何を？」

「……………私と一夏……………いえ、あなたの赤ちゃん。」

箒は、顔を赤くしながら一夏を見てキスをする。

「……………そうだな。」

一夏は照明を消す。

「お互い幸せになろうな。」
「ええ。」

この日、一夏と箒は熱い夜を過ごした。

未来へ（最終回）

．．．．．十年後

人類は軌道コロニーを建設後、月面に小規模ながら都市が築かれ、その後移動式コロニーを建造、ついに火星にまで進出をし始めた。

その月面の地球が見渡せるところで一人．．．と一匹は地球を眺めていた。

「．．．．．地球は青かった．．．か。かつて宇宙開発競争でガガーリンが言ったことを俺が言う事になるとはな．．．。」

「兄貴。俺さ、今でも地球が丸いなんてどうも信じられないな。だって月にはルナモンみたいなのがいるって思ったし。」

宇宙服を着たブイモンは一夏に向かつて言う。

結婚してから十年、一夏は仕事の都合で家族と共にこの月面に移住した。本来なら束の率いる探査コロニーのスタッフとして外宇宙を調査しに行くはずだったが箒との話し合いで子供に自分たちの生まれ故郷を見せて育てたいと決めていたので敢えて

月都市の開発チームに移籍することを決めたからだ。

「ハローお久しぶりーいっくん」

聞き覚えのある声が頭上から聞こえて来た。顔を上げると真上から東が降りて来た。

「またデジタルゲートを使つて来たんですか？もう、個人的な理由で乱用しないでくださいよ。」

「いいじゃないか！今日はいっくんと箒ちゃんの結婚十周年なんだし。それにあの日なんだしね。」

「……まあ、言われてみれば……」

一夏は、そう言うのと都市の方へと戻り始める。

「おや？ゲートを使えば一瞬で戻れるのに。」

「自分の足で歩くからいいんですよ。まっ、この月面じゃジャンプすればすぐにも戻れる。」

「ふっふっふん。じゃ、お姉ちゃんと一緒にどっちが先に付けるか競争しようか？」

「何言つてんですか？子供じゃあるまいし。」

「いいじゃないか！東さんはいつまでも子供の心を持っているから夢がどんどん溢れてくるのさ！そう、子供の心の可能性はまさに無限大！ってね！」

そう言う東は大ジャンプをする。

「うわああ~~~~!!調子に乗りすぎちゃった~!いつくん助けて~~~~!」
「・・・全く。」

一夏はヴリトラモンの姿に変わって束を回収する。

月都市 一夏自宅前

「いや〜月都市も進歩したものだね〜。こうも一軒家が持てるようになってきたんだから。」

東は、月都市を見ながら感心する。

「まだまだですよ。まあ、どっかの某ロボットアニメの世界のような光景が出来上がりつつあるのは事実ですけど。」

一夏はそう言いながらも家のドアを開けて、中に入る。

「ただいま。」

一夏の声で家の中が何やら騒がしくなる。

「パパが帰ってきた!!」

「パパだ!」

「早く早く!!」

「ママ!パパが帰ってきたよ!!」

ぞろぞろと六人の子供とそのパートナーである幼年期デジモンたちを連れて走ってきた。後ろでは相手をして疲れているのかアグモンが寝っ転がっていた。

「「「「パパお帰りなさい!!!」」」」

「ああ、ただいま。」

「あつ、東おぼちゃんだ!」

「やつほく!みんな元気にしてたかな?」

子供たちを束に任せ、一夏は家の中に入る。リビングでは箒が丁度赤ん坊に子守唄を歌っていたところだった。

「ただいま。」

「お帰りなさい。」

「東さんが来たよ。」

「姉さんが?」

「ああ、今うちの子供たちの相手をしているよ。リリモンは?」

「さつきゲートでデジタルワールドに戻って行ったけど・・・」

「そうか。」

一夏は箒の隣に座る。すると箒は一夏に寄り添ってきた。

「・・・ねえ、あなた。」

「ん？」

「気がつけばもう十年経ったのね。」

「そうだな……。俺たちが結婚したのが十年前、そして、こっちに移住したのは五年前か。」

一夏は東に遊んでもらっている子供たちを見ながら言う。

「……。箒には苦労かけたな。」

「うんうん。そんなことはないわ。あなたのおかげで子供にも恵まれているし。今が一番幸せに感じるから……。」

箒はそう言う顔と顔を赤くして一夏にキスする。

「それはそうと箒。」

「何？」

「俺、考えたんだけど、近いうち地球に行こうかと思うんだ。」

「地球に？」

「お義父さんがそろそろ孫の顔を見たいと思う頃だと思ってな。それにこっちで生まれた子も一度は地球の土を踏ませたいと思っっているんだ。」

「……。そうね。この子もここで生まれた子もまだ地球に言ったことがないしね。お父さんにも写真しか送れていないから。」

「そうだろ。だから今度の連休で一度地球に戻ろうと思う。どうかな？」
「私は賛成よ。子供たちにもいい機会だし。」

箒は一夏に寄り添う。

「イチカ、箒。ゲートの準備で来たわよ。」

そこへハリリモンが戻ってきた。

「ああ、わかった。すぐに準備する。」

デジタルワールド

「パパ、ママ、早く!!」

一夏の子供たちは二人を引つ張りながら森を歩いて行く。隣では束とリリモンが和んでいるような顔で見ている。

「わかった、わかった。そんなに急がなくても待っていてくれるから。」

「早く早く!!」

子供にせがまれながら一夏たちは歩いて行く。すると森の出口にある湖で人影が確認できた。

「やつほー!一夏、箒久しぶり。」

鈴は手を振りながら声をかけた。

「久しぶりだな、鈴。」

「一夏は子供を肩車しながら言う。」

「それにしてもアンタの家……随分子供が増えたわね。アンタたちが月に行く前は3人目身籠っていたのに……アンタたち一体どのくらい子づくりしてるのよ。毎日やってんじゃないの？」

「そ、それは……でも、お前の家もそうなんじゃないか？」

箒は久しぶりに元の口調で鈴と話した。元の口調のままだったら子供にもうつるという理由で控えていたがこういう級友たちと会う時だけは元の口調で話をするのだ。

「そ、そんなことはないわよ!!それに……」

「家のママってね、パパを怒っている割には毎日二人で部屋で変な声上げているんだよ。」

鈴と同じ髪形をした赤毛の女の子が一夏の子供にうっかり話す。鈴は思わず子供の口を両手で閉じる。

「夜おトイレに行くとかなら……むぐ……」

「聞こえない聞こえない!!聞こえていないわよ!!」

鈴は顔を赤くしながら慌てて答える。

「よっ!一夏!」

そこへ弾が他の子供を連れてやってきた。

「弾、お前のところも随分増えたな。」

「なあに、家は蘭と母さん、女房と子供四人さ！お前の所と比べたら少ないもんさ。」

「それでも十分じゃないか。」

「そう言えばマドカちゃんは？」

「ああ、今日は外せない用事があるからライラモンと一緒に今日は家にいないんだ。」

「へへ、マドカちゃんにもやつと春が来たか。それに比べて家の蘭は……」

「誰が比べてよお!？」

「ほおっ！いい、いつの間につ!？」

弾が話しているところへ蘭が来た。

「お、お前……今日はデートなんじゃ……」

「裏切られたのよ!!アイツったら別の女と……キイイ!!!悔しい!!!」

蘭は悔しそうな顔で跪いて地面を叩く。その光景を見て一夏と弾は何とも言えなくなつた。

「一夏〜!箒〜!鈴〜!」

続いてはシャルロットが手を振りながら二人の子供を連れて来た。後ろにはセシリアが来ていたが大きなお腹をしており、何か歩きづらそうだった。

「シャル!セシリア」

「みんな元気だった？何しろ月に上がる前に会ったのが最後だったからね。」

「デュノアの方も元気そうで何よりだ。ところで旦那さんは？」

「ああ、夫の方は今日急用で来れないんだよ。まあ、休みの日はいつも家族でアウトドアするから今度機会があつたらみんなにも声をかけるよ。」

「皆さんは、子供がたくさんいて羨ましいですわ。それに比べて私は……」

セシリアは周りで遊んでいる子供を見ながら言う。

「でも、セシリアだって最近結婚して今度生まれるんだろ？もうすぐ仲間入りじゃないか。」

「それはそうですけど、私、心配なんです。この子をちゃんと育てることができるとか……」

セシリアは心配そうな顔で自分のお腹を擦る。

「私も同じ経験をしているからその気持ちはよくわかる。でも、心配し過ぎるのはお腹の子にあまり良くない。もう少し堂々としていた方がいいと思うぞ。」

「箒さん。」

「私も弾と仕事続きだけど、テリアモンやズバモン（弾のパートナー）も支えてくれたから今じゃ四人も子供がいるわ。だからきつとセシリアでも大丈夫よ。」

鈴はセシリアの肩を叩きながら言う。

「……そうですわね。私もお腹の子のためにもう少し堂々としていませんと！」

「私も頑張ってみる！」

隣にいるピヨモンも言う。

「おーい、みんなもう来ているのか？」

そこへラウラと簪も子供を連れてやってきた。簪の方の子供は、まだ赤ん坊で簪に抱かれながら気持ちよさそうに眠っていた。

「ラウラも一番目の子供は、この中じや最年長か……」

「ん？何かあったか？」

ラウラは不思議そうに一夏たちを見る。

「いや、なんて言うか……家庭というものとは縁がないと思っていたお前がこうも私たちの中で早く家庭を持つことになるとは思ってもみなかったからな。」

「何を言っている。私とて元軍人であると同時に一人の女だ。戦場という居場所がなくなればただの女になるのは当然だ。」

ラウラはそう言いながら三歳ぐらいの娘を抱きかかえる。

「ところで織斑先生はどうしたんだ？今日はオフだから来ると言っていたが。」

「それにお姉ちゃんも。まあ、多分仕事のことと離婚のことでそれどころじゃなくなっていると思うけど……」

「えっ!? 簪さんのお姉さん、旦那様と離婚しましたの!？」

セシリアは驚いた顔で言う。

「うん、この間本音と会って聞いたの。やっと結婚できたと思つたらこの矢先なんだから……そのうち私の方にも話が来そうで怖いよ。やっと数馬と結婚して、子供も生まれて落ち着いてきたのに。」

「……いろいろと大惨事だな。楯無さんは。」

「虚の方も結婚して子持ちなのに未だにお姉ちゃんから目が離せないから本音に頼んで見張らせているんだって。本当に人に迷惑をかけるのが上手としか言いようがないよ。」

楯無は頭を抱えながら言う。

「遅れてすまない。」

そこへ丁度千冬が来た。後ろにはジャスティモンや真耶の姿もある。真耶の隣では真耶の子供と思われる少女がケラモンの頭の上に乗りながら遊んでいた。

「千冬姉、久しぶり! 元気だったか?」

「まあな、こつちは、今だに独り身だが。」

「千冬おばちゃんだ!!」

「わああ!! 本物の『コマンダー・チツフー』がここに来てるぞ!!」

「サインくださいー！」

子供は一斉に千冬を取り囲んでしまった。千冬は困った顔をしながらもなんとか対処しようとする。

「山田先生お久しぶりです。」

「皆さん……本当に立派になりましたね！もう、学園の時とは比べ物にならないくらい輝いて見えますよ!!」

真耶はかつての教え子たちを見ながら楽しそうに言う。

「でも、山田先生も今じゃ学年主任だし、立派な母親じゃないですか。」

「さらし……あつ、今は御手洗さんですよね！それでもありませんよ！夫にはいつも迷惑かけているし、娘の方もケラちゃんにばかり相手してもらっちゃって……」

「……でも、娘さんは懐いているようですよ?」

「えっ?」

真耶が足元を見ると娘が足にくっついていた。

「どうしたの?」

「今度はママと遊びたい!!」

真耶の質問に娘はハキハキと言う。

「えっ!?!で、でも、ママ……」

「だって、いつもママ休みの日とお風呂でしか遊んでくれないんだもん!! ケラモンだったたまには一緒にいたいって言っているし。」

「……………」

そう言われると何とも言えないのか真耶は少し固まった。

「……………うん、じゃあ、この話終わったら一緒に着いて行ってあげるからちよつとの間、向こうの子たちと一緒に遊んであげて。」

「うん! 行こう、ケラモン!」

「行く行く!!」

真耶の娘は、駆け足で去って行った。

「なんだ、結構慕われているじゃないですか。」

「そうですか?」

「先生も思い込みが激しんですよ。きつと旦那さんはそのことを心配しているんじゃないんですか?」

「そうでしょうか?」

「そうに決まってるわよ。たまには休んだ方がいいですよ、家族のためにも自分のためにも。」

「……………そうですね。少し考えてみます。」

「任せておきなさい!!」

一同はリリモンに着いて行く。

一夏はしっかり箒の手を握り、箒も離れないようにその手を強く握った。

……この物語は俺がデジタルワールドに来て始まった。

そして、デジタルワールドでかけがえのない仲間と相棒に出会い

人間界に帰ってから家族、幼馴染、新たな親友と出会って、大きく進歩した。

そこからさまざまな試練が待っていたが仲間と共に潜り抜けて今の平和な未来を勝ち取った。

でも、物語はまだ終わらない。

俺が踏み出そうと思えばその道はどこまでも続いて行くんだ。

果てしなく未来へ。

だからこれからも歩いて行く。

愛する妻と子供たち。

不器用だけど愛してくれる姉、妹。そして、相棒。

かけがえのない仲間たちと。

『ヴリトラモン・ストラトス』

『完』

あとがき

皆さんどうも。

この作品の作者である赤バンブルでございます。

前回の話をもって「ヴリトラモン・ストラトス」は完結しましたが今回のあとがきを
書き終えて綺麗に終わらせたいので失礼ながらも少しお付き合いください。

本作は、当サイトで連載されている「インフィニット・ストラトス」のクロス作品で
まだ「デジモン」がなかったので自分で思い切って書いてみようというのが本作の始ま
りでした。

初めの頃、考えたタイトルは「デジモン・ストラトス」。

コンセプトは本作と同様デジモンだったのですが当初はシリーズに仕上げることを
前提に考えていました。

理由としては一夏がなるデジモンが当初「ブラックウオーグレイモン」になる予定
だったからです。

「黒き竜騎士が復讐のために生き、人間界へ行く方法を探す。そして、その中で成長して

いく。」

これが初期の構想でした。しかし、書こうとするとシリアスすぎて耐えられなくなり、「ブラックウオーグレイモン案」は没に。

続いてはシリアス度を大幅に下げた「ウオーグレイモン案」を考えたのですがデジモンの特徴的である「進化」。

よくよく考えるとこの案では一夏をボタモンの頃からやり直させなくてはならない。これには困りました。

悩みながらしまい込んでいたデジモンカードをあさっていると懐かしい一枚が。

「ヴリトラモン」

「デジモンフロンティア」で初登場。

当初は、暴走するがゆえに強力というイメージがあり、デザインは私の中でもかなりお気に入りのキャラでした。

「よし！今回の話は、デジモンとIS、スピリットも交えた内容にしよう！」

こんな勢いで本作の連載はスタートしました。

後にヴリトラモンの形態だけでは戦えないと思いつながらも新装備などを加えて何とか戦わせていく。

これは「転生放浪編」「ウイルスバスターズ編」を見ればわかると思います。「IS編」

でもカイゼルグレイモンになるまではISも活躍できるようにと色々試行錯誤をしていました。

さて、今回は回収しきれなかったキャラクターの説明を少しだけ行おうと思います。

・グランドドラクモン

「傲慢の影」で僅かしか登場せず、そのままフェードアウトになってしまったデジモン。実は終盤において彼はスサノオモンの攻撃から何とか逃げて来たルーチエモンに引導を渡すという重要な役目が与えられる予定でした。しかし、スサノオモンが冠山にルーチエモンを完全に止めを刺してしまったため、出番なし。本編にその姿を見せることは無くなりましたが現在でも彼は自分の居城でレディーデビモンと密かに暮らしているようです。

・リリスモン

「受け継がれる伝説編」で更識姉妹に敗北しましたが死亡しておらず、当初はエピローグで姿を隠しながら旅をする彼女の姿が描かれる予定でした。こちらでは始まりの街により、幼年期デジモンたちに触れ、癒されると言うもので破壊された右手はそのまま再生しませんでした。

・ミレイとリナ

終盤においてその後が描かれることはありませんでしたがリナはブイブイと共に自分たちの世界に帰り、ミレイはまたどこかへと姿を消したようです（しかし、時々東には会いに来るそうです）。

・五反田一家

本編でその後については一斉明かせませんでした。一夏と箒がデジタルワールドに旅立った数年後、厳は死去。亡くなった後は蓮がしばらく切り盛りしていましたが後に弾が資格を取って店の店主に。後に帰国した鈴と再会したのを機にお互いの距離を縮め、結婚するに至りました。ちなみに弾のパートナーはズバモンでロイヤルナイツ編の時に迷い込んだデジモンの内の一匹です。

・デジタル戦隊デジレンジャー

ジャステイモンが〇映に交渉して製作した戦隊ヒーロー番組。人間界を征服しようとする悪のデジモン軍団とジャステイモン事ジャステイスレッドを中心とするデジレンジャーの戦いの物語を描く。いわゆるパワーレンジャーシリーズの様で世界枠は繋がっている。一夏と箒が結婚した年にはついに念願のスーパー戦隊シリーズとの共演を果たした。

キャラクター配置

赤Ⅱジャステイモン／ジャステイスレッド

青Ⅱアレスタードラモン（ガムドラモン）／アレスタールブルー

黄Ⅱウオーグレイモン／グレイイエロー

緑Ⅱシャイングレイモン／シャイングリーン

桃Ⅱエンジエウーモン／エンジエルピンク

追加戦士

紫Ⅱコマンダー・チツファー（織斑千冬）／ジエスバイオレット

金Ⅱドクター・タツバーネ（篠ノ之束）／ベルスゴールド

敵

首領 メルヴァモン／クイーン・アマゾン

幹部 タイタモン／デジタル・タイタン

戦闘員 ベジーモン等々

怪人 各話ゲスト

・デユナスモンとエリザ

終盤にその後が分からなくなった二人ですがデジタルワールドで小さな喫茶店を開

いて穏やかに暮らしているそうです。シャルロットがリラックスもかねて時々来店し、親子関係が解消された後も交流を続けています。なお、ノエル・マーク夫妻も度々来店し、昔も思い出話を語って楽しんでいきます。

・デュークモン

当初、エピソードで『ベルゼブモンに呼ばれてかつての自分たちの世界へと帰還。すると何故か時間が巻き戻っており、テイマーズの最終回から十年後ぐらいに戻っていた（これは、スサノオモンの攻撃の影響）。デュークモンはギルモンの姿に戻り、啓人の家へ。そこで会ったのは成長した啓人とその妻になった樹里だった。友の再会に二人は涙を流す。』というのを描く予定でしたが流石にそこまではと思い取りやめました。

・もう一つ最終回

実はリリモンが死ななかつたルートがあります。一夏がデジタルワールドの再建のために箒と別れてそれぞれのパートナーたちも別れを告げて人間界からデジモンの姿が消える。

十年後、一児の母親になった箒は自分の息子に「一夏」と名付けてすぐ傍で眠っている傍ら、それまでも物語を書き終える。そう、これまでの物語は成人した箒によって描かれた記録だった。

まあ、一様こんな感じですよ。

約二年間近くこの作品を連載し、個人的にはまさかここまでやり切れるとは思っていませんでした。

特に「ロイヤルナイツ編」制作時はお気に入りの登録数が一気に激減したことや「受け継がれる伝説編」での低評価の続出でやる気をなくし、このまま放置しようかと考えていたこともありました。

でも、それでも作品の更新を待ち続けてくれる読者の皆さんがいたからこそここまで続けることができました。

「ヴリトラモン・ストラトス」は完結しましたがもしかしたら他の作品でもこの作品の一夏がひよっこりと現れるのかもしれない。

ここまで読んでいただき本当にありがとうございます。